



BL
1411
T8J3
1929
v.28

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizok yo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

國朝
翰
大
錄

新昭和
纂和

國
譯大藏經

四
四
圖
新
大
英
聯
宗
典
冊



PL
1411
T8J3
1929
v. 28

新昭和國譯大藏經 宗典部 第四卷

眞宗聖典 目次

教	行	信	證	一
	顯淨土眞實教文類一	一
	顯淨土眞實行文類二	七
	顯淨土眞實信文類三	五九
	顯淨土眞實證文類四	一三〇
	顯淨土眞佛土文類五	一五一
	顯淨土方便化身土文類六	一七八
	淨土文類聚鈔	二五五
	淨土三經往生文類	二七一
愚	禿	鈔	二七九

目次

入出二門偈頌	三二
淨土和讚	三二七
高僧和讚	三三五
正像末和讚	三五
尊號真像銘文	三六九
一念多念文意	三九五
唯信鈔文意	四一
末燈鈔	四二七
親鸞聖人御消息集	四五七
歎異鈔	四七三
御文	四九三

眞宗聖典

宗典部
第四卷

教
行
信
證

【當書四卷親鸞の撰なり。淨土教の聖語集、特にその眞實教と眞實行と眞實證を顯すものに就ての文集の意に於ての道學の實證學說一般に於て、眞實は觀體に於て方便と對を爲す概念なり。】

【弘誓】 思惟に先ずる如來の本願

【淨邦緣】 觀無量壽經に説かれたる王城の悲劇をいふ

【安養】 彌陀の淨土

【權化仁】 華、提、闍世、調達の存在に彰るる觀念的意味

【群萌】 衆生類

【世尊】 佛陀

【嘉號】 念佛

【信樂】 疑蓋無雜の信心、それが蓮業の證果の因

【如來】 釋迦を指す

【發遣等】 人生に於ける釋迦の教

顯淨土眞實教行證文類序

竊におもんみれば、難思の弘誓は、難度海を度する大船、無礙の光明は、無明の闇を破する慧日なり。然れば、すなはち、淨邦緣熟して、調達闍世をして、逆害を興ぜしむ。淨業機あらはれて、釋迦、韋提をして、安養を選ばしめたまへり。これ乃ち、權化の仁、ひとしく苦惱の群萌を救濟し、世尊の悲、まさしく逆誘闍提を、惠まんとおぼしてなり。かるがゆゑに知んぬ、圓融至徳の嘉號は惡を轉じて、徳をなす正智。難信金剛の信樂は、疑をのぞき、證をえしむる眞理なり。

しかれば、凡小修しやすき眞教、愚鈍ゆきやすき捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくはなし。穢をすて、淨をねがひ、行に迷ひ、信に惑ひ、心くらく、識すくなく、惡おもく、さはり多きもの、ことに如來の發遣をあふぎ、必ず最勝の直道に歸して、専らこの行につかへ、唯この信をあがめよ。噫、弘誓の強緣は、多生にも値ひがたく、眞實の淨信は、億劫にも獲難し。たま／＼、行信を獲ば遠く宿緣をよるこべ。若しまた、このたぎ疑網に覆蔽せられなば、かへりてまた曠劫を運歴せん。誠なるかな、攝取不捨の眞言、超世希有の正法、聞思して運慮することなかれ。

こゝに、愚禿釋の親鸞、慶ばしきかな、西蕃月支の聖典、東夏日域の師釋、遇ひがたくして、いま遇ふことをえたり、聞きがたくして、すでに聞くことをえたり。眞宗の

勅、直道は彼岸なる彌陀の招喚、即ち本願の道。

【攝取不捨】親鸞の註釋によれば、

「眞實信心のひとを佛の心光におさめむかへとりてす

て給はず」語は觀無量壽經に出づ。

【愚禿釋】愚禿は親鸞の自ら選べる

自號、釋は釋迦の略稱にして佛弟子

たることを意味す

【西蕃】印度。

【東夏】支那。

【眞實の教】以下文集の内容、序文

の表題には、教行證を顯す文類とあり

るも、内容よりすれば第三編とし

て信に關するもの更に第五、六編に

佛身佛上に關するものを編集す。而

して第六編は方便といはるる故に

文集の全體は眞實方便、教、行、信

證の思想より體系附けらる。

教行證を敬信して、ことに如來の恩徳の深きことを知んぬ。こゝをもて、聞くところを慶び、獲るところを嘆するなり。

眞實の教を顯す一

眞實の行を顯す二

眞實の信を顯す三

眞實の證を顯す四

眞佛土を顯す五

化身土を顯す六

顯淨土眞實教文類 一

愚禿釋親鸞集

【大無量壽經】大經とも云ふ。親鸞は無量壽經を以て眞實教を顯すものとす。

【往相還相】現實より彼岸の淨土へと淨土より現實の人生へとの宗實的要求の二相にて根本的には本願力廻向の二相なり。【功德】名號を指す。

【出世の大事】釋迦出現の根本的意義、教主としての根本使命。【諸根】眼根乃至

『大無量壽經』 眞實の教

謹んで淨土眞宗を按ずるに、二種の廻向あり。一には往相、二には還相なり。往相の廻向について、眞實の教行信證あり。

それ眞實の教を顯はさば、すなはち『大無量壽經』これなり。

この經の大意は、彌陀、ちかひを超發して、ひろく法藏を開きて、凡小を哀んで、選んで功德の寶を施すことをいたす。釋迦、世に興して、道教を光闡して、群萌をすくひ、めぐむに眞實の利をもてせんとおぼしてなり。

こゝをもて、如來の本願を説くを、經の宗旨とす。すなはち佛の名號をもて、經の體とするなり。

なにももてか、出世の大事なりと、知ることをうるとならば、『大無量壽經』にのたまはく、「今日世尊、諸根悅豫し、姿色清淨にして、光顔巍巍とま

身根の諸感覺機能

【世眼】 世眼乃至天尊等何れも佛陀の徳を讃ふる尊稱

【三界】 欲界色界無色界

【正覺】 妥當なる認識の完成、即ち完全なる智の實現を意味す
【無量壽如来會】 大經の異譯、

しますこと、あきらかなる鏡のきよくして、かけ表裏にとほるがごとし。威容顯曜にして、超絶したまへること無量なり。いまだ曾て瞻視せず、殊妙なることいまの如くましますをば。やゝしかなり。大聖、わが心に念言すらく、今日、世尊、奇特の法に住したまへり。今日、世雄、佛の所任に住したまへり。今日、世眼、導師の行に住したまへり。今日、世英、最勝の道に住したまへり。今日、天尊、如来の徳を行じたまへり。去來現の佛、佛と佛とあひ念じたまへり、今の佛も、諸佛を念じたまふこと無きことをえんや。なんがゆるぎ、威神のひかり、ひかりいまし爾ると。こゝに世尊、阿難に告げてのたまはく、諸天の汝を教へて、來りて佛に問はしむるや、みづから慧見をもて、威顔を問へるやと。阿難、佛にまうさく、諸天の來りてわれを教ふる者あること無し、自ら所見をもて、この義を問ひたてまつるならくのみと。佛ののたまはく、よきかな阿難、問へるところ甚だこゝろよし。深き智慧、眞妙の辯才を發して、衆生を愍念せんとしてこの慧義を問へり。如来、無蓋の大慧をもて、三界を矜哀したまふ。世に出興する所以は、道教を光闡して群萌を拯ひ、めぐむに眞實の利をもてせんとおぼしてなり。無量億劫にも値ひがたく、見たてまつりがたきこと、なほし靈瑞華の、時ありて時にいまし出づるがごとし。いま問へるところは、饒益するところ多し、一切の諸天人民を開化す。阿難、まさに知るべし。如来の正覺は、その智はかり難くして、導御したまふところ多し、慧見無礙にして、よく過絶することなし」と。

『無量壽如来會』にのたまはく、「阿難、佛にまうしてまうさく、世尊、われ如来の光瑞、

【大士】 菩薩の美稱。
【有情】 衆生。

【憬興】 新羅法相宗の學僧。
【普等三昧】 一時に一切諸佛を見る三昧をいひ、その名大經第四十五頌文に出づ。
【衆魔雄健天】 欲界第六の神界に住すと云はるる雄健

希有なるを見たまつるがゆゑに、この念をおこせり。天等に因るにあらず。佛、阿難につげたまはく、よきかなく汝、今こゝろよく問へり。よく微妙の辯才を觀察して、よく如來にかくのごときの義を問ひたてまつれり。なんぢ一切如來應正等覺及び大悲に安住して、群生を利益せんが爲に、優曇華の希有なるが如く、大士世間に出現したまへり。かるがゆゑに、この義をとひたてまつる。またもろくの有情を哀愍し、利樂せんが爲のゆゑに、如來にかくの如きの義をとひたてまつれり」と。

『平等覺經』にのたまはく、「佛、阿難につげたまはく。世間に優曇鉢樹あり、たゞ實ありて、華あることなし。天下に佛まします、いまし華のいづるがごときのみ。世間に佛もませども、甚だ値ふことをうるること難し。今われ佛になりて、天下にいでたり。なんぢ大徳ありて、聰明善心にして、佛意をしるによりて、なんぢ妄りに、佛邊にありて佛につかへざるなり。なんぢいま問へるところ、あまねく聴き、あきらかに聴け」と。

憬興師のいはく、「今日世尊、奇特の法に住したまへりといふは、神通輪によりて現じたまふところの相なり、たゞ常に異なるのみにあらず、また等しきものなきがゆゑに。今日世尊、佛の所住に住したまへりといふは、普等三昧に住して、よく衆魔雄健天を制するがゆゑに。今日世尊、導師の行に住したまへりといふは、五眼を導師の行となづく、衆生を引導すること、過上なきがゆゑに。今日世尊、最勝の道に住したまへりといふは、佛四智に住し

なる悪魔。

【五眼】肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼の五種の認識。

【四智】大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智をいふ。

【第一義天】天神として、佛陀、大涅槃經に出づる

説、佛性は凡夫性に對する覺念にし

て、衆生の理念を意味する語、佛性常住は斯經に於ける主要なる理説なり。

【一乘究竟】唯一なる道、普遍なる道の意。

て、ひとり秀でたまへること、ひとしきこと無きがゆゑに。今日天尊、如來の徳を行じたまへりといふは、すなはち第一義天なり。佛生不空の義をもてのゆゑに。阿難、まさにするべし。如來正覺といふは、すなはち奇特の法なり。慧見無礙とは、最勝の道を述するなり。よく過絶することなしとは、すなはち如來の徳なり」と。

しかればすなはち、これ眞實の教をあらはす明證なり。誠にこれ如來興世の正説、奇特最勝の妙典、一乘究竟の極説、速疾圓融の金言、十方稱讚の誠言、時機純熟の眞教なり。しるべし。

顯淨土眞實教文類

一

顯淨土眞實行文類 二

愚禿釋親鸞集

【行】行は道の完成の要求より生起されたる實踐にして單に行爲を意味する業とは區別され得るが、一般に同様に使用され又行業と熟字されることあり。その場合は道に止揚されたる行爲として理解すべきものと考へらる。

【諸佛稱名の願】大經四十八願中、第十七願。

【眞如一實】眞如は諸法の眞實性若しくは眞理性の意隨つて一實、一如、法性、實相、無爲、涅槃如來、佛性なり。

【功德寶海】名號にして一實眞如の妙理圓滿せるが故に大寶海に譬ふ。

諸佛稱名の願

淨土眞實の行
選擇本願の行

謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり、大信あり。

大行といふは、すなはち無礙光如來の名を稱するなり。この行は、すなはちこれ、もろくの善法を攝し、もろくの徳本を具せり、極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり。

り。かるがゆゑに大行となづく。

然るにこの行は、大悲の願より出でたり。即ちこれ諸佛稱揚の願と名づけ、復諸佛稱名の願と名づく。復諸佛者嗟の願と名づけ、復往相廻向の願と名づくべし。亦選擇稱名の願と名づくべきなり。

諸佛稱名の願

『大經』にのたまはく、「たとひわれ佛をえたらんに、十方世界の無量の諸佛、ことごとく咨嗟して、わが名を稱せずといはゞ、正覺をとらじ」と。

【願成就の文】 編陀の本願を釋迦の言葉として説けるもの。蓋し願成就は願を自身に有てる意味の開顯に他ならず。

【無量壽佛】 阿彌陀佛の譯名。

【不退轉】 道の完成の必然的決定。

【十力無等尊】 如來の尊稱。

【常行】 實踐の持續。

【最勝丈夫】 佛陀を指す。

【伏藏】 かくれたる財寶。

又のたまはく、「われ佛道をならんにいたりて、名聲十方に超えん、究竟して聞ゆるところなくば、誓ふ正覺をとらじ。衆のために寶藏を開きて、廣く功德の寶を施さん。常に大衆のなかにして、説法師子吼せん」と。要を願成就の文抄す

『經』にのたまはく、「十方恆沙の諸佛如來、皆ともに無量壽佛の威神功德不可思議なるを、讚歎したまふ」と。

又のたまはく、「無量壽佛の威神きはまりなし、十方世界、無量無邊、不可思議の諸佛如來、彼を稱歎せざるはなし」と。

又のたまはく、「その佛の本願力、名を聞きて往生せんとおもへば、皆悉くかの國にいたりて、おのづから不退轉にいたる」と。

「無量壽如來會」にのたまはく、「いま如來に對して弘誓をおこせり、當に無上菩提の因を證すべし。もしもろくの上願を満足せずば、十力無等尊をとらじ。心あるひは常行にたえざらんものに施さん、ひろく貧窮をすくひてもろくの苦をまぬがれしめ、世間を利益して安樂ならしめん。至最勝丈夫修行しをはりて、かの貧窮において伏藏とならん、善法を圓滿して等倫なけん、大衆のなかにして師子吼せん」と。

又のたまはく、「阿難、この義利をもての故に無量無數不可思議、無有等々無邊世界の諸佛如來、皆ともに無量壽佛の所有の功德を稱讚したまふ」と。

抄

『佛説諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』にのたまはく、「第四に願すらく、某作佛せしめん時、わが名字をして皆八方上下無央數の佛國にきこえしめん、みな諸佛をしておのゝ比丘僧大衆の中にして、わが功德、國土の善をとかしめん。諸天人、龍飛蠕動の類、わが名字を聞いて、慈心せざるはなけん。歡喜踊躍せんもの、みなわがくに來生せしめ、この願をえていまし作佛せん、この願を得ずばつひに作佛せじ」と。

『無量清淨平等覺經』の卷上にのたまはく、「われ作佛せん時、わが名をして八方上下、無數の佛國にきかしめん。諸佛のゝ弟子衆のなかにして、わが功德國土の善を嘆ぜん。諸天人、蠕動のたぐひ、わが名字を聞いて、みな悉く踊躍せんもの、我が國に來生せしめん。しからずば、われ作佛せじと。われ作佛せん時、他方佛國の人民、前世に惡の爲にわが名字をきき、及び正しく道のために、わが國に來生せんとおもはん、いのち終へて、みな復三惡道にかへらざらしめて、則ちわがくに生ぜんこと、心の所願にあらん。しからずば、われ作佛せじ」と。阿闍世王太子、及び五百の長者の子、無量清淨佛の二十四願を聞いて、皆おほいに歡喜踊躍して、心中にも願じていはく、われらまた作佛せん時、みな無量清淨佛のごとくならしめんと。佛則ちこれをしろしめして、もろもろの比丘僧に告げたまはく、この阿闍世王太子、及び五百の長者の子、のち無央數劫をさりて、みなまことに作佛して、無量清淨佛の如くなるべしと。佛ののたまはく、この阿闍世王太子、五百の長者子、菩薩の道をなしてよりこのかた、無央數劫に、皆各四百億佛

【菩薩の道】 菩薩は覺を志願する衆

生の意、その道は一切衆生を荷負してその解脱を志願する個人道にして個人的解脱を目的とする聲聞道と區別せらる。

【迦葉佛】過去七佛の第六に當る佛陀。

【刹】國若しくは土と譯す。

【無量覺】阿彌陀佛の譯語。

【決】記別のこと佛陀がその弟子の成道に對して與ふる豫言。

【安樂國】阿彌陀佛の淨土を意味する種樂の異譯なるも、視樂は純粹なる彼岸の世界を表す多くの場合、安樂國若しくは淨土の語を用ふ。【無量光明土】親鸞に於て眞佛土、即ち本願の眞實報上を顯す名として用ひらる。

を供養しをはりて、いまた、來りてわれを供養せり。この阿闍世王太子、及び五百人等、みな前世に、迦葉佛の時、わが爲に弟子となれりき。いまみな復會して、こゝに共に相値へるなり。則ちもろ／＼の比丘僧、佛のみことを聞きて、みな心に踊躍して、歡喜せざるものなし。乃

かくのごときの人、佛の名を聞きて、快く安穩にして大利をえん

われらが類この徳をえん、もろ／＼のこの利によきところをえん

無量覺その決をさづけん、われ前世に本願あり

一切の人法を説くを聞かば、みな悉く我が國に來生せん

わが願するところ皆具足せん、もろ／＼の國より來生せん者

皆悉くこの國に來到して、一生に不退轉をえん

速かに疾く超えて、便ち安樂國の世界に到るべし

無量光明土に至りて、無數の佛を供養せん

この供徳あるにあらざる人は、この經の名を聞くことを得ず

唯清淨に戒をたもてる者、乃しかへりてこの正法を聞く

惡と憍慢と蔽と懈怠とのものは、もてこの法を信すること難し

宿世のとき佛を見たてまつる者、このみて世尊の教を聽聞せん

人のいのちまれに得べし、佛世にましませどもはなはだ値ひがたし

【戒】尸羅と音譯さるる語にして道徳的行爲による生活淨化の實踐。

【道意】道(覺)の完成への要求。

【度】解脱のこと

【正業】正定業ともいふ。眞實報土往生即ち證大涅槃を決定せる因たる業の意。

【十住】以下三國の高僧なる論家釋家の行に關する文を類聚す。

【般舟三昧】現在佛悉在前立三昧といふ。

信慧ありていたるべからず、もし聞見せば精進にしてもとめよ

この法を聞きてわすれず、すなはちみて敬ひ得ておほいに慶ば、

すなはちわが善き親厚なり、これをもての故に道意を發せよ

たとひ世界にみてるん火をも、この中を過ぎて法をきくことをえば

會すまさに世尊となりて、まさにもつて一切生老死を度すべし」と。上巳

『悲華經』の「大施品」の二卷にのたまはく、曇無讖三藏の譯、願くば、われ阿釋多羅三藐三菩

提を成じをはらん、無量無邊阿僧祇の餘佛の世界の所有の衆生、わが名を聞かん者、も

ろ／＼の善本を修して、わが界に生ぜんとおもはん、願くばそれ捨命のち、必定し

て生ずることをえしめん。たゞし、五逆と聖人を誹謗せんと、正法を廢壞せんとをのぞか

ん」と。上巳

爾れば、名を稱するに、よく衆生一切の無明を破し、よく衆生一切の志願をみて

たまふ。稱名は則ちこれ最勝眞妙の正業なり、正業は則ちこれ念佛なり、念佛は則

ちこれ南無阿彌陀佛なり、南無阿彌陀佛は即ちこれ正念なり。しるべし。

『十住毘婆沙論』に曰く、ある人のいはく、般舟三昧および大悲を、諸佛の家と名づく。

この二法よりもろ／＼の如來を生ず。このなかに、般舟三昧を父とす、大悲を母とす。ま

たつぎに般舟三昧はこれ父なり、無生法忍はこれ母なり。助菩提のなかに説くがごとし。

【無生法忍】 不生不滅なる理法を諦認して心の不動なること。

【助菩提】 菩提資糧論中の偈頌を指す。斯論は龍樹の作れる偈頌を自在菩薩が解釋せるもの、隨、達摩笈多の譯。

【四功德處】 説法の徳、眞理(諦)を語り法を施し、煩惱を滅し智慧を得る。般若の諸法實相なる皆空の理に達せしむる智慧、方便はその立場より世間的知識に隨順すること。

【初果】 須陀洹果といふ。初めて聖者の地に入れる段階。

【法】 菩薩滅道を指す。

【見諦】 四諦の眞理を觀するを、見(論)道といひ、それによりて思惟に關する煩惱法を斷滅す。須陀洹果は

般舟三昧の父、大悲無生の母、一切のもろくの如來、この二法より生ず」と。家に過咎なしとは家清淨なるがゆゑに。清淨といふは、六波羅蜜、四功德處、方便、般若波羅蜜、善慧、般舟三昧、大悲、諸忍、この諸法清淨にしてとがあることなし。かるがゆゑに家清淨と名づく。この菩薩、この諸法をもて家とするが故に、過咎あることなし。世間道を轉じて出世上道に入る。世間道は、即ち是れ凡夫所行道に名づく。轉とは休息に名づく。凡夫道は、究竟して涅槃に至ること能はず、常に生死に往來す、これを凡夫道と名づく。出世間は、この道に因りて三界を出づることを得るがゆゑに、出世間道と名づく。上は妙なるがゆゑに、名づけて上とす。入は正しく道を行するがゆゑに、名づけて入とす。この心をもて初地に入るを、歡喜地と名づく。問うていはく、初地何が故ぞ名づけて歡喜とするや。答へていはく、初果を得れば究竟して、涅槃に至るがごとし。菩薩、この地を得れば、心常に歡喜おほし、自然に諸佛如來の種を増長することを得。このゆゑにかくのときの人を、賢善者と名づくることを得。初果を得るが如しといふは、人の須陀洹道を得るが如し。善く三惡道の門をとづ、法を見て法に入り法を得て、堅牢の法に住して、顛動すべからず。究竟して涅槃にいたる。見諦所斷の法を斷するがゆゑに、心おほいに歡喜す。たとひ睡眠し懶墮なれども、二十九有に至らず。一毛をもて百分と爲して、一分の毛をもて大海の水を分ち取らんがごとし。二三滴の苦已に滅せんがごとし、大海の水は餘のいまだ滅せざる者の如し。二三滴の如き心おほいに歡喜せん。菩薩もかくのごとし。初地をえ

この見道に於て得らるる境地。【二十九有】有は存在若しくは生存を意味する語。その状態によりて二十九果に分つ。而して初果の聖者の輪廻の最大限を二十八生とす。

【必定】道の完成の決定せること、即ち不退轉の意。

【四十不共法】聖者一般の徳と區別されて佛陀に特有の徳として説かるるもの。

をはるを如來の家に生ずと名づく。一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、至聲聞、辟支等ともに供養し恭敬するところなり。何をもちのゆゑにこの家過ぐるることなし。故に世間道を轉じて、出世間道に入る、たゞ佛を樂敬すれば、四功徳處を得、六波羅蜜の果報をえん。滋味もろ／＼の佛種を斷ぜざるが故に、心おほいに歡喜す。この菩薩の所有の餘の苦は、二三の水滄の如し。百千億劫に阿耨多羅三藐三菩提を得といへども、無始生死の苦に於ては、二三の水滄の如し。滅すべきところの苦は、大海の水の如し。この故に、この地を名づけて歡喜とす。

問うて曰く、初歡喜地の菩薩、この地の中に在りて多歡喜と名づく。もろ／＼の功徳を得ることをなすがゆゑに歡喜を地とす、法を歡喜すべし、何をもちかしかも歡喜するや。答へて曰く、常に諸佛及び諸佛の大法を念ずれば、必定して希有の行なり、この故に歡喜おほしと。かくの如き等の歡喜の因縁の故に、菩薩初地の中にありて、心に歡喜多し。諸佛を念ずといふは、燃燈等の過去の諸佛、阿彌陀等の現在の諸佛、彌勒等の將來の諸佛を念するなり。常にかくのごときの諸佛世尊を念ずれば、現に前にましますが如し。三界第一にして、能く勝れたるひとまします。この故に歡喜多し。諸佛の大法を念ずとは、略して諸佛の四十不共法をとかんと。一には自在の飛行ころにしたがふ、二には自在の變化ほとり無し、三には自在の所聞無聞なり。四には自在に無量種の門をもて、一切衆生の心を知ろしめすと。乃至念必定のもろ／＼の菩薩は、もし菩薩、阿耨多羅三藐三菩提の記を得

【法位】 不退轉の位。

【薩婆若智】 一切智と譯す。

【轉輪聖子】 輪寶を轉じて一切を威服するが故にかく名けらる。世界統一の王として想像されたるもの。

つれば、法位に入り、無生忍を得るなり。千萬億數の魔の軍衆、壞亂すること能はず。大悲心を得て、大人法を成す。乃これを念必定の菩薩となづく。希有の行を念ずといふは、必定の菩薩の第一希有の行を念するなり、心をして歡喜せしむ。一切凡夫の及ぶこと能はざる所なり、一切聲聞辟支佛の行すること能はざるところなり。佛法無閼解脫、及び薩婆若智を開示す。また、十地のもろくの所の行の法を念すれば、名づけて心多歡喜とす。このゆゑに菩薩初地に入ることを得れば、名づけて歡喜とす。問うていはく、凡夫人のいまだ無上道心を發せざるあり。あるひは發心するものあり、いまだ歡喜地をえざらん。この人、諸佛及び諸佛の大法を念じ。必定の菩薩及び希有の行を念じて、また歡喜を得ん。初地をえん菩薩の歡喜と、この人と、何の差別かあるや。答へて曰く、菩薩初地をえば、その心歡喜多し。諸佛無量の徳、われ亦定めてまさに得べし。初地をえん必定の菩薩は、諸佛を念するに、無量の功德あり。われまさに必ずかくのごときの事をうべし。何をもての故に。われすでにこの初地を得、必定の中にいれり。餘はこの心あることなり。この故に初地の菩薩、多く歡喜を生ず。餘はしからず、何をもてのゆゑに、餘は諸佛を念ずといへども、この念をなすこと能はず。われ必ずまさに作佛すべしと。譬へば轉輪聖子の、轉輪王の家に生れて、轉輪王の相を成就して、過去の轉輪王の功德尊貴を念じて、この念をなさん。われ今亦この相あり、亦まさにこの豪富尊貴を得べしと心多に歡喜せん。もし轉輪王の相なければ、かくの如きの喜無からんがごとし。必定の菩薩、もし諸佛および諸佛

【阿惟越致】
轉と譯す。

不退

の大功徳、威儀、尊貴を念ずれば、われこの相あり、必ずまさに作佛すべし。即ち大いに歡喜せん。餘はこの事あること無けん。定心は、ふかく佛法に入りて心動すべからず。又いはく、「信力増上とは、聞見するところありて、必受して疑なければ、増上と名づく、殊勝と名づく。問うていはく、二種の増上あり、一には多、二には勝なり、今の説、なにもものぞ。答へていはく、このなかに二事ともに説く。菩薩初地に入れば、もろくの功徳の味を得るがゆゑに、信力轉増す。この信力をもて、諸佛の功徳無量深妙なるを籌量して、能く信受す、このゆゑにこの心亦多なり、また勝なり。深く大悲を行ぜば、衆生を慈念すること、骨髓に徹入するが故に、名けて深とす。一切衆生のために佛道を求むるがゆゑに名づけて大とす。慈心は、つねに利事をもとめて衆生を安穩にす。慈に三種あり」と。至またいはく、「佛法に無量の門あり。世間の道に難あり易あり、陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し。菩薩の道も亦かくのごとし。あるひは勤行精進のものあり、あるひは信方便の易行をもて、疾く阿惟越致に至る者あり。至もし人疾く不退轉地に至らんとおもはゞ、恭敬の心をもて、執持して名號を稱すべし。もし菩薩、この身において阿惟越致地に至ることを得、阿耨多羅三藐三菩提を成らんとおもはゞ、まさにこの十方諸佛を念すべし。名號を稱すること、『寶月童子所問經』の「阿惟越致品」のなかに説くがごとしと。至西方に善世界の佛を無量明と號す。身光智慧明かにして、照すところ邊際なし。それ名を聞くことある者は、即ち不退轉をうと。至過去無數劫に、佛まします。海

【世自在王佛】法藏菩薩、世自在王佛の所に在りて本願を起發せること大經に説かる。

【無量光明慧】無量壽佛の徳を讃ずる語。

徳と號す。このもろくの現在の佛、皆かれに従ひて願をおこせり。壽命はかりあることなし、光明照してきはまりなし、國土甚だ清淨なり。名を聞きて、定めて佛にならん。乃て問うて曰く、たゞこの十佛の名號を聞きて、執持して心におけば、すなはち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得るや。また、餘佛餘菩薩の名ましくて、阿惟越致に至ることを得とせんや。答へて曰く、阿彌陀等の佛および諸大菩薩名を稱し一心に念すれば、亦不退轉をうるること、かくの如し。阿彌陀等の諸佛もまた恭敬禮拜し、その名號を稱すべし。今まさに具さに無量壽佛を説くべし。世自在王佛の佛あり。この諸佛世尊、現在十方の清淨の世界に、皆名を稱し、阿彌陀佛の本願を憶念することかくの如し。若し人、我を念じ名を稱して、みづから歸すれば、即ち必定に入りて、阿耨多羅三藐三菩提を得。このゆゑに常に憶念すべしと。偈をもて稱讚せん。

無量光 明慧、身は眞金の山の如し、我今身口意をして、合掌し稽首し禮したてまつる。乃 至

人能くこの佛の無量力功德を念ずれば、即ちの時に必定に入る。このゆゑにわれ常に念じたてまつる。乃 至

もし人佛にならんと願じて、心に阿彌陀を念ずれば、時に應じて、ために身を現さん、この故に我かの佛の本願力に歸命す

十方のもろくの菩薩も、來りて供養し法を聴く。このゆゑにわれ稽首したてまつる

【八道】 入聖道、原始佛教に於ける實踐説、正見（正しき認識）を實現する實踐體系。

【淨土論】 無量壽經後婆提願生偈のこと。

【修多羅】 經と譯す。

【眞實功德相】 親鸞は菩提の餘慶と稱す。

【四種の門】 論には願生の行として禮拜、讚歎、作願、觀察、廻向の五念門の實踐を説く。
【論註】 曇鸞の淨土論註。

もし人善根をうゑて、疑へば、すなはち華開けず、信心清淨なれば、華開きて則ち佛を見たてまつる。

十方現在の佛、種々の因縁をもて、かの佛の功德を嘆じたまふ。われ今歸命し禮したてまつる。

かの八道の船に乗じて、能く難度海を度す。みづから度し、またかれを度せん、われ自在人を禮したてまつる。

諸佛無量劫に、その功德を讃揚せんに、なほつくすことあたはじ、清淨人を歸命したてまつる。

われ今亦かくのごとし。無量の徳を稱讚す。この福の因縁をもて、ねがはくば、佛常出抄にわれを念じたまへ」と。

『淨土論』に曰く、「われ修多羅眞實功德相によりて、願偈總持を説きて、佛敎と相應せん。佛の本願力を親するに、まうあうて空しく過ぐる者なし、よくすみやかに功德の大寶海を満足せしむ」と。

又曰く、「菩薩は四種の門に入りて、自利の行成就したまへり、しるべし。菩薩は第五門に出でて、廻向利益他の行成就したまへり、しるべし。菩薩はかくの如く五門の行を修して、自利利他して、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得るがゆゑに」と。出抄
『論註』に曰く、「謹んで、龍樹菩薩の十住毗婆沙を案するに、いはく、菩薩阿毗跋致を求

【五濁】世界の惡劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁。

【外教】佛教に對する外教の思想。

【梵行】清淨なる行。

【自力】主觀的な自己能力への信賴。

【大乘】理論的には小乘の超越的實在論的思想に對する空觀の思想、實踐的には個人的解脫に對する全人的解脫即ち菩薩道なり。

【正定】道の理想實現、即ち覺の完成に對する必然的確定を意味し、邪定不定に對せらるる語。

【婆藪散頭】世親のこと。

むるに、二種の道あり。一には難行道、二には易行道なり。難行道といふは、謂く五濁の世、無佛の時に於て、阿毘跋致を求むるを難とす。この難に、いまし多途あり。ほど、二三を言ひて、もて義のこゝろをしめさん。一には外道の相善は、菩薩の法をみだる。二には聲聞は、自力にして、大慈悲を障ふ。三には無顧の惡人、他の勝徳を破す。四には顛倒の善果、能く梵行を壞す。五には唯これ自力にして、他力のたもつ無し。これらのごとき的事、目に觸るゝに、みな是なり。譬へば陸路の歩行は、則ち苦しきが如し、易行道といふは、いはく、たゞ信佛の因縁をもて、淨土に生ぜんと願ず。佛願力に乗じてすなはち、かの清淨の土に、往生することを得しむ。佛力加持して、即ち大乘正定の聚にいる。正定は即ちこれ阿毘跋致なり。譬へば水路に船に乗じて則ち樂しきが如し。この無量壽經優婆提舍は、蓋し上行の極致、不退の風航なるものなり。無量壽は、これ安樂淨土の如來の別號なり。釋迦牟尼佛、王舍城及び舍衛國にましくて、大衆の中にして、無量壽佛の莊嚴功徳を説きたまふ。即ち佛の名號をもて經の體とす。後の聖者、婆藪散頭菩薩、如來大悲の教を服膺して、經にそへて願生の偈をつくれりと。

又云く、「また所願輕からず、若し如來威神を加へたまはずば、將に何をもてか達せん。神力を乞加す、このゆゑに仰いで告げたまへり。我一心といふは天親菩薩の自督のことばなり。いふこゝろは、無礙光如來を念じて、安樂に生ぜんと願す。心々相續して、他想間雜すること無し。至歸命盡十方無礙光如來は歸命はすなはちこれ禮拜門なり。盡十方無礙

【長行】散文のこ
と、淨土論は願生
の歌(偈)と及びそ
の解釋(長行)とよ
りなる。

【諸法は等】法は
凡て思惟の對象と
なるもの、諸法が
因縁によりて成立
せることより、そ
の實在性が否定せ
らる。隨つて實在
的存在の生も否定
さる。

光如來は、即ちこれ讚嘆門なり。何をもてか知らん、歸命はこれ禮拜なりとは。龍樹菩薩、阿彌陀如來の讚をつくれるなかに、或は稽首禮と言ひ、或は我歸命と言ひ、或は歸命禮と言へり。この論の長行の中に、亦五念門を修すと言へり。五念門の中に、禮拜はこれなり。天親菩薩すでに往生を願す、豈禮せざるべけんや。故に知んぬ、歸命は即ちこれ禮拜なりと。しかるに禮拜は、たゞこれ恭敬にしてかならずしも歸命ならず。歸命はこれ禮拜なり。若しこれを以て推するに、歸命は重しとす。偈は己心をのぶ、よろしく歸命といふべし。論に偈義を解するに、ひろく禮拜を談す、彼此あひ成す。義に於て、いよく顯れたり。何をもてか知らん、盡十方無礙光如來は、これ讚嘆門なりとは。下の長行のなかにいはく、云何が讚嘆する。いはく、かの如來のみなを稱す、かの如來の光明智相の如く、かの名義の如く、實の如く、修行し相應せんとおもふがゆゑにと。至天親いま盡十方無礙光如來とのたまへり。即ちこれ、かの如來のみなに依りて、かの如來の光明智相の如く、讚嘆するがゆゑに、知んぬ、この句はこれ讚嘆門なりと。願生安樂國といふは、この一句はこれ作願門なり、天親菩薩歸命のこゝろなり。至問うて曰く、大乘經論のなかに、處處に衆生畢竟無生にして、虚空の如しと説けり、いかんぞ、天親菩薩願生とのたまふや。答へて曰く、衆生無生にして、虚空のごとしと説くに二種あり。一には、凡夫の實の衆生とおもふところの如く、凡夫の所見の實の生死の如し。この所見の事、畢竟して所有なし。龜毛の如し、虚空の如しと。二には、いはく諸法は因縁生のゆゑに、即ちこれ不生

【四阿含】増一阿含、長阿含中、阿含雜阿含にして、原始佛教の經典、三藏は佛陀の名による經典及び僧團の規則と佛弟子の著作なる論書との全稱にして佛教の全集を意味す。

【法性】法の如實性眞如性のこと。

にして、あるところなきこと、虚空のごとしと。天親菩薩願生するところは、これ因縁の義なり。因縁の義なるがゆゑに、假に生と名づく。凡夫の實の衆生、實の生死ありともふがごときにはあらざるなり。問うていはく、何の義に依りて、往生と説くぞや。答へていはく、このあひだの假名人のなかに於いて五念門を修せしむ。前念は後念の因となる。穢土の假名人、淨土の假名人、決定して一を得ず、決定して異を得ず。前心後心またかくのごとし。何をもての故に。もし一ならば、則ち因果なけん、もし異ならば、則ち相續にあらす。この義一異を觀する門なり。論の中に委曲なり。第一行の三念門を釋し竟んぬ。至乃我依修多羅、眞實功德相、說願僞總持、與佛教相應とのたまへりと。至何れの所にか依る、何のゆゑにか依る、云何が依ると。何れの所にか依るとは、修多羅に依るなり。何の故にかよるとは、如來、即ち眞實功德の相なるをもての故に。云何が依るとは、五念門を修して、相應せるが故にと。至修多羅は、十二部經の中の直説の者を修多羅と名づく。いはく、四阿含三藏等の外の大乗の諸經をまた修多羅と名く。このなかに、依修多羅といふは、これ三藏の外の大乗修多羅なり、阿含等の經にはあらざるなり。眞實功德相といふは、二種の功德あり。一には有漏の心より生じて、法性に順ぜず。いはゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、若は因、若は果、皆これ顛倒す、皆これ虚偽なり。この故に不實の功德と名づく。二には菩薩の智慧、清淨の業より起りて佛事を莊嚴す。法性に依りて、清淨の相に入れり。この法顛倒せず、虚偽ならず、眞實の功德と名づく。云何が顛倒せざる。

【二諦】俗諦と眞諦。施設的世界眞理とそれ自身眞なる超世間的眞理

【安樂集】第三祖道綽の著。

【念佛三昧】佛陀を觀想し憶念することによる意識統一。

【第一義空】諸法の眞如性如實相はものの超越的實在の絶對的否定に於て顯るるが故に第一義空といふ。
【伊蘭林】灌木様草本。其果に有毒性物質を含有する故に惡果あるものとして梅檀に對比せらる。
【山旬】距離の單位を表す語。
【梅檀】芳香を以て知らる。

法性に依り、二諦に順するが故に、云何が虚偽ならざる。衆生を攝して、畢竟淨に入るが故なり。説願偈總持、與佛教相應といふは、持は不散不失に名づく、總は少をもて多を攝するに名づく。至願は欲樂往生に名づく。至與佛教相應といふは譬へば函蓋相稱するが如し。至云何が廻向する。一切苦惱の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首として、大悲心を成就することを待たまへるがゆゑにとのたまへり。廻向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。往相といふは、おのれが功德をもて、一切衆生に廻施して、作願して、共に阿彌陀如來の安樂淨土に往生せしめたまへるなり」と。

『安樂集』に云く、二觀佛三昧經に云く、父の王を勸めて念佛三昧を行ぜしめたまふ。父の王、佛に白さく、佛地の果徳眞如實相第一義空、なに、よりてか弟子をして、これを行ぜしめざると。佛、父の王に告げたまはく、諸佛の果徳無量深妙の境界、神通、解脱まします。これ凡夫所行の境界にあらざるが故に、父の王を勸めて念佛三昧を行ぜしめたまはつると。父の王、佛に白さく、念佛の功、そのかたち如何ぞと。佛、父の王に告げたまはく、伊蘭林の方四十山旬ならんに、一科の牛頭梅檀あり。根芽ありと雖も、なほいまだ土をいでざるに、その伊蘭林唯くさくして香ばしきことなし。もし、その華葉を厭ふことあらば、狂を發して、しかも死せん。後の時に梅檀の根芽、漸々に生長して、纔かに樹にならんとす。香氣昌盛にして、遂に能くこの林を改變して、普くみな香美ならしむ。衆生みるもの、皆希有の心を生ぜんが如し。佛、父の王に告げたまはく、一切衆生、生死の

【三毒】貪欲、瞋
 恚、愚痴。
 【三障】煩惱と業
 と苦。
 【業道】念佛の完
 全すること。

中にありて、念佛の心もまたくかくのごとし。たゞよく念をかけて、やまざれば、定んで佛前に生ず。一たび往生をうれば、即ち能く一切の諸悪を改變して、大慈悲を成ずること、かの香樹の伊蘭林を改むるが如し。いふところの伊蘭林とは、衆生の身の内の、三毒三障無邊の重罪に譬ふ。梅檀といふは、衆生の念佛の心にとふ。纔かに樹と成らんとすといふは、いはく、一切衆生、たゞよく念を積みて斷えざれば、業道成辨するなり。問うていはく、一切衆生の念佛の功を計りて、亦一切を知るべし。何によりてか、一念の功力、能く、一切の諸障を斷すること、一つの香樹の四十由旬の伊蘭林を改めて、悉く、香美ならしむるがごとくならんや。答へてのたまはく、諸部の大乘に依りて、念佛三昧の功能、不可思議なるを顯はさん。いかんとならば、『華嚴經』に云ふが如し。譬へば人ありて、師子の筋を用て、もて琴の絃とせんに、音聲ひとたび奏するに、一切の餘の絃、悉くみな斷壞するが如し。もしひと、菩提心の中に念佛三昧を行すれば、一切の煩惱、一切の諸障、悉く皆斷滅すと。また人ありて牛、羊、驢、馬、一切の諸乳をし搾り取りて、一器の中に置かんに、若し師子の乳、一滴をもて、これを投ぐるに、直ちに過ぎてはゞかりなし。一切の諸乳、悉く皆破壞して、變じて清水となるがごとし。もし人たゞよく菩提心の中に念佛三昧を行すれば、一切の惡魔、諸障たゞちに過ぐるにはゞかりなし。またかの經に云く、譬へば人ありて、騎身樂をもて、處々に遊行するに、一切の餘行人この人をみざるがごとし。若しよく菩提心の中に、念佛三昧を行すれば、一切の惡神、一切の諸障、この人

【摩訶衍】 大乘と
譯す。

【大經の讚】 曇鸞
の讚阿彌陀偈。

を見ず、もろくの處々に隨ひて、能く遮障すること無きなり。なんが故ぞとならば、能くこの念佛三昧を念ずるは、即ちこれ一切三昧の中の王なるが故なり」と。

また云く、「摩訶衍」の中に説きていふが如し。諸餘の三昧は、三昧ならざるにはあらず。何を以ての故に。或は三昧あり、たゞよく貪を除きて瞋癡を除くこと能はず。或は三昧あり、たゞよく瞋を除きて、癡貪を除くこと能はず。或は三昧あり、たゞよく現在のを除きて、過去未來の一切の諸障を除くことあたはず。もしよく常に、念佛三昧を修すれば、現在過去未來の一切の諸障を問ふこと無く皆除くなり」と。

又云く、「大經」の讚に云く、若し阿彌陀の德號を聞きて、歡喜讚仰し、心に歸依すれば、下一念に至るまで大利を得、則ち功德の寶を具足すとす。設ひ大千世界に滿てらん火をも、また直ちに過ぎて、佛のみなを聞くべし。阿彌陀を聞かば、また退せざれ。この故に、心を至して稽首し禮したてまつる」と。

また云く、「また『目連所問經』の如し。佛、目連に告げたまはく、譬へば萬川長流に草木ありて、前は後を顧みず、後は前を顧みず。すべて大海に會するが如し。世間も亦しかなり。豪貴、富樂、自任なることありと雖も、悉く生老病死をまぬがるゝことを得ず。たゞ佛經を信ぜざるによりて、後世にひととなりて、さらにはなはだ困劇して、千佛の國土に生ずることを得ること能はず。この故にわれ説く、無量壽佛國は、往き易く取り易く

【九十五種邪道】
佛陀時代に於ける
外教の思想を理論
的に分類せるもの

【光明寺の和尚等】
第五祖善導の讃歌
集たる往生禮讃。

【觀經】 觀無量壽
經。
【三身】 佛陀論に
於ける法身報身應
身。
【悲智果滿】 大悲
と智慧。

して、人修行して、往生すること能はず。反つて、九十五種の邪道に事ふ。我この人を説きて、眼無き人と名づく、耳なき人と名づく。經教既にしかなり、何ぞ難を捨て易行道に依らざらん」と。

光明寺の和尚のたまはく、「また『文殊般若』にいふがごとし。一行三昧をあかさんとおもふ、たゞすゝめて、獨空閑に處して、もろくの亂意を捨て、心を一佛に保けて、相貌を觀ぜず、専ら名字を稱すれば、すなはち念のなかにおいて、かの阿彌陀佛及び一切の佛等を見ることを得といへり。問うて曰く、何がゆるぞ觀を作さしめずして、たゞちに専ら名字を稱せしむるは、何のこゝろかあるや。こたへていはく、いまし衆生さはり重くして、境細に、心鹿なり。識あがり、神とびて、觀成就し難きによりてなり。こゝをもて、大聖悲憐して、たゞちにすゝめて専ら名字を稱せしむ。まさしく稱名やすきによるがゆゑに相續してすなはち生ずと。問うていはく、既に専ら一佛を稱せしむるに、何がゆるぞ境現することすなはちおほき。これ豈邪正相交はり、一多雜現するにあらずや。答へていはく、佛と佛と齊しく證して、かたち二別無し。たとひ一を念じて多をみることに、何の大道理にか乖かんや。また『觀經』に云ふが如し。すゝめて、行觀、坐觀、禮念等、みな須らくおもてを西方に向ふれば、最勝なり。樹の先より傾けるに、倒るゝに必ず曲れるに隨ふがごとし。かるがゆるに、必ず事のさはりありて、西方に向ふに及ばずば、たゞ西に向ふ想を作すにまた得たり、問うていはく、一切の諸佛、三身おなじく證し、悲智果圓にし

てまた無二なるべし。方にしたがひて禮念し、一佛を課稱せんに、亦生ずることを得べし。何が故ぞ、ひとへに西方を嚙じて、専ら禮念等を勸むる何の義かあるや。こたへていはく、諸佛の所證は、平等にしてこれひとつなれども、もし願行をもて、來たしをさむるに、因縁無きにあらず。しかるに彌陀世尊、もと深重の誓願をおこして、光明名號をもて十方を攝化したまふ。たゞ信心をして、求念せしむれば、かみ一形をつくし、下十聲一聲等に至るまで、佛願力をもて、往生をえやすし。この故に釋迦および諸佛、すゝめて西方に向ふるを別異とすのみ。またこれ餘佛を稱念して、さはりをのぞき、罪を滅ずること能はざるにあらざるなり。知るべし。若し能く上の如く、念々相續して畢命を期とする者は、十即十生、百即百生なり。何をもての故に、外の雜縁なし。正念を得るがゆゑに。佛の本願と相應することを得るが故に。教に違せざるがゆゑに。佛語に隨順するがゆゑなり」と。

またいはく、「たゞ念佛の衆生をみそなはして、攝取してすてざるが故に、阿彌陀と名づく」と。

またいはく、「彌陀の智願海は、深廣にして涯底なし。名を聞きて往生せんとおもへば、みな悉くかの國にいたる。たとひ大千にみてらん火にも、たゞちに過ぎて、佛名をきけ、名をききて歡喜し讚ずれば、皆まさにかしこに生ずることを得べし。萬年に三寶滅せんに、此經任すること百年せん。その時間きて一念せん。皆まさにかしこに生ずることを得べし」

【萬年等】經典に現れたる末世觀の【三寶】佛、教徒の歸依の對象、佛陀と達磨(法)と僧伽

【輪廻】 自己の行為の結果を、同一の自己に求むる思想。倫理的意識に立つ因果律の要請が、その思想的基調なり。

【化佛】 衆生の欲求に應ずる爲めの化現の佛陀。

と。要を抄す

またいはく、「現にこれ生死の凡夫、罪障深重にして六道に輪廻せり。苦み言ふべからず。今善知識に遇ひて、彌陀本願の名號を聞くことを得たり。一心に稱念し、往生を求願す。願くば佛の慈悲、本弘誓願を捨てたまはざれば、弟子を攝受したまはん」と。

またいはく、「問うていはく、阿彌陀佛を稱念し禮觀して、現世にいかなる功德利益があるや。答へていはく、もし阿彌陀佛を稱すること一聲するに、即ち能く八十億劫の生死の重罪を除滅す。禮念じ下もまたかくの如し。『往生經』には、く、もし衆生ありて、阿彌陀佛を念じて、往生を願すれば、かの佛、即ち二十五の菩薩をつかはして、行者を擁護して、もしは行、もしは住、もしは坐、もしは臥、もしは晝、もしは夜、一切の時、一切の處に、惡鬼、惡神をして、そのたよりをえしめざるなり。また『觀經』に云ふがごとし。

若し阿彌陀佛を稱、禮、念じて、かの國に往生せんと願へば、かの佛、即ち無數の化佛、無數の化觀音、勢至菩薩をつかはして、行者を護念したまふ。またさきの二十五の菩薩等と、百重千重、行者を圍遶して、行住坐臥、一切時處、もしは晝、もしは夜を問はず、つねに行者をはなれたまはず。いま既にこの勝益まします、たのむべし。ねがはくばもろもろの行者、おのゝ至心をもちひて往くことを求めよ。また『無量壽經』に云ふがごとし。もしわれ成佛せんに、十方の衆生、わが名號を稱せんに、下十聲にいたるまで、もし生ぜずば、正覺をとらじと。彼佛いま現にましまして、成佛したまへり。まさにしるべし。本

誓重願むなしからず、衆生稱念すれば、かならず往生をう。また『彌陀經』に云ふが如し。もし衆生ありて、阿彌陀佛を説くを聞きて、すなはち、名號を執持すべし。もしは一日、もしは二日、乃至七日、一心に佛を稱して亂れざれ。いのち終らんとするとき、阿彌陀佛、もろくの聖衆と現じて、そのまへにまします。この人終らんとし、心顛倒せずして、すなはち、かの國に往生することを得ん。佛、舍利弗に告げたまはく、われこの利を見るがゆゑに、この言を説く。もし衆生ありて、この説を聞かんものは、まさに願をおこし、彼國に生ぜんと願すべし。つき下に説きていはく、東方の恆河沙等のごとき諸佛、南西北方および上下一の方に、恆河沙等のごとき諸佛のおののく本國にして、その舌相を出して、あまねく三千大千世界に覆うて、誠實の言を説きたまはく、なんぢら衆生、みなこの一切諸佛の護念したまふところの經を信すべし。いかに護念と名づくる。もし衆生ありて、阿彌陀佛を稱念せんこと、若し七日、一日、下至一聲、乃至十聲、一念、等におよぶまで、かならず往生を得と。この事を證據せるが故に、護念經となづく。つき下の文にいはく、もし佛を稱して往生する者は、常に六方恆河沙等の諸佛のために護念せらる。かるがゆゑに、護念經と名づく。いま既にこの増上の誓願います。憑むべし。もろもろの佛子等なんぞこゝろを勵ましてゆかさらんや」と。智昇法師の集『諸經禮懺儀』の下卷は、また云く、「弘願といふは、『大經』の説のごとし。一切善惡の凡夫生ずることを得るは、みな阿彌陀佛の大願業力に乗じて、増上縁とせざるはなきなり」と。

【發願廻向】廻向は願心より生起せる一切の行を願の對象に向て統一し專注すること。

【この義】すべて實踐理想は願行せられて完成される行とならぬ意欲は單なる希待として區別されるべきもの

【また云く攝生等】善導の觀念法門、五種増上緣義の言宗教生活の淨福を説けるもの

【また云く門等】善導の般若講の言觀經によりて作られたる讃歌をおさめたるもの

【無明と苦惱の果と業の因】

【故業】過去の業

【巧方便】自己の立場を轉じて他者の立場に應同すること

また云く、「南無といふは、即ちこれ歸命なり、亦これ發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふは、即ちこれ其行なり。この義をもてのゆゑに、必ず往生をう」と。

また云く、「攝生増上緣と云ふは、『無量壽經』の四十八願の中に説くが如し。佛のたまはく、もしわれ成佛せんに、十方の衆生我が國に生ぜんと願じて、わが名字を稱すること、下十聲にいたるまで、わが願力に乗じて、もし生れずば正覺をとらじと。これすなはちこれ、往生を願する行人、いのちをはらんと欲する時、願力攝して往生を得しむ。かるがゆゑに、攝生増上緣と名づく」と。

また云く、「善惡の凡夫、廻心し起行して、ことごとく往生を得しめんと欲す。これまたこれ、證生増上緣なり」と。

またいはく、「門々不同にして八萬四千なり、無明と果と業因とを滅せんが爲なり、利劍はすなはちこれ彌陀の號なり。一聲稱念するに、罪みな除くこと。微塵の故業智にしたがひて滅す、をしへざるに、眞如の門に轉入す。娑婆長劫の難をまぬがるゝことをうることは、ことに知識釋迦の恩を蒙れり。種々の思量巧方便をもて、選びて彌陀弘誓の門を得しめたまへり」と。

要を抄す

しかれば南無の言は歸命なり、歸の言は至なり、また歸説なり、説の字は普、悦の

り、説の字は、悦の音、悅悦二の音。普なり、述なり、業なり、招引なり、使なり、致なり、こゝをもて、歸命は木願招喚の勅命なり。發願廻向といふは、如來、すでに發願し

た

た

た

た

た

た

た

た

た

た

た

た

た

た

【釋】 龍樹の十住毘婆沙論の易行品

【眞因】 根土に得生し大涅槃を證する眞因、信心を指していふ。

【時尅】 信心をうるときのきわまり

【金剛心】 親鸞に於ては本願廻向の信心を顯す語とさる。

【根】 根は衆生の性能。

【實相】 諸法如實相。

【無生】 諸法の如實相若しくは眞如性は生滅を超えて常住不變なるが故に無生無滅なり。

【法身】 法の眞如性を身とせる佛陀

【九品】 願生の機に應じて往生の行を九種に説けるもの。

て、衆生の行を廻施したまふの心なり。卽是其行といふは、卽ち選擇本願これなり。必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰はすなり。經には卽得といへり、釋には必定といへり。卽の言は、願力を聞くによりて、報土の眞因決定する時尅の極促を光闡せるなり。必の言は、審なり、然なり、分極なり、金剛心成就のかほばせなり。

『淨土五會念佛略法事儀讚』に云く、「それ如來教を設けたまふに、廣略根に隨ふ、終に實相に歸せしめんとなり。眞の無生をえんものには、たれか能くこれを與へんや。然るに念佛三昧は、これ眞無上深妙の門なり。彌陀法王、四十八願の名號をもて、こゝに佛願力を事として、衆生を度したまふ。乃至如來、常に三昧海の中にして、細綿を擧げたまへるをや。父の王にいひてのたまはく、王いま坐禪して、たゞまさに念佛すべしと。豈に離念に同じて無念を求めんや。生を離れて無生を求めんや、相好を離れて法身を求めんや、文を離れて解脱を求めんや。乃至それおほいなるかな、至理の眞法、一如にして、物を化し人を利す、弘誓各別なるがゆるに。わが釋迦濁世に應生し、阿彌陀淨土に出現したまふ。まささに穢淨兩殊なりといへども、利益齊一なり。若し修し易く證し易きは、まことに、たゞ淨土の教門なり。しかるに、かの西方殊妙にして、その國土に比びがたし。また、かざるに百寶の蓮をもてす。九品に開いてもて人を收むること、それ佛の名號なり。乃至

『稱讚淨土經』による。釋の法照

如來の尊號はなはだ分明なり。十方世界に普く流行せしむ

たゞみなを稱するのみありてみな往くことを得、觀音勢至おのづから來り迎へたまふ

彌陀の本願ことに超殊せり、慈悲方便して凡夫を引く

一切衆生みな度脱す、みなを稱すればすなはち罪消除することを得

凡夫もし西方に到ることを得れば、曠劫塵沙の罪消亡す

六神通を具し自在を得、永く老病をのぞき無常を離る

『佛本行經』に依る。照法

何者をかこれを名づけて正法とする。もし道理によらばこれ眞宗なり、

好悪今の時須らく決擇すべし、一々に子細朦朧することなかれ

正法能く世間を超出す。持戒坐禪を正法と名づく

念佛成佛はこれ眞宗なり、佛言を取らざるをば外道と名づく

因果を撥無する見を空とす。正法よく世間を超出す

禪律如何ぞこれ正法ならん。念佛三昧はこれ眞宗なり

性を見、心をさとするはすなはちこれ佛なり、如何んが道理相應せざらん抄略

『阿彌陀經』に依る。

西方は道にすゝむこと娑婆に勝れたり、五欲及び邪魔無きによりてなり

成佛にもろくの善業をいたはしくせず、華臺に端坐して彌陀を念す

【持戒坐禪】倫理的行為(戒)と意識統一(禪)との實踐法。
【因果】因果理法の否認。

【性】心性は本より清淨なるも煩惱の爲めに覆るといふ。

【本師金口】 釋迦の直説。

【七日】 七日間を限り念佛觀佛の行に專注する特殊なる宗教的實踐法。
【因中】 因は道の完成なる果成に對してそれを成立し完成する願行をいふ。

五濁の修行はおほく退轉す、念佛して西方に往くにはしかずかしこに到らば、自然に正覺をなる、苦界に還り來りて津梁とならん萬行の中に急要とす。迅速なること淨土門に過ぎたるは無したゞ本師金口の説のみにあらず、十方諸佛共に傳へ證したまふこの界に一人佛のみなを念ずれば、西方すなはち一つのはちすありて生ずただし一生活常にして不退なれば、ひとつの華この間に還り到りて迎ふ抄略

『般舟三昧經』に依る。慈愍和尙

今日道場の諸衆等、恆沙曠劫より總じて經かへれり

この人身をはかるに値遇しがたし、喩へば優曇華の始めて開くるが若し正しくまれに淨土の教をきくに値へり、まさしく念佛の法門のひらくるに値へり正しく彌陀の弘誓のよびたまふに値へり、正しく大衆の信心の廻するに値へり正しく今日經に依りて贊するに値へり、正しく契を上華臺に結ぶに値へり正しく道場に魔事なきに値へり、正しく無病にして總てよくかへるに値へり正しく七日の功成就するに値へり、四十八願かならず相携ふあまねく道場の同行のひとをすゝむ。ゆめく廻心していざいなん問ふ家郷はいづれの處にかある、極樂の池のうち、七寶のうてななりかの佛因中に弘誓を立てたまへり、なを聞きてわれを念せば、すべて迎へ來らしめん貧

窮ぐと富貴ふきとを簡かんばず、下智げちと高才たうさいとを簡かんばず

多聞たもんと淨戒じやうがいをたもてるとを簡かんばず、破戒はかいと罪根ざいこんのふかきをえらばず

ただ廻心まゐしんしておほく念佛ねんぶつせしむれば、よく瓦礫くわれきをして變へんじてこがねとなさしむ

ことばを現前げんぜんの大衆たいしゆ等に寄よす、同縁どうえんさらんひとはやく相尋あひたうねん

とふいづれのところを相尋あひたうねてかゆかんと、こたへていはく彌陀淨土みだじやうどのうち

とふ何なんによりてかかしこに生しやうずることをえん、こたへていはく念佛ねんぶつおのづから功こうを成なす

とふ今生こんじやうに罪障ざいじやうおほし、いかんぞ淨土じやうどにあへてあひいらんや

こたへていはく名なを稱しょうすれば罪滅つみせつす、喻たとへば明燈みやうとうの闇中あんちゆうに入るがごとし

とふ凡夫ぼんぷ生しやうずることをうや否いなや、如何いかんぞ一念いちなんに闇中あんちゆう明みやうかならんや

こたへていはく疑ぎを除のぞきて多く念佛ねんぶつすれば、彌陀決定みだけつじやうして自ら親近おんじんしたまふと要を抄す

『新無量壽觀經』に依る。照法

十惡じふあく五逆ごぎやくいたれる愚人ぐにん、永劫えいせきに沈淪ちんりんして久ひさしく塵ちんにあり

一念彌陀いちなんみだの號ごうを稱得しょうとくして、かしこに至いたれば還かへりて法性ほつじやうの身みに同どうず」と。

懷興師わいきうしの云いく、「如來にょらいの廣説くわんせつに二あり。初はじめにはひろく如來淨土にょらいじやうどの因果いんぐわ、すなはち所行しよぎやう所成しよじやうを説きたまへるなり。後のちにはひろく衆生しゆじやう往生わうじやうの因果いんぐわ、すなはち所攝しよせつ所益しよやくをあらはした

まへるなり」と。

又云またいく、「悲華經ひけわじやう」の諸菩薩本授記品しよぼさつほんじゆきひんに云いく、その時に寶藏如來ほうざうにょらい、轉輪王てんりんわうをほめて言いく、

【福智】 福德莊嚴と智慧莊嚴、前者は施、戒、忍、勤、禪の五波羅蜜、後者は第六般若波羅蜜の行が世界を淨化するが故に莊嚴といふ。

よきかなく、乃 乃大王、汝西方を見るに百千萬億の佛土を過ぎて世界あり、尊善無垢と名づく。彼界に佛まします、尊音王如來と名づく。至乃 乃今現在に諸の菩薩のために正法を説く。至純一大乘清淨にして、雜はることなし。その中の衆生等一に化生す、亦女人及びその名字無し。かの佛の世界の所有の功德、清淨の莊嚴なり、悉く、大王の所願のごとくして異なけん。至乃 乃今汝が字を改めて無量清淨とす。『無量壽如來會』に云く、廣くかくのごときの大弘誓願をおこして、皆すでに成就したまへり。世間に希有なり。この願を發しをはりて、實の如く安住して、種々の功德具足して、威德廣大清淨の佛土を莊嚴したまへり」と。

またいはく、「福智二嚴成就したまへるが故に、つぶさに、ひとしく衆生に行を施したまへるなり。おのれが所修をもて、衆生を利したまふが故に、功德成ぜしめたまへり」と。またいはく、「久遠の因によりて、佛にまうあひ、法を聞きて慶喜すべきが故に」と。またいはく、「人聖に國妙なり、誰か力を盡さざらん。善をなして生を願せよ、善によりて既に成じたまへり。みづから果を獲ず。かるがゆゑに自然といふ。貴賤を簡はず、皆往生を得しむ。かるがゆゑに著無上下と云ふ」と。

またいはく、「往き易くしてしかも人なし。その國逆違せず。自然の牽くところなり。因を修すれば即ち往く、修すること無ければ生ずること尠し。因を修して來生するに、終に違逆せず、すなはち往き易きなり」と。

また云く、「本願力故といふは、すなはち往くこと誓願の力なり。満足願故といふは、願として缺くること無きがゆゑに。明了願故といふは、これを求むるに、むなしからざるがゆゑに。堅固願故といふは、縁として壞ること能はざるがゆゑに。究竟願故といふは、必ず果し遂ぐるがゆゑに」と。

また云く、「總じてこれを言はゞ、凡小をして欲往生のこゝろを増さしめんとおもふが故に、須らく彼土の勝れたることを顯はすべし」と。

また云く、「即ち此土にして、菩薩の行を修すといへり。すなはち知んぬ無淨王この方にましますことを。寶海も亦然なり」と。

また云く、「佛の威徳、廣大を聞くがゆゑに不退轉を得るなり」と。

『樂邦文類』に云く、「總官の張掄はいはく、佛號甚だち易し、佛淨土甚だ往き易し。八萬四千の法門、この捷徑にしくはなし。たゞ能く、清晨俛仰の暇をやめて、遂に永劫不壞のたすけをなすべし。これ即ち力を用ふることに、甚だ微にして、功を收むること、いまし盡くることあること無けん。衆生また何の苦みあればか、自らすてゝしかもせざらんや。噫、夢幻にして眞にあらす、壽夭にして保ちがたし。呼吸のあひだに、即ちこれ衆生なり。ひとたび人身をうしなひぬれば、萬劫にも復せず。この時悟らずば、佛もし衆生をいかゞしたまはん。願くば、深く無常を念じて、徒らに後悔をのこすことなかれ。淨樂の居士張掄、縁をすゝむ」と。

【無淨王】法藏菩薩出家以前、輪轉王たりし時の名。

台教の祖師山陰法師の云く、「まことに、佛名は眞應の身よりして建立せるがゆゑに。慈悲海よりして建立せるがゆゑに。誓願海よりして建立せるがゆゑに。智慧海よりして建立せるがゆゑに。法門海よりして建立せるがゆゑに。もしたゞ専ら一佛の名號を稱すればすなはち、これつぶさに諸佛の名號を稱するなり。功德無量なれば、よく罪障を滅す、よく淨土に生ず。何ぞかならず疑を生ぜんや」と。

律宗の祖師元照の云く、「いはんや我が佛大慈、淨土を開示して、慇懃に、徧く諸大乘を勸囑したまへり。目に見、耳に聞きて、ことに疑謗を生じて、自ら甘く沈溺して超昇をねがはず。如來說きて憐憫すべき者の爲にしたまへり。まことに、この法のひとり、常途に異なることを知らざるによりてなり。賢愚を簡ばず、縑素を簡ばず、修行の久近を論ぜず、造罪の重輕を問はず、たゞ決定の信心をして、すなはちこれ、往生の因種ならしむ」と。

またいはく、「いま淨土の諸經にならびに魔を言はず。すなはち知んぬ、この法に魔無きこと明かなるを。山陰の慶文法師の『正信法門』に、これを辨ずること、甚だつまびらかなり。今ために、つぶさにかの問を引きていはく、或は人ありていはく、臨終に佛菩薩の光を放ち、臺を持したまへるをみたてまつり、天樂異香來迎往生す、ならびにこれ魔事なりと、この説いかんぞや。答へて曰く、『首楞嚴經』によりて、三昧を修習することあり、或は陰魔を發動す。『摩訶衍論』によりて、三昧を修習することあり、或は外魔を發動す。天魔とい。『止觀論』によりて、三昧を修習することあり、或は時魅を發動す。此等は並に

【陰魔】 五陰魔。
【摩訶衍論】 大乘起信論。
【外魔】 外よりの障蔽。
【時魅】 禪定を行ずる時、その時の何時なるかに應じて現るる幻影の障

【魔種】 魔障の
結果を受くべき業
因。

【聖】 われ聖者な
りとの思ひ。

【經】 觀無量壽經

【果號】 如來の名
號。

これ禪定を修する人、その自力に約して、まづ魔種あり。定めて孽發を被るが故に、この事を現す。もしよく明かに識りて、各對治を用ふれば、すなはちよく除遣せしむ。もし聖の解を作せば、みな魔障をかうぶるなりと、上にこの方の入道を明すすなはち魔事を發すいま所修の念佛三昧に約するに、いまし佛力を憑む。帝王に近けば、敢て犯すもの無きが如し。蓋し阿彌陀佛、大慈悲力、大誓願力、大智慧力、大三昧力、大威神力、大摧邪力、大降魔力、天眼遠見力、天耳遙聞力、他心徹鑿力、光明 徧照攝取衆生力ましますによりてなり。かくの如きらの不可思議功德のちからまします。豈念佛の人を護持して、臨終の時に至るまで、障礙無からしむること能はざらんや。もし護持をなさずば、即ち慈悲力何ぞましますさん。もし魔障を除くこと能はずば、智慧力、三昧力、威神力、摧邪力、降魔力、復何ぞましますさんや。もし鑿察すること能はずして、魔障をなすことをかうぶらば、天眼遠見力、天耳遙聞力、他心徹鑿力、復何ぞましますさんや。『經』にいはく、阿彌陀佛の相好、光明 徧く十方世界を照す、念佛の衆生をば、攝取して捨てたまはずと。もし念佛して、臨終に魔障をかうぶるといはず、光明 徧照攝取衆生力、復何ぞましますさんや、況んや、念佛の人の臨終の感相、衆經より出でたり、皆これ佛の言なり。何ぞ貶して、魔境とすることをえんや。今爲に邪疑を決破す、まさに正信を生ずべし」と。

またいはく、元照律師の「一乘の極唱、終歸ことごとく樂邦を指す。萬行の圓修、最勝ひとり果號にゆづる。まことに因より願をたつ。こゝろざしをとり、行をきはめ、

【塵點劫】 數的無量の譬喻。菩薩はその道の完成のため、無限の生存に無限の處に捨身の行を行ぜりといふ

【悲智】 悲は前五波羅蜜、智は第六波羅蜜。

【内外の兩財】 内則は自身及びその妻子、外財は物的所有。若しくは精神的財と物的財。

【四字】 阿彌陀佛【物】 衆生のこと【佛種】 成佛の種子

【四衆】 佛教徒の全稱、比丘、比丘尼、出家の僧伽と在家の男子及び婦人の信徒なる優婆塞、優婆夷の四衆に分たる。

【大小の戒體】 大小は大乗と小乗、戒體(性)は持戒に依りて得られ然もまた持戒を可能ならしむる能力を意味する法にして小

塵點劫を歷て、濟衆の仁を懷けり。芥子の地も、捨身のところにあらざることなし。悲智の六度、攝化してもてのこすことなし。内外の兩財、求むるに隨ひて必ず應ず。機を縁と熟し、行滿じ功なり、一時に圓かに三身を證す。萬德すべて四字に彰る」と。

またいはく、「況んやわが彌陀は、名をもて物を攝したまふ。こゝをもて、耳に聞き口に誦するに、無邊の聖德、識心に攬入す。永く佛種となりて、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲證す。まことに知んぬ、少善根にあらざる、これ多善根なり」と。

またいはく、「正念の中に、凡そ人の臨終、識神主なし。善惡の業種、發現せざるることなし。或は惡念を起し、或は邪見を起し、或は繫戀を生じ、或は猖狂を發す。惡相一にあらず。みな、顛倒の因と名づく。さきに、佛を誦して罪滅し、障除こり、淨業内に薰じ、慈光外に攝して、苦を脱れ、樂を得ること、一刹那の間なり。下の文に生を勸む、その利これにあり。

慈雲法師の云く、天竺寺 遵式 たゞ安養の淨業、捷眞なり、修すべし。もし四衆ありて、又速かに無明を破し、永く五逆、十惡、重輕等の罪を滅せんと欲はゞ、まさにこの法を修すべし。大小の戒體とほく、また清淨なることを得しむ。念佛三昧を得しめ、菩薩の諸波羅

蜜を成就せんとおもはゞ、まさにこの法を學すべし。臨終にもろくの怖畏を離れしめ、身心安快にして衆聖現前し、授手接引せらるゝことを得、初めて塵勞を離れて、すなはち不退にいたり、長劫をへす。すなはち無生を得んとおもはゞ、まさにこの法等を學すべし。

顯淨土眞實行文類二

乘説にては無表色といひ唯識説にては業種子といふ。

【僧傳】 高僧傳。

【無相の大願】 諸法の實相は一切不可得空の智に顯る。この智に依りて發起されたる願は隨つて無相の願と言はる。

【二報】 淨土の聖樂（正覺）と及びその國土（依報）。

古賢の法語に、よく従ふことなからんや。已上五門、綱要を略標す。自餘は盡さず、委しく釋文にあり。「開元の藏録」を按ずるに、この經に、凡そ兩譯あり。さきの本はすでに亡じぬ、いまの本はすなはち靈良耶舍の譯なり。「僧傳」にいはく、靈良耶舍、こゝには時稱と云ふ。宋の元嘉の初に、京邑にはじめたり。文帝のときなり。

慈雲讚じて云く、也。了義のなかの了義、圓頓のなかの圓頓なりと

大智となへていはく、師也。圓頓一乘なり、純一にして雜なし」と。

律宗の戒慶の云く、元照の「佛名はすなはちこれ、功を積みて薰修し、その萬徳をとる、すべて四字に彰る。この故に、これを稱するに、益を獲ること淺きにあらず」と。

律宗の用欽の云く、元照の「今もしわが心口をもて、一佛の嘉號を稱念すれば、則ち囚

より果にいたるまで、無量の功德、具足せざることなし」と。

また云く、「一切諸佛、微塵劫をへて、實相を了悟して、一切を得ざるが故に。無相の大願をおこして、修するに妙行に住することなし、證するに菩提を得ることなし、住するに

國土を莊嚴するにあらず、現するに神通の神通無きがゆゑに。舌相を大千に徧じて、無説

の説を示す。かるがゆゑに、この經を勸信せしむ、豈心に思ひ、くちにはかるべけんや。

私にいはく、諸佛の不思議の功德、須臾に彌陀の二報莊嚴にをさむ、持名の行法は彼諸

佛の中に、亦須らく彌陀を收むべきなり」と。

三論の祖師嘉祥の云く、「問ふ、念佛三昧何によりてか、能く此の如きの多罪を滅するこ

とを得るやと。解して云く、佛に無量の功德います、佛の無量の功德を念ずるが故に、無量の罪を減ずることをえしむ」と。

法相の祖師、法位の云く、「諸佛は皆徳を名に施す、名を稱するはすなはち徳を稱するなり。徳能く罪を滅し、福を生ず、名も亦かくの如し。若し佛名を信すれば、能く善を生じ、惡を滅すること、決定して疑なし、稱名往生、これ何の惑かあらんや」と。

禪宗の飛錫の云く、「念佛三昧は善の最上なり、萬行の元首なるがゆゑに、三昧王といふ」と。

【往生要集】第六
祖源信の著、廣く一切の經釋を依用して念佛往生の道を叙述せるもの。
【三輩】願生の種類を上下の三種に分つ。
【ひとつの願】第十八願。

『往生要集』に云く、『雙卷經』の三輩の業、淺深ありといへども、しかも通じて皆一向專念無量壽佛といへり。三に四十八願のなかに、念佛門において別してひとつの願をおこしてのたまはく、乃至十念せん、もし生ぜずば正覺をとらじと。四に『觀經』には、極重の惡人他の方便なし、唯彌陀を稱して極樂に生ずることをう」と。

またいはく、『心地觀經』の六種の功德に依るべし。一には無上大功德田。二には無上大恩徳。三には無足二足および多足衆生の中の尊なり。四に極めて値遇し難きこと優曇華の如し。五に獨り三千大千界に出でたまふ。六に世出世間の功德圓滿せり。義具にかくの如きらの六種の功德によりて、常に能く一切衆生を利益したまふ」と。

この六種の功德に依りて、信和尙の云く、「一には念すべし、ひとたび南無佛と稱すれば、みな已に佛道をなる、かるがゆゑに、われ無上功德田を歸命し禮したてまつる。二には念

【醍醐】牛乳を原料とし、それを最も精製して得たるもの、味の最上なるものとさる。

【選擇集】第七淨法然の著、日本浄土教の大成者にして親鸞の師選擇集は其の著にして願生の行の選擇決定にその主旨あり往生之業念佛爲本は即ち集の根本要旨を表せるものなり。

【正雜二行】正行雜行、正定業、助業は願生の行を助類し規定せるもの、正行は純正なるもの、觀行は禪非禪誦讀供養の五行、雜行は此五行を除く一切の諸行にして願生の行として不純なるもの、正定業は往生を心證し決定せる正行にして五正行中の稱なるものとして他の四正業は補助的なるものとす。

すべし、慈眼をもて衆生をみそなはすこと、平等にして一子の如し、かるがゆゑに、われ極大慈悲母を歸命し禮したてまつる。三には念すべし、十方の諸大士、彌陀尊を恭敬したてまつる、かるがゆゑに、われ無上兩足尊を歸命し禮したてまつる。四には念すべし、ひとたび佛名を聞くことを得ること、優曇華よりも過ぎたり、かるがゆゑに、われ極難値遇者を歸命し禮したてまつる。五には念すべし、一百俱胝界には二尊ならび出でたまはず、かるがゆゑに、われ希有大法王を歸命し禮したてまつる。六には念すべし、佛法衆徳海は三世おなじく一體なり、かるがゆゑに、われ圓融萬徳尊を歸命し禮したてまつる」と。

またいはく、「波利質多樹の華、一日衣に薫するに、瞻蔔華、波師迦華いで千歳薫すといへども、及ぶこと能はざるところなり」と。

またいはく、「一斤の石汁、よく千斤のあかどねを變じてこがねとなす。雪山に草あり、名づけて忍辱とす。牛もし食すれば、すなはち醍醐を得。月利沙昂星を見れば、すなはち菓實を出すが如し」と。

『選擇本願念佛集』源空 にはいはく、「南無阿彌陀佛。往生の業には念佛を本とす」と。

またいはく、「それ速かに生死を離れんとおもはゞ、二種の勝法の中に、しばらく聖道門をさしおきて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんとおもはゞ、正雜二行のなかに、しばらくもろくの雜行をなげすて、選んで正行に歸すべし。正行を修せんとおもはゞ、正助二業の中に、猶助業を傍らにして、選んで正定業を専らにすべし。正定の業とい

とす。

【不廻向】 如來廻向の行、自力廻向に非らざる意味にて不廻向といふ。

【選擇大寶海】 本願の名號。【攝取して等】 善導の禮讚に出づる言葉。

【即時入必定】 必定は往生證果の必然的決定を意味す【德號】 名號は生むもの、光明は生ましむるもの、信心は生るるもの。【業識】 衆生輪廻の主體にして新しき生存を生起する内因となる。【光明土】 報土。

ふは、すなはちこれ佛名を稱するなり。みなを稱すれば、必ず生ずることを得、佛の本願に依るがゆゑに」と。

あきらかに知んぬ。これ凡聖自力の行にあらす、かるがゆゑに、不廻向の行と名づくるなり。大小聖人、重輕惡人、皆同じく齊して選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし。こゝをもて、

『論註』に曰く、「彼安樂國土は、阿彌陀如來の正覺淨華の化生するところにあらざることなし。同一に念佛して別道なきがゆゑに」と。

しかれば、眞實の行信を獲れば、心に歡喜多きが故にこれを歡喜地と名づく。これを初果に喩ふことは、初果の聖者、なほ睡眠し懶惰なれども、二十九有に至らず。いかに況んや、十方群生海、この行信に歸命すれば、攝取して捨てたまはず、かるがゆゑに阿彌陀佛となづけられたてまつる、これを他力といふ。こゝをもて、

龍樹大士は『即時入必定』といへり。

曇鸞大師は「入正定之數」といへり。仰いでこれを憑むべし、専らこれを行すべきなり。

まことに知んぬ、德號の慈父ましまさずば能生の因闕けなん、光明の悲母ましまさずば所生の縁乖きなん。能所の因縁和合すべしといへども、信心の業識にあらすば、光明土に到ることなし。眞實信の業識、これすなはち内因とす。光明名の父母、

【宗師】 善導を指す。

これすなはち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の眞身を得證す。かるがゆゑに、宗師「光明名號をもて、十方を攝化したまふ。たゞし信心をして、求念せしむ」とのたまへり。

又「念佛成佛これ眞宗」といへり。

又「眞宗遇ひがたし」といへり。しるべし。

おほよそ、往相廻向の行信に就て、行に則ち一念あり、亦信に一念あり。行の一念と言ふは、いはく、稱名の徧數に就て、選擇易行の至極を顯聞す。

故に「大本」にのたまはく、「佛彌勒に語りたまはく、それかの佛の名號を聞くことを得て、歡喜踊躍して、乃至一念せんことあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。則ちこれ無上の功德を具足するなり」と。

光明寺の和尚は「下至一念」といへり。

また「一聲一念」といへり。

また「専心専念」といへり。

智昇師の「集諸經禮懺儀」の下卷にいはく、「深心は即ちこれ眞實の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して、火宅を出でずと信知す。今彌陀の本弘誓願は、名號を稱すること、下至十聲聞等に及ぶまで、定めて往生をえしむと信

【専心専念】 散善義に出づ。親鸞に於て一心は信心、専念は名號の専念を顯すものと解釋さる。

【大本】 無量壽經のこと、文は流通分に出づ。
【聞く】 聞は親鸞に於て常に信心をあらはすと註解さる。

知して、一念にいたるにおよぶまで、疑心あることなし。かるがゆゑに、深心と名づく。

【經、釋】經は無量壽經、釋は善導の註釋。

【普賢の徳】大悲の行願を象徴せる菩薩。

と。

「經」には乃至と言ひ、「釋」には下至と曰へり。乃下その言、異なりといへども、そのころこれひとつなり。また乃至は一多包容の言なり。大利といふは小利に對せる言なり、無上といふは有上に對せる言なり。まことに知んぬ、大利無上は一乘眞實の利益なり。小利有上は、すなはちこれ八萬四千の假門なり。「釋」に專心と云へるはすなはち一心なり、二心無きことをあらはすなり。專念といへるは、すなはち一行なり、二行なきことをあらはすなり。また彌勒付囑の一念は、すなはちこれ一聲なり、一聲すなはちこれ一念なり、一念すなはちこれ一行なり、一行すなはちこれ正行なり、正行すなはちこれ正業なり、正業すなはちこれ正念なり。正念すなはちこれ念佛なり、すなはちこれ南無阿彌陀佛なり。しかれば、大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風靜かに、衆禍の波轉ず。すなはち無明の闇を破し、速かに、無量光明土に到りて大般涅槃を證す、普賢の徳に違ふなり。しるべし、「安樂集」に云く、「十念相續はこれ聖者の一のかずの名のみ。すなはち能く念を積み、思を凝らして、他事を緣ぜざれば、業道成辨せしめて、すなはちやみぬ。またいたはしく頭數を記せざれ」と。又云く、「もし久行の人の念は、多くこれによるべし。もし始行の人の念は、數を記する亦好し。これ亦聖教によるなり」と。

これすなはち、眞實の行を顯はす明證なり。誠に知んぬ、選擇攝取の本願、超世希有の勝行、圓融眞妙の正法、至極無礙の大行なり。しるべし。

他力と言ふは、如來の本願力なり。

【他力】以上を以て一應行卷の叙述は終る。以下は更に重要問題なる他力と一乘海となるにその意義を明かにするものなり。引用するもの論とは論註下を指して言ふ。

【教化地等】淨土論には願生の行が施して五念の行が證得される五種の行徳が説かる。前四は出入功徳、第五は自徳、又前四は已完成、第五は切衆生の完成の徳、教化地と正しく第五廻向行により證得されたる第五功徳をいふ。

他力と言ふは、如來の本願力なり。『論』に曰く、「本願力と言ふは、大菩薩法身の中に於て、常に三昧にありて、しかも種々の身、種々の神通、種々の説法を現じたまふことを示す、皆本願力より起るをもてなり。譬へば、阿修羅の琴の、鼓する者無しといへども、しかも音曲自然なるが如し。これを、教化地の、第五の功徳相となづく。菩薩は、四種の門に入りて、自利の行成就したまへり。しるべし。成就はいはく、自利満足せるなり。應知といふは、いはく、自利によるが故に、則ち能く利他す。これ自利する能はずして、よく利他するにあらざるなり。しるべし。菩薩は第五門に出で、廻向利益他の行成就したまへり。しるべし。成就はいはく、廻向の因をもて、教化地の果を證す。若しは因若しは果、一事として利他する能はざることあるなし。應知といふは、いはく、利他によるが故に、則ち能く自利す。これ利他に能はずして、よく自利するにはあらざるなり。しるべし、菩薩はかくの如く、五門の行を修して、自利、利他して速かに、阿耨多羅三藐三菩提を成就することをえたまへり。かるがゆゑに、佛の得たまふところの法を名づけて、阿耨多羅三藐三菩提とす。この菩提を得た

【法界】 思惟の對
象界の意にして一
切諸法を總攝して
法界といふ。
【經】 華嚴經、明
難品六。
【生死】 生死の實
相の認識の他に生
死の解脱なし。そ
の實相に於て生死
は即ち涅槃なり。
【入不二】 對立せ
る二法、生死涅槃
の如きに於て其實
相若しくは實性は
智見すれば二法は
對立を離れて相即
す。この眞理を不
二法門といふ。
【論】 淨土論。

まふをもての故に、名づけて佛とす。今速得阿耨多羅三藐三菩提と言へるは、これ早く佛になることを得たまへるなり。阿をば無に名づく、耨多羅をば上に名づく、三藐をば正に名づく、三をば徧に名づく、菩提をば道に名づく。かねてこれを譯して名づけて無上正徧道とす。無上とは、いふこゝろは、この道、理をきはめ性をつくすこと、更に過ぎたるものなし。何をもちかこれを言ふとならば、正をもての故に、正は聖智なり。法相の如くして知るが故に、稱して正智とす。法性は相なき故に、聖智無知なり。徧に二種あり。一には聖心徧く一切の法を知ろしめす、二には法身徧く法界に滿てり。もしは身、もしは心、徧ぜざること無きなり。道は無礙道なり。『經』に言く、十方無礙人、一道より生死を出でたまへりと。一道は一無礙道なり。無礙は、いはく、生死すなはちこれ涅槃なりと知るなり。かくのごとき等の入不二の法門、無礙の相なり。問うていはく、何の因縁ありてか、速得成就阿耨多羅三藐三菩提と言へるや。答へていはく、『論』に、五門の行を修して、もて自利他成就したまへるがゆゑにといへり。まことに、その本を求むれば、阿彌陀如來を増上縁とするなり。他利と利他と談ずるに左右あり。もし佛よりして言はゞ、宜しく利他といふべし、衆生よりして言はゞよろしく他利といふべし。いままさに佛力を談ぜんとなす。このゆゑに、利他をもてこれを言ふ。まさに知るべし、このこゝろなり。おほよそこれかの淨土に生ずると、および彼の菩薩人天の所起の諸行は、皆阿彌陀如來の本願力によるがゆゑに。何をもちか、これを言ふとならば、若し佛力にあらざば、四十八願、すなは

【たとひ十方等】
第十八願文。

【たとひ國の等】
第十一願文。

【回伏】 流轉のこ
と。
【たとひ他力等】
第二十二願文。

【一生補處】 菩薩
の最高位を現す語
現在の一生の後、
正覺を成じ以て佛
陀の處を補ふもの
との意。
【諸地】 地は菩薩
道の過程、十地の
體系を指し、行は
地に於て行ぜらる
る波羅蜜の行をい
ふ。

ちこれ、從らに設けたまふらん。今ひとしく、三願を取りて、もて義のこゝろを證せん。
願じてのたまはく、たとひ我、佛を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して、我が國
に生ぜんと欲うて、乃至十念せん。もし生ぜずば、正覺をとらじと。たゞ五逆と誹謗正法
とをば除くと。佛願力によるが故に、十念念佛して、すなはち往生を得。往生を得るが故
に、即ち三界輪轉の事をまぬがる。輪轉無きがゆゑに、このゆゑにすみやかなることを得
る一の證なり。願じてのたまはく、たとひ我佛を得たらんに、國の中の人天、定聚に住し、
かならず滅度にいたらずば正覺をとらじと。佛願力によるがゆゑに、正定聚に住せん。
正定聚に住するが故に、かならず滅度にいたる。もろくの回伏の難なし。このゆゑに、
すみやかなることを得るふたつの證なり。願じてのたまはく、たとひわれ佛を得たらん
に、他方佛土のもろくの菩薩衆、我が國に來生して、究竟じてかならず一生補處にいた
らしめん。その本願の自在の所化、衆生の爲のゆゑに、弘誓の鎧をきて、徳本を積累し、
一切を度脱して、諸佛の國にあそび、菩薩の行を修して、十方諸佛如來を供養し、恆沙無
量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前
し、普賢の徳を修習せん。若ししからずば、正覺を取らじと。佛の願力によるが故に、常
倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習する常倫に超出し、諸地の行、現前するを
以ての故に、このゆゑに速かなることを得る三の證なり。これをもて、他力を推するに増
上縁とす、しからざることをえんや。まさにまた例を引きて、自力他力の相を示すべし。

【四天下】世界の中心須彌山を廻る東南西北の國土。

【この方】此方は現實の人生、他方は彼岸の淨土。

人三塗を畏るるがゆゑに、禁戒を受持す。禁戒を受持するが故に、能く禪定を修す。禪定を修するをもての故に、神通を修習す。神通をもてのゆゑに、能く四天下に遊ぶが如し。かくの如きらを名づけて自力とす。また劣夫の驢に跨がりて、上らざれども、轉輪王のみゆきに從へば、すなはち虚空に乗じて、四天下に遊ぶに、障礙するところなきが如し。かくの如きらを名づけて他力とす。おろかなるかな、後の學者、他力の乘すべきを聞きて、まさに信心を生ずべし、みづから局分することなかれ」と。

元照律師のいはく、あるひは、この方にして惑を破し、眞を證するは、則ち自力を運ぶが故に、大小の諸經に談ず。或は、他方に往きて、法を聞き道を悟るは、須らく他力を憑むべきがゆゑに、往生淨土を説く、彼此異なりといへども、方便にあらざることなし。自心をさとらしめんとなり」と。

一 乗海と言ふは、一乗は大乗なり、大乘は佛乘なり。一乗を得るは阿耨多羅三藐三菩提を得るなり、阿耨菩提は、即ちこれ涅槃界なり、涅槃界は即ち此究竟法身なり。究竟法身を得るは、即ち一乗を究竟するなり。如來に異なることまします、異の法身まします。如來は即ち法身なり。一乗を究竟するは、すなはちこれ無邊不斷なり。大乘は二乗、三乗あること無し。二乗、三乗は、一乗に入らしめんとなり。一乗はすなはち第一義乘なり、たゞこれ誓願一佛乘なり。

【三】 三乗のこと

【佛性】 眞の衆生性を意味する語。衆生に於ける佛性は諸法に於ける法性と同様に於ける本有なる衆生理念を意味す。

【法王等】 法王、無礙人は何れも如来を指す。

『涅槃經』には、善男子、實諦は名づけて大乘と曰ふ、大乘にあらざるは、實諦と名づけず。善男子、實諦はこれ佛の所説なり、魔の所説にあらず。若しこれ魔説ならば佛説にあらず、實諦と名づけず、善男子、實諦は一道清淨にして、二あることなきなり」と。またのたまはく、「いかに菩薩、一實に信順する、菩薩は一切衆生をして、みな一道に歸せしむと了知するなり。一道は、いはく大乘なり。諸佛菩薩、衆生のためのゆゑに、これをわかちて三となす。このゆゑに菩薩、不逆に信順す」と。

またいはく、「善男子、畢竟に二種あり。一には莊嚴畢竟、二には究竟畢竟なり。一には世間畢竟、二には出世畢竟なり。莊嚴畢竟は六波羅蜜なり、究竟畢竟は一切衆生得るところの一乗なり。一乗は名づけて佛性とす。この義をもての故に、われ一切衆生悉く佛性ありと説くなり。一切衆生悉く一乗あり、無明覆へるをもての故に、見ることを得ることあたはず」と。

またいはく、「云何が一とする。一切衆生悉く一乗なるがゆゑに。いかに非一なる。三乗を説くがゆゑに。いかに非一非々一なる。無数の法なるがゆゑなり」と。『華嚴經』には、「文殊の法は常にしかなり、法王はたゞ一法なり。一切無礙人、一道より生死を出でたまへり。一切諸佛の身、唯これ一法身なり、一心一智慧なり。力無畏も亦しかなり」と。

しかれば、これらの覺悟は、みなもて、安養淨利の大刹、佛願難思の至徳なり。

【雜修雜善】雜の語は不純正不純一の義にして根本的には自力的なること、雜行雜修雜心の解釋に就きては化身土卷に詳し。

【中下】中乗緣覺下乘聲聞の意、上乘の菩薩と簡別さる。

【一切種智】一切法の別相を對象とする智。一切法の總相を對象とする一切智と共に智度論に解説さる。

海と言ふは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雜修雜善の川水を轉じ、逆滂、闡提、恆沙無明の海水を轉じて、本願、大悲、智慧、眞實、恆沙、萬德の大寶海水となる。これを海の如しと喩ふるなり。まことに知んぬ。『經』に説きて、「煩惱の水解けて、功德の水となる」と、のたまへるが如し。

願海は二乘雜善の中下の屍骸を宿さず。いかに況んや、人天の虛假、邪偽の善業、雜毒、雜心の屍骸を宿さんや。かるが故に、

「大本」にのたまはく、「聲聞或は菩薩、能く聖心を究むることなし。譬へば生れてより盲たるもの、行きて人を開導せんとおもはんが如し。如來、智慧海、深廣にして涯底なし。二乘の測るところにあらず、たゞ佛のみ獨り明かにさとりたまへり」と。

「淨土論」に曰く、「何ものか莊嚴不虛作住持功德成就。『偈』に佛の本願力をみそなはずに、遇うて空しく過ぐる者無し、能く速かに功德の大寶海を満足せしむとのたまへるが故に。不虛作住持功德成就は、蓋しこれ、阿彌陀如來の本願力なり。今まさに略して、虚作の相を住持に能はざるを示して、もて彼の不虛作住持の義を顯はす。乃いふところの不虛作住持は、もと法藏菩薩の四十八願と今日阿彌陀如來の自在神力とによる。願もて力を成す、力もて願に就く。願徒然ならず、力虛設ならず。力願あひかなうて、畢竟じてたがはず。かるがゆゑに成就といふ」と。

またいはく、「海」とは、言ふこゝろは佛の一切種智、深廣にして涯なし、二乘雜善の中

【菩薩藏】大乘經典の總稱、小乘經典の全稱なる聲聞藏と對を爲す語

【漸教】證果を得るに長時の段階過程を要すとされる教説

【横豎對】方式に就て現實の止揚的超出と否定的超出

【順逆對】佛順に對して

【親疎對】佛心に對して

【近遠對】佛身に對して

【通別對】一般の實踐に共通なると特別に願生に關せ

ると

下の屍骸を宿さず。これを海の如しと喩ふ。このゆるに天人不動の衆、清淨の智海より生ずと言へり。不動は、言ふこゝろは、彼の天人、大乘根を成就して、傾動すべからざるなり」と。

光明寺のたまはく、「われ菩薩藏、頓教と一乘海とによる」と。

またいはく、「瓔珞經」のなかには漸教を説けり、萬劫に功を修して不退を證す「觀經」

彌陀經、等の説は、即ちこれ頓教なり、菩提藏なり」と。

『樂邦文類』には、宗曉禪師のいはく、「畏丹の一粒は、くるがねを變じてこがねとなす。眞理の一言は、惡業を轉じて善業となす」と。

然るに、教に就て念佛諸善比較對論するに、

(20) 思	(25) 斷	(21) 名	(17) 捷	(13) 重	(9) 親	(5) 順	(1) 難
不	不	號	遲	輕	疎	逆	易
思	斷	定	散	對	對	對	對
對	對	對	對	對	對	對	對
(30) 因	(26) 相	(22) 理	(18) 通	(14) 廣	(10) 近	(6) 大	(2) 頓
行	續	盡	非	別	狹	遠	小
果	不	盡	盡	對	對	對	對
德	續	對	對	對	對	對	對
對	對	對	對	對	對	對	對
(31) 自	(27) 無	(23) 勸	(19) 不	(15) 純	(11) 深	(7) 多	(3) 橫
說	上	無	退	雜	淺	少	豎
他	有	勸	退	對	對	對	對
說	上	對	對	對	對	對	對
對	對	對	對	對	對	對	對
(32) 廻	(28) 上	(24) 無	(20) 直	(16) 逕	(12) 強	(8) 勝	(4) 超
不	ス	間	辨	迂	弱	劣	涉
廻	下	間	因	迂	弱	劣	涉
向	ス	間	明	對	對	對	對
對	對	對	對	對	對	對	對

【直辨因明對】その教説に就て、直に辨明されたる因に説明されたる【名號定散對】定は思想、散は實行【無間問對】行の持續に就て。【因行果德對】念佛は因行成就せる如来の果徳。【自說他説對】釋迦の自説。【護不護對】行者に對して。【證不證對】諸佛の證明。【佛滅不滅對】念佛者は佛不滅を見る。【法滅不滅對】末法時に於て。【報化對】得生する淨土に就て報土と化土。【機】教法を現行せしむる現實的根據、若しくは機縁としての衆生。【信疑對】本願に對して。【奢促對】奢は「お

(33) 護不護對 (34) 證不證對 (35) 讚不讚對 (36) 付屬不付屬對 (37) 了不了對 (38) 機不堪對 (39) 選不選對 (40) 眞假對 (41) 佛滅不滅對 (42) 法滅不滅對 (43) 利不利對 (44) 自力他力對 (45) 有願無願對 (46) 攝不攝對 (47) 入定聚不入對 (48) 報化對

あり。この義かくのごとし。

しかるに本願一乘海を按ずるに、圓融、満足、極速、無礙、絕對不二の教なり。

亦機に就て對論するに、

(1) 信疑對 (2) 善惡對 (3) 正邪對 (4) 是非對 (5) 實虛對 (6) 眞偽對 (7) 淨穢對 (8) 利鈍對 (9) 奢促對 (10) 豪賤對 (11) 明闇對

然るに一乘海の機を按ずるに、金剛信心、絕對不二の機なり。知るべし。

敬うて一切往生人等に白さく、弘誓一乘海は、無礙、無邊、最勝、深妙不可説、不可稱、不可思議の至徳を成就したまへり。

何を以ての故に。誓願不可思議なるが故に。

悲願は、喩へば大虚空のごとし、もろくの妙功德廣無邊なるが故になほし大車のごとし、普く能くもろくの凡聖を運載するが故に

そきこころなるもの「促は」ときこころなるもの【悲願は】この二
 十八喻の讚仰は華嚴經入法界品に菩提心の徳を讚歎せる二百二十一喻の中より鈔出されたるもの。
 【善見藥王】雪山にあると言はるる藥樹、文學的想像の加はれるもの、それを見聞する者あれば眼耳清淨なるを得と
 【閻浮檀金】閻浮樹の下を流るる河の底に在る黄金。【有爲】造作されたるもの、和合されたるもの、意の衆縁によりて成立せる法をいふ。

なほし妙蓮華の如し、一切世間の法に染せられざるがゆゑに
 善見藥王のごとし、能く一切煩惱の病を破するが故に
 なほし利劍の如し、能く一切憍慢の鎧を斷するが故に
 勇將幢の如し、能く一切のもろ／＼の魔軍を伏するが故に
 なほし利鋸の如し、能く一切無明の樹をきるがゆゑに
 なほし利斧の如し、能く一切諸苦の枝を伐るが故に
 善知識の如し、一切生死の縛を解くが故に
 なほし導師の如し、善く凡夫出要の道を知らしむるが故に
 なほし湧泉のごとし、智慧水を出して、窮盡すること無きが故に
 なほし蓮華のごとし、一切のもろ／＼の罪垢に染せられざるが故に
 なほし疾風のごとし、能く一切のもろ／＼の障霧を散するがゆゑに
 なほし好蜜の如し、一切功德の味を圓滿せるがゆゑに
 なほし正道の如し、もろ／＼の群生をして智域に入らしむるがゆゑに
 なほし磁石のごとし、本願の因を吸ふがゆゑに
 閻浮檀金のごとし、一切有爲の善を映奪するがゆゑに
 なほし伏藏のごとし、能く一切のもろ／＼の佛法を攝するがゆゑに
 なほし大地の如し、三世十方一切如來出生するがゆゑに

【諸見】 不妥當なる見解主張。

【三有】 欲、色、無色の三界。

【二十五有】 三有を更に細分せるもの。

【福智藏】 眞實の教法。

【至心信樂】 第十八願。

【選擇本願の等】 眞實の行は本願によりて選擇されたもの、眞實の信は選擇せる願心の發起せるもの。

日輪の光のごとし、一切凡愚の癡闇を破して信樂を出生するがゆゑに
なほし君王のごとし、一切上乘人に勝出せるがゆゑに

なほし嚴父のごとし、一切のもろ／＼の凡聖を訓導するがゆゑに

なほし悲母のごとし、一切凡聖の報土眞實の因を長生するがゆゑに

なほし乳母のごとし、一切善惡の往生人を養育守護したまふがゆゑに

なほし大地のごとし、よく一切の往生をたもつがゆゑに

なほし大水のごとし、能く一切煩惱の垢をすゞがゆゑに

なほし大火のごとし、能く一切諸見の薪を焼くがゆゑに

なほし大風のごとし、普く世間に行ぜしめて礙なきが故に

能く三有繫縛の城を出して、能く二十五有の門を閉づ。能く眞實報土を得しめ、能く

邪正の道路を辨す。愚癡海をつくして、能く願海に流入せしむ。一切智船に乗せしめ

て、もろ／＼の群生海に浮ぶ。福智藏を圓滿し、方便藏を開顯せしむ。まことに奉持

すべし、ことに頂戴すべきなり。

おほよそ誓願に就て、眞實の行信あり、又方便の行信あり。その眞實の行の願は諸佛稱名の願なり。その眞實の信の願は至心信樂の願なり。これすなはち、選擇本願

【難思議往生】その往生、思議を超えたる本願他力による。即ち至心信樂の願因によりて必至滅度の願果を得る。

【報佛報土】報は本願酬報の意、蓋し眞實の佛土は本願の莊嚴功德なり【宗師の】曇鸞の論註上。

【大聖の眞言】釋迦、大經の教説。

【法藏等】大聖の眞言、即ち大經の教説の撮要。

の行信なり。その機は、すなはち一切、善惡、大小、凡愚なり。往生は則ち難思議往生なり、佛土は則ち報佛報土なり。これ乃ち誓願不可思議、一實眞如海なり。『大無量壽經』の宗致、他力眞宗の正意なり。

こゝを以て知恩報德のために、宗師の釋を披きたるに

のたまはく、「それ菩薩は佛に歸す、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜おのれに非ず、出沒かならずゆるあるがごとし。恩を知り、德を報ず、理よろしく先づ啓すべし。また所願輕からず。もし如來威神を加したまはずば、まさに何をもてか達せんとする神力を乞加す、このゆゑにあふいで告ぐ」と、

しかれば大聖の眞言に歸し、大祖の解釋を閲して、佛恩の深遠なるを信知して、「正信念佛偈」を作りていはく、

無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる

法藏菩薩の因位のとき、世自在王佛のみもとに在りて

諸佛淨土の因、國土、人天の善惡を視見して

無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超發せり

五劫に是を思惟して攝受す。重ねて誓ふらくは名聲十方にきこえんと

あまねく、無量、無邊光、無礙、無對光、炎王

清淨、歡喜、智慧光、不斷、難思、無稱光

【必至滅度】 第十
一願。

【一念喜愛】 一念
慶喜の眞實信心。

超日月光をはなちて、塵刹をてらす。一切の群生、光照を蒙る
本願の名號は正定の業なり、至心信樂の願を因とす
等覺をなり、大涅槃を證することは、必至滅度の願成就なり
如來世に興出したまふゆゑは、たゞ彌陀の本願海をとかんとなり
五濁惡時の群生海、如來如實のみことを信すべし
能く一念喜愛の心を發すれば、煩惱を斷ぜずして涅槃をうるなり
凡聖逆謗ひとしく廻入すれば、衆水海にいりて一味なるがごとし
攝取の心光、つねに照護したまふ。すでに能く無明の闇を破すといへども
貪愛瞋憎の雲霧、常に眞實信心の天におほへり
たとへば日光の雲霧に覆はれるども、雲霧の下明かにして闇なきがごとし
信をえて見て敬ひ大きに慶喜すれば、すなはちよこさまに五惡趣を超越す
一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば
佛は廣大勝解のひととのたまへり。このひとを分陀利華と名づく
彌陀佛の本願念佛は、邪見橋慢の惡衆生
信樂受持すること甚だもてかたし。難のなかの難これに過ぎたるはなし
印度西天の論家、中夏日域の高僧
大聖興世の正意を顯はし、如來の本誓機に應ぜることを明す

【楞伽山】以下大祖の解釋の撮要。楞伽山の生命は楞伽經に佛陀の預言として説かると有無實有論的主張と虚無論的主張。

【難行等】難行は念菩薩道。易行は念佛道。

【修多羅】無量壽經をさす。

【一心】淨土論の世尊我一心歸命盡十方無礙光如來と言へるによる。觀鸞は眞實信心を顯はせるものと解釋さる。

【功德大寶海】名號のこと。

【大會衆】淨土は聖衆の集會せる世界といはる。

【蓮華藏世界】彌陀の淨土を指して言ふ。

【煩惱の林に等】神通應化は還相の德。

【仙經】隱者陶弘景より與へられし

釋迦如來楞伽山にして、衆のために苦命したまはく、南天竺に龍樹太士世にいでて、悉く能く有無の見を摧破せん大乗無上の法を宣説し、歡喜地を證して安樂に生ぜんと難行の陸路苦しきことを顯示して、易行の水道樂しきことを信樂せしむ彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に、すなはちの時必定に入るたゞ能く常に如來のみなを稱して、大悲弘誓の恩を報ずべしと云へり天親菩薩論を造りて説かく、無礙光如來に歸命したてまつる修多羅に依りて眞實を顯して、横超の大誓願を光闡す廣く本願力の廻向によりて、群生を度せんが爲に一心を彰す功德大寶海に歸入すれば、かならず大會衆の數に入ることを獲蓮華藏世界に至ることをうれば、即ち眞如法性の身を證せしむと煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の闇に入りて應化を示すといへり本師曇鸞は、梁の天子常に鸞の處に向うて菩薩と禮したてまつる三藏流支淨教を授けしかば、仙經を焚燒して樂邦に歸したまひきて天親菩薩の論を註解して、報土の因果誓願をあらはす往還の廻向は他力による、正定の因はたゞ信心なり惑染の凡夫信心を發せば、生死即ち涅槃なりと證知せしむ

長生不死の法を説ける書といふ。
【樂邦】安樂國。
【報土】往生の因果すべて如來の本願力によつての事。
【聖道】聖者の道即ち現實の人生に於て自ら覺證を完成せんとする一般佛敎、淨土敎に對せ應る語。
【三不三信】三信は信心の三様にして淳、一、相續をいふ。三不信は之の反對。三不信は三種不相應として曇鸞の淨土論註に出づ。
【定散】定善の機と散善の機。定は息慮凝心、散は撥惡修善と言はる。即ち冥想と實行との機。
【三忍】無生法忍（諸法不生不滅の理の諦認）の意識内容の分析によりて立てられたるもの、喜と悟と信との忍。

かならず無量光明土にいたれば、諸有の衆生みな普く化すといへり
 道 綽聖道の證し難きことを決して、唯淨土に通入すべきことを明す
 萬善の自力勤修を貶す、圓滿の德號專稱を勸む
 三不三信のをしへ慇懃にして、像末法滅おなじく悲びす
 一生惡を造れども、弘誓にまうあひぬれば、安養界に至りて妙果を證せしむといへり
 善導獨佛の正意を明かにせり。定散と逆惡とを矜哀して
 光明名號因縁を顯す。本願の大智海に閑入すれば
 行者正しく金剛心をうけしめ。慶喜の一念相應して後
 章提と等しく三忍を獲、すなはち法性の常樂を證せしむと
 源信廣く一代の敎を開きて、偏に安養に歸して一切をすゝむ
 專雜の執心淺深を判じて、報化二土まさしく辨立せり
 極重惡人は唯佛を稱すべし。われまた彼の攝取の中にあれども
 煩惱眼をさへて見たてまつらずといへども、大悲ものうきこと無くして常にわれを
 照したまふといへり
 本師源空は佛敎を明かにして、善惡の凡夫人を憐愍せしむ
 眞宗の敎證を片州に興す、選擇本願を惡世に弘む
 生死輪轉の家に還り來ることは、決するに疑情をもて所止とす

【專雜】專修念佛は報土に生れ雜修雜善は化土に生る【無爲】緣起されし世界なる有爲の彼岸、常住寂滅なる涅槃界のこと。

速かに寂靜無爲のみやこに入ること、かならず信心をもて能入とすといへり。
弘經の大士宗師等、無邊の極濁惡を拯濟したまふ
道俗時衆ともに同心に、唯この高僧の説を信すべしと
六十行すでに畢んぬ、一百二十句なり

顯淨土眞實行文類

二

顯淨土眞實信文類序

【信】澄淨を自性とせる心。親鸞に於て本願の名號に於ける無疑の心といはる。

【信樂】信心のこと。

【自性唯心】自己の自性清淨心の他に如來及び淨土を認めざる思想。

【定散】定善心と散善心との自力心。如來及び淨土の實在を認めつつも、その客觀的實在と自己との對立に惱み、自心の小主觀を以て對象を規定せんとするもの。

【三經】大經、觀經、小經。

【一心】世親の淨土論を指す。一心とは論の世尊我一心歸命盡十方無礙光如來の語によれるものにして、親鸞に於て信心の一心と領解さる。

【一經】世親の淨土論を指す。一心とは論の世尊我一心歸命盡十方無礙光如來の語によれるものにして、親鸞に於て信心の一心と領解さる。

それ、おもんみれば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す。眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。しかるに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈んで、淨土の眞證を貶す。定散の自心に迷うて、金剛の眞信にくらし。爰に、愚禿釋の親鸞、諸佛如來の眞説に信順して、論家、釋家の宗義を披闡す。ひろく三經の光澤を蒙りて、ことに一心の華文を聞く、且く疑問を至して、遂に明證を出す。まことに佛恩の深重なるを念じて、人倫の弊言を耻ぢず。淨邦をねがふ徒衆、穢域をいとふ庶類、取捨を加ふといふとも毀謗を生ずること莫れ。

顯淨土眞實信文類 三

愚禿釋親鸞集

【至心信樂の願】第十八願。

【折淨厭穢】淨土の憧憬と人生の否定。

【易往無人】本願力に乗ずれば眞實報土に生を得ること自然必然なるも眞實の信心は得難きが故に人無し。

【心光攝護】佛心光は無礙光佛の御心即ち大悲心。

【白道】願往生心を象徴す。

【本願三心】第十八願に出づる至心信樂、欲生の三心

至心信樂の願 正定聚の機

謹んで、往相の廻向を按ずるに、大信あり。大信心は、即ちこれ長生不死の神方、折淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海なり。

この心、即ちこれ念佛往生の願より出でたり。この大願を選擇本願と名づく、亦本願三心の願と名づく、復至心信樂の願と名づく、亦往相信心の願と名づくべきなり。然るに常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成じ難きにはあらず、眞實の信樂、實に獲ること難し。何をもての故に。乃し如來の加威力によるが故に、博く大悲廣慧の力によるが故に。遇淨信を獲ば、この心顛倒せず、この心虚偽ならず。こゝをもて極惡深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を得るなり。

至心信樂の本願の文

『大經』にのたまはく、「たとひ我佛を得たらんに、十方の衆生、心を至し、信樂して、我

【善根】 善法。

【經】 大經。

【五無間】 五逆罪

が國くにに生れんとおもつて、乃至なほ十念じふねんせん、もし生れずば正覺しやうかくを取らん。唯ただ、五逆ごぎやくと誹謗はいぼう正法しやうぽうとをば除く」と。

『無量壽むりやうじゆ如來會にょらいえ』にのたまはく、「もし我われ、無上覺むじやうかくを證得しやうとくせん時とき、餘佛よぶつの利りの中ちゆうのもろくの有情類うじぎるる、我が名なを聞きをはつて、所有しやうの善根ぜんこん、心々に廻向まかうせん。我が國くにに生れんと願ねんじて、乃至なほ十念じふねんせん。若し生れずば菩提ぼだいをとらじ。唯ただ、無間惡業むげんあくごふを造り、正法しやうぽう及びおよもろくの聖人しやうにんを誹謗はいぼうせんをば除く」と。

本願成就ほんがんじゆじゆの文ぶん

『經』にははく、「あらゆる衆生しゆじやう、その名號みやうがうを聞きて、信心歡喜しんじんくわんぎせんこと、乃至なほ一念いちねんせん、至心ししんに廻向まかうしたまへり。彼の國くにに生れんと願ねんすれば、すなはち往生わうじやうを得、不退轉ふたいてんに住す。唯ただ五逆ごぎやくと誹謗はいぼう正法しやうぽうとをば除く」と。

『無量壽むりやうじゆ如來會にょらいえ』にのたまはく、「他方たほうの佛國ぶつこくの所有しやうの有情うじやう、無量壽むりやうじゆ如來にょらいの名號みやうがうを聞きて、能く一念いちねんの淨信じやうしんをおこして、歡喜くわんぎせしめ、所有しやうの善根ぜんこん廻向まかうしたまへるを愛樂あいらくして、無量壽むりやうじゆ國くにに生れんと願ねんせば、願ねんに隨したがひて皆生みなうまれ、不退轉ふたいてん、乃至なほ無上むじやう正等しやうとう菩提ぼだいを得ん。五無間ごむけんと正法しやうぽうを誹謗はいぼうし、及びおよ聖者しやうじやを謗ごらんをば除く」と。

又またのたまはく、「法ほふを聞きて能く忘れず、見て敬うやまひ得て大おほいによるこば、則すなはちわが善よき親友しんゆうなり。この故ゆゑにまさまさにこゝろをおこすべし」と。

又またのたまはく、「かくの如ごときらの類るいは、大威德だいいとくの者ひとなり。能く廣大くわうだい佛法ぶつぽうの異門いもんに生なぜん」と。

【諸智土】 智を以てその自性とせる土、親鸞に於て眞佛土を顯せる語と解され、無量光明土と同義に使用さる。

【人趣】 人間の生存、趣は業に因りて趣くところとの義。

又のたまはく、「如來の功德は、佛のみ、みづからしるしめせり。たゞ世尊ましまして、能く開示したまふ。天、龍、夜叉、及ばざる處なり、二乗おのづから名言を絶つ。もしもろくの有情、まさに作佛して、行、普賢に超え、彼岸に登りて、一佛の功德を敷演せん時、多劫不思議をこえん。この中間に於て身は滅度すとも、佛の勝慧は、能く量ることなけん。このゆゑに、信聞及びもろくの善友の攝受を具足して、かくのごときの深妙の法を聞くことをえば、まさにもろくの聖尊に、重愛せらるゝことを獲べし。如來の勝智、徧虚空の所説の義言は、たゞ佛のみ悟りたまへり、この故に、博く諸智土を聞きて、我が教、如實の言を信すべし。人趣の身、得ること甚だ難し、如來の出世にまうあふことまた難し。信慧多き時まさにいまし獲ん、この故に修せんもの精進すべし。かくの如きの妙法、すでに聽聞せば、常に諸佛をして、喜を生ぜしめたてまつるなり」と。出抄

「論の註」に曰く、「彼の如來のみなを稱し、彼の如來の光明智相の如く、彼の名義の如く、實の如く修行し、相應せんとおもふがゆゑにといへり。稱彼如來名といふは、いはく、無礙光如來のみなを稱するなり。如彼如來光、明智相といふは、佛の光明は、これ智慧の相なり。この光明、十方世界を照すに障礙あること無し、能く十方衆生の無明の闇を除く。日月珠、光のたゞ室穴のうちの闇を破するが如きにはあらざるなり。如彼名義欲如實修行相應といふは、彼の無礙光如來の名號、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまふ。しかるに、稱名憶念することあれども、無明なほ

【論主】 淨土論の著者世親を指して言ふ。

【觀經義】 定善義

【三輪】 佛陀の衆生救済の爲めの三業自在なるをいひ神通輪(身業)教誡輪、記心輪と呼ぶ【またいはくこの等】序分義。

存して、所願を満てざるはいかんとならば、實のごとく修行せざると、名義と相應せざるによるがゆゑなり。いかんが不如實修行と名義と相應せざるとする。いはく、如來は、これ實相の身なり、これ物のための身なりと知らざるなり。又三種の不相應あり。一には信心あつからず、存ざるが如し、亡ざるが如きの故に。二には信心一ならず、決定なきが故に。三には信心相續せず、餘念間つるが故に。この三句、展轉してあひ成ず。信心あつからざるをもての故に、決定なし。決定なきが故に、念相續せず。また念相續せざるが故に、決定の信を得ず。決定の信を得ざるが故に、心あつからざるべし。これと相違せるを、如實修行相應と名づく。この故に、論主はじめに、我一心とのたまへり」と。

『讚阿彌陀佛偈』に曰く、曇鸞和尙「あらゆるもの、阿彌陀の德號を聞きて、信心歡喜して、聞くところをよろこばんこと、いまし一念におよぶまでせん。至心のひと廻向したまへり。生ぜん願すれば、皆往くことを得しむ。唯、五逆と謗正法とをば除く。かるがゆゑに、我頂禮して往生を願す」と。

光明寺の『觀經義』にのたまはく、「如意と言ふは、二種あり。一には衆生のこゝろの如し。彼の心念に隨ひて、皆これを度すべし。二には、彌陀のこゝろの如し。五眼まどかに照し、六通自在にして、機の度すべき者をみそなはして、一念の中に、前なく後なく、身心等しく赴き、三輪開悟して、各益すること、同じからざるなり」と。

またいはく、「この五濁五苦等は、六道に通じて、受けていまだ無き者はあらず、常にこ

【またい、はく何等】
 散善業。至誠心、
 【三心】 深心、廻向發願心。
 【正因】 往生の正
 因。

【三業】 身口意三
 業。【安心起行】 宗教
 的の確立と宗教
 的の實踐。

れに逼惱す。若しこの苦をうけざる者は、即ち凡數の攝にあらざるなり」と。抄
 またいはく、「何等爲三より下、必生彼國に至るまで已來は、正しく三心を辨定して、も
 て正因とすることを明す。即ちそれ二あり。一には、世尊、機に隨ひて益を顯すこと、意
 密にして、知りがたし、佛、自ら問うて自ら徴したまふにあらざば、解を得るによしなき
 を明す。二には、如來還りて、自らさきの三心の數を答へたまふことを明す。經にのたま
 はく、

一には至誠心、至といふは眞なり、誠といふは實なり。一切衆生の身口意業の所修の解
 行、かならず眞實心の中に作したまひしをもちひんことを明さんとおもふ。外に賢善精進
 の相を現ずることを得ざれ、内に虚假を懷ければなり。貪瞋邪偽、奸詐百端にして、惡性
 やめ難く、事蛇蝎に同じ。三業をおこすといへども、名づけて雜毒の善とす。また虚假の
 行と名づく、眞實の業と名づけざるなり。もしかくの如き、安心起行をなすは、たとひ身
 心を苦勵して、日夜十二時に、急に求め急に作して、頭燃をはらふが如くするもの、すべ
 て雜毒の善と名づく。この雜毒の行を回して、彼佛の淨土に生ぜんことを求めんと欲する
 は、これかならず不可なり。何をもちの故に。まさしくかの阿彌陀佛、因中に菩薩の行を
 行じたまひしとき、乃至一念一利那も、三業の所修、みなこれ眞實心の中に作したまひし
 によりてなり。おほよそ、施したまふところ、趣求をなす、またみな眞實なり。また、眞
 實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。至不善の三業をば、かならず眞實

【三福】願生の行として説かるる一般の倫理的行為と僧伽の戒律と一切の宗教的行との實踐。
【依正】正報は淨土の聖衆、依報はその生活内容としての國土。

【學地】學すべき實踐段階の意。

心の中に捨てたまへるをもちひよ。またもし、善の三業をおこさば、かならず眞實心の中に作したまひしをもちひて、内外明闇を簡ばず、皆眞實をもちふるが故に、至誠心となづく。

ふたつには深心。深心といふは、すなはちこれ深信の心なり。又二種あり。ひとつには、決定して、ふかく自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに没し、つねに流轉して、出離の縁あること無しと信ず。ふたつには、決定して、ふかく彼の阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受して、うたがひ無く、おもんばかり無く、彼の願力に乗じて、さだめて往生を得と信ず。また決定して、深く、釋迦佛、この「觀經」の三福、九品、定散二善を説きて、彼の佛の依正二報を證讀して、人をして忻慕せしむと信ず。また、決定して、深く「彌陀經」の中に、十方恆沙の諸佛、一切凡夫を證勸して、決定して、生ずることを得と信するなり。また、深信する者、仰ぎ願はくば、一切の行者等、一心に、唯佛語を信じて、身を顧りみず、決定して、行によりて、佛の捨てしめたまふものをば、すなはち捨て、佛の行ぜしめたまふものをば、すなはち行じ、佛の去らしめたまふところをば、すなはち去れ、これを佛敎に隨順し、佛意に隨順すと名づく、これを佛願に隨順すと名づく、これを眞の佛弟子と名づく。また一切の行者、たゞ能くこの經に依りて、深く行を信ずるは、必ず衆生をあやまたざるなり。何をもてのゆゑに。佛はこれ、満足大悲の人なるが故に、實語したまふが故に。佛を除きて已還は、智行いまだ満たさず、それ學地にあ

【正習】現起せる煩惱なる正使と、その重習によりて生ぜる習性としての煩惱。

りて、正習の二障ありて、いまだ除からざるによりて、果願いまだ圓かならず。これらの凡聖は、たとひ、諸佛の教意を測量すれども、未だ決了すること能はず。平章することありといへども、かならず、すべからく佛證を請うて、定とすべきなり。もし佛意にかなへば、すなはち、印可して、如是如是とのたまふ。もし佛意にかなはざるをば、すなはち汝等が所説、この義不如是とのたまふ。印せざるは、すなはち無記、無利、無益の語に同じ。佛の印可したまふは、すなはち、佛の正教に隨順す。もし佛の所有の言説は、すなはちこれ、正教、正義、正行、正解、正業、正智なり。もしは多、もしは少、すべて菩薩、人、天等を問はず、其是非を定めんや、もし佛の所説は、即ちこれ了教なり、菩薩等の説をば、ことごとく不了教となづくるなり。しるべし。このゆゑに今の時、仰いで一切有縁の往生人等を勧む。たゞ深く佛語を信じて、專注奉行すべし。菩薩等の不相應の教を信用して、もて疑礙をなし、惑をいだきて自から迷ひて、往生の大益を廢失すべからざれ。至釋迦、一切の凡夫ををしへ勧めて、この一身を盡して、專念專修して、いのちを捨てて後、さだめて彼の國に生るといふは、すなはち十方諸佛ことごとくみな同じくほめ、同じく勧め、同じく證したまふ。何をもてのゆゑに。同體の大悲なるがゆゑに。一佛の所化は、すなはちこれ一切佛の化なり。一切佛の化は、すなはちこれ一佛の所化なり。即ち一彌陀經の中に説かく、釋迦、極樂の種種の莊嚴を讚嘆したまふ。又一切の凡夫を勧めて、一日七日、一心に専ら彌陀の名號を念せしめて、定めて往生を得しめたまふ。次下の文にのたまはく、

【正】 五種の正行
 【禮誦】 五正行の中稱名を除く讀誦
 觀察、禮拜、讚歎供養の四行。
 【異見】 異學異見は佛教に對する別行は淨土教に對する親鸞に於ては前者は淨土教を除く一般佛教及び外教の思想後者は淨土教に於ける方便の思想。

十方におのゝ、恆河沙等の諸佛ましまして、同じく、釋迦能く五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪、無信の盛んなる時において、彌陀の名號を指讚して、衆生を勸勵して、稱念すれば、かならず往生を得とほめたまふ。すなはちその證なり。又十方の佛等、衆生の、釋迦一佛の所説を信ぜざらんことをおそれて、すなはちともに同心同時に、おの舌相を出して、徧く三千世界に覆うて誠實の言を説きたまはく、汝等衆生、みなこの釋迦の所説、所讚、所證を信ずべし。一切の凡夫罪福の多少、時節の久近を問はず、たゞ能く、上百年を盡し、下一口七日に至るまで、一心に専ら、彌陀の名號を念じて、定めて、往生を得ること、かならず疑無きなり。このゆゑに一佛の所説をば、すなはち一切の佛と同じくその事を證誠したまふ。これを人に就いて信を立すと名づくるなり。至またこの正の中に就いて、また二種あり。一には、一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に、時節の久近を問はず、念々に捨てざるをば、これを正定の業と名づく。かの佛の願に順するがゆゑに。若し禮誦等に依るをば、すなはち名づけて助業とす。この正助二行を除きて已外の、自餘の諸善をばことごとく雜行と名づく。至すべて疎雜の行と名づくるなり。かるがゆゑに、深心と名づく。

三には廻向發願心。至また、廻向發願して生ずるものは、かならず、決定して、眞實心の中に廻向したまへる願を須ひて、得生の想を作せ。この心深信せること、金剛のごとくなるによりて、一切の異見、異學、別解別人等のために、動亂破壊せられず、唯これ、

【四重】殺生、偷盜、邪淫、妄語の四種重罪。

決定して、一心にとりて、正直に進んで、彼の人の語を聞くことを得ざれ。すなはち、進退の心ありて、怯弱を生じて、廻顧すれば、道に落ちてすなはち往生の大益を失するなり。問うていはく、もし解行不同の邪雜の人等ありて、きたりてあひ惑亂して、あるひは種種の疑難を説きて、往生を得じといひ。あるひは云はん、なんぢら衆生、曠劫よりこのかた、および今生の身口意業に、一切凡聖の身のうへにおいて、つぶさに十惡五逆、四重、謗法、闍提、破戒、破見等の罪を造りて、いまだ除盡すること能はず、然るにこれらの罪は、三惡道に繫屬す。いかんぞ一生修福の念佛をもて即ちかの無漏無生の國に入りて、永く不退の位を證悟することを得んや。答へていはく、諸佛の教行、數塵沙に越えたり。識をうくる機縁、情にしたがひてひとつにあらず。譬へば世間のひと眼に見つべく、信すべきが如きは、明のよく闇を破し、空のよく有をふくみ、地のよく載養し、水の能く生潤し、火のよく成壞するが如し。かくの如き等の事、悉く待對の法と名づく。即ち目に見つべし千差萬別なり。何にいはんや佛法不思議の力、豈種種の益無からんや。隨ひて一門を出づるは、即ち一煩惱の門を出づるなり。したがひて一門に入るは、即ち一解脫智慧の門に入るなり。これがために、縁に隨ひて、行を起して、各解脫を求めよ。汝何をもてか、いまし有縁の要行にあらざるをもて、われを障惑する。然るに我が所愛は、即ちこれ我が有縁の行なり、即ち汝が所求にあらず。汝が所愛は、即ちこれ汝が有縁の行なり、亦我が所求にあらず。この故におのおの所樂に隨ひて、しかもその行を修すれば、かならず疾く解脫

【一の譬喩】この譬喩古來二河譬喩と稱せらる。願生心の自覺過程を説けるもの。

を得るなり。行者、まさに知るべし。もし解を學せんとおもはば、凡より聖に至り、乃至佛果まで、一切さはりなし、みな學することを得。もし行を學せんと思はば、必ず有縁の法によれ。少しき功勞をもふるに、多く益をうればなり。また一切往生人等に白さく、いま更に、行者のために一の譬喩を説きて、信心を守護して、以て、外邪、異見の難を防がらん。何者かこれなるや。譬へば人ありて、西にむかひて行かんとするに、百千の里ならん。忽然として、中路に二の河あり。一にはこれ火の河、南にあり、二にはこれ水の河、北にあり。二河各濶さ百歩、各深くして底なし、南北にほとりなし。まさしく、水火の中間に、ひとつの白道あり、ひろさ四五寸ばかりなるべし。この道東の岸より西の岸にいたるに、また長さ百歩、その水の波浪交はり過ぎて道を濕ほす。その火焰またきたりて道を燒く。水火あひ交はりて、常にして休息すること無けん。この人既に空曠のはるかなる處にいたるに、更に人物無し。多く群賊惡獸ありて、この人の單獨なるを見て、競ひ來りてこの人を殺さんとす。死を怖れて、直ちに、走りて西に向ふに、忽然として、この大河を見て、すなはちみづから念言すらく、この河南北に邊畔を見ず、中間に一の白道を見る。きはめてこれ狹少なり。二の岸相去ること近しといへども、何によりてか行くべき。今日さだめて、死せんこと疑はず。まさしく到りかへらんとすれば、群賊惡獸、漸漸に來りせむ。まさしく、南北に避け走らんとすれば、惡獸毒蟲競ひ來りて、我に向ふ。まさしく西に向ひて、道を尋ねて、しかもゆかんとすれば、またおそらくは、この水火の二河に墮せん

【六根等】六根乃至四大は何れも衆生現前の生活經驗の法。六根は眼、耳、鼻、舌、身の知覺作用と意の思惟作用。六塵は六根の對象なる色、聲、香、味、觸、法。六識は六根六塵の相關關係に成立せる眼、耳、鼻、舌、身の知覺認識と意の概念的認識五陰は色陰、受陰、想陰、行陰、識陰、陰は色等の法の集合の意。四大は色法の性を堅性（地大）、濕性（水大）、火性（火大）、動性（風大）の四種に別てるもの。

ことを。時に當りて惶怖すること、また言ふべからず。即ち、自ら思念すらく、我今、かへるともまた死せん、住すとも亦死せん、ゆくとも亦死せん。一種として死をまぬがれざれば、我むしろこの道をたづねて、前に向ひてしかもゆかん。既にこの道あり、必ず度すべしと。この念を作す時、東の岸に、忽ちに人の勸むる聲を聞く。きみたゞ決定して、この道を尋ねて行け。必ず死の難なけん、若し住せばすなはち死せん。又西の岸の上に人ありて。喚うて言く、汝、一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん。すべて、水火の難に墮せんことを畏れざれと。この人既にこゝに遣はしかしこに喚ふを聞きて、すなはち自ら、正しく身心に當りて、決定して道を尋ねて、たゞちに進んで、疑怯退心を生ぜず。或は行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等、喚うていはく、きみかへり來れ。この道險惡なり、過ぐることを得じ、必ず死せんこと疑はず。我等すべて悪心ありて、相向ふこと無しと。此人、喚ふ聲を聞くといへども、亦かへりみず。一心に直ちに進んで、道を念じて、しかも行けば、須臾にすなはち、西の岸に到りて、永くもろゝの難を離れ、善友相見て、慶樂すること、已むこと無からんがごとし。これはこれたとへなり。つぎにたとへを合せば、東の岸と言ふは、すなはち此娑婆の火宅に喩ふ。西の岸と言ふは、すなはち極樂寶國に喩ふ。群賊惡獸、詐はり親しむと言ふは、即ち衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大に喩ふ。人無き空迥の澤と言ふは、即ちつねに惡友に隨ひて、眞の善知識に値はざるに喩ふ。水火の二河と言ふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとし、瞋憎は火のごと

しと喩ふ。中間の白道四五寸と言ふは、即ち、衆生の貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生の心を生ぜしむるに喩ふ。いまし貪瞋こはきによるが故に、即ち水火の如しと喩ふ。善心微なるが故に、白道の如しと喩ふ。また水波、常に道を濕ほすと喩ふは、即ち愛心常に起りて、能く善心を染汚するに喩ふ。又火焰常に道を焼くと喩ふは、即ち瞋嫌の心、能く功德の法財を焼くに喩ふ。人、道の上を行きて直ちに西に向ふと言ふは、即ちもろくの行業を廻して、直ちに西方に向ふに喩ふ。東の岸に、人の聲の勧め遣はすを聞きて、道を尋ねて、直ちに西に進むと言ふは、即ち釋迦已に滅したまうて、後の人見たてまつらず、なほ教法ありて、尋ねべきに喩ふ。即ちこれを聲の如しと喩ふるなり。或は行くこと一分二分するに、群賊等喚ひかへすと喩ふは、即ち別解、別行、惡見の人等、妄りに見解をもて、迷に相惑亂し、及び自ら罪を造りて、退失すと説くに喩ふ。西の岸の上に、人ありて喚ふと言ふは、即ち彌陀の願意に喩ふ。須臾に西の岸にいたりて、善友相見て喜ぶと言ふは、即ち衆生、久しく生死に沈んで、曠劫より輪廻し、迷倒してみづから纏うて、解脱するによしなし。仰いで、釋迦發遣して、をしへて、西方に向へたまふことを蒙り、また彌陀の悲心、招喚したまふによりて、今二尊のこゝろに信順して、水順して、水火の二河を顧みず、念念に遺ること無く、彼の願力の道に乗じて、命を捨て、彼の國に生ずることを得て、佛と相見て慶喜すること、何ぞ極まらんと喩ふに喩ふるなり。又一切の行者、行住坐臥に、三業の所修、晝夜時節を問ふこと無く、常にこの解を作し、常にこの

【この三心】 觀經にては、三心は謂ゆる散善の行に關して説かる。
【又云く】 般舟讚

想をなす、かるがゆゑに廻向發願心と名づく。また廻向と言ふは、彼の國に生じをはりて、還りて大悲を起して、生死に廻入して、衆生を教化するを、亦廻向と名づくるなり。三心既に具すれば、行として成ぜざるることなし。願行すでに成じて、若し生ぜずば、このことわりあることなし。又この三心、亦定善の義を通攝す。知るべし」と。

又云く、「敬ひて一切往生の智識等に白さく、大いに須らく懺愧すべし。釋迦如來は、實にこれ慈悲の父母なり。種々の方便をもて、我等が無上の信心を發起せしめたまへり」と。

貞元の『新定釋教目錄』卷第十一にいはく、「集諸經禮懺儀」上大唐、西崇福寺の沙門、智昇の撰なり。貞元十五年十月二十三日に、なすらへて勘編して入る」と云々。「懺儀」の上卷は、智昇、諸經に依りて懺儀を造る中に「觀經」に依りて善導の「禮懺」の日中時の禮を引けり。下卷は比丘善導の集記」と云々。かの「懺儀」に依りて、要文を鈔していはく、「二には深心、即ちこれ眞實の信心なり。自身はこれ、煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して火宅を出でずと信知し、今彌陀の本弘誓願は、名號を稱すること、下十聲一聲等に至るに及ぶまで、定めて往生を得と信知して、一念に至るに及ぶまで、疑心あること無し。かるがゆゑに深心と名づく。乃至それ彼の彌陀佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜して一念を至せば、皆まさにかしこに生ずることを得べし」と。

抄
『往生要集』に云く、『入法界品』にいはく、譬へば人ありて、不可壞の藥を得れば、一切

【因】信心を意味する涅槃の證果に對する因なり。

【論主等】世親の淨土論に出づる一心。

の怨敵、そのたよりを得ざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復かくの如し。菩提心不可壞の法藥を得れば、一切の煩惱、諸塵、怨敵、壞すること能はざるところなり。譬へば人ありて、住水寶珠を得て、その身に瓔珞とすれば、深き水中に入りし、しかも没溺せざるが如し。菩提心の住水寶珠を得れば生死海に入りて、しかも沈没せず。譬へば、金剛は百千劫に於て、水中に處して、しかも爛壞し、亦異變なきが如し。菩提の心も亦復かくの如し。無量劫において生死のなかのよろゝの煩惱業に處するに、斷滅すること能はず、また損減なし」と。

又いはく、「我亦彼の攝取の中に在れども、煩惱眼を障へて、見たてまつること能はずといへども、大悲倦きこと無くして、常に我が身を照したまふ」と。

爾れば、若しは行、若しは信、一事として、阿彌陀如來の清淨願心の、廻向成就したまふところにあらざることあること無し。因無くして、他の因のあるにあらざるなり。知るべし。

問ふ、如來の本願すでに、至心、信樂、欲生の誓をおこしたまへり。何を以ての故にか、論主一心と言ふや。答ふ、愚鈍の衆生、解了し易からしめんが爲に、彌陀如來三心をおこしたまふといへども、涅槃の眞因は、唯信心を以てす。この故に、論主三を

【字訓】 文字の正訓、轉訓、同訓、假借、義訓によりてその語の意味を完全に理解せんとする佛教學の一方

【疑蓋】 蓋は煩惱のこと、煩惱は善心を覆蓋するが故に。經典に現るる煩惱説の一として欲貪、瞋恚、昏眠、掉悔、疑を五蓋とす。即ち疑蓋はその一なり。

合して一と爲る歟。

私に三心の字訓をうかゞふに、三即ち一なるべし。そのこゝろ、いかんとならば、至心といふは、至といふは、即ちこれ眞なり、實なり、誠なり。心といふは、即ちこれ種なり、實なり。

信樂といふは、信といふは、即ちこれ眞なし、實なり、誠なり、満なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり、宣なり、忠なり。樂といふは、即ちこれ欲なり、願なり、愛なり、悦なり、歡なり、喜なり、賀なり、慶なり。

欲生といふは、欲といふは、即ちこれ願なり。樂なり、覺なり、知なり。生といふは、即ちこれ成なり、作なり、爲なり、興なり。明かに知んぬ。至心は、即ちこれ眞實誠種の心なるが故に、疑蓋まじはること無きなり。信樂はすなはちこれ、眞實誠満の心なり、極成用重の心なり、審驗宣忠の心なり、

欲願愛悦の心なり、歡喜賀慶の心なるが故に、疑蓋まじはること無きなり。欲生は即ちこれ願樂覺知の心なり、成作爲興の心なり、大悲廻向の心なるが故に、疑蓋まじはることなきなり。

いま三心の字訓を按ずるに、眞實の心にして、虚假まじはること無し、正直の心にして邪偽まじはることなし。まことに知んぬ。疑蓋間雜なきが故に、これを信樂と名づく。信樂即ちこれ一心なり、一心即ちこれ眞實信心なり。この故に論主はじめに、一

心と言へるなり。知るべし。

また問ふ、字訓の如き、論主の意、三を以て一とせる義、その理然るべしといへども、愚悪の衆生の爲に、阿彌陀如來、己に三心の願をおこしたまへり。云何が思念せんや。

答ふ、佛意は測り難し。然りといへども、竊かにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして、清淨の心無し、虚假認僞にして、眞實の心なし。こゝを以て、如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざること無し、眞心ならざること無し。如來清淨の眞心を以て、圓融無礙、不可思議、不可稱、不可説の至徳を成就したまへり。如來の至心を以て、諸有の一切煩惱、惡業、邪智の群生海に廻施したまへり。則ちこれ利他の眞心を彰す、かるが故に疑蓋まじはること無し。この至心は則ちこれ、至徳の尊號を、その體と爲せるなり。

こゝを以て、『大經』にのたまはく、「欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず。色、聲、香、味、觸の法に著せず。忍力成就して衆苦をはからず。少欲知足にして染患癡なし。三昧常寂にして、智慧無礙なり。虚偽詭曲の心あること無し。和顏愛語に

【至徳】 本願名號
ノ徳。

【尊號】 尊號、徳號、嘉號はすべて名號を指せる語なるも、親覽の註釋にては、願行に於ける名、號は佛果に於ける名といはる【欲覺等】 覺は原始的なる分別を意味す。それが欲眞害の煩惱に相應せる場合、三つの惡なる覺として價値づけらる。

【欲想等】 想は對象の像を取りて意識の内容たらしむる作用。欲想乃至害想はそれが欲乃至害の煩惱と相應せる場合【色聲等】 知覺の對象。

【梵】梵天の略稱
印度に於ける世界
創造の神、佛教文
學に於ては帝釋と
共に佛教守護神と
して有名。

【婆羅門】印度民
族に於ける僧族の
名。

【色聲等】想が色
想乃至觸想に分折
され得る所以は、
想が色の知覺（眼
識）乃至觸の知覺
（身識）に相應しそ
れを根據とせるに
よる。

して、意を先にして承問す。勇猛精進にして、志願ものうきことなし。専ら清白の法を求めて、以て群生を惠利しき。三寶を恭敬し師長に奉事しき。大莊嚴を以て、衆行を具足して、諸の衆生をして、功德成就せしめたまへり」と。

『無量壽如來會』に言く、「佛阿難に告げたまはく、かの法處比丘、世間自在王如來、及び諸天、人、魔、梵、沙門、婆羅門等の前にして、廣くかくの如きの大弘誓をおこしき、皆已に成就したまへり。世間に希有にして、この願をおこし已りて、實の如く安住す。種々の功徳具足して、威徳廣大、清淨佛土を莊嚴せり。かくの如きの菩薩の行を修習せる時、

無量、無數、不可思議、無有等々、億那由他百千劫を経る内に、初めて、未だ曾て、貪瞋及び癡、欲、害、悲の想をおこさず、色、聲、香、味、觸の想をおこさず。諸の衆生に於て、常に愛敬をねがふことなほし親屬のごとし。乃その性、調順にして、暴惡あること無し。諸の有情に於て、常に慈忍の心を懷きて詐詔せず、また憍怠なし。善言策進して、

もろくの白法を求めしむ。普く群生のために、勇猛にして退すること無く、世間を利益する大願圓滿したまへり」と。
出抄

光明寺の和尚の云く、「この雜毒の行を廻して、彼の佛の淨土に求生せんとおもふは、これ必ず不可なり。何を以てのゆゑに。正しく彼の阿彌陀佛、因中の菩薩の行を行じたまひし時、乃至一念一利那も、三業の所修、皆これ眞實心の中に作したまへるによりてなり。

凡そ施したまふところ趣求を爲す、又皆眞實なり。また眞實に二種あり。一には自利

【虚空】 空間を意味する語。その無變易性、普通性が眞實性若しくは佛性の譬喩とされる點。

【諸有】 有は生存を意味する語。但し十二緣起に於ける有支の註釋の一生を生起する業とさる。今その意味に解すれば無明は惑、有は業となる。苦の因縁となる。

眞實、二には利他眞實なり。乃至不善の三業をば必ず眞實心の中に捨てたまへるをもちひよ。又若し善の三業を起さば、必ず眞實心の中に作したまへるをもちひて、内外明闇を簡ばず、みな眞實の心をもちふるが故に、至誠心となづく」と。抄す

爾れば大聖の眞言、宗師の釋義、信に知んぬ。この心則ち是不可思議、不可稱、不可說、一乘大智願海、廻向利益、他の眞實心なり。是を至心と名づく。

既に眞實と言へり。眞實と言ふは、

『涅槃經』に言く、「實諦と言ふは、一道清淨にして、二あること無きなり。眞實と言ふは、即ちこれ如來なり、如來は即ちこれ眞實なり、眞實は即ち虚空なり。虚空は即ちこれ眞實なり、眞實は即ちこれ佛性なり。佛性は即ちこれ眞實なり」と。

『釋』に「不簡内外明闇」といへり。内外と言ふは、内は即ちこれ出世なり、外は即ちこれ世間なり。明闇といふは、明は即ちこれ出世なり、闇は即ちこれ世間なり。また復明は即ち智明なり、闇は即ち無明なり。

『涅槃經』に言く、「闇は即ち世間なり、明は即ち出世なり。闇は即ち無明なり、明は即ち智明なり」と。

次に信樂と言ふは、則ち是れ如來の満足、大悲、圓融、無礙の信心海なり。この故に疑蓋間雜あること無し、かるがゆゑに信樂と名づく。即ち利他廻向の至心を以て、信樂の體となるなり。しかるに無始よりこのかた、一切群生海、無明海に流轉し、諸有

【無上】 名號。

【本願】 第十八願
【經】 無量壽經。
【又いはく】 如來會、同文異譯。

【一切衆生等】 涅槃經に於ける根本問題を表示せる命題。蓋し佛性は眞實我と説かれ、その有は得べきが故に有、即ち當爲隨て佛性は衆生の人格の理想概念なり。

輪に繫縛せられて、清淨の信樂なし、法爾として、眞實の信樂無し。こゝを以て、無上の功德値遇し難く、最勝の淨信、獲得しがたし。一切凡小、一切時中に、貪愛の心常に能く善心をけがし、瞋憎の心常に能く法財を燒く。急作急修して、頭燃をはらふが如くすれども、すべて雜毒雜修の善と名づく、また虛假詭偽の行と名づく。眞實の業と名づけざるなり。この虛假雜毒の善を以て、無量光明土に生ぜんと欲する、これ必ず不可なり。何を以ての故に。正しく、如來菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も、疑蓋まじはること無きによりてなり。この心は即ち、如來の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因となる。如來苦惱の群生海を悲憐して、無礙廣大の淨信を以て、諸有海に廻施したまへり。これを利他眞實の信心と名づく。

本願信心の願成就の文

「經」にのたまはく、「あらゆる衆生、その名號を聞きて信心歡喜せんこと、乃至一念せん」と。

又いはく、「他方佛國の所有の衆生、無量壽如來の名號を聞きて、よく一念の淨信をおこして歡喜せん」と。

「涅槃經」にいはく、「善男子、大慈大悲を名づけて佛性とす。何を以ての故に。大慈大悲は常に菩薩に隨ふこと、影の形に隨ふがごとし。一切衆生つねに定んで、まさに大慈大悲を

【大喜捨捨】喜は隨喜、捨は平等、前に出づる大慈大悲とともに四無量心と呼べるもの一切衆生に對する無限なる慈悲心を分かつてるものなり

【一子地】一切衆生を一子の如く悲愍する菩薩の地位

【聞より等】聞法と思惟、これに修を加へて三慧といふ。法の顯現し智慧の出生する心然の過程を示す

得べし。この故に説きて、一切衆生悉有佛性といへるなり。大慈大悲は名づけて佛性とす、佛性は名づけて如來とす、大喜捨捨を名づけて佛性とす。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は、若し二十五有を捨つること能はずば則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。もろく、衆生、つねにまさに得べきを以ての故なり。この故に説きて、一切衆生悉有佛性と云へるなり。大喜捨捨は即ちこれ佛性なり、佛性は即ちこれ如來なり、佛性は信心と名づく。何を以ての故に。信心を以ての故に菩薩摩訶薩は、則ち、能く檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足せり。一切衆生は、つひに定めて、まさに大信心を得べきが故に。この故に、説きて一切衆生悉有佛性といへるなり。大信心は即ちこれ佛性なり、佛性は即ちこれ如來なり、佛性は一子地と名づく。何を以ての故に。一子地の因縁を以ての故に。菩薩は則ち一切衆生に於て平等心を獲たり。一切衆生はつひに、定めて、まさに一子地を得べきが故に。この故に説きて、一切衆生悉有佛性といへるなり。一子地は即ちこれ佛性なり、佛性は即ちこれ如來なり」と。

又いはく、「或は阿耨多羅三藐三菩提を説くに、信心を因とす。これ菩提の因また無量なりといへども、若し信心を説けば、則ち已に攝盡しぬ」と。

又いはく、「信にまた二種あり。一には聞より生ず、二には思より生ず。この人の信心聞より生じて思より生ぜず。この故に名づけて信不具足とす。復二種あり。一には道ありと信ず、二には得者を信ず。この人の信心唯道ありと信じて、都て得道の人ありと信ぜず。

これを名づけて信不具足とす」と。

『華嚴經』にはよく、「この法を聞きて、信心を歡喜して、疑無きものは、速かに無上道をならん。もろ／＼の如來と等しとなり」と。

又いはく、「如來能く永く、一切衆生の疑を斷たしむ。その心の所樂に隨ひて普く皆満足せしむ」と。

又いはく、「信は道のもととす、功德の母なり。一切のもろ／＼の善法を長養す。疑網を斷除して、愛流を出でて、涅槃無上の道を開示せしむ。信は垢濁なし。心清淨にして、憍慢を滅除す。恭敬の本なり。亦法藏第一の財とす。清淨の手として、衆行を受く。信は能く惠施して心にをしむことなし。信は能く歡喜して、佛法に入る。信は能く智功德を増長す。信は能く必ず如來地に到る。信は諸根をして、淨明利ならしむ。信力堅固にして、能く壞すること無し。信は能く、永く煩惱の本を滅す。信は能く専ら佛の功德に向はしむ。信は境界において所著なし。諸難を遠離して、無難を得しむ。信は能く衆魔の路を超出し無上解脫道を示現せしむ。信は功德のために、種をやぶらず。信は能く菩提樹を生長す。信は能く最勝智を増益す。信は能く一切佛を示現せしむ。この故に行に依りて次第を説く。信樂最勝にして、甚だ得ること難し。乃至常に諸佛を信奉すれば、則ち能く大供養を興集す。もし能く大供養を興集すれば、彼の人、佛の不思議を信す。もしつねに佛法に信奉すれば、則ち佛法を聞くに厭足なし。もし佛法を聞くに厭足なければ、彼の人、

法の不思議を信ず。もし常に清淨僧に信奉すれば、則ち信心退轉せざることを得。若し信心退轉せざることを得れば、彼の人の信力能く動くこと無し。もし信力能く動くこと無きことを得れば、則ち諸根淨明利なることを得。もし諸根淨明利なることを得れば、すなはち善知識に親近することを得れば、すなはち能く廣大の善を修集す。若し能く廣大の善を修集すれば彼の人、大因力を成就す。若し人、大因力を成就すれば則ち殊勝決定の解を得。もし殊勝決定の解を得れば、則ち諸佛のために護念せらる。もし諸佛のために護念せらるれば、則ち能く菩提心を發起す。若し能く菩提心を發起すれば、則ち能く佛の功德を勤修せしむ。もし能く佛の功德を勤修すれば、則ち能く、生れて如來の家に在り。もし生れて、如來の家に在ることを得れば、則ち善く巧方便を修行す。もし善く巧方便を修行すれば、則ち信樂の心清淨なることを得。もし信樂の心清淨なることを得れば、則ち増上の最勝心を得。もし増上の最勝心を得れば、則ち常に波羅蜜を修習す。もし常に波羅蜜を修習すれば、則ち能く摩訶衍を具足す。もし能く摩訶衍を具足すれば、則ち能く法の如く、佛を供養せん。若し能く法の如く佛を供養すれば、則ち能く念佛の心動せず。もし能く念佛の心動せざれば、則ち常に無量佛を親見す。もし常に無量佛を親見すれば、則ち如來の體常住を見る。もし如來の體常住を見れば、則ち能く法永く不滅なることを知る。もし能く法永く不滅なることを知れば、辯才無障礙を得ることを得。もし辯才無障礙を得れば、則ち能く無邊の法を開演す。もし能く

無邊の法を開演すれば、則ち能く慈愍して衆生を度す。若し能く慈愍して衆生を度すれば、則ち堅固の大悲心を得。もし堅固の大悲心を得れば、則ち能く深甚の法を愛樂す。もし能く深甚の法を愛樂すれば、則ち能く有爲の過を捨離す。もし能く有爲の過を捨離すれば、則ち憍慢及び放逸を離る。もし憍慢及び放逸を離るれば、則ち能く一切衆を兼利す。もし能く一切衆を兼利すれば、則ち生死に處して疲厭なけん」と。抄略

『論の註』に曰く、「如實修行相應と名づく。この故に論主、はじめに我一心とのたまへり」と。

またいはく、「經の始めに如是と稱す、信を彰して能入とす」と。

【如是】 全て佛敎經典の記述は如是の言葉に以て、我開の經葉は佛弟、始る。經藏は佛弟、子阿難の暗誦によ、れるものとの傳説、より來れる經典式、學の一般様式。

次に欲生と言ふは、則ちこれ如來諸有の群生を、招喚したまふ勅命なり、すなはち眞實の信樂をもて欲生の體とするなり。まことにこれ、大小、凡聖、定散、自力の廻向にあらず。かるがゆゑに不廻向と名づくるなり。然るに微塵界の有情、煩惱海に流轉し、生死界に漂流して眞實の廻向心無し、清淨の廻向心無し。このゆゑに如來一切苦惱の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も廻向心を首として、大悲心を成就することを得たまへるが故に、利他眞實の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。欲生即ちこれ廻向心なり。これ即ち大悲心なるが故に、疑蓋まじはること無し。

こゝを以て、

【本願】 第十八願

【經】 大經。

【又のたまはく】 同文異譯、如來會の文。

【奢摩他毘婆舍那】 奢摩他は止と譯され、意識の統一を意味し、毘婆舍那は觀と譯され、觀察を意味す。止觀の行は佛敎に於て主要なる實踐說。

【淨入願心】 淨は願心に入る。清淨なる淨土の莊嚴が願心の内容。

本願の欲生心成就の文

「經」にのたまはく、「至心に廻向したまへり、かの國に生ぜん」と願すれば、則ち往生を得、不退轉に住す。唯、五逆と誹謗正法とをば除く」と。

又のたまはく、「所有の善根廻向したまへるを、歡喜愛樂して、無量壽國に生ぜん」と願すれば、願に隨ひて、皆生じて不退轉、乃至無上正等菩提を得、五無間、誹謗正法、及び謗聖者を除く」と。

「淨土論」に曰く、「云何が廻向せる。一切苦惱の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首として、大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに。廻向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。往相と言ふは、己が功德を以て、一切衆生に廻向したまひて、作願して共に、彼の阿彌陀如來の安樂淨土に往生せしめたまふなり。還相といふは、かの土に生じをはりて、奢摩他、毘婆舍那、方便力、成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に佛道に向へしめたまふなり。もしは往、もしは還、みな衆生をぬきて、生死海を渡せんがためにしたまへり。この故に廻向爲首得成就大悲心故とのたまへり」と。

またいはく、「淨入願心といふは、『論』に曰く、又さきに觀察莊嚴佛土功德成就と、莊嚴佛功德成就と、莊嚴菩薩功德成就とを説きたり。この三種の成就は願心莊嚴したまへるなり。知るべしと。知るべしといふは、この三種の莊嚴成就は、もと四十八願等の

清淨願心の莊嚴したまふ所なるに由りてなり。因淨なるが故に果淨なり。因無くして、他の因あるにはあらざるなり」と。

また論に曰く、「出第五門といふは、大慈悲を以て、一切苦惱の衆生を觀察して、應化の身を示して、生死の藪、煩惱の林の中に廻入して、神通に遊戯し教化地に至る。本願力の廻向を以ての故に、これを出第五門と名づくとのたまへり」と。

光明寺の和尙のたまはく、「また廻向發願して生るゝ者は、必ず決定眞實心の中に、廻向したまへる願をもちひて、得生の想を作せ。この心ふかく信ぜること、金剛の如くなるによりて、一切の異見、異學、別解、別行人等のために、動亂、破壞せられず、唯これ決定して、一心にとりて、正直に進んで、彼の人の語を聞くことを得ざれ。即ち進退の心ありて、怯弱を生じ、廻願すれば道に落ちて、即ち往生の大益を失するなり」と。

まことに知んぬ。二河の譬喩の中に、白道四五寸と言ふは、白道は、白の言は、黒に對するなり。白は、即ちこれ選擇攝取の白業、往相廻向の淨業なり。黒は即ちこれ、無明煩惱の黒業。二乘人天の雜善なり。道の言は、路に對せるなり。道はすなはちこれ本願一實の直道、大般涅槃、無上の大道なり。路は則ちこれ、二乘、三乘、萬善諸行の小路なり。四五寸と言ふは、衆生の四大、五陰に喩ふるなり。能生清淨願心と言ふは、金剛の眞心を獲得するなり。本願力の廻向の大信心海なるがゆゑに破壊すべからず、これを金剛の如しと喩ふるとなり。

【無上の心】 菩提
完成の要求。
【四流】 欲、有、
見、無明の四流。

【貴賤】 以下の叙
述は悉く一般に念
佛に就ての事柄な
り。念佛に就ての
問題は根本的には
信の問題なるが爲
か。

「觀經義」に、「道俗時衆等、各無上の心を發せども、生死は甚だ厭ひ難く、佛法復折
ひ難し。共に金剛の志をおこして、横に四流を超斷せよ。正しく金剛の心を受けて一念
に相應して後、果涅槃を得んひと」といへり。要を抄す

又いはく、「眞心徹到して、苦の娑婆を厭ひ樂の無爲を忻ひて、永く常樂に歸すべし。但
し無爲の境、輕爾として即ち階ふべからず。苦惱の娑婆、輒然として、離るゝことを得る
に由無し。金剛の志をおこすにあらすよりは、永く生死の元を絶たんや。もしまのあた
り慈尊にしたがひたてまつらば、何ぞ能くこの長きなげきをまぬがれん」と。
又いはく、「金剛といふは、即ちこれ無漏の體なり」と。

まことに知んぬ。至心信樂欲生、そのことば異なりといへども、その意これ一なり。
なにを以てのゆゑに。三心すでに疑蓋まじはること無し、かるがゆゑに、眞實の一心、
これを金剛の眞心と名づく。金剛の眞心これを眞實の信心と名づく。眞實の信心は、
必ず名號を具す。名號は必ずしも、願力の信心を具せざるなり。この故に論主はじめ
に、「我一心」とのたまへり。また「如彼名義欲如實修行相應故」とのたまへり。
凡そ、大信心海を按ずれば、貴賤縑素を簡ばず、男女老少をいはす、造罪の多少をと
はず、修行の久近を論ぜず、行にあらす、善にあらす、願にあらす、漸にあらす、定
にあらず、散にあらず、正觀にあらす、邪觀にあらす、有念にあらす、無念にあら
ず、尋常にあらず、臨終にあらず、多念にあらす、一念にあらす、たゞこれ、不可思

【菩提心】菩提心は道の最高理想なる菩提即ち覺完成の要求にして、佛の實踐生活一教の原理なり。横堅超出は、この要求の態度若しくは立場に依り要求の仕方を規定せる様式にして觀覽の定立せる範疇即ち横堅は聖道淨土の思想の立場に依る各各の様式、超出は淨二教に於ける純粹客觀的態度と個人的主觀的態度による超越と段階的との様式。

【權實】權教は方便的地設、實教は眞實教。

【信】信關の具足不具足は涅槃經の教説にして共に信卷に引用さる。

議、不可稱、不可説の信樂なり、たとへば、阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するがごとし。如來誓願の樂は、能く智愚の毒を滅するなり。

然るに、菩提心に就て二種あり。一には堅、二には横なり。又堅について、復二種あり。一には堅超、二には堅出なり。堅超、堅出は、權實、顯密、大小の教に明す。歴劫迂廻の菩提心、自力の金剛心、菩薩の大心なり。亦横に就て復二種あり。一には横超、二には横出なり。横出といふは、正、雜、定、散、他力の中の自力の菩提心なり。横超といふは、これ即ち願力廻向の信樂、これを願作佛心と曰ふ。願作佛心即ちこれ横の大菩提心なり、これを横超の金剛心と名づくるなり。横堅の菩提心、その言ひとつにして、その心異なりといへども、入眞を正要とす、眞心を根本とす、邪雜を錯とす、疑情を失とするなり。忻求淨利の道俗、深く信不具足の金言を了知し、永く聞不具足の邪心を離るべきなり。

『論の註一』に曰く、「王舍城所説の『無量壽經』を按ずるに、三輩生の中に、行に優劣ありといへども、みな無上菩提の心を發せざるは無し。この無上菩提心は、即ちこれ願作佛心なり。願作佛心は、即ちこれ度衆生心なり。度衆生心は、即ちこれ衆生を攝取して、有佛の國土に生ぜしむる心なり。このゆゑに、彼の安樂淨土に生ぜんと願するものは、かならず無上菩提心を發するなり。もし人無上菩提心を發せずして、但彼の國土の受樂ひま無きを聞きて、樂のためのゆゑに生ぜんと願せん。亦まさに往生を得ざるべきなり。このゆゑ

にいふころは、自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんとおもふが故に。住持の樂といふは、いはく、彼の安樂淨土は、阿彌陀如來の本願力のために住持せられて、受樂ひま無きなり。凡そ廻向の名義を釋せば、いはく、己が所集の一切の功徳を以て、一切衆生に施與したまひて、共に佛道に向へしめたまふなり」と。出抄

元照律師のいはく、「他の爲すこと能はざるが故に甚難なり、世擧りて未だ見たてまつらざるが故に希有なりといへり」と。

又云く、「念佛の法門は、愚智豪賤を簡ばず、久近善惡を論ぜず。唯、決て猛信を取れば、臨終惡相なれども十念に往生す。これすなはち具縛の凡愚、屠沽の下類、刹那に成佛の法を超越す。世間甚難信といふべきなり」と。

また云く、「この惡世にして、修行成佛するを難とするなり。もろくの衆生のためにこの法門を説くを、二の難とするなり。さきの二難を承けて、則ち諸佛所讚のむなしからざる意を彰す。衆生聞きて、しかも信受せしめよとなり」と。

律宗の用欽のいはく、「法の難を説く中に、まことを以て、この法、凡を轉じて理となすこと、猶し、掌を反すがごとくなるをや。大きにこれやすかるべきがゆゑに。凡そ淺き衆生は、多く疑惑を生ぜん。即ち『大本』に、易往而無人と云へり。かるがゆゑに知んぬ。難信なり」と。

【二惑】煩惱の二分類にして見惑（思法に關する煩惱）の如き即ちその一説なり

「聞持記」にはく、「愚智を簡ばずといふは、性に利鈍あり。豪賤を擇ばずといふは、報に強弱あり。久近を論ぜずといふは、功に淺深あり。善惡を擇ばずといふは、行に好醜あり。決誓猛信をとれば、臨終惡相なれどもといふは、すなはち「觀經」の下品中生に、地獄の樂火一時に俱に至る等といへり。具縛の凡愚といふは、二惑全く在るが故に、屠沽の下類、利那に成佛の法を超越す。一切世間甚難信といふべきなり。といふは屠はいはく殺を宰る。沽は即ち酤賣なり。かくの如きの惡人、たゞ十念に由りて即ち超往を得、豈難信にあらずや。

阿彌陀如來は、眞實明、平等覺、難思議、畢竟依、大應供、大安慰、無等々、不可思議光と號したてまつる」と。

「樂邦文類」の「後序」にはく、「淨土を修するもの、常におほけれども、その門を得て、しかも徑にいたる者、いくばくも無し。淨土を論ずるもの、常に多けれども、その要を得て、しかも直ちにをしふる者或は寡し。會ていまだ聞かず、自障自蔽を以て説を爲す者あるを、囚りて以てこれを言ふことを得。それ自障は愛にしくなし、自蔽は疑にしくなし。但し疑愛の二心、つひに障礙なからしむるは、則ち淨土の一門なり。未だ始めて間隔せず、彌陀の洪願常に自ら攝持したまふ。必然の理なり」と。

それ眞實信樂を按ずるに、信樂に一念あり。一念といふは、これ信樂開發の時剋の、

極促を顯し、廣大難思の慶心を彰す。

こゝを以て、

『大經』にのたまはく、「あらゆる衆生、その名號を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん、至心に廻向したまへり、彼の國に生ぜんと願すれば、即ち往生を得、不退轉に住せん」と。

又のたまはく、「他方佛國の所有の衆生、無量壽如來の名號を聞きて、能く一念の淨心をおこして、歡喜愛樂せん」と。

又のたまはく、「その佛の本願力、みなを聞きて往生せんとおもはん」と。

又のたまはく、「佛の聖徳の名を聞く」と。

『涅槃經』にいはく、「いかなるをか、名づけて聞不具足とする。如來の所説は、十二部經なり。唯六部を信じて、未だ六部を信ぜず。この故に名づけて、聞不具足とす。復此六部の經を受持すといへども、六部の經を讀誦に能はずして、他の爲に解説するは利益する所無し。この故に名づけて聞不具足とす。又復この六部の經を受け已りて、論議のための故に、勝他のための故に、利養のための故に、諸有のための故に、持讀誦説せん。この故に名づけて、聞不具足とす」とのたまへり。

光明寺の和尙は、「一心專念」といひ、又「專心專念」といへり。

然るに「經」に聞といふは、衆生、佛願の生起本末を聞きて疑心あること無し。こ

【横に】「横はよこさまといふ。如來の願力を信ずるが故に行者の五惡趣を自然にたちすて四生をはなるを横といふ。他力をまふすなり。これを横超といふ。」

【願成就】第十八願成就、即ち上に引ける開其名號、信心歡喜、乃至一念、即ち信樂開發の一念。

れを聞と曰ふなり。信心と言ふは、即ち本願力廻向の信心なり。歡喜といふは、身心の悦豫をあらはす貌なり。乃至といふは、多少を攝する言なり。一念といふは、信心に二心なき故に一念と言ふ。これを一心と名づく。一心は、則ち清淨報土の眞因なり。金剛の眞心を獲得する者は、横に五趣八難の道を超えて、必ず現生に十種の益を獲。何者をか十とする。

- 一には冥衆護持の益
- 二には至徳具足の益
- 三には轉惡成善の益
- 四には諸佛護念の益
- 五には諸佛稱讚の益
- 六には心光常護の益
- 七には心多歡喜の益
- 八には知恩報徳の益
- 九には常行大悲の益
- 十には入正定聚の益なり。

宗師の「專念」と云へるは、即ちこれ一行なり。「專心」と云へるは、即ちこれ一心なり。

然れば、願成就の一念は、即ちこれ專心なり。專心は、即ちこれ深心なり。深心は、即ちこれ深信なり。深信は、即ちこれ堅固深信なり。堅固深信は即ちこれ決定心なり。決定心は、即ちこれ無上々心なり。無上々心は、即ちこれ眞心なり。眞心は、即ちこれ相續心なり。相續心は、即ちこれ淳心なり。淳心は、即ちこれ憶念なり。憶念は、即ちこれ眞實の一心なり。眞實の一心は、即ちこれ大慶喜心なり。大慶喜心は、即ちこれ眞實信心なり。眞實信心は、即ちこれ金剛心なり。金剛心は、即ちこれ願作

佛心なり。願作佛心は、即ちこれ度衆生心なり。度衆生心は、即ちこれ衆生を攝取して、安樂淨土に生ぜしむる心なり。この心即ちこれ大菩提心なり、この心即ちこれ大菩提心なり、この心即ちこれ大慈悲心なり。この心すなはちこれ無量光明慧によりて生ずるが故に、願海平等なるが故に、發心ひとし。發心ひとしきが故に、道等しきが故に、大慈悲等し。大慈悲はこれ佛道の正因なり。かるがゆゑに、『論の註』に曰く、「かの安樂淨土に生れんと願する者は、かならず、無上菩提心を發するなり」と。

また云く、「是心作佛といふは、いふこゝろは、心能く佛になる。是心是佛といふは、心の外に佛ましますとなり。譬へば火、木より出で、火、木を離るゝことを得ず。木を離れざるを以ての故に、則ち能く木を焼く。木、火の爲に焼かれて、木即ち火と爲るが如し」と。

光明のいはく、「この心作佛す、この心これ佛なり。この心の外に、異佛ましますとたり」と。

故に知んぬ、一心、これを如實修行相應と名づく。即ちこれ正教なり、これ正義なり、これ正行なり、これ正解なり、これ正業なり、これ正智なり。

三心即ち一心なり。一心即ち金剛眞心の義、答へ畢んぬ。知るべし。

『止觀』の一には、曰く、「菩提といふは天竺の語、こゝには道と稱す。質多といふは天竺の

音なり、この方には心と云ふ、心と云ふは即ち慮知なり」と。

【横超等】横は他力淨土、堅は自力聖道の、即ち横堅は思想的立場の個性的區別。超は即身成佛若しくは即得位階次の方便。即ち超出は横堅の立場に於ける純粹なるものとの価値的區別なり。

横超斷四流といふは、横超は、横といふは堅超、堅出に對す。超といふは迂に對し、廻に對する言なり。堅超といふは、大乘眞實の教なり。堅出といふは、大乘權方便の教、二乘、三乘迂廻の教なり。横超といふは、即ち願成就、一實、圓滿の眞教、眞宗これなり。亦復横出あり。即ち三輩、九品、定散の教化士、憍慢、迂廻の善なり。大願清淨の報土には、品位階次を云はず、一念須臾の頃に、速かに疾く無上正眞道を超證す。故に横超といふ。

『大本』にのたまはく、「無上殊勝の願を超發す」と。

またのたまはく、「われ超世の願を建つ、必ず無上道に至らんと。名聲十方に超えて、究竟して聞ゆる所なくば、誓ふ正覺をならじ」と。

またのたまはく、「必ず超絶してすつることを得て、安養國に往生せよ、横に五惡趣を蔽り、惡趣自然に閉ぢん、道に昇るに窮極無し。往き易くしてしかも人無し。その國逆違せず、自然の牽く所なり」と。

『大阿彌陀經』の譯なり。にのたまはく、「超絶して去つることを得べし。阿彌陀佛國に往生すれば、横に五惡道を蔽りて、自然に閉塞す、道に昇ること極まり無し。往き易くして人

【四生】胎生、卵生、濕生、化生。
 【因】六趣四生の存在は煩惱業を因縁として成立せる緣覺内容、即ちその結果なり。
 【四流】流は煩惱を意味する語、四流は煩惱説の一流にして無明流、見流(此の流に關する煩惱)、有流(色無色界に於ける煩惱)、欲流(欲界に於ける煩惱)、除けるもの(欲流、欲界に於ける煩惱を除けるもの)をいふ。

あること無し。その國に逆違せず、自然の牽くところなり」と。

斷と言ふは、往相の一心を發起するがゆゑに、生としてまさに受くべき生なし、趣としてまたいたるべき趣なし。已に六趣四生、因亡じ果滅す、かるがゆゑに、すなはち頓に三有の生死を斷絶す。かるがゆゑに斷と曰ふなり。四流は則ち四暴流なり、また生老病死なり。

『大本』にのたまはく、「かならずまさに佛道をなりて、ひろく生死の流を度すべし」と。

又のたまはく、「かならず、まさに世尊となりて、まさに一切の生老死を度せんとすべし」と。

『涅槃經』にいはく、「また涅槃は、名づけて洲渚とす。何を以ての故に。四大の暴河に漂ふこと能はざるがゆゑに、何等をか四とする。一には欲暴、二には有暴、三には見暴、四には無明暴なり。この故に涅槃を名づけて州渚とす」と。

光明寺の和尚のいはく、「もろ／＼の行者に白さく、凡夫の生死、食して厭はずばあるべからず。彌陀の淨土、輕しめて忻はずばあるべからず。厭へばすなはち娑婆永く隔つ、忻へばすなはち淨土に常に居す、隔つればすなはち六道の因亡じ、輪廻の果自ら滅す。因果既に亡じてすなはち形と名と願に絶えぬるをや」と。

またいはく、「仰ぎ願くば、一切往生人等、善く、みづから己が能を思量せよ。今身に彼の國に生ぜん願はん者は、行住坐臥に、必ずすべからく、心を勵まし、己を尅して、晝

【一形】一生を意味する語。

夜に廢することなかるべし。畢命を期として、上一形にあるは、少しく苦しきに似たれども、前念に命終して、後念に即ち彼の國に生じて、長時永劫に、常に無爲の法樂を受く。乃至成佛までに生死をへす、豈たのしみにあらずや。知るべし」と。

眞の佛弟子と言ふは、眞の言は偽に對し假に對するなり。弟子と言ふは、釋迦諸佛の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行に由りて、必ず大涅槃を證すべきが故に、眞の佛弟子と曰ふ。

「大木」にのたまはく、「たとひ我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、わが光明を蒙りて、その身に觸るゝ者、身心柔軟にして、人天に超過せん。若ししからずば、正覺を取らじ」と。

「たとひ我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が名字を聞きて、菩薩の無生法忍、もろくの深總持を得ずといはゞ、正覺を取らじ」と。

「無量壽如來會」にはく、「若しわれ成佛せんに、周徧十方無量無邊不可思議無等界の衆生の輩、佛の威光を蒙りて照觸せらるゝ者、身心安樂にして、人天に超過せん。若ししからずば菩提を取らじ」と。

またいはく、「法を聞きて能く忘れず、見て敬ひ、得て大きに慶ばゝ、則ち我が善き親友なり」と。

【總持】陀羅尼の譯語。

陀羅尼の

【甘露】 神神の用
ふる不死の禁酒を
云ふ。

又いはく、「それ至心ありて、安樂國に生ぜんと願するものは、智慧明かに達し、功德殊勝なることを得べし」と。

又「廣大勝解者」とのたまへり。

又「かくの如きらの類、大威徳の者は、能く廣大異門に生ず」とのたまへり。

又いはく、「若し念佛する者は、まさに知るべし、この人はこれ、人中の分陀利華なり」と。

『安樂集』にいはく、「諸部の大乘に據りて、説聽の方軌を明さば、『大集經』にいはく、説法の人に於ては、醫王の想をなせ、拔苦の想をなせ。所説の法をば、甘露の想をなせ、醜の想をなせ。それ聽法のひとは、增長勝解の想をなせ、愈病の想をなせ。若し能く、かくの如くならば、説者聽者、皆佛法を紹隆するに堪へたり。常に佛前に生ぜんとす。至『涅槃經』に依るに、佛のたまはく、若し人但善く至心をもて、常に念佛三昧を修すれば、十方の諸佛恆にこの人を見そなはずこと、現に前にましますがごとし。このゆゑに『涅槃經』に云はく、佛、迦葉菩薩に告げたまはく、若し善男子、善女人ありて、つねに能く心を至し、専ら念佛するひとは、若しは山林にもあれ、若しは聚落にもあれ、若しは葦、若しは夜、若しは坐、若しは臥、諸佛世尊、常にこの人を見そなはずこと、目の前に現するが如し。恆にこの人のために、しかも受施をなさん。至『大智度論』に依るに、三番の解釋あり。第一には佛はこれ無上法なり、菩薩は法臣とす。尊とくする所、重んずる所、たゞ

【因地】 道の完成の果に對する道の實踐過程を意味する語。

【有輪】 存在の眼りなき連鎖、即ち輪廻。

佛世尊なり。このゆゑにまさに常に念佛すべきなり。第二には、もろ／＼の菩薩ありて、自らいはく、われ曠劫より已來、世尊我等が法身、智身、大慈悲身を長養したまふことを蒙ることを得たりき。禪定、智慧、無量の行願、佛に由りて成ずることを得たり。報恩のためのゆゑに、つねに、佛に近かんことを願す。亦大臣の王の恩寵を蒙りて、常に、その王を念ふが如し。第三には、もろ／＼の菩薩ありて、またこの言を作さく、われ因にして惡知識に遇うて、般若を誹謗して惡道に墮しき。無量劫をへて餘行を修すといへども、いまだ出づること能はず。後に一時に於て、善知識の邊に依りしに、われを教へて、念佛三昧を行ぜしむ。その時に、即ち能く、しかしながらもろ／＼の障をして、まさに解脱することを得しめたり。この大益あるが故に願じて佛を離れず。乃至「大經」にのたまはく、凡そ淨土に往生せんとおもはゞ、かならず發菩提心をもちふるを源とす。いかにとなれば、菩提は、すなはちこれ無上佛道の名なり。もし發心作佛せんとおもはゞ、この心、廣大にして法界に周徧せん。この心長遠にして、未來際を盡す。この心普くつぶさに二乗の障を離る。もし能く一たび、發心すれば、無始生死の有輪を傾くと。乃至「大悲經」にいはく、いかにぞ名づけて大悲とする。もしもはら念佛相續して斷えざれば、その命終に隨ひて、さだめて安樂に生ぜん。もし能く展轉して、あひ勧めて、念佛を行ぜしむるは、これ等を悉く大悲を行ずる人と名づく」と上。要を抄す。

光明師のいはく、「たゞ恨むらくは、衆生の疑ふまじきを疑ふことを。淨土對面して相

【娑婆本師】教主
釋迦を意味す。

たがはず、彌陀の攝と不攝とを論ずることなかれ、意専心にして、廻すると廻せざるとにありと。至或はいはく、今より佛果に至るまで、長劫に佛を讀めて、慈恩を報ぜん。彌陀の弘誓の力を蒙らずば、いづれの時、いづれの劫にか娑婆を出でん。至いかんが今日寶國に至ることを期せん。實にこれ、娑婆本師の力なり。もし本師知識の勸にあらずば、彌陀の淨土いかんしてか入らん」と。

またいはく、「佛世甚だまうあひ難し、人信慧あること難し、たま／＼希有の法を聞くこと、これ復最も難しとす。みづから信じ、人を教へて信ぜしむること、難きが中にうたゝまた難し。大悲弘く普く化する、眞に、佛恩を報ずるになる」と。

またいはく、「彌陀の身色は金山の如し、相好の光明は十方を照す。唯、念佛のもの、みありて、光攝を蒙る。まさに知るべし、本願最もこはしとす。十方の如來、舌を舒べて證したまふ。専ら名號を稱して西方に至る、彼の華臺に到りて妙法を聞く、十地の願行自然に彰る」と。

又いはく、「但阿彌陀佛を專念する衆生のみありて、彼の佛心の光、常にこの人を照して攝護して捨てたまはず、すべて餘の雜業の行者を照攝することは論ぜず。これ亦、これ現生護念増上縁なり」と。

又いはく、「心歡喜得忍と言ふは、これ阿彌陀佛國の清淨の光明、忽ちに眼前に現ぜん、何ぞ踴躍に勝へん。この喜に囚るが故に、すなはち無生の忍を得ることを明す。亦喜

【十地】菩薩道の
實踐過程。

【無生の忍】諸法の無生無滅なる理法を認識して心不動なるをいふ。【喜忍等】喜、悟、信の三忍は無生忍の意識内容を分拆せるもの。

忍と名づく、亦悟忍と名づく、亦信忍と名づく。これ即ちはるかに談ず、未だ得處をあらはさず。夫人をして、等しく心にこの益をねがはしめんと欲ふ。勇猛專精にして、心に見んと想ふ時、まさに忍を悟るべし。これ多く、これ十信の中の忍なり、解行已上の忍にはあらざるなり」と。

又いはく、「若念佛者より下生諸佛家に至る已來は、正しく、念佛三昧の功能超絶して、實に、雜善をして、比類とすることを得るにあらざることを顯はす。即ち、その五あり。一には、彌陀佛名を專念することを明す。二には、能念の人を指讚することを明す。三には、もし能く相續して、念佛するひと、この人逝た希有なりとす。更に物として、以てこれにたくらふべきこと無きことを明す。故に、芬陀利を引きて喩とす。芬陀利と言ふは、人中の好華と名づく、亦希有華と名づく、亦人中の上々華と名づく、また人中の妙好華と名づく。この華相傳へて、蔡華と名づくるこれなり。若し念佛の人は、即ち、これ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上々人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。四には、彌陀のみなを專念するひとは、即ち觀音勢至、常に隨ひて影護したまふこと、亦親友知識の如くなることを明す。五には、今生に既に、この益を蒙れり、命を捨て、即ち諸佛の家に入ることを明す。すなはち淨土これなり。かしこに到りて、長時に法を聞き、歷事供養せん。因圓かに果滿す、道場の座豈はるかならんや」と。

王日休が云く、「我『無量壽經』を聞くに、衆生此佛名を聞きて、信心歡喜せんこと乃

至一念せんもの、彼の國に生ぜんと願すれば、即ち往生を得、不退轉に住すと。不退轉は梵語には、これを阿惟越致といふ。『法華經』にはいはく、彌勒菩薩の所得の報地なり。一念往生、すなはち彌勒に同じ、佛語むなしからず。この『經』は、まことに往生の徑術、脫苦の神方なり、皆信受すべし」と。

『大經』にのたまはく、「佛、彌勒に告げたまはく、この世界より、六十七億の不退の菩薩ありて、彼の國に往生せん。一一の菩薩は、已にむかし、無数の諸佛を供養せりき。ついで彌勒の如し」と。

またいはく、「佛彌勒に告げたまはく、この佛土の中に、七十二億の菩薩あり。かれは、無量億那由他百千の佛のみもとにして、もろくの善根を種ゑて不退轉を成ぜるなり。まさに彼の國に生ずべし」と。出抄

律宗の用欽師の云く、「至れること、華嚴の極唱、法華の妙談にしかんや、且は未だ普授あることを見ず。衆生一生に、皆、阿耨多羅三藐三菩提の記をうることは、誠に、いふところの不可思議功德の利なり」と。

眞に知んぬ。彌勒大士は、等覺の金剛心を窮むるが故に、龍華三會の曉、まさに無上覺位を極むべし。念佛の衆生は、横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超證す。故に便同といふなり。しかのみならず、金剛心を獲る者は、則ち韋提と等しく、即ち喜、悟、信の忍を獲得すべし。これ則ち往相廻向の眞心、徹到す

【普授】 普く一切衆生に記を授く。記は佛陀の與ふる成佛の預言。

【韋提】 觀經の聽法者、摩竭陀の王妃。

るが故に、不可思議の本誓によるが故なり。
禪宗の智覺、念佛の行者を讃めていはく、「まれなるかな、佛力難思なれば古今も未だあらず」と。

【教觀】 教相と觀法。
【智者】 天台の開祖智顛。
【法界】 思惟の對象にして有爲無爲一切の諸法を該攝す。

律宗の元照師のいはく、「嗚呼教觀に明かなること、たれか、智者にしかんや。終りに臨んで、『觀經』を擧げ、淨土を讀じて、長く逝きき。法界に達せること、たれか杜順にしかんや。四衆を勧め、佛陀を念じて、勝相を感じて西にゆきき。禪にまじはり、性を見ること、たれか高玉、智覺にしかんや。皆社をむすび、佛を念じて、俱に上品に登りき。業儒才ある、たれか劉、雷、柳子厚、白樂天にしかんや。然るにみな、筆をとり誠を書して、彼の士に生ぜんと願じき」と。

假と言ふは、即ちこれ、聖道の諸機、淨土の定散の機なり。

かるがゆゑに、光明師のいはく、「佛教多門にして八萬四なり、正しく衆生の機の不同なるが爲なり」と。

又いはく、「方便の假門等しくして、ことなることなし」と。
又いはく、「門門不同なるを漸教と名づく、萬劫苦行して無上を證す」と。

偽と言ふは、則ち、六十二見、九十五種の邪道これなり。

『涅槃經』にいはく、「世尊常に説きたまはく、一切の外は九十五種を學びて、みな惡趣に趣く」と。

【六十二見】 佛教以外の思想的立場即ち無我緣起の認識に立たざる思想を分類せるもの。

光明師のたまはく、「九十五種皆世を汚す、唯佛の一道のみひとり清閑なり」と。

誠に知んぬ。悲しき哉、愚禿驚、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近づくことをたのしみます。耻づべし、傷むべし。

その佛、難治の機を説くとして、『涅槃經』には、「迦葉、世に三人ありその病治しがたし。一には、謗大乘。二には、五逆罪。三には、一闍提なり、かくの如きの三病、世の中に極重なり。ことごとく、聲聞、緣覺、菩薩の能く治するところにあらず。善男子、譬へば、病あれば、必ず死するに治なからんに、もし瞻病、隨意の醫藥あらんが如し。若し瞻病、隨意の醫藥無くば、かくのごときの病定めて治すべからず。まさに知るべし、是の人、必ず死せんこと疑はず。善男子、この三種の人、亦復かくのごとし。佛菩薩に従ひて法を聞くことを得をはりて、すなはち能く、阿耨多羅三藐三菩提心を發せん。もし聲聞、緣覺、菩薩ありて、或は法を説き、或は法を説かざるあらん。それをして、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむることあたはず」と。

又いはく、「その時に、王舎大城に阿闍世王あり。その性弊惡にして、よく殺戮を行す。口の四惡、貪恚、愚癡を具して、その心熾盛なり。乃至しかるに、眷屬の爲に、現世の五欲の樂に貪著するが故に、父の王の辜無きに、横ざまに逆害を加す。父を害するによりて、己が心に悔熱を生ず。乃至心、悔熱するが故に、徧體に瘡を生ず。その瘡、臭穢にして附近

すべからず。すなはち、自ら念言すらく、我今、此の身にすでに華報をうけたり、地獄の果報まさに近づきて遠からずとて、その時に、その母韋提希后、種々の薬をもて、しかもためにこれを塗る。その瘡遂に増すれども、降損あることなし。王即ち、母に白さく、かくの如きの瘡は、心よりして生ぜり、四大より起れるにあらず。もし衆生能く治することありといはゞ、このことわりあることなけん」と。

時に大臣あり、日月稱と名づく。王のところに往至して、一面に在りて、立ちて白してまうさく、大王、何がゆゑぞ、愁悴して顔容悦ばざる。身痛むとせん、心痛むとやせんと。王、臣にこたへていはまく、我、今身心豈痛まざることを得んや。わが父、辜無きに横ざまに逆害を加す。われ智者にしたがひて、曾てこの義を聞きき、世に五人あり、地獄を脱れずと。謂く五逆罪なり。我今すでに、無量、無邊、阿僧祇の罪あり、云何ぞ身心を脱れずと。又良醫のわが身心を治せんもの無けん」と。臣、大王にまうさく、大に愁苦することなかれと。即ち偈を説きていはく、もし常に愁苦せば、愁、遂に増長せん、ひと眠をこのめば、眠、則ち滋く多きが如し。姪を食し酒を嗜むも、亦復かくのごとし。王のたまふところの如き、世に五人あり、地獄を脱がれずとは、たれか往きて、これを見てきたりて王に語るや。地獄と言ふは、ただこれ、世間の多く智者の説なり、王のたまふところの如し。世に良醫の身心を治する者無けん。今大醫あり、富蘭那と名づく。一切知見して、自在を得て、定めて、畢竟して清淨梵行を修習して、つねに、無量、

【富蘭那】富蘭那
迦葉以下順次に六
師外道の説をあぐ

【黒業】 黒は悪、
白は善。

無邊の衆生のために、無上涅槃の道を演説す。もろくの弟子のために、かくの如きの法を説けり。黒業あること無ければ、黒業の報なし。白業あること無ければ、白業の報なし。黒白業無ければ、黒白業の報なし。上業および、下業あること無し。この師、いま王舎城の中に在す、や、願はくば大王、屈駕してかしこに往け。この師をして、身心を療治せしむべしと。時に王、答へていはまく、審かに能く、かくの如き我が罪を滅除せば、我まさに歸依すべし。

復ひとりの臣あり、名づけて藏徳と曰ふ。復王のところへ往きて、しかも、この言を作さく、大王何が故ぞ面貌憔悴して、唇口乾燥し、音聲微細なるや。乃何の苦しむところかある。身痛むとやせん、心痛むとやせん。王即ち、こたへていはく、我今、身心云何ぞ痛まざらん。われ癡盲にして、慧目あること無し。もろくの悪友に近づきて、ためによく、提婆達多悪人の言に隨ひて、正法の王に、横さまに逆害を加す。我昔、智人の偈説せしを聞きき。もし父母、佛及び弟子に於て、不善の心を生じ、悪業を起さん。是の如きの果報、阿鼻獄に在りと。この事をもての故に、我をして、心怖して大苦惱を生ぜしむ。また良醫のありて救療せらるゝこと無けん。大臣復いはく、や、願はくば大王、しばらく愁怖することなかれ。法に二種あり。一には出家、二には王法なり。王法といふは、いはく、その父を害して、則ち、國土に王たり。これ逆なりと云ふといへども、實に罪あること無けん。迦羅蠱の、かならず母の腹をやぶりて然して後にいまし生ずるが如し、生の法かく

【迦羅蠱】 膜蟲と譯さる。

【末伽梨拘舍梨子】
六師外道の第二、
その學説は自然論
無作論、佛教に於
て邪命（不妥當な
る生活）外道と稱
せらる。即ち苦行
をもつてその實踐
法となす。

【僧祇物】 僧團に
屬する財物、

のごとし。母の身を破るといへども實に亦罪なし。螺腹の懷妊等、亦復かくの如し。治國の法、法としてかくの如くなるべし。父兄を殺すといへども、實に罪あること無し。出家の法は、乃至蚊蟻殺す亦罪あり。至王のたまふところの如し。世に良醫の身心を治する者無けん。今大師あり、末伽梨拘舍梨子と名づく。一切知見して、衆生を憐愍すること、猶赤子のごとし。已に煩惱を離れて、能く衆生の川毒の利箭を抜く。至この師今王舎大城に在ます。や、願くば、大王、そのところに往至して、王もし見ば、衆罪消除せんと。時に王答へていはく、あきらかに、能くかくの如き我が罪を滅除せば、我まさに歸依すべしと。

復ひとりの臣あり、名づけて實徳と曰ふ。復王の所に到りて、即ち偈を説きて言く、大王何が故ぞ、身に璣珞を脱ぎ、首の髮蓬亂せる。乃至かくの如きなるや。乃これ心痛むとやせん、身痛むとやせんと。王、即ち答へていはく、我今、身心豈痛まざることを得んや、我が父先王、慈愛仁惻して、ことに矜念せらる。實につみなし。往きて、相師に問ふ。相師答へてまうさく、この兒生れをはりて、定んでまさに父を害すべしと。この語を聞くといへども、猶瞻養せらる。むかし智者の、かくの如きの言を作すことを聞きき。もし人母に通じ及び比丘尼を汚し、僧祇物を偷み、無上菩提心を發せる人を害し、および、その父を殺せん。かくの如きの人、必定して、まさに阿鼻地獄に墮すべしと。我いま、身心豈痛まざることを得んや。大臣また言く、や、願はくば、大王、また愁苦することなかれ。至乃

【刪閑耶毘羅跋子】六師外道の第三、舍利弗目蓮の最初の教師たりし思想の記述と稱趣きを異にして、判斷中止を意味する矯亂論者たりしもの如し。

一切衆生皆餘業あり。業縁をもての故に、しばし生死を受く、もし先生に餘業あらしめば、王今これを害せん。竟に何の罪かあらん。や、願はくば、大王こゝろを寛かにして、愁ふるることなかれ。何をもての故に。もし常に愁苦すれば、愁遂に増長す。人眼をこのめば、眼則ち、滋く多きがごとし。姪を食し、酒を嗜むも、亦復かくのごとし。至今大師あり、刪閑耶毘羅跋子と名づく。

復ひとりの臣あり、悉知義と名づく。即ち、王の所に至りて、是の如きの言を作さく。至乃王即ち答へて言く、我いま、身心豈痛み無きことを得んや。至先王辜なきに、横さまに逆害を興す。我亦むかし、智者の説きて言ひしを聞きき。若し人、父を害することあらば、まさに、無量阿僧祇劫に於て、大苦惱を受くべしと。我、今、久しからずして、かならず地獄に墮せん。又良醫の我が罪を救療すること無けん。大臣、即ち言く、や、願はくば、大王愁苦を放捨せよ。王聞かずや、昔王ありき、名づけて、羅摩と曰ひき。其父を害し已りて、王位を紹ぐことを得たりき。跋提大王、毗樓沙王、那輪沙王、迦帝迦王、毗舍佉王、月光明王、日光明王、愛王、持多人王、かくの如き等の王、皆、その父を害して、王位を紹ぐことを得たりき。然るに、一として、王の地獄に入るもの無し。いま現在に、毗瑠璃王、優陀耶王、惡性王、鼠王、蓮華王、かくの如き等の王、皆その父を害せりき。悉く、一として、王の愁惱を生ずるもの無し。地獄、餓鬼、天中と言ふといへども、誰か見る者あるや。大王、たゞ二の有あり。一には人道、二には畜生なり。この二ありといへど

【阿耨多翅金欽婆羅】六師外道の第一、極端なる無道徳説の主張者にして、唯物論的立場に立てる快樂主義者、佛敎に呼ばる外道とす。

も、因縁生にあらす、因縁死にもあらす。もし因縁にあらすば、何ものにか善悪あらん。や、願はくば、大王、愁怖を懐くこと勿れ。何をもての故に。もし、常に愁苦すれば、愁遂に増長す。人眼をこのめば、眼則ち、滋く多きが如し。姪を食し、酒を嗜むも、亦復かくの如しと。至今大師あり、阿耨多翅金欽婆羅と名づく。乃至復大臣あり、名づけて吉徳と曰ふ。至地獄と言ふは、何の義ありとかせん。臣まさにこれを説くべし。地は地に名づく、獄は破に名づく。地獄を破せん、罪報あること無けん。これを地獄と名づく。また地は人に名づく、獄は天に名づく。その父を害するをもての故に、人天に到らん。この義をもての故に、婆蘇仙人唱へていはく、羊を殺して人天の樂を得、これを地獄と名づく。また地は命に名づく、獄は長に名づく。かの壽命の長を殺するをもてのゆゑに地獄と名づく。大王この故にまさに知るべし、實に地獄なけん。大王麥を植ゑて麥を得、稻を種ゑて稻を得るが如し。地獄を殺しては、還りて地獄を得ん、人を殺害しては還りて人を得べし。大王いままさに臣の所説を聞くに、實に殺害なかるべし。もし有我ならば、實に亦害なし。若し無我ならば、復害するところなけん。何をもての故に、若し有我ならば、常に變易無し、常住をもての故に殺害すべからず。不破、不壞、不繫、不縛、不瞋、不喜は猶し虚空の如し、云何ぞまさに殺害の罪あるべき。若し無我ならば、諸法無常なり、無常をもての故に念々に壞滅す。念々に滅するが故に、殺者、死者、みな念々に滅す。もし念々に滅せば誰かまさに罪あるべき。大王、火、木を燒くに、火則ち罪なきが

【迦羅鳩駄迦旃延】六師の第五、自我を獨立常住なる要素の集合とみる無因論自然論を主張し、殺者令殺者を否認する唯物論的無道德說論者。【尼乾陀若健子】耆那教の祖、大雄を指す。その學說を命、非命の二元説を中心とせるものにして、苦行主義を實踐法となせり。これを六師外道の第六とす。【耆婆】佛敎時代の名醫、佛敎敎團及び摩竭陀の王宮の侍醫たりき。阿闍世その父母を害せんとする時、之を諫めて横造を中止せしめしこと、迦葉品觀經に出づ。

ごとし。斧、樹を斫るに、斧また罪なきが如し。鎌、草を刈るに、鎌實に、罪なきが如し。刀、人を殺すに、刀實に人にあらず。刀、既に罪なきが如し。人云何ぞ罪あらんや。毒、人を殺すに、毒、實に人にあらず、毒藥罪にあらざるがごとし、人、いかに罪あらんや。一切萬物皆またかくのごとし。實に殺害なけん。云何ぞ罪あらん。や、願はくば、大王愁苦を生ずることなかれ。何をもての故に。もし常に愁苦せば、愁遂に増長せん。人眠をこのめば、眠則ち滋く多きが如し。姪を食し、酒を嗜むも、亦復かくの如し。いま大師あり、迦羅鳩駄迦旃延と名づく。乃至復ひとり之の臣あり、無所畏と名づく。至いま大師あり、尼乾陀若健子と名づく。至その時に大醫あり、名づけて耆婆と曰ふ。王の所に往至して、白してまうさく、大王、いづくんぞ眠ることを得んや、いなやと。王偈をもて、答へていはく、至耆婆我今病重し正法の王に於て、惡逆害を興す。一切良醫、妙藥、咒術、善巧、瞻病の治すること能はざるところなり。何をもてのゆゑに。我が父法王、法の如く國をよさむ、實につみなし。横さまに逆害を加す、魚の陸に處するが如し。至われむかし、智者の説きて言ひしを聞き。横身、口、意業、もし清淨ならずば、まさに知るべし、この人必ず、地獄に墮せんと。我亦かくの如し、云何ぞまさに安穩に眠ることを得べきや。今われ又無上の大醫、法藥を演説して、我が病苦を除くものなしと。耆婆、答へて言く、よきかなく、王罪を作すと

いへども、心に重悔を生じて、しかも慙愧を懷けり。大王、諸佛世尊、常に、この言を説

【大王】以下の語は虚空に聞ゆる聲
 父王頻婆娑羅の語
 として説けるもの

きたまはく、二つの白法あり、能く衆生をたすく。ひとつには慙、ふたつには愧なり。慙はみづから罪を作らず、愧は他を教へて作さしめず。慙は内に自ら羞恥す、愧は發露して人に向ふ。慙は人に羞づ、愧は天に羞づ。これを慙愧と名づく。無慙愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす。慙愧あるが故に、則ち能く父母師長を恭敬す。慙愧あるが故に、父母兄弟姉妹あることを説く。善き哉、大王、つぶさに慙愧あり。至王のたまふところの如し、能く治する者無けん。大王まさに知るべし。迦毗羅城に淨飯王の子姓は瞿曇氏、悉達多となづく。師無くして覺悟せり、自然にして、阿耨多羅三藐三菩提をえたりき。至乃これ佛世尊なり。金剛智ましくして、能く衆生の一切惡罪を破せしむ。もし能はずと言はば、このことわりあること無けん。至大王、如來に、弟提婆達多といふ人あり、衆僧を破壊し、佛身より血を出し、蓮華比丘尼を害す。三逆罪を作れり。如來爲に種々の法要を説きたまふに、その重罪をして、すなはち微薄なることを得しめたまふ。この故に、如來を大良醫とす。六師にはあらざるなり。至乃

大王、一逆を作れば、すなはちつぶさにかくの如きの一罪を受く。もし二逆罪を造らば則ち二倍ならん。五逆つぶさならんば、罪も亦五倍ならん。大王、今定めて知んぬ、王の惡業、必ず免がるゝことを得じ。やゝ願はくば大王、速かに佛のみもとにまうづべし。佛世尊を除きて餘は、能く救ふこと無けん。我今、汝を慙むがゆゑに相勸めて導くなり。その時に大王、この語を聞きじりて、心に怖懼を懷けり、身を舉げて戰慄す。五體震動して

【邪見六臣】 不妥
當なる認識。

【有爲】 造作されたるもの、和合さるるもの、和合する語。即ち衆縁和合によりて成立されたる法をいふ。【無爲】 有爲の對概念、縁生關係を超えたる法をいふ。有爲が生滅の法なるに對して無爲は不生不滅の法なり。

芭蕉樹の如し。仰いで答へていはく、天これ誰とかせん、色像を現せずして、たゞ聲のみあることは。大王、われはこれなんぢが父頻婆娑羅なり。なんぢ今、まさに耆婆の所説に隨ふべし、邪見六臣のことばに隨ふことなかれと。時に、聞きをはりて、悶絶躡地す。身の瘡増劇して、臭穢なることさきよりもまされり。もて冷藥をして塗り、瘡を治療すといへども、瘡あつかはし。毒熱たゞ増して損することなし。抄出

大臣日月稱と名づく、富闍那と名づく
藏徳、末伽梨拘舍離子と名づく

一の臣あり名づけて實徳といふ。那闍耶毗羅臈子と名づく
一の臣あり悉知義と名づく、阿耆多翅金欽婆羅と名づく

大臣名づけて吉徳と曰ふ、婆蘇仙
尼乾陀若提子と名づく、加羅鳩駄迦旃延

又いはく、「善男子我が言ふところの如し、阿闍世王のために涅槃に入らず。かくの如きの密義、汝いまだ解すること能はず。何をもての故に。われ爲といふは、一切凡夫なり。阿闍世王とは、普く、一切五逆を造る者におよぶなり。また爲は即ちこれ、一切有爲の衆生なり。われ終に、無爲の衆生のために、世に住せず。何をもての故に。それ無爲は、衆生にあらざるなり。阿闍世は、即ちこれ、煩惱等を具足せる者なり。また爲は即ちこれ佛性を見ざる衆生なり。もし佛性を見ん者には、われ終に、ために久しく世に住せず。何を

【世の八法】利衰
毀譽稱譏苦樂。

もてのゆゑに、佛性をみるものは衆生にあらざるなり。阿闍世は即ちこれ、一切未だ阿耨多羅三藐三菩提心を發せざる者なり。乃至また爲は名づけて佛性とす。阿闍は名づけて不生とす、世は怨に名づく。佛性を生ぜざるをもてのゆゑに、則ち、煩惱の怨生ずるが故に、佛性を見ざるなり。煩惱を生ぜざるをもての故に、則ち佛性を見る。佛性を見るをもての故に、則ち大般涅槃に安住することを得。之を不生と名づく。この故に、名づけて阿闍世とす。善男子、阿闍は不生に名づく、不生は涅槃と名づく。世は世法に名づく、爲は不汚に名づく。世の八法をもて、汚されざるところなるが故に、無量、無邊、阿僧祇劫に涅槃に入らず。この故にわれ阿闍世王の爲に、無量億劫に涅槃に入らずといへり。善男子、如來の密語不可思議なり、佛法衆僧また不可思議なり、菩薩摩訶薩また不可思議なり、大般涅槃經また不可思議なり。そのときに世尊、大悲導師、阿闍世王のために、月愛三昧に入れり。三昧に入り已りて大光明を放つ。その光清涼にして、往きて王の身を照したまふに、身の瘡即ち癒えぬ。至王のいはまく、耆婆、彼は天中天なり。何の因縁をもて、この光明を放ちたまふぞや。耆婆答へていはく、大王、今この瑞相は王のために及ぼすに相似たり。先に、世に良醫の身心を療治するもの無しと言ふが故に、この光を放ちて、先づ王の身を治す。然して後に、心におよぶ。王のいはまく、耆婆、如來、世尊亦念ぜんらるゝや。耆婆答へてまうさく、譬へば、一人にしかも七子あらん。この七子の中に、病に遇へば、父母の心、平等ならざるにあらざれども、然も病子に於て、心則ち偏

【六住】菩薩修道の段階十住に於ける前六位の菩薩。

へに重きが如し。大王、如來も亦しかなり。もろ／＼の衆生に於て、平等ならざるにあらざれども、然も罪者において、心則ち偏へに重し。放逸の者に於て、佛すなはち慈悲を生ず。不放逸の者には、心則ち放捨す。何等をか名づけて、不放逸の者とする。いはく、六住の菩薩なりと。大王、諸佛世尊は、もろ／＼の衆生に於て、種姓、老少、中年、貧富、時節、日月、星宿、工巧、下賤、僮僕、婢使をみそなはさず、たゞ、衆生の善心あるものをみそなはさず。もし善心あれば、すなはち慈念したまふ。大王、まさに知るべし、かくの如きの瑞相は、即ちこれ、如來月愛三昧に入りて、放つところの光明なりと。王、即ち問うて言く、何等をか名づけて、月愛三昧とすると。耆婆、答へて言く、譬へば、月の光能く一切の優鉢羅華をして、開敷し鮮明ならしむるが如し。月愛三昧も亦復是の如し、能く衆生をして、善心開敷せしむ。この故に、名づけて月愛三昧とす。大王、譬へば月の光能く一切路を行く人の心に、歡喜を生ぜしむるが如し。月愛三昧も亦復かくの如し、能く涅槃道を修習せん者の心に歡喜を生ぜしむ。この故に亦月愛三昧と名づく。乃諸善のなかの王なり、甘露味とす。一切衆生の愛樂する所なり。この故に、また月愛三昧となづく。至乃

その時に佛、もろ／＼の大衆に告げてのたまはく、一切衆生、阿耨多羅三藐三菩提に近づく因縁の爲には、善友を先とするにはしかず。何をもての故に。阿闍世王、若し耆婆の語に隨順せずば、來月七日に必定して命終して、阿鼻獄に墮せん。この故に近因は、善友

【舍婆提】 舍婆提は舍衛城とも譯さる。拘薩羅國の都城。琉璃王は國王波斯匿の王子、王位を奪ひ、釋迦族の居城迦毘羅衛を攻めその一族を虐殺すと傳へらる。

にしくことなし。阿闍世王、復前路に於て聞く、舍婆提の毘琉璃王、船に乗じて海邊に入りて災して死す。瞿伽離比丘、生身に地に入りて阿鼻獄に至れり。須那利多是種々の惡を作りしかども、佛所に到りて、衆罪消滅しぬと。

この語を聞きをばりて、耆婆に語りていはまく、吾、今かくの如きのふたつの語を聞くといへども、猶未だ審かならず。定めて、汝來れ、耆婆、われ汝と同じく、一象に載らんとおもふ。設ひ我まさに阿鼻地獄に入るべくとも、翼はくば、汝捉持して、われをして墮

さしめされ。何をもての故に。吾昔、曾て聞きき。得道の人は、地獄に入らずと。至云何ぞ、説きて言はん、さだめて地獄に入ると言はん。大王、一切衆生の所作の罪業に凡そ二種あり。一には輕、二には重なり。もし心と口とに作るは、即ち名づけて輕とす、身と口

と心とに作るは、則ち名づけて重とす。大王、心に念ひ、口に説きて身に作さざれば、得るところの報、輕なり。大王、むかし口に殺せよと勅せず、足を削れと言へりき。大王、もし侍臣に、立てる時、王の首を斬れと勅せんに、坐せる時に、すなはち斬るとも、猶罪を得じ。況んや、王勅せず、云何ぞ罪を得ん。王、もし罪を得ば、諸佛世尊もまた罪を得

たまふべし。何をもてのゆゑに。汝が父先王頻婆娑羅、つねに諸佛に於て、もろ／＼の善根を種ゑたりき。この故に、今日王位に居することを得たり。諸佛、若しその供養をうけ

たまはずんば、則ち王とならじ。もし、王とならずんば、汝、則ち國のために害を生ずることをえざらん。もし汝、父を殺して、まさに罪あるべくは、我等諸佛亦罪ましますべ

し。もし諸佛、世尊、罪を得たまふこと無くば、汝獨り、云何ぞしかも罪を得んや。大王、頻婆娑羅、むかし惡心ありて、毘富羅山にして、遊行して、鹿を射獵して、曠野に周徧しき。悉く得るところなし。たゞひとり仙の五通具足せるを見る。見已りて、即ち瞋恚、惡心を生じき。我今、遊獵して得ざる所以は、正しくこの人駈り逐うて去らしむるに坐ると。即ち、左右に勅して、これを殺せしむ。その人終に臨んで瞋を生ず。惡心ありて、神通を退失して、しかも誓言を作さく、われ實に辜なし、汝心口を以て、横さまに、戮害を加ふ。われ來世に於て、亦まさにかくの如く還りて、心口をもて、汝を害すべしと。時に、王聞き已りて、すなはち悔心を生じて、死屍を供養しき。先王かくの如く、尙輕く受くることを得て、地獄に墮ちず。況んや、王しからずして、まさに地獄の果報を受くべけんや。先王、自ら作りて還りて、自らこれを受く、い何ぞ王をして、しかも殺罪を得しめん。王の言ふ所の如く、父の王つみなしとは、大王云何ぞ無しと云ふや。それ罪あれば、すなはち罪報あり。惡業無くば、則ち罪報無けん。汝が父先王、もし罪あることなくば、云何ぞ報あらん。頻婆娑羅、現世の中に於て、亦善果、及び惡果を得たり。このゆゑに、先王亦復不定なり。不定なるを以ての故に、殺も亦不定なり。殺不定ならば、いかにしてか、定めて地獄に入らんと言はん。

大王、衆生の狂惑に凡そ四種あり。一には貪狂、二には藥狂、三には咒狂、四には本業縁狂なり。大王、わが弟子の中にこの四狂あり。多く惡を作るといへども、我終にこの人

【不定】自性の決定性の否定、即ち無自性無決定なることをいふ。
【本業】過去の業を因として生起せる狂惑。

戒を犯せりと記せず。この人の所作、三惡に至らず。もし還りて、心を得ば亦犯と言はず。王もと國を貪して、これ父の王を逆害す。貪狂の心をもてために作せり、いかんぞ罪を得ん。大王、人の耽醉してその母を逆害せん。既に、醒悟しをはりて、心に悔恨を生ぜしが如し。まさに知るべし、この業亦報を得じ。王いま貪醉せり。本心の作せるにあらず。若し本心にあらずば、云何ぞ罪を得んや。大王、たとへば幻師の、四衢道のほとりにして、種種の男、女、象、馬、瓔珞、衣服を幻作するが如し。愚癡の人は、おもて眞實とす、有智の人は眞にあらずと知れり。殺も亦かくの如し。凡夫は實とおもへり、諸佛世尊、それ眞にあらずと知らしめせり。大王、譬へば山谷の響の聲の如し。愚癡の人は、これを實の聲とおもへり、有智の人は、それ眞にあらずと知れり。殺も亦かくの如し。凡夫は實とおもへり、諸佛世尊は、それ眞にあらずと知らしめせり。大王、人怨ありて詐り來りて、親附するがごとし。愚癡の人は、おもて眞實とす、智者は了達して、すなはち、それ虚しく、詐れりと知らん。殺もまたかくの如し。凡夫は實とおもふ、諸佛世尊は、それ眞にあらずと知らしめせり。大王、人鏡を執りて、自ら面像を見るが如し。愚癡の人は、おもて眞の面とす、智者は了達して、それ眞にあらずと知れり。殺も亦かくの如し。凡夫は實とおもふ、諸佛世尊は、それ眞にあらずと知らしめせり。大王熱のときの炎の如し。愚癡の心とは、これはこれ水とおもはん、智者は了達して、それ水にあらずと知らん。殺も亦かくの如し。凡夫は實とおもはん、諸佛世尊は、それ眞にあらずと知らしめせり。大王、

【乾闥婆城】化現の城。蜜氣のこ
とをいふ。佛教經
論に於て、超越的
實在性の否定、即
ちその主觀的表象
的實在なることの
譬喩として屢用ひ
らる。

【非有非無】有無
は存在の實在性に
就ての判斷、隨つ
て非有非無は實在
論の思惟の否定、
故に非有非無而有
は觀念的存在性を
意味す。
【空見】空、有、
有有、無有はもの
の存在に就ての判
斷の四形式を表す
もの、根本的には空
も、根本的には空
見は實在性拒斥を
表す見解、有見は
是認を表す見解。
【常見等】常、無
常、常常等は空、有
有有と同一の形式

乾闥婆城の如し。愚癡の人は、おもうて眞實とす、智者は了達して、それ眞にあらすと知
れり。殺も亦かくの如し。凡夫は實ともおへり、諸佛世尊は、それ眞にあらすと了知した
まへり。大王、人の夢の中に五欲の樂を受くるが如し。愚癡の人は之を謂うて實とす、智
者は了達して、それ眞にあらすと知れり。殺も亦かくの如し。凡夫は實とおもへり、諸佛
世尊は、それ眞にあらすと知ろしめせり。大王、殺法、殺業、殺因、殺果、及び解脫、我
皆これをさとれり、則ち罪あることなけん。王殺を知るといへども、云何ぞ罪あらんや。
大王、譬へば人主ありて、酒を典さどれりと知れども、もしそれ飲まざれば、則ち亦醉は
ざるがごとし。復火と知るといへども、燒燃せず。王も復かくの如し。復殺を知るといへ
ども、云何ぞ、罪あらんや。大王、もろ／＼の衆生ありて、日の出づる時に於て、種種の
罪を作る。月の出づる時に於て復劫盜を行ぜん。日月出でざるに則ち罪を作らず。日月に
よりて其をして罪を作らしむと雖も、この日月實に罪を得ず。殺も亦是の如し。至大王、
譬へば涅槃は有にあらす無にあらすして、而も亦是有なるが如し。殺も亦是の如し。非有
非無なりといへども、而も亦これ有なり。慙愧の人は則ち非有とす。無慙愧の者はすなは
ち非無とす。果報を受くる者、これを名づけて有とす、空見の人は、すなはち非有とす。
有見の人は、則ち非無とす、有々見の者は、亦名づけて有とす。何をもての故に。有々見
の者は、果報を得るが故に、無有見の者は、則ち果報なし。常見のひとは、則ち非有とす、
無常見の者は、則ち非無とす。常々見の者は無とすることを得ず。何をもての故に、常々

【伊蘭子】大哉科
たうごま属の一
種その實に有厚
物質を含有せる
より轉じて惡臭あ
る草となし、經
典文學には常に
梅檀の香氣と對
せらる。

見の者は、惡業の果あるが故に、この故に常常見の者は無とすることゝせず。この義をも
ての故に、非有非無なりといへども而も亦これ有なり。大王、それ衆生は出入の息に名づ
く。出入の息を斷つ、かるがゆゑに名づけて殺とす。諸佛俗に隨へて、亦説きて殺とす。
乃至世尊、我世間を見るに伊蘭子より伊蘭樹を生ず、伊蘭より梅檀樹の生ずる者を見ず。我
今、初て伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る。伊蘭子はわが身これなり、梅檀樹は即ちこれ
わが心の無根の信なり。無根は、われ初め如來を恭敬せんことを知らず、法僧を信ぜず。
これを無根と名づく。世尊、われもし、如來世尊に遇はずば、まさに無量阿僧祇劫に於て、
大地獄に在りて、無量の苦を受くべし。我今、佛を見たてまつる。この佛を見たてまつり
て、得る所の功德をもて、衆生の煩惱惡心を破壞せしむと。佛のたまはく、大王よきか
なよきかな、われ今、汝必ず能く衆生の惡心を破壞することを知れりと。世尊、もし我
密かに、能く衆生のもろくの惡心を破壞せば、我常に、阿鼻地獄に在りて無量劫の中に、
もろくの衆生の爲に、苦惱を受けしむとも、もて苦とせず、その時に、摩伽陀國の無量
の人民、悉く、阿耨多羅三藐三菩提心をおこしき。かくの如き等の無量の人民大心を發
するをもての故に、阿闍世王、所有の重罪、即ち微薄なることを得しむ。王及び夫人、後
宮、采女、悉く皆同じく阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。その時に阿闍世王、耆婆に語
りて言く、耆婆、我今未だ死せずして已に天身を得たり。短命を捨て、しかも長命を
得、無常の身を捨て、しかも常身を得たり。もろくの衆生をして、阿耨多羅三藐三菩

【第一義】 第一諦
第一義諦とも譯さる。俗諦の方便の施設の眞理に對してそれ自身普遍妥當なる眞理をいふ

【無因亦無果】 涅槃は因果の範疇の適用さるる領域、即ち存在の世界の彼岸として證さるべきもの、隨つて生滅を全然超越せる所のもの。

提心を發せしむ。乃至諸佛の弟子この語を説き已りて、即ち種々の寶幢を以て、乃ち種々の寶幢を以て、至復偈頌を

實語甚だ微妙にして、句義に於て善巧なり。甚深秘密の藏、衆のための故に顯示す

所有廣博の言葉のための故に略して説く。かくの如きの語を具足して、よく衆生を療す

もしもろくの衆生ありて、この語を聞くことを得る者は、若しは信及び不信、定めて

この佛説を知らん

諸佛常に轉語をもて、衆のためのゆゑに譬を説きたまふ。靈語及び轉語、皆第一義に歸

せん

この故に我いま、世尊に歸依したてまつる

如來の語は一味なること、猶大海の水の如し、これを第一諦と名づく。かるがゆゑに無

義の語なし

如來今説きたまふところの、種種無量の法、男女大小、聞きて同じく第一義をう

む因亦無果なり、無生亦無滅なり。これを大涅槃と名づく。聞く者諸結を破す

如來一切の爲に、常に慈父母と作りたまへり。まさに知るべし、もろくの衆生は、皆

これ如來の子なり

世尊の大慈悲は、衆の爲に苦行を修したまふ。人の鬼魅にくるはされて、狂亂して所爲

多きが如し

我今佛を見たてまつることを得たり。得る所の三業の善、願はくばこの功徳を以て、無上道に廻向せん

我今、供養する所の、佛法及び衆僧、願はくばこの功徳を以て、三寶常に世に在しません

我今まさに獲べき所の、種種のもろくの功徳、願はくばこれを以て、衆生の四種の魔を破壊せん

われ悪知識に遇ひて、三世の罪を造作せり。今、佛前にして悔ゆ、願はくば後に更に造ることなからん

願はくばもろくの衆生、等しく悉く菩提心をおこし、心を繋けて、常に十方一切佛を思念せん

復願はくばもろくの衆生、永くもろくの煩惱を破し、了々に佛性を見ること、猶、妙徳等のごとくならん

その時世尊、阿闍世王を讀めたまはく、善き哉善き哉、若し人ありて、能く菩提心をおこさん。まさに知るべし、この人は、則ち諸佛大衆を莊嚴すとす。大王、汝昔、已に毘婆尸佛に於て、初て阿耨多羅三藐三菩提心をおこしき。これより已來、わが出世に至るまで、その中間に於て、未だ曾て、復地獄に墮して苦を受けず。大王、まさに知るべし、菩提の心、いまだかくの如きの無量の果報あり。大王、今より已往に、常にまさに菩提の心

【三匣】右手を中央に向けつつ對者を三たび右旋すること。尊敬を表示する禮法。阿闍世太子。【善見】阿闍世太子。

【曼陀羅華】天妙華。【三十三天】切利天ともいふ。欲界に於ける神の世界の第一。【我我所】我は常一主宰の意味なるも、佛典に於ては一般にもの實體を意味す。即ち常在とさる。我所の實嚴密には一切のものなり。そのもの實體なる私の所有なることを意味す。

を勤修すべし。何をもての故に。この因縁に従ひて、まさに無量の惡を消滅することを得べきが故なりと。その時阿闍世王、及び摩伽陀國の人民、擧りて座よりして起ちて、佛を遊ること三匣して、辭退して宮に還りにき」と。已上抄出
又言く、善男子、羅闍祇の王頻婆沙羅、その王の太子名づけて善見と曰ふ。業因縁の故に、惡逆の心を生じて、その父を害せんとするに、しかも便を得ず。その時に、惡人提婆達多、亦過去の業因縁によるが故に、復我が所に於て、不善の心を生じて、われを害せんとす。即ち五通を修して、久しからずして、善見太子と共に親厚たることを獲得せり。太子のための故に、種々の神通の事を現作す。門にあらざるより出で、門よりして入り、門よりして出で、門にあらざるよりして入る。あるときは、象、馬、牛、羊、男子の身を示現す。善見太子見をはりて、すなはち愛心、喜心、敬心の心を生ず。これを木と爲るがゆゑに、きびしく種々の供養の具をまうけて、しかもこれを供養す。またまうしてまうさく、大師聖人、われいま、曼陀羅華を見んとおもふと。ときに提婆達多、すなはち三十三天に往きたりて、彼の天人にしたがひて、しかもこれを求索するに、その福盡くるが故に、すべて與ふる者なし。既に華を得ず。この思惟を作さく、曼陀羅樹は我我所無し、もしみづから取らんに、まさに何の罪かあるべき。すなはち、すゝんで取らんとするに、すなはち神通を失へり。還りて己身を見れば、王舍城に在り。心に慙愧を生じ、また善見太子を見ること能はず。復この念を作さく、我今、まさに如來のみもとに往至して、大衆を求索

【瞿曇】 喬答摩と
も音譯さる。佛陀
の姓。

すべし。佛もしゆるさば、われまさに意に隨ひて、をしへてすなはち、舍利弗等に詔勅すべしと。そのときに提婆達多、すなはち我がところに来りて、かくのごときの一語を作さく、や、願はくば如來、この大衆をもて、われに付囑せよ。われまさに、種々に法を説きて教化して、それをして調伏せしむべしと。われ癡人にはく、舍利弗等、聰明大智にして、世の信伏する所なり。われ猶大衆をもて付囑せず。いはんや汝癡人、唾を食ふ者をやと。時に提婆達多、復我が所に於て、ます／＼惡心を生じて、是の如きの言をなさく、瞿曇、汝今復大衆を調伏すといへども、勢亦久しからじ、まさに磨滅を見るべしと。この語を作し已るに、大地、即時に六反震動す。提婆達多、すなはちの時に地にたふれて、その身の邊より大暴風を出して、もろ／＼の塵土を吹きて、しかもこれを汚塗す。提婆達多惡相を見已りて、またこの言を作さく、若し我がこの身、現世に、必ず阿鼻地獄に入らば、我かならずまさに、かくの如きの大怨を報ゆべしと。時に提婆達多、すなはち起ちて、善見太子の所に往至す。善見見已りて、即ち問ふ、聖人何が故ぞ、顔容憔悴して、憂の色あるやと。提婆達多いはく、われ常にかくの如し、汝知らずやと。善見答へていはく、願はくばそのこゝろを説け、何の因縁ありてしかるか。提婆達多のいはく、われ今汝がために、極めて親愛を成す。外人汝を罵りてもて非理とす。われこの事を聞くに、豈憂へざること。をえんや。善見太子復この言を作さく、國の人云何ぞ、我を罵辱すると。提婆達のいはく、國の人汝を罵りて未生怨とすと。善見復いはく、何が故ぞ、我を名づけて未生怨とする、

【婆羅留枝】
と譯さる。

折指

誰か此名を作すと。提婆達のいはく、汝未だ生れざりしとき、一切相師皆この言を作さく、この兒生れ已りて、まさにその父を殺すべしと。このゆゑに外人皆悉く、汝を號して未生怨とす。一切内の人、汝が心を護るが故に、いひて善見とす。毗提夫人この語を聞きをはりて、既に汝の身を生むとして、高樓に上り、これを地に棄て、汝が一の指をやぶれり。この因縁を以て、人復汝を號して、婆羅留枝とす。われこれを聞き已りて、心に愁憤を生じて、しかも復汝に向ひて、これを説くこと能はずと。提婆達多、かくの如き等の種々の惡事を以て、教へて父を殺せしむ。若し汝が父死せば、我亦能く瞿曇沙門を殺せんと。善見太子ひとりの大臣に問はく、名づけて兩行と曰ふ。大王何が故ぞ、我に字を立てんとするに未生怨を作ると。大臣即ちためにその本末を説く。提婆達の所説の如くして異なし。善見聞きをはりて、即ち大臣とともに、その父の王をとりて、これを城のほかに閉ぢて、四種の兵を以て、しかもこれを守衛せしむ。毗提夫人、この事を聞き已りて、即ち王の所に至る。時に王を守りて人をして遮りて、入ることを聽さず。その時に夫人、瞋恚の心を生じて、すなはちこれを呵罵す。時に、もろくの守人即ち太子に告ぐらく、大王の夫人、父の王を見んとおもふをばいぶかし。ゆるさんや、いなやと。善見聞き已りて、復瞋嫌を生じて、すなはち母のところへ往きて、すゝんで母の髪を牽きて、刀を抜きて研らんとす。その時に耆婆白していはく、大王、國をたもちてより已來、罪極めて重しといへども、女人におよばず、況んや所生の母をやと。善見太子この語を聞き已りて、耆婆の爲の故に、

【須陀洹】須陀婆羅王は須陀洹の聖者。佛敎に於て聖者の位を四種に分つ須陀洹は其第一位にして、三界を超えて初めて聖者群に入れる位、故に預流果若しくは初果とも譯さる。

【涅槃】この場合の涅槃の語は佛陀の入滅の意味にとらる。

すなはち放捨す。遮りて大王の衣服、臥具、飲食、湯藥を斷つ。七日を過ぎりて、王の命も便ち終りぬと、善見太子、父の喪を見已りてまさに悔心を生ず。兩行大臣、復種の惡邪の法を以て、しかも爲にこれを説く。大王一切の業行都べて、罪あること無し、何が故ぞ、今しかも悔心を生ずるやと。善婆復いはく、大王まさに知るべし、かくの如きの業は、惡業二重なり。一には父の王を殺す、二には須陀洹を殺せり。かくの如き罪は、佛を除きて、更に能く除滅したまふこと無けん。善見王の言はく、如來は清淨にして穢濁ましますこと無し、我等罪人、云何してか見たてまつることを得ん。善男子、我この事を知れり。阿難に告げたまはく、三月を過ぎりて、吾まさに涅槃すべきが故に。善見聞きをはりて、即ち我が所に來れり。われたために法を説きて、重罪をして薄きことを得しめ、無根の信を獲しむ。善男子、わがもろくの弟子、この説を聞き已りて、我がこゝろをさとらざるが故に、この言を作さく、如來定めて、畢竟涅槃と説きたまへりと。善男子菩薩に二種あり。一には實義二には假名なり。假名の菩薩、我三月ありて、まさに涅槃に入るべしと聞きて皆退心を生じて、しかもこの言を作さく、若しそれ如來無常にして、住したまはずば、我等いかゞせん。この事の爲の故に無量世の中に大苦惱を受けき。如來世尊は、無量の功德を成就し、具足したまへるも、なほかくの如きの死魔を壞すること能はず、況んや我等がともがら、まさに能く壞すべけんやと。善男子、この故に、我かくの如きの菩薩の爲に、しかもこの言を作さく、如來は常住にして、變易あることなし。我がもろく

【三機】 誘大乘と
五逆罪と闡提。

【二種の重罪】 五
逆は道德的過失に
して、誹法は客觀
的規範の否認。前
者は後者を根據と
して成立するが故
に法の拒否は逆惡
よりも重罪とせら
る。

の弟子、この説を聞き已りて、我が意をさとらざれば、定んでいはく、如來は終に、畢竟
じて涅槃にいらたまはず」と。抄出

こゝを以て、今、大聖の眞説に據るに、難化の三機、難治の三病に、大悲の弘誓を憑
み、利他の信海に歸すれば、これを矜哀して治す。これを憐愍して療したまふ。喻へ
ば、醍醐の妙藥の一切の病を療するがごとし。濁世の庶類、穢惡の群生、金剛不壞の
眞心を求念すべし。本願醍醐の妙藥を執持すべきなり。知るべし。

それ諸大乘に據るに、難化の機を説けり。今『大經』には、唯除五逆誹謗正法と云ひ、
或は、唯除造無間惡業誹謗正法及諸聖人と云へり『觀經』には、五逆の往生を明
して、誹法を説かず、『涅槃經』に、難治の機と病とを説けり。これらの眞教云何が思
量せんや。報へていはく、

『論の註』に曰く、「問うて曰く、『無量壽經』に言はく、往生を願ぜんもの皆往生を得しむ、
唯五逆と誹謗正法とを除く。『觀無量壽經』に五逆十惡諸の不善を具せるもの、亦往生
を得と言へり。この二經云何が會せんや。答へて曰く、一經には二種の重罪を具するを以
てなり。一には五逆、二には誹謗正法なり。この二種の罪を以ての故に、このゆゑに往生
を得ず。一經には但十惡五逆等の罪を作ると言うて、正法を誹謗すと言はず。正法を誹せ
ざるを以ての故に、この故に生ずることを得しむ。問うて曰く、たとひ一人は五逆罪を具し
て而も正法を誹謗せざれば、經に生ずることを得と許す。復一人ありて、但正法を誹謗し

【經】 大品般若經

て而も五逆の諸の罪無き者往生を願せば、生ずることを得んや、いなや。答へて曰く、但正法を誹謗せしめて、更に餘の罪無しといふとも、必ず生ずることを得じ。何を以てか、これと言ふとならば、「經」に言く、五逆の罪人、阿鼻大地獄の中に墮して、具さに一劫の重罪を受く。誹謗正法の人、阿鼻大地獄の中に墮して、この劫若し盡くれば、復轉じて、他方の阿鼻大地獄の中に至る。かくの如く、展轉して百千の阿鼻大地獄をふ、佛、出づることを得る時節を記したまはず。正法を誹謗する罪極重なるを以ての故なり。又正法は即ちこれ佛法なり。この愚癡の人既に誹謗を生ず、いづくんぞ、佛土を願生する理あらんや。たとひ、但彼の安樂に生ぜんことを貪して生を願ぜんは、亦水にあらざる氷、烟無き火を求めんが如し。豈得ることわりあらんや。問うて曰く、何等の相か、これ誹謗正法なるや。答へて曰く、若し無佛、無佛法、無菩薩、無菩薩法と言はん。かくの如き等の見をもて、若しは心に自らさとり、若しは他に從ひて、その心を受けて決定するを皆誹謗正法と名づく。問うて曰く、かくの如き等の計は、これ己が事なり。衆生において、何の苦惱あればか、五逆の重罪に踰えんや。答へて曰く、若し諸佛菩薩、世間出世間の善導を説きて、衆生を教化するひとましまさば、豈、仁義禮智信あることを知らんや。かくの如き世間の一切善法、皆斷じ、出世間の一切賢聖、皆滅しなん。汝但五逆罪の重たることを知りて、しかも五逆罪の正法なきより生ずることを知らず。このゆゑに謗正法の人、その罪最重なり。問うて曰く、「業道經」に言く、業道は秤のごとし。重き者先づ牽く。「觀無量壽經」に言ふが

【繫業】業に因りて業報をうる、即ち倫理的因果の理説。
 【心に在り等】如何なる意識に依れるか、如何なる對象に作れるか、及びその態度が如何なる様態なるかに就て。

如し。人ありて、五逆十惡を造り、もろ／＼の不善を具せらん。惡道に墮して、多劫を遷歴して、無量の苦を受くべし。命終の時に臨んで、善知識の教へて、南無無量壽佛と稱せしむるに遇はん。かくの如き心を至して、聲をして絶えざらしめて、十念を具足すれば、すなはち、安樂淨土に往生することを得て、即ち大乘正定の聚に入りて、畢竟して不退ならん。三塗のもろ／＼の苦と永く隔つ。先牽くの義、理に於て如何ぞ。また曠劫より已來、つぶさにもろ／＼の行を造れる有漏の法は、三界に繫屬せり。但十念をもて阿彌陀佛を念じて、すなはち三界を出でば、繫業の義、復云何がせんとするや。答へて曰く、汝、五逆十惡の繫業等を重とし、下下品の人の、十念を輕として、罪の爲に牽かれて、先づ地獄に墮して三界に繫在すべしといはゞ今まさに義を以て、輕重の義を校量すべし。心に在り、縁に在り、決定に在り、時節の久近多少に在るにはあらざるなり。云何ぞ心に在る。彼の罪をつくる人は、自ら、虛妄顛倒の見に依止して生ず。この十念は、善知識の方便、安慰して、實相の法を聞かしたるに依りて生ず。一は實、一は虚なり。豈、相たくらぶることとをえんや。譬へば、千歳の闇室に、光若し暫くいたれば、すなはち明朗なるが如し。闇室に在ること千歳にして、しかも去らじと言ふことを得んや、これを在心と名づく。云何が縁に在る。彼の罪を造る人は、自ら妄想の心に依止し、煩惱虛妄の果報の、衆生に依止して生ず。この十念は、無上の信心に依止し、阿彌陀如來の方便、莊嚴、眞實、清淨、無量功德の名號に依りて生ず。たとへば、人ありて毒の箭を被りて、中るところ、箭を截

【有後心】無後有
 後は緊張不緊張、
 無間有間は純粹、
 不純粹。即ち第三
 決定はその主觀の
 態度による態様に
 就ての對比なり。

【業事成辨】往生
 の業の成立完成。

り骨をやぶるに滅除樂の鼓を聞けば、即ち箭ぬけ毒除くるが如し。『首楞嚴經』には、譬除と曰ふ。若し鬪戰の時にもて鼓に塗るに、鼓の聲を聞く者箭ぬけ毒除くるが如し。菩薩摩訶薩も亦復かくの如し。首楞嚴三昧に住して、その名を聞く者、三毒の箭自然に拔出す。豈彼の箭深く毒はげし。鼓の音聲を聞くとともに、箭を抜き毒を去ること能はじと言ふことを得べけんや。これを在縁と名づく。云何が決定にある。彼の罪を造る人は、有後心、有間心に依止して生ず、この十念は、無後心、無間心に依止して生ず。これを決定と名づく。三の議を校量するに、十念は重なり。重き者先づびきてよく三有を出づ。兩經一義ならくのみ。問うて曰く、幾の時をか名づけて一念とするや。答へて曰く、百一の生滅を一刹那と名づく、六十刹那を名づけて一念とす。この中に念と云ふは、この時節を取らざるなり。但阿彌陀佛を憶念して、若しは總相、もしは別相、所觀の縁に隨ひて、心に他相無くして、十念相續するを名づけて、十念とすと言ふなり。但名號を稱することも、亦復かくの如し。問うていはく、心もし他縁せば、これを攝して、還らしめて念の多少を知るべし。但し多少を知らば、復ひま無きにあらず。若し心を凝らし想をとどめば、復何に依りてか、念の多少を記することを得べきや。答へて曰く、經に十念といふは、業事成辨を明すならくのみ。必すしも須らく頭數を知るべからざるなり。蟪蛄春秋を知らず、伊蟲豈朱陽の節を知らんやと言ふが如し。知るものこれを言ふならくのみ。十念業成といふは、これ亦神に通ずる者これを言ふならくのみ。但念を積み、相續して他事を縁ぜざればすなはち罷みぬ。復何ぞかに念の頭數を知ることを須ひんや。若し必す知ることを須ひば、亦方便あり、必す

口授を須ひよ。これを筆點に題することを得ざれ」と。

光明寺の和尚のたまはく、「問うて曰く、四十八願の中の如きは、たゞ五逆と誹謗正法とを除きて往生を得しめず。今この『觀經』の下品下生の中には、誹謗を簡んで、五逆を攝せるは何のころかあるや。答へて曰く、この義仰いで、抑止門のなかに就きて解す。四十八願の中のごとき謗法五逆を除くは。しかるにこの二業、その障極重なり。衆生若し造れば直ちに阿鼻に入りて、歷劫周章して出づべきによしなし。但し如來、それこのふたつの過を造らんを恐れて、方便して止めて往生を得ずとのたまへり、亦これ攝せざるにはあらざるなり。又下品下生の中に、五逆を取りて謗法を除くことは、それ五逆は已に作れり。捨て、流轉せしむべからず。還りて大悲をおこして、攝取して往生せしむ。然るに謗法の罪は未だつくらず、またとめて、若し謗法を起さば、即ち生ずることをえじのたまふ。これは未造業に就て解するなり。若し造らば、還りて攝して生ずることをえしめん。かしこに生ずることを得といふとも、華合して多劫を運ん。これ等の罪人、華の内にある時、三種の障あり。一には佛、及びもろくの聖衆を見ることを得じ、二には正法を聽聞することを得じ、三には麻事供養を得じ。これを除きて已外は、更にもろくの苦なけん、『經』に云く、猶比丘の三禪の樂に入るがごときなり。知るべし。華の中に在りて、多劫聞けずといふとも、阿鼻地獄の中にして、長時永劫に、もろくの苦痛を受けんに勝れざるべけんや。この義、抑止門に就て解しをはんぬ」と。

【華合して等】淨土の華中に多劫をふることを觀經に出づ、又佛法を見聞し得ざること大經に説かる。

【若し等】以下永
 觀の撰にかゝる往
 生拾因の衆罪消滅
 章の引用文。
 【淄州】淄州の慧
 沼。支那法相の學
 匠。
 【恩田】恩田は父
 母、福田は佛陀及
 び僧伽。

又いはく、「永く譏嫌を絶ちて、等しくして憂惱無し、人天善惡皆往くことを得。かしこに到りて殊なること無し、齊同不退なり。なんのこゝろありてか然るとならば、いまし彌陀の因地にして、世饒王佛のみもとにして、位を捨て家を出で、即ち悲智の心をおこして、廣く四十八願を弘めたまひしによりてなり。佛願力を以て、五逆と十惡と罪滅し、生ずることを得しむ。謗法闍提廻心すれば皆往く。」抄

五逆と言ふは、若し淄州に依るに、五逆に二あり。一には三乘の五逆。いはく、一には、ことさらに思うて父を殺す。二には、ことさらに思うて母を殺す。三には、ことさらに思うて羅漢を殺す。四には、倒見して和合僧を破す。五には惡心をもて、佛身より血を出す。恩田に背き、福田に違するを以てのゆゑに、これを名づけて逆とす。この逆を執する者は身やぶれ命終へて、必定して無間地獄に墮して、一大劫の中に無間の苦を受けん。無間の業と名づく。また「俱舍論」の中に、五無間の同類の業あり。彼の頌に云はく、母、無學尼を汚す。同類。住定の菩薩同類。及び有學無學を殺す。同類。僧の和合縁を奪ふ。破僧罪のまとは破壊する。佛身出血の同類。二には、大乘の五逆。「薩遮尼乾子經」に説くが如し。一には、塔を破壊し經藏を焚燒する、および、三寶の財物を盗用する。一には、三乘の法を誘りて聖教にあらずと言ひて障破留難し、隱蔽覆藏する。三には、一切出家の人若しは戒、無戒、破戒のものを打罵し、呵責して過を説き、禁閉し、還俗せしめ、驅使、偵調し、斷命せしむる。四には、父を殺し、母を害し、佛身より血をいだし、和合僧を破し、

阿羅漢を殺す。五には謗して因果無く長夜に常に十不善業を行するなり。」「彼の『經』に云く、一には不善の心をおこして獨學を殺害する、これ殺生なり。二には羅漢尼を姪する、これを邪行といふなり。三には所施の三寶物を侵損する、これ不與取なり。四には倒見して和合僧衆を破する、これ虛誑語なり」出略。

顯淨土眞實信文類三

【必至滅度の願】

第十一願。滅度は涅槃の譯語、生滅の存在を滅し度せる彼岸の世界を意味し、その自證は佛教の實踐道の究極の目的とさる。

【難思議往生】

經往生の雙樹林下往生及び彌陀經往生の難思議往生に對して大經往生といはる。前者の方便化する眞實報上往生その難思議といはれ眞實といはるは往生の因果の所謂選擇本願、不可思議の願海なるが故なり。即ち念佛往生の願因に依りて必至滅度の願果を得る、これを大經の宗とす。故にまた大經往生といふ。

【心行】

信と行。【正定聚】 證果の完成の必然的決定必ず大涅槃に至る。

顯淨土眞實證文類 四

必至滅度の願 難思議往生

謹んで眞實證をあらはさば、則ちこれ、利他圓滿の妙位、無上涅槃の極果なり。即ちこれ必至滅度の願よりいでたり、また證大涅槃の願と名づくるなり。

しかるに、煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、即ちのときに、大乘正定聚のかずにいるなり。正定聚に住するがゆゑに、必ず滅度にいたる。

かならず滅度にいたるは即ちこれ常樂なり、常樂はすなはちこれ畢竟寂滅なり、寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり、無上涅槃はすなはちこれ無爲法身なり、無爲法身はすなはちこれ實相なり、實相はすなはちこれ法性なり、法性はすなはちこれ眞如なり、

眞如はすなはちこれ一如なり。然れば、彌陀如來は如より來生して、報、應、化種々の身を示現したまふなり。

必至滅度の願文

『大經』にのたまはく、「たとひわれ佛をえたらんに、國のうちの人天、定聚に住し、かならず滅度にいたらずば正覺をとらじ」と。

愚禿釋親鸞集

べき身となる位を意味し邪聚及び不定聚に對する語、不退轉、必定、等正覺の如き皆同義の語なり。

【常樂】一般に常樂、我、淨は大涅槃の内徳を表すもの【如】如は一如、眞如なり。

『無量壽如來會』にのたまはく、「もしわれ成佛せんに、くにのうちの有情、もし決定して等正覺を成じ、大涅槃を證せずば菩提をとらじ」と。

願成就の文

『經』にのたまはく、「それ衆生ありて、かのくにに生ずるものはみな悉く正定の聚に住す。所以はいかん。かの佛國のうちには、もろくの邪聚および不定聚なければなり」と。

またのたまはく、「かの佛國土は、清淨安穩にして微妙快樂なり、無爲泥洹の道にちかし。それ諸の聲聞、菩薩、天人、智慧高明にして神通あきらかに達せりと、ことごとく同じく一類にして、かたち異なるかたちなし。たゞし、餘方に因順するがゆゑに、人天の名あり、顔貌端正にして世にこえて希有なり。容色微妙にして、天にあらず人にあらず、みな自然虚無の身、無極の體をうけたるなり」と。

またのたまはく、「かのくにの衆生、もし當にうまれん者、みなことごとく無上菩提を究竟し、涅槃のところに到らしめん。なにをもてのゆゑに。もし邪定聚および不定聚は、かの因を建立せることを了知すること能はざるがゆゑなり」と。

已上要抄す

『淨土論』にいはいはく、「莊嚴妙聲功德成就といふは、『偈』に梵聲悟深遠微妙聞十方といへるがゆゑに。これいかんぞ不思議なるや。『經』にのたまはく、「もしひと但かの國土の清淨安樂なるをきゝて、尅念して生ぜんと願ぜんものと、また往生をうるものとは、即ち正

定聚じやうじゆにいと。これはこれ國土こくどの名字みやうじ佛事をなす、いづくんぞ思議しぎすべきや。莊嚴じやうげん主功德しゆこんどく成就じやうじゆといふは、「偈」に正覺阿彌陀法じやうかくあみだほふわうぢやうぢ王善住持わうぜんぢうぢといへるがゆゑに。これいかんが不思議なるや。正覺じやうかくの阿彌陀あみだ不可思議ふかもしぎにまします、かの安樂淨土あんらくじゆどは正覺じやうかくの阿彌陀あみだの善力ぜんりきの爲に住持ぢうぢせられたり。いかんが思議しぎすることをうべきや。住ぢうは不異ふい不滅ふめつに名づく、持ぢは不散ふさん不失ふしつに名づく。不朽ふくしゆ藥やくをもて種子しゆじにぬりて、水みづにおくのみだれず、火ひにおくにがれず、因縁いんげんをえて、すなはち生ずるが如し。なにをもての故ゆゑに。不朽ふくしゆ藥やくの力ちからなるが故ゆゑなり。もし人ひとたび安樂淨土あんらくじゆどに生ずれば、のちのときに、こゝろに三界さんがいにうまれて衆生しゆじやうを教化けわふせんと願ねがじて、淨土じゆどの命いのちをすて、願ねがにしたがひて生うをえて、三界さんがい雜生じやくじやうの火ひのなかにうまるといへども、無上むじやう菩提ぼだいの種子しゆじ畢竟ひつじやうしてくちず。なにをもてのゆゑに。正覺阿彌陀じやうかくあみだの善住持ぜんぢうぢをふるをもての故ゆゑに。莊嚴じやうげん眷屬けんじやく功德成就こんどくじやうじゆといふは、「偈」に如來淨華衆じゆらいじやうげしゆじゆ、正覺華化生じやうかくけけしじやうといへるがゆゑに。これいかんぞ不思議なるや。おほよここの雜生じやくじやうの世界せかいには、もしは胎たゐ、もしは卵らん、もしは濕しつ、もしは化け、眷屬けんじやくそこばくなり。苦樂くらく萬品まんひんなり、雜業じやくごうを以てのゆゑに。かの安樂國土あんらくこくどはこれ阿彌陀如來正覺淨華あみだじゆらいじやうかくじやうげしゆじゆの化生けしじやうするところにあらざることなし。同一どういつに念佛ねんぶつして別の道みちなきが故ゆゑに、遠とほく通つうずるに、それ四海しかいの内うちみな兄弟あひなとするなり。眷屬けんじやく無量むりやうなり、いづくんぞ思議しぎすべきや」と。

またいはく、「往生うじやうをねがふもの、本もとは則すなはち三々の品ひんなれども、いまは一二いちにの殊しゆなし、また溜漚しじようの一味いちみなるがごとし。いづくんぞ思議しぎすべきや」と。

【三三品】願生者
 の機根きこんに隨したがつて九
 種しゆしゆに分わつ。
 【溜漚】溜しじようと漚しじゆと
 の二河にがその下流げりう合あ
 するが故ゆゑにかく譬たと
 ふ。

【二佛】 釋迦と彌陀。

【平等力】 阿彌陀佛の尊號。

【三賢十聖】 菩薩道の過程、十住、十行、十廻向、十地に於て、十地を聖道、即ち十聖といひ、聖道以前の三段階を三賢道といふ。

また『論』にははく、「莊嚴清淨功德成就といふは、『偈』に觀彼世界相、勝過三界道といへるがゆゑに。これいかんが不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの淨土に生ずることをうれば、三界の繫業畢竟じてひかず、則ちこれ煩惱を斷ぜずして涅槃分をう、いづくんぞ思議すべきや」と。已上要を抄す

『安樂集』にははく、「しかるに二佛の神力また齊等なるべし。但し釋迦如來おのれが能をのべずして、ことさらにかの長を顯はしたまふこと、一切衆生をして齊しく歸せざるることなからしめんとおぼしてなり。このゆゑに、釋迦處々に嘆歸せしめたまへり、すべからくこの意をしるべしとなり。このゆゑに曇鸞法師の正意、西に歸するがゆゑに『大經』にそへて奉讀していはく、安樂の聲聞菩薩衆、人天の智慧ことくく洞達せり。身相莊嚴殊異なし、たゞし他方に順するがゆゑに名をつらぬ。顏容端正にして比すべきなし、精微妙軀にして人天にあらず、虚無の身無極の體なり。このゆゑに平等力を頂禮したてまつる」と。光明寺の『疏』にははく、「弘願といふは、『大經』の説のごとし。一切善惡の凡夫生ずることをうるは、みな阿彌陀佛の大願業力に乗じて増上縁とせずといふことなしとなり。また佛の密意弘深なれば、教門をもてさとりがたし、三賢十聖もはかりてうかゞふところにあらず。いはんやわれ信外の輕毛なり、あへて旨趣をしらんや。あふいで惟みれば、釋迦はこの方にして發遣し、彌陀は即ちかのくにして來迎す。かしこに喚ひこゝに遣はず、あにゆかざるべけんや。ただねんごろに法につかへて、畢命を期として、この穢身をすて

【有無】有と無との見解。

【無餘】究竟完全せる涅槃。

【因もしは果】往相の因果、行信の因と證果をいふ。

【還相廻向】以上の教行信證をもつて往相の内容とす往相とは現實の土岸より彼岸の淨土への願生の方向をいひ、これに對する還相とはこの彼岸の淨土を根據として現實の人生へ還來隨順する衆生救済の方向をいふ。願力によりて成立するが故に廻向といふ。

て、即ちかの法性の常樂を證すべし」と。

またいはく、「西方寂靜無爲のみやこには、畢竟逍遙して有無を離れたり。大悲、心に薰じて法界にあそぶ、分身してものを利せること等しくして殊なることなし。あるひは神通を現じてしかも法をとき、あるひは相好を現じて無餘にいる。變現の莊嚴意にしたがひていづ、群生みるもの罪みなのだごころ。また贊していはく、いざいなん、魔郷にはとゞまるべからず。曠劫よりこのかた六道に流轉してことごとくみな運たり、到るところに餘の樂なし、たゞ愁歎のこゑをきく。この生平をへてのちかの涅槃の城にいらん」と。

その眞宗の教行證を案すれば、如來大悲廻向の利益なり。かるがゆゑに、もしは因もしは果、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまへるところにあらざることあることなし、因淨なるがゆゑに果また淨なり。知るべし。

二には還相廻向といふは、則ちこれ利他教化地の益なり。

すなはちこれ必至補處の願よりいでたり、また一生補處の願となづく、また還相廻向の願となづくべきなり。

『註論』にあらはれたり、かるがゆゑに願文をいださず、『註論』をひらくべし。

『淨土論』にはく、「出第五門は、大悲をもて一切苦惱の衆生を觀察して應化の身をし

【必至補處の願】
第二十二願の名。

【未證淨心】菩薩
十地の段階に於ける
七地以上とを區別し、
前者を未證淨心と
し、後者を淨心の菩
薩とす。

【法性生身】法性
を身とせる菩薩、
法身の菩薩の意、
三界生身に非らざ
るを意味す。

【報生三昧】報生
とは生得の意、修
得の當爲的課題的
なるに對して生得
は自然的本然的な
り。

めす。生死の菌、煩惱の林のなかに廻入して、神通に遊戯して教化地に至る。本願力の廻向をもてのゆゑに、これを出第五門となづく」と。

『論の註』には、「還相とはかの土に生じをはりて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することとをえて、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に佛道にむかはしむるなり。もしは往、もしは還、みな衆生をぬきて生死海を渡さんがためなり。このゆゑに廻向を首として大悲心を成就することとをえたまへるがゆゑにとのたまへり」と。

またいはく、「即ちかの佛をみたまつれば、未證淨心の菩薩、畢竟じて平等法身を得證す。淨心の菩薩と上地のもろくの菩薩と、畢竟じておなじく寂滅平等をうるが故にとのたまへり。平等法身は八地已上法性生身の菩薩なり、寂滅平等の法なり。この寂滅平等の法をうるをもてのゆゑに名づけて平等法身とす。平等法身の菩薩の所得なるをもての故に、名づけて寂滅平等の法とするなり。この菩薩は報生三昧を得。三昧神力をもて、よく一處一念一時に、十方世界に徧じて、種々に一切諸佛および諸佛大會衆海を供養す。よく無量世界に佛法僧ましまさぬところにして、種々に示現し種々に一切衆生を教化し度

脱してつねに佛事をなす。はじめより往來のおもひ供養のおもひ皮脱のおもひなししこの故に、この身をなづけて平等法身とす。この法をなづけて寂滅平等の法とす。未證淨心の菩薩とは、初地已上七地以還の諸の菩薩なり。この菩薩亦よく身を現すること、もしは百、もしは千、もしは萬、もしは億、もしは百千萬億無佛の國土にして佛事を施作す、

【七地】空觀の微底に達せる段階。

【たとひわれ等】第二十二願。

要す心をなして三昧に在る。乃しよく作心せざるにあらず、作心をもての故に名づけて未證淨心とす。この菩薩安樂淨土に生じてすなはち阿彌陀佛をみると願す。阿彌陀佛をみたてまつるとき、上地の諸菩薩と畢竟して身ひとしく法ひとし。龍樹菩薩、婆藪槃頭菩薩のともがら、かしこに生ぜんと願するものは、まさにこのためなるべきのみ。問うていはく、『十地經』を按ずるに、菩薩の進趣階級、やうやく無量の功勳あり、おほくの劫數をふ、しかうしてのち、乃しこれを得。いかんぞ阿彌陀佛をみたてまつるとき、畢竟して上地のもろ／＼の菩薩と身ひとしく法ひとしきや。こたへていはく、畢竟は未だ即ち等しといふにはあらず、畢竟してこの等しきことを失せざるがゆゑに等といふのみ。問うていはく、もし即ち等しからずば、またなんぞ菩薩といふことをえん。たゞ初地にのほれば、以て漸く増進して、自然にまさに佛と等しかるべし、なんぞかりに上地の菩薩と等しといふや。答へていはく、菩薩七地の中にして大寂滅をうれば、上に諸佛を求むべきをみず、下に衆生の度すべきをみず、佛道をすて、實際を證せんと欲す。そのときにもし十方諸佛の神力加勸することをえずば、すなはち滅度して二乗と異なけん。菩薩もし安樂に往生して阿彌陀佛をみたてまつるに、即ちこの難なけん、このゆゑにすべからく畢竟平等といふべし。またつぎに『無量壽經』のなかの阿彌陀如來の本願にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、他方佛土の諸菩薩衆、わがくに來生して究竟して必ず一生補處にいたらん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓のよろひをきて徳本を積累し、一切を度脱せ

【五種の不思議】衆生多少と業力と龍力と禪定力と佛法力との不思議。【好堅】想像的樹木。【羅漢】一語一時にして能く阿羅漢果無生法忍を證得せしむ。【八句】淨土論の偈に八句をもつて佛陀の莊嚴を説く華座乃至不虛作住持の八種莊嚴功德といへるもの。【十七句】佛莊嚴の前に説く十七種の國土莊嚴功德を説く但淨土論に説ける彼岸の世界は國土と佛と菩薩の三種莊嚴をもつてその内容とす。

しめ、諸佛のくににあそび、菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恆沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずば正覺をとらじと。この『經』を按じてかのくにの菩薩を推するに、あるひは一地より一地にいたらざるべし。十地の階次といふは、これ釋迦如來、閻浮提にして、ひとつの應化道なるのみ。他方の淨土はなんぞ必ずしもかくのごとくならん。五種の不思議のなかに、佛法もとも不可思議なり。もし菩薩必ず一地より一地にいたりて超越の理なしといはゞ、いまだ敢てつまびらかならず。譬へば樹ありて名づけて好堅といふ。この樹地より生じて百歲ならん、いましつぶさに一日に長高なること百丈なるがごとし。日々にかくのごとし、百歲のたけをはかるにあに脩松に類せんや。松の生長するをみるに、日に寸をすぎず、かの好堅をきゝて、なんぞよく即日をうたがはざらん。ひとありて、釋迦如來、羅漢を一聽に證し無生を終朝に制すとのたまへるをきゝて、これ接誘のみことにして稱實の説にあらずとおもへり。この論事をきゝてまたまさに信ぜざるべし。それ非常の言は、常人の耳にいらす、これを然らずとおもへり。またそれ宜なるべきなり。略して八句をときて、如來の自利利他の功德莊嚴、次第に成就したまへるを示現したまへりとするべし。これはいかんが次第なるとならば、前の十七句はこれ莊嚴國土の功德成就なり。すでに國土の相を知んぬ、國土の主をしるべし。この故につきに佛莊嚴功德を觀ず。かの佛もし莊嚴をなして、いづれのところにしてか坐すると。このゆゑにまづ

【長幼】佛と大衆の區別、即ち長幼の區別、即ち程度上の相違たるの恐れ。
 【不虛作住持】如來の本願力をさす
 【四種】三種莊嚴の第三菩薩莊嚴の内容は四種の正修行の相を説示す。

【無垢輪】正法を宣説すること。

座を觀すべし。すでに座を知んぬ、すでによろしく座主をしるべし。この故につきに佛身業を莊嚴したまへるを觀す。すでに身業を知んぬ、いかなる聲名かましますと知るべし。このゆゑにつきに佛口業を莊嚴したまへるを觀す。すでに名聞を知んぬ、よろしく得名のゆゑを知るべし。このゆゑにつきに佛の心業を莊嚴したまへるを觀す。すでに三業具足したまへるを知んぬ、人天の大師となりて化を受くるに堪へたるひとはこれ誰ぞと知るべし。このゆゑにつきに大衆の功徳を觀す。すでに大衆無量の功徳いふことを知んぬ、よろしく上首はたれぞとしるべし。このゆゑにつきに上首を觀す、上首はこれ佛なり、すでに上首を知んぬ、おそらくは長幼に同じきことを。このゆゑにつきに主を觀す。すでにこの主をしんぬ、主いかなる増上かましますと。このゆゑにつきに莊嚴不虛作住持を觀す。八句の次第成ぜるなり。菩薩を觀せば、いかなる菩薩の莊嚴功徳成就を觀察する。菩薩の莊嚴功徳成就を觀察せば、かの菩薩を觀するに、四種の正修行功徳成就したまへることありと知るべし。眞如はこれ諸法の正體なり、體如にして行すればすなはちこれ不行なり、不行にして行するを如實修行となづく。體はたゞ一如にして、義をして分ちて四とす。このゆゑに四行、一をもてまさしくこれを統ぬ。なにものをか四とする。ひとつには、一佛土において身動搖せずして十方に徧す、種々に應化して實のごとく修行してつねに佛事をなす。偈に安樂國は清淨にして、つねに無垢輪を轉す。化佛菩薩は、日の須彌に住持するがごときのゆゑにとのたまへり。もろくの衆生の淤泥華をひらくがゆゑにとのたまへ

【習氣煩惱】 現行の正使煩惱に對する習氣、それの薫習性として生ぜる煩惱

り。八地已上の菩薩は、つねに三昧にあり。三昧力をもて身、本處を動ぜずして、よくあまねく十方にいたりて諸佛を供養し衆生を教化す。無垢輪は佛地の功德なり、佛地の功德は習氣煩惱の垢まします。佛もろくの菩薩のために、つねにこの法輪を轉ず。もろろの大菩薩、またよくこの法輪をもて、一切を開導して暫時も休息なけん、かるがゆるに常轉といふ。法身は日のごとくして、應化身のひかりもろくの世界に徧するなり。日といふは未だもて不動をあかすにたらざれば、また如須彌住持といふ。淤泥華といふは、「經」にのたまはく、高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑濕の淤泥にいまし蓮華を生ずと。これは凡夫煩惱の泥のなかにありて、菩薩の爲に開導せられて、よく佛の正覺の華を生ずるにたとふ。まことにそれ三寶を紹隆して常に絶えざらしむと。二には、かの應化身一切の時、前ならず後ならず、一心一念に大光明をはなちて、ことごとくよくあまねく十方世界にいたりて衆生を教化す。種々に方便し、修行所作して、一切衆生の苦を滅除するがゆるに『偈』に無垢莊嚴の光、一念および一時にあまねく諸佛の會をてらして、もろくの群生を利益するゆるにとのたまへり。かみに不動にしていたるといへり、あるひはいたるに前後あるべし。このゆるに、また一念一時無前無後とのたまへり。三には、かれ一切の世界において、餘なくもろくの佛會を照す、大衆餘なく、廣大無量にして、諸佛如來の功德を供養恭敬讚歎す。『偈』に天の樂華衣妙香等をふらして諸佛の功德を供養し、ほむるに分別の心あることなきがゆるにとのたまへり。無餘といふは、あまねく一切世界一切諸佛大會に

いたりて、一世界一佛會としていたらざることなきことを明す。摩訶のいはく、法身はかたちなくして、かたちをことにしてならびに應ず。至韻に言なくして玄籍いよいよ布き、冥權はかりごとなくして、動じて事と會すと、けだしこのこゝろなり。四には、かれ十方一切の世界に三寶ましまさぬところにおいて、佛法僧寶功德大海を住持し莊嚴して、あまねく示して如實修行をさとらしむ。『偈』に、なんらの世界にか佛法功德寶ましまさざらん、我ねがはくばみな往生して、佛法をしめして佛の如くせんとのたまへるがゆゑに。かみの三句は徧く至るといふといへども、みなこれ有佛の國土なり。もしこの句なくば、すなはちこれ、法身ところとして法ならざることあらん、上善ところとして善ならざることあらん。「觀行の體相」をはりぬ。

【觀行の體相】論註が淨土論の論文（解義分）を註解するに十章（重）に分つ、觀行體相章はその第三章に當る

【一法句】一法とは法性法身、願心によりて成立せる三種莊嚴が法性に歸入するとの意。

已下はこれ解義のなかの第四重なり、なづけて「淨入願心」とす。淨入願心はまたさきに觀察莊嚴佛土功德成就と、莊嚴佛功德成就と、莊嚴菩薩功德成就とをときつ。この三種の成就は、願心の莊嚴したまへるなりと知るべしといへり。應知といふは、この三種の莊嚴成就は、もと四十八願等の清淨願心の莊嚴せるところなるによりて、因淨なるがゆゑに果淨なり。因なくして他の因のあるには非ずと知るべしとなり。略して入一法句を説くがゆゑにとのたまへり。かみの國土の莊嚴十七句と、如來の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句とを廣とす、入一法句は略とす。なんがゆゑをぞ廣略相入を示現するとならば、諸佛菩薩に二種の法身まします。ひとつには法性法身、ふたつには方便法身なり。法性法

【一切種智】一切法の別相(特殊相)を對象とする智、その總相を對象とする一切智に對して定立さるる語。

身によりて方便法身を生ず、方便法身によりて法性法身を出す。此の二法身は異にしてわかつべからず、一にして同すべからず。この故に、廣略相入して統ぬるに法の名をもてす。菩薩、もし廣略相入をしらざれば、すなはち自利利他するにあてはず。一法句はいはく清淨句なり、清淨句はいはく、眞實の智慧、無爲法身なるがゆゑにとのたまへり。この三句に展轉して相入す、なんの義によりてかこれをなづけて法とする。清淨をもての故に。なんの義によりてか名づけて清淨とする。眞實の智慧無爲法身をもてのゆゑなり。眞實の智慧は實相の智慧なり、實相は無相なるがゆゑに眞智無智なり。無爲法身は法性身なり。法性寂滅なるがゆゑに法身は無相なり、無相のゆゑによく相ならざることなし。このゆゑに相好莊嚴即ち法身なり、無知のゆゑによく知らざることなし。このゆゑに一切種智すなはち眞實の智慧なり。眞實をもてして智慧になづくることは、智慧は作にあらず、非作にあらずることをあかす。無爲をもてして法身をたつることは、法身は色にあらず、非色にあらずることをあかす。非にあらずれば、あに非のよく是なるにあらずらんや。けだし非なきを是といふ、おのづから是にしてまた是にあらずることを待つことなきなり。是にあらず、非にあらず百非のたとへざるところなり。このゆゑに清淨句といへり。清淨句といふは、いはく、眞實の智慧無爲法身なり。この清淨に二種あり、しるべしといへり。かみの轉入句のなかに、一法に通じて清淨にいる、清淨に通じて法身にいる。いままさに清淨をわかちて二種をいだがゆゑなり。かるがゆゑにし

【別報の體】業因に緣りて感受する果報に別(特殊的)と共(普遍的)とを分つ。衆生の各々の個體はそれ自身特殊なる感受内容にして國土は各々の個體が共に受用する普遍的なる感受内容なり。

るべしといへり。なんらか二種、ひとつには器世間清淨、ふたつには衆生世間清淨なり。器世間清淨といふは、さきにとくがごとき十七種の莊嚴佛土功德成就、これを器世間清淨となづく。衆生世間清淨といふは、さきにとくが如きの八種の莊嚴佛功德成就と、四種の莊嚴菩薩功德成就と、これを衆生世間清淨となづく。是のごときの一法句に二種の清淨の義を攝すと知るべしとのたまへり。それ衆生は別報の體とす、國土は共報の用とす。體用ひとつならず、このゆゑにしるべし。しかるに諸法は心を以て成じ、無餘の境界なし。衆生および器、また異なることを得ず、一なることを得ず。一ならず、すなはち義をもてわかつ。異ならず、おなじく清淨なり。器は用なり。いはくかの淨土は、これかの清淨の衆生の受用するところなるがゆゑに、なづけて器とす。淨食に不淨の器をもちふれば、器不淨なるをもてのゆゑに食また不淨なり。不淨の食に淨器をもちふれば、食不淨なるがゆゑに器また不淨なるがごとし。かならずふたつともに、潔くしていまし淨と稱することをえしむ。こゝをもて、ひとつの清淨の名かならず二種を攝す。問ていはく、衆生清淨といへるはすなはちこれ佛と菩薩となり、かのもろくの人天、この清淨の數に在ることを得んやいなや。答へて曰く、清淨となづくることをうるも、實の清淨にあらず。たとへば出家の聖人は、煩惱の賊を殺すをもてのゆゑに、なづけて比丘とす。凡夫の出家のものもまた比丘となづくるがごとし。また灌頂王子初生のとき、三十二相を具して、すなはち七寶の爲に屬せらる。いまだ轉輪王の事をなすこと能はずと

【善巧攝化】 第五
章。

【禮拜等】 五念門
の行、禮拜、讚歎、
作願、觀察、廻向
をいふ。

いへども、また轉輪王となづくるがごとし。それかならず轉輪王たるべきをもてのゆゑに、かのもろくの人天もまたくかくのごとし、みな大乘正定の聚にいらて、畢竟じてまさに清淨法身を得べし。まさに得べきをもてのゆゑに、清淨となづくることを得るなり。

「善巧攝化」といふは、かくのごときの菩薩は、奢摩他毘婆舍那、廣略修行柔輭心を成就すとのたまへり。柔輭心といふは、謂く廣略の止觀、相順し修行して不二の心を成す。たとへば水をもて影をとるに、清と靜とあひたすけて成就するがごとし。實の如く廣略の諸法をしろとのたまへり。如實知といふは實相の如くして知るなり。廣の中の二十九句、略の中に一句、實相にあらざることなし。かくの如き巧方便廻向を成就したまへりとのたまへり。かくの如きといふは、前後の廣略みな實相なるが如きなり。實相をしろをもての故に則ち三界衆生の虚妄の相をしろ、衆生の虚妄をすれば則ち眞實の慈悲を生ず、眞實の法身をすれば則ち眞實の歸依をおこす。慈悲と歸依と巧方便とは下にあり、何者が菩薩の巧方便廻向なる。菩薩の巧方便廻向といふは、謂く禮拜等の五種の修行をとく。所集の一切の功德善根は、自身住持の樂をもとめず、一切衆生の苦をぬかんとおぼすがゆゑに、作願して一切衆生を攝取して、ともにおなじくかの安樂佛國に生ぜしむ。これを菩薩の巧方便廻向成就となづくとしたまへり。王舍城所説の「無量壽經」を按ずるに、三衆生のなかに、行に優劣ありといへども、みな無上菩提の心を發せざるはなけん。この無上菩提心

は、即ちこれ願作佛心なり、願作佛心はすなはちこれ度衆生心なり。度衆生心はすなはちこれ衆生を攝取して有佛の國土に生ぜしむる心なり。このゆゑにかの安樂淨土に生ぜんと願するものは、かならず無上菩提心を發するなり。もし人、無上菩提心を發せずして、ただかの國土の受樂無間なるをきゝて、樂のためのゆゑに生ぜんと願するは、またまさに往生をえざるべし。このゆゑに自身住持の樂をもとめず、一切衆生の苦を抜かんとおぼすがゆゑにとのたまへり。住持樂といふはいはく、かの安樂淨土は、阿彌陀如來の本願力の爲に住持せられて受樂ひまなきなり。おほよそ廻向の名義を釋せば、いはく、おのれが所集の一切の功德をもて、一切衆生に施與して、ともに佛道に向へしめたまふなり。巧方便といふは、いはく、菩薩願すらく、おのれが智慧の火をもて、一切衆生の煩惱の草木をやかん。もし一衆生として成佛せざることあらば、われ佛にならじと。しかるに衆生未だことごとく成佛せざるに、菩薩己にみづから成佛せんは、たとへば、火添して一切の草木をついで、燒きてつくさしめんとおもふに、草木未だつきざるに火添すでつきんがごとし。その身を後にして、身を先にするをもてのゆゑに方便となづく。このなかに方便といふはいはく、作願して一切衆生を攝取して、ともにおなじくかの安樂佛國に生ぜしむ。かの佛國はすなはちこれ畢竟成佛の道路、無上の方便なり。

「障菩提門」といふは、菩薩かくのごとくよく廻向成就したまへるを知れば、すなはちよく三種の菩提門相違の法を遠離す。なんらか三種。ひとつには智慧門によりて自樂をもと

【順菩提門】 第七

めず、我心自身に貪著するを遠離せるがゆゑにとのたまへり。進むを知りて退くを守るを智といふ、空無我を知るを慧といふ。智によるがゆゑに自樂をもとめず、慧によるがゆゑに我心自身に貪著するを遠離せり。ふたつには慈悲門によりて、一切衆生の苦を抜いて無安衆生心を遠離せるがゆゑにとのたまへり。苦をぬくを慈といふ、樂をあたふるを悲といふ。慈によるがゆゑに一切衆生の苦をぬく、悲によるがゆゑに無安衆生心を遠離せり。みつには方便門によりて、一切衆生を憐愍したまふ心なり。自身を供養恭敬する心を遠離せるがゆゑにとのたまへり。正直を方といふ、外己を便といふ。正直によるがゆゑに一切衆生を憐愍する心を生ず、外己によるがゆゑに自身を供養恭敬する心を遠離せり。これを三種の菩提門相違の法を遠離すとなく。

「順菩提門」といふは、菩薩はかくのごとく三種の菩提門相違の法を遠離して、三種の隨順菩提門の法満足することをえたまへるがゆゑに。なんらか三種。ひとつには無染清淨心。自身のために、諸樂を求めざるをもてのゆゑにとのたまへり。菩提はこれ無染清淨のところなり。もし身のために樂をもとめば、すなはち菩提に違しなん。このゆゑに無染清淨心はこれ菩提門に順するなり。ふたつには安清淨心。一切衆生の苦をぬくをもてのゆゑにとのたまへり。菩提は、これ一切衆生を安穩する清淨のところなり。もし作心して一切衆生をぬいて、生死の苦をはなれしめずば、すなはち菩提に違しなん。このゆゑに、一切衆生の苦をぬくはこれ菩提門に順するなりと。みつには樂清淨心。一切衆生を

【名義攝對】 第八章

して大菩提をえしむるをもてのゆゑに、衆生を攝取してかの國土に生ぜしむるをもてのゆゑにとのたまへり。菩提はこれ畢竟常樂の處なり、もし一切衆生をして畢竟常樂をえしめずば、すなはち菩提に違しなん。この畢竟常樂はなによりてかうる。大乘門によるなり。大乘門といふは、いはく、かの安樂佛國土これなり。このゆゑにまた衆生を攝取して、かの國土に生ぜしむるをもてのゆゑにとのたまへり。これを三種の隨順菩提門の法、満足せりとなづく。知るべし」と。

「名義攝對」といふは、さきに説ける智慧、慈悲、方便の三種の門は、般若を攝取す。般若方便を攝取す、知るべしとのたまへり。般若といふは、如に達する慧の名なり、方便といふは權に通ずる智の稱なり。如に達すればすなはち心行寂滅なり、權に通ずればすなはちつぶさに衆機を省みるなり。機を省みるの智、つぶさに應じて無知なり。寂滅の慧、また無知にしてつぶさに省みる。しかればすなはち智慧と方便と、あひ縁じて動じ、あひ縁じて靜なり。動、靜を失せざることは智慧の功なり。靜、動を廢せざることは方便の功なり。このゆゑに、智慧と慈悲と方便とは般若を攝取す、般若方便を攝取す。しるべしといふは、いはく、智慧と方便はこれ菩薩の父母なり。もし智慧と方便とによらずば菩薩の法則も成就せざることをしるべし。なにをもての故に。もし智慧なくして衆生のためにするときは、すなはち顛倒に墮せん。もし方便なくして法性を觀するときは、すなはち實際を證せん。このゆゑに知るべしと。さきに、遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、

【四顛倒】無常、苦、無我、不淨なる諸法に於て常樂我淨と判斷する見解をいふ。

【五識】色聲香味觸。【初禪等】意識統一(禪)の寂靜より生起せる樂。五識の知覺を離れたる思惟(意識)に相應生起するが故に意識所生といふ。また三禪といふは一般に禪の意識段階を四種に分ち第四禪には樂の心現象の生起せざるものとなすが故なり。

【願事成就】 第九章

遠離供養恭敬自身心をときつ。この三種の法は、障菩提心を遠離するなりと知るべしとのたまへり。諸法におの／＼障礙の相あり。風はよく靜をさふ、土はよく水をさふ、濕はよく火をさふ、五黒十惡は人天をさふ、四顛倒は聲聞の果をさふるがごとし。このなかの三種の不遠離は菩提心をさふ。しるべしといふは、もし無障をえんとおもはざれば、まさにこの三種の障礙を遠離すべきなり。さきに無染清淨心、安清淨心、樂清淨心を説きつ。この三種の心は、略して一處にして妙樂勝眞心を成就したまへり、しるべしとのたまへり。樂に三種あり。ひとつには外樂、いはく五識所生の樂なり。ふたつには内樂、曰く初禪、二禪、三禪の意識所生の樂なり。みつには法樂、いはく、智慧所生の樂なり。この智慧所生の樂は、佛の功德を愛するより起れり。これは遠離我心と、遠離無安樂生心と、遠離自供養心と、この三種の心清淨に増進して略して妙樂勝眞心とす。妙の言はそれ好なり、この樂は佛を緣じて生ずるをもてのゆゑに。勝の言は三界のうちの樂に勝出せり。眞の言は虚偽ならず、顛倒せざるなり。

「願事成就」といふは、かくのごときの菩薩は智慧心、方便心、無障心、勝眞心をもて、よく清淨佛國土に生ぜしめたまへりとするべしとのたまへり。しるべしといふは、いはく、この四種の清淨の功德、よくかの清淨佛國土に生ずることをえしむ。これ他縁をして生ずるにはあらずと知るべし。これを菩薩摩訶薩五種の法門に隨順して、所作こゝろにしたがひて自在に成就したまへりとなづく。さきの所説のごとき、身業、口業、意業、智

【利行満足】 第十章

業、方便智業、法門に隨順せるがゆゑにとのたまへり。隨意自在といふは、いふこゝろは、この五種の功德力、よく清淨佛土に生ぜしめて、出沒自在なり。身業といふは禮拜なり、口業といふは讚嘆なり、意業といふは作願なり、智業といふは觀察なり、方便智業といふは廻向なり。この五種の業和合せり。すなはちこれ往生淨土の法門に隨順して、自在の業成就したまへりとのたまへり。

「利行満足」といふは、また五種の門ありて、やうやくに五種の功德を成就したまへりとしるべし。なにものか五門。ひとつには近門、ふたつには大會業門みつには宅門、よつには屋門、いつくには蘭林遊戯地門なりとのたまへり。この五種は、入出の次第の相を示現せしむ。入相のなかに、初めに、淨土にいたるはこれ近相なり。いはく、大乘正定聚にいたるは、阿耨多羅三藐三菩提にちかづくなり。淨土にいらはるは、すなはち如來の大會衆のかずにいるなり。衆のかずにいりをはりぬれば、まさに修行安心の宅にいたるなるべし。宅にいりをはれば、まさに修行所居の屋寓にいたるなるべし。修行成就しをはりぬれば、まさに教化地にいたるべし。教化地は、すはなちこれ菩薩の自娛樂の地なり。このゆゑに、出門を蘭林遊戯地門と稱す。この五種の門は、はじめの四種の門は、入の功德を成就したまへり。第五門は、出の功德を成就したまへりとのたまへり。この入出の功德は、なにものかこれや。釋すらく、入第一門といふは、阿彌陀佛を禮拜して、彼の國に生ぜしめんが爲にするをもての故に、安樂世界に生ずることをえしむ。これを、入第一門となづ

【普門示現】 觀世
音菩薩普門品の説
觀世音菩薩一切
の衆生を救濟せん
が爲め、その各各
の機根に應同して
普く各各の色身を説
く。

く。佛を禮して、佛國に生ぜんと願するは、これははじめの功德の相なり。入第一門といふは、阿彌陀佛を讚嘆し、名義に隨順して、如來の名を稱せしめ、如來の光明智相によりて、修行せるをもてのゆゑに、大會衆のかずにいることをえしむ。これを、入第二門となづくとのたまへり。如來の名義によりて讚嘆する、これ第二の功德の相なりと。入第三門といふは、一心に專念し、作願してかしこに生じて、奢摩他寂靜三昧の行を修するをもてのゆゑに、蓮華藏世界にいることをえしむ、これを入第三門となづく。寂靜止を修せんためのゆゑに、一心にかのくに生ぜんと願する。これ第三の功德相なり。入第四門といふは、かの妙莊嚴を專念し觀察して、毘婆舍那を修するをもてのゆゑに、かのところに到ることをえて、種々の法味の樂を受用せしむ。これを入第四門となづくとのたまへり。種種の法味の樂といふは、毘婆舍那のなかに、觀佛國土清淨味、攝受衆生大乗味、畢竟住持不虛作味、類事起行願取佛土味あり。かくのごときらの無量の莊嚴佛道の味あるがゆゑに、種々とのたまへり。これ第四の功德の相なり。出第五門といふは、大慈悲をもて、一切苦惱の衆生を觀察して應化身をしめして生死の菌煩惱の林のなかに廻入して、神通に遊戲し教化地にいたる。本願力の廻向をもてのゆゑに、これを出第五門となづくとのたまへり。示應化身といふは、『法華經』の普門示現の類のごときなり。遊戲に、ふたつの義あり。ひとつには自在の義、菩薩衆生を度すること、たとへば師子の鹿をうつに所爲はゞからざるがごときは遊戲するがごとし。ふたつには度無所度の義なり。菩薩、衆生を觀するに畢

【論主】世親。
 【宗師】觀衆。
 【他利他】論の
 自利他の利他の
 語の思索より他力
 の意義を闡明せし
 こと、行卷他力し
 づ。解釋の引用文に出

竟じて所有なし。無量の衆生を度すといへども、實に一衆生として滅度をうるものなし。衆生を度すとしめすこと遊戯するがごとし。本願力といふは、大菩薩、法身の中において、つねに三昧にましくて種々の身、種々の神通、種々の說法を現ずることを示すこと、みな本願力より起れるをもてなり。たとへば阿修羅の琴の、取するものなしといへども、音曲自然なるがごとし。これを教化地の第五の功德相となづくとのたまへり」と。抄出

爾れば、大聖の眞言、まことに知んぬ。大涅槃を證することは、願力の廻向によりてなり。還相の利益は、利他の正意をあらはすなり。こゝをもて論主は、廣大無礙の一心を宣布して、あまねく雜善堪忍の群萌を開化す。宗師は大悲往還の廻向を顯示して、ねんごろに他利々他の深義を弘宣したまへり。あふいで奉事すべし、ことに頂戴すべし。

顯淨土眞實證文類四

顯淨土眞佛土文類五

愚禿釋親鸞集

【光明無量の願】第十願及び第十三願
 光明は觀照の智慧壽命は同感の大悲にして正しく眞人格の理念たるもの

【眞佛土】眞なる如來と及び淨土。
 【兼佛土】眞報身眞報土、現實の主觀的立場に密阿せとせる化身化土と別ちて、純粹眞實なる本願に根據せる佛身佛土。

光明無量の願
 壽命無量の願

謹んで、眞佛土を按ずれば、佛はすなはちこれ不可思議光如來なり、土はまたこれ無量光明土なり。

然ればすなはち、大悲の報願に酬報す、かるがゆゑに、眞の報佛土といふ。すでにして願います、すなはち光明壽命の願これなり。

『大經』にのたまはく、「たとひわれ佛をえたらんに、光明より限量ありて、しも百千億那由他の諸佛の國をてらざるにいたらば、正覺をとらじ」と。

また願にのたまはく、「たとひわれ佛をえたらんに、壽命より限量ありて、しも百千億那由他劫にいたらば、正覺をとらじ」と。

願成就の文にのたまはく、「佛、阿難につけたまはく、無量壽佛の威光、明最尊第一にして、諸佛の光明のおまぶことあたはざるところなり。至このゆゑに無量壽佛をよ、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、

【三垢消滅】三種の煩惱貪欲、瞋恚、愚痴。

不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號す。それ衆生ありてこのひかりにまうあふものは、三垢消滅し、身意柔軟なり、歡喜踊躍して善心生ず。もし三摩勤苦のところにあるても、この光明をみれば、みな休息をえてまた苦惱なし、壽終の後にみな解脱をかうぶる。無量壽佛は光明顯赫にして十方を照耀す、諸佛の國土にきこえざるることなし。たゞ我のみいまその光明を稱するにあらず、一切の諸佛、聲聞、緣覺、もろくの菩薩衆、ことごとくともに嘆譽することまたかくのごとし。もし衆生ありて、その光明の威神功德をきゝて、日夜に稱説して、至心不斷なれば、こゝろの所願にしたがひて、その國に生ずることをえて、もろくの菩薩聲聞大衆のために、ともに嘆譽しその功德を稱せられん。それしかるのち、佛道をうるときにいたりて、あまねく十方諸佛菩薩のために、その光明をほめられんことまたいまのごとくならん。佛のたまはく、われ無量壽佛の光明威神巍巍殊妙なるをとくこと、晝夜一劫すともなほ未だつくすことあたはじと。佛、阿難にかたりたまはく、無量壽佛は壽命長久にして勝計すべからず、なんぢむしろ知れりや、たとひ十方世界の無量の衆生、みな人身をえて、ことごとく聲聞緣覺を成就せしめて、すでにともに集會し、おもひをもはらにし心をひとつにして、その智力をつくして、百千萬劫において、ことごとくともに推算して、その壽命長遠のかずをはからんに、窮盡してその限極をしることあたはじと。

出抄

『無量壽如來會』にのたまはく、「阿難この義をもてのゆゑに、無量壽佛にまた異名ましま

す。いはく、無量光、無邊光、無著光、無礙光、光照王、端嚴光、愛光、喜光、可觀光、不可思議光、無等光、不可稱量光、映蔽日光、映蔽月光、掩奪日月光なり。かの光明、清淨廣大にして、あまねく衆生をして身心悅樂せしむ。また一切餘の佛刹中の天、龍、夜叉、阿修羅等、みな歡悅をえしむ」と。

『無量清淨平等覺經』にのたまはく、帛延「速疾にこえて、すなはち安樂國の世界にたるべし。無量光明土にいたりて、無數の佛を供養す」と。

『佛說諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經』の譯にのたまはく、「佛のたまはく、阿彌陀佛の光明、最尊第一にしてならびなし、諸佛の光明みなおよばざるところなり。八方上下無央數の諸佛のなかに、佛の頂中の光明七丈をてらす、佛の頂中の光明一里を

てらす、乃佛の至佛の頂中の光明二百萬佛國をてらすあり。佛のたまはく、もろゝの八方上下無央數の佛の頂中の光明、炎照するところみなかくのごとし、阿彌陀佛の頂中の光明

の炎照するところ千萬佛國なり。諸佛の光明のてらすところに、近遠あるゆゑはいかんとなれば、もとそれ、前世の宿命に道をもとめて菩薩たりし時、所願の功德おのゝお

のづから大小あり。共しかうしてのちに作佛するときにいたりて、おのゝみづからこれをえたり。このゆゑに光明うたゝ同等ならざらむ。諸佛の威神同等なるのみ。自在の

こゝろの所欲、作爲してあらかじめ計らず。阿彌陀佛の光明のてらすところ最大なり、諸佛の光明みなおよぶことあたはざるところなり。佛、阿彌陀佛の光明の極善なるこ

【泥梨】 地獄。

【辟支佛】 獨覺若しくは縁覺と譯さる。

とを稱譽したまふ、阿彌陀佛の光明は、極善にして善のなかの明好なり。それ快きことならびなし、絶殊無極なり、阿彌陀佛の光明は清潔にして、瑕穢なく缺減なし。阿彌陀佛の光明は、殊好にして日月の明よりもすぐれたること百千億萬倍なり。諸佛の光明のなかの極明なり、光明のなかの極好なり、光明のなかの極雄傑なり、光明のなかの快善なり、諸佛のなかの王なり、光明のなかの極尊なり、光明のなかの最明無極なり、もろくの無數天下の幽冥のところを炎照するに、みな常に大明なり。諸有の人民、蠅飛、蠕動の類、阿彌陀佛の光明をみざることなし、みたてまつるもの、慈心歡喜せざるものなけん。世間諸有の姪洗、嗔怒、愚癡のもの、阿彌陀佛の光明をみたてまつりて善をなさざるはなし。もろくの泥梨、獠狗、辟荔、考掠、勤苦のところにおいて阿彌陀佛の光明をみたてまつれば、いたりてみな休止してまた治することさえざれども、死してのち、憂苦を解脱することをえざるものはなし。阿彌陀佛の光明と名とは、八方、上下、無窮、無極、無央數の諸佛國にきかしたまふ。諸天人民間知せざることなし、聞知せんもの度脱せざるはなし。佛のたまはく、ひとり我のみ、阿彌陀佛の光明を稱譽せず、八方、上下、無央數の佛、辟支佛、菩薩、阿羅漢、稱譽するところみなかくのごとし。佛のたまはく、それ人民、善男子、善女人、阿彌陀佛の聲をききて光明を稱譽して、朝暮につねにその光好を稱譽して、至心斷絶せざれば、心の所願にありて、阿彌陀佛國に往生す」と。

【法の心】一切法の如實の理を諦觀して決定せるをいひ（衆）生忍に對する語。

【三歸依】佛陀と法と僧伽への歸依

『不空羅索神變眞言經』にのたまはく、「なんぢ當生のところは、これ阿彌陀佛の清淨報土なり。蓮華より化生してつねに諸佛をみたまつる、もろくの法忍を證せん、壽命無量百千劫數ならん。直に阿耨多羅三藐三菩提にいたる、また退轉せず、われつねに祐護す」と。

『涅槃經』にのたまはく、「また解脫はなづけて虚無といふ、虚無はすなはちこれ解脫、解脫はすなはちこれ如來なり、如來はすなはちこれ虚無なり、非作の所作なり。至眞解脫は不生不滅なり。このゆゑに解脫すなはちこれ如來なり、如來またしかなり。不生、不滅、不老、不死、不破、不壞にして、有爲の法にあらず。この義をもてのゆゑになづけて如來に入大涅槃といふ。至乃また解脫は無上々となく、乃無上々はすなはち眞解脫なり、眞解脫はすなはちこれ如來なり。至乃もし阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得をはりて、無愛無疑なり、無愛無疑はすなはち眞解脫なり、眞解脫はすなはちこれ如來なり、至如來は即ちこれ涅槃なり、涅槃は即ちこれ無盡なり、無盡はすなはちこれ佛性なり、佛性はすなはちこれ決定なり、決定はすなはちこれ阿耨多羅三藐三菩提なりと。迦葉菩薩、佛に白してまうさく、世尊、もし涅槃と佛性と決定と如來と、これ一義名ならば、いかにぞ説きて三歸依ありとのたまへるや。佛、迦葉につげたまはく、善男子、一切衆生、生死を怖畏するが故に三歸をもとむ。三歸をもてのゆゑにすなはち佛性と決定と涅槃とを知るなり。善男子、法の名一義異なるあり、法の名義俱異なるあり。名一義異といふは、佛と常法と常比丘僧と

は常なり、涅槃、虚空みなまたこれ常なり。これを名一義異となづく。名義俱異といふは、佛を名けて覺となす、法を不覺となづく、僧を和合となづく、涅槃を解脱となづく、虚空を非善となづく、また無礙となづく、これを名義俱異とす。善男子、三歸依といふは、またくくかくのごとし」と。出略

またのたまはく、「光明は不羸劣になづく、不羸劣といふは名づけて如來といふ。また光明は名づけて智慧とす」と。

またのたまはく、「善男子、一切有爲はみなこれ無常なり。虚空は無爲なり。このゆゑに常とす。佛性は無爲なり、このゆゑに常とす。虚空はすなはちこれ佛性、佛性はすなはちこれ如來、如來はすなはちこれ無爲、無爲はすなはちこれ常、常はすなはちこれ法、法はすなはちこれ僧、僧はすなはち無爲、無爲はすなはちこれ常なり。至善男子、たとへば牛より乳をいだし、乳より酪をいだし、酪より生蘇をいだし、生蘇より熟蘇をいだし。熟蘇より醍醐をいだし、醍醐最上なり。もし服することあるものは、衆病みなこのぞこる。所有のものくくくの薬は、ことくくくその中にいるがごとし。善男子、佛もまたかくのごとし。佛より十二部經をいだし、十二部經より修多羅をいだし、修多羅より方等經をいだし、方等經より般若波羅蜜をいだし、般若波羅蜜より大涅槃をいだし、なほし醍醐のごとし、醍醐といふは佛性に喩ふ、佛性はすなはちこれ如來なり。善男子、かくのごときの義のゆゑに、説きて如來所有の功德、無量無邊不可稱計とのたまへり」と。出抄

【方等經】大乗の經典を意味す。
【般若波羅蜜】般若は智慧、波羅蜜は到彼岸、諸法の自性を否定しその平等の實相を證す

る智をもつて涅槃の彼岸に到るを意味す般若經に於ける空觀の哲學はその自性否定即ち諸法皆空の思想は大乗哲學一般の基調を爲せるものなり。

【戒定慧】戒は尸羅の譯語にして倫理的行為の實踐、定及び慧とともに三學と稱し佛教實踐學の全體を總攝す。

またのたまはく、「善男子、道に二種あり。ひとつには常、ふたつには無常なり。菩薩の相にまた二種あり。ひとつには常、ふたつには無常なり。涅槃もまたしかなり。外道の道をなづけて無常とす、内道の道をばこれをなづけて常とす。聲聞緣覺所有の菩提をなづけて無常とす、菩薩諸佛の所有の菩提これをなづけて常とす。外の解脱はなづけて無常とす、内の解脱はこれをなづけて常とす。善男子、道と菩提および涅槃と、ことごとくなづけて常とす。一切衆生はつねに無量の煩惱のためにおほはれて、慧眼なきがゆゑにみることをうることあたはずして、もろくの衆生、見んと欲ふがために戒定慧を修す。修行もてのゆゑに、道と菩提とおよび涅槃とをみる。これを菩薩得道菩提涅槃となづく。道の性相、實に不生滅なり。この義をもてのゆゑに提持すべからず。乃至道は色像なしといへども見つべし、稱量して知んぬべし。しかるに實に用あり。乃至衆生の心のごときは、これ色にあらず、長にあらず、短にあらず、麁にあらず、細にあらず、縛にあらず、解にあらず、見にあらずといへども、法としてまたこれ有なり」と。出抄

またのたまはく、「善男子、大樂あるがゆゑに大涅槃となづく。涅槃は無樂なり、四樂をもてのゆゑに、大涅槃となづく。何等をか四とする。ひとつには諸樂を斷するがゆゑに。樂を斷せざるはすなはちなづけて苦とす、もし苦あらば大樂となづけず。樂を斷するをもてのゆゑにすなはち苦あることなけん、無苦無樂をいまし大樂となづく。涅槃の性は無苦無樂なり、このゆゑに涅槃をなづけて大樂とす。この義をもてのゆゑに大涅槃となづく。

【愛】領納性を意味する心理現象。

【一切智】一切諸法の總相を對象とする智。

復つぎに、善男子、樂に二種あり、ひとつには凡夫、ふたつには諸佛なり。凡夫の樂は無常敗壞なり、このゆゑに無樂なり。諸佛は常樂なり、變易あることなきがゆゑに大樂となづく。またつぎに、善男子、三種の受あり。ひとつには苦受、ふたつには樂受、みつには不苦不樂受なり。不苦不樂これまた苦とす。涅槃も不苦不樂におなじといへども、しかも大樂となづく。大樂をもてのゆゑに大涅槃となづく。ふたつには大寂靜のゆゑになづけて大樂とす。涅槃の性これ大寂靜なり。なにをもつてのゆゑに一切憒鬧の法を遠離せるがゆゑに。大寂をもてのゆゑに大涅槃となづく。みつには一切智のゆゑになづけて大樂とす。一切智に非ざるをば大樂となづけず。諸佛如來は一切智のゆゑになづけて大樂とす。大樂をもてのゆゑに大涅槃となづく。よつには身の不壞のゆゑに大樂とす、身もし壞すべきはすなはち樂となづけず。如來の身は金剛にして壞なし、煩惱の身、無常の身にあらず、かるがゆゑに大樂となづく。大樂をもてのゆゑに、大涅槃となづく」と。

またのたまはく、「不可稱量、不可思議なるがゆゑに、なづけて大般涅槃とすることを得。純淨をもてのゆゑに大涅槃となづく。いかにが純淨なる。淨に四種なり。なんらをか四とする。ひとつには二十五有なづけて不淨とす。よく永く斷ずるがゆゑになづけて淨とする。ことを得、淨すなはち涅槃なり。かくのごときの涅槃、また有にして、これ涅槃となづくることをう。實にこれ有にあらず、諸佛如來、世俗にしたがふがゆゑに涅槃有なりと説きたまへり。たとへば世人、父にあらざるを父といひ、母にあらざるを母といふ。實に

【有漏】煩惱がそれに於て隨増するところの有爲法。無漏法なる聖道及び涅槃に對する語

【一闍提】斷善根の衆生、一般に無佛性不成佛のものとする。

父母にあらすして父母といふがごとし。涅槃もまたしかなり。世俗にしたがふがゆゑに、説きて諸佛有にして大涅槃なりとのたまへり。ふたつには業清淨のゆゑに、一切凡夫の業は不清淨のゆゑに涅槃なし。諸佛如來は業清淨のゆゑに、かるがゆゑに大淨となづく。大淨をもてのゆゑに大涅槃となづく。みつには身清淨のゆゑに、身もし無常なるをすなはち不淨となづく、如來の身は常なるがゆゑに大淨となづく。大淨をもてのゆゑに大涅槃となづく。よつには心清淨のゆゑに、心もし有漏なるをなづけて不淨といふ、佛心は無漏なるがゆゑに、大淨となづく。大淨をもてのゆゑに大涅槃となづく。善男子、これを善男子善女人となづく」と出抄

またのたまはく、「善男子、諸佛如來は煩惱起らず、これを涅槃となづく。所有の智慧法において無礙なり、これを如來とす。如來はこれ凡夫、聲聞、緣覺、菩薩にあらず。これを佛性となづく。如來は身心智慧、無量無邊阿僧祇の土に遍滿したまふ、障礙するところなし。これを虚空となづく。如來は常住にして變易あることなければ、なづけて實相といふ。この義をもてのゆゑに、如來は實に畢竟涅槃にあらず。これを菩薩となづく」と。
またのたまはく、「迦葉菩薩いはく、世尊、佛性は常なり、なほ虚空のごとし。なんがゆゑに如來ときて未來とのたまふやと。如來、もし一闍提のともがら善法なしとのたまはゞ、一闍提のともがら、それ同學、同師、父母、親族、妻子において、豈まさに愛念の心を生ぜざらべきや。もしそれ生ぜば、これ善にあらずやと。佛のたまはく、善哉善哉善男子、

【命】生命は食をとるを因とし、觸は色をみるを因とする。

【因果】因果法、特に倫理的要諦として因果法の否定を意味す。邪見はこの因果否定の見解をいふ。
【詞梨勒】その果卵形にして乾燥せば五稷となる。

こゝろよくこの問を發せり。佛性はなほ虚空のごとし。過去にあらず、未來にあらず、現在にあらず、一切衆生に三種の身あり。いはゆる過去未來現在なり。衆生、未來に莊嚴清淨の身を具足して、佛性をみることをえん。このゆゑにわれ佛性未來といへり。善男子、あるひは衆生のために、あるときは因をときて果とす、あるときは果をときて因とす。このゆゑに經のなかに、命をときて食とす、色をみるを觸となづく。未來の身、淨なるがゆゑに佛性ととく。世尊、佛の所説の義のごとし。かくのごときもの、なんがゆるぞ説きて一切衆生悉有佛性とのためる。善男子、衆生の佛性は、現在に無なりといへども、無といふべからず。虚空の性は、現在に無なりといへども、無といふことをえざるが如し。一切衆生、また無常なりといへども、しかもこれ佛性は常住にして變なし。このゆゑに、われ、この經のなかにおいて説く、衆生の佛性は、非内非外にして、なほ虚空の非内非外なるがごとしと。もしそれ虚空に内外あらば、虚空はなづけて一とし常とせず。また一切處に有といふことをえず。虚空はまた内にあらず外にあらずといへども、しかももろ／＼の衆生ごとく／＼みなこれにあり。衆生の佛性もまた／＼かくの如し。なんぢいふところの一闍提のともがらの如し、もし身業、口業、意業、取業、求業、施業、解業、かくのごときらの業あれどもごとく／＼これ邪業なり。なにをもてのゆるに。因果を求めざるがゆるに。善男子、詞梨勒の菓、根莖、枝葉、華實、こと／＼にがきがごとし。一闍提の業もまた／＼かくのごとしと。

【決定】
自性の決
定性。

【善星】
一比丘の
名。

またのたまはく、「善男子、如來は知諸根力を具足したまへり。このゆゑによく衆生の上中下根をさとり分別して、よくこの人をしろしめして下を轉じて中となす、よくこの人をしろしめして中を轉じて上となす、よくこの人をしろしめして上を轉じて下とす。このゆゑにまさに知るべし、衆生の根性に決定あることなし。定なきをもてのゆゑに。あるひは善根を斷ず、斷じをはりてかへりて生ず。もしもろくの衆生の根性、定ならば、つひにさきに斷じて、斷じをはりてまた生ぜざらん。また一闍提のともがら、地獄に墮して壽命一劫なりと説くべからず、善男子このゆゑに如來、一切の法は定相あることなしとときたまへり。迦葉菩薩、佛にまうしてまうさく、世尊、如來は知諸根力を具足して、さだめて善星まさに善根を斷ずべしとしろしめさん。なんの因縁をもて、その出家をゆるしたまふと。佛のたまはく、善男子、われ往昔のそのかみにおいて出家のとき、わが弟難陀從弟阿難、提婆達多、子羅睺羅、かくのこときらの輩、みなことごとく我にしたがひて出家修道す。われもし善星が出家をゆるさずば、そのひとつぎにまさに王位をつぐことをうべし。その力自在にしてまさに佛法を壞すべし。この因縁をもて、われ、すなはちその出家修道をゆるす。善男子、善星比丘もし出家せずば、また善根を斷ぜん。無量世においてすべて利益なけん。いま出家しをはりて善根を斷ずといへども、よく戒を受持して耆舊、長宿、有徳の人を供養恭敬せん、初禪乃至四禪を修習せん。これを善因となづく。かくの如きの善因よく善法を生ず。善法すで

【十力】佛陀の特
殊なる性能として
の十種の智力、知
諸根力はその一つ
なり。

【四重禁】殺生、
偷盜、邪淫、妄語を
いふ。

に生せば、よく道を修習せん。すでに道を修習せばまさに阿耨多羅三藐三菩提を得べし。このゆゑにわれ善星が出家をゆるす。善男子、もしわれ善星比丘が出家をゆるし戒を受けしめずば、すなはち我を稱して如來具足十力とすることをえざらん、乃善男子、如來よく衆生のかくのごときの上中下根をしらしめす。このゆゑに佛は具知根力と稱す。迦葉菩薩、佛にまうしてまうさく、世尊、如來はこの知根力を具足したまへり。この故によく一切衆生の上中下根、利鈍の差別をしらしめして、人にしたがひ、意にしたがひ、時にしたがふがゆゑに、如來、知諸根力となづけけたてまつる。乃あるひは、説きて犯四重禁、作五逆罪、一闍提等みな佛性ありといふことあり。至如來世尊、國土のためのゆゑに、時節のためゆゑに、他語のためのゆゑに、人のためのゆゑに、衆根のためのゆゑに、一法の中において二種の説をなす、一名の法において無量の名をとく、二義の中において無量の名をとく、無量の義において無量の名をとく。いかにが一名に無量の名をとくや。なほし涅槃のごとし。また涅槃となづく、また無生となづく、また無出となづく、また無作となづく、また無爲となづく、また歸依となづく、また窟宅となづく、また解脱となづく、また光明となづく、また燈明となづく、また彼岸となづく、また無畏となづく、また無退となづく、また安處となづく、また寂靜となづく、また無相となづく、また無二となづく、また一行となづく、また清涼となづく、また無闇となづく、また無礙となづく、また無諍となづく、また無濁となづく、また廣大となづく、また甘露となづく、また吉祥となづく、こ

【帝釋】須彌山頂上、忉利天の主宰神。

【阿羅呵】阿羅漢【三藐三佛陀】正遍知、正等覺等と譯さる。

【明行足】知(明)と行を具足完全せるもの。

【大福田】人天のため淨福を生ず。

【具足八智】四聖諦を對象として得る法智類智の八種の無漏智の如き、八智説の代表的なるもの。

【陰】色受想行識の五蘊。有漏法なる【蘊】有漏法なる五蘊は苦諦集諦、無漏法なる五蘊は道聖諦。【四念處】身、受、心、法の四法に就て次第の如く不淨

れを一名に無量の名をつくりとなづく。いかんが一義に無量の名をとくや。なほし帝釋のごとし。乃（佛如来のみなのごとし。如来の義異名異とす。また阿羅呵となづく、義異名異なり。また三藐三佛陀となづく、義異名異なり。また船師となづく、また導師となづく、また正覺となづく、また明行足となづく、また大師子王となづく、また沙門となづく、また婆羅門となづく、また寂靜となづく、また施主となづく、また到彼岸となづく、また大醫王となづく、また大象王となづく、また大龍王となづく、また施眼となづく、また大力士となづく、また大無畏となづく、また寶聚となづく、また商主となづく、また得解脱となづく、また大丈夫となづく、また天人師となづく、また大分陀利となづく、また獨無等侶となづく、また大福田となづく、また大智海となづく、また無相となづく、また具足八智となづく。かくのごとき一切義異名異なり。善男子、これを無量義の中に無量の名を説くとなづく。また一義に無量の名をとくことあり、いはゆる陰のごとし。またなづけて陰とす、また顛倒となづく、またなづけて諦とす、またなづけて四念處とす、また四食となづく、また四識住處となづく、またなづけて有とす、またなづけて道とす、またなづけて時とす、またなづけて衆生とす、またなづけて世とす、また第一義となづく、また三修となづく、いはく身滅心なり、また因果となづく、また煩惱となづく、また解脱となづく、また十二因縁となづく、また聲聞、支那となづく、また地獄餓鬼畜生人天となづく、また過去現在未來となづく。これを一義

苦、無常、無我と觀ずる實證法。

【四食】衆生の生有の根據となれる四種の食、段食、觸食、意思食、識食をいふ。何れも五蘊所攝の有爲法。

【四食住處】識別がその了別の對象を所依として立てる點から、その對象を識住若しくは識處といひ、五蘊中他の四蘊を配するもの、色識住乃至行識住といふ。

【有】存在、一切の存在は五蘊の法に入る。

【道】有爲法はまた世路と稱せらるる過去現在未來に行ずるが故に。

【時】有爲法は時間的變遷、無常相をその相とす。
【三修】身と業と心の調御に就ての實踐法。

に無量の名を説くとなづく。善男子、如來世尊、衆生のためゆゑに、廣のなかに略をとく、略のなかに廣をとく。第一義諦をときて世諦とす、世諦の法をときて第一義諦とすと。出略

またのたまはく、「迦葉またまうとく、世尊、第一義諦をまたなづけして道とす。また菩提となづく、また涅槃となづく」と。乃

またのたまはく、「善男子、われ經のなかに於て如來の身をとくに、おほよそ二種あり。ひとつには生身、ふたつには法身なり。生身といふは、すなはちこれ方便應化の身なり。かくのごとき身は、これ生老病死、長短、黑白、是此是彼、是學無學といふことをうべし。わがもろくの弟子、この説をきゝをはりて我が意をさとらざれば、となへていはく、

如來さだめて佛身はこれ有爲の法なりと説かん。法身はすなはちこの常樂我淨なり。永く一切生老病死、非白非黒、非長非短、非此非彼、非學非無學をはなれたまへば、もしは佛の出世および不出世につねに住し、動ぜずして變易あることなけん。善男子、わがもろもろの弟子この説をきゝをはりて、わが意をさとらざれば唱へていはく、如來さだめて、佛身はこれ無爲の法なりと説きたまへり」と。

またいはく、「わが所説の十二部經のごとし、あるひは隨自意説、あるひは隨他意説、あるひは隨自他意説なり。乃善男子、わが所説のごとき、十住の菩薩すこしく佛性をみる、これを隨他意説となづく。なにをもてのゆゑに少見となづくるやと。十住の菩薩は、首楞

【一切覺者】一切法を覺せるもの。佛性は覺性なり。

【阿摩勒菓】印度熱帶地方に産する阿摩勒樹の果實。

嚴等の三昧、三千の法門をえたり。このゆゑに、みづからまさに阿耨多羅三藐三菩提をうべきことを知るとも、一切衆生さだめて阿耨多羅三藐三菩提をえんことを見ず。このゆゑにわれ十住の菩薩少分佛性をみると説く。善男子、我つねに一切衆生悉有佛性と宣説する。これを隨自意説となづく。一切衆生は不斷不滅にして、乃至阿耨多羅三藐三菩提をうる。これを隨他意説と名づく。一切衆生はことごとく佛性あれども、煩惱おほへるがゆゑに、みることをうること能はずと、わが説かくのごとし、なんぢが説またしかなり。これを隨自他意説となづく。善男子、如來あるときは一法のためのゆゑに無量の法をとくと。 至抄

またいはく、「一切覺者をなづけて佛性とす。十住の菩薩は、なづけて一切覺とすることを得ざるがゆゑに、このゆゑに見るといへども明了ならず。善男子、見に二種あり。ひとつには眼見、ふたつには聞見なり。諸佛世尊は、眼に佛性をみそなはずこと、たなごゝろの中において阿摩勒菓をみるのごとし。十住の菩薩、佛性を聞見すれども、ことさらに了ならず。十住の菩薩、たゞよくみづからさだめて阿耨多羅三藐三菩提をうることを知りて、一切衆生ことごとく佛性ありとしることあたはず。善男子、また眼見あり、諸佛如來と十住の菩薩とは佛性を眼見す。また聞見することあり、一切衆生乃生九地までは佛性を聞見す。菩薩、もし一切衆生ことごとく佛性ありと聞けども、心に信を生ぜざれば聞見となづけずと。 乃至師子吼菩薩摩訶薩まうさく、世尊、一切衆生は如來の心相を知ることを得

ることあたはず、まさにいかんが觀じて知ることを得べきや。善男子、一切衆生は實に如來の心相を知ることあたはず。もし觀察して知ることを得んとおもはば、ふたつの因縁あり。ひとつには眼見、ふたつには聞見なり。もし如來所有の身業を見たてまつらんば、まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを眼見となづく。もし如來所有の口業を觀ぜん、まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを聞見となづく。もし色貌をみることに一切衆生のともに等しきものなけん。まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを眼見となづく。もし音聲微妙最勝なるをきかん、衆生所有の音聲にはおなじからじ。まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを聞見となづく。もし如來所有の神通をみたまつらんば、衆生のためとやせん、利養のためとやせん、もし衆生のためにして利養のためにはせず。まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを眼見となづく。もし衆生にせず。まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを聞見となづく。もし衆生觀するに、他心智をもて衆生を觀すとき、利養のために説き衆生のために説かん、もし衆生のためにして利養のためにはせず。まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを聞見となづく」と。出略

『淨土論』にはく、「世尊、われ一心に盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願す。かの世界の相をみそなはずに、三界の道に勝過せり。究竟して虚空のごとし、廣大にして邊際なし」と。

『註論』にはく、「莊嚴清淨功德成就は、偏は觀彼世界相、勝過三界道とのたまへる

【性起】 如來出現の謂。

【聖種性】 菩薩の修道の全過程を六種性として分類し、聖種性はその十地位に當る。

が故に。これいかんが不思議なるや。凡夫人、煩惱成就せるありて、またかの淨土に生ずることをうるに、三界の繫業畢竟して牽かず。すなはちこれ煩惱を斷せずして涅槃分を得、いづくんぞ思議すべきや」と。

またいはく、「正道の大慈悲は出世の善根より生ずといへり。この二句は莊嚴性功德成就となづく。乃至性はこれ本の義なり。いふこゝろは、これ淨土は法性に隨順して法本にそむかず。事、『華嚴經』の寶王如來の性起の義に同じ。またいふこゝろは、積習して性をなす、法藏菩薩もろくの波羅蜜をあつめて積習して成ぜるところなるを指す。また性といふはこれ聖種性なり。はじめ法藏菩薩、世自在王佛のみもとにして無生忍をさとる、そのときのくらしを聖種性となづく、この性のなかにして四十八の大願をおこして、この土を修起したまへり。すなはち安樂淨土といふ。これかの因の所得なり。果のなかに因をとく、かるがゆゑに名づけて性とす。また性といふはこれ必然の義なり、不改の義なり。海の性一味にして、衆流いるものかならず一味となりて、海の味かれにしたがひて改まらざるがごとし。また、人身の性不淨なるがゆゑに、種々の妙好、色香美味、身にいりぬればみな不淨となるがごとし。安樂淨土は、もろくの往生の者、不淨の色なし、不淨の心なし。畢竟じてみな清淨平等無爲法身をえしむ。安樂國土清淨の性成就したまへるをもての故なり。正道の大慈悲は出世の善根より生ずといふは、平等の大道なり。平等の道をなづけて正道とするゆゑは、平等はこれ諸法の體相なり。諸法平等なるをもてのゆ

【三縁】慈悲をその対象に随つて三種に分類す、衆生の縁とは一切衆生の相を對象とするもの、法縁とは衆生の相を見ず、一切法の縁起となる法の相を對象とするもの、無縁とは法相衆生の相を見ず、一切諸相の寂滅にありて越さるるもの。

【實際】究極の否定、時に實體の否

るに發心ひとし、發心ひとしきがゆるるに道ひとし、道ひとしきがゆるるに大慈悲ひとし、大慈悲はこれ佛道の正因なるがゆるるに、正道大慈悲といへり、慈悲に三縁あり、ひとつには衆生縁、これ小悲なり。ふたつには法縁、これ中悲なり。みつには無縁、これ大悲なり。大悲はすなはちこれ出世の善なり、安樂淨土はこの大悲より生ぜるがゆるるなればなり。かるがゆるるにこの大悲をいひて淨土の根とす、かるがゆるるに出世善根生といふなり」と。

またいはく、「問うていはく、法藏菩薩の本願力、および龍樹菩薩の所讚をたづぬるに、みなかの國に聲聞は衆多なるをもて奇とするにたり、これなんの義かある。こたへていはく、聲聞は實際をもて證とす、計るにさらによく佛道の根芽を生ずべからず。しかるを佛本願の不可思議の神力をもて、攝してかしこに生ぜしむるに、必ずまさにまた神力をもてそれをして無上道心を生ぜしむべし。たとへば、鶴鳥水にいれば魚蜂ことごとく死す、犀牛これにふるれば死するもの皆よみがへるがごとし。かくのごとき生ずべからずして生ぜしむ、このゆるるに奇とす。しかれば五不思議のなかに佛法最も不可思議なり、佛よく聲聞をしてまた無上道心を生ぜしめたまふ。まことに不可思議の至なり」と。

またいはく、「不可思議力といふは、總てかの佛國土の十七種莊嚴功德力不可得思議なることをさす。諸經にときてのたまはく、五種の不可思議あり。ひとつには衆生多少不可思議、ふたつには業力不可思議、みつには龍力不可思議、よつには禪定力不可思議、いつには佛法力不可思議なり。このなかに佛土不可思議に二種のちからあり。ひとつには業力。

いはく法藏菩薩の出世の善根と大願業力の所成なり。ふたつには正覺の阿彌陀法王のよく住持力をして攝したまふところなり」と。

またいはく、「自利利他を示現すといふは、略してかの阿彌陀佛の國土の十七種の莊嚴功德成就をときつ、如來の自身利益大功徳力成就と、利益他功德成就とを示現したまへるがゆゑにとのたまへり。略といふは、かの淨土の功德無量にして、たゞ十七種のみにあらずることをあらはす。それ須彌を芥子にいれ毛孔に大海ををさむ。豈山海の神ならんや、毛芥のちからならんや、能神の神なるのみ」と。

またいはく、「なにものか莊嚴不虛作住持功德成就」に佛の本願力を見そなはずに、遇うてむなしくすぐるものなし。よく功德大寶海を満足せしむるがゆゑにとのたまへり。不虛作住持功德成就といふは、蓋しこれ、阿彌陀如來の本願力なり。至いふところの不虛作住持は、もと法藏菩薩の四十八願と、今日の阿彌陀如來の自在神力とによりてなり。願もて力を成す、力もて願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず、力願あひ符うて畢竟じてたがはず。かるがゆゑに成就といふ」と。

出抄

『讚阿彌陀佛偈』には、尙の造「南無阿彌陀佛」を釋して無量壽佛經となづく。ほ成佛よりこのかた十劫をへたまへり、壽命まさに量あることなけん。法身の光輪法界に徧じて、世の盲冥をてらす、かるがゆゑに頂禮したてまつる。

智慧の光明量るべからず、かるがゆゑに佛をまた無量光と號す。有量の諸相光暎をか

うぶる、このゆゑに眞實明を稽首したてまつる。

解脱の光輪限齊なし、かるがゆゑに佛をまた無邊光と號す。光觸をかうぶる者有無をはなる、このゆゑに平等覺を稽首したてまつる。

光、雲のごとくにして無礙なること虚空のごとし、かるがゆゑに佛をまた無礙光と號す。一切の有礙、光澤をかうぶる、このゆゑに難思議を頂禮したてまつる。

清淨光明對あることなし、かるがゆゑに佛をまた無對光と號す。この光にまうあふものは業繫のぞこる、このゆゑに畢竟依を稽首したてまつる。

佛光照耀して最第一なり。佛をまた光炎王と號す。三塗の黒闇、光啓をかうぶる、このゆゑに大應供を頂禮したてまつる。

道光明朗にして色超絶したまへり、かるがゆゑに佛をまた清淨光と號す。ひとたび光照をかうぶるに罪垢除こり、みな解脱をえしむ、かるがゆゑに頂禮したてまつる。

慈光はるかにかぶらしめ安樂を施す、かるがゆゑに佛をまた歡喜光と號す。ひかりの至る所の處に法喜をえしむ、大安慰を稽首頂禮したてまつる。

佛光よく無明の闇を破す、かるがゆゑに佛をまた智慧光と號す。一切諸佛三乘衆ことごとくともに嘆譽す、かるがゆゑに稽首したてまつる。

光明一切のとき普くてらす、かるがゆゑに佛をまた不斷光と號す。聞光力のゆゑに心不斷にてみな往生をえしむ、かるがゆゑに頂禮してまつる。

【像始】 像法時の始、佛陀の入滅を基點とし佛教興衰を中心として三つの時代觀を立つ。像法時は正法時に次ぐ第二の時代に【歡喜地】 十地の第一。龍樹の歡喜地の聖者たること楞伽經に佛陀の豫言として説く。

そのひかり佛をのぞきてはよく測ることなけん、かるがゆるゑに佛をまた難思光と號す。十方諸佛往生を嘆じその功德を稱せしむ、かるがゆるゑに稽首したてまつる。神光は相をはなれたること名づくべからず、かるがゆるゑに佛をまた無稱光と號す。光に因りて成佛したまふ、光赫然として諸佛の嘆じたまふところなり、かるがゆるゑに頂禮したてまつる。

光明 照曜して日月にすぎたり、かるがゆるゑに佛を超日月光と號す。釋迦佛嘆じたまふことなほつきず、かるがゆるゑにわれ無等々を稽首したてまつる。至 乃 本師龍樹摩訶薩、かたちを像始に誕じて、類綱をことわる、邪扇を關閉して、正轍をひらく、これ閻浮提の一切のまなこなり。尊語を伏承し、歡喜地にして阿彌陀に歸して安樂に生ぜしむ。

われ無始より三界にめぐりて虚妄輪のために廻轉せらる。一念一時につくるところの業足六道に繋かれ三塗にとゞまる。やゝねがはくば、慈光護念してわれをして菩提心を失せざらしめたまへ。われ佛慧功德のこゑを讃す。ねがはくば、十方のもろくの有縁にきかして、安樂に往生することを得しめんとおもはんもの、普くみな意のごとくして障礙なからしめん。あらゆる功德、もしは大小一切に廻施してともに往生せしめん。不可思議光に南無し、一心に歸命し稽首し禮したてまつる。十方三世の無量慧おなじく一如に乗じて正覺と號す。二智圓滿して道平等なり。攝化す

【十方無礙人】 十方諸佛。

ること縁にしたがふ、まことにそこばくならん。われ、阿彌陀の淨土に歸するは、即ちこれ諸佛の國に歸命するなり。われ、一心をもて一佛を讀す。ねがはくば、十方無礙人に徧ぜん。かくのごとき十方無量佛、ことごとくおのゝ心をして頭に禮したてまつるなり」と。抄出

【三大僧祇】 菩薩の發心より佛陀となるに至る修道の全時間を三阿僧祇(無數)劫と百大劫とす、三阿僧祇劫は正しく菩薩が菩提の資料を積集する時間なり。

光明寺の和尚のたまはく、「問うていはく、彌陀淨國ははたこれ報なりやこれ化なりとやせん。こたへていはく、これ報にして化にあらず。いかんが知ることをうる。『大乘同性經』にとくがごとし。西方の安樂阿彌陀佛はこれ報佛報土なりと。また『無量壽經』にのたまはく、法藏比丘、世饒王佛のみにましくて、菩薩の道を行じたまひしとき。四十八願をおこして一々の願に、もしわれ佛をえたらんに、十方の衆生、わが名號を稱してわが國に生ぜんと願ぜん、しも十念にいたるまで、もし生ぜずば正覺をとらじと。いまずでに成佛したまへり、すなはちこれ酬因の身なり。また『觀經』のなかに、上輩三人臨命終時に、みな阿彌陀佛および化佛とともにこのひとを來迎すと。しかるに報身、化をかねてともに來りて手をさづく。かるがゆゑに名づけて與とす。この文證をもてのゆゑに知んぬ、これ報なりと、しかるに、報應二身は眼目の異名なり。さきには報を酬じて應となす、のちには應を酬じて報となす。おほよそ報といふは因行むなしからず、さだめて來果をまねく。果をもて因に應ず、かるがゆゑになづけて報とす。また三大僧祇の所修の萬行、必定して菩提をうべし。今すでに道成ぜり、すなはちこれ應身なり。これすなはち過

【八相】 佛陀の生涯をその主要なる事項によりて八種の相として要説せるもの、從兜率天下相、託胎相、出生相、出家相、降魔相、成道相、轉法輪相、入涅槃相をいふ。

【須菩提】 有名な佛弟子の一人、解空第一と稱せらる。

【四正勤】 已生の惡法は除斷し、未生の惡法は生ぜざらしめ、已生の善法は増長し、未生の善法は生ぜしむる四事の勤修。

【四如意足】 神通如意なることを得る定を、その定を得る爲めの方法の名によりて四種に別てるもの、但し禪定は神通如意なることの根據なるが故に神通如意の

現の諸佛三身を辨立す、これをのぞきて已外はさらに別の體まします。たとひ無窮の八相、名號塵沙なりとも體に尅して論ぜば、すべて化に歸して攝す。いまかの彌陀、現にこれ報なり。問うていはく、すでに報といふは報身常住にしてながく生滅なし。なんがゆゑぞ『觀音授記經』にとかく、阿彌陀佛また入涅槃の時ありと。この一義いかんが通釋せんや。答へていはく、入不入の義はたゞこれ諸佛の境界なり。なほ三乘淺智のうかゞふところにあらず、豈いはんや小凡たやすく能く知らんや。しかりといへども、かならず知らんと欲はゞ、あへて佛經をひきてもて明證とせん。いかんとならば、『大品經』の「涅槃非化品」のなかに説きていふが如し。佛、須菩提に告げたまはく、汝がこゝろにおいていかん、もし化人ありて化人をなす、この化、すこぶる實事ありやいなや、むなしきものなりやいなや、須菩提まうさく、いななり、世尊。佛、須菩提に告げたまはく、色すなはちこれ化なり、受想行識すなはちこれ化なり、乃至一切種智すなはちこれ化なり。須菩提、佛に白してまうさく、世尊、もし世間の法これ化なりや、出世間の法またこれ化なりや。いはゆる四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脱門、佛十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、ならびに諸法の果および賢聖人、いはゆる須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛世尊、この法またこれ化なりやいなや。佛、須菩提に告げたまはく、一切の法はみなこれ化なり。この法のなかにおいて聲聞法の變化あり、辟支佛法の變化あり、菩薩法の變化あり、諸佛法の變化あり、煩惱法の變化あり、

足と稱す。その四
種とは、欲如意足
精進如意足、心如
意足、思惟如意足
にして、欲乃至思
惟は即ちこの禪定
を得る方法となる
もの。

業因縁法の變化あり。この因縁をもてのゆゑに、須菩提、一切の法みなこれ化なり。須菩提、佛にまうしてまうさく、世尊、このもろ／＼の煩惱斷は、いはゆる須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道はもろ／＼の煩惱の習を斷ず。みなこれ、變化なりやいなや。佛、須菩提につげたまはく、もし法の生滅の相あるはみなこれ變化なり。須菩提、まうさく、世尊、なんらの法が變化にあらざると。佛のたまはく、もし法の無生無滅なる、これ變化にあらざと。須菩提、まうさく、なんらかこれ不生不滅にして變化にあらざると。佛のたまはく、誑相なき涅槃、この法變化にあらざと。世尊、佛みづから説きたまふがごとき、諸法平等にして聲聞の作にあらざ、辟支佛の作にあらざ、諸菩薩摩訶薩の作にあらざ、諸佛の作にあらざ、有佛無佛諸法の性つねに空なり。性空なるすなはちこれ涅槃なり。いかなるか涅槃の一法、化のごとくにあらざると。佛、須菩提につげたまはく、かくのごとしかくのごとし、諸法は平等にして聲聞の所作にあらざ、乃至性空なるすなはちこれ涅槃なり。この新發意の菩薩、この一切の法みな畢竟じて性空なり。乃至涅槃もまたみな化のごとしときかば、心すなはち驚怖しなん。この新發意の菩薩のために、ことさらに生滅のもの化のごとし、不生不滅のものは化のごとくにあらざと分別するをや。今すでにこの聖教をもてあきらかに知んぬ。彌陀はさだめてこれ報なり、たとひ後に涅槃にいらんもその義さまたげなし、もろ／＼の有智のひと知るべし。問うていはく、かの佛および土、すでに報といはゞ、報法高妙にして小聖かなひがたし。垢障の凡夫いかにあることをえん

【五乘】人間、天、
聲聞、緣覺、菩薩の
五道。
【夫人】韋提希夫
人。

【利物】衆生を利
益す。

や。答へていはく、もし衆生の垢障を論ぜば、實に忻趣しがたし。まさしく佛願に託して以て強緣となるによりて、五乗をして齊しく入らしむることを致す」と。

またいはく、「我今衆生彌陀より已下は、正しく夫人別して所求をえらぶことをあかす。これ彌陀の本國は四十八願なり、願々みな増上の勝因を發す。因によりて勝行をおこす、行によりて勝果を感ず、果によりて勝報を感成す、報によりて極樂を感成す、樂によりて悲化を顯通す、悲化によりて智慧の門を顯開す。しかるに悲心無盡なり、智また無窮なり。悲智雙行してすなはちひろく甘露をひらく。これによりて法潤あまねく群生を攝す。諸餘の經典、勸處ひろくおなじ。衆聖、心をひとしくして、みなおなじく指讀す。この因緣ありて、如來、ひそかに夫人をして別して選ばしむることを致すことをあかす」と。

またいはく、「西方寂情無爲の樂は、畢竟逍遙して有無をはなれたり。大悲心に薰じて法界にあそぶ、分身利物ひとしくして殊なし。いさいなん。魔郷にはとどまるべからず。曠劫よりこのかた流轉して六道ことごとくみな還たり。到るところに餘の樂なし、たゞ愁嘆の聲をきく。この生平ををへてのち、かの涅槃のみやこにいらん」と。

またいはく、「極樂は無爲涅槃界なり、隨緣の雜善おそらくは生じがたし。かるがゆゑに如來、要法をひらびて、をしへて彌陀を念ぜしむること専らにしてまた専らならしむ」と。またいはく、「佛にしたがひて、逍遙して自然に歸す。自然は即ちこれ彌陀國なり、無漏無生還りてすなはち眞なり。行來進止に、つねに佛にしたがうて無爲法性身を證得す」と。

【性】佛性。
 【經】涅槃經。
 【隨順】眞如への隨順と眞如の得(證)入。

【得入】以下の解釋は唐撰錫の念佛三昧寶王論。
 【妙覺】究竟の覺佛の正覺。
 【初生の相】一心

の初起を覺して念を離れ心性なる眞如に證入するは究竟覺、非究竟覺なる十倍乃至十地の凡聖は唯その住相異相滅相を覺するのみ。

またいはく、「彌陀の妙果をば號して無上涅槃といふ」と。已上抄出
 懺興師のいはく、「無量光佛の算數にあらざりて無量光縁としてらざるわづらふことなし。無礙光佛く障ることなきが故に無對光佛にあらざるがゆゑに。光炎王佛に自在にしてさらにうへ清淨光佛の善根よりして現するがゆゑに。また衆生の貪濁の心をのぞく、貪濁の心なきがゆゑに清淨といふ。歡喜光佛く無礙の善根よりして生ずるが故に。上智慧光佛生の無用品心をのぞくがゆゑに、また衆不斷光佛益をなすがゆゑに難思光佛するところあらざるに。無稱光佛ころにあらざるがゆゑに。超日月光佛日はつねにてらすことあまねからざるに。みなこれ光觸を身にかうぶる者は、身心柔軟の願の致すところなり」と。已上要をとる

爾れば如來の眞説、宗師の釋義、明かに知んぬ、安養淨刹は眞の報土なることを顯す。惑染の衆生こゝにして性をみることに能はず、煩惱におほはるゝがゆゑに「經」に「われ十住の菩薩、少分佛性をみる」と説くとのたまへり。かるがゆゑに知んぬ、安樂佛國にいたれば即ちかならず佛性を顯はす、本願力の廻向によるがゆゑに。また「經」には「衆生未來に清淨の身を具足し莊嚴して、佛性をみることを得る」とのたまへり。

『起信論』にはく、「もし説くといへども、能説の説くべきあることなく、また能念の念すべきものなしと知るを、なづけて隨順とす。もし念をはなるゝをなづけて得入とす。『得入といふは眞如三昧なり。いかにいはんや無念の位は妙覺にあり。けだし、もて心の初生の相を了するなり。しかも初相をしるといふば、いはゆる無念は、菩薩十地のしるところにあらず。しかるにいまの人なほ未だ十信にかなはず、すなはち馬鳴大士の説より無説に

いり、念ねんより無念むねんに在るといふによらざらんや」と。

それ報ほうを按おさずれば、如來にょらいの願海がんかいによりて果成くわじやうの土つちを酬報しうほうせり。かるがゆるゑに報ほうといふ。しかるに願海がんかいについて眞しんあり、假げあり。こゝをもて、また佛土ぶつどについて眞しんあり、假げあり。選擇せんたく本願ほんがんの正因しやういんによりて眞佛土しんぶつどを成就じやうじゆせり。眞佛しんぶつといふは、『大經だいじやう』には無邊光むへんくわう佛ぶつ、無礙光佛むげくわうぶつとのたまへり。また諸佛しよぶつのなかの王わうなり。光明くわうめうのなかの極尊ごくそんなりとのたまへり。上『論ろん』には歸命盡きみぢん十方無礙光如來じふぱうむげくわうにょらいといへり。眞土しんとといふは『大經だいじやう』には無量光むりやうくわう明土めいどとのたまへり、あるひは諸智土しよちどとのたまへり。上『論ろん』には究竟くわうじやう如虛空にょくわうくわう廣大無邊際だいくわんげんといふ。往生わうじやうといふは、『大經だいじやう』には皆受自然虛無之身かいたんじねんこむしん無極之體むごくのたいとのたまへり。上『論ろん』には如來淨華衆にょらいじやうけしゆしやう正覺華化生しやうかくけしやうといへり、また同一念佛無別道故どういねんぶつむべつだうこといへり。また難思議なんしぎ往生わうじやうといふこれなり。

假げの佛土ぶつどといふは、しもにありて知るべし。すでにもて眞假しんげみなこれ大悲だいひの願海がんかいに酬報しうほうせり、かるがゆるゑに知んぬ報佛土ほうぶつどなりといふことを。まことに假げの佛土ぶつどの業因ごふいん千差せんさなれば、土どまた千差せんさなるべし、これを方便ほうべん化身けしん土どとなづく。眞假しんげを知らざるによりて、如來にょらい廣大くわんだいの恩德おんとくを迷失めいしつす。

これによりて、いま眞佛眞土しんぶつしんとをあらはす、これすなはち眞宗しんしゆの正意しやういなり。經家論家きやうけろんけしやうの正說せつ、淨土宗師じやうどしゆしの解義げぎ、あふいで敬信かうしんすべし、ことに奉持ぶうちすべし。しかるべしとなり。

顯淨土眞佛土文類五

【方便化身土】淨土眞實に對する上方便に對する淨土教に對する外教の批判を加ふ。

【至心發願の願】

淨土の方便は彌陀の第十九願なる至心發願の願及び釋迦の觀經に依るもの第二十願なる至心廻向の願及び阿彌陀經に依るもの第二十願たるもの別に於て、前者は如來の願心を知らず、自力諸行による方便化土往生なるが故に、邪定聚の雙樹林下往生といはる。雙樹林とは佛陀入滅の聖地、蓋し臨終の象徴せるものか、邪定聚は臨終に直面して始めて念佛の機たるが故に、後者は正定邪定の中なる不定に於て本願を信じつ

顯淨土方便化身土文類 六

愚禿釋親鸞集

至心發願の願 量壽佛觀經のこゝろなり。
至心廻向の願 彌陀經のこゝろなり。
謹んで、化身土をあらはさば、佛といふは「無量壽佛觀經」の説のごとし、眞身觀の佛これなり。土といふは「觀經」の淨土これなり。また「菩薩處胎經」等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり。また「大無量壽經」の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり。

しかるに、濁世の群萌、穢惡の含識、乃し九十五種の邪道をいで、半滿權實の法門に入るといへども、眞なるものはなほだもて難く、實なるものはなほだもて希なり、偽なるものはなほだもておほく、虚なるものはなほだもて滋し。
こゝをもて、釋迦牟尼佛、福德藏を顯説して群生海を誘引し、阿彌陀如來、もと誓願をおこしてあまねく諸有海を化したまふ。
すでにして、悲願います、修諸功德の願となづく、また臨終現前の願となづく、また

も疑惑を帯せるもの、即ち自力念佛によりて方便化土往生を得る。その往生、名號の徳に依るが故に難思といはる。

【憍慢界】 憍慢化されたる淨土。

【疑城胎宮】 佛智の疑惑に限定されたる淨土。

【半滿權實】 全佛の教に於ける諸教の分類。

【福德藏】 觀經の教説を意味す。

【修諸功德】 第十願。

【定散九品】 定善と散善九品、定善は淨土莊嚴の觀想散善は宗教的乃至倫理的實踐にして衆生の機根に隨つて願生の行をもつて願生の行とせらる。

現前導生の願となづく、また來迎引接の願となづく、また至心發願の願となづくべきなり。

こゝをもて『大經』の願にのたまはく、「たとひわれ佛をえたらんに、十方の衆生、菩提心をおこし、もろくの功德を修し、心を至し發願して、我が國に生ぜんとおもはん、壽終のときにのぞんで、たとひ大衆と圍遶して、その人のまへに現せずといはば、正覺をとらじ」と。

『悲華經』の「大施品」にのたまはく、「願はくばわれ、阿耨多羅三藐三菩提をなりをはらんに、その餘の無量無邊阿僧祇の諸佛世界の所有の衆生、もし阿耨多羅三藐三菩提心をおこし、もろくの善根を修して、わが界に生ぜんとおもはんもの、臨終のときわれまことに大衆と圍遶してその人の前に現すべし。その人われをみて、すなはちわが前にして心に歡喜を得ん。われをみるをもてのゆるに、もろくの障闕をはなれて、すなはち身をすて、わが界に來生せしめん」と。

この願成就の文は、すなはち三輩の文これなり、『觀經』の定散九品の文これなり。

また『大經』にのたまはく、「無量壽佛の、その道場樹は高さ四百萬里なり、そのもと周圍五十由旬なり、枝葉よもにしきて二十萬里なり。一切の衆寶自然に合成せり、月光摩尼、持海輪寶、衆寶の王たるをもて、しかもこれを莊嚴せり。至阿難、もしかの國の人天、この樹をみるものは、三法忍をえん。一には音響忍、二には柔順忍、三には無生法忍なり。

【三法忍】法忍は法を忍可して心不動なるの意、その淺深に隨つて開法による忍とその法の思惟による忍とその法を自證せる忍との三種の別を立てるもの。

【胎生化生】生出形式の二種。信心は眞土に化生し疑惑は化土に胎生す

【罪福】善惡の因果を信ずる心を以て念佛す。

これみな無量壽佛の威神力のゆゑに本願力のゆゑに、満足願のゆゑに、明了願のゆゑに、堅固願のゆゑに、究竟願のゆゑなり。乃至また講堂精舍宮殿樓觀、みな七寶をもて莊嚴し、自然に化成せり。また眞珠明月摩尼樂寶をもて交露とす、そのうへに覆蓋せり。内外左右にもろくの浴地あり、十由旬あるひは二十、三十、乃至百千由旬なり。縱廣深淺おのゝみなど一なり。八功德水湛然として盈滿せり、清淨香潔にしてあぢはひ甘露のごとしと。

またいはく、「その胎生のものは、處するところの宮殿、あるひは百由旬、あるひは五百由旬なり。おのゝ、そのなかにして、もろくの快樂をうくること切利天上のごとし、またみな自然なり。そのときに慈氏菩薩、佛にまうしてまうさく、世尊、なんの因なんの緣ありてか、かのくにの人民、胎生化生なると。佛、慈氏につげたまはく、もし衆生ありて、疑惑の心をもて、もろくの功德を修して、かのくに、生ぜんと願ぜん。佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了せずして、この諸智において疑惑して信ぜず、しかもなほ罪福を信じて、善本を修習して、そのくに、生ぜんと願ぜん。このもろくの衆生、かの宮殿に生じて、いのち五百歳、つねに佛をみたまつらず經法をきかず、菩薩聲聞聖衆をみず、このゆゑにかの國土をばこれを胎生といふ。乃至彌勒、まさにするべし。かの化生のものは智慧勝れたるがゆゑに、その胎生のものはみな智慧なし。乃至佛、彌勒につげたまはく、たとへば轉輪聖王の七寶の牢獄あらんがごとし。種々に莊嚴

【阿逸多】
薩の姓。

彌勒菩薩

し、牀帳を張設し、もろ／＼の繪幡をかけたらん。もしもろ／＼の小王子、罪を玉にえたらんに、すなはちかの獄のなかにいれて、つなぐに金鎖をもてせん。至佛、彌勒につげたまはく、このもろ／＼の衆生、亦復かくのごとし。佛智を疑惑するをもてのゆゑに、かの胎宮に生まれん。至もしこの衆生その本の罪をしりて、ふかくみづから悔責して、かのところを離るゝことをもとめん。至彌勒まさにしるべし。それ菩薩ありて疑惑を生ぜば大利を失すとす」と。抄出 已上

「如来會」にのたまはく、「一佛、彌勒につげたまはく、もし衆生ありて、疑悔に墮し善根を積集して、佛智、普遍智、不思議智、無等智、威徳智、廣大智を希求せん。みづからの善根において信を生ずることあたはず。この因縁をもて五百歳において宮殿のなかに住せん。至阿逸多、なんぢ殊勝智の者を觀するに、かれは廣慧の力に因るがゆゑに、かの蓮華のなかに化生することを受けて、結跏趺坐せん。なんぢ下劣のともがらを觀するに、至もろもろの功德を修習することあたはず、かるがゆゑに因なくして無量壽佛に奉事せん。このもろ／＼の人等はみなむかしの縁、疑悔の致すところとなす。至佛、彌勒につげたまはく、かくのごとしかくのごとし。もし疑悔に墮して、もろ／＼の善根を種ゑて、佛智乃至廣大智を希求することあらん。みづからの善根において、信を生ずることあたはず。佛の名をきくに由りて信心をおこすがゆゑに、かのくにに生ずといへども、蓮華のなかに出現することを得ず。かれらの衆生、華胎のなかに處すること、なほし園苑宮殿の想のごとし」

と。要を抄す

『大經』にのたまはく、「もろくのの小行の菩薩、および少功德を修習するもの稱計すべからず、みなまことに往生すべし」と。

またいはく、「いはんや餘の菩薩、少善根によりてかのくにに生ずるもの、稱計すべからず」と。

【邊界】大經には邊地と言はる、淨土の邊界邊地。

光明寺の釋にのたまはく、「華にふくまれて未だ出でず、あるひは邊界に生じあるひは懷興師のいはく、「佛智を疑ふに由りて、かの國にうまれて、しかも邊地にありといへども、理化の事を被らず。もし胎生せば、よろしくこれをおもく捨つべし」と。

首楞嚴院の『要集』に、感禪師の釋をひきていはく、「問ふ、『菩薩處胎經』の第二にとかく。西方この閻浮提を去ること十二億那由陀に憍慢國あり。至意を發せる衆生、阿彌陀佛のくにに生ぜん」と欲ふもの、みなふかく憍慢國土に著して、すゝんで阿彌陀佛のくにに生ずることあたはず。億千萬衆、ときに一人ありてよく阿彌陀佛のくにに生ずと云々。この經をもて准難するに、生ずることをうべきや。答ふ、『群疑論』に善導和尚の前の文をひきて、しかもこの難を釋してまたみづから助成していはく、この經のしもの文にいはく、何を以てのゆゑに、みな憍慢によりて執心牢固ならずと。こゝに知んぬ、雜修のものは執心不牢のひととす、かるがゆゑに憍慢國に生ず。もし雜修せずして専らこの業を行せば、これ

【要集】源信の往生要集(下、末)。

【念佛證據門】 往生要集第八章。
【別願】 彌陀の特殊なる本願の意。四十八願をいふ。

【大本の三心】 無量壽經の三心、第十八願に於ける至心、信樂、欲生。
【觀經の三心】 至誠心、深心、廻向發願中。
【釋家】 善導。
【利他】 本願廻向の信心。

【別選】 韋提希が特に彌陀の淨土を選擇せること。

すなはち執心牢固にして、さだめて極樂に生ぜん。至また報の淨土に生ずるものはきはめてすくなし、化の淨土に生ずるものはすくなからず。かるがゆゑに經の別説、實に相違せざるなり」と。已上略抄

しかれば、それ楞嚴の和尙の解義を按ずるに、「念佛證據門」の中に、「第十八の願は別願のなかの別願なり」と顯聞したまへり。「觀經」の定散の諸機は、極重惡人唯稱彌陀と勸勵したまへり。濁世の道俗、よく自らおのれが能を思量せよ。しるべし。

問ふ、『大本』の三心と「觀經」の三心と一異いかんぞ。答ふ。釋家の意によりて「無量壽佛觀經」を按ずれば、顯彰隱密の義あり。

顯といふは、すなはち定散諸善を顯し、三輩三心を開く。しかるに二善三福は、報土の眞因にあらず。諸機の三心は、自力各別にして、しかも利他の一心にあらず。如來の異の方便、忻慕淨土の善根なり。これはこの經のこゝろなり。すなはちこれ顯の義なり。

彰といふは、如來の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。達多闍世の惡逆によりて、釋迦微笑の素懷を彰し、韋提別選の正意に因りて、彌陀大悲の本願を開闡す。これすなはちこの經の隱彰の義なり。

こゝをもて經には致我觀於清淨業處といへり。清淨業處といふは、すなはちこれ

【三種の三心】定散二機の二種三心と本願廻向三信心
 【二種の往生】雙樹林下往生なる便往生と難思議往生なる即往生

【浄土の要門等】要門は往生の爲めに主要なる門の意

本願成就の報土なり。教我思惟といふは、即ち方便なり。教我正受といふは、即ち金剛の眞心なり。諦觀彼國淨業成者といへり、本願成就の盡十方無礙光如來を觀知すべしとなり。廣說衆譬といへり、則ち十三觀これなり。汝是凡夫心想羸劣といへり、則ちこれ惡人往生の機たることを彰す。諸佛如來有異方便といへり、すなはちこれ定散の諸善は、方便の教たることを顯す。以佛力故見彼國土といへり、これすなはち他力のこゝろをあらはす。若佛滅後諸衆生等といへり、すなはちこれ未來の衆生往生の正機たることをあらはす。若有合者名爲龜想といへり、これ定觀成じがたきことをあらはす。於現身中得念佛三昧といへり、すなはちこれ定觀成就の益は、念佛三昧をうるをもて觀の益とすることをあらはす、すなはち觀門をもて方便の教とせるなり。發三種心即便往生といへり、また復有三種衆生當得往生といへり。これらの文によるに、三輩について三種の三心あり、また二種の往生あり。良に知んぬ、これいましこの經に顯彰隱密の義あることを。二經の三心、まさにな異を談ぜんとす、よく思量すべきなり。『大經』、『觀經』顯の義によれば異なり、彰の義によれば一なり。知るべし。

爾れば光明寺の和尚のたまはく、「然るに娑婆の化主、その請によるが故に、即ちひろく淨土の要門をひらき、安樂の能人、別意の弘願を顯彰す。その要門といふは、すなはちこの『觀經』の定散二門これなり。定はすなはち慮を息めてもて心を凝らす、散はすな

而してそれは衆生の當面の要請に應ずる顯説、別意の弘願は如來の要求としてその顯説に彰る意味。

【二藏】 聲聞藏と菩薩藏。
【二教】 頓教と漸教。

はち惡を廢してもて善を修す。この二行を廻して、往生を求願す。弘願といふは「大經」の說のごとし」と。

またのたまはく、「今この『觀經』は、すなはち觀佛三昧をもて宗とす、また念佛三昧を宗とす。一心に廻願して、淨土に往生するを體とす。教の大小といふは、問うていはく、この經は二藏の中には、いづれの藏にか攝する、二教のなかにはいづれの教にかをさむるや。こたへていはく、いまこの『觀經』は菩薩藏にをさむ。頓教の攝なり」と。

またいはく、「また如是といふは、すなはち此法を指す、定散兩門なり。是といふは、すなはちさだむることばなり。機行すればかならず益す、これ如來の所說のみこと、金針しやくりゅうなきことをあかす。かるがゆゑに如是となづく。また如といふは、衆生のこゝろのごとし、心の所樂にしたがひて、佛、即ちこれを度したまふ。機教相應せるを、また稱して是とす。かるがゆゑに如是といふ。また如是といふは、如來の所說を明さんと欲す。漸を説くこと漸のごとし、頓を説くこと頓のごとし、相を説くこと相のごとし、空を説くこと空のごとし、人法を説くこと人法のごとし、天法を説くこと天法のごとし、小を説くこと小のごとし、大を説くこと大のごとし、凡を説くこと凡のごとし、聖を説くこと聖のごとし、因を説くこと因のごとし、果を説くこと果のごとし、苦を説くこと苦のごとし、樂を説くこと樂のごとし、遠を説くこと遠のごとし、近を説くこと近のごとし、同を説くこと同のごとし、別を説くこと別のごとし、淨を説くこと淨のごとし、穢を説くこと穢のごとし、一切

の法を説くこと千差萬別なり。如來の觀知、歷々了然として、心にしたがひて行を起て、おのゝ益することおなじからず。業果法然として、すべて錯失なし、また稱して是とす。かるがゆるに如是といふ」と。

またいはく、「欲生彼國者より、しも名爲淨業にいたるこのかたは、まさしく三福の行を勸修することをあかす。これは一切衆生の機に、二種あることをあかす。一には定、二には散なり。もし定行によれば、すなはち生を攝するにつきず。こゝをもて、如來方便して、三福を顯開して、もて散動の根機に應じたまへり」と。

【またのたまはく】
散善義の三心の解釋。

またのたまはく、「また眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。自利眞實といふは、また二種あり。一には眞實心のうちに、自他の諸惡および穢國等を制作して、行住坐臥に、一切菩薩の諸惡を制捨するにおなじく、我も亦かくの如くせんとおもふ。二には眞實心の中に、自他凡聖等の善を勤修す。眞實心のうちの口業に、かの阿彌陀佛及び依正二報を讚嘆す。又眞實心のうちの口業に、三界六道等の自他の依正二報の苦惡の事を毀厭す。また一切衆生の三業所爲の善を讚嘆す。もし善業にあらずば、敬んでしかも、これをとほざかれ、また隨喜せざれ。また眞實心のうちの身業に、合掌し禮敬し、四事等をもて、かの阿彌陀佛および依正二報を供養す。また眞實心のうちの身業に、この生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭捨す。また眞實心のうちの意業に、かの阿彌陀佛および依正二報を思想し觀察し憶念して、目のまへに現するがごとくす。また眞實心のうちの意業に、

【別解等】異學異見は外教の思想、別解別行は淨土教に對する聖道の思想。

この生死三界等の自他の依正二報を輕賤し厭捨す。乃また決定してふかく釋迦佛、この『觀經』の三福九品定散二善をときて、かの佛の依正二報を證讚して、人をして忻慕せしむと信す。乃至また深心は深信なりといふは、決定して自心を建立して、教に順じて修行し、永く疑錯をのぞきて一切の別解別行異學異見異執のために退失傾動せられざるなり。至つぎに行について信をたつといふは、しかるに行に二種あり。一には正行、二には雜行なり。正行といふは、専ら往生經の行によりて行するものは、これを正行となづく。なにものかこれや。一心に専らこの『觀經』、『彌陀經』、『無量壽經』等を讀誦する。一心にかの國の二報莊嚴を專注し思想し觀察し憶念する。もし禮するには、すなはち一心に専らかの佛を禮する。もしくに稱するには、すなはち一心に専らかの佛を稱する。もし讚嘆供養するには、すなはち一心に専ら讚嘆供養する。これをなづけて正とす。またこの正のなかについて、また二種あり。一には一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥、時節の久近をとはず、念々にすてざるものは、これを正定の業となづく、かの佛の願に願するがゆゑに、もし禮誦等によるをば、すなはち名づけて助業とす。この正助二行をのぞきて、已外自餘の諸善をば、ことごとく雜行となづく。もしさきの正助二行を修すれば、心つねに親近して憶念たえず、なづけて無間とす。もしのちの雜行を行するは、すなはち心つねに間斷す。廻向して生ずることをうべしといへども、すべて疎雜の行となづくるなり。かゝるがゆゑに深心となづく。三には廻向發願心。廻向發願心といふは、過去および今生の身

【觀、行】觀は本願の觀知、行は念佛の大行。

【四修】往生の行に於て教皮に（恭敬修）、統一（無餘修）に、相續（無間修）して行ずること不斷（長時修）なるの四種の實踐。

口意業に修するところの世出世の善根、および他の一切の凡聖の身口意業に修するところの世出世の善根を隨喜して、この自他所修の善根をもて、ことごとくみな眞實の深信の心のうちに廻向して、かの國に生ぜん」と願す。かるがゆゑに廻向發願心となづくるなり」と。

またいはく、「定善は觀をしめす縁なり」と。
またいはく、「散善は行をあらはす縁なり」と。

またいはく、「淨土の要あひがたし」と。出抄

またいはく、『觀經』の説のごとし。まづ三心を具して、かならず往生を得。なんらをか

三とする。一には至誠心。いはゆる身業にかの佛を禮拜し、口業にかの佛を讚嘆し稱揚し、

意業にかの佛を專念し觀察す。おほよそ三業をおこすにかならず眞實をもちふるがゆゑに、

至誠心となづく。乃至三には廻向發願心。所作の一切の善根、ことごとく皆廻して往生を願

す。かるがゆゑに廻向發願心となづく。この三心を具してかならず生ずることを得。もし

一心かきぬればすなはち生ずることをえず。『觀經』につぶさにとくがごとし。しるべし。

乃至菩薩はすでに生死をまぬがれて所作の善法、廻して佛果をもとむ。すなはちこれ自利な

り。衆生を教化して未來際をつくす。すなはち利他なり。しかるにいまのときの衆生、こ

とごとく煩惱のために繫縛せられて、いまだ惡道生死等の苦をまぬがれず。縁にしたがひ

て行をおこして一切の善根、つぶさに速かに廻して阿彌陀佛の國に往生せんと願せん。かの

國に到りをはりて、さらに畏るゝところなけん。かみのごときの四修、自然任運にして自

利利他具足せざることなし。しるべし」と。

またいはく、「もし專をすて、雜業を修せんとするものは、百はときにまれに一二をえ、千はときにまれに五三を得。何をもての故に。いまし雜縁亂動して正念を失するによるがゆゑに、佛の本願と相應せざるがゆゑに、教と相違せるがゆゑに、佛語に順ぜざるがゆゑに、係念相續せざるがゆゑに、憶想間斷するがゆゑに、廻願慳重眞實ならざるがゆゑに、貪瞋諸見の煩惱きたりて間斷するがゆゑに、慚愧懺悔の心あることなきがゆゑに。懺悔に三品あり、乃至上中下なり。上品の懺悔といふは、身の毛孔のうちより血ながれて、眼のうちより血出づるものを上品の懺悔となづく。中品の懺悔といふは、徧身にあつき汗毛孔よりいで、眼のうちより血ながるゝものを中品の懺悔となづく。下品の懺悔といふは、徧身に徹りあつくして、眼のうちより涙いづるものを下品の懺悔となづく。これらの三品差別ありといへども、これひさしく解脱分の善根をうゑたるひとなり。今生に法をうやまひ、人をおもくして身命ををします、乃至小罪もし懺すれば、すなはちよく心體にとほりて、よくかくの如く懺すれば、久近をとはず、所有の重障みな頓に滅盡せしむることを致す。もしかくの如く懺せざれば、たとひ日夜十二時に急にもとむれどもつひにこれ益なし、なさざるものにはたがはんや。しるべし。流涙、流血等にあたはずといへども、たゞよく眞心徹到するものは、すなはち上とかなじ」と。

またいはく、「すべて餘の雜業の行者を照攝すといふことを論ぜず」と。

【三明】 聖者の徳として説かるる三種の無礙自由なる證智、過去の生死の狀態を證知する宿命明と、未來の生死の狀態を證知する生明と、證知する漏盡明を證知する無生法忍

【福慧】 福德智慧

【法忍】 無生法忍

【無生】 無生法忍

またいはく、「如來五濁に出現して、よろしきにしたがひて方便して群萌を化したまふ。或は多聞にしてしかも得度すとき、あるひはすこしくさとりて三明を證すととく、あるひは福慧ならべて障をのぞくとをしへ、或は禪念して坐して思量せよとをしふ。種々の法門みな解脱す」と。

またいはく、「萬劫に功を修せんことまことに續ぎがたし、一時に煩惱も、たびちたび聞はる。もし娑婆にして法忍を證せんことを待たば、六道にして恆沙劫にもいまだ期あらじ。門々不同なるを漸教となづく、萬劫苦行して無生を證す、畢命を期としてもはら念佛すべし、須臾に命斷すれば佛迎將したまふ。一食のときなほひまあり、いかんぞ萬劫に貪瞋せざらん、貪瞋は人天をうくるみちを障ふ、三惡四趣のうち身に安ず」と。要を抄す

またいはく、「定散ともに廻して寶國にいれ、すなはちこれ如來の異の方便なり、韋提はすなはちこれ女人の相、貪瞋具足の凡夫の位なり」と。

『論註』にははく、「三種の功德の相あり。一には有漏の心より生じて法性に順せず。いはゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、もしは因もしは果、みなこれ顛倒す、みなこれ虚偽なり。かるがゆるに不實の功德となづく」と。

『安樂集』に、『大集經』の「月藏分」をひきていはく、「わが末法の時の中の億々の衆生、行をおこし道を修せんに、いまだ一人としてうるものあらじと。當今は末法、これ五濁惡世なり、たゞ淨土の一門のみありて通入すべきみちなり」と。

【小本】阿彌陀經
【眞門】善本なる
名號の執持を説く
小經の教説を眞門
といふ。觀經の諸
行諸善を假門とい
ふに對す。

【要門】淨土往生
の主要なる門の意
蓋し衆生の要請に
應じて諸善を説く
觀經は、往生それ
自身を以て當面の
主要問題となすも
のなるが故にその
教説を以て淨土要
門といふ。

またいはく、「いまだ一萬劫にみたざるこのかたは、恆にいまだ火宅を免がれず、轉倒墜墮するがゆゑに、おの／＼功を用ふることは至りておもく、報をうることは偽なり」と。

しかるに、いま『大本』によるに、眞實方便の願を超發す、また『觀經』には方便眞實の教を顯彰す、『小本』には、たゞ眞門をひらきて方便の善なし。こゝをもて三經の眞實は、選擇本願を宗とするなり。また三經の方便は、すなはちこれもろ／＼の善根を修するを要とするなり。

これによりて、方便の願を按ずるに、假あり眞あり、また行あり信あり。願といふは、すなはちこれ臨終現前の願なり。行といふは、すなはちこれ修諸功德の善なり。信といふは、すなはちこれ至心發願欲生の心なり。

この願の行信によりて、淨土の要門、方便權假を顯開す。この要門より、正助雜の三行をいだしり。この正助のなかについて、專修あり雜修あり。機について二種あり。一には定機、二には散機なり。また二種の三心あり、また二種の往生あり。二種の三心といふは、一には定の三心、二には散の三心なり。定散の心はすなはち自利各別の心なり。二種の往生といふは、一には即往生、二には便往生なり。便往生といふは、すなはちこれ胎生邊地變樹林下の往生なり。即往生といふは、すなはちこれ報土化生なり。

またこの經に眞實あり、これすなはち金剛の眞心を開きて、攝取不捨をあらはさん

【一心】 執持名號
一心不亂といふ。

【心等】 相を立てて
それ心に住せしむること、觀經に説く定善の觀法をいふ。

【住心】 衆生の心に
應じて。

【一代の教】 釋迦
一代の教法、全佛
教に於ての意。

と欲す。しかれば濁世の能化、釋迦善逝、至心信樂の願心を宣説したまふ、報土眞因は信樂を正とするがゆゑなり。こゝをもて「大經」には信樂といへり、如來の誓願疑蓋まじはることなし、かるがゆゑに信とのたまへるなり。「觀經」には深心ととけり、諸機の淺信に對せるがゆゑに深といへるなり。「小木」には一心とのたまへり、二行まじはることなきがゆゑに一とのたまへるなり。また一心について深あり淺あり。深といふは利他眞實の心これなり、淺といふは定故自利の心これなり。

宗師の意によるに、心によりて勝行をおこせり、門八萬四千にあまれり。漸頓すなはちおの／＼所宜にかなうて、縁にしたがふもの、すなはちみな解脫をかうぶるといへり。しかるに常淺の凡愚、定心修しがたし、息慮凝心のゆゑに。散心行じがたし、廢惡修善のゆゑに。こゝをもて立相住心なほ成じがたし、かるがゆゑにたとひ千年の壽をつくすとも、法眼いまだかつてひらけじといへり。いかにいはんや無相離念まことにてえがたし。かるがゆゑに如來、末代罪濁の凡夫は、立相住心なほうることをあたはじと懸知したまへり。いかにいはんや相をはなれてしかも事をもとめんは、術通なき人の空に居して合をたてんがごとしといへり。

門餘といふは、門はすなはち八萬四千の假門なり、餘はすなはち本願 一乘海なり。おほよそ一代の教について、この界のうちにして、入聖得果するを聖道門となづく、難行道といへり。この門のなかについて、大小、漸頓、一乘二乘三乘 權實顯密、堅

出堅超あり。すなはちこれ、自力、利他教化地、方便權門の道路なり。

安養淨刹にして入聖證果するを、淨土門となづく、易行道といへり。この門のなかについて、横出横超、假眞漸頓、助正雜行、雜修專修あるなり。

正といふは五種の正行なり、助といふは名號をのぞきて巴外の四種これなり。雜行といふは正助をのぞきて巴外をことごとく雜行となづく。これすなはち横出、漸教、定散三福、三輩九品、自力假門なり。

横超といふは、本願を憶念して自力の心をはなる、これを横超他力となづくるなり。

これすなはち、專のなかの專、頓のなかの頓、眞のなかの眞、乘のなかの一乘なり、これすなはち眞宗なり。すでに眞實行のなかにあらはしをはんぬ。

それ雜行雜修、そのことばひとつにして、その心これことなり。釋の言において萬行を攝入す、五種の正行に對して五種の雜行あり。釋の言は人天菩薩等の解行雜せるがゆゑに雜といふ。もとより往生の因種にあらず、廻心廻向の善なり。かるがゆゑに淨土の雜行といふなり。また雜行について、專行あり、專心あり、また雜行あり、雜心あり。專行といふは、專ら一善を修す、かるがゆゑに專行といふ。專心といふは、廻向を專らにするがゆゑに專心といへり。雜行雜心といふは、諸善兼行するがゆゑに雜行といふ、定散心雜するがゆゑに雜心といふなり。

また正助について、專修あり、雜修あり。この雜修について、專心あり、雜心あり、

【緯等】以下道緯
善導、懷感、源信
源空の略稱。

専修せんじゆについて二種にしゆあり、一にはたゞ佛名ぶつみやうを稱なづす、二には五專ごせんあり。この行業ぎやうごふについて専心せんしんあり、雜心ざしんあり。五專ごせんといふは、一には專禮せんらい、二には專讀せんどく、三には專觀せんくわん、四には專名せんみやう、五には專讚嘆せんさんたん、これを五專修ごせんじゆとなづく。専修せんじゆそのことばひとつにして、そのことろこれことなり、すなはちこれ定專修ぢやうせんじゆなり、また散專修さんせんじゆなり。専心せんしんといふは、五正行ごしやうぎやうをもはらにして、しかも二心にしんなきがゆゑに専心せんしんといふ、すなはちこれ定専心ぢやうせんしんなり、またこれ散専心さんせんしんなり、雜修ざしゆといふは助正兼行じよしやうけんぎやうするがゆゑに雜修ざしゆといふ。雜心ざしんといふは、定散心ぢやうさんしん、雜するがゆゑに雜心ざしんといふなり。しるべし。

おほよそ、淨土じやうどの一切いっさい諸行しよぎやうにおいて、緯しやくくわしやう和尙わしやうは萬行まんぎやうといひ、導だうくわしやう和尙わしやうは雜行ざしやうと稱し、感禪師かんぜんじは諸行しよぎやうといへり。信和尙しんくわしやうは感師かんしによれり、空聖人くうしやうにんは導和尙だうくわしやうによりたまふ。經家きやうけによりて、師釋ししやくをひらくに、雜行ざしやうのなかの雜行雜心ざしやうざしん、雜行專心ざしやうせんしん、專行雜心せんぎやうざしん、また正行しやうぎやうのなかの專修專心せんじゆせんしん、專修雜心せんじゆざしん、雜修雜心ざしゆざしんは、これみな邊地胎宮へんちたいぐ懈慢界けいまんがいの業因ぎやくいんなり。かるがゆゑに極樂ごくらくに生なまずといへども、三寶さんぼうをみたてまつらず、佛心ぶつしん光明くわうみやう、餘よの雜業ざふごふの行者ぎやうじやを照攝せうさつせざるなり。假令けみやうの誓願せいがん良らに由ゆあるかな。假門けもんの教けう、忻慕しんぼの釋しやく、これいよくあきらかななり。

二經にきやうの三心さんしん、顯けんの義ぎによれば異いなり、彰しやうの義ぎによれば一いつなり、三心さんしん一異いちいの義ぎこたへを
はんぬ。

【方便】經典に就ていへば阿彌陀經誓願よりすれば第二十願の意をいふ蓋し斯經は觀念の歸結なる念佛、執持名號を以てその顯說の中心とくもその執持に止る限り本願の不可思議に入るを得ぬこと眞門にして方便と名けらるる所以なり。

【善本】念佛は善の本、徳の本なりとの意。

【恒沙等】小經の六方恒沙の諸佛證勸のことを説く。

また問ふ。『大本』と『觀經』の三心と、『小本』の一心と、一異いかなんぞ。答ふ、いま方便眞門の誓願について、行あり信あり、また眞實あり方便あり、願といふは、すなはち植諸徳本の願これなり。行といふはこれに二種あり。一には善本、二には徳本なり。信といふは、すなはち至心廻向欲生の心これなり。願なり機について定あり散あり、往生といふはこれ難思往生これなり。佛といふはすなはち化身なり。土といふはすなはち疑城胎宮これなり。『觀經』に准知するに、この經にまた顯彰隱密の義あるべし。

顯といふは、經家は一切諸行の少善を嫌賤して、善本徳本の眞門を開示し、自利の一心を上げまして、難思の往生をすむ。こゝをもて經には多善根、多功德、多福徳の因縁ととき、釋には九品俱に廻して不退を得といへり。あるひは念佛して西方にゆくにすぎたるはなし、三念五念までも佛來迎したまふといへり。これはこれの經の顯の義をしめすなり。これすなはち眞門のなかの方便なり。

彰といふは、眞實難信の法をあらはす。これすなはち不可思議の願海を光闡して、無礙の大信心海に歸せしめんと欲す。良にすゝめ、すでに恒沙のすゝめなれば、信もまた恒沙の信なり、かるがゆゑに甚難といへるなり。釋に、たゞちに彌陀の弘誓のおもきによりて、凡夫をして念ずればすなはち生ぜしむることをいたすといへり。これはこれ隱彰の義をひらくなり。

【執持】「執持は即ち一心、一心は即ち信心なり」とも言はる。

【無問自説】釋尊出世の本懐。

【四依弘經】正法を建立して世間の爲にその依憑たるひとの意。
【三朝】三朝は印度、支那、日本。

【圓修至徳】萬善圓備、至徳成滿の名號。
【善本】善本徳本は念佛、定散心は念佛心。

經に執持といへり、また一心といへり。執の言は心堅牢にして、しかも移轉せざることを彰はすなり。持の言は不散不失になづくるなり。一の言は無二の言になづくるなり。心の言は眞實になづくるなり。この經は、大乘修多羅のなかの無問自説の經なり。爾れば、如來世に興出したまふゆゑは、恆沙の諸佛證護の正尊、唯これにあるなり。こゝをもて四依弘經の大士、三朝淨土の宗師、眞宗念佛を聞きて、濁世の邪偽をみちびきたまふ。三經の大綱、顯彰隱密の義ありといへども、信心を彰はして能入とす。かるがゆゑに經のはじめに如是と稱す。如是の義はすなはちよく信する相なり。いま三經を按ずるに、みな金剛の眞心をもて最要とせり。眞心はすなはちこれ大信心なり、大信心は希有最勝眞妙清淨なり。なにをもてのゆゑに、大信心海は甚だもて入り難し、佛力より發起するがゆゑに。眞實の樂邦は甚だもて往きやすし、願力によりてすなはち生ずるがゆゑに。いままさに一心一異の義を談せんとす、まさにこのこゝろなるべし。三經一心の義、こたへをはんぬ。

それ濁世の道俗、すみやかに圓修至徳の眞門に入りて、難思往生を願ふべし。眞門の方便につきて、善本あり、徳本あり、また定專心あり、また定散雜心あり。雜心といふは、大小凡聖、一切善惡、おのゝ助正間雜の心をもて名號を稱念す。良

【罪福】 罪福心は善惡の因果を信ずる心、即ち名號を自己の善根として廻向せんとする自力心。

【功德藏】 眞門の教説を功德藏といひ、要門の教説を福徳藏といふ。更にこの二を方便藏とし、純粹なる本願の教説を福智藏といふ。

【またのたまはく】 その成就文。

に教は頓にして根は漸機なり、行は專にして心は間雜す、かるがゆゑに雜心といふなり。

定散の專心は、罪福を信ずる心をもて、本願力を願求す、これを自力の專心となづくるなり。

善本といふは、如來の嘉名なり。この嘉名は、萬善圓備せり、一切善法の本なり、かるがゆゑに善本といふなり。徳本といふは如來の德號なり。この德號は一聲稱念するに、至徳成滿し衆禍みな轉ず、十方三世の德號の本なり、かるがゆゑに徳本といふなり。

然ればすなはち、釋迦牟尼佛は、功德藏を開演して、十方濁世を勸化したまふ。阿彌陀如來は、もと果遂の願は二十の願なりをこして、諸有の群生海を悲引したまふ。す

でにして悲願います、植諸徳本の願となづく。また係念定生の願となづく。また不果遂者の願となづく、亦至心廻向の願となづくべきなり。

是をもて『大經の願』にのたまはく、「たとひわれ佛をえたらんに、十方の衆生、わが名號をききて、念を我が國に係けて、もろくの徳本を植ゑて、心を至し廻向して、わが國

に生ぜんと欲はん、果遂せずといはば、正覺をとらじ」と。

またのたまはく、「この諸智において疑惑して信ぜず、然るになほ罪福を信じて、善本を修習して、そのくに生ぜんと願ぜん。このもろくの衆生、かの宮殿に生ぜん」と。

『もしわれ』 第二
十願異譯文。

またのたまはく、「もし人善本なければ、この經を聞くことをえず、清淨に戒をたもてるもの、いまし正法を聞くことをえん」と。

『無量壽如來會』にのたまはく、「もしわれ成佛せんに、無量國のなかの所有の衆生、わが名を説かんとをききて、もておのれが善根として、極樂に廻向せん、もし生れずといはゞ菩提をとらじ」と。

『平等覺經』にのたまはく、「この功德あるにあらざる人は、この經の名をきくことをえず、たゞ清淨に戒をたもてるもの、いましかへりてこの正法をきく。惡と憍慢と蔽と懈怠とは、もてこの法を信すること難し、宿世のときに佛をみたまつれるもの、樂んで世尊の教を聽聞せん。人の命まれにうべし、佛は世にましませどもはなはだ値ひがたし、信慧ありて致るべからず、もし聞見せば精進してもとめよ」と。

『觀經』にのたまはく、「佛、阿難につげたまはく、なんぢ好くこの語をたもて、このことばをたもてといふは、すなはちこれ無量壽佛の名をたもてとなり」と。

『阿彌陀經』にのたまはく、「少善根福德の因縁をもて彼の國に生ずることをうべからず、阿彌陀佛をとくをききて名號を執持せよ」と。

光明寺の和尚ののたまはく、「自餘の衆行はこれ善となづくといへども、もし念佛に比ぶれば、またく比校にあらず。このゆゑに諸經のなかに處處にひろく念佛の機能をほめたり、『無量壽經』の四十八願のなかのときは、たゞ彌陀の名號を專念して生ずることを得

とあかす。また、『彌陀經』のなかのごときは、一日七日彌陀の名號を專念して生ずることを得。また、十方恆沙の諸佛證誠むなしからざるなり。また、この經の定散の文のなかには、たゞ名號を專念して生ずることを得と標す、この例ひとつにあらず。ひろく念佛三昧をあらはしをはんぬ」と。

またのたまはく、「また決定してふかく『彌陀經』のなかに、十方恆沙の諸佛、一切凡夫を證勸して、決定して生ずることを得と信す。至諸佛の言行、あひ違失したまはず。たとひ釋迦指して一切の凡夫をすゝめて、この一身を盡くして、專念專修して、いのちを捨て、のち、定めてかの國に生ずといふは、すなはち十方の諸佛、ことごとくみな、同じく讚め、同じく勧め、同じく證したまふ。なにをもてのゆるに、同體の大慈なるがゆるに。一佛の所化はすなはちこれ一切佛の化なり、一切佛の化はすなはちこれ一佛の所化なり。すなはち、『彌陀經』のなかに説かく、至また一切の凡夫をすゝめて、一日七日、一心にして彌陀の名號を專念すれば、さだめて往生をうと。つき下の文にのたまはく、十方におのの恆河沙等の諸佛ましく、おなじく釋迦を讀めたまはく、よく五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡煩惱、惡邪無信のさかんるときにおいて、彌陀の名號を指讀して、衆生を勸勵して、稱念せしむれば、かならず往生をうと、すなはちその證なり。また十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所説を信ぜざらんことをおそれて、すなはちともに同心同時に、おのの舌相をいだして、おまねく三千世界におほうて、誠實の言をときたまはく、汝等衆生み

なこの釋迦の所説、所讃、所證を信すべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近をとはず、たゞよく上百年を盡し、下一日七日に至るまで、一心に彌陀の名號を専念すれば、さだめて往生をうるることかならず疑なきなり、このゆゑに一佛の所説をば一切佛おなじくその事を證誠したまふ。これを人に就て信を立つとなづくるなり」と。要を抄す

またのたまはく、「然るに佛の願意に望むれば、唯正念にしてみなを稱せしむることをすすめたり、往生の義の疾きこと雜散の業にはおなじからず。この經および諸部のなかに處處にひろく嘆するがごときは、すゝめて名を稱せしむるをまさに要益とせんとするなり。しるべし」と。

またのたまはく、「佛告阿難汝好持是語といふより已下は、まさしく彌陀の名號を付囑して、退代に流通することをあかす。上よりこのかた定散兩門の益を説くといへども、佛の本願にのぞむれば、意衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱せしむるにあり」と。

またのたまはく、「極樂は無爲涅槃界なり、隨緣の雜善おそらくは生じがたし、かるがゆゑに如來、要法を選びてをしへて彌陀を念せしめて、専らにしてまた専らならしめたまへり」と。

またのたまはく、「劫つきなんと欲するとき五濁さかんなり、衆生邪見にしてはなはだ信じがたし、専らにして専らなれと指授して西路に歸せしむれども、他のために破壊せられてかへりてもとのごとし、曠劫よりこのかたつねにかくのごとし。これ今生にはじめて自

【劫つきなん等】論書の世界説に於て世界存續の劫に衆生の壽量を増減あることを説く、その滅劫の末ならんとするに於て五濁世界に現るといふ。

ら悟るにあらす、まさしくよき強縁にあらざるによりて、輪廻して得度し難からしむることをしていたす」と。

またのたまはく、「種々の法門みな解脱すれども、念佛して西方に往くにすぎたるはなし。上一形を盡し十念に至り、三念五念までも佛來迎したまふ。たゞちに彌陀の弘誓のおもきをもて、凡夫をして念ずれば即ち生ぜしむることを致す」と。

またのたまはく、「一切の如來、方便をまうけたまふこと、また今日の釋迦尊におなじ。機に隨ひて法をとくにみな益をかうぶる、おのゝ悟解をえて眞門にいれ。至佛敎多門にして八萬四なり、まさしく衆生の機の不同なるがためなり、安身常住のところをもとめんと欲はば、まづ要行をもとめて眞門にいれ」と。

またのたまはく、「爾このごろ、みづから諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして専雜異あり。但し意を専らにしてなさしむれば、十はすなはち十ながら生ず、雜を修して至心ならざれば、千がなかにひとりもなし」と。
已上、智昇法師の『禮讚儀』の文なり光明寺の『禮讚』なり

元照律師の『彌陀經義疏』にははく、「如來、持名の功すぐれたることをあかさんと欲す、まづ餘善を貶して少善根とす。いはゆる布施持戒、立寺造像、禮誦坐禪、懺念苦行、一切福業もし正信なければ廻向願求するにみな少善とす、往生の因にあらず。もしこの經によりて名號を執持せば、決定して往生せん。すなはち知んぬ、稱名はこれ多善根多福徳なり。むかしこの解をなし、ひととほ遲疑しき。ちかく襄陽の石碑の經の本文を得て理冥符

なり、はじめて深信をいやく。かれにいはいはく、善男子善女人、阿彌陀佛を説くをきゝて、一心にしてみだれず、名號を專稱せよ、稱名をもてのゆゑに諸罪消滅す。すなはちこれ多功德、多善根、多福徳の因縁なり」と。

孤山の『疏』にいはいはく、「執持名號といふは、執とはいはいはく執受なり、持とはいはいはく住持なり。信力のゆゑに、執受心にあり。念力のゆゑに、住持してわすれず」と。

『大本』にのたまはく、「如來の興世、値ひがたくみたまつり難し、諸佛の經道得がたくきゝがたし、菩薩の勝法諸波羅蜜きくことをうることもまた難し、善知識に遇ひ法をきゝよく行すること、これまた難しとす。もしこの經をきゝて信樂受持すること難きがなかにかたし、これに過ぎて難きことなし。このゆゑにわが法、かくのごとく作し、かくのごとく説き、かくのごとく教ふ。まさに信順して法のごとく修行すべし」と。

『涅槃經』にのたまはく、「經のなかに説くがごとし、一切梵行の因は善知識なり、一切梵行の因無量なりといへども、善知識を説けばすなはちすでに攝盡しぬ。わが所説のごとし。一切の惡行は邪見なり、一切惡行の因無量なりといへども、もし邪見を説けばすなはちすでに攝盡しぬ。或はとかく、阿耨多羅三藐三菩提は信心を因とす、これ菩提の因また無量なりといへども、もし信心をとけばすなはちすでに攝盡しぬ」と。

またのたまはく、「善男子、信に二種あり。一には信、二には求なり。かくのごときの人また信ありといへども、推求にあたはず、このゆゑになづけて信不具足とす。信にまた二

【梵行】 清淨なる行。

【三寶】 佛陀と法と僧伽との三寶。
【富蘭那】 六師外道の一人。

【非想非非想處】 修定思想の外教に於て究極の理想とさるる定。三界説にては、その最高位の天界とさる。
【三有】 有は吾等の生存を意味する語、三有はその屬する欲、色、無色の三にして三界に當る。

種あり。一には聞より生ず、二には思より生ず。この人の信心、聞よりして生じて思より生ぜず、この故に名づけて信不具足とす。また二種あり。一には道あることを信ず、二には得者を信ず。このひとの信心たゞ道あることを信じて、すべて得道の人あることを信ぜず、これをなづけて信不具足とす。また二種あり、一には信正、二には信邪なり。因果あり、佛法僧ありといはん、これを信正となづく。因果なし三寶の性ことなりといひて、もろ／＼の邪語、富蘭那等を信ずる、これを信邪となづく。このひと佛法僧寶を信ずといへども、三寶同一の性相を信ぜず、因果を信ずといへども、得者を信ぜず、このゆゑになづけて信不具足となす。このひと不具足の信を成就す。乃至善男子、四の善事あり、惡果を獲得せん。なんらをか四とする。一には勝他のためのゆゑに經典を讀誦せん、二には利養のためのゆゑに禁戒を受持せん、三には他屬のためのゆゑにしかうして布施を行ぜん、四には非想非々想處のためのゆゑに繫念思惟せん。この四の善事惡果報をえん。もし人かくのごときの四事を修習せん、これを没となづく、没しをはりてかへりていづ、いでをはりてかへりて没す。なんがゆゑぞ没となづく、三有を樂ぶがゆゑに。なんがゆゑぞ出となづくる、明をみるをもてのゆゑに。明はすなはちこれ戒施定を聞くなり。なにをもてのゆゑに還りて出沒する、邪見を増長し、憍慢を生ずるがゆゑに。このゆゑにわれ經のなかにおいて偈を説かく。もし衆生ありて、諸有をねがうて、有のために善惡の業を造作する、この人は涅槃道を迷失するなり、これを暫出還復沒となづく。黒闇の生死海を行じて、解脱

をうといへども、煩惱を雜するは、このひと還りて惡果報を受く、これを暫出還復汝となづく。如來に則ち二種の涅槃あり。ひとつには有爲、ふたつには無爲なり。有爲涅槃は常樂我淨なし、無爲涅槃は常樂我淨あり。至常人ありて、ふかくこの二種の戒ともに善果ありと信ぜん、このゆゑになづけて戒不具足とす。このひとは信戒の二事を具せず、所業多聞にしてまた不具足なり。いかなるをかなづけて聞不具足とする。如來の所説は十二部經なり、たゞ六部を信じていまだ六部を信ぜず。この故になづけて聞不具足とす。またこの六部の經を受持すといへども讀誦にあはたずして他のために解説するは利益するところなけん、このゆゑになづけて聞不具足とす。またこの六部の經を受けをはりて、論議のためのゆゑに、勝他のためのゆゑに、利養のためのゆゑに、諸有のためのゆゑに持讀誦説せん、このゆゑになづけて聞不具足とす。一と。

出抄

またのたまはく、善男子、第一眞實の善知識は、いはゆる菩薩と諸佛世尊なり。なにをもてのゆゑに、つねに三種の善調御をもてのゆゑなり。なんらをか三とする。一には畢竟轉語、二には畢竟呵責、三には轉語呵責なり。この義をもてのゆゑに、菩薩と諸佛はすなはちこれ眞實の善知識なり。またつきに善男子、佛および菩薩を大醫とするがゆゑに、善知識となづく。なにをもてのゆゑに。病をしり藥をしりて病に應じて藥をさぶくるがゆゑに。たとへば良醫の八種の術をよくするがごとし。まづ病相を觀ず、相に三種あり。なんらをか三とする。いはく風熱水なり。風病のひとにはこれに蘇油をさぶく、熱病のひとに

はこれに石蜜をさづく、水病のひとにはこれに薑湯をさづく。病根をしるをもて藥をさづくるにゆるることをう、かるがゆるるに良醫となづく。佛および菩薩もまたくかくのごとし。もろくくの凡夫の病をしるに三種あり。一には貪欲、二には瞋恚、三には愚癡なり。貪欲のやまひには教へて骨相を觀ぜしむ、瞋恚のやまひには慈悲の相を觀ぜしむ、愚癡のやまひには十二緣相を觀ぜしむ。この義をもてのゆるるに諸佛菩薩を善知識となづく。善男子、たとへば船師のよくひとを度するがゆるるに大船師となづくるがごとし。諸佛菩薩もまたくかくのごとし、もろくくの衆生をして生死の大海を度す。この義をもてのゆるるに善知識となづく」と。出抄

『華嚴經』にのたまはく、「汝善知識を念せよ、われを生ずること父母のごとし、われをやしなふこと乳母のごとし、菩提分を増長す。醫の衆疾を療するがごとし、天の甘露をそぐがごとし、日の正道を示すがごとし、月の淨輪を轉するがごとし」と。

またのたまはく、「如來大慈悲、世間に出現して、普くもろくくの衆生のために無上法輪を轉じたまふ。如來無量劫に勤苦せしことは衆生のためなり、いかながもろくくの世間よく大師の恩を報ぜん」と。

光明寺の和尚ののたまはく、「ただ恨むらくは衆生の疑ふまじきをうたがふことを。淨土對面してあひたがはず、彌陀の攝と不攝とを論ずることなかれ、こゝろ專心にして廻すと廻せざるとにあり。あるひはいはく、けふより佛果にいたるまで、長劫に佛を讚めて

慈恩を報ぜん、彌陀の弘誓の力をかうぶらずば、いづれの時いづれの劫にか娑婆を出でん、いかんしてか今日寶國にいたることを期せん、まことにこれ娑婆本師のちからなり。もし本師知識のすゝめにあらずば、彌陀の淨土にいかんしてか入らん、淨土に生ずることをえて慈恩を報ぜよ」と。

またいはく、「佛世甚だまうあひ難し、人信慧あることかたし、たま／＼希有の法をきくこと、これまた最もかたしとす。みづからも信じ人をしへても信ぜしむること、難きが中にうたゝさらにかたし。大悲ひろくあまねく化するは、まことに佛恩を報ずるになる」と。

またいはく、「いざいなん、他郷にはとどまるべからず、佛に従ひて本家に歸せよ、本國に還りぬれば、一切の行願自然に成す、悲喜まじはり流る。ふかくみづからはかるに釋迦佛の開悟によらずば、彌陀の名願いづれのとにかきかん、佛の慈恩を荷ひてもまことに報じがたし」と。

またいはく、「十方六道、おなじくこれ輪廻して際なし、循々として愛波に沈んでしかも苦海にしづむ。佛道の人身得がたくしていますでに得たり、淨土きゝがたくしていますでに聞けり、信心發しがたくして、いますでにおこせり」と。

まことに知んぬ。専修にして而も雜心なるものは、大慶喜心をえず。かるがゆるゑに宗師は、かの佛恩を念報することなし、業行をなすといへども心に輕慢を生ず、つねに名

【本家】本家本國は何れも淨土をいへる語、淨土は本國にして人生は他郷なり。

【ここをもて】親鸞の自覺過程の表白は古來一三願轉入一と呼ぶる。
【論主】論主は世親、宗師は善導を指していへる語。

利と相應するがゆゑに、人我自ら覆うて同行善知識に親近せざるがゆゑに、樂んで雜緣にちかづきて往生の正行を自障障他するがゆゑに」といへり。

かなしきかな、垢障の凡愚、無際よりこのかた、助正間雜し、定散心雜するがゆゑに、出離その期なし。みづから流轉輪廻をはかるに、微塵劫を超過すとも、佛願力に歸しがたく、大信海にிரいがたし。良に傷嗟すべし、ふかく悲歎すべし。

おほよそ、大小聖人、一切善人、本願の嘉號を以ておのれが善根とするがゆゑに、信を生ずることあたはず、佛智を了らず、かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆゑに、報土にゐることなきなり。

ここをもて愚禿釋の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によりて、ひさしく萬行諸善の假門を出でて、永く雙樹林下の往生をはなる、善本徳木の眞門に廻入して、ひとへに難思往生の心を發しき。しかるに今特に方便の眞門を出でて選擇の願海に轉入せり。速かに難思往生の心をはなれて、難思議往生を遂げんと欲ふ。果遂の誓、まことに由あるかな。

ここにひさしく願海に入りて、ふかく佛恩をしれり、至徳を報謝せんがために、眞宗の簡要をひろうて、つねに不可思議の徳海を稱念す。いよ／＼これを喜愛し、ことにこれを頂戴するなり。

【信に知んぬ】以下化身卷の第二段にして正しく聖道語教の批判を叙述せるもの。

【師釋】道緯の安樂集及び善導の安樂集に出づ。

【四依】依憑すべき規範の四種。

信に知んぬ。聖道の諸教は、在世正法のためにして、全く像末法滅の時機にあらず、すでに時をうしなひ機にそむけるなり。淨土真宗は、在世正法、像末法滅、濁惡の群萌、ひとしく悲引したまふをや。

ここをもて經家に據りて、師釋を披きて、説人の差別を辨ぜば、おほよそ諸經の起説五種にすぎず。一には佛説、二には聖弟子説、三には天仙説、四には鬼神説、五には變化説なり。しかれば四種の所説は信用にたらず、この三經はずなはち大聖の自説なり。

『大論』に四依を釋していはく、「涅槃にいりなんとせん時もろくの比丘にかりたまはく、今日より法に依りて人に依らざるべし、義によりて語によらざるべし、智によりて識によらざるべし、了義經によりて不了義によらざるべし。法によるといふは、法に十二部あり、この法にしたがふべし、人にしたがふべからず。義に依るといふは、義のなかに好悪、罪福、虚實を諍ふことなし、かるがゆゑに語はすでに義をえたり。義は語にあらざるなり。人指をもて月ををしふ、もて惑者に示す。惑者指を視て、しかも月を視ざるがごとし。人語りていはん。われ指をもて月ををしふ、汝をしてこれを知らしむ、汝なんぞ指をみて看てしかも月を視ざると。これまたかくのごとし、語は義の指とす、語は義にあらざるなり。これをもてのゆゑに語によるべからず。智に依るといふは智よく善惡を籌量し分別す、識はつねに樂をもとむ、正要到いらす。このゆゑに識によるべからずといへり。了義經に

よるといふは、一切智人いっさいにんいます佛ぶつ第一だいいちなり、一切諸經書いっさいしよきやうしよのなかに佛法ぶつぽう第一だいいちなり、一切衆のなかに比丘僧びくしゆ第一だいいちなり。乃乃至乃至無佛世むぶつせの衆生しゆじやうを、佛ぶつこれを重罪ちゆうざいとしたまへり、見佛けんぶつの善根ぜんこんを種うゑざるひとなり」と。

しかれば末代まくだいの道俗だうそく、よく四依しえをしりて法ほふを修しゆすべきなり。

然しかるに正眞しやうしんの教意けういに據たりて古徳ことくの傳説でんせつを披ひく、聖道淨土しやうだうじゆんちゆの眞假しんげを顯聞けんぶんして邪偽異執じやゐいしやくの外教げけうを教誡けうかいす、如來涅槃にょらいねはんの時代じだいを勘決かんけつして正像末法しやうざうまふぽうの旨際しよさいを開示かいしす。

是こゝをもて、

玄忠寺げんちゆうじの綽しやく和わ尙じやうのいはく、「しかるに修道しゆだうの身み、相續さうぞくしてたえず一萬劫いちまんにやくをへてはじめて不退ふたいの位ゐを證あす。當今たうこんの凡夫ぼんぷは現げんに信しん想じやう輕きやう毛まうとなづく、また假名げんみといへり、また不定聚ふぢやうじゆとなづく、また外の凡夫ぼんぷとなづく、いまだ火宅くわたくを出いでず。なにをもてかしることをうる。菩薩ぼさつ瓔珞經いんらくきやう」によりてつぶさに入道行位にらうぎやうゐを辨べんするに、法爾ほふになるがゆゑに難行道なんぎやうだうとなづく」

またいはく、「教興けうきやうの所由しよゆを明あして時に約やくし機きに被からしめて、淨土じゆんちゆに勸歸くわんきするとは、もし機きと教けうと時じとそむけば、修しゆしがたくいりがたし。「正法念經しやうぽうねんきやう」にいはく、行者ぎやうじや一心いしんに道だうをもとめんとし、つねにまさに時じと方便ふはんとを觀察くわんさつすべし。もし時じをえざれば方便ふはんなし、これをなづけして失しつとす、利りとなづけず。いかんとなれば、濕うるほへる木きをきりてもて火ひをもとめんに、火ひうべからず、時じにあらざるがゆゑに、もし乾かわれたる薪きんをりてもて水みづをもとめんに、水みづうべからず、智ちなきが如ごときのゆゑにと。「大集月藏經だいくげつざうきやう」にのたまはく、佛滅度ぶつめつどの後の第だい

【假名】假名の善
薩の略、假名は實
質なきの意。
【火宅】三界の譬
喩。
【法爾】道の實踐
過程、入道行位の
法則的必然的なる
こと。

一の五百年には、我がもろくの弟子、慧を學すること堅固なることをえん。第二の五百年には、定を學すること堅固なることをえん。第三の五百年には、多聞讀誦を學すること堅固なることをえん。第四の五百年には、塔寺を造立し福を修し懺悔すること堅固なることをえん。第五の五百年には、白法隱滯しておほく諍訟あらん、すこしき善法ありて堅固なることをえんと。いまの時の衆生をはかるにすなはち佛世をさりてのちの第四の五百年にあたり、まさしくこれ懺悔し福を修し佛の名號を稱すべき時のものなり。一念阿彌陀佛を稱するに、すなはち能く八十億劫の生死のつみを除却す。一念すでにしかなり、いんや常念を修するはすなはちこれつねに懺悔するひとなり」と。

またいはく、「經の住滅を辨せば、いはく、釋迦牟尼佛一代、正法五百年、像法一千年、末法一萬年には衆生滅じつき、諸經ことごとく滅せん。如來痛燒の衆生を悲哀して、ことにこの經をとめて止住せんこと百年ならん」と。

またいはく、「大集經」には、わが末法の時のなかの億々の衆生、行をおこし道を修せんに、いまだ一人としてうるものあらじと。當今は末法にしてこれ五濁惡世なり、たゞ淨土の一門のみありて通入すべきみちなり」と。

爾れば、穢惡濁世の群生、末代の旨際をしらず、僧尼の威儀をそしる、今の時の道俗おのれが分を思量せよ。

三時教を按すれば、如來般涅槃の時代をかんがふるに、周の第五の主穆王五十三年

【化】教化衆生。
 【法王】法の王者
 佛陀のこと。
 【眞諦俗諦】俗諦は假立假設的眞實を意味する世間法眞諦はそれ自身安當なる眞理にして出世間法を意味す
 【後五】佛陀滅後
 の五箇の五百年
 【大乘基】法相宗
 の開祖寛基の彌勒
 上生經疏を指す。
 【餘の所説】正法
 時はもと一千年な
 りしも婦人の出家
 のため五百年を渡
 持によりて本の數
 に復すとて戒の數
 尼母論、善見律毘
 婆沙に出る説。
 【八敬】特に比丘
 尼の行持すべきも
 のとされたる八種
 の戒律。もと佛陀
 始めて婦人の出家

王申にあたり。その王申よりわが元仁元年甲申にいたるまで二千一百七十三歳なり。また『賢劫經』、『仁王經』、『涅槃經』等の説によるに、すでもて末法にいたりて六百七十三歳なり。

『末法燈明記』最澄作を披閱するにいはく、『それ一如に範衛してもて化を流すは法王、四海に光宅してもて風に乘するに仁王なり。しかればすなはち、仁王法王互に顯はれてものを聞し、眞諦俗諦互によりて教を弘む。このゆゑに、玄籍宇内にみち、嘉猷天下にあふる。こゝに愚僧等率して天網に容り、俯して嚴科をあふぐ、いまだ寧處にいとまあらず。しかるに法に三時あり、人また三品なり。化制の旨、時によりて興替す。毀讚の文人にしたがひて取捨す。それ三古の運、盛衰おなじからず、後五の機、慧悟またことなり。あに一途によりてすくはんや、一理についてたゞさんや。かるがゆるゑに正像末の旨際を詳かにして、こゝろみに破持僧の行事をあらはさん。なかにおいて三あり、はじめに正像末を決す、つぎに破持僧の事をさだむ、のちに教をあげて比例す。

はじめに、正像末を決するに、諸説をいだすことおなじからず、しばらく一説を述せん。大乘基に『賢劫經』をひきて言く、佛涅槃の後、正法五百年、像法一千年、この千五百年ののち、釋迦の法滅盡せんと。末法をいはす。餘の所説を准するに、尼、八敬を修せずしてしかも懈怠するがゆるゑに。法更増せず、かるがゆるゑにかれによらず。また『涅槃經』に、末法の中において、十二萬の大菩薩衆ましゝて法をたもちて滅せずと。これは上位によ

を許すに、この八敬の持戒を條件として制定せしものと傳ふ。その内容は徹底的なる比丘僧への服従と恭敬なり。

【毘尼】 毘奈耶とも譯さる。律のこと。

【袈裟】 僧服のこと、不正色又は壞色とも譯される。その多く知られるは木蘭色、乾陀羅色と呼ばれる染色衣服にして在家者の衣服なる白衣と區別せらる。

【四部】 比丘、比丘尼の出家僧と優婆塞、優婆夷の在家の信徒。

るが故に亦同じからず。

問ふ、もししからば、千五百年のうちの行事いかにぞや。答ふ、「大衛經」によるに、佛涅槃ののちはじめの五百年には、大迦葉等の七賢聖僧、次第に正法をたもちて滅せず、五百年ののち正法滅盡せんと、六百年にいたりて九十五種の外道きほおこらん、馬鳴世にいでもろ／＼の外道を伏せん。七百年のうちに龍樹世にいでも、邪見のはだほこをくだかん、八百年において比丘徒逸にしてわづかに一二道をうるものあらん、九百年にいたりて奴を比丘とし婢を尼とせん、一千年のうちに不淨觀を聞くに、瞋恚して欲せじ、千一年に僧尼嫁娶せん、毘尼を毀謗せん、千二百年に諸僧尼等ともに子息あらん、千三百年に袈裟變じて白からん、千四百年に四部の弟子みな獵師のごとし三寶物を賣らん、千五百年に拘睺彌國に二の僧ありてたがひに是非をおこしてつひに殺害せん、よりにて教法龍宮にをさまる。「涅槃」の十八および「仁王」等にまたこの文あり。これらの經文に准するに、千五百年ののち戒定慧あることなし、かるがゆゑに「大集經」の五十一にいはく、わが滅度ののち、はじめの五百年にはもろ／＼の比丘等わが正法において解脱堅固ならん、はじめをうるをなづつぎの五百年には禪定堅固ならん、つぎの五百年には多聞堅固ならん、つぎの五百年には造寺堅固ならんのちの五百年には鬪諍堅固ならん、白法隠没せんと云云。この意はじめの三箇の五百年にはついでのごとく戒定慧の三法堅固に仕することをえん、すなはち上にひくところの正法五百年、像法一千の二時これなり。造寺已後はならびにこれ

【費長坊】隋の讖
經學士、その佛滅
年代説は彼の撰に
かかる歴代三寶記
に出る孔子の春秋
を依用す。

【象】僧伽。

【邪活】不正なる
生活。

末法なり、かるがゆるに基の般若の會釋にいはく、正法五百年、像法一千年、この千五百年のち正法滅盡せんと。かるがゆるにしんぬ、造塔已後はこれ末法に屬す。問ふ、もしからばいまの世はまさしくいづれの時にあたれるや。答ふ、滅後の年代多くの説ありといへども、しばらく兩説をあぐ。一には法上師等、『周異記』によりて言く、佛、第五の主穆王滿五十三年壬申にあたりて入滅したまふ、もしこの説によらば、その壬申よりわが延暦二十年辛巳に至るまで一千七百五十歳なり。二には費長房等、魯の『春秋』によりて、佛、周の第二十一の主匡王班四年壬子にあたりて入滅したまふ、もしこの説によらば、その壬子よりわが延暦二十年辛巳にいたるまで一千四百十歳なり。故にいまのときのごときはこれ像法の最末のときなり、かのときの行事、すでに末法に同せり。しかればすなはち末法のなかにおいては、たゞ言教のみありてしかも行證なけん、もし戒法あらば破戒なし、いづれの戒を破せんに由りてか、しかも破戒あらんや。破戒なほなし、いかにいはんや、持戒をや。かるがゆるに、『大集』にいはく、佛涅槃のち、無戒、州にみたんと云云。問ふ、諸經律のなかにひろく破戒を制して衆にすることをゆるさず。破戒なほしかなり、いかにいはんや無戒をや。しかるに、いまかさねて末法を論ずるに戒なし、あに瘡なくして、みづからもて傷まんや。答ふ、この理しからず、正像末法の所有の行事、ひろく諸經にのせたり。内外の道俗、たれか披瀆せざらん、あに自身の邪活を貪求して、持國の正法を隱蔽せんや。ただし、いま論ずるところの末法には、たゞ名字の比

【忍地】 諸理を忍可する境地、修道の段階に名けられたる語、見道位の聖道の前段階として施設する。

【前三果】 須陀洹、斯陀含、阿那含の三果。これに阿羅漢果を加へて四果の聖者といふ。即ち聖者の段階的の四分類なり。

丘のみあらん、この名字を世の眞寶とせん。福田なからんや。もし末法のなかに持戒あらば、すでにこれ怪異なり、市に虎あらんがごとし、これたれか信すべきや。問ふ、正像末の事、すでに衆經にみえたり、末法の名字を、世の眞寶とせんことは、何の聖典にいでたりや。答ふ、『大集』の第九にいはいはく、譬へば眞金を無價の寶とするが如し。もし眞金なくば、銀を無價のたからとす。もし銀なくば、鉛石偽寶を無價の寶とす。もし偽寶なくば、赤白銅鐵白錫鉛を無價の寶とす。かくのごとき一切世間のたからのうちに、佛寶無價なり。もし佛寶なくば、緣覺無上なり。もし緣覺なくば、羅漢無上なり。もし羅漢なくば、餘の賢聖衆無上なり。もし餘の賢聖衆なくば、得定の凡夫をもて無上とす。もし得定の凡夫なくば、淨持戒をもて無上とす。もし淨持戒なくば、漏戒の比丘をもて無上とす。もし漏戒なくば、剃除鬚髮して、身に袈裟を著たる、名字の比丘を無上のたからとす。餘の九十五種の異道に比するに、もとも第一とす。世の供をうくべし、もののはじめの福田なり。なにをもてのゆゑに。能く衆生の怖畏すべきところを示すがゆゑに。もし護持養育して安置することあらば、是の人、ひさしからずして、忍地をえん。經文この文のなかに八重の無價あり、いはゆる如來、緣覺、聲聞および前三果、得定の凡夫、持戒、破戒、無戒名字、それついでのごとく正像末のときの無價のたからとするなり。はじめの四は正法の時、つぎの三は像法の時、のちの一は末法の時なり。これによりてあきらかに知んぬ、破戒無戒、ことごとくこれ眞寶なり。問ふ、伏して前の文をみるに、破戒名字、眞

【三災】穀貴と兵
革と疫病との災。

寶ならざることなし。なんが故ぞ。『涅槃』と『大集經』に、國王大臣破戒の僧を供すれば、
國に三災おこり、つひに地獄に生ず。破戒なほしかなり、いかにいはんや無戒をや。しか
るに如來ひとつの破戒において、あるひは毀り、あるひはほむ、あに一聖の説、兩判のと
があるや。答ふ、この理しからず。『涅槃』等の經にしばらく正法の破戒を制す、像末代の
比丘にはあらず。その名おなじといへども、しかも時に異あり。時にしたがひて制許す、
これ大聖の旨なり。故に世尊において兩判のとがまします。問ふ、もししからはなにを
もてかしらん。『涅槃』等の經は、たゞ正法所有の破戒を制止して、像末の僧にあらずと。
答ふ、ひくところの『大集』の所説の、八重の眞寶のごとき、これその證なり。みな、時
にあたりて無價なりとす。かるがゆゑに、ただし正法のごときの破戒の比丘は、清淨衆を
けがす。かるがゆゑに、佛かたく禁制して衆にいれず。しかるがゆゑは、涅槃の第三にの
たまはく、如來いま無上の正法をもて、諸王、大臣、宰相、比丘比丘尼に付囑したまへり。
乃破戒あり、正法をそしらば、王および大臣、四部の衆まさに苦治すべし。かくのごとき
の王臣等、無量の功德をえん。乃これわが弟子なり、眞の聲聞なり、福をうることに無量な
らん。至かくのごときの制文の法往々衆多なり。みなこれ正法に明すところの制文にして、
像末の教にあらず。しかるゆゑは、像季末法には、正法を行せざれば、法としてそしるべ
きなし、なにをか毀法となづけけん。戒として破すべきなし。たれをか破戒となづけけん。ま
たそのときの大王、行としてまもるべきなし、なにによりてか、三災を出しおよび滅慧を

【四種の魔】五蘊魔、死魔、煩惱魔、天魔の四種。それは衆生の惱害となり障礙となるが故に魔と稱す。

【魔波旬】殺者、悪者等と譯さる。惡魔の王にして欲界第六天主。

失せんや。また像木には證果の人なし、いかんしてか、二聖の擁護せらるゝことをあかさん。かるがゆゑに知んぬ、上の所説は、みな正法の世に、持戒あるときに約して、破戒あるがゆゑなり。つきに、像法千年のうちにははじめの五百年には持戒やうやく減じ、破戒やうやく増せん、戒行ありといへども、しかも證果なし。かるがゆゑに、『涅槃』の七にのたまはく、迦葉菩薩、佛にまうしてまうさく、世尊、佛の所説のごときは、四種の魔あり、もし、魔の所説、および佛の所説、われまさに、いかんしてか、しかも分別することをうべき。もろ／＼の衆生ありて、魔行に隨逐せん。また、佛説に隨順することあらば、かくのごときらのともがら、またいかんが知らんと。佛、迦葉につげたまはく、われ涅槃して、七百歳ののちに、これ魔波旬やうやくおこりて、まさにしきりにわが正法を壞すべし。たとへば獵師の身に法衣をきるがごとし、魔波旬もまた／＼かくのごとし。比丘像、比丘尼像、優婆塞、優婆夷像とならんこと、また／＼かくの如し。至もろ／＼の比丘、奴婢、僕使、牛羊象馬、乃至銅鐵釜鍔、大小銅盤、所須のものを受畜し、耕田種植し、販賣市易して、穀米をまうくることをゆるす。かくのごときの衆事、佛、大悲のゆゑに、衆生を憐愍して、みなたくはふることをゆるさんと。かくのごときの經律は、こと／＼く、これ魔説なり云々。すでに七百歳ののちに、波旬やうやくおこらんといへり。かるがゆゑにしんぬ、かのときの比丘、やうやく八不淨物と貪畜し、この妄説をなさん、すなはちこれ魔のともがらなり。これらの經のなかに、あきらかに、年代をさして、つぶさに行事を説けり。さ

【鎮頭迦樹】柿樹科の一種といふ。槃經に依るに其果實は迦羅迦樹黑樹のそれと類似して容易に區別すべからず、且つ鎮頭迦の果實はこれを食し得るも迦羅迦の果實は嚼ひ已れば命終すといはる。

【檀越】施主と譯さる。出家僧への生活資料の布施者のこと。

らに、うたがふべからず。それ一文をあぐ、餘みな准知せよ。つぎに、像法ののちのなかばは、持戒減少し、破戒巨多ならん。かるがゆゑに、『涅槃』の六にのたまはく、至また『十輪』にいはく、もしわが法によりて、出家して悪行を造作せん。これ沙門にあらずしてみづから沙門と稱し、また梵行にあらずして、みづから梵行と稱せん。かくのごとき比丘、よく一切天、龍、夜叉、一切善法功德伏藏を開示して、衆生の善知識とならん。小欲知足ならずといへども、鬚髮を剃除して、法服を被著せん。この因縁をもてのゆゑに、よく衆生のために善根を増長せん、もろくの天人において善道を開示せん。乃至破戒の比丘は、これ死せる人なりといへども、しかも戒の餘力、牛糞のごとし。この牛死せりといへども、しかも人ごとさらしこれをとる、また麝香の死して、のちに用あるがごとしと云々。すでに迦羅林のうちに、ひとつの鎮頭迦樹ありといへり、これは像運すに衰へて、破戒濁世にみち、わづかに一二持戒の比丘あらんに喩ふるなり。またいはく、破戒の比丘これ死せるひとなりといへども、なほし麝香の死して用あるがごとし、衆生の善知識となるといへり。あきらかに知んぬ、このとき、やうやく破戒をゆるして世の福田とす、さきの『大集』におなじ。つぎに像季のちは、全くこれ戒なし。佛、時運をしるしめして、末俗をすくはんがために、名字の僧をほめて、世の福田としたまへり。また『大集』の五十二にいはく、もし後の末世にわが法のなかににおいて、剃除鬚髮し、身に袈裟を著たらん名字の比丘、もし檀越ありて、捨施供養をなさば、無量の福を得んと。また『賢愚經』にのたまはく、

【賢劫】現在の住劫の名。佛典の世界説に依るに一世の全時間をその成立期(成劫)と住續期(住劫)と破滅期(壞劫)と虚無期(空劫)に分ち、その各期の時間量は二十小劫にして世界はこれの四期を無限に繰返すものとす。而して佛陀の出現は唯住劫中のみにあり、且つ現在の住劫は千の佛陀の出現あるが故に賢劫若しくは善劫と名けらるるといふ。釋迦は正しく千佛に於ける第四の佛陀なり。

【無餘涅槃】完全なる涅槃、論書の後譯にては離生死の涅槃との意味

もし檀越ありて、將來末世に法乗つきんとせんに、たとひ妻をたくはへ、子をわきばさむとも、四人以上の名字の僧衆、まさに禮敬せんこと、舍利弗、大目連等のごとくすべしと。また『大集』にのたまはく、もし破戒無戒、身に袈裟をきたるを打罵せば、罪は萬億の佛身より血をいだすに同じからん。もし衆生ありて、わが法のために剃除鬚髮し、袈裟を被服せん。たとひ戒をたもたずとも、かれらはことごとくすでに涅槃の印のために印せらるゝなりと。至乃『大悲經』にいはく、佛、阿難につげたまはく、將來世において法滅盡せんと欲せんとし、まさに比丘比丘尼ありて、わが法のなかにおいて出家をえたらんもの、おのれが手に兒のひぢをひきて、しかもともに遊行して、かの酒家より酒家にいたらん、わが法のなかにおいて非梵行をなさん。かれら酒の因縁たりといへども、この賢劫のなかにおいて一切みな般涅槃を得、この賢劫のなかにおいてまさに千佛まじりて興出したまはん、我を第四となす。つぎにのちの彌勒まさにわがところを補ぐべし。乃至最後盧至如來までかくの如く次第す。汝まさにしるべし。阿難、わが法のなかにおいて、たとひ性はこれ沙門なれども、沙門の行をけがして、みづから沙門と稱せん。かたは沙門に似て袈裟を被著するものあるべし。賢劫において、彌勒を首として乃至盧至如來まで、かのもろもろの沙門、かくのごときの佛のみもとにして、無餘涅槃において、次第に涅槃に在ることをして、遺餘あることなけん。なにをもてのゆゑに。かくの如く、一切沙門のなかになん、ひとたびも佛の名を稱し、ひとたびも信を生ぜんもの、所作の功德つひに虚設ならじ。わ

【四儀】 身的動作の四形式なる行住坐臥の威儀。

【それ】 以下、聖道淨土の佛教に對する異教への批判故にそれは眞に對する偽、正に對する邪の批判を意味す。
【優婆夷】 婦人の信者。

れ佛智をもて法界を測知するがゆゑなりと云々。乃これらの諸經に、みな年代をさして、將來末世の名字の比丘をもて、世の導師とす。もし正法のときの制文をもて、しかも末法世の名字の僧を制せば、教と機とあひそむき、人と法と合せず。これによりて律にいはいはく、非制を制すれば、是れすなはち三明を斷ず、記說するところこれ罪ありと。このかみに經をひきて配當しをはんぬ。

のちに教をあげて比例せば、末法法蘭として正法毀壞し、三業しるしなく、四儀をそむくことあらん。しばらく「像法決疑經」にのたまふがごとし。至また「遺教經」にのたまはく、至また「法行經」にのたまはく、至「鹿子母經」にのたまはく、至「仁王經」にのたまはく、至略抄

それ、もろくの修多羅によりて、眞偽を斷決して外教邪偽の異教を教誡せば、「涅槃經」にのたまはく、「佛に歸依せんものは、終にまたその餘のもろくの天神に歸依せざれ」と。略
「槃舟三昧經」にのたまはく、「優婆夷、この三昧をきゝて學せんと欲せば、至みづから佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命せよ。餘道につかふることをえざれ、天を拜することをえざれ、鬼神をまつることをえざれ、吉良日をみることをえざれ」と。

またのたまはく、「懷婆夷、三昧を學せんと欲せば、至天を拜し神を祠祀することをえざれ」と、出略

【法盧虱吒】古仙人の名。以下の記述の如く天文的自然的の配置者たるのほか、北方印度に行はれたる一種の文字、即ち法盧書若しくは法樓書はこの仙人の造るところと傳へらる。

【摸呼羅】摩呼栗多とも音譯さる。暫時のこと。一晝夜の三十分の一の時間量にして須臾とも譯さる。

『大乘大方等日藏經』卷第八「魔王波旬星宿品」第八の二にのたまはく、「そのときに法盧虱吒、天衆につけていはく、このもろくの月等、おののく主靈あり、なんぢ四種の衆生を救濟すべし。なにものをか四とする。地上の人、諸龍夜叉、乃至蠍等を救はん、かくのごときのだぐひ、みなことごとくこれを救けん。われもろくの衆生を安樂ならしむるをもてのゆゑに星宿を布置す、おののく分部乃至摸呼羅の時等あり、またみなつぶさに説かん。その國土方面のところにしたがひて、所作の事業隨順し增長せん。法盧虱吒、大衆のまへにして掌を合せてときていはく、かくのごとく日月年時、大小星宿を安置す。なにものをか名づけて六時ありとするや。正月二月を噴暖時となづく、三月四月を種作時となづく、五月六月は求降雨時なり、七月八月は物欲熟時なり、九月十月は寒凍の時なり、十一月十二月は合して大雪の時なり、これ十二月をわかちて六時とす。また大星宿そのかず八あり、いはゆる熒星、熒惑、鎮星、太白、辰星、日、月、荷羅躑躅星なり。また小星宿二十八あり、いはゆる昴より胃にいたるまでの諸宿これなり。われかくのごときの次第安置をなし、その法をときをはんぬ、汝等みなすべからくまた見また聞くべし。一切大衆、こゝろにおいていかんぞ、わがおくところの法、その事はなるやいなや。二十八宿、及び八大星の所行諸業、なんぢ喜樂するや不や、是とせんや非とせんや。よろ

【迦羅時】迦羅は時を意味する語。但し或時或日の如く一定の時を限定せざる場合は三摩耶に如く一定の時日を指せる場合の時を迦羅といふ。

【鳩槃荼】妖精の名、冬瓜鬼の譯名あり、蓋しその陰囊の状冬瓜の如くなるが故なりと、また厭眉鬼とも譯す。その疾きこと風の如くにして人の精氣を食ふといふ。

しくおのく、宣説すべし。そのときに一切天人、仙人、阿修羅、龍および緊那羅等、みなことごとく、掌をあはせてことごとくこの言をなさく、いま大仙のごときは天人のあひだにおいてもとも尊重とす、乃至諸龍及び阿修羅よく勝れたるものなけん。智慧慈悲、もと第一とす。無量劫においてわすれず、一切衆生を憐愍するがゆゑに、福報を獲。誓願みちをはりて功德海のごとし、よく過去、現在、當來一切諸事を知る。天人のあひだ、かくのごときの智慧のものあることなし。かくのごときの法用、日夜刹那、及び迦羅時、大小星宿、月半月満年滿の法用さらに衆生よく、この法をなすことなけん。みなことごとく、われ等を隨喜し、安樂ならしむ。よきかな、大徳、衆生を安穩す。このときに、佉盧虱吒仙人、またこの言をなさく、この十二月一年始終、かくのごとく方便す、大小星等、刹那の時法、みなすでにときをはんぬ。また四天王を須彌山の四方面所に安置す。おのおのひとりの王をおく。このもろくの方所にして、おのの衆生を領す。北方天王を毘沙門となづく、これその界のうちににおほく夜叉あり。南方天王を毘留茶となづく、ともにこれその界のうちににおほく鳩槃荼あり。西方天王を毘留博叉となづく、これその界のうちににおほくもろくの龍あり。東方天王を題頭隸吒となづく、これその界のうちに乾闥婆おほし。四方四維、みなことごとく、一切洲渚および、もろくの城邑を擁護す。また鬼神をおきて、しかもこれを守護せしむ。そのとき、佉盧虱吒仙人、衆生のために法を演説しをはる。ときにもろくの天、龍、夜叉、阿修羅、緊那羅、摩睺羅加、人非人等、一切大

【そのとき】以上の敘述は香味仙人が佛陀の勅命に依りてなせる龍族への説話なり。

衆、みな善哉と稱して歡喜無量なり。このときに天、龍、夜叉、阿修羅等、日夜に法窟に出現して、またさらに別して、もろ／＼の星宿小大月の法、時節要略をときおかん。そのときに諸龍、佉羅泥山聖人の住處にありて、光味仙人を尊重し恭敬せん、その龍力をつくしてしかもこれを供養せん」と。抄出

『日藏經』卷第九「念佛三昧品」第十にのたまはく、「そのときに波旬この偈をときをはるに、かの衆のなかにひとり魔女あり、なづけて離暗とす。この魔女はむかし過去においてもろ／＼の徳本をうゑたりき。この説をなしていはく、沙門瞿曇は名稱福徳なり、もし衆生ありて佛名をきくことをえて一心に歸依せん、一切の諸魔かの衆生において惡を加ふることをあたはず、いかにいはんや、佛をみてまつり、まのあたり法をきかんひと、種種に方便し、慧解深廣ならん。乃至とひ千萬億の一切の魔軍も、つひに須臾も害をなすことあること能はずと。如來、いま涅槃道をひらきたまへり。女かしこにゆきて、佛に歸依せんとおもつて、すなはちその父のために、しかも偈をときていはく、至三世の諸佛の法を修學して、一切の苦の衆生を度脱せん。よく諸法において自在を得、當來にねがはくば我還りて佛のごとくならんと。そのときに、離暗この偈をときをはるに、父の王宮の中の五百の魔女、姉妹眷屬、一切みな菩提の心を發せしむ。このときに、魔王その宮のうちの五百の諸女、みな佛に歸して菩提心を發せしむるをみるに、おほきに瞋忿、怖畏、憂愁を

【攀緣】諸法に於て種種にその相を分別する心のはたらき。

ます。至乃至このときに五百のもろ／＼の魔女等、また波旬のために、しかも偈をときていはく、もし衆生ありて、佛に歸すれば、かの人千億の魔におそれず、いかにいはんや、生死のながれを度して、無爲涅槃の岸にいたらんと欲するをや。もしよく一香華をもて、三寶佛法僧に持散することありて、堅固勇猛の心をおこさん、一切の衆魔、壞することあたはじ。至乃至乃れられ過去の無量の悪、一切また滅して餘あることなけん。至誠專心に佛に歸してまつりをはらば、さだめて阿耨菩提の果をえんと。そのときに、魔王この偈をきゝをばりて、大に瞋怖畏をまして心をこがし、憔悴憂愁して、ひとり宮内に坐す。このときに、光味菩薩摩訶薩、佛の説法をきゝて、一切衆生ことごとく攀緣をはなれ四梵行をえしむ。乃きよく洗浴し、鮮潔のころもを著て、菜食長齋して、からく、くさきものをくらふことなかるべし。寂靜處にして道場を莊嚴し、正念結跏し、あるひは行じ、あるひは坐して佛身の相を念じて、亂心せしむることなかれ、さらに他緣し、その餘の事を念ずることなかれ、あるひは一日夜、あるひは七日夜、餘の業をなさざれ。至心に念佛すれば、乃至佛をみたまつる、小念は小をみたまつり、大念は大をみたまつる。乃至無量の念は佛の色身の無量無邊なるをみたまつる一と。略抄『日藏經』卷第十二「護塔品」第十三にのたまはく、「ときに魔波旬その眷屬の八十億衆と前後に圍繞して佛所に往至す。到りをはりて接足して世尊を頂禮したてまつり、かくのごとき偈をとかく。至三世の諸佛の大慈悲、わが一切の殃を禮懺するをうけたまへ。法僧二寶もまたくしかなり、至心歸依したてま

つるに異あることなし。願はくばわれ今日供養し恭敬し尊重するところの世の導師諸悪永くつくしてまた生ぜざらしめたまへ。壽をつくすまで如來の法に歸依せんと。ときに魔波旬、この偈をときをはりて佛にまうしてまうさく、世尊如來はわれおよびもろくの衆生において平等無二の心にしてつねに歡喜し慈悲含忍せんと。佛ののたまはく、是の如しと。ときに魔波旬、大歡喜を生じて清淨心をおこして、かさねて佛前にして接足頂禮し、右にめぐること三市して、恭敬合掌して、しりぞきて一面に住して、世尊を瞻仰したてまつる心に厭足なし」と。抄出

『大方等大集月藏經』卷第五、「諸惡鬼神得敬信品」第八の上にのたまはく、「もろくの仁者、かの邪見を遠離する因縁において十種の功德を獲ん。なんらをか十とす。一には心性柔善にして伴侶賢良ならん、二には業報あることを信じて乃至奪命にももろくの惡をおこさず、三には三寶を歸敬して天神を信せず、四には正見をえて歳次日月の吉凶をえらばず、五にはつねに人天に生じてもろくの惡道を離る、六には賢善の心あきらかなることを得、ひとに讚譽せらる、七には世俗をすて、常に聖道をもとむ、八には斷常の見をばなれて因縁の法を信す、九にはつねに正信、正行、正發心のひとともにあひあつまりあはん、十には善道に生ずることをえむ。この邪見の遠離する善根をもて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せん。この人すみやかに六波羅蜜を滿ぜん。善淨佛土にして、しかも正覺をならん。菩提を得をはりてかの佛土にして功德智慧一切善根、衆生を莊嚴してその國に來

【正見】 妥當なる認識。
 【人天】 人間と神神との世界。
 【斷常】 斷見は虛無論の見解、常見は實有論の見解、ともに不妥當なる認識として邊執見と呼ばれ、これに對して非常非斷なる正見といふ。

【十平等處】衆生法、清淨、布施、戒忍、精進、禪、智の十種平等。斯經第五卷に出づ。

【四天下】須彌四洲をいふ。
【婆伽婆】徳を完成せるもの意、世尊と意譯せらる。
【兜率陀天】兜率陀天、他化自在天、化樂天、須夜摩天は何れも欲界の上空にあるとせらるる神神の世界の名

生ぜしめん。天神を信ぜず惡道のおそれをはなれてかこにして命終してかへりて善道に生ぜん」と。抄略

『月藏經』卷第六「諸惡鬼神得敬信品」の第八の下にのたまはく、「佛の出世はなはだかたし、法僧もまたくかたし、衆生の淨信もかたし、諸難を離るることまたかたし、衆生を哀愍することかたし、知足第一にかたし、正法をきくことをうるることかたし、よく修すること第一にかたし。かたきを知ることをえて、平等なれば、世においてつねに樂をうく。この十平等處は、智者つねに、すみやかに知らん。乃至そのときに世尊、かのもろくの惡鬼神衆のなかにして、法をときたまふ。ときに、かのもろくの惡鬼神衆のなかにして、かの惡鬼神衆は、むかし、佛法において決定の信をなせりしかども、かれ、のちのときにおいて、惡知識にちかづきて、こころに他の過をみる。この因縁をもて、惡鬼神とうまる」と。抄略

『大方等大集經』卷第六「月藏分」の中「諸天王護持百四」第九にのたまはく、「そのときに世尊、世間にしめすがゆるに婆娑世界の主、大梵天王に問うてのたまはく、この四天下、これたれかよく護持養育をなすと。ときに婆娑世界の主、大梵天王、かくのごときの言をなさく、大德婆伽婆、兜率陀天王は、無量百千の兜率陀天子とともに北鬱單越を護持し養育せしむ。他化自在天王、無量百千の他化自在天子とともに東弗婆提を護持し養育せしむ。化樂天王、無量百千の化樂天子とともに南閻浮提を護持し養育せしむ。須夜摩天天王、無量百

千の須夜摩天子とともに西瞿陀尼を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、毘沙門天王は、無量百千の諸夜叉衆とともに北鬱單越を護持し養育せしむ。提頭頼吒天王、無量百千の乾闥婆衆とともに東弗婆提を護持し養育せしむ。毘樓勒天王、無量百千の龍衆とともに南閻浮提を護持し養育せしむ。毘樓博叉天王、無量百千の龍衆とともに西瞿陀尼を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、天仙七宿と三曜と三天童女とは北鬱單越を護持し養育せしむ。かの天仙七宿は虚、危、室、壁、奎、婁、胃なり。三曜は鎮星、歳星、熒惑星なり。三天童女は鳩槃、彌那、迷沙なり。大德婆伽婆、かの天仙七宿のなかに、虚、危、室の三宿はこれ鎮星の土境なり、鳩槃はこれ辰なり。壁、奎の二宿はこれ歳星の土境なり。彌那はこれ辰なり。婁、胃の二宿はこれ熒惑の土境なり、迷沙はこれ辰なり。大德婆伽婆、是の如きの天仙七宿、三曜、三天童女、北鬱單越を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、天仙七宿、三曜、三天童女、東弗婆提を護持し養育せしむ。かの天仙七宿は昴、畢、觜、參、井、鬼、柳なり。三曜は太白星、歳星、月なり。三天童女は毘利沙、彌倫那、羯迦吒迦なり。大德婆伽婆、かの天仙七宿の中に昴、畢の二宿はこれ太白の土境なり、毘利沙はこれ辰なり。觜、參、井の三宿はこれ歳星の土境なり、彌倫那是これ辰なり。鬼、柳の二宿はこれ月の土境なり、羯迦吒迦はこれ辰なり。大德婆伽婆、是の如きの天仙七宿、三曜、三天童女、東弗婆提を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、天仙七宿、三曜、三天童女、南閻浮提を護持し養育せしむ。かの天仙七宿は星、張、翼、軫、角、亢、氐なり。三曜は日、辰星、太白星な

り。三天童女は線訶、迦若、兜羅なり。大德婆伽婆、かの天仙七宿のなかに、星、張、翼はこれ日の土境なり、線訶はこれ辰なり。軫、角の二宿はこれ辰星の土境なり、迦若はこれ辰なり。亢、氐の二宿はこれ太白の土境なり、兜羅はこれ辰なり。大德婆伽婆、かくの如きの天仙七宿、三曜、三天童女、南閻浮提を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、かの天仙七宿、三曜、三天童女、西瞿陀尼を護持し養育せしむ。かの天仙七宿は房、心、尾、箕、斗、牛、女なり。三曜は熒惑星、歳星、鎮星なり。三天童女は毘羅支迦、檀寔婆、摩伽羅なり。大德婆伽婆、かの天仙七宿の中に、房、心の二宿はこれ熒惑の土境なり、毘利支迦はこれ辰なり。尾、箕、斗の三宿はこれ歳星の土境なり。大德婆伽婆、かくの如きの天仙七宿、二宿はこれ鎮星の土境なり、魔伽羅はこれ辰なり。大德婆伽婆、かくの如きの天仙七宿、三曜、三天童女、西瞿陀尼を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、この四天下南閻浮提はもとも殊勝なりとす。なにをもてのゆゑに。閻浮提の人は勇健聰慧にして梵行佛に相應す、婆伽婆なかににおいて出世したまふ。この故に四大天王、ここに倍增してこの閻浮提を護持し、養育せしむ。十六の大國あり。いはく、耆伽摩伽陀國、傍伽摩伽陀國、阿婆多國、支提國、この四の大國をば毘沙門天王、夜叉衆と圍遶して護持し養育せしむ。迦尸國、都薩羅國、婆蹉國、摩羅國、この四の大國をば提頭賴吒天王、乾闥婆衆と圍遶して護持し養育せしむ。鳩羅婆國、毘時國、槃遮羅國、踈那國、この四の大國をば毘樓勒叉天王、鳩槃荼衆と圍遶して護持し養育せしむ。阿濕婆國、蘇摩國、蘇羅吒國、甘滿闍國、この四の大國をば毘樓

【羅刹】羅刹、龍
舍迦乃至迦吒富單
那等、何れも一種
の妖精的存在。

博又天王、もろ／＼の龍集と國遣して護持し養育せしむ。大德婆伽婆、過去の天仙、この四天下を護持し養育せしむ。かゝるがゆゑに、またみなかくの如く分布安置せしむ。後においてその國土、城邑、村落、塔寺、園林、樹下、塚間、山谷、曠野、河泉、散放乃至海中の寶洲、天國にしたがひてその學生、胎生、濕生、化生において、もろ／＼の龍、夜叉、羅刹、餓鬼、毘舍遮、富單那、迦吒富單那等、かのなかに生じて、かのところに遷住して繫屬するところなく、他の教をうけず。この故に續はくば佛、この闍浮提の一切國土において、かのもろ／＼の鬼神分布安置して、護持のためのゆゑに、一切のもろ／＼の衆生を護らんがための故に、われらこの教において隨著せんとおもふと。佛のたまはく、かくのごとし、大梵、なんぢが所説のごとしと。そのときに、世尊、重ねてこの教をかかさんとおぼして、しかも傷をときてのたまはく、世間に示現するがゆゑに、導師、梵王にとはく、この四天下において、たれか護持し養育せん、かくのごとよきの天師梵、諸天王を首として兜率、他化天、化樂、須夜摩、よくかくのごよきの四天下を護持し、養育せしむ。四王、および眷屬またよく護持せしむ。二十八宿等、および十二辰、十二天童女、四天下を護持せしむ。その所生のところにしたがひて、龍、鬼、羅刹等、他の教をうけずば、かしこにかへりてまもりをなさしめん。天神等、差別して願じて、佛、分布せしめたまへり。衆生を憐愍せんがゆゑに、正法のともしびを、熾然ならしむと。そのときに佛、月藏菩薩摩訶薩につけてのたまはく、清淨土を了知するに、この賢劫のはじめ、人壽四萬歲

【鳩留孫佛】賢劫
に出現するといは
れる千の佛陀の第
一、また過去七佛
の第四の佛陀。

【拘那含】鳩留孫
佛に次いで出現せ
る佛陀。即ち賢劫
第二の佛陀。

【蓮華】拘那含亦
足佛に次ぐ賢劫第
三の佛陀。

のとき、鳩留孫佛、世に出興したまひき。かの佛、無量阿僧祇億那由他百千の衆生のため
に、生死輪を廻して、正法輪を輪轉せしむ、追うて惡道を廻して、善道および解脱の果を
安置せしむ。かの佛、この四大天下をもて、娑婆、世界の主、大梵天王、他化自在天王、
化樂天王、兜率陀天王、須夜摩天王等に付屬せしむ。護持のゆゑに、養育のゆゑに、他の
衆生を、憐愍するがゆゑに、三寶の種をして斷絶せざらしめんがゆゑに、熾然ならんがゆ
ゑに、地の精氣、衆生の精氣、正法の精氣、久しく住し増長せんがゆゑに、もろ／＼の衆
生をして、三惡道を休息せしめんがゆゑに、三善道に趣向せしめんがゆゑに、四天下をも
て大梵およびもろ／＼の天王に付屬せしむ。かくのごとく漸次に助つき、もろ／＼の天人
つき、一切の善美白法つき滅して、大惡もろ／＼の煩惱漸を増長せん。人寿三萬歲のとき、
拘那含牟尼佛世に出興したまふ。かの佛この四大天下をもて、娑婆世界の主大梵天王、他
化自在天王、乃至四大天王およびもろ／＼の眷屬に付屬しこまふ。護持養育のゆゑに、乃
至一切衆生をして三惡道を休息して三善道に趣向せしめんがゆゑに、この四天下をもて大
梵およびもろ／＼の天王に付屬したまへり。かくのごとく次第に助つき、もろ／＼の天人
つき、白法またつき、大惡もろ／＼の煩惱漸を増長せん。人寿二萬歲のとき、蓮華如來世
に出興したまふ。かの佛この四大天下をもて娑婆世界の主大梵天王、他化自在天王、化樂
天王、兜率陀天王、須夜摩天王、瞿尸迦帝釋四天王等、およびもろ／＼の眷屬に付屬した
まへり。護持養育のゆゑに、乃至一切衆生をして三惡道を休息して三善道に趣向せしめん

【鐵圍山】須彌山の周圍を繞れる金山と八海を更に包圍して最外壁となれる圓環形の山

がゆゑに、かの迦葉佛、この四天下をもて大梵四天王等に付屬し、及びもろくの天仙衆、七曜、十二天童女、二十八宿等に付けたまへり。護持のゆゑに、養育のゆゑに。清淨土を了知するにかくのごとく次第にいま劫濁、煩惱濁、衆生濁、大惡煩惱濁、闍諍惡世の時人壽百歲にいたりて一切の白法つき、一切の諸惡世間に闍翳することたとへば海水の一味にして大鹹なるがごとし、大煩惱のあぢはひ世に遍滿せん。集會の惡黨、手に觸發をとり、血をそのたなごころにぬりともにあひ殺害せん。かくの如きの惡業生のなかに、我いま出世し菩提樹下にはじめて正覺をなれり。提謂、波利、もろくの商人食を受く。かれらがためのゆゑに、この闍浮提をもて天龍、乾闥婆、鳩槃荼、夜叉等に分布せしむ。護持養育のゆゑに、これをもて大集するに十方所有の佛土、一切無餘の菩薩摩訶薩等ことごとく此に來集せん。乃至この娑婆佛土にしてその處の百億の日月、百億の四天下、百億の四大海、百億の鐵圍山、大鐵圍山、百億の須彌山、百億の四阿修羅城、百億の四大天王百億の三十三天、乃至百億の非想非非想處、かくのごとく數を略せり。娑婆佛土、われこのごころにしてしかも佛事をなす、乃至娑婆佛土の諸有のもろくの梵天王、及びもろくの眷屬、魔天王、他化自在天王、化樂天王、兜率陀天王、兜率摩天王、須夜摩天王、帝釋天王、四大天王、阿修羅王、龍王、夜叉王、羅刹王、乾闥婆王、緊那羅王、迦樓羅王、摩睺羅伽王、鳩槃荼王、餓鬼王、毘舍遮王、富單那王、迦吒富單那王等において、ことごとく、眷屬をひきゐて、ここに大集せり。法をきかんがためのゆゑに、乃至、ここに娑婆佛土の所有のもろく

【橋戸迦】 帝釋天の姪。

【修伽陀】 一般に善道と譯さる。佛智の尊稱語。また陀に於て去るが故に好去といひ、法の實相の如く説くが故に好説といふこと。

の菩薩摩訶薩等、およびもろくの聲聞一切餘なく、ことごとくここに來集せり。開法のためのゆゑに。われいまこの所集の大衆のために、甚深の佛法を顯示せしむ。また世間を護らんがためのゆゑに、この閻浮提所集の鬼神をもつて分布安置し、護持養育すべしと。その時に、世尊また娑婆世界の主、大梵天王に問うてのたまはく、過去の諸佛、この四大天下をもて、かつてたれに付屬してか、護持養育をなさしめたまふと。ときに、娑婆世界の主、大梵天王まうさく、過去の諸佛、この四大天下をもてかつて我および橋戸迦に付屬したまへりき、護持をなさしめたまふ。しかもわれ失あり、おのれが名および帝釋の名をあらはさず、たゞし、諸餘の天王および宿曜辰を稱せしむ、護持養育すべしと。そのときに、娑婆世界の主大梵天王、および橋戸迦帝釋、佛足を頂禮して、しかもこの言をなさく、大德婆伽婆、大德修伽陀、われいま、とがを謝すべし。われ小兒のごとく愚癡無智にして、如來のみまへにして、みづから稱名せざらんや。大德婆伽婆や、ねがはくば容恕したまへ、大德修伽陀や、ねがはくば容恕したまへ、諸來の大衆またねがはくば容恕したまへ。われ境界において言説教令す、自在のところをえて護持養育すべし、乃至、もろくの衆生をして、善道におもむかしめんがゆゑに、われ等むかし、鳩留孫佛のみもとにして、すでに教勅をうけ乃至三寶の種をしてすでに熾然ならしむ。拘那含牟尼佛、迦葉佛のみもとにして、われ教勅をうけしこと、またかくのごとし。三寶の種においてすでにねんごろにして熾然ならしむ。地の精氣、衆生の精氣、正法のあぢはひ、醍醐の精氣、ひさしく住し

【刹利等】 古代印度に於てその族姓別に四種の階級的區別を立つ。即ちその最高位なる婆羅門の僧族と王族たる刹利と生産階級の毘舍と及び奴隷族の首陀の四姓。

增長せしむるがゆゑに、また我がごときをいま世尊のみもとにして教勅を頂受し、おのれが境界において言説教令す。自在のところをえて、一切閑靜飢饉を休息せしめ、乃至、三寶の種をして斷絶せざらしむるがゆゑに。三種の精氣、ひさしく住して增長せしむるがゆゑに。悪行の衆生を遮障して、行法の衆生を護養するがゆゑに。衆生をして、三惡道を休息せしめ、三善道に趣向するがゆゑに。佛法をしてひさしく住することをえしめんがためゆゑに、ねんごろに護持をなすと。佛のたまはく、よいかないかな妙丈夫、汝かくのごとくなるべしと。そのときに、佛、百億の大梵天王につけてのたまはく、所有の行法、法に住し法に順じて惡を厭捨せんものは、いまことごとく汝等が手のうちに付屬す。なんだち賢首、百億の四天下各々の境界において言説教令す。自在のところをえて所有の衆生弊惡龜獮惱害他において慈愍あることなし。後世のおそれを觀ぜずして刹利の心および婆羅門、毘舍、首陀の心を觸惱せん、乃至畜生の心を觸惱せん。かくのごとく殺生をなす因縁、乃至邪見をなす因縁、その所作に隨ひて非時の風雨あらん。乃至地の精氣、衆生の精氣、正法の精氣、損滅の因縁をなさしめば、なんぢ遮止して善法に住せしむべし。もし衆生ありて善をえんとおものはんもの法をえんとおものはんもの、生死の彼岸に度せんとおものはんもの、檀波羅蜜を修行することあらんとおものはんもの、乃至般若波羅蜜を修行せんもの、所有の行法に住せん。衆生および行法のために、事をいとなまんもの、かのものろくの衆生なんだちまさに、護持養育すべし。もし衆生ありて、受持讀誦して、他のために演説

し種々に經論を解説せん。汝等まさにかのもろくの衆生と念持方便して堅固力を得しめ、所聞にいりてわすれず、諸法の相を智信して生死をはなれしめ、八聖道を修して三昧の根相應せん。もし衆生ありて、なんぢが境界において法し住し、奢摩他毘婆舍那次第に方便してもろくの三昧と相應してねんごろに三種の菩提を修習せんと求めんもの、なんだち、まさに遮護し攝受してねんごろに捨施をなして乏少せしむることなかるべし。もし衆生ありてその飲食、衣服、臥具をほどこし、病患の因縁に湯藥を施さんもの、なんぢら、まさにかの施主をして五利増長せしむべし。なんらかを五とす。一には壽増長せん、二には財を増長せん、三には樂み増長せん。四には善行増長せん、五には慧増長するなり。なんぢら長夜に利益安樂をえん。この因縁をもて、なんぢらよく六波羅蜜を滿し、ひさしからずして、一切種智を成ずることをえん。ときに娑婆世界の主大梵天王を首として、百億のもろくの梵天王とともに、ことごとくこの言をなさく、かくのごとしかくのごとし、大德婆伽婆、われら各々におのれが境界に於て弊惡龜龜他を惱害し慈愍の心なく、後世のおそれを觀ぜざらん。乃至われまさに遮障し、かの施主のために五事を増長すべしと。佛のたまはく、よいかなよいかな、なんぢかくのごとくなるべしと。そのときに、また一切の菩薩摩訶薩、一切の諸大聲聞、一切の天龍、乃至一切の人非人等ありて讀めてまりさく、よいかなよいかな、大雄猛士、なんぢらかくのごときの法、ひさしく住することを得、もろもろの衆生をして惡道を離るることを得、すみやかに善道におもむかしめんと。そのと

きに世尊、かさねてこの義をあかさんとおぼして、しかも偈をときてのたまはく、われ月
 藏につげていはく、この賢劫のはじめにいりて、鳩留孫佛、梵等に四天下を付囑したまふ。
 諸悪を遮障するがゆゑに、正法のまなこを熾然ならしむ。もろくの悪事を捨離し、行法
 のものを護持し、三寶の種を斷ぜず三精氣を増長し、もろくの悪趣を休息し、もろく
 の善道にむかはしむ。拘那含牟尼、また大梵王、他化化樂天、乃至四天王に囑したまふ。
 つぎのちに迦葉佛また梵天王、化樂等の四天帝釋護世王、過去のもろくの天仙に囑した
 まふもろくの世間のためのゆゑに、もろくの曜宿を安置して、護持し養育せしめたま
 へり。濁惡世にいたりて、白法盡滅せんとき、われ獨覺無上にして人民を安置しまもらん。
 いま大衆のまへにしてしばくわれを憫亂せば、まさに説法をすつべし。われをおいて護
 持せしめよ。十方のもろくの菩薩一切ことく來集せん、天王もまたこの娑婆佛國土
 にきたらしめん。われ大梵王にとはく、たれかむかし護持するものと。帝釋大梵天、餘の
 天王をさししめす。ときに、釋梵王、過を導師に謝していはく、われら王のところをとこ
 ろとして、一切の悪を遮障し、三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を増長せん、諸悪の朋を
 遮障して、善朋黨を護持せしむ」と。略出。
 『月藏經』卷第七「諸魔得敬信品」第十にのたまはく、「そのときに、また百億の諸魔あ
 り、ともに同時に座よりしてたちて、合掌して佛にむかひたてまつり、佛足を頂禮して、
 しかも佛にまうしてまうさく、世尊、われらまたまさに大勇猛をおこして、佛の正法を護

持し養育して三寶の種を熾然ならしめて、ひさしく世間に住せしめ、いま地の精氣、衆生の精氣、法の精氣みなことごとく增長せしむべし。もし世尊、聲聞の弟子ありて法に住し法に順じ、三業相應してしかも修行せば、われらみなことごとく護持し養育して、一切の所須乏しき所なからしめん。至この娑婆界にしてはじめ賢劫にいりしとき、拘樓孫如來、すでに四天王、帝釋、梵天王に囑せしめて、護持し養育せしめ、三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を増長せしめたまひき。拘那含牟尼、また四天下を梵釋諸天王に囑して、護持し養育せしむ。迦葉もまたかくのごとし。すでに四天下を梵釋護世王に囑して、行法のひとを護持せしめき。過去の諸仙衆および諸天星辰、もろくの宿曜、また囑し分布せしめき。われ五濁世にいでて、もろくの魔の怨を降伏して、しかも大集會をなして佛の正法を顯現せしむ。至一切のもろくの天衆、ことごとくともに佛にまうしてまうさく、われら王のところを所にして、みな正法を護持し、三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を増長せしめもろくの病疫飢饉および鬪諍をやめしめん」と。乃至 略出

「提頭頼吒天王護持品」にはく、「佛のたまはく、日天子、月天子、なんぢわが法において護持し養育せば、なんぢをして長壽にしてみろくの衰患なからしめじと。そのときにまた百億の提頭頼吒天王、百億の毘樓勒叉天王、百億の毘樓博叉天王、百億の毘沙門天王あり、かれら同時におよび眷屬と座よりしてたちて、衣服を整理し、合掌し微禮して、かくのごときの言をなさく、大德婆伽婆、われら各々におのれが天下にしてねんごろに佛

法を護持し養育することをなさん。三寶の種をして熾然としてひさしく住し、三種の精氣みなことごとく增長せしめん。乃我いままた、上首毘沙門天王と同心にこの閻浮提と北方との諸佛の法を護持す」と。略出

『月藏經』卷第八「忍辱品」第十六にのたまはく、「佛のたまはく、かくのごとしかくのごとし、汝がいふところの如し。もし己を愛し苦を厭ひ、樂をもとむることあらば、まさに諸佛の正法を護持すべし。これよりまさに無量の福報をうべし。もし衆生ありて、わがために出家し、鬚髮を剃除し、袈裟を被服せんとたとひ戒をたまたざれども、彼等ごとくとくすでに涅槃の印のために印せらるゝなり。もしまた出家して戒をたまたざらんもの、非法をもて而も惱亂をなし、罵辱し毀背し、手と刀杖を以て打縛し斫截し、もしは衣鉢をうばひ、および種々の資生の具をうばふものあらん、このひとはすなはち三世の諸佛の眞實の報身を壞するなり、すなはち一切天人の眼目をはらふなり。このひと、諸佛所有の正法三寶の種を隠没せんと欲ふがためのゆゑに、もろくの天人をして利益をえず地獄に墮せしむるがゆゑに、三惡道增長し盈滿することをなすなり」と。

またのたまはく、「そのときにまた一切天龍、乃至一切迦吒富單那、人非人等ありて、みなことごとく合掌してかくのごとときの言をなさく、われら佛の一切聲聞弟子、乃至もしまた禁戒をたまたざれども鬚髮を剃除し袈裟のかたはしを著んものにおいて、師長を想をなさん。護持養育して、もろくの所須をあたへて、乏少なることなからしめん。もし餘の

天龍、乃至迦吒富單那等その惱亂をなし、乃至惡心をもて眼をもてこれを見れば、われらごとく共にかの天龍、富單那等をして所有の諸根缺滅し醜陋ならしめん、かれをしてまたわれら共に住しともに食することをえざらしめん、またく同處にして戲笑することをえじ。かくのごとく擯罰せん」と。

またのたまはく、「占相をはなれて正見を修習せしめ、決定してふかく罪福の因縁を信ずべし」と。出抄

『首楞嚴經』にのたまはく、「かれらの諸魔、かのもろくの鬼神、かれらの群邪、また徒衆ありて各各にみづからいはん、無上道を成ずと。わが滅度の後末法のなかに、この魔民おほからん、この鬼神おほからん、この妖邪おほからん。世間に熾盛にして善知識となりて、もろくの衆生をして愛見のあかに落さしめん。菩提のみちをうしなひ、誑惑無識にして、おそらくは心をうしなはしめん。所過のところ、その家蕤散して、愛見の魔となりて如來の種を失せん」と。

『灌頂經』にのたまはく、「三十六部の神王、萬億恆沙の鬼神を眷屬として、相をかくし番にかはりて、三歸をうくるひとをまもる」と。

『地藏十輪經』にのたまはく、「つぶさにまさしく歸依して、一切の妄執吉凶を遠離せんもの、終に邪神外道に歸依せざれ」と。

又のたまはく、「あるひは種種に、もしは少もしは多、吉凶の相を執じて鬼神をまつりて

【二十六部】 彌栗
頭不羅婆神乃至彌
栗頭草陀羅神、三
十六善神と言はる

【具戒】具足戒の略、比丘及び比丘尼の受持すべき戒律。一般に比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒と稱せらるるも、各部派各種の律典によりてその數に増減あり。

【三迦葉】優婆塞、螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、ともに火神を祭る苦行主義外道に屬し、佛陀成道後間もなく教化せられてその弟子となる。

乃至しかうして極重の大罪惡業を生じ無間罪にちかづかん。かくのごときの人、もしいまだかくのごときの大罪惡業を懺悔し除滅せずば、出家しおよび具戒をうけしめず、もしは出家しあるひは具戒をうけしめば、すなはち罪をえんと。

『集一切福德三昧經』のなかのたまはく、「餘乘にむかはされ、餘天を禮せされ」と。

『本願樂師經』のたまはく、「もし淨信の善男子善女人等ありて、乃至盡形までに餘天につかへざれ」と。

又のたまはく、「また世間の邪魔、外道、妖妄の師の安りに禍福を説くを信じて便ち恐動を生ぜん。心みづから正しからず、卜問してわざはひをもとめ、種種の衆生を殺して神明に解奏し、もろくの魘魘を呼うて福祐を請乞し、延年を冀はんとするに、つひにうるこゝとあたはず。愚癡迷惑して、邪を信じ倒見してつひに撞死せしめ、地獄にいりていづる期あることなけん。至八にはよこさまに毒藥、厭毒、咒咀、起屍鬼等のために中害せらる」と。

抄出
『菩薩戒經』のたまはく、「出家のひとの法は、國王にむかひて禮拜せず、父母にむかひて禮拜せず、六親につかへず、鬼神を禮せず」と。

『佛本行集經』の第四十二卷、「優婆塞那品」のたまはく、閑那翻「その時に、かの三迦葉兄弟にひとりの外甥の螺髻梵志といふものあり、その梵志を優婆塞那となづく。乃つねに二百五十の螺髻梵志の弟子とともに仙道を修學しき。かれその舅迦葉三人をきくに、

【陀羅尼】總持若
しくは能持能遮等
と譯さる。一切の
義理を能持し一切
の障礙を能遮する
能力。密教的の術
語としては密語即
ち明呪の意味をも
つ

もろ／＼の弟子かの大沙門の邊に往詣して、阿舅、鬚髮を剃除して袈裟衣をきる。みをはりて舅に向ひてしかも偈をときていはく、舅等虚しく火を祀ること百年、たま／＼空しくかの苦行を修しき。今日おなじくこの法を捨つること、なほし蛇のふるき皮をぬぐがごとくするをや。そのときに、かの舅迦葉三人、おなじくともに偈をもて、その外甥優婆塞那に報じてかくのごときの言をなさく。われらむかしむなく火神を祀りて、また／＼いたづらに苦行を修しき。われら今日この法をすつること、まことに蛇のふるき皮をぬぐがごとくす」と。抄出

『起信論』にいはく、「あるひは衆生ありて、善根力なければすなはちもろ／＼の魔外道鬼神のために誑惑せらる。もしは座中にして、かたちを現じて恐怖せしむ。或は端正の男女等の相を現す。まさに唯心を念ずべし、境界則ち滅してつひに惱をなさず。或は天像菩薩像を現じ、また如来像の相好具足せるをなして、もしは陀羅尼をとき、もしは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧をとき、あるひは平等、空、無相、無願、無怨、無親、無因、無果、畢竟空寂、これ眞の涅槃なりととかん。あるひは人をして宿命過去の事をしらしめん。また未來の事をしる他心智をえ、辯才無礙ならしむ。よく衆生をして世間の名利の事に貪著せしむ。また人をしてしば／＼瞋りしば／＼喜ばしめ、性無常准び無からしむ。あるひはおほく慈愛し、おほく睡り、おほく宿し、おほく病す。その心懈怠なり。あるひははかに精進をおこして、のちにはすなはち休廢す。不信を生じて、うたがひおほ

くおもんばかりおほし。あるひはもとの勝行をすて、さらに雑業を修せしめ、もしは世事に著せしめ種々に牽纏せらる。またよく人をしてもろくの三昧の少分相似せるをえしむ。みなこれ外道の所得なり眞の三昧にあらず。或はまたひとをして、もしは一日、もしは二日、もしは三日、乃至七日、定中に住して自然香味の飲食をえしむ。身心適悦して、飢せず渴せず、ひとをして愛著せしむ。或はまたひとをして、食に分齊なからしむ。たちまちにおほく、たちまちにすくなくして顔色變異す。この義をもてのゆゑに行者つねに智慧をして觀察して、この心をして邪網に墮せしむることなかるべし。まさにつとめて正念にして、とらず著せずして、すなはちよくこのもろくの業障を遠離すべし。知るべし、外道の所有の三昧はみな見愛我慢の心をはなれず、世間の名利恭敬に貪著するがゆゑなり」と。

【太上老君】 老子の尊稱

『辨正論』法琳の撰にははく、「十喻九箴の篇」、李道士の「十異九迷」にこたふ。外の一異にははく、太上老君は、神を玄妙玉女に託して、左腋をさきてうまれたり。釋迦牟尼は、胎を摩耶夫人によせて、右脇をひらきていでたり。至内の一喻にははく、老君は常にたがひて、牧女に託して、左よりいづ。世尊は化にしたがひて、聖母によりて、右よりいでたまふ。聞士のいはく、盧景裕、戴詵、韋處玄等が、解五千文、および梁の元帝、周弘政等が、考義類を案するにいはく、太上に四あり。いはく三皇および堯舜これなり。いふところは、上古にこの大徳の君あり、萬民のかみにのぞめり、かるがゆゑに太上といふなり。郭莊が

【爾賓】印夏北西部なる迦濕羅羅の舊稱。但し時代によりて兩者を區別することあり。
 【牟尼】釋迦牟尼の略稱。

いはく、時のこれを賢とするところのものを君とす、材の世に稱せられざるものを臣とす。老子、帝にあらす皇にあらす、四種のかぎりにあらす、何の典據ありてか、たやすく太上と稱するや。道家の『玄妙』、および『中台』、『朱箱』、『王禮』等の經、ならびに『出塞記』をかんがふるにいはく、老はこれ李母がうめるところ、玄妙玉女ありといはず、すでに正説にあらす、もとも、かりの謬談なり。『仙人玉錄』にいはく、仙人は妻なし、玉女は夫なし、女形をうけたりといへどもつひに産せず、もしこの瑞あるひはまことに嘉とすべしといふ。なんすれぞ『史記』にも文なく、『周書』にもせす。虚をもとめて實をせめば、矯盲者のことばを信するなるのみ。『禮』にいはく、官をしりぞきて、位なきは、左遷せらるると『論語』にいはく、左衽は禮にあらすと。もし、左をもて右にすぐれたりとせば、道上行道するに、なんぞ左にめぐらすして、しかもかへりて右にめぐるや。國の語書にみな右のごとしといふ、ならびに天の常にしたがうてなり。至 外の四異にいはく、老君は文王の日、隆周の宗師たり。釋迦は莊王の時、陽寶の教主たり。内の四輪にいはく、伯揚は職小臣にをり、かたじけなく藏吏にあたり。文王の日にあらす、また隆周の師にあらす。牟尼は位太子に居して、身特尊を證したまへり。昭王之盛年にあたれり、閻浮の教主たり。乃至 外の六異にいはく、老君は世に降して、はじめ周文の日より孔丘のときにをはれり。釋迦は生をくだして、淨飯の家にはじまりて、わが莊王之世にあたり。内の六輪にいはく、老聃は桓王丁卯のとしにうまれて、景王壬午のとしに終ふ、孔丘のときに訖るといへ

【調御】佛陀の聲稱。能く衆生を調御して道を行ぜしむるの意、具には調御丈夫若しくは丈夫調御師と譯さる。

【提河】阿夷羅跋那揭羅國にあり、佛陀その河邊なる娑羅雙樹間に於て入滅すと傳ふ。
【鶴樹】一般には鶴林と言はる。佛陀入滅のとき、娑羅樹林白變して恰も白鶴の如くなりしとの經典の記述による。

ども、姫丹の世にいでず。調御は昭王甲寅のとしに誕じて、穆王壬申のとしに終ふ。これ淨飯の胤たり。もと莊王のさきにいでたまへり。聞士のいはく、孔子周にいたりて老聃をみて禮をとふ。『史記』につぶさにあらはる。文王の師たることすなはち典證なし。周の末にいでたり、そのことをたづぬべし。もし周初にあることは史文にのせず。乃、外の七異にいはく、老君はじめて周の代にうまれて、のちに流沙にゆく。始終をはからず、方所をしることなし。釋迦は西國に生じて、かの提河にをはりぬ、弟子むねをうちて群胡おほきにさけぶ。内の七喩にいはく、老子は賴郷にむまれて、槐里に葬らる、秦佚が弔につまびらかなり。袁遁天の形にあり。翟臺はかの王宮にいでてこの鶴樹にかくれたまふ漢明の世につたはりて、ひそかに蘭臺の書にまします。聞士のいはく、『莊子』の内篇にいはく、老聃死して秦佚弔ふ。みたびさげんでいづ。弟子あやしんでとふ、夫子のともがらにあらざるかと。秦佚がいはく、さきに吾いりてみるに、少者これを哭す。その父を哭するがごとし、老者これを哭す。その子を哭するがごとし。いにしへにこれを遁天の形といふ。はじめは、おもへらくそのひとなりと、しかるにいま非なり。遁は隱なり、天は免縛なり、形は身なり。いふところは、はじめ老子をもて免縛形の仙とす、いますなはち非なり。嗟その詔曲にしてひとの情をとる、かるがゆゑに死をまぬかれず、わがともにあらずと。至乃、内の十喩外の十異を答す。外は生より左右ことなる一、内は生より勝劣あり。内にさとしていはく、左衽はすなはち戎狄のたふとぶところ、右命は中華のたふとぶところとす。かる

がゆるぎに『春秋』にははく、冢卿は命なし、介卿はこれあり、またひだりならずやと。『史記』にははく、蘭相如は功おほきにして、くらの靡顔がみぎにあり、これをばづと。またいはく、張儀相は秦を右にして魏を左にす、犀首相は緯を右にして魏を左にすとも。蓋し不便をいふなり。『禮』にははく、左道亂群をばこれを殺すと。豈右はまさりて左はおとれるにあらずや。皇甫謐が『高士傳』にははく、老子は楚の相人、温水の陰にいへるす、常樞子に師事す。常子疾あるにおよんで、李耳ゆきてやまひをとふ。稽康がいはく、李耳涓子にしたがひて、九仙の術をまなぶと、太史公等が衆書を檢するに老子左腋をひらきて生るといはす。すでにまさしくいでたることなし、承信すべからざること明けし。あきらかにしんぬ。戈をふるひ翰をわやつるはけだし文武の先、五氣三光はまことに陰陽のはじめなり。ここをもて釋門には右に轉ずることまた人用を扶く、張陵左道にす、まことに天の常にたがふ。いかにとなれば釋迦無縁の慈を起して有機の召に應ず、そのあとをかたるなり。乃。それ釋氏は、天上天下に介然としてその尊に居す。三界六道卓爾としてその妙をおす。乃。外論にははく、老君を範とす。たゞ孝たゞ忠、世をすくひひとを度す、慈をきはめ愛をきはむ。ここをもて聲教ながくつたへ、百王あらためず玄風ながくかうぶらしめて、萬古たがふことなし。このゆるぎに國ををさめ家ををさむるに當然たり格式たり。釋教は義をすて親をすて、仁ならず孝ならず、關王父をこるせるに翻してとがなしとくとく、調達兄を射て罪を得たるを聞くことなし。これをもて凡をみちびく、さらに惡をますことを

たす。これをもて世にのりとする、なんぞよく善を生ぜんや。これ逆順の異の十なり。
 内にさとしていはく、義はすなはち道徳のいやしくするところ、禮は忠信のうすきより生
 ず。禮仁は匹婦をそしり、大孝は不置に存す。しかるに凶にむかひてうたひわらふは中夏
 のかたちなたがふ、喪にのぞんでほときをたゞくは華俗のをしへにあらす。原壤母死して
 孔子祭を助けてそしらず。子桑死するとき子貢とぶらふ四。かるがゆゑに、これををしふるに孝
 子あひみてわらふ、莊子妻死すほときをたゞきて歌ふ。かゝるがゆゑに、これををしふるに孝
 をもてするは天下の人父たるを敬するゆゑなり、これををしふるに忠をもてするは天下の
 人君たるを敬する故なり。化萬國にあまねきすなはち明眸のいたれるなり。仁四海にあら
 はるるはまことに聖王の臣孝なり。佛經にいはく、識體六趣に輪廻す、父母にあらざること
 なし。生死三界に變易す、たれか怨親をわきまへん。またいはく、無明慧眼をおほひ生死
 のなかに來往す。ゆききたりてなすところ多し、さらにたがひに父子たり、怨親しばく
 知識なり、知識しばく、怨親たり、ここをもて沙門俗をすてて眞におもむく、庶類を天屬
 にひとしくす。榮をすて、道につく、含氣を己親にひとしくす。あまねくたゞしき心を行じ
 ざしをひ。また道は清虚をたふとぶ、それ恩愛をおもくせんや。法は平等をたふとぶ、それ
 怨親をきはらんや、あにまどひにあらすや。勢競親をわすれ文史事をあかす。齊桓楚穆こ
 れ其のともがらなり。もて聖をそしらんとおもふ、あにあやまれるにあらすや。それ道の
 劣の十なり。至乃

二皇化をすべて

『須彌四域經』にいはく、摩磔菩薩
を依義とす吉祥菩薩を女媧とす。

淳風のはじめにをり、三聖ことばをたて

【津を兎馬】 兎と馬と象の恒河を渡るに、兎はその水面を、馬は水中に入るも、未だ水底に究めず、唯象のみ始終水底を徹して渡る、恒河とは二因縁、兎馬象は聲聞緣覺及び如來戒經に出づる譬喩者維摩の譯名、いまは彼を主人公とせる維摩經を指す

【満月】 佛陀の尊容を形容するに満月を以てすること、經典文學にその例多し。
【相輪】 塔の蓋上に樹つる輪狀の裝飾。

て「空寂所問經」にいはく、迦葉を老子と已澆のすゑをおこす。玄虛沖一の旨、黃老その談をさかりにし、詩書禮樂の文、周孔その教をたかくす。謙をあきらかにし質をまもるは、すなはち聖にのぼる階梯なり。三畏五常は人天の山漸とす。けだし冥に佛理にかなふも、正辨極談にあらず。なほ道を瘖聵に訪ふに方をさしまねきて速進をきはむることなく、津を兎馬にとふにわたるをしりて淺深をはからざるがごとし。これによりて談するに、殷周の世は釋教のよろしく行すべきところにあらず。なほ炎威ひかりをかがやかせば、童子目をただしくしてみることあたはず、迅雷ふるひうてば、懦夫身をはりてきくことあたはざるがごとし。ここをもて河池わきうかぶに、昭王神を護ずることをおそれ、其亮いろを覺じて穆后聖を亡はんことを欣ぶ。周書異記にいはく、昭王二十四年四月八日江河泉氷ことごとく泛雲くろくして、あによく葱河をこえて化をうけ、雲嶺をこえてまこをいたさんや。淨名に白虹の怪あり。いはく、これ盲者の過にして日月の咎にあらずと。たま／＼その醫囊の辯をきはめんとせば、恐らくは吾子混沌の性をいたわ、それしるところにあらず、その盲一なり。内に像塔を建造する指の二。漢明より已下齊梁に訖るまで、王公守牧、滿信の士女、および比丘比丘尼等、冥に至聖を感じ、日に神光を觀るものおほよそ二百餘人、迹を萬山に見、耀を滬濱に浮べ、清臺のもとに満月の容をみ、維摩のほかに相輪の影をみ、南平は應を瑞像に獲、文宣は夢を聖牙に感じ、蕭后ひとたび鑄て尅成し、宋皇よたび摸して就らざるが如きに至りてはその例はなはだ衆し、具さに陳ぶべからず。あになんぢが無目をもて、しかも

【三點四德】三點は法身、般若、解脫の三法、蓋し梵文字伊字の形象の三點より成るが如くこの三法の徳を統一して以て大涅槃を成立するが故に三點といふ。四徳は常樂、我、淨にして等しく涅槃の内徳たるもの、大涅槃に何れも三説

かの有爲を斥はんや。しかるに徳として備はらざるものなし、これをいうて涅槃とす。道として通せざるものなし、これを名づけて菩提とす。智として周からざるものなし、これを稱して佛陀とす。この漢語をもてかの梵言を譯す。すなはち彼此の佛、照然として信すべきなり。なにを以てかこれを明すとならば、それ佛陀といふは漢には大覺といふ、菩提といふは漢には大道といふ。涅槃といふは漢には無爲といふ。しかるに吾子終日に菩提の地をふんで、大道すなはち菩提の異號なるを知らず。形を大覺の境にうけて、いまだ大覺のすなはち佛陀の譯名なることを聞はず。かゝるがゆゑに莊周いはく、また大覺あればしかうして後にその大覺をしると。郭が註にいはく、覺は聖人なり、いふところは患懷にあるはみな夢なり。註にいはく、夫子と子游と未だ言を忘れて神解することあたはず、かるがゆゑに大覺にあらず。君子のいはく、孔丘の談ここに亦つきぬ。涅槃寂照、識として識るべからず、智として知るべからず。すなはち言語たえてしかも心行滅す、かるがゆゑに言をわするゝなり。法身はすなはち三點四徳の成するところ、蕭然として無累なり、かるがゆゑに解脫と稱す。これその神解として患やむなり。夫子聖なりといへども、はるかにもて功を佛にゆづれり。いかんとなれば劉向が古舊二録を按ずるにいはく、佛教中夏に流れて一百五十年の後老子まさに五千文を説く。然り而して、周と老とならびに佛教の所説をみる、言教往たり、驗めつべし。乃至『正法念經』にのたまはく、ひと戒を持たざれば、諸天減少し、阿修羅さかんなり。善龍ちからなし、惡龍ちからあり。惡龍ちからあれば、

【君子等】第七、
氣爲道本篇。

すなはち霜雹をくだし、非時の暴風疾雨ありて五穀みのらず、疾疫競ひ起りて人民飢饉し、
たがひにあひ残害す。もしひと戒をたもてば、おほく諸天威光を増足し、修羅減少す。惡
龍ちからなし、善龍ちからあり。善龍ちからあれば風雨ときに順じ四氣和暢なり。甘雨く
だりて百穀ゆたかなり。人民安樂にして兵戈戢息し、疾疫行ぜざるなり。至乃

君子のいはく、道士大霄が『隱書』、『無上眞書』等にはく、無上大道君は五十五重無
極大羅天のうち、玉京のうへ、七寶玄臺、金床玉札に治在し、仙童玉女に侍衛せられ、
三十二天三界のほかに住在すと、『神仙五岳圖』を按ずるにはく、大道天尊は大玄の都、
玉光の州、金眞の郡、天保の縣、元明の郷、定志の里を治す、災およばざるところなり
と『靈書經』にはく、大羅はこれ五億五萬五千五百五十五重天の上天なりと『五岳圖』
にはく、都は祝なり、太上は大道なり、道のなかの道神なり。明君最も靜をまもりて太
玄の都にをると『諸天內音』にはく、天と諸仙と樓都のつゞみをならず、玉京に朝宴し
てもて道君を樂しましむと。

【道士等】第十、
出道僞謬篇。

【陶朱】道家は更
に陶朱の著と稱し
て變術經を擧ぐ。

道士の上ぐるところの經の目を按ずるに、みないはく、宋人陸脩靜によりて、しかも一
千二百二十八卷をつらねたり。もと雜書諸子の名なし。しかるに道士いま列ぬるに、すな
はち二千四十卷あり。その中におほく、『漢書藝文志』の目をとりにて、妄りに八百八十四卷
を註して、道の經論とす。至按ずるに、陶朱はすなはちこれ范蠡なり。まのあたり越王勾
踐につかへて、君臣ことごとく吳に囚はれて、屎をなめ尿をのんで亦もて其だし。またま

【また、はく】
第一歸心有地篇樂
武帝の捨道歸佛の
勅文を引く。

た范蠡が子は齊にころさる、父すでに變化の術あらば、なんぞもて變化してこれを免るる
 ことあたはざる。造立天地記を按ずるに、稱すらく、老子、幽王の皇后のはらぬなかに
 託生すと、すなはちこれ幽王の子なり。また身柱史たりと、またこれ幽王の臣なり。一化胡
 經にいはく、老子、漢にありては東方朔なりと。もし審かに爾らば知んぬ、幽王大夜の
 ためにころさる。あに君父を愛して、首をあたへて、君父をして死せざらしめざるべ
 けんや。至陳仲龍が目錄をさす、すでに正本なし、なんぞ譯りの誤らしきや。しかるに竹書
 目をなすことすでにこれ大偽なり、いさ、支都錄、またこれ偽のなかの偽なり。乃

またいはく、大經のなかに説かく、道に九十六種あり、たゞ佛の一道これ正道なり、
 その餘の九十五種においてはみなこれ外道なりと。朕、外道をすて、もて如來につかふ、
 もし公卿ありて、よくこの誓に入らんものは、おのゝ菩提の心を發すべし。老子、周公、
 孔子等、これ如來の弟子として、しかも化をなすといへどもすでに邪なり。たゞこれ世間
 の善なり、凡をへだて、聖と成すこと能はず。公卿、百官、侯王、宗室よろしく偽をかへ
 して眞につき、邪をすて、正に入るべし。かるがゆゑに經教成實論に説きていはく、も
 し外道につかへて、心おもく、佛法は心かろきは、すなはちこれ邪見なり。もし心一等な
 る、これ無記にして善惡にあたらすと。佛につかふる心強く、老子の心少きはすなはちこ
 れ清信なり。清信といふは、清にこれ表裏ともにきよく、垢穢惑累みなつくす。信はこれ
 正を信じて邪ならざるがゆゑに、清信佛弟子といふ。その餘ひとしくみな邪見なり、清信

【老子の等】
王の言葉

剗陵

と稱することをえざるなり。至老子の邪風をすて、法流の眞教に入れよとなり」と。抄出

光明寺の和尚のたまはく、「上方の諸佛恆沙のごとし。かへりて舌相を舒べたまふことは、娑婆の十惡五逆おほく疑謗し、邪を信じ、鬼につかへ、神魔を侮かしてみだりに想うて、恩をもとめ福あらんとおもへば、災障禍横うたゝいよ／＼おほし。連年に病の床枕に臥す、瞽盲あしをれ手ひきつり神明に承事してこの報をうるもののためなり、いかなぞすて、彌陀を念ぜざらん」と。

天台の『法界次第』にいはいはく、「一には佛に歸依す『經』にいはいはく、佛に歸依せんもの終に更りて、その餘のもろ／＼の外天神に歸依せざれと。またはいはく、佛に歸依せんもの、つひに惡趣に墮せじといへり。二には法に歸依す。いはく大聖の所説、もしは教、もしは理、歸依し修習せよとなり。三には僧に歸依す。いはく心、家を出でたる三乘、正行の伴に歸するがゆゑに『經』にのたまはく、永くまた更りて、その餘のもろ／＼の外道に歸依され」と。

【慈雲】名は蓮式
支那宋代に於る天
台の學匠。

慈雲大師のいはく、「しかるに祭祀の法は、天竺には草陀、支那には祀典といへり。すてに未だ世に逃れず、眞を論ずれば俗をこしらふる權方なり」と。

高麗の觀法師のいはく、「穢鬼道、梵語には闍黎多、この道亦諸趣に徧す。福德あるものは山林塚廟神となる。福德なきものは不淨所に居し、飲食をえず、つねに擻打をうく。河をふさぎ海をふさぎて苦をうくること無量なり。詭誑の心意、下品の五逆十惡を作りてこの

道の身を感じず」と。

神智法師釋していはく、「俄鬼道は、常にうゑたるを餓といふ、鬼の言は、歸なり。尸子のいはく、いにしへに人死をなづけて歸人とす。また天神を鬼といふ、地神を祇といふ。乃至形あるひは人に似たり、あるひは獸等のごとし。心正直ならざればなづけて諸誑とす」と。

大智律師のいはく、「神はいはく鬼神なり、すべて四趣、天修、鬼獄にをさむ」と。
度律師のいはく、「魔はすなはち惡道の所收なり」と。

「止觀」の魔事境にいはく、「二に魔の發相をあかさば、管屬に通じてみな稱して魔とす。くはしく枝異を尋ねれば三種をいです。一には逆傷鬼、二には時媚鬼、三には魔羅鬼なり。三種の發相各各不同なり」と。

源信、「止觀」によりていはく、「魔は煩惱によりて菩提を妨ぐ、鬼は病惡をおこして命根を奪ふ」と。
『論語』にいはく、「季路とはく、鬼神につかへんかと。子のたまはく、事ふることあたはず、人いづくんぞよく鬼神につかへんや」と。已上抄出

【三種等】 慥惕鬼はその現るる各部に接觸するをいひ、時媚鬼は晝夜十二時の各時に應じて一定せる相を現ずるをいひ、魔羅鬼は正しく惡魔にして修道者に障害を興ふるをいふ。

【竊かに等】 以下教行信證の結文にして古來後序と稱せらる。

竊かにおもんみれば、聖道の諸教は、行證久しく廢れ、淨土の眞宗は證道今盛な

り。然るに諸寺の釋門、教に昏くして眞假の門戸をしらず、洛都の儒林、行に迷ひて邪正の道路を辨ずることなし。斯をもて興福寺の學徒、太上天皇號す、諱尊成、今上土御門の院と號す、諱爲仁、聖曆、承元、丁卯の卯の歲、仲春上旬の候に奏達す。主上臣下、法にそむき義に違し、忿を成し怨を結ぶ。

これによりて、眞宗興隆の太祖源空法師、ならびに門徒數輩、罪科をかながへず、みだりがはしく死罪に坐す。あるひは僧儀を改め、姓名をたまうて、遠流に處す、予はそのひとつなり。しかればすでに僧にあらす俗にあらす、このゆゑに禿の字をもて姓とす。空師ならびに弟子等、諸方の邊州に坐して五年の居諸をへたりき。

皇帝 諱守成、聖代、建曆辛未の未の歲、子月中旬第七日、勅免をかうぶりて入洛。已後、空は洛陽東山の西の麓鳥部野の北のほとり、大谷に居したまひき。おなじき二年壬申の中寅月下旬第五日午の時に入滅したまふ。奇瑞稱計すべからず、別傳にみえたり。

しかるに、愚禿釋の鸞、建仁辛酉の曆、雜行をすて、本願に歸す。元久乙卯の丑とし恩恕をかうぶりて選擇を書しき。同じき年の初夏中旬第四日「選擇本願念佛集」の内題の字、ならびに南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と、釋の禪空の字と、空の眞筆をもてこれを書かしたまひき。同じき日、空の眞影申しあづかりて圖畫したてまつる。同じき二年閏七月下旬第九日、眞影の銘は眞筆をもて南無阿彌陀佛と若我成

佛十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生の眞文とを書かしたまひき。又夢の昔によりて、緯空の字をあらためて同じき日御事を以て名の字を書かしたまひ畢んぬ。本師聖人、今年七月の御となり。選擇「願念佛集」は、禪定博陸法名圓照の教命によりて選集せしめたまふところなり。眞宗の簡要、念佛の奥義これに攝在せり、見るもの諱りやすし。誠にこれ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり。年を涉り日を涉りて、その教誨をかうふる人千萬なりといへども、親といひ疎といひ、この見寫を獲る徒甚だもて難し。しかるに、すでに製作を書寫し、眞影を圖書せり。これ專念止業の徳なり、これ決定往生の徴なり。よりにて悲喜の涙を抑へて由來の縁を註す。

慶ばしきかな、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。ふかく如來の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよく至り、至孝いよく重し。これに因りて眞宗の誡を鈔し、淨土の要を撫ふ。たゞ佛恩の深きことを念うて、人倫の嘲を耻ぢず。もしこの書を見聞せんものは、信順を因とし疑謗を縁として、信樂を願力に彰はし、妙果を安養に顯はさん。

『安樂集』にはく、「眞言を採り集めて、往益を助修せん。いかんとなれば、前に生ぜんものは後をみちびき、後に生ぜんものはさきをとぶらひ、連續無窮にしてねがはくば休止せざらしめんと欲す。無邊の生死海を盡さんがためのゆゑなり」と。

しかれば末代の道俗、あふいで信敬すべきなり。知るべし。
「華嚴經」の偈にいふがごとし、「もし菩薩、種種の行を修行するを見て善不善の心を起す
ことあれども、菩薩みな擲取す」と。

顯淨土眞實教行證文類六 終

淨土文類聚鈔

淨土文類聚鈔

愚禿釋觀作

【一】當書一卷親覽の撰なり。教行信諍と同種の著述に於て更にそれを撮要せるもの、古來教行信證の廣文類に對して略文類と稱せらる。

【二】以下序文。

【光耀】又光明といひ智慧のこと、智慧のひかりは如來の「御かたち」といはる。

【目足】日は教、足は行の譬喩。

【如來】願主なる彌陀に對して教主釋迦を指す。

【二】以下本論にして先づ淨土眞宗の教理體系なる往還二廻向と教行、信、證の説を述ぶ。

【功德】宗教的實踐の價値を表す語にして、それを圓満せる名號を指していふ。

【一乘】早業への唯一道の意にして本願をいへるもの

淨土文類聚鈔

夫、無礙難思の光耀は苦を滅し業を證す、萬行圓備の嘉號は障を消し疑を除く。末代の教行専らこれを修すべし、濁世の目足必ずこれを勤むべし。しかれば最勝の弘誓を受行して、穢をすて淨をねがへ。如來の教勅を奉持して、思を報じ徳を謝せよ。爰に片州の愚禿、印度西蕃の論說に歸し、華漢日越の解釋を詳いで、眞宗の教、行、證を敬信す。轉に知んぬ、佛恩窮盡しがたければ、明かに淨土文類聚を用ふるなり矣。

しかるに教といふは則ち一大無量壽經一なり。この經の大意は、彌陀、誓を超發して、廣く法藏を聞き、凡小を哀れんで、選んで功德の寶を施することを致す。釋迦、世に出興して、道教を光闡し、群萌をすくひ、めぐむに眞實の利をもてせんとおぼしてなり。誠にこれ、如來興世の眞説、奇特最勝の妙典、一乘究竟の極説、十方稱譽の正教なり。如來の本願を説くを經の宗旨とす、即ち佛の名號をもて經の體とす。行といふは則ち利他圓滿の行なり。即ちこれ、諸佛菩薩の願よりいでたり。また諸佛稱名の願となづけ、また往相正業の願となづくべし。

しかるに本願力の廻向に二種の相あり。一には往相、二には還相。一に往相廻向といふ

誓願一佛乘といはる。

【三】 以下行に就いて。

【諸佛等】 四十八願のうち第十七の願をさす。

【善根】 この場合念佛を意味する語として見らる。

【眞實功德】 誓願の尊號。

【願偈】 本願の心を表す言葉をいふ。

【總持】 智慧なり無碍光の智慧をいふ。

は、往相について大行あり、また淨信あり。

大行といふは、すなはち無礙光如來のみなを稱す。この行はあまねく一切の行を攝し極速圓滿す、故に大行となづく。このゆゑに稱名は、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。稱名すなはち憶念、憶念すなはち念佛、念佛すなはちこれ南無阿彌陀佛なり。

願成就の文、「經」に曰はく、「十方恆沙の諸佛如來、みなともに無量壽佛の威神功德、不可思議にましますことを讚嘆したまふ。あらゆる衆生、その名號をききて、信心歡喜し、乃至一念せん、至心に廻向したまへり。かの國に生ぜん」と願すれば、すなはち往生を得、不退轉に住す」と。また、曰はく、「佛、彌勒に語りたまはく、それ、かの佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍し乃至一念せん。まさにしるべし、この人は大利をうとす。すなはちこれ無上の功德を具足す」と。

龍樹菩薩「十住毘婆娑論」に云く、「もし人、疾く不退轉地を得んとおもはゞ、恭敬の心をもち、執持して名號を稱すべし」ともし人、善根を植ゑて疑へばすなはち華ひらけず、信心清淨なるものは、華ひらけて、即ち佛を見たてまつる」と。

天親菩薩「淨土論」に云く、「世尊我一心に、盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜん」と願す。我、修多羅眞實功德相に依りて、願傷總持を説きて佛教と相應せん、佛の本願力を觀すに、遇うて空しく過ぐるものなし、能く速かに功德大寶海を満足す。

...

...

...

...

...

【選擇攝取】選擇は選取、捨の義にして攝取と等しく本願に於けるそれ自らの限定即ち純化を意味す。

【正業】具には正定業。往生即ち涅槃の純正の因として決定せる業の意でそれと區別せらるる念佛をいふ。
【心行】信心と念佛の行。
【四】信に就いて【念佛往生の願】第十八願。

せしむ」と。

聖言、論説、ことにもて知んぬ、凡夫廻向の行にあらす、これ大悲廻向の行なるがゆゑに不廻向と名づく。誠にこれ、選擇攝取の本願、無上超世の弘誓、一乘眞妙の正法、萬善圓修の勝行なり。

『經』に乃至といふは、上下をかねて中を略する言なり。一念といふは即ちこれ專念、專念即ちこれ一聲、一聲即ちこれ稱名、稱名即ちこれ憶念、憶念即ちこれ正念、正念即ちこれ正業なり。復乃至一念といふは、これ更に觀想功德遍數等の一念をいふにあらす、往生の心行を獲得する時節の延促に就て、乃至一念といふなり。知るべし。

淨信といふは則ち利他深廣の信心なり。即ちこれ念佛往生の願より出でたり、また至心信樂の願となづけ、また往相信心の願となづくべし。

然るに薄地の凡夫、底下の群生、淨信獲がたく、極果證しがたし。なにをもてのゆゑに、往相の廻向によらざるがゆゑに、疑網に纏縛せらるゝによるがゆゑに、いまし如來の加威力によるがゆゑに、博く大悲廣慧の力によるがゆゑに清淨眞實の信心を獲、この心顛倒せず、この心虚偽ならず。まことに知んぬ。無上の妙果成じがたきにあらず、眞實の淨信實にうるこたし。眞實の淨信をうれば大慶喜心を得。

大慶喜心を得といふは『經』に言はく、「それ至心に安樂國に生ぜん」と願することあるものは、智慧明達し、功德殊勝なることをうべし」と。要を又『經』に言はく、「この人はす

【四】 罪愆の證果に對する信因をい

【五】 證に就いて【必至滅度の願】

【第十一編】

【邪定】 邪定は罪愆の證果決定せる正定に正反して全然流轉の世界に屬するもの、不定は邪正の中間にあり證果未決定未究竟なるもの、親覺行修萬善諸行のひま不定は自力の念佛惡惡の念佛のひととされてあり

なほちこれ大威徳の人、また廣大勝解の人なりと云はけり。誠にこれ、除疑無徳の神方、極速圓滿の眞詮、長生不死の妙術、威徳廣大の淨信なり。しかれば、若しは行若しは信、一事として、阿彌陀如來の清淨願心の趣向成就したまふところにあらざることなし。因なくして、他の因あるにはあらざることとるべし。證といふは則ち他利圓滿の妙果なり。即ちこれ必至滅度の願より出でたり。また證大涅槃の願となづけ、また往相證果の願となづくべし。すなはちこれ、清淨眞實、至極畢竟無生なり。無上涅槃、願成就の文、經にのたまはく、「これ衆生ありて、かのくにに生ずるものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆゑはいかん。かの佛國中にもろゝの邪聚及び不定聚なければなり」と。又のたまはく、「たゞ餘方に因願するがゆゑに天人の名あり。顔貌端正にして超世希有なり、容色微妙にして、天にあらず人にあらず。みな自然虚無の身、無極の體を受けたりと」。又のたまはく、「かならず超絶してすつることをえて、安養國に往生せよ。横に五惡趣をきり、惡趣自然に閉ぢ、道に昇るに窮極なし。往きやすくして人なし。その國道遠せず自然のひくところなり」と。聖言あきらかに知んぬ。煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相の心行をうれば、即ち大乘正定の聚に住す。正定聚に住すれば、かならず滅度にいたる。かならず滅度にいたれば即ちこれ常樂、常樂即ちこれ大涅槃、大涅槃即ちこれ利他教化地の果、この身即

衆生を教化すること自在なる利他圓滿の佛果。

【因果】信心の円と證の果

【利他教化地の益】淨土への往相が自利の道なるに對して現實への還相は一切衆生を教化する大悲の道として廻向さる。

【必至補處の願】第二十二願

【一生補處】菩薩道の最高位、親鸞にては信心の決定に於て住する位とさる。

【論主】天親をいふ。

【淨信】淨土論の我一心を指す。

【宗師】眞宗の第三祖とさるる曇鸞支那に於ける淨土教の先驅者。

ちこれ無爲法身、無爲法身即ちこれ畢竟平等身、畢竟平等身即ちこれ寂滅、寂滅即ちこれ實相、實相即ちこれ法性、法性即ちこれ眞如、眞如即ちこれ一如なり。

しかれば、若しは因若しは果、一事として、阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまふところにあらざることあることなし。因淨なるがゆゑに果また淨なりと。しるべし。

二に還相廻向といふは、すなはち利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補處の願よりいでたり。また一生補處の願となづく、また還相廻向の願となづくべし。

願成就の文、「經」にのたまはく、「かの國の菩薩、みなまさに一生補處を究竟すべし。その本願、衆生のためゆゑに、弘誓の功德をもてみづから莊嚴し、あまねく一切衆生を度脱せんと欲はんをばのぞかん」と。

聖言明かに知んぬ。大慈大悲の弘誓、廣大難思の利益、いまし煩惱の稠林に入りて諸有を開導し、普賢の徳にしたがうて群生を悲引す。

しかれば、若しは往若しは還、一事として、如來の清淨願心の廻向成就したまふところにあらざることなしと。しるべし。

ここをもて淨土の緣熟して、調達闍世をして逆害を興せしめ、濁世機憫んで、釋迦牟尼をして安養を選ばしめたまへり。つらくかれをおもひ、しづかにこれを念するに、達多闍世、ひろく仁慈をほどこし、彌陀釋迦、ふかく素懷をあらはせり。これによりて論主、廣大無礙の淨信を宣布し、あまねく編譯堪忍の群生を開化す。宗師、往還大悲の廻向を願

を

を

を

を

を

を

【他利他】 利他の語と區別して論の利他といへるを佛力他力と解釋せしをいふ。
【功德】 名號をいふ。

【超捷】 横超の捷徑。生死を横に超え時を隔てずして報上に往生を得る本願一乘の教法。

【無上尊】 阿彌陀佛。

【七】 以上をもつて教行信證二廻向の説を終り、ここに親覽自作の讃歌を附す。

【法藏等】 先づ經典に依りて。

示して、ねんごろに他利他の深義を弘宣せり。聖權の化驗、おまねく一切凡愚を利せんがため、廣大の心行、たゞ逆惡闍提を引かんとおぼしてなり。

いまねがはくば道俗等、大悲の願船には清淨の信心を願風とし、無明の闇夜には功德の寶珠を大炬とす。心くらくさとりすくなきもの、うやまひてこの道をつとめよ。惡おも

くさはりおほきもの、ふかくこの信をあがめよ。嗔、弘誓の強緣、多生にもまうあひ難く、眞實の淨信、億劫にもえがたし、たま／＼信心をえば、とほく宿緣をよるこべ。もしまた

このたび疑網に覆蔽せられなばかへりてかならず曠劫多生を還塵せん。攝取不捨の眞理、超捷易往の教勅、聞思して速應することなかれ。

よろこばしきかな愚禿、あふいでおもんみれば、心を弘誓の佛地にたて、情を難思の法海にながす。聞くところを嘆じ、獲るところをよろこびて、眞言を採集し、師釋を鈔出して、もはら無上尊を念じて、ことに廣大の恩を報す。

茲によりて曇鸞菩薩の「註論」を披閱するに、いはく、「それ菩薩は佛に歸す。孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜おのれにあらず、出沒かならずゆるあるがごとし。恩をしりて徳を報す、理よろしくまづ啓すべし」とる。

佛恩の深重なることを信知して、念佛正信偈をつくりていはく、

西方不可思議尊、
法藏菩薩因位のうちに、殊勝の本弘誓を超發して、無上大悲の願を建立したまふ。思惟

攝取するに五劫をへたり。

菩提妙果上願にむくい、本誓を満足するに十劫をへたり。壽命延長にして、よく量ることなし、慈悲深遠にして虚空の如し、智慧圓滿にして巨海の如し。清淨微妙無邊の刹、廣大莊嚴等しく具足せり、種種の功德悉く成滿す、十方諸佛の國に超逾せり。あまねく難思無礙光をはなちて、よく無明大夜の闇を破したまふ。智光明朗にして、慧眼をひらく、名聲十方にきこえずといふことなし。如來の功德はたゞ佛のみしりたまへり、佛法藏をあつめて凡愚に施す。

彌陀佛の日あまねく照耀す。すでによく無明の闇を破すといへども、貪愛瞋嫌の雲霧、つねに清淨信心の天におほへり。たとへばなほ日月星宿の煙霞雲霧等におほはるといへども、その雲霧のしたあきらかにして闇なきがごとし、信知するに日月の光益にこえたり。

かならず無上淨信のあかつきにいたれば、三有生死の雲はれ、清淨無礙の光耀ほがらかにして、一如法界の眞身あらはる。

信を發して、稱名すれば、ひかり攝護したまふ。また現生無量の徳を獲、無邊難思光不斷にして、さらに時處諸縁をへだつることなし。

諸佛の護念、まことにうたがひなし。十方おなじく稱讚し悦可す。惑染逆惡ひとしくみな生じ、謗法闍提廻すればみなゆく。

【眞身】大涅槃に證得する法性の眞佛身。

【印度等】次いで三國七高僧の歌讚

【有無の見】有と無との見、前者は法の實有を主張するもの、後者は虚無を主張するものとも、佛敎に於て非妄當なる見解の根本的なるもの

【一心】眞實の信心
【華嚴世界】安樂淨土のこと

【應化】衆生の爲の應身化身
【樂邦】淨土のこと

【忍】無生法忍のこと、諸法の不生不滅の理を認知して不動なるをいふ

當來の世、經道滅せんに、ことにこの經をとよめて仕すること百歳せん

いかんぞ、この大願を履感せん。たゞ釋迦如實のみことを信ぜよ

印度西天の論家、中夏西域の高僧、大聖世雄の正立をひらき、如來の本尊、機に應ずる

ことをあかす。

釋迦如來楞伽山にして、衆の爲に告命したまふ、南天竺に、龍樹菩薩、世に興出して、

悉くよく有無の見を摧破せん。大乘無上の法を宣説し、歡喜地を證して安樂に生ぜん

んと、「十住毘婆沙論」をつくりて、難行の險路ともに悲憫せん、愚迷の天道はるく開示

す。恭敬の心をもて、執持して名號を稱し、とく不退をうべし。信心清淨なれば、す

たはち佛をみたまつる。

天親菩薩、「論」をつくりてとかく、修多羅によりて、眞實をあらはす。横超の本弘誓を

光闡し、不可思議の願を演暢す。本願力の傾向によるが故に、具縛を度せんが爲に一心

をあらはす。功德の大寶海に歸入すれば、かならず大會衆の數にいることをう。蓮華藏

世界にいたることをうれば、すたはち寂滅平等身を證せしむ。煩惱の林にあそびて神

通を現じ、生死の蘭にいりて應化をしめす。

曇鸞大師をば、梁の蕭王は、つねに覽のかたにむかひて菩薩と禮す。三藏流支、淨教を

さづけしかば、仙經を焚燒して樂邦に歸す。天親菩薩の「論」、註解して如來の本願、稱

名に顯す。往還の廻向は本誓による。煩惱成就の凡夫人信心開發すればすなはち忍をう、

【聖道】 聖者の道
淨土教と區別され
たる一般佛教
【三不信】 三信
は一信心の内容を
成す信心、一心、相
續心をいふ。三不
信はその反對。

【定散】 定は息慮
凝心、散は廢惡修
善即ち冥想と倫理
的との二種の實踐
また機根の二種の
範疇なり。親鸞に
てはこの二種の善
は自力の諸善とい
はる。
【光明名號】 名號
は往生に於ける能
生の因、光明は所
生の緣、悟は無生
法忍の心不動の意
識を三種に分析せ
るもの。
【専、獲】 専は念佛
を専修する純粹な

生死すなはち涅槃なりと證知す。かならず無量光明土にいたりて、諸有の衆生みなあまねく化す。

道紳、聖道の證しがたきことを決して、たゞ淨土の通入すべきことをあかせり。萬善は自力なれば、數修を貶す、圓滿の徳は專稱をすすむ。三不信の誨ねんごろにして、像木法滅おなじく悲引す。一生惡をつくれども、弘誓にまうあへば、安養界にいたりて妙果を證す。

善導、ひとり佛の正意にあきらかにして、ふかく本願によりて、眞宗を興したまふ。定散と逆惡とを矜哀して、光明、名號因縁をしめす。涅槃門にいたりて眞心にまうあへば、かならず信、善、悟の忍をうれば、難思議往生をうるひとなり。すなはち法性の常樂を證すと。

源信、ひろく一代の教をひらきて、ひとへに安養に歸して一切をすむ。諸難論によりて教行をえらびたまふ、まことにこれ濁世の目足たり。得樂を專、權に決付して、念佛の眞實門に廻入せしむ。たゞ淺深を執心にさだめて、權、化一土まさしく辨立せりと。

源空、もろ／＼の聖典を曉了して、善惡の凡夫人を情懸せしむ。眞宗の教證片州に興す、選擇本圖濁世にほどこす。生死流轉の家に、還來すること、決するに疑情をもて所止とす。すみやかに寂靜無爲のみやこにいることは、かならず信心をもて證入とす。論說圖釋ともに同心に、無邊の極濁惡を攝濟す。道俗時業みなことごとくともに、ただ

る往生の行、雖はその他の諸行をも修する心をいふ。前者は執心牢固にして眞實の淨土に生を得るも後者は執心不牢にして化上に生ずるものといはる。

【八】以下本論の第二部にして眞宗の根本問題なる三心一心即ち本願と信との問題を取扱ふ。

【念佛往生の願】第十八願。其本願の三心は至心、信樂、欲生の三。

【一心】本願の三心を領受せるものとしての我一心をいふ。一心とは教主世尊の御言をふた心なく疑ひなしとなり即ちこれまことの信心なり。

この高僧の説を信すべし。

六十行 一百二十句、偈頌すでに畢りぬ。

問ふ、念佛往生の願、すでに三心をおこす。論主、なにをもての故に一心とのたまふや。

答ふ、愚鈍の衆生、覺知やすからしめんがためのゆゑに、論主三心を合して一としたまふ歟。

三心といふは、一には至心、二には信樂、三には欲生なり。わたくしに字訓をもて論の

意を闡ふに、三を合して一とす。その意何とならば、一には至心。至といふは眞なり、

誠なり。心といふは種なり、實なり。二には信樂。信といふは眞なり、實なり、誠なり、満

なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり。樂といふは欲なり、願なり、慶

なり、喜なり、樂なり。三には欲生。欲といふは願なり、樂なり、覺なり、知なり。生と

いふは成なり、興なり。

爾れば至心はすなはちこれ誠種眞實の心なり。故に疑心あることなし。信樂はすなは

ちこれ眞實成滿の心なり、極成用重の心なり、欲願審驗の心なり、慶喜樂の心なり。かる

がゆゑに疑心あることなし。欲生はすなはちこれ願樂の心なり、覺知成興の心なり。故

に三心みなともに眞實にして疑心なし。疑心なきが故に、三心即ち一心なり。字訓かくの

如し、これを思擇すべし。

また三心といふはひとつには至心。この心すなはち、これ如來、至徳圓修満足眞實の心

なり。阿彌陀如來、眞實の功德をもて、一切に廻施したまへり、すなはち名號をもて至心

【欲覺等】欲は貪愛、瞋は憎恚、害は他の衆生を損害する心にして瞋の一形態。覺は對象を領納する作用。【欲想等】想は對象に於て像を取る作用。【色聲等】知覺及び思惟の對象を六種に分かてるもの。【染患疑】貪慾の瞋恚と愚痴、煩惱の代表的根源的なもの。【三昧】意識の統一を意味する語。

の體とす。しかるに十方衆生、穢惡汚染にして清淨の心なし、虛假雜毒にして眞實の心なし。ここをもて如來、因中に菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修乃至一念一刹那も、清淨眞實の心にあらざることあることなし。如來清淨の眞心をもて、諸有の衆生に廻向したまへり。

「經」にのたまはく、「欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず。欲想、瞋想、害想をおこさず。色、聲、香、味、觸、法に著せず。忍力成就して、衆苦をはからず。小欲知足にして、染患疑なし。三昧常寂にして智慧無礙なり、虛偽詭曲の心あることなし。和顏愛語にして、こゝろをさきだて承問す。勇猛精進にして、志願うむことなし。もはら清白の法をもとめて、もて群生を惠利す。三寶を恭敬し師長に奉事す。大莊嚴をもて衆行を具足し、もろもろの衆生をして功德成就せしめたまふ」と。抄出

聖言あきらかにしんぬ。いまこの心はこれ如來の清淨廣大の至心なり、これを眞實心となづく。至心は即ちこれ大悲心なり、故に疑心あることなし。

ふたつには信樂。すなはちこれ眞實心をもて信樂の體とす。しかるに、具縛の群萌、穢濁の凡愚、清淨の信心なし、眞實の信心なし。このゆゑに眞實の功德まうあひがたく、清淨の信樂獲得しがたし。これによりて、釋のこゝろをうかがふに、愛心つねにおこりてよく善心をけがし、瞋嫌の心よく法財をやく。身心を苦勵して、日夜十二時、急走急作して頭燃をはらふがごとくすれども、すべて雜毒の善となづく、また虛假の行となづく、

眞實の業となづけず。この難毒の善をもて、かの淨土に廻向する、これ必ず不可なり。なにをもてのゆるに。まさしくかの如來、菩薩の行を行じたまひしとき、乃至一念一利那も三業の所修、みなこれ眞實心中になしたまひしによるが故に、疑蓋まじはることなし。如來、清淨眞實眞樂をもて、諸有の衆生に廻向したまへり。

本願成就の文、「經」にのたまはく、「あ、ゆる衆生、その名號をききて、信心歡喜せん」と。
抄

聖言あきらかに知んぬ。いまこの心すなはちこれ、本願圓滿清淨眞實の眞樂なり、これを信心となづく。信心すなはちこれ大悲心なり、かるがゆゑに疑蓋あることなし。

みつには欲生。すなはち清淨眞實の信心をもて、欲生の體とす。しかるに流轉輪廻の凡夫、曠劫多生の群生、清淨廻向の心なし、眞實廻向心なし。ここをもて、如來、因中に菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一利那も、廻向を首として、大悲心を成就することをえたまふにあらざることあることなし。かるがゆゑに如來清淨眞實の欲生心をもて、諸有の衆生に廻向したまへり。

本願成就の文、「經」にのたまはく、「至心廻向、願生彼國、即得往生、往不退轉」と。
要

聖言あきらかに知んぬ。いまこの心、これ如來の大悲、諸有の衆生を招喚したまふ教勅なり。すなはち大悲の欲生心をもて、これを廻向となづく。

【師釋】善導の散善義に出る二河喻の釋。

【大菩提心】菩提は覺、即ち智の完成にして菩提心は智的完全への要求願作佛心といふと同義、この語の典據たる曇鸞の論註には「無上菩提心は即ちこれ願作佛心なり」といふ。

三心みなこれ大悲廻向心なるがゆゑに、清淨眞實にして、疑蓋まじはることなし、か
るがゆゑに一心なり。

これによりて師釋をひらきたるに、いはく、一にしきのうへに、ひとありてよぼうていはく、なんぢ一心正念にして、たゞちにきたれ、われよくなんぢをまもらん、すべて水火の難におちんことをおそれざれ。また中間の白道といふは、すなはち貪瞋煩惱のなかに、よく清淨願往生の心を生ぜしむるにたとふ。あふいで釋迦の發遣をかうぶり、また彌陀招喚したまふによりて、水火二河をかへりみす、かの願力の道に乗す」と出

ゆゑに、清淨願心とのたまへり。しかれば一心正念といふは、正念すなはちこれ稱名、稱名すなはちこれ念佛なり。一心すなはちこれ深心、深心すなはちこれ堅固深信、堅固深信すなはちこれ眞心、眞心すなはちこれ金剛心、金剛心すなはちこれ無上心、無上心すなはちこれ淳一相續心、淳一相續心すなはちこれ大慶喜心。大慶喜心をうれば、この心、三不に違す、この心、三信に願す。この心すなはちこれ大菩提心、大菩提心すなはちこれ眞實信心、眞實信心すなはちこれ願作佛心、願作佛心すなはちこれ度衆生心、度衆生心すなはちこれ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむる心なり。この心すなはちこれ畢竟平等心、この心すなはちこれ大悲心、この心作佛す、この心これ佛なり、これを如實修行相應となづく。しるべし。三心即ち一心の義こたへをはりぬ。

【度衆生心】衆生を解脫せしめんとの大悲心、成菩提と度衆生との圓満せるもの即ち圓覺の佛陀にしてこの二徳の完成は菩薩道の根本理想とする。

【九】次いで大經の三心と觀經の三心と及び阿彌陀經の一心との關係に就いて論ず、先づ大觀の三心に就いて。

【三心】至誠心、深心、廻向發願心の三。

【宗師】善導引用文の第一第二第四は散善義の釋文第三は禮讚に依るとの關係に就いて【執持】執持名號の一心。

【隱顯】顯は言葉其儘の語義、隱はそれに含まれたる意味。

また問ふ、大經の三心と、觀經の三心と、一異いかん、答ふ、兩經の三心すなはちこれひとつなり。なにをもてしかることをうるとならば、宗師の釋にはく、至誠心のなかにいはく、「至」といふは眞、誠といふは實なり。一人につき行について信をなつるなかにいはく、「一心に彌陀の名號を專念する、これを正定の業となづく。またいはく、「深心すなはちこれ眞實信心なり」廻向發願心のなかにいはく、「この心深信せること、なほし金剛のごとし」と。あきらかに知んぬ。一心これ信心なり、專念すなはち正業なり。一心のなかに、至誠、廻向の二心を攝在せり。さきの問のなかにこたへをはりぬ。

又問ふ、已前二經の三心と、小經の執持と一異いかん、答ふ、經にのたまはく、名號を執持すと。執といふは心堅牢にしてうつらず、持といふは不散不失になづく。かるがゆゑに不亂といへり。執持はすなはち一心、一心はすなはち信心なり。しかればすなはち執持名號の眞説、一心不亂の誠言、かならずこれに歸すべし。ことにこれをあふぐべし。

論家宗師、淨土眞宗を聞きて濁世邪偽をみちびかんとなり。三經の大綱隱顯ありといへども一心を能入とす。かるがゆゑに經のはじめに如是と稱す。論主はじめに一心とのたまへり、すなはちこれ如是の義をあらはすなり。

いま宗師の解をひらきたるに、いはく、「如意といふは二種あり、一には衆生のこゝろのごとし。かの心念にしたがひて、みな應じてこれを度す。二には彌陀のおんこゝろのごとし。五眼圓照し、六通自在にして機の度すべきものをみそなはして、一念の中に前なく後

【如是】 佛教經典はいづれも「如是我聞」の語をもつて記さるるをその文學形式とす。
 【機】 法の現るる機意にして衆生のこと。
 【三輪】 佛陀の三業の無礙なるをいふ。
 【二尊】 彌陀と釋迦。
 【佛因】 成佛の因結文。
 【二】 以下全體の直説。佛陀出世の本懐たる教説、直はただしきなり諸佛の世に出て給ふ本意をいふ。
 【即生】 即得往生

なく、身心等しくおもむき、三輪をもて開悟せしめておの／＼益すること不同なり。またのたまはく、「うやまひてまうす、一切往生の知識等、おほきにすべからく慚愧すべし。釋迦如來はまことにこれ慈悲の父母なり、種々の方便をもて、我等が無上の信心を發起せしめたまふ」と。あきらかに知んぬ。二尊の大悲によりて一心の佛因をえたり。まさにしるべしこの人、希有人なり、最勝人なり。

しかるに流轉の愚夫、輪廻の群生、信心おこすことなし、眞心おこることなし。こゝをもて「經」にのたまはく、「もしこの經をききて、信樂受持すること、難中の難、これにすきたる難なし」また「一切世間極難信法」ときたまへり。

誠にしんぬ。大聖世尊、世に興したまふ大事の因縁、悲願の眞利をあらはして如來の直説としたまへり。凡夫の即生をしめす大悲の宗致とすとなり。これによりて諸佛の教意をうかゞふに、三世の諸如來出世のまさしき本意たゞ阿彌陀不可思議の願をとかんとなり。常没の凡夫人、願力の廻向によりて眞實の功德をきき、無上の信心をうればすなはち大慶喜をえ、不退轉地をう。煩惱を斷ぜしめずして、すみやかに大涅槃を證すとなり矣。

淨土三經往生文類

浄土三經往生文類

【當書は、浄土の三經は、彌陀の三願（第十八、第十九、第二十）に應じて三往生（難思議）雙樹林下、難思議ある事を示し、その眞假を批判する事により、自ら大經往生に歸すへき旨を現さんとす。廣略二本のうち今は康元廣本をとる。】

【念佛往生の願】

第十八願。

【必至滅度の願】

第十一願。

【正定聚】 往生し必ず成佛することの決定せる者。
 【難思議往生】 選擇本願に信願する者の往生は思議を超えることを顯すものと善導の用ひしものと善導の親屬が三經往生の意味を明快にせんがために配當せるもの。
 【下の如來等】 以下大經往生に、浄土への往相と、浄

（二）大經往生といふは、如來選擇の本願不可思議の願海、これを他力とまをすなり。これすなはち念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらゐに住して、かならず眞實報土にいたる、これは阿彌陀如來の往相廻向の眞因なるがゆゑに、無上涅槃のさとりをひらく。これを「大經」の宗致とす、このゆゑに大經往生とまをす。また難思議往生とまをすなり。

この如來の往相廻向につき、眞實の行業あり。すなはち諸佛稱名の悲願にあらはれたり。稱名の悲願は「大無量壽經」にのたまはく、設我得佛、十方世界、無量諸佛、不悉香、嗟稱我名者、不取正覺。
 稱名、信樂悲願成就文。經云、十方恆沙諸佛如來、皆共讚嘆無量壽佛威神加德、不可思議、所有衆生聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、往不退轉、唯除五逆、誹謗正法、文。
 また、眞實信心あり、すなはち念佛往生の悲願にあらはれたり。信樂の悲願は「大經」にのたまはく、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不往生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法、文。

上よりの廻相との如來の二種の廻向を明す。先づ往相廻向に眞實の行、信、證あるを達す。

【諸佛稱名】第十七、八二願成就文により眞實行を示す。【眞實信心】大經及び異譯の第十八願文により眞實信を明す。

【眞實證果】大經及び異譯の第十一願文、異譯の第十一願成就文、大經及び異譯の第十一願成就文を引き頼果として眞實證果を顯す。

【この眞實等】以下行信と證との關係を示す。

同本異譯、無量壽如來會、若我壽得無上覺時、餘諸國中諸有情類、聞我名已、所有善根、心廻向、願生我國、乃至十念、若不生者、不取菩提、唯除造二無間惡業、誹謗正法及諸聖人、文。

また、眞實證果あり、すなはち必至滅度の其願にあらはれたり。證果の悲願、大經にのたまはく、我、我得佛國中、人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覺、文。

同本異譯、無量壽如來會、若我成佛、國中有情、若不決定成、等正覺、證、大涅槃者、不取菩提、文。

無量壽如來會、他方佛國、諸有衆生、聞無量壽如來名號、能發一念淨信、歡喜愛樂、所有善根廻向、願生無量壽國者、隨願皆生、得不退轉、乃至無上正等菩提、除五無間、誹謗正法、及謗聖者、

必至滅度、大涅槃願成就文、大經、言、其有衆生、生彼國者、皆悉住於正定之聚、所以者何、彼佛國中、無諸邪聚及不定聚、文。

又、如來會、彼國衆生、若當生者、皆悉究竟無上菩提、到涅槃處、何以故、若邪定聚及不定聚、不能了知、建立彼因、故、已上。

この眞實の稱名と、眞實の信樂をえたる人は、すなはち正定聚のくらゐに住せしむと、ちかひたまへるなり。この正定聚に住するを、等正覺をなるとものたまへるなり。等正覺とすまをすは、すなはち補處の彌勒菩薩とおなじくらゐるとききたまへり。し

かねば、「大經」には「次如彌勒」とのたまへり。淨土論曰、莊嚴妙聲功德成就者、偈言「
 梵聲悟深遠、微妙聞十方」故、此云何不思議、經言、若人但聞彼國土清淨安樂、
 尅念願生、亦得往生、即入正定聚、此是國土名字爲佛事、安可思議、乃至莊
 嚴眷屬功德成就者、偈言「如來淨華衆、正覺華化主」故、此云何不思議、凡是雜生
 世界、若胎若卵、若濕若化、眷屬若干、苦樂萬品、以雜業故、彼安樂國土、莫非
 是阿彌陀如來正覺淨華之所化生、同一念佛、無別道故、遠通、夫四海之內
 皆爲兄弟也、眷屬無量、焉可思議、又言、願往生者、本則二之品、今
 無二之殊、亦如三溜瀧、食酸一味、焉可思議、上又論曰、莊嚴清淨功德成就
 者、偈言「觀彼世界相、勝過三界道」故、此云何不思議、有凡夫人類、成號、亦得生
 彼淨土、三界繫業、畢竟不牽、則是不斷煩惱、得涅槃分、焉可思議、此要、この阿
 彌陀如來の往相廻向の選擇、本願をみたまへるなり、これを雜思議往生とまふす、これ
 をこゝろえて他力には義なきを義とするべし。

【二に】以下淨土論及び第二十二願文により還相廻向を示す。
 【大慈大悲の願】一、生補處の第二十二願を還相廻向願といふ。

二に還相廻向といふは、淨土論曰、以本願力廻向故、是名出第五門、これは還相の廻向なり、一、生補處の悲願にあらわれたり、大慈大悲の願、大經にのたまはく、
 我得佛、他方佛土者、菩薩衆、來生我國、究竟必至一、生補處、除其本願白
 在所化、爲業生故、彼弘誓證、積累德本、度脫一切、遊諸佛國、修菩薩行、供
 養十方諸佛、如來、聞化恆沙、無量衆生、使立無上正眞之道、超出常倫、諸地之

【如來の等】以下二種廻向何れも他力往生なる旨を結論す。

【二】 觀經往生を明す。

【修諸功德】 第十

九類。

【定善散善】 親歸

は何れも自力の行とす。

【雙樹林下】 釋迦入滅の處を指す。觀經往生は推行的因を以て化土に往生する故を顯さんためかくいふ。

行現前、修諸善賢之徳。若不爾者、不取正覺、文。この悲願は、如來の遺教廻向の御さかひなり。

如來の二種の廻向によりて、眞實の信樂をうる人は、かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに他力とまふすなり。しかれば、無量壽經優婆提舍願生偈曰、云何廻向、不捨一切苦惱衆生、心常作願、廻向爲首、得成就大悲心。故、これは『大無量壽經』の宗旨としたまへり、これを難思議往生とまふすなり。

觀經 往生といふは、修諸功德の願により至心發願のちかひにいりて、萬善諸行の自善を廻向して淨土を忻慕せしむるなり。しかれば、無量壽佛觀經には、定善散善、三福九品の諸善、あるいは自力の稱名念佛をときて、九品往生をすゝめたまへり。これは他力の中に自力を宗致としたまへり。このゆへに觀經 往生とまふすは、これみな方便化士の往生なり。これを雙樹林下往生とまふすなり。

至心發願の願、大經に言、我、我得佛、十方衆生、發三菩提心、修諸功德、至心發願、欲生我國、臨終時、假令不與、大衆圍繞現其人前者、不取正覺、文。

又『悲華經』大施品言、願我成阿耨多羅三藐三菩提、其餘無量無邊阿僧祇諸佛世界所有衆生、若發阿耨多羅三藐三菩提心、修諸善根、欲生我界者、臨終之時、我當與大衆圍繞現其人前、其人見我即於我前、得正心歡喜、以見我故、離諸障

關、卽便捨身、來二生我界一文

至心發願の願成就文「大經」言、佛告阿難、十方世界、諸天人民、共有至心、

願生彼國、凡有三輩、其上輩者、捨家棄欲、而作沙門、發菩提心、一向

專念無量壽佛、修諸功德、願生彼國、此等衆生、臨終時、無量壽佛、與

諸大衆、現其人前、至阿難、共有衆生、欲於今世、一見無量壽佛、隨發無上菩提之

心、修二行功德、願生彼國、佛語阿難、其中輩者、十方世界、諸天人民、共有至

心、願生彼國、雖不能行、作沙門、大修功德、當發無上菩提之心、二

向專念無量壽佛、多少修善、奉持齋戒、起立塔像、飯食沙門、懸經、燃燈、散華、燒

香、以此廻向、願生彼國、其人臨終、至具如眞佛、與諸大衆、現其人

前、至佛告阿難、其下輩者、十方世界諸天人民、共有至心、欲生彼國、假使不

能作諸功德、當發無上菩提之心、一向專意、乃至十念、念無量壽佛、願生

其國、若聞深法、歡喜信樂、不生疑惑、乃至一念、念於彼佛、以至誠心、願生

其國、此人臨終、夢見彼佛、亦得往生、功德智慧、次如中輩者、也。已上

一大經、言、設我得佛、國中菩薩、乃至少功德者、不能不見其道場樹、無量

光色、高四百里者、不取正覺一文

道場樹願成就文「經」言、又無量壽佛、其道場樹、高四百里、其本周圍五十

由旬、枝葉四布二十萬里、一切衆寶自然合成、以二月光摩尼持海輪寶衆寶之

【大經等】雙樹林
下往生は少功德者
の化土往生なる事
を顯さんと第二十
八願及びその成就
文を引く。

正而無二之六則三法集則三寶實樂者百千萬色、段々異變、無量光炎、照耀無
極、妙妙寶明、三寶共上、第一、一切皆得、高深法忍、任三不退、實至、極道、八俱、滿
發、無二、諸佛、事、已上

【首楞嚴院等】この往生は修行修にして懈慢、其心牢固ならざらば眞實淨土に往き難き事を明す。

【三】彌陀經往生を明す。

【植諸徳本】第二十願。

【眞門】第十八願

第十九願の法門を弘願、要門といふに對し、第二十願自力念佛の門を眞門といふ。もと善導の用ひし語なるも親鸞にては、た

首楞嚴院要集二引三法集胎經第二說、西方去三此闍

浮提、十二億那由他、百三億億、發意衆生、欲生三阿彌陀佛國者、深著三懈慢國土、

不能前進、三阿彌陀佛國、億千萬衆、時有二一人、前生三阿彌陀佛國、云々、以此經准

難、可得生。答、群疑論二引善導和尚前文、而釋三此難、又自助成云、此經一

下文、言、何以故、皆由三懈慢、執心不三牢、固、是知、雜修之者爲執心不牢之人、

故生三懈慢國也、若不雜修、專行三此業、此即執心牢固、定生三極樂國、一至

又報淨土、生者極少、化淨土中生者不少、故經別說、實不三相違也。已上

これらの文のこゝろに、雙樹林下往生とまふすことを、よくこゝろえたまふべし。

彌陀經往生といふは、植諸徳本の誓願によりて不果達者の眞門にいり、善本徳本の名號

をえらびて萬善諸行の少善をさしおくり、しかりといへども、定散自力の行人は不可思議の

佛智を疑惑して信受せず、如來の尊號をおのれが善根として、みづから淨土に廻向して果

遂のちかひをたのむ、不可思議の名號を稱念しながら、不可稱、不可說、不可思議の大悲

の誓願をうたがふ、そのつみふかくおもくして、七寶の牢獄にいましめられて、いのち五

百歳のあひだ自在なることあたはず、三寶をみたてまつらず、つかへたてまつることなし

だ名難のみを眞門とし他を方便の善となす彌陀經往生の意を示すに用ふ【難思往生】佛願に信願して得る難思議往生に對してかく呼ぶ。

【願成就文等】以下難思議往生の化生に對し、胎生なる所以を明にす。

と、如來はときたまへり。しかれども、如來の尊號を稱念するゆへに、胎宮にとまると、難思議によるがゆへに難思議往生とまふすなり。不可思議の誓願、疑惑するつみによりて、難思議往生とはまふさすと、しるべきなり。

植諸徳本の願文。大經云、設我得佛、十方衆生、聞我名號、係三念我國、植諸徳本、至心廻向、欲生我國、不果遂業者、不取正覺一文。

同本異譯『無量壽如來會』云、若我成佛、無量國中、所有衆生、聞說我名、以已善根、廻向極樂、若不樂生者、不取正覺一文。

願成就文。其胎生者、所處宮殿、或百由旬、或五百由旬、各於其中、受諸快樂、如一切天上、亦皆自然。爾時、慈氏菩薩白佛言、世尊何因緣、彼國人民、胎生化生、佛告慈氏、若有衆生、以疑惑心、修諸功德、願生彼國、不レ得佛智、不思議智、不可稱智、一乘佛智、無量無倫最上勝智、於此諸智、疑惑不信、然猶信二明福修二智善本、願生此國、此諸衆生、生彼宮殿、壽五百歲、常不見佛、不聞經法、不見菩薩、聲聞、聖衆、是故、彼國土謂之胎生。

彌勒當智、彼化生者、智慧勝故、其胎生者、皆無智慧、一乘佛告彌勒、譬如轉輪聖王有七寶牢獄種種莊嚴、張設牀帳、應諸華帳、若諸小王子、得非於王、輒入彼獄中、繫以金鎖、乃佛告彌勒、此諸衆生、亦復如是、以疑惑佛智故、生彼胎宮、至若此衆生、其本罪深、自悔責、求離彼處、

乃彌勒當智、彼化生者、智慧勝故、其胎生者、皆無智慧、一乘佛告彌勒、譬如轉輪聖王有七寶牢獄種種莊嚴、張設牀帳、應諸華帳、若諸小王子、得非於王、輒入彼獄中、繫以金鎖、乃佛告彌勒、此諸衆生、亦復如是、以疑惑佛智故、生彼胎宮、至若此衆生、其本罪深、自悔責、求離彼處、

乃彌勒當智、彼化生者、智慧勝故、其胎生者、皆無智慧、一乘佛告彌勒、譬如轉輪聖王有七寶牢獄種種莊嚴、張設牀帳、應諸華帳、若諸小王子、得非於王、輒入彼獄中、繫以金鎖、乃佛告彌勒、此諸衆生、亦復如是、以疑惑佛智故、生彼胎宮、至若此衆生、其本罪深、自悔責、求離彼處、

乃彌勒當智、彼化生者、智慧勝故、其胎生者、皆無智慧、一乘佛告彌勒、譬如轉輪聖王有七寶牢獄種種莊嚴、張設牀帳、應諸華帳、若諸小王子、得非於王、輒入彼獄中、繫以金鎖、乃佛告彌勒、此諸衆生、亦復如是、以疑惑佛智故、生彼胎宮、至若此衆生、其本罪深、自悔責、求離彼處、

乃至勤奮知、其有三善薩、生三疑惑、者、爲失二大利、一、略

又三無量壽如來會一言、勸、勸、勸、若有一樂生、隨於三疑悔、積集善根、希求佛智、普

徧智、不思義智、無等智、威德智、W、智、於三自善根、不能生信、以此因

緣、於五百證、住三宮殿、中、至阿遼多、前觀二殊勝智、者、彼因二廣慧力一故、受二彼

化生、尊、蓮華中、和跏趺坐、汝觀二下劣之輩、乃不能修習諸功德一故、無レ因

奉三市無量壽佛、是諸人等、皆爲昔緣三疑悔之所致、上、佛告二彌勒、勸、如是如是、若

有下隨於三疑悔、種三諸善根、希求佛智、乃至、廣大智、於二自善根、不能生信、

由下罪悔者一起、信心上故、師、生二彼國、於二蓮華中、不得出現一彼等衆生、處二華胎

中、猶如阿闍苑宮殿之想、乃至

光明、釋云、含蓮華、未出、衆生、身、或體三宮胎、已下、衆師云、由疑三佛

智、疑三生一彼國、爾在二蓮華一不、實、衆化事、若、前、衆、宣三之、重、拾、一、以、此、其、の、其、文、に

て、難思、往、生、と、ま、す、す、こ、と、を、ま、く、く、こ、ろ、乃、又、さ、せ、た、ま、ふ、べ、し。

康元二年三月一日書二寫之一

康元二年三月一日書二寫之一

愚天親 卷五十八

淨土三經 往生文類 畢

愚

禿

鈔

〔當書〕上卷に於ては選擇集相傳に由り眞宗の教相判釋を示し、下卷に於ては觀經疏三心釋に依りて眞宗安心の至急を述ぶ。

【一】序文。

【愚禿】非僧非俗を己が分とせる親鸞の選號。

【二】一代教に對する相對的批判。

【佛心】 禪宗の事

愚
禿
鈔
上

賢者の信を聞きて、愚禿が心を顯はす
賢者の信は、内は賢にして外は愚なり
愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり

聖道、淨土の教に就いて二教あり。
一には大乘教、二には小乘教なり

大乘教に就いて二教あり。
一には顯教、二には漸教

顯教に就いて復二教、二超有り。
二教とは、

一には難行聖道之實教なり、謂はゆる佛心、眞言、法華、華嚴等の教なり

二には易行淨土本願眞實之教、大無量壽經一等なり

二超とは、
一には堅超、即身是佛、即身成佛等之證果也
二には横超、選擇本願、眞實報土、即得往生也

漸教に就いて復二教、二出有り。

二教とは、

一には難行道、聖道淨教法相等摩、助修行之教なり

二には易行道、淨土要門、無量壽佛觀經一之意、定散、三福、九品之教なり

二出とは、

一には堅出、聖道、摩、助修行之證也

二には横出、淨土、胎宮蓮華聖慢之往生也

小乘教に就いて二教有り。

一には緣覺教、二に麟喻編覺

二には聲聞教、初果、預流向、第二果、一來向、第三果、不還向、第四果、阿羅漢向、八輩也

唯阿彌陀如來選擇本願を除いて已外、大小、權實、顯密の諸教、皆是れ難行道、聖道門なり、又易行道、淨土門之教、是れを淨土綱向發願自力方便の假門と曰ふ也、應に知る

べし。

大經に、選擇に三種あり。

法藏菩薩

選擇本願

世儂王佛

選擇淨土

選擇攝生

選擇證果

【要門】眞實の弘願に入る肝要なる門戶の意にして方便の教たるを總はす。

【定散】實踐行の二分類にして息慮凝心、慶惡修善の二とす。

【三福九品】共に散善の内容を分類せるもの、三福とは、世出世を通じての三種の行業にて世福、戒福、行福とす。九品とは一切の機類の三福業を行じて往生するに上品上生より下品下生の九種の相あるを彰はす。

【寄寄樂地辨慶】實報上に對し、本願を疑ふ自力行者の生るる方便化土自力念佛者は實國に到るも信智開け

に到るも信智開け

ざるが故に三寶を見聞する能はざる
 恰も胎兒の如し、
 此心境を指して胎
 宮と名く。佛所に
 遠ざかるの故に邊
 地と名く。又諸行
 往生者は執心牢固
 ならずして自ら純
 粹なる報土に進ま
 ざるが故に懈慢往
 生といふ。

【緣覺】十二因緣
 を觀じて覺るが故
 に緣覺と名け、又
 無師獨悟するが故
 に獨覺とも稱す。

之に部行、麟喩
 の二種あり、前者
 は始め部衆雜住の
 聲聞にして第四果
 を得る時、獨悟す
 るもの。後者は本
 來獨覺にて同類な
 き事麟喩の一角あ
 りて二角並べざる
 如きよりいふ。

【聲聞】佛説法の
 音聲を聞いて悟る
 が故此名あり。之
 れが修行の階位に
 四向四果の八輩あ
 り、預流とは三界

選擇本願
 釋迦如來

選擇彌勒付屬

觀經に、

選擇に二種あり。

釋迦如來

選擇功德

選擇攝取

選擇讚嘆

選擇護念

選擇阿難付屬

章提夫人

選擇淨土

選擇淨土機

小經に、

勸信に二、證成に二、護念に二、讚嘆に二、轉易に二あり。

勸信に二とは、

一には釋迦の勸信

釋迦に二まり

二には諸佛の勸信

諸佛に二あり

證成に二とは、

一には功德證成

二には往生證成なり

護念に二とは、

一には執持護念

釋迦の護念なり

選擇淨土

選擇讚嘆

選擇證成

の見惑を斷じ始め

て聖道の流に預る

が故にいふ。一來

は欲界の修惑の一

分を斷ずるも殘餘

の煩惱の爲め一度

欲界に生れ來る故

にいひ、その全分

を斷じて再び欲界

に還らざるを不還

といふ。阿羅漢は

無學と譯し、上二

界の修惑を斷じ盡

して最早學すべき

智無きが故に此名

あり。

【雙樹林下往生】 眞

實報上の往生に

て首實信心の行者

二には發願證念

讚嘆に二とは、

一には釋迦讚嘆に二あり、二には諸佛讚嘆に二あり

難易に二とは、

一には難は眞信なり、二には易は信心なり。

執持に三あり、已、今、常發願に三あり、已、今、常

【法事讚】に三往生有り。

一には釋迦讚往生は「大經」の

二には雙樹林下往生は「觀經」の

三には諸佛讚往生は「彌陀經」の

「大經」に言はく、本願を證成したまふに、三身まします。

法身の證成 「經」に言はく、空中にして讚じて言はく決意

報身の證成 十方如來なり

化身の證成 世饒王佛なり

佛土に就いて二種有り。

一には佛 二には土なり

佛に就いて四種有り。

念佛の行者佛智を

疑惑してはからひ

の心離れずと雖も

不可思議の尊號を執持する故に難思の往生といふ。

【三】 絶対の教を明す。

一には法身
二には報身
三には變身
四には化身なり。

法身に就いて二種有り。

一には法性法身
二には方便法身なり。

報身に就いて三種有り。

一には彌陀
二には釋迦
三には十方

應化に就いて三種あり。

一には彌陀
二には釋迦
三には十方

土に就いて四種有り。

一には法身の土
二には報身の土
三には應身の土
四には化身の土なり。

報土に就いて三種有り。

一には彌陀
二には釋迦
三には十方なり。

彌陀の化土に就いて二種有り。

一には疑城胎宮
二には憍慢邊地。

本願一乘は願極、願速、圓融、圓滿之教なれば絶対不二の教一實眞如之道也と應に知るべし。專が中の專なり、願が中の願なり、眞の中の眞なり、圓の中の圓なり、一乘一實は大誓願海なり。第一希有之行也。

金剛の真心は無礙の真直なりと、塵に礙るべし。

破に云く、良善無礙破一乘直に依るべしといひ。

讀に云く、道路經の中に漸教を説く、萬劫功を修して不退を得ず、二劫を修して不退を得ず、

等の説は即ち是れ漸教實地教なり。又

圓頓と正一教は頓教實地教に依るべし。

二教對

本願一乘直は、頓極、頓理、頓德、圓滿之教也と塵に礙るべし。

淨土の要門は空寂二善、方便假門、三福五品之教也、塵に礙るべし。

難易對 橫堅對 順逆對

眞假對 親疎對 純雜對

勝劣對 通別對 大小對

重輕對 近遠對 了不了對

廣狹對 不廻向對 自說不說對

無上有上對 有智無智對 讚不讚對

講不講對 因明直辯對 理非非對

相續不相續對 退不退對 斷不斷對

因行果德對

【重輕】教はるる罪の比較。
【通別】教の流布する領域の比較。
【經注】經は直道にして念佛、注は迂廻にして諸行。
【了不了教】了教とは三佛印可決定せる事にて弘願の法を指し定散の教は然らざる故に不

了教といふ。
【不廻廻向】本願の念佛は行者の方より不廻向、諸行は廻向の行といふ。

【因明直辦】諸行は往生を因みに明すもの、念佛は直に辨ずるもの。

【理盡非理盡】念佛は盡理の説、諸行は然らず。

【無間有間】念佛は無間相續、諸行は間雜の行とす。

【因行果徳】名號は佛果徳、諸行は因行。

【法滅不滅】末法に諸行は滅し念佛は不滅。

【門】攝對の機を明す。

【奢便】奢は緩にして諸行人、便は速にて念佛者に對す。

【希當】念佛者は希有人、諸行人は常有人とす。

法滅不滅對

自力他力對

攝取不攝對

入定聚不入對

思不思議對

報化二士對

已上四十二對教法に就く、應に知るべし。

眞實淨信心は内因攝取不捨は外緣

本願を信受するは、前念命終なり。

即得往生は、後念即生なり。

他力金剛心也と、應に知るべし。

便も無勤菩薩に同じ。

自力金剛心也と應に知るべし。

二機對

一乘圓滿の機は、他力なり。

漸教過心の機は、自力なり。

信義對

實徳對

利鈍對

賢愚對

眞偽對

奢便對

直入過心對

已上十八對、二機に就く、應に知るべし。

善惡對

淨穢對

希當對

明闇對

正邪對

好醜對

強弱對

是非對

妙麤對

上上下下對

又二種の機に就いて、復二種の性有り。

一機とは、

一には善機

二には惡機なり

二性とは、

一には善性

二には惡性なり

又復善機に就いて二種あり。

又傍正

一には定機

二には散機なり。一切衆生の機に二種あり。一には定、二には散といへり。文

又傍正有りとは、

一には菩薩大

二には緣覺

三には聲聞辟支等、淨土之傍機也

四には天淨土之正

又復善性に就いて五種有り。

一には善性

二には正性

四には是性

五には眞性なり

又復惡機に就いて七種有り。

一には十惡

二には四重

五には五逆

六には謗法

七には闍提なり

四には破戒

【破見】世、出世ノ因果を信ぜざる人
【謗法】正法を誹謗する事

【五】經論釋を引きて勸信す。

【光明寺和尚】唐朝善導の事にて眞宗第五祖と稱せられ支那淨土教の大成者、嘗て光明寺に居住せるより觀鸞は常に此く呼稱せり。今文は觀經疏玄義文勢頭の文【四流】四暴流の略、欲暴流、有暴流、見暴流、無明暴流の事。

【二藏】經律論にて精通せる人の謂にて翻譯家の稱呼。

- 一には惡性
- 二には邪性
- 三には虛性
- 四には悲性
- 五には偽性なり

光明寺の和尚の口はく、

「道俗時衆等、各無上の心を發せ。生死甚だ厭ひ難く、佛法また忻ひ難し。共に金剛の志を發して、横に四流を遮斷せよ。彌陀界に觀入して、歸依し、合掌し、禮したてまつる。正しく金剛心を受けて、相應一念の後、果、涅槃を得ん者」といへり。文

「淨土論」にははく、

「世尊我れ一心に、盡十方無礙光如来に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願す。我れ修多羅眞實功德相に依りて願偈抱持を説いて、佛教と相應せり」とのたまへり。文

「佛說無量壽經」に言はく、
康僧鑒の譯

「我滅度の後を以て、復疑惑を生ずることを得ること無かれ。當來の世に經道滅盡せんに、我れ慈悲を以て哀愍して、特にこの經を留めて、止住すること百歳せん。其れ衆生ありて、この經に値もの、意の所願に隨うて、皆得度すべしと。佛勸勸に語りたまはく、如来の興世値ひ難く見たてまつり難し。諸佛の經道得がたく、きゝがたし。菩薩の勝法諸波羅蜜聞くことを得ること亦難し。善知識に遇ひ法を聞き能く行すること、此れ亦難しとす。若し斯の經を聞きて信樂受持すること、難の中の難、この難に過ぎたるは無し。是故に我が法かくのごとく作して、是の如く説き、是の如く教ふ。應當に信順して法の如く修行すべ

【諸智上】 諸佛の智慧を攝盡せる彌陀淨土の事、無量光明土ともいふ。

し」と一、文

「無量壽如來會」に言はく、菩提流支、三藏の譯

「如來の勝智は虚空に彌し、所説の義言は唯佛の悟なり。是故に博く諸智士を聞きて我が

教如實の言を信すべし」と一、文

「無量清淨平等覺經」に言はく、出延三藏、の譯

「速疾に超えて便ち、安樂國の世界に到るべし。無量光明土に至りて、無数の佛を供養

したてまつる」と一、文

「諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀迦度人道經」にのたまはく、支謙三藏、の譯

「われ般泥洹して去後、經道留止せんこと千歳せん。千歳のうち、經道斷絶せん。我皆慈

哀して、特にこの經法を留めて、止住すること百歳せん。百歳のうちに竟らん、いまし休

止し斷絶せん。心の所願に在りてみな道を得可し」と一、略出

元照律師「阿彌陀經の義疏」に云く、大智律、師なり

「勢至章」に云く、「十方の如來、衆生を憐念したまふこと、母の子を意ふが如し」と一、大

論」に曰く、「譬へば魚母の若し子を念はざれば、子即ち壞爛する等のごとし。阿耨多羅、

此には無上と翻す、三藐は正等といふ、三菩提は正覺といふ、すなはち佛果の號なり。

薄地の凡夫、業惑に纏縛せられて五道に流轉せること百千萬劫なり。忽ち淨土を聞きて、

志願して生を求む、一日名を稱すれば、即ち彼の國に超ゆ、諸佛護念して、直に菩提に趣

愚禿鈔上畢

かしむ。謂ふべし。萬劫にも逢ひがたし、千生に一たび誓に遇へり、今日より未來を終盡すとも、在處にして讚揚し、多方にして勧誘せん、所感の身土、所化の機縁、阿彌陀と等しく、異有ることなけん。此の心極固し、唯佛證知したまへ。是の故に下に三たび信を勸む。我が語を信するもの、教を信すと謂ふなり、もし我を信ぜざるとも、十方の諸佛、豈虚妄したまはんや。略

建長七年乙卯八月二十七日書之

愚禿親鸞八十三歳

愚 禿 鈔 下

【一】序文。

(一) 賢者の信を聞きて、
 賢者の信は、
 愚禿が心は、
 愚禿が心を顯す
 内は賢にして外は愚なり
 内は愚にして外は賢なり

【二】正しく三心を釋す。初に至誠心を解釋す。

唐朝の光明寺の和尚の『觀經義』に云く、

先づ上品上生の位の中に就いて、
 一には苦命を明す、二には其の位を尋定することを明す。此れ即ち大乘の上善を修學する凡夫人なり。三には若有衆生より下即便往生に至る已來は、正しく總じて有生の類を擧ぐることを明す。即ちその四あり。一には能信の人を明し、二には往生を求願することを明し、三には發心の多少を明し、四には得生の益を明す。三に何等爲三より下必生彼國に至る已來は、まさしく三心を辨定して以て正因とすることを明す。即ち二あり。一には世尊機に隨うて益を顯すこと意密にして知りがたし、佛自ら問うて自ら徴したまふに非ずば解を得るに由無きことを明す。二には如來還りて自ら前の三心の數を答へたまふことを明す。『經』に云はく、一者至誠心、至とは眞なり、誠とは實なり、一切衆生身口意業に修する

【自利眞實利他眞實】茲にては親鸞に依れば自利は定散自力の事、利他は弘願他力の事とせり。

【内外明闇】茲にては内は出世間即聖者の事、外は世間凡夫の事とす。明闇は智慧と愚痴とす。

所の解行必ず眞實心のうちに作したまへるを須ひんことを明さんと欲ふ。外に賢善精進の相を現すことを得され、内に虚假を懐けばなり。貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性伎倆がたし、事蛇蝎に同じ、三業を起すと蠅も名けて雜毒の善と爲す亦虚假の行と名く、眞實の業と名けざるなり。若し此の如き安心起行を作す者は、縱使身心を苦難して、日夜十二時、急に走め急に作して頭燃を灸ふが如くする者を、衆て雜毒の善と名く。此雜毒の行を廻して、かの佛の淨土に求生せんと欲する者は、此れ必ず不可なり。何を以の故に。正しく彼の阿彌陀佛因中に菩薩の行を行じたまひし時乃至一念一刹那も三業の所修、みなこれ眞實心の中に作したまひしに由りてなり。凡そ施したまふ所趣求を爲す、亦皆眞實なり。また眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なりと。文

利他眞實に就いて、亦二種有り。

- 一には、凡そ施したまふ所趣求を爲す。亦皆眞實なり。
- 二には、不善の三業必ず眞實心の中に捨てたまひしを須ひよ。又若し善の三業を起さば必ず眞實心の中に作したまひしを須ひよ、内外明闇を簡ばず眞實を須ふるが故に、至誠心と名くと。文

自利眞實と言ふは、復一種有り。

一には、眞實心の中に自他の諸悪及び穢國等を制捨して、行住坐臥に「一切菩薩の諸悪を制捨するに、同く我も亦是の如くせん」と想へと也。

【四事】 飲食、衣服、臥具、湯藥等の供具をいふ。

【三】 疏文を分解吟味す。

二には、眞實心の中に、自他凡聖等の善を勤修すべしと。眞實心の中に、口業に彼の阿彌陀佛及び依正二報を讚嘆すべし。又眞實心の中に、口業に三界六道等の自他の依正二報苦惡の事を毀厭す。亦一切衆生三業所爲の善を讚嘆す。若し善業に非ざる者は、敬うて之を遠かれ、亦隨喜せざれと也。又眞實心の中に、身業に合掌し、禮敬して四事等をもて、彼の阿彌陀佛及び依正二報を供養しまつれ。又眞實心の中に、身業に此の生死三界等の自他の依正二報を、輕慢し厭捨すべし。又眞實心の中に、意業に彼の阿彌陀佛及び依正二報を思想し、觀察し、憶念して、目の前に現ぜるが如くすべし。又眞實心の中に、意業に此の生死三界等の自他の依正二報を輕賤し、厭捨すべしとなり。又眞實心の中に、至誠心といふは、至とは眞なり、誠とは實なり、即ち眞實也。

眞實に二種有り。

一には自利眞實なり。

難行道 聖道門

堅超 即身成佛 自力也 堅出 自力中之漸教 歷劫修行也

二には利他眞實なり。

易行道 淨土門

横超 如來誓願 他力也 横出 他力の中之自力あり 定散諸行也

自利眞實に就いて復二種有り。

【厭離眞實】生死の苦惑を厭離するの意にして、即ち菩提心をあらはす

【欣求眞實】浄土を欣求する願主の要求をあらはす。

一には厭離眞實、

聖道門

難行道

堅出

自力

堅出とは難行道之教なり、厭離を以て本と爲す、自力之心なるが故なり

二には欣求眞實、

浄土門

易行道

横出

他力

横出とは易行道之教なり、欣求を以て本と爲す、何を以ての故に、願力に由りて生

死を厭捨せしむるが故なり

又横出の眞實に就いて復三種有り。

一には口業に欣求眞實

口業に厭離眞實なり

二には身業に欣求眞實

身業に厭離眞實なり

三には意業に欣求眞實

意業に厭離眞實なり

宗師の釋文を按ずるに、「一者眞實心中」已下より「自他凡聖等の善」に至るまでは、厭離を先と爲し欣求を後と爲す。則ち是れ難行道自力堅出之義也。「眞實心中口業」已下より「自他依正二報」に至るまでは、則ち是れ易行道他力横出の義也。

【四】以下は深心を解釋す。

【五】疏文を分解吟味す。初に深信を歎稱す。次に深信の文を分解して七深信六決定となす。

二には深心、深心と言ふは即ち是れ深信之心也。
亦二種有り。

一には決定して、自身は現に是罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常に没し、常に流轉して、出離之縁有る事無しと深信す。

二には決定して、彼の阿彌陀佛四十八願をもて、衆生を攝受したまふこと、疑無く慮無く彼の願力に乗ずれば、定んで往生を得」と深信すと。文

今斯の深信は、他力至極之金剛心、一乘無上の眞實信海也。文の意を按ずるに、深信に就いて七深信有り、六決定有り。

七深信とは、

第一の深信は、決定して自身を深信する、即ち是れ自利の信心也

第二の深信は、決定して乗彼願力を深信する、即ち是れ利他の信海也

第三には、決定して、『觀經』を深信す

第四には、決定して『彌陀經』を深信す

第五には、唯佛語を信じ決定して行に依る

第六には、此の經に依りて深信す

第七には、又深心の深信は、決定して自身を建立せよと

六決定とは、已上次の如し、應に知るべし

【六】第五深信の解釋。

【三遺】一は雜修を捨て、二は專修念佛を行じ、三は異學異見の場所を去る事を勸む

【三隨順】一に教主釋迦、二に諸佛の證意、三には阿彌陀の本願に隨順すること。

【七】第六深信の解釋。第六深信の意は攝大乘論に念佛は遠生の因なりとする「別時意」の説に由り、觀經の「念佛即生」の説を論難せるに對し、佛菩薩の説を比較して、五種の勝劣を擧げ、唯深く佛

(六) (別他信) ゆゑに、第五の唯信佛語に就いて、三遺三隨順三是名有り。

三遺とは、

- 一には、佛の捨て遣めたまふ者を即ち捨つ
- 二には、佛の行ぜ遣めたまふ者を即ち行す
- 三には、佛の去ら遣めたまふ處をば即ち去るとなり

三隨順とは、

- 一には、是を佛敎に隨順すと名く
- 二には、佛意に隨順す
- 三には、是を佛願に隨順すと名くと

三是名とは、

- 一には、是を眞の佛弟子と名く
 - 上の「是を名く」と此と合して三是名也
- 第六に此の經に依りて、深信するに就いて、六即、三印、三無、六正、二了有り。

六即とは、

- 一には、若し佛意に稱へば、即ち印可して如是如是と言ふ
- 二には、若し佛意に可はされば、即ち汝等が所説、是の義不如是と言ふ
- 三には、印せざる者は、即ち無記、無利、無益之語に同じと

語を信じて菩薩等の説を信用すべからざるを勸む。【印可】印信認可の謂にして、佛の證明。

【六正】如來所説の經の眞正なるを歎ずる詞。親鸞は更に如實修行相應の他力の一心を表すものとせり。

【了教】決定して而も明了なるの義【第七等】第七深信の解釋。初に就人立信を釋す就人立信とは念佛の行者

四には、佛の印可したまふは、即ち佛の正教に隨順なり
五には、若し佛の所有の言説は、即ち是れ正教なり
六には、若し佛の所説は、即ち是れ了教なり
三印とは、
一には即印可
二には不印
三印は上の六印の文中に有り

三無とは、
一には無記
二には無利
三無は六印の文中に有り

六正とは、
一には正教
二には正義
三には正行
四には正解
五には正業
六には正智なり

二了とは、
一には、若し佛の所説は即ち是れ了教なり
二には、菩薩等の説は盡く不了教と名くる也、應に知るべし

第七の又深信に就いて、決定して自心を建立するに二別、三異、一問答有り。

唯深く佛語を信じ、
 爲に破られず、益
 信心を純粹ならし
 むるを述ぶ。
 【二別】聖道の行
 人の念佛者と解
 行別なるをいふ、
 又自力念佛者の事
 に名けらる。
 【三異】聖道偏見
 の學者を指す。
 【四別】觀經の、
 餘經に對して四種
 の特色有るを擧ぐ
 示す。
 【四信】信心の行
 者四重の疑難に遇
 ふも却て四種の信
 心を増長すべきを
 示す。

【五實】因位菩薩
 の語に簡げ、果上
 の佛語に就て嘆ず

二別とは、

一には別解

二には別行

三異とは、

一には異學

二には異見

三には異執

一問答の中に、四別、四信有り。

四別とは、

一には處別

二には時別

三には對機別

四には利益別なり

四信とは、

一には往生の信心

凡夫の疑難也

二には清淨の信心

地前の菩薩羅漢、
 辟支佛等の疑難也

三には上々の信心

初地已上七地
 已來の疑難也

四には畢竟して一念疑退之心を起さざる也疑難也

上々の信心に就いて、五實、一異有り。

五實とは、

一には眞實決了の義

二には實知

三には實解

四には實見

【二異】佛の正教に違する菩薩の教は異見異解と批判す。

【四同】同じく彌陀の念佛を讃勸證誠する同體大悲の諸佛を嘆ず。

【二所化】一佛とは釋迦、一切佛は諸佛のこと。

【六惡】彌陀教流布の時機を彰はす

五には實證なり

二異とは、

一には異見

二には異解なり

報化二佛の疑難に就いて、『彌陀經』を引きて信を勸むるに、二專、四同、二所化、六惡、

二同、三所有り。

二專とは、

一には專念

二には專修 五種也

四同とは、

一には同讚

二には同勸

三には同證

四には同體

二所化とは、

一には、一佛の所化は即ち是れ一切佛の化なり

二には、一切佛の所化は即ち是れ一佛の化なり

六惡とは、

一には惡時

二には惡世界

三には惡衆生

四には惡見

五には惡煩惱

六には惡邪無信盛時也

【二同、三所】
遍所説、所讚、所證
の彌陀功徳を十方
佛同時に證誠
する事を示す。

【八】就行立信を
釋す。次下は往生
の行に就いて正雜
の批判をなす。
【正行】専ら往生
經に依り行ずる純
粹淨土の行。
【雜行】純淨土の
行に對して人天、
三乘、十方淨土に
通ずる疎雜の行業
をいふ。

二同とは、

一には十方佛等同心

三所とは、

一には所説

二には所讚

三には所證なり

一佛の所説は、即ち一切佛同じく其の事を證誠したまふ也。此を人に就いて信を立つと名づくる也、應に知るべし。

次に行に就いて信を立つとは、然るに行に二種あり。

一には正行

二には雜行なり

正行に就いて、五正行、六一心、六專修有り。

五正行とは、

一には一心に專讀誦

二には一心に專觀察

三には一心に專禮佛

四には一心に專稱佛名

五には一心に專讚嘆供養なり

又此の正の中に就いて、復二種有り。

一には、一心に彌陀の名號を專念する、是を正定之業と名く

二には、若し禮誦等に依るは、即ち名けて助業と爲すと

六一心とは、次での如く一心也

六專修とは 次ごの如く專修也

又復正雜二行に就いて復二行有り、

一には定行 二には散行也

又復正雜に就いて、復二種有り、

一には念佛 二には觀佛なり

又念佛に就いて、復二種有り、

一には彌陀念佛 二には諸佛念佛

法身、報身、應身、化身

又復彌陀念佛に就いて二種有り、

一には正行 定心念佛 二には正行 散心念佛なり

彌陀定散の念佛、是を「淨土の眞門」と曰ふ、亦「一向專修」と名くる也。應に知るべし。

又復諸佛念佛に就いて、二種有り、

一には雜行 定心念佛 二には雜行 散心念佛

諸佛定散の念佛、是れ雜の中の專行也と、應に知るべし。

又復觀佛に就いて、復二種有り、

一には正之觀佛 二には雜之觀佛なり

【眞門】 自力の念佛を顯す、此門の行者、本願をたのむ心かけたるも一向に彌陀の名號を專稱するに因り、やがて弘願の眞實に轉入する方便の門たるが故に眞門と名く。

【正之觀佛】 特に阿彌陀の依正二報

の莊嚴を觀するこ
 とにて十三の觀想
 より華座想への七
 を依報觀、餘を正
 報觀と名く。更に
 眞假に分たれ。眞
 水想、像想を假觀
 といひ、他の凡て
 を眞觀と稱ず。眞
 觀とは淨土の無漏
 眞實の境相を作想
 すること。假觀と
 は現實中相似せる
 事物を通じて彼土
 の勝相を觀するを
 いふ。

【雜の觀佛】彌陀
 を除く餘の諸佛を
 觀ず。無想離念は
 法身の觀、立相住
 心は報應二身を觀
 ずること。

又復正の觀佛に就いて、復二種有り、

一には眞觀、二には假觀なり。

又復眞假に就いて、十三の觀想有り、

口想、水想、地想、寶樹想、

寶池、寶樓、華座、像想、

眞觀、觀音、勢至、普觀、

雜觀、禮拜、讚嘆、

又復正の散行に就いて、四種有り、

讀誦、禮拜、讚嘆、供養、

上來定散の六種兼行するが故に、「雜修」と曰ふ。是を「助業」と名く。名けて「方便假門」と爲す、亦「淨土の要門」と名くる也。應に知るべしと。

又復雜の觀佛に就いて、二種有り。又眞假

一には無想離念、二には立相住心なり。

又復雜の散行に就いて、三福有り。

一には、孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業なり

二には、受持三歸、具足衆戒、不犯威儀なり

三には、發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者なりと

【六種】念佛、觀佛、讀誦、禮拜、讚歎及び供養の六にして即ち正助二行のこと。

【九】廻向發願心を解釋す。善導の文を述す。一に自力廻向、二に他力廻向の二文を出す。

【二】疏文を分解吟味す。初に廻向の信心を示す次に正しく疏文を吟味す。

【一譬喩、二異、二別】他力廻向に由る金剛心の行者、一切異見異學別解別行人等の妨ぐる處に非ざる事を叙ぶ。

一切定散諸善悉く「雜行」と名く。六種の正に對して應に六種の雜有るべし。

「雜行」の言は人天菩薩等の解行雜するが故に、雜と曰ふ也。元より來淨土の業因に非ず。是を「發願の行」と名く、亦「廻心の行」と名く。故に「淨土の雜行」と名く、是を「淨土の方便假門」と名く、亦「淨土の要門」と名くる也。凡そ聖道、淨土、正、雜、定、散、

皆是れ廻心之行也と、應に知るべし。

【九】には、廻向發願心、廻向發願心と言ふは二種有り。

一には、過去今生自他所作の善根、皆眞實深信の中に廻向して、彼の國に生ぜん願するなり

二には、廻向發願して生ずる者は、必ず決定して眞實心の中に廻向せしめたまへる願を須ひて、得生の想をなすなりと

廻向發願生者に就いて信心有り。

得生の想を作す、此の心深信すること、由し金剛の若しとなり

此の深信に就いて一譬喩、二異、二別、一問答、二廻向有り。

一譬喩とは、此の心深信すること、由し金剛の若しと、二異とは、

【二問答】以下は凡夫得生に對する疑難を釋明す。

【六譬】彌陀の名號不思議力を顯す。

【二門】轉迷開悟の名號の功德を顯す。

一には異見
二には異學

二別とは、

一には別解
二には別行

一問答に就いて、七惡、六譬、二門、四有緣、二所求、二所愛、二欲學、二必有り

七惡とは、

一には十惡
二には五逆
三には四重
四には破戒
五には破見
六には謗法

七には闡提なり

六譬とは、

一には明能破闇
二には空能含有
三には地能載養
四には水能生潤
五には火能成壞
六には二河なり

二門とは、

一には隨出一門即出一類憍門也
二には隨入一門即入一解脫智慧門也

四有緣とは

一には、汝何を以て乃し將に有緣之要行に非るをもて我を障惑すると

二には、

一には、隨出一門即出一類憍門也
二には、隨入一門即入一解脫智慧門也

四有緣とは

一には、汝何を以て乃し將に有緣之要行に非るをもて我を障惑すると

二には、然るに我が所愛は即ち是れ我が有縁之行なり、即ち汝が所求に非ずと
 三には、汝が所愛は即ち是れ汝が有縁之行なり、亦我が所求に非ず、是の故に各所
 案に隨うて其の行を修すれば、必ず疾く解脱を得る也

四には、若し行を學ばんと欲はゞ、必ず有縁之法に藉れ。少しき功勞を用ふるに多く

益を得文

二所求とは 上の文

二所愛とは 上の文

二欲學とは、

一には、行者當に知るべし。若し解を學ばんと欲はゞ凡より聖に到り乃至佛果まで、

一切礙り無く皆學ぶことを得んと也

二には、若し行を學ばんと欲はゞ、必ず有縁の法に藉れと也。乃至

二必とは上の文

此の深信の中に就いて、二廻向といふは、

一には、常に此の想を作し常に此の解を作す、故に「廻向發願心」と名く

二には、又「廻向」と言ふは、彼の國に生れ已りて、還つて大悲を起して生死に廻入

して、衆生を教化するを亦「廻向」と名くる也

二河の中に就いて、一の譬喩を説いて、信心を守護し以て外邪異見之難を防がんと

【二廻向】 往相、
 還相の二種廻向を
 示す。傍註の自利
 利他の言は茲にて
 は自行化他の意を
 顯すものとす。

【二】 特に二河喩
 を解釋す。

【二河喻】三心の

解釋終りて更に

者に述べられし説話

に於て願生者の心

的過程を叙示しつ

つ觀經二尊の教意

を顯はせるもの一

今略示するに

旅人の西に向て歩

み行くに前路に當

り忽然として南北

の邊りなき水火二

河の横れるに逢ふ

唯僅に中間四五寸

許りなる白道有て

彼岸に通へるを見

事百歩に過ぎずと

雖も水火の波浪常

に相交りて道を燒

此の道東の岸より西の岸に至るまで亦長さ百歩文

百歩とは、

人壽百歳に譬ふる也

群賊惡獸とは、

群賊とは別解、別行、異見、異執、惡見、邪心、定散、自力之心也

惡獸とは六根、六塵、五陰、四大也。

常に惡友に隨ふとは、

惡友とは、善友に對す雜毒虛假之人也

無人空迴の澤と言ふは、

惡友也、眞の善知識に値はざる也。眞の言は假に對し偽に對す。善知識とは惡知識に對する也

眞善知識

正善知識

實善知識

是善知識

善々知識

善性人也

惡知識とは

假善知識

偽善知識

邪善知識

虛善知識

白道とは、白の言は黒に對す、道の言は路に對す、白とは則ち是れ六度、萬行、定散也

白道四五寸と言ふは、

白道とは、白の言は黒に對す、道の言は路に對す、白とは則ち是れ六度、萬行、定散也

と相應して西岸上
に喚ぶ人の有て
【一心正念】にして
直に來れ」の言を
聞き最早疑ひの心
無く、ひたすらに
道を念じて進み行
くに、須臾にして
彼岸に到り善友と
相見て限り無き慶
びを得たり」とい
ふ。

【二十五有】生死
の三界を更に細分
せるもの。

【十二類生】惑業
に由り生を受くる
に十二類の不同あ
るをいふ。

斯れ則ち自力小善の路也。黒とは、則ち是れ六趣、四生、二十五有、十二類生の黒惡道也。

四五寸とは、四の言は四大の毒蛇に譬ふる也。五の言は、五陰の惡獸に譬ふる也。能生清淨願往生心と言ふは、

無上の信心、金剛の眞心を發起する也、斯れは如來廻向の心樂也。

或は行くこと、一分二分すと言ふは、

年歳時節に喩ふる也。

惡見人等と言ふは、

傲慢、懈怠、邪見、疑心之人也。

又西の岸の上に人有りて喚んで言く、「汝一心正念にして直に來れ、我能く守らん」と言ふは、

言ふは、

「西の岸の上に人有りて喚んで言く」とは、阿彌陀如來の誓願也。

「汝」の言は行者也、斯れ則ち必定の菩薩と名く、龍樹大士の「十住毘婆娑論」に曰く、「即

時入必定」となり。曇鸞菩薩の論には「入正定聚之數」と曰へり。善導和尚は「希有人

也、最勝人也、妙好人也、上々人也、眞の佛弟子也」と言へり。

「一心」の言は、眞實の信心也。

「正念」の言は、選擇攝取の本願也、又第一希有の行也、金剛不壞の心也。

「直」の言は、廻に對し迂に對する也。又「直」の言は、方便假門を捨て、如來の大願他力に歸せんとなり、諸佛出世之直説を顯はさしめんと欲して也。

「來」の言は、去に對し往に對する也、又報土は還來せしめんと欲して也。

「我」の言は、盡十方無礙光如來也。不可思議光佛也。

「能」の言は、不堪に對する也、疑心之人也。

「護」の言は、阿彌陀佛果成之正意を顯す也、亦攝取不捨を形す之貌也、則ち是れ現生

護念也。

「念道」の言は、他力白道を念ぜよと也。

「慶樂」とは、「慶」の言は印可之言也、獲得之言也。「樂」の言は悦喜之言也、歡喜踊躍也。

「仰いで釋迦發遣して、指へて西方に向はしめたまへることを蒙る」といふは順也。

又「彌陀の悲心招喚したまふに藉るといふは信也」。

今二尊之意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遺ること無く、彼の願力之道に

乗ぜよとなり。

至誠心に就いて

難易對

難易對

彼此對

去來對

毒藥對

内外對

難とは、三業修善不眞實之心也

易とは、如來願力廻向之心也

【三】總結。別して行者の機相を顯す。

彼此對

彼とは淨邦也

此とは穢國也

去來對

去とは釋迦佛也

來とは彌陀也

毒藥對

毒とは善惡雜心也

藥とは純一專心也

内外對

内外道外佛敎

内聖道外淨土

内冥情外信心

内惡性外善性

内邪外正

内虛外實

内非外是

内偽外眞

内雜外專

内愚外賢

内假外眞

内退外進

内疎外親

内遠外近

内迂外直

内違外隨

内逆外順

内輕外重

内淺外深

内苦外樂

内毒外藥

内怯弱外強剛

内懈怠外勇猛

内自力外他力

凡そ心に就いて、二種の三心有り。

一には自利の三心
二には利他の三心なり

【二】總じて自力
他力の旨際を示す

又二種の往生有り、

一には即往生

二には便往生

竊に『觀經』の三心往生を按ずれば、是れ則ち諸機自力各別之三心也、『大經』の三信に歸せんが爲也、諸機を勧誘して、三信に通入せしめんと欲ふ也。

三信とは、斯れ則ち金剛の眞心、不可思議の信心海也。

亦即往生とは、斯れ則ち難思議往生、眞の報土也。

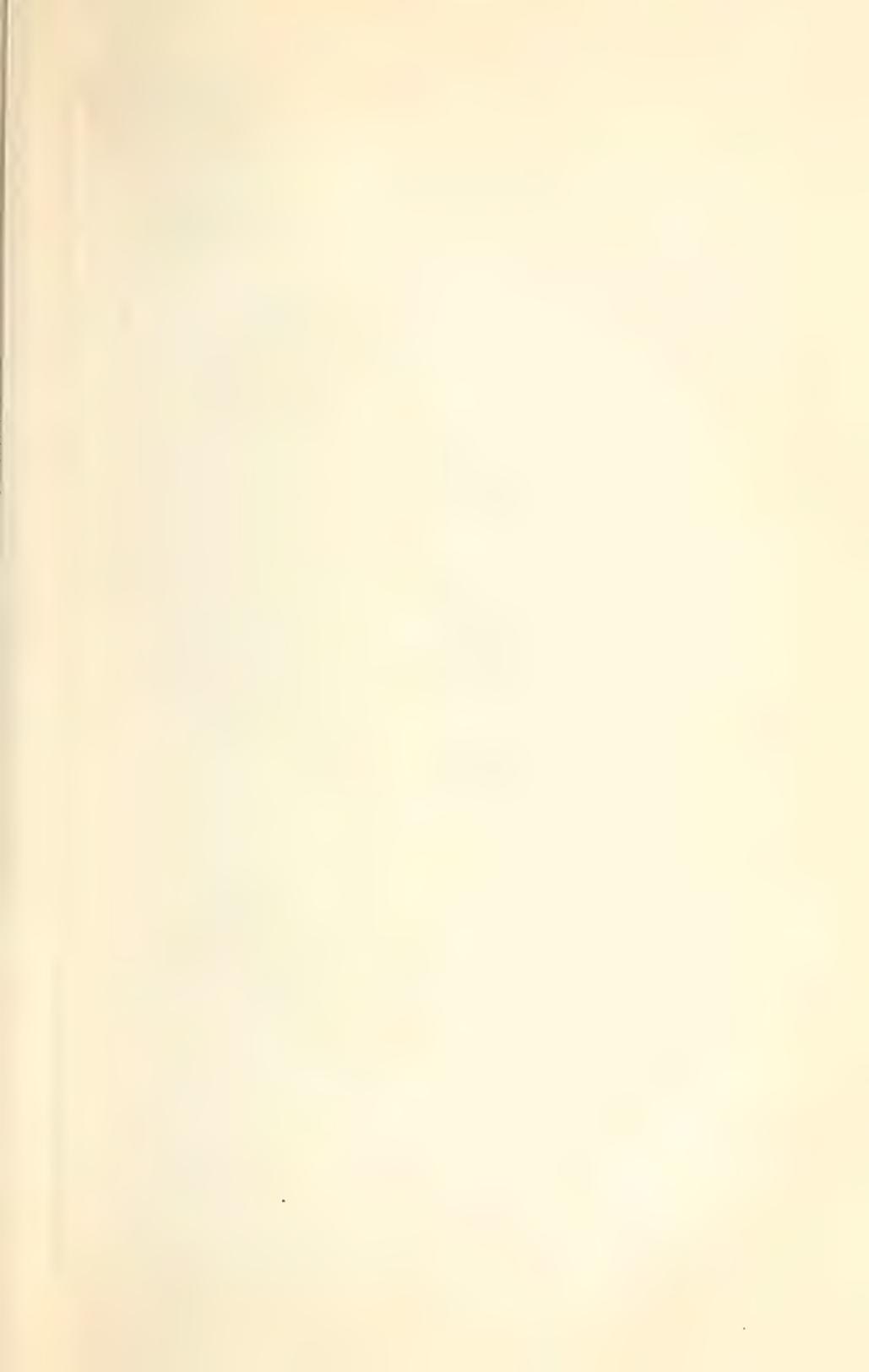
便往生とは、即ち是れ諸機各別の業因果成の土なり、胎宮、邊地、懈慢界、雙樹林下往生なり、亦難思議往生也と。應に知るべし。

建長七歲乙卯八月廿七日 書之

愚禿親鸞八十歲

愚禿鈔下畢

入出二門偈頌



【本偈は、禮拜等の五念の行は、禮(世親の淨土論にあり)如來廻向の入出の二門に外ならざるを示せる讚歌にして、入出は、禮拜、讚嘆、作願、觀察四門の自利の行廻向門の利他の行を指す。

【宗師】曇鸞をいふ。

【世親菩薩】以下入出二門他力廻向の旨を明す。

【五には】五種不可思議あるうち第五を佛法力不可思議とす。

入出二門偈頌

愚禿釋親鸞作

無量壽經論一卷 元魏天竺三藏菩提留支譯す

婆藪盤豆菩薩の造なり、婆藪盤豆は梵語なり

舊譯には天親、此は是説れるなり、新譯には世親なり、是を正と爲す

優婆提舍願生の偈、宗師是を淨土論と名く

此の論を亦往生論と曰へり。入出二門斯より出でたり

世親菩薩、大乘修多羅真實功德に依て

一心に盡十方、不可思議光如來に歸命したまへり

無礙の光明は大慈悲なり、斯の光明は即ち諸佛の智なり

彼の世界を觀するに邊際なし、究竟せること廣大にして虚空の如し

五には佛法不思議なり、此の中の佛土不思議に

二種の不思議力まします、斯は安養の至徳を示すなり

一には業力、謂く法藏の大願業力に成就せられたり

【根缺】 不具者。

【三三品】 往生の行業として修する善法により往生者の機根を三三の九種に分てるもの。觀經に出づ。

【滿漚】 二河水の名。

【菩薩は五種の門】 以下入出二門法藏菩薩の行なる事を明す。

【五種の門】 禮、讚等の五念門の行廻向により、自然に近門、大會衆門、宅門、扉門、園林遊戯地門の五功德を具せしむるを云ふ。

【云何が禮拜】 入の第一門。

【云何が讚嘆】 入の第二門。

【光明】 智慧の象徴。

二には正覺の阿彌陀、法王の善力に攝持せられたり

女人、根缺、二乘の種、安樂淨刹には永く生ぜず

如來淨華の諸の聖衆、法藏正覺の華より化生す

諸機は本則ち三三の品なれども、今は一二の殊異なし

同一に念佛して別の道なければなり、猶滿漚の一味たるが如きなり

彼の如來の本願力を觀するに、凡愚遇うて空しく過ぐる者無し

一心專念すれば、速に、眞實功德の大寶海を満足せしむ

菩薩は五種の門に、入出して自利利他の行成就したまへり

不可思議兆載劫に、漸次に五種の門を成就したまへり

何等をか名けて五念門とすると、禮と讚と作願と觀察と廻となり

云何が禮拜する、身業に禮したまひき、阿彌陀佛正徧知

諸の群生を善巧方便して、安樂國に生ぜん意を爲さしめたまふが故なり

即ち是を第一門に入ると名く、亦是を名けて近門に入ると爲す

云何が讚嘆する、口業をもて讚じたまひき。名義に隨順して佛名を稱せしむ

如來の光明智相に依て、實の如く修し相應せしめんと欲すが故に

則ち斯れ無礙光如來の、攝取選擇の本願なるが故に

是を名けて第二門に入ると爲す、則ち大會衆の數に入ることを得るなり

【如何が作願】 入
【奢摩他】 一切の
心想を止め無念に
住するを云ふ。

【云何が觀察】 入
の第四門。

【毘婆舍那】 觀と
譯され觀察を意味
す。

【神通】 意の如く
自在無礙なること
【教化地】 衆生の
教化し得る菩薩の
地位、八地以上。
【無礙光佛因地】
以下、如來の願成
就を明し、二門を
結論す。

云何が作願する心に常に願じたまひき、一心に專念して彼に生れんと願せしむ
蓮華藏世界に入ることを得、實の如く奢摩他を修せしめんと欲すなり
是を名けて第三門に入ると爲す、亦是を名けて宅門に入ると爲す
云何が觀察する、智慧をして觀じたまひき、正念に彼を觀じて實の如く
毘婆舍那を修行せしめんと欲すが故なり、彼の所に到ることを得れば則ち
種種無量の法味の樂を受用す、即ち是を第四門に入ると名く
亦是を名けて屋門に入ると爲す、菩薩の修行成就といふは
四種は入の功德を成就したまふ、自利の行成就したまふと知るべし
第五に出の功德を成就したまふ、菩薩の出第五門といふは
云何が廻向したまふ、心に作願したまひき、苦惱の一切衆を捨てたまはざれば
廻向を首として大悲心を成就することを、得たまへるが故に功德を施したまふ
彼の土に生じ已て速かに疾く、奢摩他毘婆舍那
巧方便力成就を得已つて、生死蘭嶺嶺林に入りて
應化身を示し神通に遊びて、教化地に至りて群生を利したまふ
即ち是を出第五門と名く、蘭林遊戯地門に入るなり
本願力の廻向を以ての故に、利他の行成就したまへり知るべし
無礙光佛因地の時、斯の弘誓を發し此の願を建てたまひき

【妙樂等】淨土へ往生する菩薩の菩提心を、智慧、方便、無障、妙樂、真心の四種とす。智慧方は便は權、實の二心。無障は菩提心を障ふることなき。妙樂勝真心は無染、安樂の三清淨心の成就満足せる一心。

【曇鸞和尚】以下論註により更に入出二門他力廻向なるを明す。

【本師】末弟に對す。

【道綽禪師】以下傳統相承により他力廻向の旨を明す。先づ道綽により罪の凡夫も他力により往生成佛の易き事を示す。

菩薩已に智慧心を成じ、方便心無障心を成じ、妙樂勝真心を成就して、速かに無上道を成就することを得たまへり。自利利他の功德を成じたまふ、則ち是を名けて入出門と爲すとのたまへり。

曇鸞和尚 大巖寺

婆藪槃豆菩薩の論、本師曇鸞和尚註したまへり。願力成就を五念と名く、佛をして言はゞ宜しく利他と言ふべし。衆生をして言はゞ他利と言ふべし、當に知るべし、今將に佛力を談ぜんとす。如實修行相應は、名義と光明とに隨順するなり。斯の信心を以て一心と名く、煩惱成就の凡夫人。煩惱を斷ぜずして涅槃を得しむ、則ち斯れ安樂自然の徳なり。淤泥華といふは經に説いて言はく、高原の陸地に蓮を生ぜず。卑濕淤泥に蓮華を生ず、此は凡夫煩惱の泥の中に在りて。佛の正覺の華を生ずるに喩ふるなり、斯は如來の本弘誓不可思議力を示す即ち是れ、入出二門を他力と名くとのたまへり。

道綽 玄忠寺

道綽和尚解釋して曰く、大集經に言はく我が末法に修行を起し道を修せん一切衆、未だ一人も獲得の者あらじと

【三信相應等】信心の正しき相狀を曇鸞が淳心、一心、相續心の三信となせるを道純は之を承け、若能相續則是一心、但能一心、即是淳心、具此三心、若不生者無有是處、一といふ【善導禪師】以下善導に歸するも、他力眞宗に歸するものは人中の白蓮華にして、安樂國に到れば必ず無上涅槃を證することを顯す。

此に在りて心を起し行を立てん者は、則ち此聖道なり自力と名く當今は末法にして是れ五濁なり、唯淨土ありて通入すべしといま、今の時惡を起し衆罪を造ること、恆常にして暴風駛雨の如し本弘誓願に名を稱せしむるは、是れ穢濁惡の衆生のためなり是を以て諸佛淨土を勧めたまへり、たとひ一生惡を造る者三信相應せんは是れ一心なり、一心は淳心なれば如實と名く若し生れずば是の處なけん、必ず安樂國に往生を得れば生死即ち是れ大涅槃、則ち易行道なり他力と名くとのためなり

善導禪師 光明寺

善導和尚義解して曰く、念佛成佛する是れ眞宗なり即ち是を名けて一乘海と爲す、即ち是を亦菩提藏と名く即ち是れ圓教の中の圓教なり、即ち是れ頓教の中の頓教なり眞宗遇ひ回し信を得ること難し、難の中の難斯に過ぎたるは無けん釋迦諸佛は是れ眞實慈悲の父母なり、種種の善巧方便を以て、我等が無上の眞實の信を發起せしめたまふ煩惱を具足せる凡夫人、佛願力に由りて攝取を獲斯の人は即ち凡數の攝に非ず、是れ人中の分陀利華なり

の道。親鸞は本願に乗托するを唯一無上道とし、願力を海に喩へ、一乗海といふ。

【菩提藏】 釋迦牟尼に對し佛道をいふ。

即到一乘は菩提に到らしむる故に菩提藏といふ。

【同教】 圓融圓滿の教。

【頓教】 頓極頓速の教。

【法性】 大涅槃のこと。涅槃の四徳中の二。

【法性】 大涅槃のこと。涅槃の四徳中の二。

斯こゝの信しんは最勝さいとう希有きゆう人にんなり、斯こゝの信しんは妙好めうこう上じやう々じやう人にんなり
安樂あんらく土どに到いたれば必ず自然じぜんに、即すなはち法性ほふじやうの常樂じやうらくを證しやうすとのたまへり

建長けんぢやう八歲はつさい丙辰へいぢん三月さんげつ廿三日にじふさんにち書か寫しやう之を

入ま出し二に門もん偈げ頌じゆ終つひ

淨
土
和
讚

○本和讃は讚阿彌陀佛、和讃、三經の意による淨土和讃、諸經の意による彌陀和讃、現世利益和讃、大勢至菩薩和讃の諸編より成る。

【彌陀の】此二首古來冠頭和讃と稱せられ信をすすめ疑を誡むるの意を述るものとす。

【宮殿】恰も胎内にある者、外を見る能はざる如く、淨土の宮殿に生るるも、その莊嚴を見聞する能はずといふ。

【讚阿彌陀佛偈】淨土眞宗第三祖曇鸞の作なる讚歌、ここに錄せるは觀鸞の最要なり又號無量光以下三十七名は、阿彌陀佛の尊號となす意なり

淨土和讃

彌陀の名號となへつゝ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

佛恩報ずるおもひあり

誓願不思議をうたがひて

御名を稱する往生は

宮殿のうちに五百歳

むなしくすぐとぞときたまふ

『讚阿彌陀佛偈』曰

南無阿彌陀佛

釋名無量壽經傍經

曇鸞御造

奉讚亦曰安養

成佛已來歷十劫

壽命方將無有量

法身光輪徧法界

照世首冥故頂禮

又號無量光 眞實明

又號無邊光 平等覺

又號無礙光 難思議

又號無對光 畢竟依

又號二光炎王 大應供

又號二清淨光 一三だいんいとたづく

又號二歡喜光 大安慰

又號二智慧光

又號二不斷光

又號二難思光

又號二無稱光

號三超日月光 無等等

【十住毘婆娑論】

淨土眞宗第一祖龍樹の作、菩薩道を説ける十地經を釋せしもの

【淨阿彌陀佛偈和讃】曇鸞の撰阿彌陀佛偈に依るる和讃時

【彌陀成佛の】以下十三首は佛徳を讚す

【法身】法性の理と一切の功徳法を身とせる佛、以下三首に互て、涅槃の三徳たる法身般若（智慧）解脫を擧ぐ

【諸相】ろづの衆生

【有無】有無の邪見

【平等覺】佛陀

廣大會

無上尊

婆伽婆

清淨大攝受

道場樹

清淨樂

清淨勳

無極尊

大心海

平等力

無稱佛

講堂

不可思議尊

眞無量

本國功德聚

功德藏

南無不可思議光

已上略抄也

已上

自在人禮

清淨人命

無量德讚

已上

讚阿彌陀佛偈和讃

南無阿彌陀佛

彌陀成佛のこのかたは

いまに十劫をへたまへり

法身の光輪きはもなく

世の盲冥をてらすなり

智慧の光明はかりなし

有量の諸相ことごとく

光蔵かふるものはなし

愚禿觀鸞作

眞實明に歸命せよ

解脫の光輪きはもなし

光蔵かふるものはみな

有無をはなるとのべたまふ

平等覺に歸命せよ

光雲無礙如虛空

一切の有礙にさはりなし

【遇斯光】彌陀佛に遇ふ事。
【畢竟依】畢竟は至極、依は歸依、佛は衆生の爲に至極の所歸依なるが故にこの徳名あり

【開光力】彌陀の誓を信じまいらす也

【業垢】惡業、煩惱

【善相】光明は智慧の相なり。智慧にかち(相)なし故に光明は相を離る

【因光】光、きわなからんと誓ひ給ひて無礙光佛となりておはしますと

光澤かふらぬものぞなき
難思議を歸命せよ

五 清淨光明ならびなし

遇斯光のゆへなれば

一切の業繫ものぞこりぬ

畢竟依を歸命せよ

六 佛光照曜最第一

佛光照曜最第一

光炎上佛となづけたり

三塗の黒闇ひらくなり

七 道光明朗超絶せり

大應供を歸命せよ

清淨光佛とまふすなり

ひとたび光照かふるもの

八 業垢をのぞき解脱をう

慈光はるかにかふらしめ
ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ

大安慰を歸命せよ

無明の闇を破するゆへ

智慧光佛となづけたり

一切諸佛三乘衆

ともに嘆譽したまへり

一〇 光明てらしてたへざれば

不斷光佛となづけたり

開光力のゆへなれば

心不斷にて往生す

二 佛光潮量なきゆへに

羅思光佛となづけたり

諸佛は往生嘆しつゝ

彌陀の功德を稱せしむ

神光の顯相をとかされば

無稱光佛となづけたり

因光成佛のひかりをば
諸佛の嘆するところなり

【無等等】等しく等しき者なし(一)無等の等(二)の二義あり。後義は衆生に無等にして佛に等の意。諸佛の德號。

【一四首：三二一首】聖衆の德を歌讚す

【普賢】慈悲を象徴する菩薩。

【本願弘誓】法藏菩薩となりて發し給へる四十八願、弘誓は意味に名付けし本願の別名。

【他方に】安樂國に聲聞、菩薩、人間天人の名ある所以は、此世に順ずる故なり。

光明月日に勝過して

超日月光となづけたり

釋迦嘆じてなをつきす

無等等を歸命せよ

彌陀初會の聖衆は

算數のおよぶことぞなき

淨土をねがはんひとはみな

廣大會を歸命せよ

安樂無量の大菩薩

一生補處にいたるなり

普賢の德に歸してこそ

穢國にかならず化するなれ

十方衆生のためにとて

如來の法藏あつめてぞ

本願弘誓に歸せしむる

大心海を歸命せよ

觀音勢至もろともに

慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも

休息あることなかりけり

安樂淨土にいたるひと

五濁惡世にかへりては

釋迦牟尼佛のごとくにて

利益衆生はきはもなし

神力自在なることは

測量すべきことぞなき

不思議の德をあつめたり

無上尊を歸命せよ

安樂聲聞菩薩衆

人天智慧ほがらかに

身相莊嚴みなおなじ

他方に順じて名をつらぬ

顔容端政たぐひなし

精微妙驅非人天

【虚無、無極】涅槃の名。法身の體なり。

【正定聚】必ず佛になるべき身。

【邪定不定聚】親鸞は受法の機を分類して、正定聚、邪定聚、不定聚の三とす。邪定聚は萬善諸行の自善を廻向して淨土を欣

ひ慕ふともがら、不定聚は佛の誓願を疑ひつつ、萬善

中より名號を選び之を己が善根として

淨土に廻向して稱念するともがら

親鸞は共に自力の人とす。

【若不生者】第十

八願の誓。

【信樂】信心のこと。

【せしむれば】第一

一人稱用法、すればの意。

虚無之身無極體

平等力を歸命せよ

安樂國をねがふひと

正定聚にこそ住すなれ

邪定不定聚くになし

諸佛讚嘆したまへり

十方諸有の衆生は

阿彌陀至徳の御名をき

眞實信心いたりなば

おほきに所聞を慶喜せん

若不生者のちかひゆへ

信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは

往生かならずさだまりぬ

安樂佛土の依正は

法藏願力のなせるなり

天上天下にたぐひなし

大心力を歸命せよ

安樂國土の莊嚴は

釋迦無礙のみことにて

とくともつきじとのべたまふ

無稱佛を歸命せよ

已今當の往生は

この土の衆生のみならず

十方佛土よりきたる

無量無數不可計なり

阿彌陀佛の御名をき

歡喜讚仰せしむれば

功德の實を具足して

一念大利無上なり

たとひ大千世界に

みでらん火をもすぎゆきて

佛の御名をきくひとは

ながく不退にかなふなり

【往觀】佛國に往いて佛を見たてまつること。

【徳本】善根功徳のこと、それが菩提の爲の本(因)なる故。親鸞は名號を善本、徳本といふ。

【婆伽婆】世尊のこと。

【三三首】以下は淨土の依報の徳を讃す。その中初の一首は方便化土の相と云はる。第三十四首―第三十五首は眞實報土の讃歌。

【神力本願及満足】淨土の莊嚴を成就せしめし本願の徳用を顯すに、威神力、本願力、満足願、明了願、堅固願、究竟願の六義を以てす。

神力無極の阿彌陀は

無量の諸佛ほめたまふ

東方恆沙の佛國より

無数の菩薩ゆきたまふ

自餘の九方の佛國も

菩薩の往觀みなおなじ

釋迦牟尼如來偈をときて

無量の功徳をほめたまふ

十方の無量菩薩衆

徳木うへんためにとて

恭敬をいたし歌咏す

みなひと婆伽婆を歸命せよ

七寶講堂道場樹

方便化身の淨土なり

十方來生きはもなし

講堂道場禮すべし

妙土廣大超數限

本願莊嚴よりおこる

清淨大攝受到

稽首歸命せしむべし

自利利他圓滿して

歸命方便巧莊嚴

こゝろもことばもたへたれば

不可思議尊を歸命せよ

神力本願及満足

明了堅固究竟願

慈悲方便不思議なり

眞無量を歸命せよ

寶林寶樹微妙音

自然清和の伎樂にて

哀婉雅亮すぐれたり

清淨樂を歸命せよ

七寶樹林くにみつ

光耀たがひにかゞやけり

華菓枝葉けくわしえふまたおなじ

本願功德聚ほんがんくどくじゆを歸命きみやうせよ

清風寶樹せいふうほうじゆをふくときは

いつゝの音聲おんじやういだしつゝ

宮商和きやうじやうわして自然じぜんなり

清淨動しやうじゆんどうを禮らいすべし

一々いちいちのはなのなかよりは

三十六百千億さんじふろくひやくせんぱくの

光明くわうみやうてらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし

一々いちいちのはなのなかよりは

三十六百千億さんじふろくひやくせんぱくの

佛身ぶつしんもひかりもひとしくて

相好金山さうごうこんざんのごとくなり

相好さうごうごとに百千ひやくせんの

ひかりを十方じつぱうにはなちてぞ

つねに妙法めうほふとききひろめ

衆生しゆじやうを佛道ぶつだうにいらしむる

七寶しちぼうの寶池ほうぢいさぎよく

八功德水はつとくどくすいみちみてり

無漏むろうの依果えくわふし不思議ふしぎなり

功德藏くどくざうを歸命きみやうせよ

三塗苦難さんずくなんながくとぢ

但有自然快樂音たうじぜんらくおん

このゆへ安樂あんらくとなづけたり

無極尊むごくそんを歸命きみやうせよ

十方三世じふぱうさんぜの無量慧むりやうえ

おなじく一如いちにように乗じてぞ

二智圓滿道平等にちえんまんどうびやうどう

攝化隨緣せつけしゆいぜん不思議ふしぎなり

彌陀みやだの淨土じやうどに歸きしぬれば

すなはち諸佛しよぶつに歸きするなり

一心いっしんをもちて一佛いちぶつを

ほむるは無礙人むすゐにんをほむるなり

【四五首】 以下は

【二智】 諸法平等の理を證れる根本智と、諸法差別の相を認むる後得智

【道】 二智によりて證せられし覺。

【攝化隨緣】 佛、機縁に隨ひ種種の方便を以て衆生を攝受化益すること

四七
信心歡喜慶所聞

乃暨一念至心者

南無不可思議光佛

頭面に禮したてまつれ

四八
佛慧功德をほめしめて

十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひとは

つねに佛恩報すべし

已上四十八首

阿彌陀如來

釋迦牟尼如來

頻婆娑羅王

提婆尊者

愚禿親鸞作

觀世音菩薩

大勢至菩薩

富樓那尊者

大目犍連

阿難尊者

韋提夫人

月光大臣

阿闍世王

行雨(雨行)大臣

淨土和讃

愚禿親鸞作

大經意

尊者阿難座よりたち

世尊の威光を瞻仰し

生希有心とおどろかし

未曾見とぞあやしみし

如來の光瑞希有にして

阿難はなはだこゝろよく

如是之義ととへりしに

出世の本意あらはせり

大寂定にいりたまひ

如來の光顔たへにして

阿難の惠見をみそなはし

問斯惠義とほめたまふ

如來興世の本意には

【一首：四首】大經序分の意。

【大寂定】釋迦、無量壽經を説くに先立ちて入れる三昧、即佛佛相念の大寂定。

【五首：一七首】正宗文。

【南無不可思議光佛】法華菩薩正覺の果名。

【饒王佛】世自在王佛の異譯。

【七首：一〇首】眞實の願と成就を顯す。一、光明、

二、信心、三、證果、四、女人別願

【至心信樂欲生】第十八願文の語、

大經の三倍と呼べる三を以て一信心を顯す也。

【一一首】以下の三首は、第十九願の意を示す。

【假門】觀經に説ける一定善妄念雜慮を息め、心を聖衆佛土に注めて修する善。十三觀にて散善へ散亂心のまま修する善。三福九品を以て淨上に往生せんと願ふ者には、その臨終に前に現れんと願ふに給ふ。弘願の念佛門に對して假門と呼ぶ。

本願眞實ひらきてぞ

難値難見とときたまひ

猶靈瑞華としめしける

彌陀成佛のこのかたは

いまに十劫とときたれど

塵點久遠劫よりも

ひさしき佛とみへたまふ

南無不可思議光佛

饒王佛のみもとにて

十方淨土のなかよりぞ

本願選擇攝取する

無礙光佛のひかりには

清淨歡喜智慧光

その徳不可思議にして

十方諸有を利益せり

至心信樂欲生と
十方諸有をすゝめてぞ

不思議の誓願あらはして

眞實報土の因とする

眞實信心うるひとは

すなはち定聚のかすにいる

不退のくらみにいりぬれば

かならず滅度にいたらしむ

彌陀の大悲ふかければ

佛智の不思議をあらはして

變成男子の願をたて

女人成佛ちかひたり

至心發願欲生と

十方衆生を方便し

衆善の假門ひらきてぞ

現其人前と願ひける

臨終現前の願により

釋迦は諸善をことごとく
觀經一部にあらはして

定散諸機をすゝめけり

諸善萬行ことくく

至心發願せるゆへに

往生淨土の方便の

善とならぬはなかりけり

至心廻向欲生と

十方衆生を方便し

名號の眞門をひらきてぞ

不果遂者と願じける

果遂の願によりてこそ

釋迦は善本徳本を

彌陀經にあらはして

一乘の機をすゝめける

定散自力の稱名は

果遂のちかひに歸してこそ

おしへざれども自然に

眞如の門に轉入する

安樂淨土をねがひつゝ

他力の信をえぬひとは

佛智不思議をうたがひて

邊地懈慢にとまるなり

如來の興世にあひがたく

諸佛の經道きゝがたし

菩薩の勝法きくことも

無量劫にもまれらなり

善知識にあふことも

おしふることまたかたし

よくきくこともかたければ

信することもなをかたし

一代諸教の信よりも

弘願の信樂なをかたし

難中之難とときたまひ

無過斯難とのべたまふ

念佛成佛これ眞宗

【一四首】以下の三首は、第二十願の意を示す。

【眞門】弘願の念佛門に對して眞門と呼ぶ。

【一乘の機】本願

【一八首・二二首】流通分の意。

【經道】轉迷開悟の教法。

【悲願】本願の教法。

【光臺現國】釋迦
眉間の光を放ちて
十方世界を照し、
その光還て佛頂に
金臺を化現し、そ
の中に佛國を現じ
て、苦惱に沈める
韋提に見せしめ給
ふ。

【二首・五首】阿
闍世逆心を興し、
父王頻婆娑羅を室
牢にも禁閉せし顛末
を觀經序分の文に
よりて述ぶ。

【耆婆月光】當時
乃二大臣。耆婆は
外に名醫の名高し

【唐陀羅】印度の
被征服者の群。婆
羅門、刹帝利、毘舍
羅、首陀羅の四階級
の上に置かれ、極め
て卑しめられし種
族。

【せしめつつ】し
つつ。すてしめて
もすてて。

萬行諸善これ假門

權實信假をわかずして

自然の淨土をえぞしらぬ

聖道權假の方便に

衆生ひさしくとゞまりて

諸有に流轉の身とぞなる

悲願の一乘歸命せよ

已上大經意

觀くわん 經ぎやう 意い 九く 首しゆ

恩德廣大釋迦如來

韋提夫人に勅してぞ

光臺現國のそのなかに

安樂世界をえらばしむ

頻婆娑羅王勅せしめ

宿因その期をまたずして

仙人殺害のむくひには

七重のむろにとぢられき

阿闍世王は瞋怒して

我母是賊としめしてぞ

無道に母を害せんと

つるきをぬきてむかひける

耆婆月光ねんごろに

是旃陀羅とはぢしめて

不宜住此と奏してぞ

闍王の逆心いさめける

耆婆大臣おさへてぞ

却行而退せしめつゝ

闍王つるぎをすてしめて

韋提をみやに禁じける

彌陀釋迦方便して

阿難目連富樓那韋提

【達多】提婆達多釋尊の從弟にしてその化導を妨げし人。

【雨行】雨行（行雨）は、提婆達多と計り、阿闍世の暴舉を扶けし人。

【さんじん】至誠心、深心、廻向發願心。

【悲念證誠】念佛往生の確實なることを證明せんが爲に、六方恆沙の諸佛各廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界を覆うて誠實の言を説く。

【悲願】本願、特に第十七の願に十方諸佛に我名を稱せられんと願す。

達多闍王頻婆娑羅者婆月光行雨等

大聖のくもろともに

凡愚底下のつみびとを

逆惡もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり

釋迦韋提方便して

淨土の機緣熟すれば

雨行大臣證として

闍王逆惡興せしむ

定散諸機各別の

自力のさんじんひるがへし

如來利他の信心に

通入せんとねがふべし

已上觀經意

彌陀經意五首

十方微塵世界の

念佛の衆生をみそなはし

攝取してすてざれば

阿彌陀となづけたてまつる

恆沙衆數の如來は

萬行の少善きらひつゝ

名號不思議の信心を

ひとしくひとへにすゝめしむ

十方恆沙の諸佛は

極難信ののりをとき

五濁惡世のためにとて

證誠護念せしめたり

諸佛の護念證誠は

悲願成就のゆへなれば

金剛心をえんひとは

【諸經の意によりて彌陀和讃】第一、第二の和讃は、法華經壽量品の意によるといはる。かの品には、釋尊の壽命無量を説く。その壽命無量の釋迦を親鸞は阿彌陀佛とす。

【迦耶城】摩揭陀國の都城。この附近にて釋尊成道せらる。

【三首】稱讚淨土經の意。

【四首】日蓮所問經の意。

【五首】以下の三首は涅槃經の意。

【一子地】一切衆生を一子の如く憐愍する地位。親鸞の意は佛果とす。

彌陀の大恩報すべし

五濁惡時惡世界

濁惡邪見の衆生には

彌陀の名號あたへてぞ

恆沙の諸佛すゝめたる

已上彌陀經意

諸經の意によりて彌陀和讃 九首

無明の大夜をあはれみて

法身の光輪きはもなく

無礙光佛としめしてぞ

安養界に影現する

久遠實成阿彌陀佛

五濁の凡愚をあはれみて

釋迦牟尼佛としめしてぞ

迦耶城には應現する

百千俱胝の劫をへて

百千俱胝のしたをいだし

したごと無量のこゑをして

彌陀をほめんになをつきじ

大聖易往とときたまふ

淨土をうたがふ衆生をば

無眼人とぞなづけたる

無耳人とぞのべたまふ

無上々は眞解脱

眞解脱は如來なり

眞解脱にいたりてぞ

無愛無疑とはあらはるゝ

平等心をうるるときを

一子地となづけたり

一子地は佛性なり

安養にいたりてさとるべし

【八首】 華嚴經の意。

【九首】 大事因縁經の意。

【金光明の壽量品】 釋尊の壽命の無量なることを説くのにて、息災延命佛神擁護等のことは、後の四王天品以下に明す所なり佛の壽命即正法に依止することが、現世の福德の源なることを示すが斯經の主眼なりとの祖意と知らる。

【七雜】 火雜、水雜、羅刹雜、刀杖雜、鬼雜、枷鎖雜、冤賊雜、(法華經)。

【三首：一五首】 金光明經四王天品以下數品に明せる所を要約して作られし和讃。

如來すなはち涅槃なり

涅槃を佛性と名づけたり

凡地にしてはさとられず

安養にいたりて證すべし

信心よるこふそのひを

如來とひとしとときたまふ

大信心は佛性なり

佛性すなはち如來なり

衆生有礙のさとりにて

無礙の佛智をうたがへば

曾婆羅頻陀羅地獄にて

多劫衆苦にしづむなり

已上諸經意

現世利益和讃 十五首

阿彌陀如來化して

息災延命のためにとて

金光明の壽量品

ときおきたまへるみのりなり

山家の傳教大師は

國土人民をあはれみて

七難消滅の誦文には

南無阿彌陀佛をとなふべし

一切の功德にすぐれたる

南無阿彌陀佛をとなふれば

三世の重障みなながら

かならず轉じて輕微なり

南無阿彌陀佛をとなふれば

この世の利益きはもなし

流轉輪廻のつみきへて

定業中天のぞこりぬ

南無阿彌陀佛をとなふれば

【四大天王】帝釋
天の臣、多聞、持
天、增長、廣口の四
【五道】地獄、餓
鬼、畜生、人間、天
人の五。

梵王帝釋 歸敬す

諸天善神ことごとく

よるひるつねにまもるなり

南無阿彌陀佛をとなふれば

四大天王もろとも

よるひるつねにまもりつゝ

よろづの悪鬼をちかづけず

南無阿彌陀佛をとなふれば

堅牢地祇は尊敬す

かけとかたちのごとくにて

よるひるつねにまもるなり

南無阿彌陀佛をとなふれば

難陀跋難大龍等

無量の龍神尊敬し

よるひるつねにまもるなり

南無阿彌陀佛をとなふれば

炎魔法王尊敬す

五道の冥官みなともに

よるひるつねにまもるなり

南無阿彌陀佛をとなふれば

他化天の大魔王

釋迦牟尼佛のみまへにて

まもらんとこそちかひしか

天神地祇はことごとく

善鬼神となづけたり

これらの善神みなともに

念佛のひとをまもるなり

願力不思議の信心は

大菩提心なりければ

天地にみてる悪鬼神

みなことごとくおそるなり

南無阿彌陀佛をとなふれば

觀音勢至はもろともに
恆沙塵數の菩薩と

【以上等】高田本にはこの十四字あり。

【大勢至菩薩和讃】首楞嚴經に、二十五菩薩、釋尊の前にて、各自の圓通を述ぶる中、勢至菩薩は、同倫五十二菩薩とともに念佛三昧によりて無生忍を證りし念佛圓通を述ぶることを説く。

かげのごとくに身にそへり
一四無礙光佛のひかりには
 無數の阿彌陀ましゝて
 化佛おのゝことゝく
 眞實信心をまもるなり
一五南無阿彌陀佛をとなふれば
 十方無量の諸佛は
 百重千重圍遶して
 よろこびまもりたまふなり

已上現世利益
 以上彌陀和讃一百八首
 釋親鸞作

首楞嚴經によりて大勢至菩薩和讃したてまつる 八首

勢至念佛圓通して
 五十二菩薩もろともに
 すなはち座よりたゞしめて
 佛足頂禮せしめつゝ
 教主世尊にまふさしむ
 往昔恆河沙劫に
 佛世にいでたまへりき
 無量光とまふしけり
三十二の如來あひつぎて
 最後の如來をなづけてぞ
 超日月光とまふしける
四超日月光この身には
 念佛三昧おしへしむ
 十方の如來は衆生を
 一子のごとく憐念す
五子の母をおもふがごとくにて

衆生佛を憶すれば

現前當來とをからず

如來を拜見うたがはず

染香人のその身にて

香氣あるがごとくなり

これをすなはちなづけてぞ

香光莊嚴とまふすなる

われもと内地にありしとき

念佛の心もちてこそ

無生忍にはいりしかば

いまこの娑婆界にして

念佛のひとを攝取して

淨土に歸せしむるなり

大勢至菩薩の

大恩ふかく報すべし

已上大勢至菩薩

源空聖人御本地也

高僧和讚

△本和讃は眞宗に於て七祖と稱するは印度の龍樹天親の二論師、支那の曇鸞、道綽、善導の三釋家、及日本の源信、源空の七高僧の讃歌なり。

【本師】弟子より師を崇めて云ふ尊稱、末弟に對す。

【歡喜地】菩薩十地位中の初地、親鸞にありては正定聚の位に同じ。

【難行易行】佛教を修進上の見地より分てる二分法。

高僧和讃

高僧和讃

龍樹菩薩付釋文十首
愚禿親鸞作

本師龍樹菩薩は

智度十住異變婆等

つくりておほく西をほめ

すゝめて念佛せしめたり

南天竺に比丘あらん

龍樹菩薩となづくべし

有無の邪見を破すべしと

世尊はかれてときたまふ

本師龍樹菩薩は

大乘無上の法をとき

歡喜地を證し二ぞ

はとへに念佛すゝめける

龍樹居士世にいて

難行易行のふちおしへ

流轉輪廻のわれらをば

弘誓のふねにのせたまふ

本師龍樹菩薩の

おしへをつたへきかんひと

本願こゝろにかけしめて

つねに彌陀を稱すべし

不退のくらゐすみやかに

えんとおもはんひとほみな

恭敬の心に執持して

彌陀の名號稱すべし

生死の苦海ほとりなり

ひさしくしづめるわれらをば

彌陀弘誓のふねのみぞ

のせてかならずわたしける

智度論ハチドノルンにのたまはく

如來ニホレは無上法皇ムジョウホウワウなり

菩薩ボサツは法臣ホウシとしたまひて

尊重ソウジュウすべきは世尊セソウなり

一切菩薩イツセツボサツののたまはく

われら囚地イシヂにありしとき

無量劫ムリヤウキョウをへめぐりて

萬善諸行マンゼンシュウギョウを修せしかど

恩愛オンアイはなはだちがたく

生死シヤウジはなはだつきがたし

念佛三昧行ニホフミヤミヤウギョウじてぞ

罪障ツミショウを滅し度脱トクダツせし

已上龍樹菩薩イヂジョウリョウジュボサツ

釋迦シヤクチャの教法キョウホフおにけれど

天親菩薩テンシンボサツはねんごろに

煩惱ボンノウ成就ジュウジのわれらには

彌陀ミタの弘誓コウセツをすゝめしむ

安養淨土アンヤウジユウの莊嚴ソウエンは

唯佛與佛タラシクハニホレトシニホレの知見チケンなり

究竟クワウキョウせること虚空コウクウにして

廣大クワウダイにして邊際ヘンサイなし

本願力モンガンリキにあひぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德コトクの寶海ホウカイみちくして

煩惱ボンノウの濁水ダクスイへだてなし

如來淨華ニホレジユウの聖衆セイシュウは

正覺テイガクのはなより化生キヤウシヤウして

衆生シュウジヤウの願樂ガンラクことくく

すみやかにとく満足マンゼクす

天人テンニン不動フドウの聖衆セイシュウは

天親菩薩付釋文十首

【化生して】往生の二種の相狀の一方(胎生)に對する眞實華土の往生相。開ける蓮華中に生れて初より功德具足せり。

【心業】佛莊嚴功德八種の一。

【願作佛】佛に作らんと願ふ心。親鸞にありては願生心と同一。

【菩提心】覺を成ぜんとする心。

【他力】自力の主觀的なるに對し、願力による客觀的必然を意味す。はからひなき義。

【仙經】無病長壽を説く書。曇鸞は之を陶隱居より受けしといふ。

【四論】龍樹の作の中論、十二門論、大智度論とその弟子提婆の作の百論の四。

弘誓の智海より生ず

心業の功德清淨にて

虚空のごとく差別なし

天親論主は一心に

無礙光に歸命す

報土にいたるとのべたまふ

盡十方の無礙光佛

一心に歸命するをこそ

天親論主のみことには

願作佛心とのべたまへ

願作佛の心はこれ

度衆生のこゝろなり

度衆生の心はこれ

利他眞實の信心なり

信心すなはち一心なり

一心すなはち金剛心

金剛心は菩提心

この心すなはち他力なり

願土にいたればすみやかに

無上涅槃を證してぞ

すなはち大悲をおこすなり

これを廻向となづけたり

已上天親菩薩

曇鸞 和尙 付譯文 三十四首

本師曇鸞和尙は

菩提流支のをしへにて

仙經ながくやきすて

淨土にふかく歸せしめき

四論の講説さしおきて

本願他力をときたまひ

其縛くわくの凡衆ぼんしゆをみちびきて

涅槃ねはんのかどにぞいらしめし

三三 世俗せきよくの君子かうりん幸臨きんりんし

勅ちやくして淨土じやうどのゆへをとふ

十方じふぱう佛國ぶつこく淨土じやうどなり

なによりてか西さいにある

四四 鸞師らんしこたへてのたまはく

わが身みは智慧ちゑあさくして

いまだ地位ちゐにいらざれば

念力ねんりきひとしくおよばれず

五五 一切いっせつ道俗だうじやくもろともに

歸かへりすべきところぞさらになき

安樂あんらく勸歸くわんきのこゝろさし

鸞師らんしひとりさだめたり

六六 魏ゑいの主勅しゆくして并州へいしゆうの

大巖だいがん寺じにぞおはしける

やうやくおほりにのぞみては

汾州ぶんしゆうにうつりたまひにき

七七 魏ゑいの天子てんしはたふとみて

神鸞しんらんとこそ號がうせしか

おはせしところその名なをば

鸞らん公巖こうがんとぞなづけたる

八八 淨業じやうごふさかりにすゝめつゝ

玄忠げんしゆう寺じにぞおはしける

魏ゑいの興和四年こうわしねんに

蓬山ほうざん寺じにこそうつりしか

九九 六十ろくじゆ有七しちときいたり

淨土じやうどの往生わうじやうとげたまふ

そのとき靈瑞れいずい不思議ふしぎにて

一切いっせつ道俗だうじやく歸敬きけいしき

一〇〇 君子くんしんひとへにおもくして

勅宣ちやくせんくだしてたちまちに

汾州ぶんしゆう汾西ぶんせい秦陵しんりやうの

勝地しょうちに靈廟れいべうたてたまふ

【心行】淨土論に
説ける一心と五念
(行)。

【いつつめ】業力
と衆生多少と能力
と決定力と佛法
との五不思議

【往相廻相】淨土
へ(往)と淨土よ
り(還)との宗教的
要求の二相親鸞
は曇鸞の説をうけ
て、共に如來の廻
向による二相とす

二 天親菩薩のみことをも

鸞師ときのかたまはずば

他方廣大威徳の

心行いかでかさたらまし

二 本願圓頓一乘は

逆應攝すと信知して

煩惱菩提體無二と

すみやかにとくさとらしむ

二 二 二 二 二 二

いつつの不思議をとくなかに

佛法不思議にしくぞなき

佛法不思議といふことは

一 彌陀の廻向成就して

往相還相ふたつなり

これらの廻向によりてこそ

心行ともにえしむなれ

一 往相の廻向ととくことは

彌陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば

生死すなはち涅槃なり

一 六 還相の廻向ととくことは

利他教化の果をえしめ

すなはち諸有に廻入して

普賢の徳を修するなり

一 七 論主の一心ととけるをば

曇鸞大師のみことには

煩惱成就のわれらが

他力の信とのかたまふ

一 八 盡十方の無礙光は

無碍のやみをてらしつゝ

一念歡喜するひとを

かならず滅度にいたらしむ

一 九 無礙光の利益より

威徳廣大の信をえて

【逆誘】五逆と誑誘正法の略。

【三業】身、口、意三業の莊嚴。佛八種莊嚴功德中の三佛の相好光明(身)說法(口)、無分別智(意)を指す。

【無生の生】迷の生に非ざる因縁生即佛力を縁とし信心を因とせる往生の義。

【三三の品】九種の善惡の機類。

かならず煩惱のこほりとけすなはち菩提のみづとなる
罪障功德の體となる
こほりとみづのごとくにて
こほりおほきにみづおほし
さはりおほきに徳おほし
名號不思議の海水は
逆誘の屍骸もとどまらず
衆惡の萬川歸しぬれば
功德のうしほに一味なり
盡十方無礙光の
大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれば
智慧のうしほに一味なり

安樂佛國に生ずるは
畢竟成佛の道路にて
無上の方便なりければ

諸佛淨土をすゝめけり
諸佛三業莊嚴して
畢竟平等なることは
衆生虚誑の身口意を
治せんがためとのべたまふ
安樂佛國にいたるには
無上寶珠の名號と
眞實信心ひとつにて
無別道故ときたまふ
如來清淨本願の
無生の生なりければ
本則三々の品なれど
一一もかはることぞなき

無礙光如來の名號と
かの光明 智相とは
無明 長夜の闇を破し
衆生の志願をみてたまふ

二八五 不如實修行といへること

驚師釋してのたまはく

一者信心あつからず

若在若亡するゆへに

二九に 二者信心一ならず

決定なきゆへなれば

三者信心相續せず

餘念間故とのべたまふ

三〇さん 三信展轉相成す

行者こゝろをとゞむべし

信心あつからざるゆへに

決定の信なかりけり

三一に 決定の信なきゆへに

念相續せざるなり

念相續せざるゆへ

決定の信をえざるなり

三二に 決定の信をえざるゆへ

信心不淳とのべたまふ

如實修行相應は

信心ひとつにさだめたり

萬行諸善の小路より

本願一實の大道に

歸入しぬれば涅槃の

さとりはすなはちひらくなり

本師曇鸞大師をば

梁の天子蕭王は

おはせしかたにつねにむき

鸞菩薩とぞ禮しける

已上曇鸞和尚

道 純 禪 師 付 釋 文 七 首

本師道純禪師は

【單道】學者の道淨土門に對す。

【一形】一生涯の

【天心海】阿彌陀佛を指す

聖道萬行さしおきて
唯行淨土一門を
通入すべきみちととく

本師道綽大師は

涅槃の障をさしおきて
本願他方をたのみつゝ
五濁の群生すゝめしむ

末法五濁の衆生は

聖道の修行せしむとも
ひとりも語をまじとこそ

鸞師のをしへをうけつたへ

綽和尚はもろともに
在此起心立行は

此是自力とさだめたり

濁世の起惡造罪は
暴風驟雨にことならず

諸佛これらをあはれみて

すゝめて淨土に歸せしめり

一願をすくれども

佛前にこゝろをかけしめて

つねに念佛せしむれば

諸尊自然にのぞこりぬ

總令一生造惡の

衆生引續のためにとて

稱我名字と願じつゝ

若く不生者とちかひたり

已上道綽大師

善導大師 付釋文 二十六首

天心海より化してこそ

善導和尚とおはしけれ

【功德藏】 名號のこと。

【いつつのさはり】 五種の障礙。梵天王と帝釋と魔王と轉輪聖王と佛身との五種の果報を受くることを得ざるを云ふ。

【要門】 未だ本願に信難せざる者を攝して歸入せしむるかなめの門。

【正體】 淨土往生の正行と然らざるを兼行

【助正】 正業、助業の略。

【貪二河】 貪欲、瞋恚を水火二河に墮へ、願生心をその中間に見ゆる白道に墮へ、煩惱の衆生が願生心を生じて、獲信する狀を表現せる譬。

未代濁世のために

十方諸佛に證をこふ

二 概々に善導いでたまひ

法照少廣としめしつゝ

功德藏をひらきてぞ

諸佛の本意とげたまふ

三 彌陀の名願によらざれば

百千萬劫すぐれども

いつのさはりはなれねば

女身をいかで轉すべき

四 釋迦は要門ひらきつゝ

定散諸機をこしらへて

正雜二行方便し

ひとへに專修をすゝめしむ

五 助正ならべて修するをば

すなはち雜修となづけたり

一心をえざるひとなれば

佛恩報するこゝろなし

佛號むねと修すれども

現世をいのる行者をば

これも雜修となづけてぞ

千中無一ときらはるゝ

こゝろはひとつにあらねども

雜行雜修これにたり

淨土の行にあらぬをば

ひとへに雜行となづけたり

八 善導大師證をこひ

定散二心をひるがへし

貪瞋二河の譬喩をとき

弘願の信心守護せしむ

九 經道滅盡ときいたり

如来出世の本意なる

弘願眞宗にあひぬれば

凡夫念じてさとるなり

【三品の懺悔】上品は眼、身より血を流す、中品は眼より血を、身より熱汗を流す、下品は身熱し眼より涙を流す。

【宗師】 善導和尙

【三信】 至心、信樂、欲生の三、信心に具はる意味の三。

佛法力の不思議には

諸邪業繁さはらねば

彌陀の本弘誓願を

増上轉となづけたり

願力成就の報土には

自力の心行いたらねば

大小理人みなながら

如來の弘誓に乗ずなり

煩惱具足と信知して

本願力に乗ずれば

すなはち穢身すてはて

法性常樂證せしむ

釋迦彌陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

發起せしめたまひけり

眞心徹到するひとは

金剛心なりければ

三品の懺悔するひとと

ひとしと宗師はのたまへり

五濁惡世のわれらこそ

金剛の信心ばかりにて

ながく生死をすてはて

自然の淨土にいたるなれ

金剛堅固の信心の

さだまるときをまちえてぞ

彌陀の心光攝護して

ながく生死をへだてける

眞實信心えざるをば

一心かけぬとおしへたり

一心かけたるひとほみな

三信具せずとおもふべし

利他の信樂うるひとは

願に相應するゆへに

【一念無疑】一念といふは信心をうるときはきはまりをあらはすことば無疑といふは信心の義。

【道俗】道は比丘比丘尼、俗は佛法を信じ行する男女なり。

【娑婆】Saha 會。Saha 忍上の二義を持つ。佛(釋迦)と衆生と雜り會する所、及苦惱を忍受する所の意。

教と佛語にしたがへば
外の雜縁さらになし

眞宗念佛き、えつゝ、

一念無疑なるをこそ

希有最勝人とほめ

正念をうとはさだめたれ

本願相應せざるべし

雜縁きたりみだるなり

信心亂失するをこそ

正念うすとはのべたまへ

信は願より生ずれば

念佛成佛自然なり

自然はすなはち報土なり

證大涅槃うたがはず

五濁増のときいたり

疑謗のともがらおほくして

道俗ともにあひきらひ

修するをみてはあだをなす

本願毀滅のともがらは

生盲闍提となづけたり

大地微塵劫をへて

ながく三塗にしづむなり

西路を指授せしかども

自障障他せしほどに

曠劫已來もいたづらに

わなしくこそはすぎにけれ

弘誓のちからをかえらすば

いづれのと看には娑婆をいでん

佛恩ふかくおもひつゝ

つねに彌陀を念すべし

娑婆永劫の苦をすてゝ

淨土無爲を期すること

本師釋迦のちからなり

長時に慈恩を報すべし

上言導師

源信大帥付釋文十首

源信和尚のたまはく

われこれ故佛とあらはれて

住持すににつきぬれば

本上にかへるとしめしけり

本願源信ねんごろに

一代仰教のそのなかに

念佛一門ひらきてぞ

濁世末代おしへける

靈山聽衆とおはしける

源信僧都のおしへには

報化二王をおしへてぞ

專雜の得失さだめたる

本願源信和尚は

無感神佛の釋により

胎息をひらきてぞ

慢尊をばあらはせる

專修のひとをほむるには

千無一とまじへたり

釋修のひとをきらふには

萬不一生とのべたまふ

報の淨土の往生は

おほからずとあらはせる

化土にのみまゝ衆生をば

すくなからずとおしへたり

男女貴賤ことごとく

龍陀の名號稱するに

行住摩鼠もまらばれず

時處諸經もさはりなし

煩惱にまなこさへられて

【故佛】 曾て三月
の壽終を現後、生
處を告ぐることを
約す。時に、源信
僧一中略、源信、白
雲に乗じて吉けて
曰く、我が是れ故
佛、靈山の總衆な
り、住縁にまさき
て本上に登ると。
【專修】 專修は上
生に、律修は化土
に生る。專修は歸
院の名譽を專念す
ること、律修は正
行修行の因縁。
【正行中助】 正行
の中間、現世
を願ふ念佛、三尊
を意味す。
【源信】 西方去、
此刹言提、十二尊
那由他有、懶慢界、
乃至發意衆生欲
生、阿彌陀佛、名
深著、懶慢、同上、
不從、懶慢、同上、
彌陀佛國、乃至何
以故皆由懶慢、決
心不守、固、律修
の者は執心不守、固
の故に懶慢界に止
ると。

攝取の光明みされども
大悲ものうきことなくて

つねにあが身をてらすなり

彌陀の報土をねがふひと

外儀のすがたはことなりと

本願名號信受して

窮惑にあするゝことなかれ

極悪深重の衆生は

他の方便さらになし

ひとへに彌陀を稱してぞ

浄土にむまるとのべたまふ

已上源信大師

源空聖人付釋文二十首

本願源空世にいで

弘願の乗ひろめつゝ

日本一州ごとくく

浄土の機縁あらはれぬ

智慧光のもからより

本願源空あらはれて

浄土真宗をひらきつゝ

選擇本願のべたまふ

善導願信すゝむとも

本願源空ひろめずは

片指濁世のともがらは

いかでか真宗をさとらまし

廣劫多生のあひだにも

出離の機縁しらざりき

本願源空いまさすは

このたびむなしくすぎなまし

源空三五のよはひにて
無常のことはりさとりつゝ

【強縁】 本願のこと

【浄土真宗】 浄土に往生する爲に、宗として信すべき眞實道。
【選擇本願】 本願一乗の宗教。

【一心金剛の別名】
圓頓戒の別名。

【禪定博達】 禪定は貴人の出家者。博達は關白の唐名藤原兼實公を指す

【承久の妻上法皇】 持名院(安徳天皇の弟、出家者)の故ありて、承久に至り法皇となり給ふ

聖徳の素懐をあらはして
書表のみにそいらしめし

源空誓行の至道には

聖道宗の師主も

みなもろとも歸せしめて

一心金剛の師とす

源空存在せしときに

金色の光明はなたしむ

禪定博達まのあたり

拜見せしめたまひけり

本師源空の本境をば

世俗のひとごとあひつたへ

緋和尙と稱せしめ

あるひは善神としめしけり

源空勢至と示現し

あるひは彌陀と顯現す

上皇群臣尊敬し

皇太后欽仰す
承久の妻上法皇は

本師源空を歸せしき

聖門歸依みなともに

ひとしく眞宗に悟入せり

諸佛方便ときいなり

源空ひじりとしめしつゝ

親上の信心おしへてぞ

涅槃をかどをばひらきける

眞の知識にあふことは

かたきがなかになをかたし

沈徳歸依のきはなきは

疑情のさはりにしくぞなき

源空 光明はなかしめ

門徒につねにみせしめき

賢哲愚夫もえらばれず

棄貴鄙賤もへきてなし

【往生みたび】一我天竺にては華開僧に交り大唐にては善導となり、今日本に生れて云云一と自ら語られしこと傳に見ゆ

【頭陀】清淨に佛道修行すること

【已上等】高田本には以下の結文を置く。但し五濁惡世の一已下、全て之を缺く

命終その期ちかづきて

本師源空のたまはく

往生みたびになりぬるに

このたびことにとげやすし

源空みづからのたまはく

靈山會上にありしとき

聲聞僧にまじはりて

頭陀を行じて化度せしむ

粟散片州に誕生して

念佛宗をひろめしむ

業生化度のためにとて

この土にたびノきたらしむ

阿彌陀如來化してこそ

本師源空としめしけれ

化縁すでにつきぬれば

淨土にかへりたまひにき

本師源空のおはりにば

光明紫雲のごとくなり

善業哀憐難亮にて

異香みぎりに映芳す

道俗男女預參し

卿上雲容群集す

頭北面西右脇にて

如來涅槃の氣をまもる

本師源空命終時

建曆第二壬申歲

初春下旬第五日

淨土に還歸せしめけり

已上源空聖人

已上七高僧和讃

一百十七首

已上高僧和讃一百十七首

彌陀和讃高僧和讃總論二百二十五首

寶治第二戊申歲初月下旬

第一日釋觀覽之書之畢

見寫人者必可唱南無阿彌陀佛

五濁惡世の衆生の

選擇本願信すれば

不可稱不可說不可思議の

功德は行者の身にみこり

天竺 龍樹菩薩
天親菩薩

震旦 曇鸞和尚
道綽禪師
善導禪師

和朝 源信和尚
源空聖人

聖德太子 敏達天皇元年
正月一日誕生

當佛滅後一千五百二十一年也

南無阿彌陀佛をとけるには

衆善海水のごとくなり

かの清浄の善身にえたり

ひとしく衆生に廻向せん

正像末和讚

【正像末淨土和讃】本和讃は、正像末淨土和讃、疑德奉過、皇太子聖德太子、善光寺和讃等、諸編を以て成る。正像末淨土和讃、開章に揚げられし夢告を縁として、本願の教法は時機に相應せる法なることを述べられしもの。

【一首】以下の一首は末法の時機についてその悲歎を述べらる。【有情】衆生（舊譯）有情（新譯）。譯語の異。

【龍宮】佛法隱没せんとする時、龍王經卷を護持すとす。

【數萬歳】入壽八萬四千歳より百年に命一歳を減じ、次第に減じて遂に入壽十歳に至る云の經説。

正像末和讃

康元二歳丁二月九日夜寅時夢告云

彌陀の本願信すべし

本願信するとはみな

攝取不捨の利益にて

無上覺をばさとるなり

正像末淨土和讃

愚禿善信集

釋迦如來かくれましゝて

二千餘年になりたまふ

正像の二時はおほりにき

如來の遺弟悲泣せよ

末法五濁の有情の

行 かなはぬときなれば

釋迦の遺法にことゝく

龍宮にいたりたまひにき

正像末の二時には

彌陀の本願ひろまれり

像季末法のこの世には

諸善龍宮にいたりたまふ

大集經にときたまふ

この世は第五の五百年

闍靜堅固なるゆへに

白法隱滞したまへり

數萬歳の有情も

果報そややくおとろへて

二萬歳にいたりては

五濁惡世の名をえたり

【身小】八萬四千歳の時には、身長八丈なるも十歳の時に至りては、身長一尺になると。

【横に】無理、非理をいふ。

【九十五種】釋尊在世に於ける外道の數。

【頓教】自力にて漸次に證悟する漸教に對し、頓速に證悟する教。親鸞は釋迦一代の教を頓教（超）漸教（出）に分け、その各各に横、豎を立て所謂二雙四重の列を成立す。

六二五
劫濁のときうつるには

有情やうやく身小なり

五濁惡邪まさるゆへ

毒對惡龍のごとくなり

七四五
無明煩惱しげくして

塵敷のごとく遍滿す

愛憎違順することは

高峰岳山にことならず

八〇三
有情の邪見熾盛にて

叢林棘刺のごとくなり

念佛の信者を疑謗して

破壞噴毒さかりなり

九〇一
命濁 中天利那にて

依正二報滅亡し

背正歸邪まさるゆへ

横にあだをぞおこしける

一〇三
末法第五の五百年

この世の一切有情の

知來の非難を信ぜずば

出離その期はなかるべし

二〇六
九十五種世をけがす

唯佛一道きよくます

菩提に出到してのみぞ

火宅の利益は自然なる

二〇七
五濁の時穢いたりては

道俗ともにあらそひて

念佛信するひとをみて

疑謗破壊さかりなり

二〇八
菩提をうまじきとはみな

專修念佛にあだをなす

頓教毀滅のしるしには

生死の大海きはもなし

一四
正法の時機とおもへども

底下の凡愚となれる身は

【一七首】 以下三
○首迄は、時機を
悲歎する者に彌陀
の悲願は相應した
る教なる意を述べ
られしもの。

【淨土の大菩提心】
彌陀智願の廻向に
よる眞實信心を聖
道の菩提心に對し
て淨土の大菩提心
といふ。

【願作佛心】 佛に
ならんと願ふ心は
親鸞にありては願
生心と同一。

清淨眞實のこゝろなし

發菩提心いかゞせん

自力聖道の菩提心

こゝろもことばもあよばれず

常没流轉の凡愚は

いかでか發起せしむべき

三恆河沙の諸佛の

出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども

自力かなはで流轉せり

像末五濁の世となりて

釋迦の遺教かくれしむ

彌陀の悲願ひろまりて

念仲往生さかりなり

超世無上に攝取し

選擇五劫思惟して

光明壽命の誓願を

大悲の本としたまへり

淨土の大菩提心は

願作佛心をすゝめしむ

すなはち願作佛心を

度衆生心となづけたり

度衆生心といふことは

彌陀智願の廻向なり

廻向の信樂うるひとは

大般涅槃をさとりなり

如來の廻向に歸入して

願作佛心をうるひとは

自力の廻向をすてはてゝ

利益有情はきはもなし

彌陀の智願海水に

他力の信水いりぬれば

眞實報土のならひにて

煩惱菩提一味なり

【二種の廻向】往相と還相との二種即如来の廻向に具する往生人の二相

【等正覺】親覺にありては正定聚に同じ。

【憶念の心】一たび發りし信心をたへず失はず相續する心。

【彌勒菩薩】現に兜率天に住し、五十六億七千萬年を過ぎて此世に出て釋迦佛に次いで成道し、前佛の化に漏れたる衆生を度脱せしむと傳へらる。

【三一首】以下四十四首迄は、彌陀釋迦の本懐を證す

如來二種の廻向を

ふかく信するひとはみな等正覺にいたるゆへ

憶念の心はたへぬなり

彌陀智願の廻向の

信樂まことにうるひとは

攝取不捨の利益ゆへ

等正覺にいたるなり

五十六億七千萬

彌勒菩薩はとしをへん

まことの信心うるひとは

このたびさとりをひらくべし

念佛往生の願により

等正覺にいたるひと

すなはち彌勒におなじくて

大般涅槃をさとるべし

眞實信心うるゆへに

すなはち定聚にいりぬれば

補處の彌勒におなじくて

無上覺をさとるなり

像法のときの智人も

自力の諸教をさしおきて

時機相應の法なれば

念佛門にぞいらたまふ

彌陀の尊號となへつゝ

信樂まことにうるひとは

憶念の心つねにして

佛恩報ずるおもひあり

五濁惡世の有情の

選擇本願信すれば

不可稱不可説不可思議の

功德は行者の身にみたり

無礙光佛のみことには

未來の有情利せんとして

【燈炬】 彌陀の御誓をともしびに喻へたるなり。

【船筏】 本願を船いかに喻ふ。

【作願】 發願の意

【大悲心】 衆生の苦を抜かんと欲する心。

【不廻向】 念佛は如来廻向の行なるが故に、衆生よりすれば不廻向なり

大勢至菩薩に

智慧の念佛さづけしむ

濁世の有情をあはれみて

勢至念佛すゝめしむ

信心のひとを攝取して

淨土に歸入せしめけり

釋迦彌陀の慈悲よりぞ

願作佛心はえしめたる

信心の智慧にいりてこそ

佛恩報する身とはなれ

智慧の念佛うることは

法藏願方のなせるなり

信心の智慧なかりせば

いかでか涅槃をさとらまし

無明長夜の燈炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしなげかされ

願力無窮にましませば

罪業深重もおもからず

佛智無邊にましませば

散亂放逸もすてられず

如来の作願をたづぬれば

苦惱の有情をすてずして

廻向を首としたまひて

大悲心をば成就せり

眞實信心の稱名は

彌陀廻向の法なれば

不廻向となづけてぞ

自力の稱念きはるゝ

彌陀智願の廣海に

凡夫善惡の心水も

歸入しぬればすなはちに

大悲心とぞ轉ずなる

造惡つくろふあくこのむねが弟子てしの

邪見じやけん放逸はういつさかりにて

末世まうせにわが法ほふ毀くわいすべしと

蓮華れんげ面經めんきやうにときたまふ

念佛ねんぶつ誹謗ひぼうの有情うじやうは

阿鼻あび地獄ぢよくに墮だ在ざいして

八萬劫はつまんげつ中大苦惱ちゆうだいくなう

ひまなくうくとぞときたまふ

眞實しんじつ報土ほうどの正因せいじんを

二尊にそんのみことにたまはりて

正定せいぢやう聚じゆに住すますれば

かならず滅度めつたどをさとるなり

十方じふじやう無量むりやうの諸佛しよぶつの

證誠じやうじやう護念ごねんのみことにて

自力じりきの大菩提だいぼつだいじん心の

かなはぬほどはしりぬべし

眞實しんじつ信心しんくうることは

末法まうぽふ濁世じやくせにまれなりと

恆沙じやうさの諸佛しよぶつの證誠じやうじやうに

えがたきほどをあらはせり

往相むかうじやう還相えんじやうの廻向くわいじやうに

まうあはぬ身みとなりにせば

流轉りゅうてん輪廻りんゑもきはもなし

苦海くかいの沈淪ちんりんいかゞせん

佛智ぶつち不思議ふしぎを信しんずれば

正定せいぢやう聚じゆにこそ住すましけれ

化生けしやうのひとは智慧ちゑすぐれ

無上むじやう覺かくをぞさとりける

不思議ふしぎの佛智ぶつちを信しんずるを

報土ほうどの因いんとしたまへり

信心しんくの正因せいじんうることは

かたきがなかになをかたし

無始むじ流轉りゅうてんの苦くをすてゝ

無上むじやう涅槃ねはんを期ごすること

【二尊】彌陀と釋迦

【證誠護念】念佛往生の誠なることを證明し、行者を護念すと。

【四五首】以下は教法に廻へるを慶びて。

【化土】 自力にて往生する人の淨土

【廻向】 本願の名號をもつて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。

【義】 前の義は、行者のはからひ。後の義は佛と佛との御はからひ。如来の誓願には義なきを義とす。他力を顯す。

【三朝】 印度、支那日本。

如来二種の廻向の

恩徳まことに謝しがたし

報士の信者はおほからず

化士の行者はかすおほし

自力の菩提かなはねば

久遠劫より流轉せり

南無阿彌陀佛の廻向の

恩徳廣大不思議にて

往相廻向の利益には

還相廻向に廻入せり

往相廻向の大慈より

還相廻向の大慈をう

如来の廻向なかりせば

淨土の菩提はいかゞせん

彌陀觀音大勢至

大願のふねに乗じてぞ

生死のうみにうかみつゝ

有情をよばふてのせたまふ

彌陀大悲の誓願を

ふかく信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく

南無阿彌陀佛をとなふべし

聖道門のひとはみな

自力の心をむねとして

他力不思議にいりぬれば

義なきを義とすと信知せり

釋迦の教法ましませど

修すべき有情のなきゆへに

さとりうるもの末法に

一人もあらじとときたまふ

三朝淨土の大師等

哀愍攝受したまひて

眞實信心すゝめしめ

定聚のくらゐにいれしめよ

【諸智】佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智の五をいふ。

【罪福】善因善果惡因惡果の理を信ず。

【善本】如來の尊號、念佛のこと。

【解慢】懈慢界。懈意慢情にして執止る淨土。

【三寶】歸依の對象たる佛と法と僧

他力の信心五七うるひとを

うやまひおほきによるこべば

すなはちわが親友六七ぞと

教主世尊六八はほめたまふ

如來大悲の恩徳五八は

身を粉にしても報六九すべし

師主知識七〇の恩徳も

ほねをくだきても謝七一すべし

已上正像末法和讃 五十八首

不了佛智七二のしるしには

如來の諸智七三を疑惑七四して

罪福信七五じ善本を

たのめば邊地七六にとまるなり

佛智七七の不思議七八をうたがひて

自力七九の稱念八〇このむゆへ

邊地懈慢八一にとどまりて

佛恩報八二するころなし

罪福信八三する行者は

佛智八四の不思議八五をうたがひて

疑城胎宮八六にとどまれば

三寶八七にはなれたてまつる

佛智八八疑惑八九のつみにより

懈慢邊地九〇にとまるなり

疑惑九一のつみのふかきゆへ

年歲劫數九二をふるととく

轉輪皇九三の王子の

皇九四に つみをうるゆへに

金鎖九五をもちてつなきつゝ

牢獄九六にいるがごとくなり

自力九七稱名九八のひとはみな

如來九九の本願一〇〇信一〇一せねば

うたがふつみのふかきゆへ

七寶の獄にぞいましむる
信心のひとにおとらじと

疑心自力の行者も

如來大悲の恩をしり

稱名念佛はげむべし

自力諸善のひとはみな

佛智の不思議をうたがへば

自業自得の道理にて

七寶の獄にぞいりにける

佛智不思議をうたがひて

善本徳本たのむひと

邊地懈慢にむまるれば

大慈大悲はえざりけり

本願疑惑の行者には

含花未出のひともあり

或生邊地ときらひつゝ

或墮宮胎とすてらるゝ

【含花未出】花に
含まれて未だ出で
ず。自力往生の人
は花につつまれて
極樂の莊嚴を見る
能はずと。

如來の諸智を疑惑して

信ぜずながらなをもまた

罪福ふかく信ぜしめ

善本修習すぐれたり

佛智を疑惑するゆへに

胎生のものは智慧もなし

胎宮にかならずむまるゝを

牢獄にいとたとへたり

七寶の宮殿にむまれては

五百歳のとしをへて

三寶を見聞せざるゆへ

有情利益はさらになし

邊地七寶の宮殿に

五百歳までいせずして

みづから過咎をなさしめて

もろくの厄をうくるなり

罪福ふかく信じつゝ

善本修習するひとは

疑心の善人なるゆへに

方便化土にとまるなり

彌陀の本願信ぜねば

疑惑を帯してむまれつゝ

はなはすなはちひらけねば

胎に處するにたとへたり

とくに慈氏菩薩の

世尊にまふしたまひけり

何因何縁いかなれば

胎生化生となづけたる

如來慈氏にのたまはく

疑惑の心もちながら

善本修するをたのみにて

胎生邊地にとゞまれり

佛智疑惑のつみゆへに

五百歳まで牢獄に

かたくいましめおはします

これを胎生とときたまふ

佛智不思議をうたがひて

罪福信する有情は

宮殿にかならずむまるれば

胎生のものときたまふ

自力の心をむねとして

不思議の佛智をたのまねば

胎宮にむまれて五百歳

三寶の慈悲にはなれたり

佛智の不思議を疑惑して

罪福信じ善本を

修して淨土をねがふをば

胎生といふときたまふ

佛智うたがふつみふかし

この心おもひしるならば

くゆるころをむねとして

【化生】眞實報土
に往生するを化生
といふ。

佛智の不思議をたのみべし
已上二十三首佛不思議の彌陀の御ちかひ
をうたがふつみとがをしらせんとあらは
せるなり

皇太子聖德奉讚

愚禿善信作

【皇太子聖德奉讚】聖德太子和讚には別(高田本)に七十五首(高田本)百十五首の二種あり。共に傳記を主とせる讚なり。今の十一首は教化の徳を主とせる本讚なり。
【聖德太子】我國に於ける大乘佛敎最初の興隆者。
【補處の彌勒】彌勒は釋迦佛に嗣いで佛となり前佛の位處を補ふと云はる。
【多母】父、阿摩は母。

佛智不思議の誓願の
聖德皇のめぐみにて
正定聚に歸入して
補處の彌勒のごとくなり
救世觀音大菩薩
聖德皇と示現して
多々のごとくすてずして

阿摩のごとくにそひたまふ
無始よりこのかたこの世まで
聖德皇のあはれみに
多々のごとくにそひたまひ
阿摩のごとくにおはします
聖德皇のあはれみて
佛智不思議の誓願に
すゝめいれしめたまひてぞ
正定聚の身となれる
他力の信をえんひとは
佛恩報せんためにとて
如來二種の廻向を
十方にひとしくひろむべし
大慈救世聖德皇
父のごとくにおはします
大悲救世觀音
母のごとくにおはします

久遠劫よりこの世まで

あはれみましまするしには

佛智不思議につけしめて

善惡淨穢もなかりけり

和國の教主聖德皇

廣大恩徳謝しがたし

一心に歸命したてまつり

奉讀不退ならしめし

上宮皇子方便し

和國の有情をあはれみて

如來の悲願を弘宣せり

慶喜奉讀せしむべし

多生曠劫この世まで

あはれみかぶれるこの身なり

一心歸命たへずして

奉讀ひまなくこのむべし

聖德皇のおあはれみに

諸指養育たへずして

如來二種の對向に

すゝめいれしむおほします

已上聖德奉讀 十一首

○この百女子聖德本願高田すになし

愚 禿 悲 歎 迷 悵

淨土眞宗に歸すれとも

眞實の心はありがたし

虚假不實のわが身にて

清淨の心もさらになし

外儀のすがたはひとごと

賢善精進現せしむ

貪瞋邪偽おほきゆへ

奸詐もゝはし身にみてり

【上宮皇子】 皇居

池邊雙槻宮の南の

上宮に住せられし

ゆへ上宮皇子とも

申上ぐ。

【二首】 以下の六

首は機を悲しみ歎

きて如來の本願の

尊さを述べ。

【外儀】 外に顯は

るる身の威儀。

【七首】以下は末世の風を敘しその弊を悲しみて。

【提婆五邪】提婆は多が釋尊の教團を破らんが爲、その教團の戒律に反對して標榜せる五つの戒律。一、著納衣、二、自乞食、三、一食、四、露路住、五、斷魚肉

【外道等】佛教の内道に對し佛教以外の思想を外道といふ。梵士は婆羅門教の年少の修道者、尼乾志(子)は尼乾陀派の徒。後世のジャイナ教なり。

惡性三さらにやめがたし

こゝろは蛇蝎のごとくなり

修善も難毒なるゆへに

虚假の行とぞなづけたる

無慚無愧四のこの身に

まことのこゝろはなけれども

彌陀の廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまふ

小慈小悲五もなき身にて

有情利益はおもふまじ

如來の彌船いまさずば

苦海をいかでかわたるべき

蛇蝎六奸詐のこゝろにて

自力修善はかなふまじ

如來の廻向をたのまでは

無慚無愧七にてはてぞせん

五濁増七のしるしには

この世の道俗八ことごとく

外儀は佛教のすがたにて

内心外道を歸敬せり

かなしきかなや道俗の

良時吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつゝ

卜占祭祀つとめとす

僧ぞ法師のその御名は

たうときことときゝしかど

提婆五邪の法九にて

いやしきものになづけたり

外道梵士一〇尼乾志に

こゝろはかはらぬものとして

如來の法衣をつねにきて

一切鬼神をあがむめり

かなしきかなやこのごろの

和國一一の道俗みなともに

【南都北嶺】南都
は奈良東大寺興福
寺、北嶺は比叡山
延暦寺園城寺等。

【もてなす】とり
つくろふ修飾の義

佛教の威儀をもととして
天地の鬼神を尊敬す

○已下高田末になし

五濁邪惡のしるしには

僧ぞ法師といふ御名を

奴婢僕使になづけてぞ

いやしきものとさだめたる

無戒名字の比丘なれど

末法濁世の世となりて

舍利弗目連にひとしくて

供養恭敬をすゝめしむ

罪業もとよりかたちなし

妄想顛倒のなせるなり

心性もとよりきよけれど

この世はまことのひとぞなき

法惡世のかなしみは

南都北嶺の佛法者の

輿かく僧達力者法師

高位をもてなす名としたり

佛法あなづるしるしには

比丘比丘尼を奴婢として

法師僧徒のたふとさも

僕従もの名としたり

已上十六首これは愚禿がかなしみな

げきにして述懐としたりこの世の本

寺本山のいみじき僧とまふすも法師と

まふすもうきことなり

釋親鸞書之

善光寺の如來の

【なにはのうら】
欽明天皇十三年に
百濟國より佛像經
卷を獻じたること
をいふ。

【守屋】蘇我稻目
馬子の父子が佛像
を崇めたるに反對
し、當時流行の熱
病を佛像毀崇の罪
に歸して佛像と佛
殿を燒きし人。

【ほとをりけ】熱
氣を意味す。如來
の名に呼ばずして
熱氣の意味にて
呼ぶ。

われらをあはれみまし／＼て

なにはのうらにきたります

御名みなをもしらぬ守屋もりやにて

一 そのときほとをりけとまふしける

疫癘えきれんあるひはこのゆへと

守屋もりやがたぐひはみなともに

ほとをりけとぞまふしける

二 やすくすゝめんためにとて

ほとけと守屋もりやがまふすゆへ

ときの外道げだうみなともに

如來にらをほとけとさだめたり

三 この世よの佛法ぶつぽうのひとはみな

守屋もりやがことばをもととして

ほとけとまふすをたのみにて

僧そうぞ法師ほふしはいやしめり

四 弓削ゆきぞの守屋もりやの大連おほむらじ

邪見よみけきはまりなきゆへに

よろづのものをすゝめんと
やすくほとけとまふしけり

親鸞おんらん八十八歳御筆

獲まやくの字じは、因位いんみのときうるを獲まやくといふ、得とくの字じは果位くわいのときにいたりてうることを得とくといふなり、名みの字じは因位いんみのときの名を名みといふ、號ごうの字じは果位くわいのときの名を號ごうといふ、自然じねんといふは、自じはおのづからといふ、行者ぎやうじやのはからひにあらすしからしむといふことばなり。然しかといふはしからしむといふことば、行者ぎやうじやのはからひにあらす、如來にらのちかひにてあるがゆへに、法爾ほふにといふは、如來にらの御おんちかひなるがゆへにしか

【總結】この文を自然法附章と稱す獲得名號自然法附を釋して往生の因果を顯す。【御筆】この二字後人の加ふるところ。

らしむるを法爾といふ。この法爾は御ちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆへに他力には義なきを義とすとしるべきなり。

自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひてむかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞときゝてさふらふ。ちかひのやうは無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまふすはかたちもなくまします、かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましますと

しめすときは無上涅槃とはまふさず、かたちもましまさぬやうをしらせんとてはじめに彌陀佛とぞきゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことはつねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことはなを義のあるべし。

これは佛智の不思議にてあるなり。よしあしの文字をもしらぬひとはみな

まことのこゝろなりけるを善惡の字しりがほは

おほそらごとのかたちなり

是非しらす邪正もわかぬこのみなり

小慈小悲もなけれど

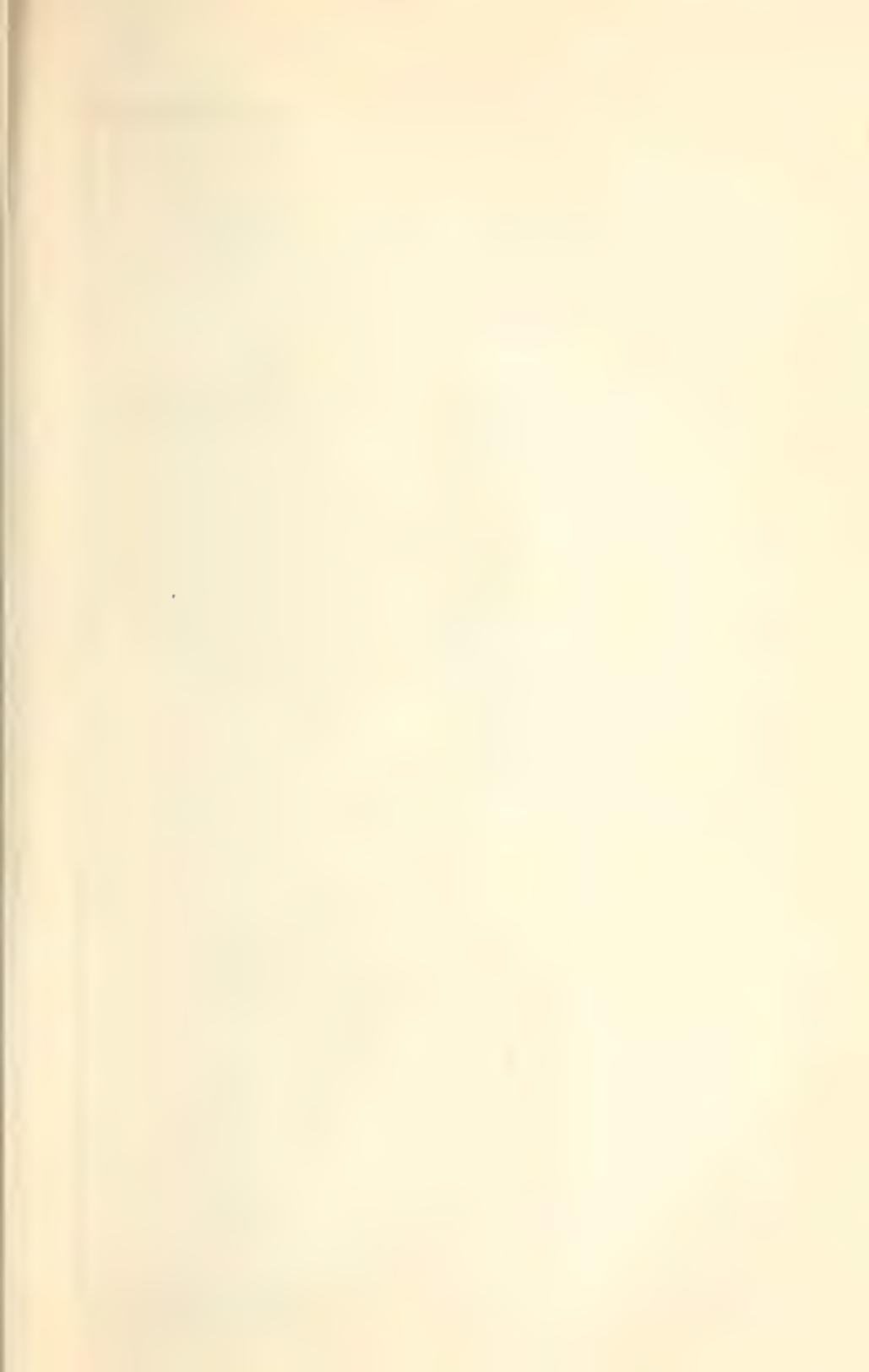
名利に人師をこのむなり

右斯三帖和讚并正信像
四帖一部者末代爲興
際板木開之者也而已

文明五年 己 三月日

在
判

尊號眞像銘文



尊號眞像銘文 本

【】當書二卷親筆の撰なり。本尊たる九字十字の尊號に經論の要文を抄出して銘と爲し、七祖先徳の眞像に其釋文を以て銘と爲せるを、其等の銘に就き註解を加へしものが本書なり。廣略二本の眞筆有る中、今は高田專修寺廣本に依る。

【一】 魏僧伽羅譯二卷本。此文は斯經中、法藏菩薩の誓ふ四十八願中の第十八願文なり。【邪見】 不正なる見解。

【名號】 南無阿彌陀佛。

「大無量壽經」言、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法。文

「大無量壽經」といふは如來の四十八願をときたまへる經也。設我得佛」といふは、もしわれ佛をえたらむときといふ御ことばなり。「十方衆生」といふは、十方のよろづの衆生といふ也。「至心信樂」といふは、至心は眞實とまふすなり、眞實とまふすは如來の御ちかひの眞實なるを至心とまふすなり、煩惱具足の衆生はもとより眞實の心なし、清淨の心なし、濁惡邪見のゆへなり。「信樂」といふは如來の本願眞實にましますをふたごゝろなく、ふかく信じてうたがはざれば信樂とまふす也。この至心信樂は、すなはち十方の衆生をして、わが眞實なる誓願を信樂すべしとすゝめたまへる御ちかひの至心信樂也、凡夫自力のこゝろにはあらず、欲生我國」といふは、他力の至心信樂のこゝろをもて、安樂淨土にむまれむとおもへとも也。「乃至十念」とまふすは、如來のちかひの名號をとならむことをすゝめたまふに、徧數のさだまりなきほどをあらはし、時節をさだめざることを衆生にしらせむとおぼしめして、乃至のみことを十念のみにそえてちかひたまへるなり。如來より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の稱念をまつべからず。たゞ

【攝取不捨】 觀無量壽經中、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の文。

【唯信鈔】 親鸞の信友、聖德法印の著にして承久三年の選述。親鸞は之に依り唯信鈔文意を作る。

【二】 大無量壽經下卷、東方偈中に

【彌陀】 阿彌陀佛の略

【安樂淨利】 眞實淨土を意味す

如來の至心信樂をふかくたのむべしと也。この眞實信心をえむとき、攝取不捨の心光にいぬれば、正定聚のくらゐにさだまるとみえたり。若不生者不取正覺」といふは、「若不生者」はもしむまれずばといふみこと也。「不取正覺」は、佛にならじとちかひたまへるみのり也。このこゝろはすなわち至心信樂をえたるひと、わが淨土にもしむまれずば佛にならじとちかひたまへる御のり也。この本願のやうは唯信鈔によく／＼みえたり。唯信とまふすは、すなはちこの眞實信樂をひとすちにとるこゝろをまふす也。「唯除五逆、誹謗正法」といふは、「唯除」といふはたゞのぞくといふことば也。「五逆」のつみびとをきらい、「誹謗」のおもきとがをしらせむと也。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず、往生すべしとしらせむとなり。

又言、其佛本願力、聞名欲往生、皆悉到彼國、自致不退轉。と「其佛本願力」といふは、彌陀の本願力とまふす也。「聞名欲往生」といふは、「聞」といふは、如來のちかひの御なを信ずとまふす也。「欲往生」といふは、安樂淨利にむまれむとおもへとなり。「皆悉到彼國」といふは、御ちかひのみなを信じて、むまれむとおもふ人は、みなもれず、かの淨土にいたるとまふす御こと也。「自致不退轉」といふは、「自」はおのづからといふ、おのづからといふは衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらゐにいたらしむとなり、自然といふことば也。「致」といふは、いたるといふ、むねとすといふ。如來の本願のみなを信する人は、自然に不退のくらゐにいたらしむるをむねとすべしとおもへとも「不退」

【三】大無量壽經
下卷、勸令往生の
文に出づ。

【四生】有情の出生に胎生、卵生、濕生、化生の四種類あるをいふ。
【自力聖道】此世にて自力の修行により涅槃の證果を得んとする法門。この名稱は道緯より始る。
【他力】如来の誓願力により成佛する眞の宗教。淨土眞宗とも云ふ。
【五道生死】五惡道。
【業因】淨土往生の種となる業。

といふは、佛にかならずなるべきみとさだまるくらゐ也。これすなわち正定聚のくらゐにいたるをむねとすべしと、ときたまへる御のりなり。

又言、必得超絶去、往生安養國、横截五惡趣、惡趣自然閉、昇道無窮極、易往而無人、其國不逆違、自然之所牽。抄出

「必得超絶去往生安養國」といふは、「必」はかならずといふ、かならずといふは、さだまりぬといふこゝろ也。また自然といふこゝろ也。「得」はえたりといふ。「超」はこえてといふ。「絶」はたちすてはなるといふ。「去」はすつといふ、ゆくといふ、さるといふ也。娑婆

世界をたちすて、流轉生死をこえはなれて、ゆきさるといふ也。安養淨土に往生をうべしと也。「安養」といふは彌陀をほめたてまつるみこととみえたり、すなわち安樂淨土也。

「横截五惡趣惡趣自然閉」といふは、「横」はよこさまといふ、よこさまといふは如来の願力を信するゆへに、行者のはからいにあらず、五惡趣を自然にたちすて、四生をはなるゝを横といふ。他力とまふす也。これを横超といふ也。横は堅に對することば也。超は迂に對

することば也。堅はたゞさま、迂はめぐるとなり。堅と迂とは自力聖道のこゝろ也。横超はすなわち他力眞宗の本意也。「截」といふはきるといふ。五惡趣のきづなをよこさまにきる也。「惡趣自然閉」といふは、願力に歸命すれば五道生死をとづるゆへに自然閉といふ。

「閉」といふは、本願の業因にひかれて自然にむまるゝ也。「昇道無窮極」といふは、「昇」はのぼるといふ、のぼるといふは無上涅槃にいたる、これを昇といふ也。「道」は大涅槃

【四】大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷五の經文なり。是經は禪法の要義を示すものなるも、其中に念佛回通を説く故に廣く淨土教徒に引用さる。

繫道也。「無窮極」といふは、きわまりなしと也。「易往而無人」といふは、「易往」はゆきやすしと也。本願力に乗ずれば、本願の實報土にむまるゝことうたがひなければ、ゆきやすき也。「無人」といふは、ひとなしといふ。人なしといふは、眞實信心の人ばかりがたきゆへに、實報土にむまるゝ人まれなりとなり。しかれば源信和尚は報土にむまるゝ人はおほからず、化土にむまるゝ人はすくなからずとのたまへり。「其國不逆違自然之所牽」といふは、「其國」はそのくにといふ。すなわち安養淨利なり。「不逆違」はさかさまならずといふ、たがはずといふ也。「逆」はさかさまといふ。「違」はたがふといふ也。眞實信をえたる人は大願業力のゆへに、自然の淨土の業因たがはずして、かの業力にひかるゝゆへにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきわまりなしとのたまへる也。しかれば「自然之所牽」とまふすなり。他力の至心信樂の業因の自然にひくなり。これを「牽」といふなり。「自然」といふは行者のはからいにあらずとなり。

大勢至菩薩御銘文

「首楞嚴經」言、勢至獲三念佛回通、大勢至法王子、與其同倫五十二菩薩、即從座起頂禮佛足、而白佛言、我憶、往昔恆河沙劫、有佛出世、名無量光、十二如來相繼一劫、其最後佛名超日月光、彼佛教我念佛三昧、乃至若衆生心憶念佛、現前當來必定見佛、去佛不遠不假二方便、自得心開、如染香人、身有香氣、此則名曰香光莊嚴、我本因地、以念佛心、入無生忍、今於此界、攝念佛人歸於淨土。已上略出

【獲】親鸞は獲を果位にうる得と區別して使用す。
【因位】佛果に至らざる以前の修業位。
【五十二菩薩】勢至が佛前にて念佛圓通を説きて時伴へる五十二人の菩薩。

【十二光佛】無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、稱光佛、超日月光佛。

【當來】未來。

「勢至獲念佛圓通」といふは、勢至菩薩念佛をえたまふとまふすことなり。「獲」といふはうるといふことばなり。うるといふはすなわち因位のときさとりをうるといふ。念佛を勢至菩薩さとりうるるとまふすなり。「大勢至法王子與其同倫」といふは、五十二菩薩と勢至とおなじきともまふす。法王子とその菩薩とおなじきともとまふすを、與其同倫」といふなり。「即從座起、頂禮佛足、而白佛言」とまふすは、すなわち座よりたち、佛の御あしを禮して佛にまふしてまふさくとなり。「我憶往昔」といふは、われむかし恆河沙劫のかすのとしをおもふといふころ也。「有佛出世、名無量光」とまふすは、佛世にいでさせたまひしとまふす御ことばなり。世にいでさせたまひし佛は、阿彌陀如來なりとまふす也。「十二光佛、十二度世にいでさせたまふを、十二如來相續一劫」とまふすなり。「十二如來」とまふすは、すなわち阿彌陀如來の十二光の御名なり。「相續一劫」といふは、十二光佛の十二度世にいでさせたまふをあひつぐといふ也。「其最後佛名超日月光」とまふすは、十二光佛の世にいでさせたまひしおはりの佛を超日月光佛とまふす也。「彼佛教我念佛三昧」とまふすは、かの最後の超日月光佛の念佛三昧を、勢至にはおしえたまふとなり。「若衆生心憶佛念佛」といふは、もし衆生心に佛を憶し佛を念すればとなり。「現前當來、必定見佛、去佛不遠、不假方便、自得心開」といふは、今生にも佛をみたてまつり、當來にもかならず佛をみたてまつるべしとなり。佛もおきからず、方便おもからず、自然に心にさとりをうべしと也。「如染香人、身有香氣」といふは、かうばしき氣みにある人のごとく、

【無生忍】不生不滅の法の認可決定

【五】龍樹菩薩は易行品にて特に念佛易行を説く故に念親變は彼を眞宗の第一祖とす。

【必定】正定聚、不退に同じ。

念佛のこゝろもてる人に、勢至のこゝろをかうばしき人にたとえまふす也。このゆへに、「此則名曰、香光莊嚴」とまふすなり。勢至菩薩の御こゝろのうちに、念佛のこゝろをもてるを染香人にたとえまふす也。かるがゆへに勢至菩薩のたまはく、我本因地、以念佛心、入無生忍、今於此界、攝念佛人、歸於淨土」といへり。「我本因地」といふは、われもと因にしてといへり。「以念佛心」といふは、念佛の心をもてといふ。「入無生忍」といふは、無生忍に在るとなり。「今於此界」といふは、いまこの娑婆界にしてといふ也。「攝念佛人」といふは、念佛の人を攝取してといふ。「歸於淨土」といふは、念佛の人おさめとりて、淨土に歸せしむとのたまへるなりと。

龍樹菩薩御銘文

十住毘婆娑論曰、

人能念是佛、無量功徳、即時入必定、是故我常念。

若人願作佛、心念阿彌陀、應時爲現身、是故我歸命。文

「人能念是佛、無量功徳」といふは、ひとよくこの佛の無量の功徳を念すべしとなり。

「即時入必定」といふは、信すればすなわちのとき必定に在るとなり。必定に在るといふは、まことに念すればかならず正定聚のくらゐにさだまるとなり。「是故我常念」といふは、

われつねに念するなり。「若人願作佛」といふは、もし人佛にならむと願せばとなり。「心念阿彌陀」といふは、心に阿彌陀を念すべしとなり。念すれば「應時爲現身」とのたまへ

念阿彌陀」といふは、心に阿彌陀を念すべしとなり。念すれば「應時爲現身」とのたまへ

【八】無量壽經の註釋たる無量壽經の婆娑提舍頗生偈を撰す。視聽は彼を眞宗の第二祖と崇む。

【舊譯】唐初玄奘以前の漢譯經論を舊譯と云ひ、玄奘以後のものを新譯と云ふ。

り。「應時」といふは、ときにかなふといふなり。「爲現身」とまふすは、信者のために如来のあらわれたまふなり。「是故我歸命」といふは、龍樹菩薩のつねに、阿彌陀如来を歸命したてまつるとなり。

（六）婆藪般豆菩薩論曰、世尊我一心、歸命盡十方、無礙光如来、願生安樂國、我依修多羅、眞實功德相、說願偈總持、與佛教相應、觀彼世界相、勝過界道、究竟如虚空、廣大無邊際。と。

又曰、觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足、功德大寶海。

「婆藪般豆菩薩論曰」といふは、「婆藪般豆」は天竺のことばなり。震旦には天親菩薩とまふす。またいまはいはく世親菩薩とまふす。舊譯には天親、新譯には世親菩薩とまふす。「論曰」は、世親菩薩、彌陀の本願を釋しあらはしたまへる御ことを、論といふ也。「曰」はこゝろをあらはすことばなり。この論おは「淨土論」といふ、また「往生論」といふ也。「世尊我一心」といふは、「世尊」は釋迦如来なり、「我」とまふすは、世親菩薩のわがみとのたまへる也。「一心」といふは、教主世尊の御ことのりをふたごゝろなく、うたがひなしとなり、すなはちこれまことの信心也。「歸命盡十方無礙光如来」とまふすは、「歸命」は南無なり。また歸命とまふすは如来の勅命にしたがふこゝろ也。「盡十方無礙光如来」とまふすは、すなわち阿彌陀如来なり。この如来は光明也。「盡十方」といふは、「盡」はつくすといふ、ことごとくといふ。十方世界をつくしてことごとくみちたまへるなり。「無礙」といふ

【刹土】 國土。

【大乘】 (Mahāyāna) 大なる道、

自利の小果を理想とする小乗 (Hīnayāna) に對し、佛果菩提を理想とする佛敎。

【三部の經典】 大

無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經。

【偈】 (gāthā) 韻文をいふ。

【總持】 (Dharmānugraha) 種種の善法を散失せず、義理を持し障害を破すこと。

【信樂】 信ずること。

は、さわるることなしと也。さわるることなしとまふすは、衆生の煩惱惡業にこそをられざる也。光如來とまふすは、阿彌陀佛なり。この如來はすなわち不可思議光佛とまふす。この如來は智慧のかたちなり。十方微塵刹土にみちたまへるなりとしるべしとなり。「願生安樂國」といふは、世親菩薩かの無礙光佛を稱念し、信じて安樂國に生まれむとねがひたまへるなり。我依修多羅眞實功德相」といふは、「我」は天親論主のわれとなりのりたまへる御ことば也。「依」はよるといふ。修多羅によるとなり。「修多羅」は天竺のことば、佛の經典をまふす也。佛敎に大乘あり、また小乗あり、みな修多羅とまふす。いま修多羅とまふすは大乘なり、小乗にはあらず。いまの三部の經典は、大乘修多羅也。この三部大乘によるとなり。「眞實功德相」といふは、「眞實功德」は誓願の尊號なり。「相」はかたちといふことば也。説願偈總持」といふは、本願のこゝろをあらはすことばを「偈」といふなり。「總持」といふは智慧なり。無礙光の智慧を總持とまふすなり。「與佛敎相應」といふは、この「淨土論」のこゝろは、釋尊の敎勅、彌陀の誓願にあひかなへりとなり。「觀彼世界相勝過三界道」といふは、かの安樂世界をみそなわすに、ほとりきわなきこと虚空のごとし、ひろくおほきなること虚空のごとしとたとへたるなり。「觀佛本願」乃遇無空過者」といふは、如來の本願力をみそなわすに、願力を信ずるひとはむなしくこゝにとゞまらずと也。「能令速満足功德大寶海」といふは、「能」はよしといふ、「令」はせしむといふ、「速」はすみやかにとしといふ。よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大寶海を信ずる人のそのみに満

【七】迦才の淨土論の拔萃。曇鸞は世親の淨土論を釋し、淨土教が自力に非ずして他力の教門なるを明快にせしむる。且つ其學系上自然龍樹、世親をつなぐ楔機となり、後世淨土教に影響する所多し。親鸞は彼を眞宗第三祖とす。

足せしむる也。如來の功德のきわなくひろくおほきにへだてなきことを、大海のみづのへだてなくみちみてるがごとし、たとへたてまつるなり。

齊朝曇鸞和尚眞像銘文

釋曇鸞法師者、並州汝水縣人也、魏末高齊之初猶在、神智高遠三國知聞、洞曉衆經、獨出人外、梁國天子蕭王、恆向北禮、鸞菩薩註二解、往生論二裁、成兩卷、事出三釋迦才三卷淨土論一也。文

「釋の曇鸞法師」は並州の汝水縣の人也、「並州」はくにのななり、「汝水縣」はところのななり、「魏末高齊之初猶在」といふは、「魏末」といふは雲旦の世のななり、「未」はするといふ也。「魏の世のするとなり」「高齊之初」は齊といふ世のはじめといふ也。「猶在」は魏と齊との世になほいましきといふ也。「神智高遠」といふは、和尙の智慧すぐれていましけりと也。「三國知聞」といふは、「三國」は魏と齊と梁とこのみつの世におはせしと也。「知聞」といふはみつの世にしられきこえたまひきと也。「洞曉衆經」といふは、あきらかによりづの經典をさとりたまふと也。「獨出人外」といふは、よろづの人にすぐれたりと也。「梁國の天子」といふは、梁の世の王といふ也。蕭王のななり。「恆向北禮」といふは、梁の王つねに曇鸞の北のかたにましましけるを、菩薩と禮したてまつりたまひける也。「註解往生論」といふは、この「淨土論」をくわしふ釋したまふを「註論」とまふす。「論」をつくりたまへる也。「裁成兩卷」といふは、「註論」は二卷になしたまふ也。「釋迦才の三卷の

【釋】釋迦の略稱
佛門に入り出家せ
る者は教祖釋迦牟
尼(Sakyamuni)の
種性に從ひ釋の姓
をつける風習あり

【迦才】支那唐代の
學僧、慧遠道綽等
に對し自ら淨土論
一部を著し、理、事
二門を以て聖道、
淨土二教を説明し
淨土教の弘通に努
む。

【八】本文の作者
智榮の傳は明かな
らず。本文は法然
の漢語燈錄にも
あり、善導は支那
唐代の人。出家し
て間もなく西方變
相を見なくして感
深く淨土往生の願
を起して、妙開律
師と共に觀經を
研究し、後道綽禪
師の許に至り念佛
三昧を修し、専ら
教化を汎く民間に
施せり。又當時の諸
師の見解を精定し
後世淨土教を大成

淨土論」といふは、「釋迦才」とまふすは「釋」といふは釋尊の御弟子とあらはすことば也、
「迦才」は淨土宗の祖師也、智者にておはせし人也、かの聖人の三卷の「淨土論」をつくり
たまへるに、この曇鸞の御ことばあらはせりと成り。

唐朝光明寺善導和尚眞像銘文

智榮讚善導別德云、

善導阿彌陀佛化身、稱佛六字、即嘆佛、即懺悔、即發願廻向、一切善

根莊嚴淨土。文

「智榮」とまふすは震旦の聖人也。善導の別德をほめたまふていはく、善導は阿彌陀佛の

化身也とのたまへり「稱佛六字」といふは、南無阿彌陀佛の六字をとなふるとなり。即嘆

佛」といふは、すなわち南無阿彌陀佛をとなふるは、佛をほめたてまつるに成ると也。ま

た「即懺悔」といふは、南無阿彌陀佛をとなふるは、すなわち無始よりこのかたの罪業を、

懺悔するに成るとまふす也。「即發願廻向」といふは、南無阿彌陀佛をとなふるは、すなわ

ち安樂淨土に往生せむとおもふに成る也。また一切衆生にこの功德をあたふるに成ると也。

「一切善根、莊嚴淨土」といふは、阿彌陀の三字に一切善根をおさめたまへるゆへに、名

號をとなふるはすなわち淨土を莊嚴するに成るとしるべしと也と。智榮禪師、善導をほめ

たまへるなり。

善導和尚云、

するに至れり。永隆二年（西紀六八一）寂。親鸞は彼を眞宗第五祖とす【一切善根】諸善を出生する根本。【九】善導の觀經疏玄義分の文なり

【正定の業因】正しく往生の決定する業因。

【二〇】善導の觀念法門中五種増上縁を明す。攝生増上縁の文なり。

言南無者、卽是歸命、亦是餘願廻向之義、言阿彌陀佛者、卽是其行、以斯義故、必得往生。文

「言南無者」といふは、すはわち歸命とまふすことば也。「歸命」はすなわち釋迦彌陀の二尊の勅命にしたがひて、めしにかなふとまふすことばなり。このゆへに「卽是歸命」とのたまへり「亦是發願廻向之義」といふは、二尊のめしにしたがふて、安樂淨土に生まれ

むとねがふこゝろなりとのたまへるなり。「言阿彌陀佛者」とまふすは、卽是其行となり。「卽是其行」は、これすなわち法藏菩薩の選擇本願也としるべしとなり。安養淨土の正定の業因なりとのたまへるこゝろ也。「以斯義故」といふは、正定の因なる、この義をもて

のゆへにといへる御こころ也。「必」はかならずといふ「得」はえしむといふ、「往生」といふは淨土にむまるといふ也。かならずといふは、自然に往生をえしむと也。自然といふは、はじめてはからはざるこゝろなり。

又曰、言攝生増上縁者、如無量壽經四十八願中說「佛言、若我成佛十方衆生願生我國、稱我名字、下至十聲、乘我願力、若不生者、不取正覺」此卽是願往生行人、命欲終時、願力攝得往生、故名攝生増上縁。文

「言攝生増上縁者」といふは「攝生」は十方衆生と誓願におさめとらせたまふとまふすこゝろ也。「如無量壽經四十八願中說」といふは、如來の本願をときたまへる釋迦の御のりなりとしるべしとなり。「若我成佛」とまふすは、法藏菩薩ちかひたまはく、もしわれ佛

【わがな】南無阿彌陀佛なり。

【心光】即ち攝取の光明なり。

【増上縁】他の法を主ずるを障へざる縁れたる縁。

をえたらむにときたまふ、「十方衆生」といふは、十方のよろづの衆生也。すなわちわれらなり。「願生我國」といふは、安樂淨刹に生まれむとねがへと也。「稱我名字」といふは、われ佛をえむに、わがなをとなえられむと也。「下至十聲」といふは、名字をとなえられむことしもとこゑせむものと也。「下至」といふは、十聲にあまれるものも、聞名のものおも、往生にもらさずきはぬことをあらはしめすと也。「乘我願力」といふは、「乘」はのるべしといふ。また智也。智といふは願力にのせたまふとしるべしと也。願力に乗じて安樂淨刹に生まれむとしる也。「若不生者不取正覺」といふは、ちかひを信じたる人、もし本願の實報土に生まれずば、佛にならじとちかひたまへるみのり也。「此卽是願往生行人」といふは、これすなわち往生をねがふ人といふ。「命欲終時」といふはいのちおはらむとせむときといふ。「願力攝得往生」といふは、大願業力攝取して往生をえしむといへるこゝろ也。すでに尋常のとき信樂をえたる人といふ也。臨終のときはじめて信樂決定して、攝取にあづかるものにはあらず。ひごろかの心光に攝護せられまいらせたるゆへに、金剛心をえたる人は正定聚に住するゆへに、臨終のときにあらず、かねて尋常のときより、つねに攝護してすてたまはされば、「攝得往生」とまふす也。このゆへに「攝生増上縁」となづくる也。またまことに尋常のときより信なからむ人は、ひごろの稱念の功によりて、最後臨終のとき、はじめて善知識のすゝめにあふて、信心をえむとき、願力攝取して往生をうるものもあるべしと也。臨終の來迎をまつものは、いまだ信心をえぬものなれば、臨終を

【二】前文同様、
現生護念増上縁の
文なり。

【雜行雜修】正行
に非ざるものを往
生の因とするを雜
行と云ひ、雜行を
修するを雜修とい
ふ。但し親鸞は、
假令正行を修する
も自力の執心あれ
ば此をも雜修と批
判す。

こゝろにかけてなげくなり。

又曰、言護念増上縁者、乃但有專念阿彌陀佛、衆生彼佛心光常照是人、攝護不捨、

總不離照攝餘雜業行者。此亦是現生護念増上縁。文

「言護念増上縁者」といふは、まことの心をえたる人を、このよにてつねにまもりたまふ

とまふすことば也。「但有專念阿彌陀佛衆生」といふは、ひとすちにふたごゝろなく、彌陀

佛を念じたてまつるとまふす也。「彼佛心光常照是人」といふは、彼はかのといふ「佛心光」

は無礙光佛の御こゝろとまふす也。「常照」はつねにてらすとまふす。つねにといふは、と

きをきらはす、目をへだてず、ところをわかず、まことの信心ある人おぼ、つねにてらし

たまふと也。てらすといふは、かの佛心のおさめとりたまふと也。「佛心光」は、すなわち

阿彌陀佛の御こゝろにおさめたまふとしるべし。「是人」は信心をえたる人也。つねにまも

りたまふとまふすは、天魔波旬にやぶられず、惡鬼惡神にみだられず、攝護不捨したまふ

ゆへ也。「攝護不捨」といふは、おさめまもりすてす也。「總不離照攝餘雜業行者」といふ

は、「總」はすべてといふ、みなといふ、雜行雜修の人おぼすべてみなてらしおさめまもり

たまはずと也。てらしまもりたまはずとまふすは、攝取不捨の利益にあづからずと也、本

願の行者にあらざるゆへ也としるべし。しかれば攝護不捨と釋したまはず。「現生護念増上

縁」といふは、このよにてまことの信ある人をまもりたまふとまふすみこと也。「増上縁」

はすぐれたる強縁となり。

【二】四天王寺聖德太子御朱印緣起の文ならん。

【御縁起目】佛堂神社の草創の由來神佛又は名僧等の靈驗、行狀を記述せるもの。

【上宮太子】聖德太子、皇居池邊雙槻宮の南の上宮に住せられし故上宮太子といふ。
【金堂】伽藍の中心たる佛殿をいふ。

皇太子聖德御銘文

御縁起目、百濟國聖明王太子阿佐禮曰、敬禮救世大慈觀音菩薩、妙教流通東方日本國、

四十九歲傳燈演說文

新羅國聖人日羅禮曰、

敬禮救世觀音大菩薩、傳燈東方粟故王、文

「御縁起目」といふは、聖德太子の御縁起なり、「百濟國」といふは、聖德太子、さきの世

に、むまれさせたまひたりけるにの名なり、「聖明王」といふは、百濟國に太子のわたら

せたまひたりけるときの、そのくにの王の名也、「太子阿佐禮曰」といふは、聖明王の太子

のななり、聖德太子をこひしたひかなしみまいらせて御かたちを金銅にていまいらせたり

けるを、この和國に聖德太子むまれてわたらせたまふとき、まいらせて、聖明王わがこの

阿佐太子を勅使として金銅の救世觀音の像をおくりまいらせしとき、禮しまいらすとして

誦せる文也、「敬禮救世大慈觀音菩薩」とまふしけり、「妙教流通東方日本國」とまふすは、

上宮太子、佛法をこの和國につたえひろめおはしますと也、「四十九歲」といふは、上宮太

子は四十九歳までその和國にわたらせたまはむすると、阿佐太子まふしけり。おくられ

たまへる金銅の救世菩薩は、天王寺の金堂にわたらせたまふなり、「傳燈演說」といふは、

「傳燈」は、佛法をともしびにたとえたる也、「演說」は、上宮太子佛教をときひろめましま

すべしと、阿佐太子まふしけり。又新羅國より上宮太子をこひしたまひまいらせて、日羅

とまふす聖人しやうにんきたりて、聖德太子しやうとくたいしを禮らいしたてまつりてまふさく、「敬禮救世觀音大菩薩きやうらいきやくせんくわんぜんだいぼさつ」と
まふすは、聖德太子しやうとくたいしは救世觀音きやくせんくわんおんにておはしますと禮らいしまいらせけり、「傳燈東方でんとうとうほう」とまふす
は、佛法ぶつぽふをともしびにたとえて、「東方とうほう」とまふすは、この和國わこくに佛教ぶつがくのともしびをつたえ
おはしますと、日羅にらまふしけり、「粟散王ぼくさんわう」とまふすは、このくにはきはめて小國せうこくなりとい
ふ、「粟散ぼくさん」といふは、あわつぶをちらせるがごとく、ちひさきくにの王わうと、聖德太子しやうとくたいしのな
らせたまひたるとまふしける也なりと。

尊號眞像銘文そんがうしんざうのめいもん

本ほん

畢

尊號眞像銘文 末

【二】往生要集に出づ。源信特に厭穢、欣淨を高調

なり。念佛往生を勸めたり。かの往生要集が如何に時代民時に浸潤し、鎌倉時代浄土教興隆の源泉となりしかは歴史の明證する處なり。親鸞は彼を眞宗第六祖とす。

【二】聖人眞影の銘文は源空り。作者劉官は如何なる人なるや不隆或は源空の弟子源空は我國浄土宗の開祖、親鸞の師

(一三) 首楞嚴院源信和尚の銘文

我亦在彼攝取之中、煩惱障眼雖不能見、大悲無倦常照我身。文

「我亦在彼攝取之中」といふは、われまたかの攝取のなかにありとのたまへる也。煩惱障眼」といふは、われら煩惱にまたかさえらるとなり。「雖不能見」といふは、煩惱のまなにて、佛をみたてまつることあたはずといふ也。「大悲無倦」といふは、大慈大悲の御めぐみ、ものうきことましますとまふすなり。「常照我身」といふは、「常」はつねにといふ。「照」はてらしたまふといふ。無礙の光明信心の人をつねにてらしたまふとなり。つねにてらすといふは、つねにまもりたまふ也。「我身」はわがみを大慈大悲ものうきことなくして、つねにまもりたまふとおもへと也。攝取不捨の御めぐみのこゝろをあらわしたまふ也。念佛衆生攝取不捨のこゝろを釋したまへるなりとしるべしとなり。

日本源空聖人眞影

四明山權律師劉官讚

普勸道俗念彌陀佛、能念皆見化佛菩薩、明知稱名往生要術、宜哉源空慕道化物、信珠在心心照迷境、疑雲永晴佛光圓頂。

法然のこと（西紀一三三）
 二）幼にして比叡山に入り黒谷の叡師に師事し諸宗の學を遍訪し諸宗の兼學す會善導の散善義の文に感悟し一切の學問修行を捨て念佛を專修す之より山を下り洛東吉水に幽棲するも其門に集る者甚だ多く彼らによつて淨土教は日本に廣く弘通されるに至れり。撰撰本經念佛集は彼が敘述せる主要のものなり。

建曆 壬申三月一日

「普勸道俗念彌陀佛」といふは、「普勸」はあまねくすゝむと也。「道俗」は道にふたりあり、俗にふたりあり。道のふたりは、一は僧、二には比丘尼なり。俗にふたり、一には佛法を信じ行する男也、二には佛法を信じ行する女也。「念彌陀佛」とまふすは、尊號を稱念すると也。「能念皆見化佛菩薩」とまふすは、「能念」はよく名號を念ずと也。よく念ずとまふすはふかく信する也。「皆見」といふは、化佛菩薩をみむとおもふ人は、みなみたてまつる也。「化佛菩薩」とまふすは、彌陀の化佛、觀音勢至等の聖業なり。「明知稱名」とまふすは、あきらかにしりぬ、佛のみなをとなふれば往生すといふことを要術とすといふ。往生の要には、如來のみなをとなふるにすぎたることはなしと也。「宜哉源空」とまふすは「宜哉」はよしといふ也。「源空」は聖人の御名也。「慕道化物」といふは「慕道」は無上道をねがひしたふべしと也。「化物」といふは「物」といふは衆生也。「化」はよろづのものを利益すと也。「信珠在心」といふは、金剛の信心をめできたまにたとへたまふ。信心のたまをこゝろにえたる人は、生死のやみにまどはざるゆへに、「心照迷境」といふ也。信心のたまをもて、愚癡のやみをはらひあきらかにてらすと也。「疑雲永晴」といふは「疑雲」は願力をうたがふこゝろをくもにたとへたる也。「永晴」といふは、うたがふこゝろのくもをながくはらしぬれば、安樂淨土へかならずむまるゝ也。無礙光佛の攝取不捨の心光をもて、信心をえたる人を、つねにてらしまもりたまふゆへに、「佛光圓頂」といへり。「佛光圓頂」といふ

【五】選擇集より
拔萃せる三文なり
初文は往生要集に
出でたり。

は、佛心をして、あきらかに信心の人のいたゞきを、つねにてらしたまふとほめたまひたる也。これは攝取したまふゆへなりとするべし。

比叡山延暦寺寶幢院黒谷源空聖人眞像

『選擇 本願 念佛集』云、南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本 文

又曰、夫速欲離生死、二種勝法中且開聖道門選入淨土門、欲入淨土門、正雜二行中

且拋諸雜行、選應歸正行、欲修於正行、正助二業中猶傍於助業選應專正定、正定

之業者即是稱佛名、稱名必得生依佛本願故。文

又曰、當知生死之家以疑爲所止、涅槃之城以信爲能入。文

『選擇 本願 念佛集』といふは、聖人の御製作也。『南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本』とい

ふは、安養淨土の往生の正因は、念佛を本とすとまふす御こと也とするべし。『正因』とい

ふは、淨土にむまれて佛にかならずなるたねとまふすなり。

またいはく、『夫速欲離生死』といふは、それすみやかにとく生死をはなれむとおもへと

也。『二種勝法中且開聖道門』といふは、『二種勝法』は聖道淨土の一門也。『且開聖道門』

は、『且開』はしばらくさしおけと也。しばらく聖道門をさしおくべしと也。『選入淨土門』

といふは、『選入』はえらびていれと也。よろづの善法のなかに、えらびて淨土門にいるべ

しと也。『欲入淨土門』といふは、淨土門にいらむとおもはゞといふ也。『正雜二行 中且拋

諸雜行』といふは、正雜二行ふたつのなかに、しばらくもろくの雜行をなげすてさし

【助業】淨土往生の行たる讀誦、觀、禮、拜、稱名、讚歎、供養の中、稱名を以て正業とし、他の四を助業とし、但し親鸞は更に正業を専修せず、正助二業を雜へ修するを雜修とす。

【六】本文は法然の中陰法要の際、聖覺が讀みし願文の拔萃なりと稱ふ聖覺は大僧都澄憲の子にして、代唱導の家業なりしも、法然に歸依し親鸞の信友なり、彼著唯信鈔は親鸞の敬重せるもの。

尊號眞像銘文

おくべしと也。「選應歸正行」といふは、えらびて正行に歸すべしと也。「欲修於正行正助二業中猶傍於助業」といふは、正行を修せむとおもはゞ、正行助業ふたつのなかに、助業をさしおくべしと也。「選應專正定」といふは、えらびて正定の業をふたごゝるなく修すべしと也。「正定之業者即是稱佛名」といふは、正定の業因はすなわちこれ佛名をとなふる也。「正定の因といふは、かならず無上涅槃のさとりをひらくたねとまふす也。「稱名必得生依佛本願故」といふは、御名を稱するはかならず安樂淨土に往生する也。佛の本願によるがゆへなりとのたまへり。

「またいはいく、「當知生死之家」といふは、當知はまさにしるべしと也。「生死之家」は生死のいえといふ也。「以疑爲所止」といふは、大願業力の不思議をうたがふこゝろをもて、六道、四生、二十五有、十二類生（類生者一卵生、二胎生、三濕生、四化生、五有色生、六無色生、七有相生、八無相生、九非有色生、十非無色生、十一有相生、十二非無相生）にとゞまると也。いまにひさしく世にまよふとしるべしと也。「涅槃之城」とまふすは、安養淨刹をいふ也。これを涅槃のみやことはまふすなり。「以信爲能入」といふは、眞實信心をえたる人の、如來の本願の實報土に、よくいとるべしとのたまへるみことなり。信心は菩提のたねなり、無上涅槃をさとるたねなりとしるべしとなり。

法印聖覺和尙の銘文
 夫根有利鈍者、教有漸頓。機有奢促者、行有難易。當知聖道諸門漸教也、又難行也。淨土一宗者頓教也、又易行也。所謂眞言止觀之行、彌猴情難學、三論法相之教、牛羊眼易迷、然至

我宗者、彌陀本願定行因於十念、善導料簡決器量於三心、雖非利智精進、專念實易勤歸、非多聞廣學、力何不備、乃（至）然我大師聖人、爲釋尊之使者、弘念佛一門、爲善導之再誕、勸稱名一行、專修專念之行、自此漸弘、無間無餘之勤、在今始知、然則破業罪根之輩、加肩入往生之道、下智淺才之類、振臂赴淨土之門、咸知無明長夜之大燈炬也、何悲智眼闇、生死大海之天船後也。豈煩業障重抄略

【教育漸頓】以下は淨土教の立場より佛教教義を迅速難易等によりて批判し分類し以て已れの立場を明快にせんとせるものと。【佛心】禪宗のこ

【法華】天台宗。【華嚴等】以上は大乗教中の頓教なり。【止觀】奢摩他、毘婆舍那の譯語にして、止は一切の心息を止め、觀に住するをいひ、觀は諸法の相を觀察するをいふ。

「夫根有利鈍者」といふは、それ衆生の根性に利鈍ありとなり、「利」といふはこゝろのとき人なり、「鈍」といふはこゝろのにおき人なり、教育漸頓」といふは、衆生の根性にしたがふて、佛教に漸頓ありと也、「漸」はやうやく佛道を修して、三祇百大劫をへて佛になるなり、「頓」はこの娑婆世界にして、このみにて、たちまちに佛になるとまふす也、これすなわち佛心、眞言、法華、華嚴等のさとりをひらくなり、「機有奢促者」といふは、機に奢促あり、「奢」はおそきこゝろなるものあり、「促」はときこゝろなるものあり、このゆへに「行有難易」といふは、行につきて難あり易ありと也、「難」は聖道門自力の行也、「易」は淨土門他力の行なり、「當知聖道諸門漸教也」といふは、すなわち難行也、また漸教也とするべしと也、「淨土一宗者」といふは、頓教なり、また易行なりとするべしと也、「所謂眞言止觀之行」といふは、「眞言」は密教なり、「止觀」は法華なり、「獼猴情難學」といふは、この世の人のこゝろをさるのこゝろにたとえたるなり、さるのこゝろのごとくさだまらずとなり、このゆへに眞言、法華の行は修しがたく行じがたしと也、「三論法相之教牛羊服易述」

【聖人】 源空法然
を指す。

【後身】 眞蹟には
御身とあり。
【勤】 原文は勤の
次に、在令始知の
四字あり。

といふは、この世の佛法者のまなこをうし、ひつじのまなこにたとへて三論、法相宗等の
聖道自力の教にはまどふべしとのたまへる也。然至我宗者」といふは、聖覺和尚のたま
はく、わが浄土宗は彌陀の本願の實報土の正因として、乃至十聲一聲稱念すれば、無上
菩提にいたるとおしえたまふ。善導和尚の御おしえには、三心を具すればかならず安樂に
むまるとのたまへるなりと、聖覺和尚ののたまへるなり。彌非利智精進」といふは、智慧
もなく精進のみにもあらず、鈍根懈怠のものも、専修專念の信心をえつれば、往生すこ
くろうべしと也。然我大師聖人」といふは、聖覺和尚は、聖人をわが大師聖人とあまぎた
のみたまふ御ことばなり。爲釋尊之使者弘念佛之一門」といふは、源空聖人は、釋迦如來
の御つかいとして、念佛の一門をひろめたまふとしるべしとなり。爲善導之再誕勸稱名
之一行」といふは、聖人は善導和尚の後身として、稱名の一行をすゝめたまふなりとし
るべしと也。専修專念之行自此漸弘無間無餘之勤」といふは、一向専修とまふすことは、
これよりひろまるとしるべしとなり。然則破戒罪根之輩加扇入往生之道」といふは、「然則」
はしからしめて、この浄土のならひにて、破戒無戒の人罪業ふかきもの、みな往生すとし
るべしと也。下智淺才之類振臂赴浄土之門」といふは、無智無才のものは、浄土門におも
むくべしとなり。誠知無明長夜之大燈炬也何慧智眼闇」といふは、「誠知」はまことにしり
ぬといふ。彌陀の誓願は無明長夜のおほきなるともしびなり。なむそ智慧のまなこくらし
とかなしまむやとおもへと也。生死大海之大船筏也豈煩業障重」といふは、彌陀の願力は

【精思】 以下の文は初に擧げて無きも續いて原文を釋するものなり。

【この】 聖覺を指す。

【七】 教行信證の正信念佛偈の一節なり。

生死大海のおほきなるふねいかだ也。極惡深重のみなりとなげくべからずとのたまへるなり。精思ニ教授恩徳實等ニ彌陀悲願ニ者」といふは、師主のおしえをおもふに、彌陀の悲願にひとしと也。大師聖人の御おしえの恩おもくふかきことをおもひしるべしと也。「粉骨可報之摧身可謝之」といふは大師聖人の御おしえの恩徳のおもきことをしりて、ほねをこにしても報すべしとなり、身をくだきても恩徳をむくうべしと也。よくよくこの和尙

のこのおしえを御覽じしるべしと。
和朝愚禿釋親鸞正信偈文

本願名號正定業
成等覺證大涅槃
如來所以興出世
五濁惡時群生海
能發一念喜愛心
凡聖逆誘齊廻入
攝取心光常照護
貪愛瞋憎之雲霧
譬如日光覆雲霧
獲信見敬得大慶
至心信樂願爲因
必至滅度願成就
唯說彌陀本願海
應信如來如實言
不斷煩惱得涅槃
如衆水入海一味
已能雖破無明闇
常覆眞實信心天
雲霧之下明無闇
卽横超截五惡趣

文

【至心信樂等】第十八願を指す、如來の本願の眞實なるを二心なく深く信じねがふ衆生を必ず攝取せんと願なり。他に念佛往生の願、往相廻向の願とも呼ぶ。

【必至滅度の願】第十一願の名にして、正定聚に住すれば必ず涅槃を證するを誓ひし願。【願海一乘】一乘は唯一道の意味。親鸞は他力本願を以て一乘とす。教行信證の行卷一乘海の註釋に詳し。【大經】以下大無量壽經の文の釋にして本文にはなし

「本願名號正定業」といふは、選擇本願の行といふ也。至心信樂願爲因」といふは、彌陀如來廻向の眞實信心なり。この信心を阿耨菩提の因とすべしと也。「成等覺證大涅槃」といふは、「成等覺」といふは正定聚のくらる也。このくらるを龍樹菩薩は即時入必定とのたまへり。曇鸞和尚は入正定之數とおしえたまへり。これはすなわち彌勒のくらるとひとしと也。「證大涅槃」とまふすは、必至滅度の願成就のゆへに、かならず大般涅槃をさとるとするべし。「滅度」とまふすは、大涅槃也。「如來所以興出世」といふは、諸佛の世にいでたまふゆへはとまふすみのり也。「唯說彌陀本願海」とまふすは、諸佛の世にいでたまふ本懷は、ひとへに彌陀の願海一乘のみをとかむとなり。しかれば「大經」には、如來所以興出於世欲拯群萌惠以眞實之利」ときたまへり。「如來所以興出於世」は、如來とまふすは諸佛とまふす也。「所以」といふはゆへといふみこと也。「興出於世」といふは、世に佛いでたまふとまふすみこと也。「欲拯群萌」は「欲」といふはおぼしめすとなり。「拯」はすくはむとなり。「群萌」はよろづの衆生をすくはむとおぼしめすと也、佛の世にいでたまふゆへは、彌陀の御ちかひをときてよろづの衆生をたすけすくはむとおぼしめすとすべし。「五濁惡時群生海應信如來如實言」といふは、五濁惡世のよろづの衆生、釋迦如來のみことをふかく信受すべしと也。「能發一念喜愛心」といふは「能」はよくといふ。「發」はおこすといふ。ひらくといふ。「一念喜愛心」は、一念慶喜の眞實信心よくひらけ、かならず本願の實報土にむまるとするべし。「慶喜」といふは、信をえてのちよろこぶこゝろをいふ

【横】全佛教に於ける自宗の地位を明にする教相判釋の語にして親鸞の用ひしもの。横は聖道教を堅といふに對し淨土教を指し、超は漸教を指す。

也。「不斷煩惱得涅槃」といふは、「不斷煩惱」は煩惱をたちすてすしてといふ。「得涅槃」とまふすは、無上大涅槃をさとるをうるとしるべし。「凡聖逆謗齊廻入」といふは、小聖凡夫五逆謗法無戒闍提みな廻心して、眞實信心海に歸入しぬれば、衆水の海にிரりてひとつあぢわいとなるがごとしとたとえたるなり、これを「如衆水入海一味」といふなり。「攝取心光常照護」といふは、信心をえたる人おぼ無礙光佛の心光つねにてらしまもりたまふゆへに、無明のやみはれ生死のながきよすでにあかつきになりぬとしるべしと也。「已能雖破無明闇」といふはこのころなり。信心をうればあかつきになるがごとしとしるべし。「貪愛瞋憎之宗雲霧常覆眞實信心天」といふは、われらが貪愛瞋憎をくもきりにたとえて、つねに信心の天におほえるなりとしるべし。「譬如日月覆雲霧雲霧之下明無闇」といふは、日月のくもきりにくもきりにおほはるれども、やみはれてくもきりのしたあきらかなるごとく、貪愛瞋憎のくもきりに信心はおほはるれども、往生にさわりあるべからずとしるべしと也。「獲信見敬得大慶」といふは、この信心をえておほきによりこびうやまふ人といふ也。「大慶」はおほきにうべきことをえてのちによりこぶといふ也。「即横超徹五惡趣」といふは、信心をえつればすなわち横に五惡趣をきるなりとしるべしと也。「即横超」は、「即」はすなわちといふ、信をうる人は、ときをへず日をへだてずして、正定聚のくらゐにさだまるを即といふ也。「横」はよこさまといふ、如來の願力なり他力をまふすなり。「超」はこえてといふ、生死の大海をやすくよこさまにこえて無上大涅槃のさとりをひらく也。信

【本師】 法然なり

心じんを淨じやう土ど宗しゆの正しやう意いとしるべき也やう。このこゝろをえつれば、他た力りきには義ぎのなきをもて義ぎとすと、本ほん師し聖せい人にんのおほせごとなり。義ぎといふは行者ぎやうじやのおのゝはからふこゝろなり、このゆへにおのゝはからふこゝろをもたるほどおほおほ自じ力りきといふ也やう。よくゝこの自じ力りきのやうをこゝろうべじとなり。

正しやう嘉か一いつ歳さい戊ぶ午ご六ろく月げつ廿にじふ八はち日にち書しよ之し

愚ぐ禿と親しん鸞らん 八十
六歳

尊そん號ごう眞しん像ざう銘めい文もん 末ま畢ひ

一念多念文意

【念】 本書は一念多念證文とも呼ばる親證が其友隆寛のり經論の要文を抜萃し此を註釋し、かの一念多念に對する意を明にせるもの。

【一】 善導の往生總證の文。
【勝緣勝境】 臨終に現はるる奇瑞。

【二】 第十八願成の文。

一念多念文意

一念をひがごととおもふまじき事。

「一」恒願一切臨終時、勝緣勝境悉現前」といふは、「恆」はつねにといふ、「願」はねがふといふなり。いまつねにといふは、たえぬこゝろなり、おりにしたがふて、ときんもねがへといふなり、いま「つねに」といふは、常の義にはあらず、常といふは、つねになること、ひまなかれといふこゝろなり、ときとしてたえず、ところとしてへだてずきはぬを、常といふなり。「一切臨終時」といふは、極樂をねがふよろづの衆生、いのちおはらむときまでといふことはなり。「勝緣勝境」といふは、佛おもみたまつり、ひかりおもみ、異香おもかぎ、善知識のすゝめにもあはむとおもへとなり。「悉現前」といふは、さまんゝのめでたきことゞもめのまへにあらわれたまへとねがへとなり。

【二】 『無量壽經』の中に、あるいは「諸有衆生、聞其名號、信心歡喜乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退轉」とときたまへり。「諸有衆生」といふは、十方のよろづの衆生とまふすこゝろなり。「聞其名號」といふは、本願の名號をきくとのためへるなり。「きく」といふは、本願をききて、うたがふこゝろなきを、聞といふなり。また「きく」と

【一念】 教行信證の信卷に一念は斯れ信樂開發の時尅の極促を顯すとあり。

【即得往生等】 以下、一念の證文の終りの其有得聞彼佛名號まで即得往生住不退轉の註釋次の第十一顯文以下、十一文は其意を明にするため親鸞が新に引用せるもの。

【正定聚】 往生し必ず成佛すると決定せるともがら【しかれば等】 第十一顯の文。 第

【經に等】 異譯如来會の相當顯文。

いふは、信心をあらわす御のりなり。「信心歡喜乃至一念」といふは、「信心」は、如来の御ちかひをきゝて、うたがふこゝろのなきなり。「歡喜」といふは、「歡」はみよろこばしむるなり、「喜」はこゝろによるこばしむるなり、うべきことをえてむすと、かねてさきよりよろこぶこゝろなり。「乃至一」は、おほきおも、すくなきおも、ひさしきおも、ちかきおも、さきおも、のちおもみなかねおさむることばなり。「一念」といふは、信心をうるときのきわまりをあらわすことばなり。「至心廻向」といふは、「至心」は眞實といふことばなり、眞實は阿彌陀如来の御こゝろなり。「廻向」は、本願の名號をもて、十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。「願生彼國」といふは、「願生」は、よろづの衆生、本願の報土へむまれむとねがへとなり。「彼國」はかのくにといふ、安樂國をおしへたまへるなり。「即得往生」といふは、「即」はすなわちといふ、ときをへす日おもへだてぬなり。また「即」はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。「得」はうべきことをえたりといふ。眞實信心をうれば、すなわち無礙光佛の御こゝろのうちに攝取して、すてたまはざるなり。「攝」はおさめたまふ、「取」はむかへるとも言うなり。おさめとりたまふとき、すなわちとき日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、「往生をう」とはのたまへるなり。しかれば必至滅度の誓願を「大經」にときたまはく、「設我得佛、國中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覺」と願じたまへり。

また「經」にのたまはく、「若我成佛、國中有情、若不決定、成等正覺、證大涅槃者、

【この願成就】 第十一願成就文。 第

【等正覺】 正覺（佛果）に等しき位、即ち正定聚の異名と親鸞は解す。

【邪聚】 正定聚に對し、眞實報土に往生し得ざる状態にあるともがら、親鸞は自力修行雜修の人をいふ。【不定聚】 前二者何れとも決定せざるともがら、自力念佛の人を指す。

不取菩提」とちかひたまへり。

この願成就を、釋迦如來ときたまはく、「共有衆生、生彼國者、皆悉住於、正定之聚、所以者何、彼佛國中、無諸邪聚、及不定聚」とのたまへり。

これらの文のこゝろは「たとひ、われ佛をえたらむに、くにのうちの人天、定聚にも住して、かならず滅度にいたらずば、佛にならじ」とちかひたまへることなり。またのたまはく、「もしわれ佛にならむに、くにのうちの有情、もし決定して、等正覺をなりて、大涅槃を證せずば、佛にならじ」とちかひたまへるなり。かくのごとく法藏菩薩ちかひたまへるを、釋迦如來五濁のわれらがために、ときたまへる文のこゝろは「それ衆生ありて、かのくににむまれむとするものは、みなことごとく正定の聚に住す、ゆへはいかんとなれば、かの佛國のうちにはもろくの邪聚および不定聚はなければなり」とのたまへり。この二尊の御のりをみたまつるに、「すなわち往生す」とのたまへるは、正定聚のくらゐにさだまるを、「不退轉に住す」とはのたまへるなり。このくらゐにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆへに、「等正覺をなる」ともとき、「阿毘跋致にいたる」とも、「阿惟越致にいたる」ともときたまふ、「即時入必定」ともまふすなり。この眞實信樂は、他力横超の金剛心なり。

しかれば、念佛のひとおば、「大經」には、「次如彌勒」とときたまへり。彌勒は堅の金剛心の菩薩なり、「堅」とまふすは、たゞさまとまふすことばなり、これは聖道自力の難行道

の人なり。「横」はよこさまにといふなり、「超」はこえてといふなり、これは佛の大願業力のふねに乗じぬれば、生死の大海をよこさまにこえて、眞實報土のきしにつくなり。「次如彌勒」とまふすは、「次」はちかしといふ、つぎにといふ。「ちかし」といふは、彌勒は大涅槃にいたりたまふべきひとなり、このゆへに「彌勒のごとし」とのたまへり、念佛信心の人も大涅槃にちかづくとなり。「つぎに」といふは、釋迦佛のつぎに、五十六億七千萬歳をへて、妙覺のくらゐにいたりたまふべしとなり。「如」はごとしといふ、「ごとし」といふは、他力信樂のひとは、このよのうちにて不退のくらゐにのぼりて、かならず大般涅槃のごとしをひらかむこと、「彌勒のごとし」となり。

【かのくに等】佛の名號を國土の名字に含めて述ぶ。

【また王日休】王日休、淨土文の跋文にあり。王日休は支那南宋、廬州龍舒の人。

『淨土論』曰、「經云、若人但聞彼國土、清淨安樂、剋念願生、亦得往生、即入正定聚、此是國土名字爲佛事、安可思議」とのたまへり。この文のこゝろは、「もしひと、ひとへに、かのくにの清淨安樂なるをきゝて、剋念して、むまれむとねがふひと、またすでに往生をえたるひと、すなわち正定聚にいるなり。これはこれ、かのくにの名字をきくに、さだめて佛事をなす、いづくんぞ思議すべきや」とのたまへるなり。安樂淨土の不可稱、不可説、不可思議の徳を、もとめずしらざるに、信ずる人にえしむとしるべしとなり。

また王日休のいはく、「念佛衆生便同彌勒」といへり。「念佛衆生」は、金剛の信心をえた人なり。「便」はすなわちといふ、たよるといふ、信心の方便によりて、すなわち、正定

【經】 觀經の文。

聚のくらゐに住せしめたまふがゆへにとなり。「同」はおなじきなりといふ、念佛の人は、無上涅槃にいたること、彌勒におなじきひとまふすなり。

また『經』にのたまはく、「若念佛者、當知此人、是人中分陀利華」とのたまへり。「若念佛者」とまふすは、もし念佛せむひとまふすなり。「當知此人、是人中分陀利華」といふは、まさにこのひとはこれ人中の分陀利華なりとするべしとなり。これは如來のみことに、分陀利華を念佛の人にたとへたまへるなり。このはなは人中の上々華なり、好華なり、妙好華なり、希有華なり、最勝華なりとほめたまへり。

光明寺の和尚の御釋には、念佛の人おぼ「上々人、好人、妙好人、希有人、最勝人」とほめたまへり。

【また現生護念等】 同じく善導の觀念法門。

また、現生護念の利益をおしへたまふには、「但有專念阿彌陀佛衆生、彼佛心光常照是人攝護不捨、總不論攝餘雜業行者、此亦是現生護念增上緣」とのたまへり。この文のころは「但有專念阿彌陀佛衆生」といふは、ひとすぢに、彌陀佛を信じたてまつるとまふす御ことなり。「彼佛心光」とまふすは、「彼」はかれとまふす、「佛心光」とまふすは、無礙光佛の御ころとまふすなり。「常照是人」といふは、「常」はつねなること、ひまなくたえずといふなり。「照」はてらすといふ、ときをきらはす、ところをへだてず、ひまなく、眞實信心のひとおぼつねにてらしまもりたまふなり。かの佛心につねにひまなくまもりたまへば、彌陀佛おぼ不斷光佛とまふすなり。「是人」といふは「是」は非に對することはなり、

一念多念文意

【異學異見】 觀經によれば、異學異見は餘行を修し、余佛を念ずる聖道、外道の入。別解別行は念佛をしなが、自力にさとりなす人とす。多念の文にて詳説す。

【經】 舊譯華嚴經【我亦在等】 往生要集。

眞實信樂のひとおぼ是人とまふす、虚假疑惑のものおぼ是非人といふ、非人といふは、ひとにあらずときらひ、わるきものといふなり、是人はよきひととまふす、「攝護不捨」とまふすは、「攝」はおさめとるといふ、「護」はところをへだてずと、ときをわかず、ひとをきらわず、信心ある人おぼひまなくまもりたまふとなり。まもるといふは、異學異見のともがらにやぶられず、別解別行のものにさえられず、天魔波旬におかされず、惡鬼惡神なやますことなしとなり。「不捨」といふは、信心のひとを智慧光佛の御こゝろにおさめまもりて、心光のうちにときとしてすてたまはずと、しらしめむとまふす御のりなり。「總不論照攝餘雜業行者」といふは、「總」はみなといふなり、「不論」はいはずといふこゝろなり、「照攝」はてらしおさむと、「餘の雜業」といふはもろ／＼の善業なり、雜行を修し雜修をこのむものおぼ、すべてみなてらしおさむといはず、まもらずとのたまへるなり。これすなわち本願の行者にあらざるゆへに、攝取の利益にあづからざるなりとしるべしとなり。このよにてまもらずとなり、「此亦是現生護念」といふは、このよにてまもらせたまふとなり。本願業力は、信心のひとの強縁なるがゆへに、「増上縁」とまふすなり。

信心をうるを、よろこぶ人をば「經」には「諸佛とひとしきひと」とときたまへり。

首楞嚴院の源信和尚のたまはく、「我亦在彼攝取之中、煩惱障眼雖不能見、大悲無憍常照我身」と。この文のこゝろは「われまたかの攝取のなかにあれども、煩惱まなこをさえて、みたてまつるにあたはずといゑども、大悲ものうきことなくして、つねにわがみをして

【三】大無量壽經を末代に流通せんため釋尊が彌勒に附屬せる一其有得聞彼佛名號、歡喜踊躍乃至一念、當知此人爲得大利、則是具足無上功德の文。

【一八念】前出第十八顯成就文の一念を信一念となすに對し此一念を親鸞は行一念といふ。

【經】大無量壽經第十一顯成就文。

らしたまふ」とのたまへるなり。

「其有得聞彼佛名號」といふは、本願の名號を信すべしと、釋尊ときたまへる御のりなり。「歡喜踊躍乃至一念」といふは、「歡喜」はうべきことをえてむすと、さきだちてかねてよろこぶこゝろなり。「踊」は天におどるといふ、「躍」は地におどるといふ、よろこぶこゝろのきわまりなきかたちなり。「慶樂」するありさまをあらわすなり。「慶」はうべきことをえて、のちによるこぶこゝろなり。「樂」はたのしむこゝろなり。これは正定聚のくらゐをうるかたちをあらわすなり。「乃至」は稱名の徧數のさだまりなきことをあらわす。「一念」は、功德のきわまり、一念に萬徳ことごとくそなわる、よろづの善みなおこさるるなり。「當知此人」といふは、信心のひとをあらわす御のりなり。「爲得大利」といふは、無上涅槃をさとするゆへに、「則是具足無上功德」とものたまへるなり。「則」といふは、すなわちといふ、のりとまうすことばなり。如來の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに無上の功德をえしめ、しらするに廣大の利益をうるなり。自然にさま／＼のさとりをすなわちひらく法則なり。「法則」といふは、はじめて行者のはからひにあらす、もとより不可思議の利益にあづかること、自然のありさまとまふすことをしらしむるを、法則とはいふなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを、法則とはまふすなり。「經」に「無諸邪聚及不定聚」といふは、「無」はなしといふ。「諸」はよろづのことといふことばなり。「邪聚」といふは、雜行、雜修、萬善、諸行のひと、報土にはななければなりといふな

【一】第十八願に
設我得佛十方衆生
至心信樂欲生我國
乃至十念若不生者
不取正覺唯除五逆
誹謗正法とあり。

【證誠】釋尊所説
の誠なるを諸佛が
證明す。
【素懷】本懷と同
じ、本意。

り「及」はおよべといふ、「不定聚」は、自力の念佛疑惑の念佛の人は、報土にはむなしといふなり。正定聚の人のみ、眞實報土にむまるればなり
この文どもは一念の證文なり、おもふほどあらはしまふさじ、これにておしはからせた
まふべきなり。

以下多念の證文、多念をひがごととおもふまじき事

(一) 本願の文に「乃至十念」とちかひたまへり、すでに十念とちかひたまへるにて、しるべし、一念にかぎらずといふことを、いはむや乃至とちかひたまへり、稱名の徧數さだまらずといふことを。この誓願は、すなわち易往易行のみちをあらはし、大慈大悲のきわまりなきことをしめしたまふなり。
(二) 『阿彌陀經』に「一日乃至七日名號をとなふべし」と、釋迦如來ときおきたまへる御のりなり。この「經」は無問自說經とまふす、この「經」をときたまひしに、如來にとひたてまつる人もなし、これすなはち、釋尊出世の本懷をあらわさむとおぼしめすゆへに、無問自說とまふすなり。彌陀選擇の本願、十方諸佛の證誠、諸佛出世の素懷、恆沙如來の護念は、諸佛菩薩の御ちかひをあらはさむとなり。

【諸佛稱名等】 第十七願。

諸佛稱名の誓願『大經』にのたまはく、「設我得佛、十方世界、無量諸佛、不悉咨嗟、稱我名者、不取正覺」と願じたまへり。この悲願のこゝろは、「たとひわれ佛をえたらむに、十方世界無量の諸佛、ことごとく咨嗟して、わが名を稱せずば、佛にならじ」とちかひたまへるなり。「咨嗟」とまふすは、よろづの佛にほめられたてまつるとまふす御ことなり。

【三】 善導の散善義、一心専念（彌陀名號）行住座臥不問時節久近（念不捨者）是名正定之業順彼佛願故の註釋。

【弘誓】 本願のこと。

【四】 散善義。

（三）「一心専念」といふは、「一心」は金剛の信心なり。「専念」は一向専修なり。「一向」は餘の善にうつらず、餘の佛を念ぜず。「専修」は本願のみなをふたごゝろなく、もはら修するなり。「修」はこゝろのさだまらぬを、つくろいなほしおこなふなり。「専」はもはらといふ、一といふなり、もはらといふは、餘善他佛にうつるこゝろなきをいふなり。「行住座臥不問時節久近」といふは、「行」はあるくなり、「住」はたゝるなり、「座」はゐるなり、「臥」はふすなり、「不問」はとはすといふ、「時」はときなり、十二時なり、「節」はときなり、十二月四季なり、「久」はひさしき、「近」はちかしとなり。ときをえらばざれば不淨のときをへだてず、よろづのことをきはざれば、「不問」といふなり。「是名正定之業順彼佛願故」といふは、弘誓を信するを報土の業因とさだまるを、「正定之業」となづくといふ、佛の願にしたがふがゆへにとまふす文なり。

（四）一念多念のあらそひをなすひとおは、「異學別解のひと」とまふすなり。「異學」といふは、聖道外道におもむきて、餘行を修し、餘佛を念ず、吉日良辰をえらび占相祭祀をこのむも

【助業】 讀誦、觀
 宗、禮拜、稱名、讚
 歎供養のうち、第
 四の稱名を正定業
 とし他の四を助業
 とす稱名を正定業
 とすは、稱名念
 佛が即ち本願に信
 順することなるが
 故に。

【五】 善導の法事
 讃、上盡一形下至
 十念、三念五念佛來
 迎直爲彌陀弘誓重
 致使凡夫念即生の
 文なり。これを解
 せんため文を中斷
 し中間に大經、淨
 土論の文を更に引
 用せり。

のなり、これは外道なり、これらはひとへに、自力をたのむものなり。「別解」は、念佛をしながら、他力をたのまぬなり。「別」といふは、ひとつとなることを、ふたつにわかちなすことばなり。「解」はさとるといふ、とくといふことばなり、念佛をしながら、自力にさとりなすなり、かるがゆへに、「別解」といふなり。また助業をこのむもの、これすなわち自力をばげむひとなり。「自力」といふは、わがみをたのみ、わがこゝろをたのむ、わがちからをばげみ、わがさまんの善根をたのむひとなり。

「上盡一形」といふは「上」はかみといふ、すゝむといふ、のぼるといふ、いのちおはらむまでといふ「盡」はつくるまでといふ。「形」はかたちといふ、あらわすといふ、念佛せむこと、いのちおはらむまでとなり。「十念、三念、五念のものもむかへたまふ」といふは、念佛の遍數によらざることを、あらはすなり。「直爲彌陀弘誓重」といふは、「直」はただしきなり、如來の直説といふなり、諸佛のよにいでたまふ本意とまふすを直説といふなり。「爲」はなすといふ、もちゐるといふ、さだまるといふ、かれといふ、これといふ、あふといふ、あふといふかたちといふこゝろなり。「重」はかさなるといふ、おもしろといふ、あつしといふ、誓願の名號、これをもちゐさだめなしたまふことかさなれりと、おもふべきことをしらせむとなり。

しかれば、「大經」には、「如來所以興出於世、欲拯群萌、惠以眞實之利」とのたまへり。この文のこゝろは、「如來」とまふすは諸佛をまふすなり、「所以」はゆへといふことばなり、

【要門】自力諸行の法門未だ本願に信順する能はざる者を攝して淨土に歸入せしめんとするが爲の門。假門、方便門とも名く。

【十三觀】阿彌陀の佛身佛土等に對する十三種の觀法。即ち、日觀、水觀、地觀、寶樹觀、寶池觀、寶樓觀、華座觀、像觀、眞身觀、觀音觀、勢至觀、普觀、徧觀なり。

【三福九品】三福は觀經に往生淨土の行業として説く善法（世福、戒福、行福）にして、九品はこの三福を往生者の機根により九種に分てるもの

「興出於世」といふは、佛のよにいでたまふとまふすなり、「欲」はおほしめすとまふすなり、「拯」はすくふといふ、「群萌」はよろづの衆生といふ、「惠」はめぐむとまふす、「眞實之利」とまふすは、彌陀の誓願をまふすなり。しかれば諸佛のよにいでたまふゆへは、彌陀の願力をときて、よろづの衆生をめぐみすくはんとおぼしめすを、本懐とせむとしたまふがゆへに眞實之利とはまふすなり。しかればこれを諸佛出世の直説とまふすなり。

おほよそ、八萬四千の法門は、みなこれ淨土の方便の善なり、これを「要門」といふ、これを「假門」となづけたり。この要門、假門といふは、すなわち「無量壽佛觀經」一部にときたまへる定善、散善これなり、「定善」は十三觀なり、「散善」は三福九品の諸善なり、これみな淨土方便の要門なり。これを假門ともいふ。この要門、假門より、もろくの衆生をすゝめこしらへて、本願一乘圓融無礙眞實功德大寶海におしへすゝめられたまふがゆへに、よろづの自力の善業おぼ、「方便の門」とまふすなり。いま「一乘」とまふすは本願なり、「圓融」とまふすは、よろづの功德善根みち／＼てかくることなし、自在なるこゝろなり、「無礙」とまふすは、煩惱惡業にさえられず、やぶれぬをいふなり、「眞實功德」とまふすは名號なり。一實眞如の妙理圓滿せるがゆへに「大寶海」にたとえたまふなり、「一實眞如」とまふすは無上大涅槃なり、涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如來なり、「寶海」とまふすは、よろづの衆生をきらはすさわりなく、へだてず、みちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり。この一如寶海よりかたちをあらわして、法藏菩薩

【一乘】衆生を大菩提に到らしむる唯一無上の道。本願に乗托するが唯一無上の道なる故に本願一乘といふ。

【實眞如】眞如は平等眞實なるが故に。

【報身如來】菩薩の願行の因に酬報せる佛身、三身の

【方便法身】法性法身に對する。覺の論註に「法性法身に由りて方便法身を出す。此二法身は異にして一つべからず、一にして同じかるべからず」といふ。

薩となりのたまひて、無礙のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに「報身如來」とまふすなり。これを「盡十方無礙光佛」となづけけたてまつれるなり、この如來を「南無不可思議光佛」ともまふすなり。この如來を「方便法身」とはまふすなり、「方便」とまふすは、かたちをあらわし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまふすなり、すなわち阿彌陀佛なり。この如來は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧はまたかたちなければ、「不可思議光佛」とまふすなり。この如來、十方微塵世界にみち／＼たまへるがゆへに、「無邊光佛」とまふす、しかれば世親菩薩は「盡十方無礙光如來」となづけけたてまつりたまへり。

『淨土論』に曰、「觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足、功德大寶海」とのたまへり。この文のこゝろは、「佛の本願力を觀するに、まうあふて、むなしくすぐるひとなし、よくすみやかに、功德の大寶海を滿足せしむ」とのたまへり。「觀」は願力をこゝろにうかべみるとまふす、またしるといふこゝろなり、「遇」はまうあふといふ、まうあふとまふすは、本願力を信するなり。「無」はなしといふ、「空」はむなしくといふ、「過」はすぐるといふ、「者」はひとといふ、むなしくすぐるひとなしといふは、信心あらんひと、むなしく生死にとゞまることなしとなり。「能」はよくといふ、「令」はせしむといふ、よしといふ、「速」はすみやかにといふ、ときことといふなり。「滿」はみつといふ、「足」はたりぬといふ、「功德」とまふすは名號なり、「大寶海」はよろづの善根功德みちきわまるを海にたとへたまふ、この

【六〇】前田法事證
の上盡一形の文の
續きなり。斯文を
明にせんため親鸞
は大經、淨土論の
二文を挾む。

【水火二河】人性
の貪欲、瞋恚を水
火二河に喩へ中間
に見ゆる白道を煩
惱の衆生が願生心
を表現せるもの、
善導散善義に出づ
信巻を見よ。

功德をよく信するひとのこゝろのうちに、すみやかにとくみちたりぬと、しらしめんとな
り。しかれば金剛心のひとは、しらすもとめざるに、功德の大寶そのみちにみちみつがゆ
へに、大寶海とたとえたるなり。

「致使凡夫念即生」といふは、「致」はむねとすといふ、むねとすといふは、これを木とす
といふことばなり、いたるといふは、實報土にいたるとなり、「使」はせし
むといふ、「凡夫」はすなわちわれらなり、本願力を信樂するをむねとすべしとなり、「念」
は如來の御ちかひをふたごゝろなく信するをいふなり、「即」はすなわちといふ、ときをへ
ず日をへだてず、正定聚のくらゐにさだまるを「即生」といふなり、「生」はむまるとい
ふ、これを「念即生」とまふすなり。また「即」はつくといふ、つくといふは、くらゐに
かならずのぼるべきみといふなり、世俗のならひにも、くにの王のくらゐにのぼるをば即
位といふ。「位」といふはくらゐといふ、これを東宮のくらゐにゐるひとは、かならず王の
くらゐにつくがごとく、正定聚のくらゐにつくは、東宮のくらゐにゐることし、王にのぼる
は即位といふ、これはすなわち無上大涅槃にいたるをまふすなり、信心の人は、正定聚
にいたりて、かならず滅度にいたるとちかひたまへるなり、これを「致」とすといふ、む
ねとすとまふすは、涅槃のさとりをひらくをむねとすとなり。「凡夫」といふは、無明煩惱
われらがみにみちりて、欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむこゝろおほくひま
なくして、臨終の一念にいたるまで、とゞまらず、きえずたえずと、水火二河のたとえに

【かの正覺等】淨土論に、如來淨華衆正覺華化生愛樂佛法味とあり。

【七】善導の往生禮讃の、今信彌陀本弘誓願及稱名號下至十聲一聲定得往生乃至一念無有疑心の文なり。

あらわれたり。かゝるあさましきわれら、願力の白道を一分二分やう／＼づゝあゆみゆけば、無礙光佛のひかりの御こゝろはおさめとりたまふがゆへに、かならず安樂淨土へいたれば、彌陀如來とおなじく、かの正覺のはなに化生して、大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり、これを「致使凡夫念即生」とまふすなり。一、二河のたとえに、一分二分ゆくといふは、一年二年すぎゆくにたとえたるなり。諸佛出世の直説、如來成道の素懷は、凡夫は彌陀の本願を念せしめて、即生するをむねとすべしとなり。

〔今信知彌陀本弘誓願、及稱名號〕といふは、如來のちかひを、信知すとまふすこゝろなり。「信」といふは金剛心なり、「知」といふはしるといふ、煩惱惡業の衆生をみちびきたまふとしるなり。また「知」といふは觀なり、こゝろにうかべおもふを觀といふ、こゝろにうかべしるを知といふなり。「及稱名號」といふは「及」はおよぶといふは、かねたるこゝろなり、「稱」は御なをとなふるとなり。また「稱」ははかりといふこゝろなり、はかりといふものは、もののほどをさだむることなり。名號を稱すること、とこゑひとこゑ、きくひと、うたがふこゝろ一念もなければ、實報土へむまるとまふすこゝろなり。

また『阿彌陀經』の、「七日もしは一日名號をとなふべし」となり。これは多念の證文なり。

おもふやうにはまうしあらはさねども、これにて一念多念のあらそひあるまじきことは、おしはからせたまふべし。淨土眞宗のならひには、念佛往生とまふすなり、またく一念往生、多念往生とまふすことなし、これにてしらせたまふべし。

南無阿彌陀佛

のなかのひとりの、文字のこゝろもしらすあさましき愚癡きわまりなきゆへに、やすくこゝろえせむとて、おなじことを、とりかへし／＼かきつけたり、こゝろあらむひとはおかしくおもふべし、あざけりをなすべし。しかれども、ひとのそしりをかへりみず、ひとすちに、おろかなるひと／＼をこゝろえやすからむとしるせるなり。

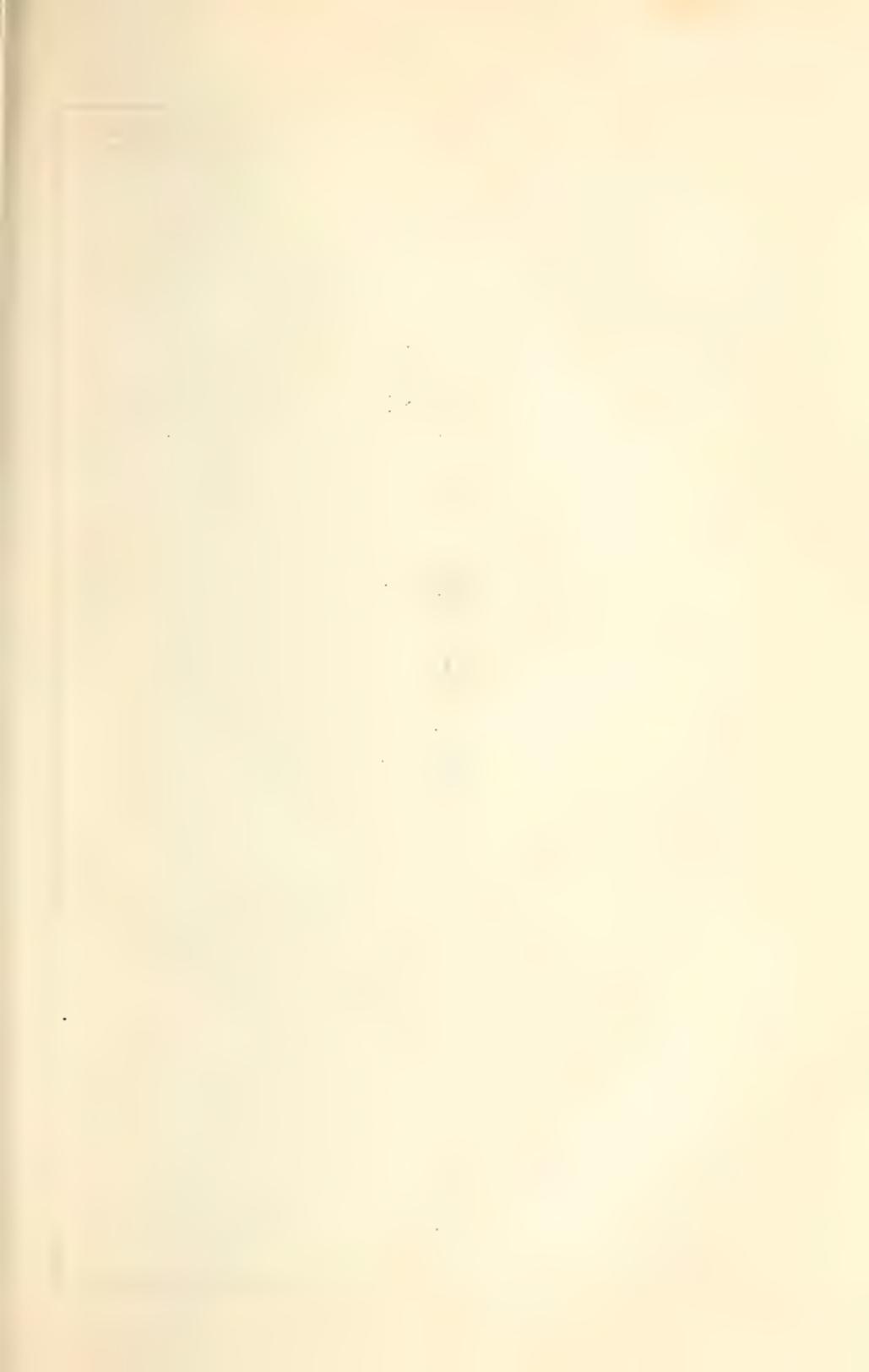
康元二歲丁巳二月十七日

愚 禿 親 鸞

八十
五歳
書之

一念多念文意 畢

唯信鈔文意



日頃本書は親鸞が
 推獎せる同門の先
 輩の唯信の要文に
 所引の經釋の文を
 以て己の所信を
 明せしもの。

【一】支那法照の
 五會法事讚の文な
 り。以下の註釋に
 於て第十七願の意
 を表さんとす。
 【號】尊號(名號)
 を因位と果上との
 名に區別せるもの

唯信鈔文意

『唯信鈔』といふは、「唯」はたゞこのことひとつといふ、ふたつならぶことをきらふこと
 ばなり。また「信」はひとりといふことろなり。「信」はうたがふことろなきなり。すなは
 ちこれ眞實の信心なり、虚假はなれたることろなり。虚はむなしといふ、假はかりなりと
 いふ。虚は實ならぬをいふ、假は眞ならぬをいふなり。本願他力をたのみて、自力をすつ
 るをいふなり。これを「唯信」といふ。「鈔」はすぐれたることをぬきいだしあつむること
 ばなり。このゆへに、「唯信鈔」といふなり。また「唯信」はこれ他力の信心のほかに、餘
 のことならはずとなり。すなはち本弘誓願なるがゆへなればなり。

(一) 如来尊號甚分明 十方世界普流行 但有稱名皆得往 觀音勢至自來迎
 「如来尊號甚分明」このことろは、「如来」とまふすは無礙光如来なり「尊號」といふは南
 無阿彌陀佛なり。「尊」はたふとくすぐれたりとなり、「號」は佛になりたまふてのちの御名
 をまふす。「名」はいまだ佛になりたまはぬときの御名をまふすなり。この如来の尊號は、
 不可稱、不可說、不可思議にましますゆへに、一切衆生をして、無上大般涅槃にいたらしめ
 たまふ大慈大悲のちかひの御名なり。この佛の御名はよろづの如来の名號にすぐれたまへ

【これすなはち】諸佛稱揚の第十七願意を指す。

【智願海】清淨智慧に依り起された本願海。
【但有稱名皆得往】以下第十七願意を更に明にせんため第十八願の念佛往生の所以を述ぶ。

【經】須彌四域經

【彌陀無數】觀經に無量壽佛の化身無數にして觀世音大勢至とともに常に此の行人の所に來すとあり。

り、これすなはち、誓願なるがゆへなり、「甚分明」といふは、「甚」ははなはだといふ、すぐれたりといふことなり、「分」はわかつといふよろづの衆生とわかつことなり、「明」はあきらかなりといふ、十方一切衆生をことごとくくわかち、たすけ、みちびきたまふことあきらかなり、あはれみたまふことすぐれたまへりとなり、「十方世界普流行」といふは、「普」はあまねく、ひろく、きはなしといふ、「流行」は十方微塵世界にあまねくひろまりて、佛敎をすゝめ行せしめたまふなり。しからは大乘の聖人、小乗の聖人、善人、惡人、一切の凡夫、みなともに自力の智慧をもては大涅槃にいたることなければ、無礙光佛の御かたちは智慧のひかりにてましますゆへに、この如來の智願海にすゝめられたまふなり、一切諸佛の智慧をあつめたまへる御かたちなり、光明は智慧なりとしるべし、「但有稱名皆得往」といふは「但有」はひとへにみなをとふるひとのみ、みな極樂淨土に往生すとあり、かるがゆへに「稱名皆得往」とのたまへるなり。「觀音勢至自來迎」といふは、この不可思議の智慧光佛のみなを信受して憶念すれば、觀音、勢至はかならずかけのかたちにそへるがごとくなり、この無礙光佛は觀音とあらはれ、勢至とします。ある「經」には觀音を寶應聲菩薩となづけて日天子としめす、これはよろづの衆生の無明黑暗をはらはしむ、勢至を寶吉祥菩薩となづけて、月天子とあらはれ、生死の長夜をてらして、智慧をひらかしむるなり。「自來迎」といふは「自」はみづからといふ、彌陀無數の化佛、無數の化觀世音、化大勢至等の無量無數の聖衆、みづからつねにときをきらはすところをへだてず、眞實信

【若不生者】淨土に來生せしむるの意なる故、第十八願の誓願を顯すこととなるなり。
 【大涅槃等】以下存在を超え常不變なる眞如を證せる涅槃の境を、法性のみやこ、法身、眞如實相、無爲法身等と云ひ代へて表現す。

心をえたるひとにそひたまひて、まもりたまふゆへに、みづからとまふすなり。また、白はおのづからといふ、おのづからといふは、自然といふ、自然といふはしからしむといふ「しからしむ」といふは行者のはじめてもかくもはからざるに過去、今生、未來の一切のつみを善に轉じかへなすといふなり。「轉す」といふは、つみをけしうしなはずして善になすなり、よろづのみづの大海にいりぬれば、すなはちうしほとなるがごとし、彌陀の願力を信するがゆへに、如來の功德をえしむるがゆへに「しからしむ」といふは、はじめた功德をえんとはからはざれば「自然」といふなり。誓願眞實の信心をえたるひとは、攝取不捨の御ちかひにおさめとりてまほらせたまふによりて、行人のはからひにあらず、金剛の信心となるゆへに正定聚のくらゐに住すといふ、このころなれば憶念の心自念におこるなり。この信心のおこることも、釋迦の慈父、彌陀の悲母の方便によりて無上の信心を發起せしめたまふとみえたり。これ自然の利益なりとしるべし。「來迎」といふは、「來」は淨土にきたらしむといふ、これすなはち若生者のちかひをあらはすみのりなり。穢土をすて、眞實の報土にきたらしむとなり、すなはち他力をあらはすみことなり。また「來」はかへるといふ、かへるといふは、願海にいりぬるによりて、かならず大涅槃にいたるを法性のみやこへかへるとまふすなり。「法性のみやこ」とまふすは、法身といふ如來のさとりを自然にひらくなり、さとりひらくときを「法性のみやこへかへる」とまふすなり。これを、「眞如實相を證す」ともいふ、「無爲法身」ともいふ、「滅度にいたる」ともいふ、「法性の常樂

【等正覺】 正定聚の異名となす。

【願生彼國等】 第十八願成就の文。

【おほよそ等】 以下俯意を總結す。

を證す」ともいふ、「無上覺にいたる」ともまふすなり。このさとりをうれば、すなはち大慈大悲きはまりて生死海にかへりいりて、よろづの有情をたすくるを、「普賢の徳に歸せしむ」といふなり、この利益におもむくを、「來」といふ、これを、「法性のみやこへかへる」といふなり、「迎」といふはむかへたまふといふ、まつといふこゝろなり。選擇本願の尊號、無上智慧の信心をききて、一念もうたがふこゝろなければ眞實信心といふ、この信心をうれば、等正覺にいたりて補處の彌勒におなじくして無上覺をなるべしといへり、すなはち正定聚のくらゐにさだまるなり。このゆへに信心やぶれず、かたぶれず、みだれぬこと金剛のごとくなり、しかれば金剛の信心といふなり。大經には、「願生彼國即得往生住不退轉」とのたまへり。「願生彼國」は、かのくにむまれんとねがふべきなり、「即得往生」は、信心をうればすなはち往生すといふ、「すなはち往生す」といふは、不退轉に住するをいふ、「不退轉に住す」といふは、すなはち正定聚のくらゐにさだまるなり、「一成等正覺」ともいへり。これを「即得往生」といふなり。「即」はすなはちといふ、すなはちといふは、ときをへだてず、ひをへだてぬをいふなり。

おほよそ十方世界にあまねくひろまることは、法藏菩薩の四十八の大願のなかに、第十七の願に、「十方無量の諸佛にわがなをほめられとなへられん」とちかひたまへる一乘大智海の誓願を成就したまへるによりてなり。「阿彌陀經」の證誠護念のありさまにてあきらかなり。證誠護念の御こゝろは、「大經」にもあらはれたり、すでに稱名の本願は選擇

【悲願に】 第十七願のこと。

の正因たること悲願にあらはれたり。この文のころは、おもふほどはまふさず、これにてをしはからせたまふべし。この文は後善導法照禪師とまふす聖人の御釋なり。この和尚をば法道和尚と慈覺大師はのたまへり。またつたへて廬山の彌陀和尚ともまふす、淨業和尚ともまふす、唐朝の光明寺の善導和尚の化身なり、このゆへに後善導とまふすなり。

彼佛因中立弘誓 聞名念我總迎來 不簡貧窮將富貴 不簡下智與高才

不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深 但使廻心多念佛 能令瓦礫變成金

【二】 五會法事讚中にある慈愍の般舟三昧讚の文。斯文の註解に於て第十八願意を表さんとす。

【諸佛稱名の悲願】 第十七願意。

「彼佛因中立弘誓」。このころは「彼」はかのといふ、「佛」は阿彌陀佛なり。「因中」は法藏菩薩とまふしゝときなり。「立弘誓」は「立」はたつといふ、なるといふ、「弘」はひろしといふ、ひろまるといふ、「誓」はちかひといふ、法藏比丘、超世無上のちかひをおこしてひろくひろめたまふとなり。「超世」は餘の佛の御ちかひにすぐれたまへりとなり。「超」はこえたりといふ、うへなしといふ。如來、弘誓をおこしたまへるやうは、この「唯信鈔」にくはしくあらはせり。「聞名念我」といふは、「聞」はきくといふ、信心をあらはすみのりなり。「名」は如來のちかひの名號なり。「念我」とまふすは、このみなを憶念せよとなり。諸佛稱名の悲願にあらはせり。「憶念」といふは、信心まことなるひとは、本願をつねにおもひいづるころのたえずつねなるなり。「總迎來」といふは、「總」はふさねてといふ、すべてみなといふころなり。「迎」はむかふるといふ、まつといふ、他力をあらはすころなり。「來」はかへるといふ、きたるといふ、法性のみまこへむかへてかへらしむとなり。

【經】 大經。

【齋行】 齋は制戒に順じて食事すること、例へば非時に食せば破戒とするが如き。食時、食儀等をも戒となす【一心金剛法戒】 天台に傳ふる戒法

法性のみやこより、衆生利益のために娑婆界にきたりたまふゆへに、「來」をきたるといふなり。經には「從如來生」とのたまへり。「從如」といふは、眞如よりとまふす、「來生」といふは、きたり生ずといふなり。「不簡貧窮將富貴」といふは、「不簡」はえらばずといふ、きはぬこゝろなり。「貧窮」はまづしくたしなきなり。「將」はまさにといふ、もてといふ、みてゆくといふ。「富貴」はとめるといふ、よきひとといふ、これらをまさにもてえらばず淨土へみてゆくとなり。「不簡下智與高才」といふは、「下智」は智慧あさく、せばく、すくなきものなり。「高才」は才學ひろきもの、これらをえらばずとなり。「不簡多聞持淨戒」といふは、多聞は聖教をひろくおほくき、信するなり。「持」はたもつといふ、たもつといふはならひまなぶこゝろをうしなはず、ちらさぬなり。「淨戒」は大乗、小乗のもろ／＼の戒品、五戒、八戒、十善戒、小乗の具足戒、三千の威儀、六萬の齋行、大乘の一心金剛法戒、三聚淨戒へ梵網の五十八戒等、すべて道俗の戒品、これらをたもつを「持」といふ。これらの戒品をやぶるを「破」といふなり。かやうのさま／＼の大小の戒品をたもてるいみじきひと／＼も、他力眞實の信心をえてのちに、眞實の報土には往生をとぐるなり。みづからおの／＼の戒善、おの／＼の自力の信、自力の善にては眞實の報の淨土にはむまれずとするべし。「不簡破戒罪根深」といふは、「破戒」はかみにあらはずところのよろづの道俗の戒品をうけてやぶりすてたるもの、これらをきはらずとなり。「罪根深」といふは、十惡、五逆の惡人、謗法、闍提の罪人、おほよそ善根すくなきもの、惡業おほきもの、善心あさきも

の、惡心あくしんふかきもの、かやうのあさましきさまのつみふかきひとを、「深かゝ」といふ、ふかしといふことばなり。すべてよきひと、あしきひと、たふときひと、いやしきひとを、無礙むがい光佛くわうぶつの御ごちかひにはえらばず、これをみちびきたまふをさきとし、むねとするなり。眞實しんじつ信心しんじんをうれば、實報じつばう土どにむまるとおしへたまへるを、淨土じゆつど眞宗しんしゆとすとするべし。「總迎來そうげうらい」といふは、すべてみな眞實しんじつ信樂しんがくあるものを淨土じゆつどへむかへてかへらしむとなり。「但使たんにし廻心くわいしん多念たねん佛ぶつ」といふは、「但使たんにし廻心くわいしん」はひとへに廻心くわいしんせしめよといふことばなり。「廻心くわいしん」といふは、自力じりきの心しんをひるがへしするをいふなり。實報じつばう土どにむまるゝひととは、かならず無礙むがい光佛くわうぶつの心中しんちゆうにおさめとりたまふゆへに、金剛こんかうの信心しんじんとなるなり。この故ゆゑに、「多念たねん佛ぶつ」とまふすなり。「多た」は大だいの心しんなり。勝しょうの心しんなり。増上ぞうじやうのこゝろなり。大だいはおほきなり。勝しょうはすぐれたり。よろづの善ぜんにまされりとするべし、増上ぞうじやうはよろづの善ぜんにすぐれたるなり。これすなはち他力たうりき本願ほんがんのゆへなり。「自力じりきのこゝろをすつ」といふは、やう／＼さま／＼の大小だいせうの聖人しょうにん、善惡ぜんあくの凡夫ぼんぷのみづからが身をよしとおもふこゝろをすて、身をたのます、あしきこゝろをさかしくかへりみず、またひとをあしよしとおもふこゝろをすて、ひとすぢに具縛ぐしやくの凡夫ぼんぷ、屠沽じゆこの下類げるい、無礙むがい光佛くわうぶつの不可思議ふかしのぎの誓願せがらん、廣大くわうだい智慧しちゑの名號なごうを信樂しんがくすれば煩惱ぼんごうを具足ぐそくしながら無上大涅槃むかうだいねはんにいたるなり。「具縛ぐしやく」といふは、よろづの煩惱ぼんごうにしばられたるわれらなり。「煩ぼん」は身をわづらはす、「惱ごう」はこゝろをなやますといふ。「屠じゆ」はよろづのいきたるものをころしほふるもの、これは獵師れつしといふものなり。「沽こ」はよろづのものをうりか

【慈愍三藏】唐玄
宗時代の僧、慈愍
流念禪の開祖。義
淨三藏に師事し入
竺十數年せりとい
ふ、その著多しと
傳ふも獨立して現
存するものなし。
【三】善導の法事
讃の文。自力雜善
を批判し専修專念
の念佛をすすむ。
【曇首等】讚阿彌
陀佛偈。

ふものなり。これはあきひとなり。これらを、「下類」といふなり。かやうのあしきひと、
 獵さまぐのものは、みないしかはらつぶてのごとくなるわれらなり。「能令瓦礫變成
 金」といふは、「能」はよくといふ、「令」はせしむといふ、「瓦」はかはらといふ、「礫」はつ
 ぶてといふ、「變成金」は、「變成」はかへなすといふ、「金」はこがねといふ、如來の本願を
 信ずれば、かはらつぶてのごとくなるわれらを、こがねにかへなさしむたとへたまへる
 なり。あきひと獵師などは、いしかはらつぶてのごとくなるを、如來攝取のひかりにおさ
 めとりたまひてすてたまはず、これひとへにまことの信心のゆへなればなりとしるべし。
 「攝取のひかり」とまうすは、無礙光佛の御こゝろのうちにおさめとりたまふゆへに、金剛
 の信心とまうすなり。文のこゝろは、おもふほどはまふしあらはしさふらはねどもあらあ
 らまふすなり。ふかきことは、よからんひとにもとせたまふべし。この文は慈愍三藏と
 まふす大竺の聖人の御釋なり、震旦には慧日三藏とまふすなり。
 (三) 極樂無爲涅槃界 隨緣雜善恐難生 故使如來選要法 教念彌陀專復專
 「極樂無爲涅槃界」といふは、「極樂」とまふすはかの安樂淨土なり、よろづのたのしみつ
 ねにして、くるしみまじはらざるなり。かのくにをば安養といへり、曇鸞和尚は、ほめた
 てまつりて安養とまふすとのたまへり。また「論」には、「蓮華藏世界」ともいへり、「無爲」
 ともいへり。「涅槃界」といふは、無明のまどひをひるがへして無上覺をさとるなり。「界」
 はさかひといふ、さとりをひらくさかひなりとしるべし。「涅槃」とまふすに、その名無量

【二種の法身】法性法身は無色無形無生無滅、従つて無に則ち知られざる事なし。かかる意味に於て法性、方便の二身は不二不異とさる。

【光明無量】彌陀は第十二第三の光壽二無量の願を成就せる報身なり

【應化】應身、化身

なり、くはしくまふすにあたはずおろく、その名をあらはすべし。「涅槃」をば、「滅度」といふ、「無爲」といふ、「安樂」といふ、「常樂」といふ、「實相」といふ、「法身」といふ、「法性」といふ、「眞如」といふ、「一如」といふ、「佛性」といふ、佛性すなはち「如来」なり、この如来微塵世界にみち／＼たまへり、すなはち一切群生海のこゝろなり。「草木國土こと／＼くみな成佛す」ととけり。この一切有情の心に、方便法身の誓願を信樂するがゆへに、この「信心」すなはち佛性なり、この佛性すなはち法性なり、法性すなはち法身なり。しかれば佛について二種の法身まします。ひとつには法性法身とまふす、ふたつには方便法身とまふす。法性法身とまふすは、いろもなしかたちもまします、しかればこゝろもおよばずことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして「方便法身」とまふす。その御すがたに、法藏比丘となりのたまひて、不可思議の四十八願をおこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに、光明無量の本願、壽命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、世親菩薩は「盡十方無礙光如来」となすけたてまつりたまへり。この如来すなはち誓願の業因にむくひたまひて「報身如来」とまふすなり、すなはち阿彌陀如来とまふすなり。「報」といふは、たねにむくひたるゆへなり。この報身より、應化等の無量無數の身をあらはして、微塵世界に無礙の智慧光をはなたしめたまふゆへに、「盡十方無礙光佛」とまふす。ひかりの御かたちにて、いろもまします、かたちもまします、すなはち法性法身におなじくして、無明のやみをはらひ惡業にさへられず、このゆへに「無礙光

とまふすなり、無礙は有情の惡業煩惱にさへられずとなり。しかれば阿彌陀佛は光明なり、光明は智慧のかたちなりとしるべし。「隨緣雜善惡難生」といふは、「隨緣一は衆生のおのゝ縁にしたがひて、もろゝの善を修するを極樂に廻向するなり、すなはち八萬四千の法門なり。これはみな自力の善根なるがゆへに實報土にはむまれずときらはるゝゆへに「恐難生」といへり。「恐」はおそるといふ、實報土に雜善自力の善むまるといふことをおそるゝなり。「難生」はむまれがたしとなり。「故使如來選要法」といふは、釋迦如來よろづの善のなかより名號をえらびとりて、五濁惡時惡世界惡衆生邪見無信のものにあたまへるなりとしるべし。これを「選」といふ、ひろくえらぶといふなり。「要」はもはらといふ、もとむといふ、ちぎるといふなり。「法」といふは名號なり。「教念彌陀專復專」といふは、「教」はおしふといふ、のりといふ、釋尊の教勅なり。「念」は心におもひさだめて、ともかくもはたらかぬこゝろなり。すなはち選擇本願の名號を一向專修なれとおしへたまふことなり。「專復專」といふは、はじめの「專」は一行を修すべしとなり、「復」はまたといふ、かさぬといふ。しかればまた、「專」といふは一心なれとなり、一行一心をもはらなれとなり。「專」は一といふことばなり。もはらといふはふたごゝろなかれとなり、ともかくもうつるこゝろなきを、「專」といふなり。この一行一心なるひとを、「彌陀攝取してすてたまはざれば、阿彌陀となづけけたてまつる」と、光明寺の和尙はのたまへり。この一心は横超の信心なり。「横」はよこさまといふ、「超」はこえてといふ。よろづの法に

【彌陀攝取等】善導の往生禮讚の語。

【三信心】大經の第十八願文の三心、信樂欲生の三心を三信心といふ。
 【三心】至誠心、深心、廻向發願心の三心。
 【淨土の大菩提心】大菩提心は佛果菩提に至り正覺を成ぜんとする心。眞實信心が則ち願作佛心なるが故に聖道の大菩提心に對し淨土の大菩提心といふ。

すぐれて、すみやかにとく生死の大海をこえて無上覺にいたるゆへに、「超こまふすなり。これすなはち如來大悲の誓願力なるがゆへなり。この信心は、攝取のゆへに金剛心となる。これは念佛往生の本願の三信心なり。『觀經』の三心にはあらず、この眞實信心を世親菩薩は「願作佛心」とのたまへり。この淨土の大菩提心なり。しかればこの願作佛心はすなはち度衆生心なり、この「度衆生心」とまふすは、すなはち衆生をして生死の大海をわたすこゝろなり。この信樂は衆生をして無上大涅槃にいたらしめたまふ心なり。この信心すなはち大慈大悲心なり。この信心すなはち佛性なり、佛性すなはち如來なり。この信心をうるを慶喜といふ、慶喜するひとは諸佛にひとしきひととなづく。『慶』はうべきことをえてのちによるこぶこゝろなり、信心をえてのちによるこぶこゝろなり。『喜』はこゝろのうちによるこぶこゝろたえずして憶念つねなるなり。『踊』は天におどるといふ。「躍」は地におどるといふ、よろこぶこゝろのきはまりなきかたちをあらはすなり。信心をえたるひとをば芬陀利華にたとへたまへり。この信心をえがたきことを『大經』には、「若聞斯經信樂受持、難中之難無過此難」とおしへたまへり。『小經』には、「極難信法」とみへたり。この文のこゝろは、「この經をきゝて信すること、かたきがなかにかたし、これにすぎてかたきことなし」となり。釋迦牟尼如來は、五濁惡世にいで、この難信の法を行じて無上涅槃にいたれりとときたまふ。さてこの智慧の名號を濁惡の衆生にあたへたまへるなり。十方諸佛の證誠、恆沙如來の護念、ひとへに眞實信心のひとのためなり。釋迦は慈

【過去久遠】この文は涅槃經の文、宿善を感知し悦ぶ意を表す。

【四】觀無量壽經上品の文。本文を中心にして以下往生の正因は唯信心なるを明す。

【定機散機】定機は、妄念雜慮を止め心を一境に住して定善をする機根散機は、散心のまま惡を廢し善を行ふ機根をいふ。
【雜行雜修】雜行は正行に非ざるものを往生の因とするをいひ雜行を修するを雜修といふ。親鸞はたとへば正行を修するも自力の執心あれば此を雜修と批判す。

父、彌陀は慈母、われらがち、は、として信心をおしへたまへりとしるべきなり。過去久遠に三恆河沙の諸佛の世にいでたまはしみるとにして、自力の大菩提心をおこしき、恆沙の善根を修せしめしによりて、いま大願業力にまふあふことをえたり。他力の三信心をえたらんはとは、ゆめ、餘の善をそしり、餘の佛聖をいやしふすることなかれとなり。

「具三心者、必生彼國」といふは、三心を具すればかならずかのくにむまるとなり。しかれば善導は、「具此三心者、必得往生也、若少一心即不得生」とのたまへり。「具此三心」といふは、みつのこゝろを具すべしとなり。「必得往生」といふは、「必」はかならずといふ。「得」はうるといふ、うるといふは往生をうるとなり。「若少一心」といふは、「若」はもしといふ、ごとしといふ。「少」はかくるといふ、すくなしといふ、一心かけぬれば、むまるとものなしとなり。一心かくるといふは、信心のかくるなり、信心かくるといふは、本願眞實の三信心のかくるなり。「觀經」の三心をえてのちに、「大經」の三信心をうるを一心をうるとはいふなり。このゆへに「大經」の三信をえざるをば一心かくるといふなり。この一心かけぬれば實報土にむまれずとなり、「觀經」の三心は定機散機の自力の心なり。定散の二善を廻して、「大經」の三信をえんとねがふ方便の深心と至誠心とするべし。眞實の三心をえざれば、眞實の報土にむまれず、眞の報土にむまれざれば、「即不得生」といふなり。

「即」はすなはちといふ、「不得生」はむまるとことをえずといふなり。定機散機のひと、雜行雜修して三信心かけたるゆへに、多少曠劫をへて、「大經」の三信心をえてのちに眞實報

【胎生邊地】佛智を疑ひ修善する者の往生及び胎生の淨土を云ふ。胎生は五百年間三寶を見聞するを得ず、恰も人の胎内に居るが如きにたとふ。邊地は眞實淨土に非ざる化土、邊土をいふ。

【不得外現等】散善義の不得外現眞善精進之相内懷虛假の文。

【如來の等】大經の五惡段の經文を引き内懷虛假の相を現す。

【斟酌】

唯信鈔の

上にむまるべきゆえに、すなはちむまれずといふなり。もし胎生邊地にむまれても五百歳をへ、あるひは億千萬衆のなかに、ときにまれに一人まことの報土にはすゝむとみへたり。三信心をえんことをよくくこゝろえてねがふべきなり。

「不得外現眞善精進之相」といふは、淨土をねがふひとは、あらはにかしこきすがた善人のかたちをふるまはざれ、精進なるすがたをしめすことなかれとなり。そのゆへは、内懷虛假なればなり。「内」はうちといふ、こゝろのうちに煩惱を具せるゆへに、虚なり假なり。虚はむなしくして實ならず、假はかりにして眞ならず。しかればいまこの世を如來のみに、末法惡世とさだめたまへるゆへは、一切有情まことのこゝろなくして、師長を輕慢し、父母に孝せず、朋友に信なくして惡をのみこのむゆへに、世間出世みな心口各異言念無實なりとおしへたまへり。「心口各異」といふは、こゝろとくちにいふこと、みなおののことなり、「言念無實」といふは、ことばとこゝろのうちと實なしといふなり。「實」はまことといふことばなり、この世のひとは無實のこゝろのみにして、淨土をねがふひとは、いつはりへつらひのこゝろのみなりときこへたり。世をすつるも、名のこゝろ利のこゝろをさきとするゆへなり。しかれば善人にもあらず、賢人にもあらず、精進のこゝろもなし、懈怠のこゝろのみにして、うちはむなしく、いつはりかざり、へつらふこゝろのみつねにして、まことなるこゝろなき身としるべし。

「斟酌すべし」といふは、ことのありさまにしたがひて、はからふべしといふこゝろなり。

【不簡破戒等】 惡三藏の八句の偈中第六句。
【五】 第十八願本文を中心して信心は必ず名號を具すことを表す。

【非權非實】 唯信鈔の法華の一念隨喜といふは、ふかく非權非實の理に迷するなり一を指す。

【法華宗】 天台宗
【汝若不能念】 觀經の下の品に「汝若不能念者應稱無量壽佛」とあり。
【具足十念】 前の觀經、下下品續きの文。

「不簡破戒罪根深」といふは、もろくの戒をやぶり、つみふかきひとをきははずとなり。このやうはかみにくはしくあかせり、よくみるべし。

「乃至十念若不生者不取正覺」といふは、選擇本願の文なり。この文のころは、「乃至十念のちかひの名號をとなへんひと、もしわがくにむまれずば、佛にならじ」とちか

ひたまへるなり。「乃至」は、かみしも、おほき、すくなき、ちかき、とおき、ひさしき、みなおさむることばなり。多念にころをとどめ、一念にとどまるころを、やめんがために、未來の衆生をあはれみて、法藏菩薩かねて願じまします御ちかひなり。よくこ

ころうべし、慶樂すべきなり。
「非權非實」といふは、法華宗のおしへなり、淨土眞宗のころにあらず。聖道家のころなり、易行道のころにあらず、かの宗のひとにたづぬべし。

「汝若不能念」といふは、五逆十惡の罪人、不淨說法のもの、やまひのくるしみにとちられて、ころに彌陀を稱念したてまつらずば、たゞ口に南無阿彌陀佛となへよと、すゝ

めたまへるみのりなり。これは口稱を本願とちかひたまへるをあらはさんとなり、「應稱無量壽佛」とのたまへるは、このころなり、「應稱一はとなふべし」となり、「具足十念、稱南

無阿彌陀佛、稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪」といふは、五逆の罪人はその

身に つみをもてること、八十億劫のつみをもてるゆへに、十念南無阿彌陀佛となふべしと、すゝめたまへるなり。一念に八十億劫のつみをけすまじきにはあらねども、五逆

【若我成佛等】善導の往生禮讃の第十八願加減の文。

のつみのおもきほどもをしらせんがためなり。「十念」といふは、たゞ口に十返をとなふべしとなり。

しかれば選擇本願には、「若我成佛、十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺」とまふすは、彌陀の本願には、「下至」といへるは、下は上に對して、とこえまでの衆生かならず往生すべしとせられたる念なり。念と聲とはひとつこゝろなり。念をはなれたる聲なし、聲をはなれたる念なしとしるべし。この文どものこゝろは、おもふほどはまふさす、よからんひとにたづぬべし、ふかきことはこれにてもはからはせたまふべし。

南無阿彌陀佛

ゐなかのひとゝの、文字のこゝろもしらす、あさましき愚癡きはまりなきゆへに、やすくこゝろえさせんとて、おなじことをたび〜とりかへし〜かきつたり。こゝろあらんひとは、おかしくおもふべし。あざけりをなすべし。しかれどもあほかたのそしりをかへりみず、ひとすぢにおろかなるものを、こゝろえさせんとてしるせるなり。

正嘉元歲丁巳八月十九日

愚禿親鸞八十五歲書之

唯信鈔文意終

末

燈

鈔

【當書一卷は親鸞の法語及び消息三十二章を輯録す。正慶二年從寛の編纂せるもの。普通に未燈鈔と稱せらる。

【一】此章は有念無念の事に就いて述べられたる消息なり。

【定心、散心】この二は對概念にして、散心は古等の散亂せる意識定心は其統一意識を云ふ。
【邊地等】邊地、胎生、懈慢界は其方便化土、佛智疑惑者は此處に止まると云はれ、違

本願寺親鸞大師御己證並邊州所々御消息等類聚鈔

(二) 有念無念事

來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆへに、臨終といふことは諸行往生のひとにいふべし。いまだ眞實の信心をえざるがゆへなり。また十惡五逆の罪人のほめて、善知識にあふて、すゝめらるゝときにいふことなり。眞實信心の行人は、攝取不捨のゆへに、正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終をまつことなし、來迎をたのむことなし、信心のさだまるとき、往生またさだまるといふなり。この信心をうるゆへに、かならず無上涅槃にいたるなり。誓願の信樂さだまるといふなり。この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり。この信心を一心といふ。この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり。又正念といふにつきて二あり。一には定心の行人の正念。二には散心の行人の正念あるべし。この二の正念は他力のなかの自力の正念なり。定散の善は諸行往生のことばにおさまるなり。この善は他力のなかの自力の善なり。この自力の行人は來迎をまたすしては、邊地胎生懈慢界までもむまるべからず。このゆへに第十九の誓願に、もろくの善をして淨土に廻向して、往生せんとねがふ人の臨終には、われ現じてむかへんとかひたまへり。臨終をまつこと、來迎往生をたのむといふことは、

地は淨土のほとり
胎生は疑の華開け
ずして往生する相
の胎内にあるが如
きを云ふ。

【大乘至極】大なる
乗物の意にて、
超比較的勝道を意
味す。

この定心散心の行者のいふことなり。選擇本願は、有念にあらす、無念にあらす。有念はすなはち色形をおもふにつきていふことなり。無念といふは、形をこゝろにかけず、色をこゝろにおもはずして、念もなきをいふなり。これみな聖道のをしへなり。聖道といふはすでに佛になりたまへる人の、われらがこゝろをすゝめんがために、佛心宗、眞言宗、法華宗、華嚴宗、三論宗等の大乘至極の教なり。佛心宗といふは、この世にひろまる禪宗これなり。また法相宗、成實宗、俱舍宗等の權教小乗等の教なり。これみな聖道門なり。權教といふはすなはち、すでに佛になりたまへる佛菩薩の、かりにさまざまの形をあらはして、すゝめたまふがゆへに權といふなり。淨土宗にまた有念あり、無念あり。有念は散善の義、無念は定善の義なり。淨土の無念は、聖道の無念にはにす。またこの聖道の無念のなかに、また有念あり。よくくとふべし。淨土宗のなかに眞あり。假あり。眞といふは選擇本願なり。假といふは定散二善なり。選擇本願は淨土眞宗なり。定散二善は方便假門なり。淨土眞宗は大乘の中の至極なり。方便假門の中にまた大小權實の教あり。釋迦如來の御善知識は、一百一十人なり。「華嚴經」にみえたり。

南無阿彌陀佛

建長三歲 辛酉九月廿日

愚禿親鸞七十九歲

【二】 此章は親鸞歸洛後關東の信者より自力他力の不審生じ其を具申せる性信の文書に對する返書なり。
【かさま】 常陸國の笠間。

【義】 計度分別の義。
【義とす】 無我の自覺に於て絶對依憑する心相を云ふ。
【聖人】 法然を指す。

(三) かさまの念佛者の、うかゞひとはれたること、それ淨土眞宗のこゝろは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすでに天竺の論家、淨土の祖師のおほせられたることなり。まづ自力とまふすことは、行者のをのの縁にしたがひて、餘の佛號を稱念し、餘の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからひのこゝろをもて、身口意のみだれごゝろをつくるひ、めでたうしなして淨土へ往生せんとおもふを、自力とまふすなり。また他力とまふすことは、彌陀如來の御ちかひのなかに、選擇攝取したまへる、第十八の念佛往生の本願を信樂するを、他力とまふすなり。如來の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと、聖人のおほせごとにてありき、義といふことは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば、義といふなり。他力は本願を信樂して、往生必定なるゆへに、さらに義なしとなり。しかればわがみのわるければ、いかでか如來むかへたまはんとおもふべからず。凡夫はもとより煩惱具足したるゆへに、わるきものとおもふべし。またわがこころよければ往生すべしとおもふべからず。自力の御はからひにては、眞實の報土へむまるべからざるなり。行者のをのの自力のはからひにては、懈慢邊地の往生、胎生疑城の淨土までぞ、往生せらるゝことにてあるべきとぞ、うけたまはりたりし。第十八の本願成就のゆへに、阿彌陀如來とならせたまひて、不可思議の利益きはまりましまさぬ御かたちを、天親菩薩は盡十方無礙光如來とあらはしたまへり。このゆへによきあしき人をきはらず、煩惱のこゝろをえらばず、へだてずして、往生はかならずするなりと、しるべしと

【金剛心】信心の
堅實なるを云ふ。

なり。しかれば惠心院の和尚は、一往生要集一に、本願の念佛を信樂するありさまをあらはせるには、行住坐臥をえらばず、時處諸縁をきはらずとおほせられたり。眞實の信心をえたるひとは、攝取のひかりにおさめとられまいらせたりと、たしかにあらはせり。しからば無明煩惱を具して、安養淨土に往生すれば、すなはち無上佛果にいたると、釋迦如來ときたまへり。しかるに五濁惡世のわれら、釋迦一佛のみことを信受せんこと、ありがたかるべしとて、十方恆沙の諸佛證人とならせたまふと、善導和尚は釋したまへり。釋迦、彌陀、十方の諸佛みなおなじ御こゝろにて、本願念佛の衆生には、かげのかたちこそへるのごとくして、はなれたまはずとあかせり、しかればこの信心の人を、釋迦如來はわがしたしきともなりと、よろこびまします。この信心の人を、眞の佛弟子といへり。この人を、正念に住する人とす。この人は攝取してすてたまはざれば、金剛心をえたる人と申なり、この人を上々人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人ともまふすなり。この人は、正定聚のくらゐにさだまれるなりとしるべし。しかれば彌勒佛とひとしき人とのたまへり。これは眞實信心をえたるゆへに、かならず眞實の報土に往生するなりとしるべし。この信心をうることは、釋迦、彌陀、十方諸佛の御方便よりたまはりたるとしるべし。しかれば諸佛の御をしへをそしることなし。餘の善根を行する人をそしることなし、この念佛する人をにくみそしる人も、にくみそしることあるべからず。あはれみをなし、かなしむこゝろをもつべしとこそ、聖人はおほせごとありしか。あなかしこく。佛恩の

ふかきことは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、彌陀の御ちかひのなかに、第十九第二十の願の御あはれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ、佛恩のふかきことそのきはもなし。いかにいはんや眞實の報土へ往生して、大涅槃のさとりをひらかんこと、佛恩よく／＼御案ともさふらふべし、これさらに性信房、親鸞がはからひまふすにはあらず候。ゆめく

建長 七歳 乙卯十月三日

此御書者白性信聖之遺跡、以聖人御自筆之本、寫與彼門弟中云々
愚 禿 親 鸞 八十歳書之

【三】 此章は等正覺の質疑に對して應答せしものなり

【補處】 成佛して前佛の處を補ふ事【彌勒】 將來成佛して釋迦の後を嗣ぐと云はるる菩薩の名。

(二) 信心をえたる人はかならず、正定聚のくらひに住するがゆへに、等正覺の位と申なり。『大無量壽經』には攝取不捨の利益にさだまるを、正定聚となづけ、『無量壽如來會』には、等正覺とときたまへり。その名こそかはりたれども、正定聚等正覺はひとつこゝろひとつくらゐなり。等正覺とまふすくらゐは、補處の彌勒とおなじくらゐなり。彌勒とおなじく、このたび無上覺にいたるべきゆへに彌勒とおなじとときたまへり。さて『大經』には次如彌勒とはまふすなり。彌勒はすでに佛にちかくましますば彌勒佛と諸宗のならひはまふすなり。しかれば彌勒におなじくらゐなれば、正定聚の人は如來とひとしとも申なり。淨土の眞實信心の人は、この身こそあさましき不淨造惡の身なれども、心はずでに如來と

【三會】彌勒成佛する時龍華樹下に於て時衆に三回に互りて説法すと彌勒六部經に説かるるを云ふ。

【性信御坊】二十回輩の一、下總横曾根報恩寺の開基。

【四】此章は、如来とひとしと云ふ語の疑問に應じられたる章なり。

ひとしければ、如来とひとしとまふすこともあるべしとしらせたまへ。彌勒すでに無上覺にその心さだまりてあるべきに、ならせたまふによりて、三會のあかつきとまふすなり。淨土眞實のひと、このころをころうべきなり。光明寺の和尚の『般若論』には信心のひとはその心すでにつねに淨土に居すと釋したまへり。居すといふは淨土に信心のひとのころつねにゐたりといふころなり。これは彌勒とおなじといふことをまふすなり。これは等正覺を彌勒とおなじとまふすによりて、信心のひととは如来とひとしとまふすころなり。

正嘉元年巳十月十日

性信御坊

親

鸞

これは經の文なり、『華嚴經』に言、信心歡喜者與諸如来等といふは、信心をよろこぶひととは、もろ／＼の如来とひとしといふなり。もろ／＼の如来とひとしといふは信心をえてことによるこぶひととは、釋尊のみことには、見敬得大慶、則我善親友ときたまへり。また彌陀の、第十七の願には、十方世界、無量諸佛、不悉咨嗟、稱我名者、不取正覺とちかひたまへり。願成就の文には、よろづの佛にほめられよろこびたまふとみえたり。すこしもうたがふべきにあらず。これは如来とひとしといふ文どもをあらはししるすなり。

正嘉元年巳十月十日

親

鸞

【眞佛御坊】二十
四輩の一、高田專
修寺の第二祖。

【五】此章は聖道
門の無爲法性自然
の義と、淨土門の
本願他力の自然と
を區別せんとする
にあり。

【れう】湖月抄に
「御れうは御ため
とぶぶに同じ。」

眞佛御坊

自然法爾事

(五) 自然法爾事
自然といふは、自はをのづからといふ、行者のはからひにあらす。然といふはしからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらす、如來のちかひにてあるがゆへに法爾といふ。法爾といふはこの如來の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふなり。法爾はこの御ちかひなりけるゆへに、おほよそ行者のはからひのなきをもて、この法の徳のゆへにしからしむといふなり。すべて人のはじめてはからはざるなり。このゆへに義なきを義とすとしるべしとなり。自然といふはもとよりしからしむといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらすして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とは申ぞときてさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには無上涅槃とは申さず、かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて彌陀佛とまふすぞとき、ならひてさふらふ。彌陀佛は、自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちに、この自然のことは、つねにさたすべきにあらざるなり。つねに自然をさたせば、義な

きを義とすといふことは、なを義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるなり。
正嘉貳年十二月十四日

愚 禿 親 壽 六十八歳

【六八】此章は乗信房より淨土教の意趣は學生沙汰を姿とせず、唯他力に乘ずべしと同行に説きし事を上申せしに對し下されしものなり。

なによりも、ごぞことし老少男女おほくの人人の、死にあひて候らんことこそあはれに候へ。たゞし、生死無常のことほり、くはしく如來のときをかせおはしまして候へば、おどろきおぼしめすべからず候なり。まづ善信が身には、臨終の善惡をばまふさず。信心決定の人ほうたがひなければ、正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚癡無智の人も、をはりもめでたく候へ。如來の御はからひにて往生するよし、ひとくくに申され候ける、すこしもたがはず候なり。としごろ、をのくに申しさふらひしこと、たがはずこそ候へ。かまへて學匠沙汰させたまひさふらはで、往生をとげさせたまひ候べし。故法然聖人は淨土宗の人は愚者になりて往生すと候しことを、たしかにうけたまはり候しうへに、ものもおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覽じては、往生必定すべしとてゑませたまひしをままいらせさふらひき。文沙汰して、さかくしきひとのまいりたるをば、往生はいかゞあらんずらんと、たしかにうけたまはりき。いまにいたるまで、おもひあはせられ候なり。ひとくくにすかされさせたまはで、御信心たぢろがせたまはずして、をのくに御往生候べきなり。たゞしひとにすかされさせたまひ候はずと

【七】この章は乗信房と淨信房との間に諸佛等同の義に就き意見の相違あり、淨信房よりそれを尋ねたるに就ての返信である

も、信心のさだまらぬ人は、正定聚に住したまはずして、うかれたまひたる人なり。乗信房にかやうに申し候やうを、人々にもまふされ候べし。あなかしこく。

文應元年十一月十三日

善 信八歳

この御消息の正本は阪東下野國おほうち御莊高田にこれあるなりと云云。

諸佛等同と云事

往生は、なにごとくも凡夫のはからひならず。如來の御ちかひにまかせまいらせられたればこそ、他力にては候らへ。様々にはからひあふて候らん、おかしく候。如來の誓願を信する心のさだまるとまふすは、攝取不捨の利益にあづかるゆへに、不退の位にさだまると、御こゝろえさふらふべし。眞實信心のさだまると申も、金剛の信心のさだまるとまふすも、攝取不捨のゆへにまふすなり。さればこそ、無上覺にいたるべき心のおこるとまふすなり。これを不退の位ともまふし、正定聚の位にいたるともまふし、等正覺にいたるともまふすなり。このこゝろのさだまるを、十方諸佛のよろこびて、諸佛の御こゝろにひとしとほめたまふなり。このゆへにまことの信心の人をば、諸佛とひとしとまふすなり。また補處の彌勒とおなじともまふすなり。この世にて眞實信心の人をまもらせたまへばこそ、阿彌陀經には、十方恆沙の諸佛護念すとはまふすことにては候へ。安樂淨土へ往生

【大師】 法然聖人

してのちに、まもりたまふとまふすことにては候はず。娑婆世界にいたるほど、護念すとはまふすことなり。信心まことなる人のこゝろを、十方恆沙の如來のほめたまへば、佛とひとしとまふすことなり。また他力と申ことは、義なきを、義とすと、まふすなり。義とまふすことは、行者のをのくのはからふことを、義とは申すなり、如來の誓願は不可思議にましますゆへに、佛と佛との御はからひなり、凡夫のはからひにあらず。補處の彌勒菩薩をはじめとして、佛智の不思議をはからふべき人は候はず。しかれば如來の誓願には、義なきを義とすと、大師聖人のおほせに候き。このこゝろのほかに、往生にいるべきこと候はずとこゝろえて、まかりすぎ候へば、人のおほせごとにはいらぬものにてさふらふなり。

二月廿五日

淨信御房御返事

私云淨信は高田門人云云

親

鸞

【八】 此章は親鸞の弟子中より五説三身等の質疑に對し、與へられしものなり。【三部經】 大經、觀經、小經。

また五説といふは、よろづの經をとかれ候に、五種にはすぎず候なり。一には佛説、二には聖弟子の説、三には天仙の説、四には鬼神の説、五には變化の説といへり、この五のなかに、佛説をもちゐて、かみの四種をたのむべからず候。この三部經は、釋迦如來の自説にてましますとしるべしとなり。四土といふは、一には法身の土、二には報身の土、三には應身の土、四には化土なり。いまこの安樂淨土は報土なり。三身といふは、一には

【佛乘】華嚴法華所説の如く。二乗三乘等を分たれず唯一成佛の法のみと説く教法。

【横超】銘文に横と云ふは他力と申す也と云ひ。他力往生は自力往生を云ふ。

法身、二には報身、三には應身なり。いまこの彌陀如来は、報身如来なり。三寶といふは、一には佛寶、二には法寶、三には僧寶なり。いまこの淨土宗は、佛寶なり。四乗といふは、一には佛乘、二には菩薩乘、三には緣覺乘、四には聲聞乘なり。いまこの淨土宗は、菩薩乘なり。二教といふは、一には頓教、二には漸教なり。いまこの教は、頓教なり。二藏といふは、一には菩薩藏、二には聲聞藏なり。いまこの教は、菩薩藏なり。二道といふは、一には難行道、二には易行道なり。いまこの教は、菩薩藏なり。二行といふは、一には正行、二には雜行なり。いまこの淨土宗は、正行を本とするなり。二超といふは、一には豎超、二には横超なり。いまこの淨土宗は、横超なり。豎超は聖道自力なり。二縁といふは、一には無縁、二には有縁なり。いまこの淨土は、有縁の教なり。二住といふは、一には止住、二には不住なり。いまこの淨土の教は、法滅百歲まで住したまひて、有情を利益したまふとなり。不住は聖道諸善なり。諸善はみな、龍宮へかくれりたまひぬるなり。思不思議といふは、思議の法は聖道八萬四千の諸善なり。不思議といふは淨土の教は不可思議の教法なり。これらは加様にしるしまふしたり。よくしらん人にたづね申したまふべし。またくはしくは、この文にてまふすべくも候はず。目もみえず候。なにごともしるすべし。候うへに、人などにあきらかに申べき身にてもあらずさふらふ。よく淨土の學生にとひ申給ふべし。穴賢く。

閏三月二日

【九】此章は教明房より誓願及び名號の不思議に就き質問せしに對して二者は同一なる事を應答せしものなり。

誓願名號同一事

御ふみ、くはしくうけたまはりさふらひぬ。さては、この御不審、しかるべしともおぼえず候。そのゆへは誓願名號と申て、かはりたること候はず。誓願をはなれたる名號も候はず。名號をはなれたる誓願も候はず候。かく申候もはからひにて候なり。たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつるうへは、何條わがはからひをいたすべき、きゝわけ、しりわくるなど、わづらはしくはおほせられさふらひあらん。これみはひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつるうへは、とかく御はからひあるべからず候。往生の業には、わたくしのはからひはあるまじく候なり。あなかしこく。たゞ如來にまかせまいらせおはしますべくさふらふ。あなかしこく。

五月五日

教名御房

親

驚

このふみをもて、ひとくにもみせまいらせさせたまふべく候。他力には義なきを義とはまふしさふらふなり。

佛智不思議と可信心事。

【教名御房】常陸國笠間の人、初め天台を學び教信と號し、後親鸞の弟子となりて法名を教養と云ひ、更に改めて教名とせらる。【二】此章は淨信よりの質問に對し唯佛智不思議を信ずるのみと教誠せしものなり。

【心光】色光に對して佛の慈心より照す光明に名く。

【なまじり】慙と書く、力に不相應なる事を強ひてなさんとする意。

【二】此章は信と行との一念の疑義を釋明せる消息。

御ふみ、くはしくうけたまはり候ぬ。さては御法門の御不審に、一念發起信心のとき、無礙の心光に攝護せられまいらせ候ゆへに、つねに淨土の業因決定すとおほせられ候これめでたく候。かくめでたくはおほせ候へども、これみなわたくしの御はからひになりぬとおぼえ候。たゞ不思議と信ぜさせたまひ候ぬるうへは、わづらはしきはからひあるべからず候。

またある人の候なること。

出世のころおほく、淨土の業因すくなしと候なるは、ころえがたく候。出世の候も、淨土の業因と候も、みなひとつにて候なり。すべてこれなまじりなる御はからひと存候。佛智不思議と信ぜさせたまひ候なば、別にわづらはしく、とかくの御はからひあるべからず候。たゞ人々のとかく申し候はんことをば、御不審あるべからず候。たゞ如來の誓願にまかせまいらせたまふべく候。とかくの御はからひあるべからずさふらふなり。あなかしこく。

五月五日

淨信御房へ

他力と申しさふらふは、とかくのはからひなきをまふしさふらふなり。

親

鸞御判

四月七日の御ふみ、五月廿六日たしかに、見さふらひぬ、さてはおほせられたること

【三】此章は有阿彌陀佛より念佛往生の信者は邊地の往生者と貶する人す消息への返信。

信の一念、行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし。行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのふへは行と申は本願の名號を一聲となへて往生すと申ことをきゝてひとこゑをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり。この御ちかひをきゝてうたがふこゝろのすこしもなきを、信の一念ときふすなり。信と行と二ときけども、行をひとこゑするぞときゝてうたがはねば、行をはなれたる信はなしときゝて候。また信をはなれたる行なしとおぼしめすべし。これみな彌陀の御ちかひと申ことをこゝろうべし。行と信とは、御ちかひを申なり。穴賢々々。いのち候はゞ、かならずのぼせたまふべし。

五月廿六日

親鸞

尋仰られ候念佛の不審の事、念佛往生と信する人は、邊地の往生とてきらはれ候らんこと、おほかたこゝろえがたく候。そのゆへは彌陀の本願とまふすは、名號をとなへんものをば極樂へむかへんとちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候なり。信心ありとも、名號をとなへざらんは詮なく候。又一向名號をとなふとも、信心あさくば往生しがたく候。されば念佛往生とふかく信じて、しかも名號をとなへんするは、うたがひなき報土の往生にてあるべく候なり。詮するところ、名號をとなふといふとも、他力本願を信ぜざらんは、邊地にむまるべし。本願他力をふかく信ぜんともがらは、なにごとにかは邊地の往生にて候べき、このやうをよく御こゝろへ

【なにごとくに】い
かてかと同じ。

【有阿彌陀佛】阿
彌陀佛の號は俊乘

房重源に始る。法

然門下には多かり

しも、親鸞には此

人一人のみ、傳記

未詳。

【三】此章は眞佛
功より攝取不捨の
事を質問せしに對
し其返信。

候て、御念佛候べし、この身は、いまはとしきはまりて候へば、さだめてさきだちて
往生し候はんすれば、淨土にて、かならずくまちなみらせ候べし。あなかしこく。

七月十三日

有阿彌陀佛御返事

（二三）攝取不捨事

たづねおほせられて候、攝取不捨のことは、一般舟三昧行道往生讀と申に、おほせ
られてさふらふをみまいらせ候へば、釋迦如來、彌陀佛、われらが慈悲の父母にて、さま
さまの方便にて、われらが無上の信心をばひらきおこさせたまふと候へば、まことの信心
のさだまることは、釋迦彌陀の御はからひとみえて候。往生の心うたがひなくなり候
は、攝取せられまいらせたるゆへとみえて候。攝取のうへには、ともかくも行者のはか
らひあるべからず候。淨土へ往生するまでは、不退のくらゐにておはしまし候へば、正
定聚のくらゐとなづけておはしますことにて候なり、まことの信心をば、釋迦如來、彌
陀如來二尊の御はからひにて、發起せしめたまひ候とみえて候へば、信心のさだまると
まふすは、攝取にあづかるときにて候なり。そのちは正定聚のくらゐにて、まこと
に淨土へむまるゝまでは候べしとみえ候なり。ともかくも行者のはからひ、ちりばか
りもあるべからず候へばこそ、他力とまふす事にて候へ。あなかしこく。

親比
驚

十月六日

眞佛御房御返事

親

慈

御判

畏申候

【二】此章は親鸞の消息には非ざるも玆に載せる理由は親鸞の印可を得たるものなる故に親鸞のものと同一視して後人之を未燈鈔中に挿入せしものなり

「大無量壽經」に、信心歡喜と候、「華嚴經」をひきて、「淨土和讃」にも、信心をよろこぶそのひとを、如來とひとしときたまふ、大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なりと、おほせられて候に、專修の人のなかに、あるひとのこゝろえちがへて候やらん、信心よろこぶ人を如來とひとしと同行達のたまふは自力なり、眞言にかたよりたりと申候なるは、人のうへをしるべきに候はねども申候。また眞實信心うるひとは、すなはち定聚のかすにいる、不退のくらゐにいりぬれば、かならず滅度をさとらしむと候。滅度をさとらしむと候は、このたびこの身のをはり候はんとき眞實信心の行者の心、報土にいたり候ひなば、壽命無量を體として、光明無量の徳用はなれたまはざれば、如來の心光に一味なり。このゆへに、大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なりとおほせられて候やらん。これは十一二三の御ちかひとこゝろえられ候。罪惡のわれらがためにおこしたまへる、大悲の御ちかひのめでたくあはれみましますうれしさ、こゝろもおよばれず、ことばもたえて申しつくしがたきことかぎりなく候。無始曠劫よりこのかた、過去遠々に、恆沙の諸佛の出世のみもとにて、大菩提心をおこすといへども、自力かなはで、二尊の御

【十一】 必至滅度の願。

【二】 光明無量の願。

【三】 壽命無量の願。

【無始曠劫】 經歷せる生死の久遠なる事を現はす語。

【師主】 親鬱を指す。

【こころ】 道心の萌す事。

【御こころ】 意趣

【おろおろ】 大略と同じ。

方便にもよほされまいらせて、雜行雜修自力疑心のおもひなし。無礙光如來の擲取不捨の御あはれみのゆへに、疑心なくよろこびまいらせて、一念にて往生さだまりて、誓願不思議とこゝろえ候ひなんには、きゝみ候にいかぬ淨土の聖教も、知識にあひまいらせんとおもはんことも、擲取不捨も、信も、念佛も、人のためとおぼえられず候。いま師主の御をしへのゆへ、こゝろを盡きて御こゝろむきをうかがひ候によりて、願意をことり、直道をもとめて、まさしき眞實報土にいたり候はんこと、このたび一念圓名にいたるまで、うれしさ御恩のいたりに候。そのうへ『彌陀經義集』におろ／＼あきらかにおほせられ候。しかるに世間の忽々にまされて、一時も時は二時三時おこたるといへども、晝夜にわすれず、御あはれみをよろこぶ業力ばかりにて、行住坐臥に時處の不淨をもきこはす、一向に金剛の信心ばかりにて、佛恩のふかさ、師主の恩徳のうれしさ、報謝のためにたゞ御名をとなふるばかりにて、日の所作とす、このやうひがさまにや候らん、一期の大事たゞこれにすぎたるはなし。しかるべくは、よく／＼こまかにおほせをかうぶり候はんとして、わづかにおもふばかりを記して申上候。さては京にひさしく候しに、そら／＼にのみ候ひて、こゝろしづかにおぼえず候しことの、なげかれ候ひて、わざといかにしてままかりのぼりて、こゝろしづかに、せめては五日、御所にさふらはゞやとねがひ候なり。噫かうまで申候も、御恩のちからなり。

進上 聖人の御所へ蓮位の御房申せ給へ

【連位】親體の侍者、傳記未詳。

十月十日

追申上候

私云慶信高田仁云云

慶信上判

念佛申候人々のなかに、南無阿彌陀佛となへ候ひまには、無礙光如来となへまいらせさふらふ人も候。これをきゝてあるひとの申し候ふなる、南無阿彌陀佛となへてのうへに、歸命盡十方無礙光如来となへまいらせ候ことは、おそれあることにてこそあれ、いまめかはしくと申しさふらふなるこのやういかゞさふらふべき。

【いまめかはしく】新しく仕出す意。
【五】此章は淨信房への返信にして淨信の信仰を印可せしものなり。

【その定に】物を例するに既定の事實を用ふる場合此語を以つて示す。

たづねおほせられて候事、かへすぐめでたく候。まことの信心をえたるひとは、すでに佛になりたまふべき御身となりておはしますゆへに、如来とひとしき人と經にとかれ候なり。彌勒はいまだ佛になりたまはねども、このたびかならず佛になりたまふべきによりて、彌勒をばすでに彌勒佛と申候なり。その定に、眞實信心をえたるひとをば、如来とひととおほせられて候なり。又乘信房の、彌勒とひと候も、ひがごとにては候はねども、他力によりて信をえてよろこぶ心は、如来とひと候を、自力なりと候らんは、いますこし乘信房の御ころのその、ゆきつかぬやうにきゝ候こそ、よく御案あるべくや候らん。自力のころにて、わが身は如来とひと候はんは、まことにあしく候べし。他力の信心のゆへに、淨信房のよろこばせたまひ候らんは、なにかは自力にて候べき。よく御はからひ候べし。このやうは、この人々にくはしく

【南無阿彌陀佛】以下此章は慶信房より六字と十字の名號を混交して稱へる事の善否を質せし文に對する返信なり。

【慶信御坊】傳記未詳。

【一六】此章も造惡を誡めしものなり

【むつゝる】 眠の字、罷戀の意。
【かは】 疑問詞（か）に詠嘆詞（は）を附したるもの。
【もとひがうたる】 ひがむに同じ。

末燈鈔

一九

中候 乘信御房にとひまいらせたまふべくさふらふ。穴賢々々。

十月廿七日

親 經

南無阿彌陀佛をとなへてのうへに、無礙光如來をまふすは、あしきことなりと候なるこそ、きはまれるひがごとくきこえ候へ。歸命は南無なり。無礙光佛は光明なり。智慧なり。この智慧はすなはち阿彌陀佛なり。阿彌陀佛の御かたちをしらせたまはねば、その御かたちをたしかに／＼しらせまいらせんとて、世親菩薩御ちからをつくしてあらはしたまへるなり。このほかのことは、少々文字をなしてまいらせさふらふなり。

慶信御房 御返事

親 覽

（一六） なによりも、聖教のをしへをもしらず、また淨土宗のまことのそこをもしらずして、不可思議の放逸無慚のものどものなかに、悪はおもふさまにふるまふべしと、おほせられ候なるこそ、かへす／＼あるべくも候はず。北の郡にありし善乘房といひしものに、つゝにあひむつゝることなくてやみにしをばみざりけるにや。凡夫なればとて、なにごともおもふさまならば、ぬすみをもし、人をもころしなごすべきかは。もとぬすみごゝろあらん人も、極樂をねがひ念佛をまふすほどのことになりなば、もとひがうたる、こゝろをも、おもひなをしてこそあるべきに、そのしるしもなからん人々に、悪くるしからずといふこと、ゆめ／＼あるべからず候。煩惱にくるはされておもはざるほかに、すまじきことを

ふるまひ、いふまじきことをもいひ、おもふまじきことをもおもふにてこそあれ。さはらぬことなればとて、ひとのためにものはらわろく、すまじきことをもし、いふまじきことをもいはど、煩惱ぼんごうにくるはされたる儀にはあらで、わざとすまじきこともせば、返々かへすくあるまじきことなり。鹿島かしまなめかたの人々のあしからんことをもいひとどめ、その邊の人々のことにひがみたることをば制せいしたまはどこそ、この邊より出來しるしにては候はめ。ふるまひはなにともこゝろにまかせよといひつると候らん。あさましきことに候。この世のわるきをもすて、あさましきことをもせざらんこそ、世をいとひ念佛ねんぶつまふすことにては候へ。としごろ念佛ねんぶつする人ひとなんどの、人のためにあしきことをもし、またいひもせば、世をいとふしるしもなし。されば善導ぜんどうの御おんをしへには、惡あくをこのむ人をば敬うやまつてとをざかれとこそ、至誠心しじやうしんのなかには、をしへおかせおはしまして候へ。いつかわがこゝろのわるきにまかせてふるまへとは候。おほかた、經釋きやうしやくをもしらず、如來にょらいの御おんことをもしらぬ身に、ゆめ／＼その沙汰さたあるべくも候はず、あなかしこ／＼。

十一月廿四日

親

鸞

【二七】此章は眞佛房より他力中に他力ありやと質問せらるに答へしものなり。

他力のなかには自力じりきとまふすことはさふらふと、きゝ候ひき、他力のなかにまた他力たうりきとまふすことは、きゝ候はず。他力のなかに自力じりきとまふすことは、雜行ざぎやう雜修ざしゆ、定心念佛じやうしんねんぶつをこ

【八】此章は隨信房より攝取不捨の事、諸佛等の臨終不期の事、此三問を提したるの對し與へられしものなり。

ころがけられて候人々は、他力のなかの自力のひとくくなり。他力のなかにはまた他力とまふすことはうけたまはり候はず。なにごとくも專信房のしばらくもぬたらんと候へば、そのとき申候べし穴賢々々。
錢貳拾貫文髓々給候穴賢々々
 十一月二十五日

親

鸞

御たづね候ことは、彌陀他力の廻向の誓願にあひたてまつりて、眞實の信心をたまはりて、よろこぶ心のさだまるるとき、攝取してすてられまいらせざるゆへに、金剛心になるときを、正定聚のくらゐに住すとまふす。彌勒菩薩とおなじくらゐになるともとかれて候めり。彌勒とひとつくらゐになるゆへに、信心まことなる人をは佛とひとしとまふす。また諸佛の、眞實信心をえてよろこぶをばまことによるこびて、われとひとしきものなりと、とかせたまひて候なり。大經には、釋尊のみことばに見敬得大慶、則我善親友とよろこばせたまひ候へば、信心をえたる人は、諸佛とひとしとかれて候めり。また彌勒をばすでに佛にならせたまはんことあるべきにならせたまひて候へばとて、彌勒佛とまふすなり。しかればすでに他力の信をえたるひとをも、佛とひとしとまふすべしとみえたり。御うたがひあるべからず候。御同行の臨終を期してとおほせられ候らんは、ちか

らおよばぬことなり、信心まことにならせたまひて候人は、誓願の利益にて候うへに、攝取してすてすと候へば、來迎臨終を期せさせたまふべからずとこそ、おぼえ候へ。いまだ信心さだまらぬ人は、臨終をも期し、來迎をもまたせたまふべし、この御文主の御名は、隨信房とおほせられ候はゞ、めでたくさふらふべし。この御ふみのかきやうめでたく候御同行のおほせられやうは、こゝろえず候。それをばちからおよばず候、あなかしこあなかしこ。

十一月廿六日

隨信御房

親

驚

【二六】この章は惡人正機の教を誤解して、造惡苦しからずと唱道せる所謂惡無礙の思想を諷めたるものなり【これ】往生の事實を指す。

【唯信鈔】聖覺法印の作。
【自力他力】隆寛律師の作なりと。

御文度々まいらせ候き。御覽せずや候ひけん。何事よりも、明法の御房の往生の本意にておはしまし候。候こそ、常陸國うちの、これにこゝろざしおはします人々の御ために、めでたきことにて候へ。往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにて候はず。めでたき智者もはからふべきことにも候はず。大小の聖人だにもともかくもはからはず、たゞ願力にまかせてこそおはしますことにて候へ、ましておのくのやうにおはします人は、たゞこのちかひありとき、南無阿彌陀佛にあいまいらせたまふこそ、ありがたくめでたくさふらふ。御果報にては候なれ。とかくはからはせたまふこと、ゆめ／＼候べからず、さきに下しまいらせ候ひし、唯信鈔「自力他力」なんどの文にて御覽候べし。

【さぞ】然ぞと書く。如斯と同じ。
【不可思議】言語道斷と同じ。
【しか】上のこそを承けて變化せる過去の事實を示す助動詞。

【順次の往生】現生活の終に来る次の生。

「それこそこの世にとりては、よき人々にておはします。すでに往生をもしておはします人にて候へば、その文どもにかゝれて候には、なにごとくすぐべくも候はず。法然聖人の御をしへを、よく御こゝろえたる人々にておはしました候き。さればこそ往生もめでたくしておはしました候へ、おほかたは、年比念佛まふしあひたまふ人々のなかにも、ひとへにわがおもふさまなることをのみ申あはれて候人々もさふらひき。いまもさぞ候らんとおぼえ候。明法房などの往生しておはしますも、もとは不可思議のひがごとをおもひなんどしたるこゝろをもひるがへしなんどしてこそ候しか。われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをおもひ、いふまじきことをいひなどすることはあるべくも候はず。貪欲の煩惱にくるはされて、欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされて、ねたむべくもなき因果をやぶるこゝろもおこり、愚癡の煩惱にまどはされて、おもふまじきことなどもおこることにてこそ候へ、めでたき佛の御ちかひあればとて、わざとすまじきことどもをもし、おもふまじきことどもをもしなんどせんは、よく／＼この世のいとしからず、身のわろきことをもおもひしらぬにて候へば、念佛にこゝろざしもなく、佛の御ちかひにもこゝろざしのおはしまさぬにて候へば、念佛せさせたまふとも、その御こゝろざしにては、順次の往生もかたくや候べからん。よく／＼、このよしを人にきかせまいらせさせたまふべく候。かやうにも申べくも候はねども、なにとなくこの邊のことを御こゝろにかけおはせたまふ人々にておはしました候へば、かくも申し候

なり。この世の念佛の義はやう／＼にかはりあふて候れば、とかく申におよばず候へども、故聖人の御をしへを、よく／＼うけたまはりておはします人々は、いまもものやうにかはらせたまふこと候はず。世かくれなきことなればきかせたまひあふて候らん。浄土宗の義みなかはりておはしましあふて候人々も、聖人の御弟子にて候へども、やうに義をいひかへなどして、身もまだひ人をもまだはかしあふて候めり。あさましきことにて候なり。京にもおほくまどひあふて候めり。田舎はさこそ候らめと、こゝろにくゝも候はず。なにごと申しつくしがたく候。又々申候べし。」

【この明教房】以下は一集に別章として編す。明教房及び其餘の人人の上京を慶ばれしものなり。
【不思議】不慮の意。
【穴賢】あなは感嘆詞。かしこは畏し意。

【善知識】以下は一集に別章とす。

【善信】親鸞の別號。

『この明教房ののぼられて候こと、まことにありがたきことゝおぼえ候。明法御房の御往生のことを、まのあたりきゝ候も、うれしく候。人々の御こゝろさしもありがたくおぼえ候。かた／＼この人々ののぼり不思議のことに候。この文をたれ／＼にも、おなじこゝろによみきかせたまふべく候。このふみは奥郡におはします同朋の御中にみなおなじく御覽候べし。穴賢々々。年比念佛して往生をねがふしるしには、もとあしかりしわがこゝろをもおもひかへして、とも同朋にもねんごろにこゝろのおはしましあはばこそ、世をいとふしるしにても候はめとこそおぼえ候へ。よく／＼御こゝろえ候べし。』

『善知識ををろかにおもひ、師をそしるものをば、謗法のもの申なり。親をそしるものをば、五逆のものと申なり、同座せざれと候なり。されば北の郡に候し善證房は、親をのり、善信をやう／＼にそしり候しかば、ちかづきむつまじくおもひ候はで、ちかづ

【方方より】以下
終に至るまで一集
【明法御房】宗派
的偏見より親鸞を
殺害せんと企て、
却つて師の人格に
感化せられ弟子と
なりし辨圓の後身
と傳へらる。

【鹿島】行方、奥
郡は共に郡の名。
【ひらつかの入道】
曾我十郎祐成の遺
腹の子、同苗倍之
長じて軍功あり、
相模國平塚村に領
地を賜り此處に住
し、終入道して了
源と云ひ、終に親
鸞の弟子となりし

けず候ひき。明法御房の往生のことをきゝながら、あとをろかにせん人々は、その同朋にあらず候べし、無明の酒に酔たる人に、いよゝゝゑひをすゝめ、三毒をひさしくこのみくらふ人に、いよゝゝ毒をゆるしてこのめと申しあふて候らん、不便のことに候。無明の酒に酔たることをかなしみ、三毒をこのみくふて、いまだ毒もうせはてず、無明のゑひもいまださめやらぬにおはしましあふて候ぞかし。よく御こゝろえ候べし。』

方々よりの御こゝろさしの物ども、かすのまゝにたしかにたまはり候。明法御房ののぼられて候こと、ありがたきことに候。かたゝの御こゝろさし申しつくしがたく候。明法御房の往生のことおどろきまふすきにはあらねども、返々うれしく候。鹿島なめかたの奥郡、かやうの往生ねがはせたまふ人々の、みな御よろこびにて候。又ひらつかの入道殿の御往生のこときゝ候こそ、返々申にかぎりなくおぼえ候へ。めでたさ申つくすべくも候はず。をのゝゝみな往生は一定とおほしめすべし。さりながらも往生をねがはせたまふ人々の御中にも、御こゝろえぬことも候。いまもさこそ候らめとおぼえ候。京にもこゝろえずして、やうゝにまどひあふて候。めり、國々にもおほくきこえ候。法然聖人の御弟子のなかにも、われはゆゝしき學生など、おもひあひたる人々も、この世にはみなやうゝに法文をいひかへて、身もまどひ、人をもまどはしてわづらひあふて候。めり。聖教のをしへをもみすしらぬをのゝゝやうにおはしますひとゝは、往生にさはりなしとばかりいふをきゝて、あしざまに御こゝろえあることおほく候。いまもさこそ

【信見房】親鸞の
惡人往生説を曲解
せし者の如し。

候さくらふらめとおぼえ候さくらふ淨土じやうどの教けうもしらぬ信見房しんけんぼうなどが申まをすことによりて、ひがさまにいよ
いよなりあはせたまひ候さくらふらんをきゝ候さくらふこそ、あさましく候さくらふへ。まづをのくの昔むかしは、
彌陀みだのちかひをもしらず、阿彌陀佛あみだぶつをもまふさずおはしまし候さくらふしが、釋迦彌陀しやくぢやみだの御方便ごべんぽう
にもよほされて、いま彌陀みだのちかひをきゝはじめておはします身みにて候さくらふなり。もとは無
明みやうの酒さけにゑひて、食欲じやくよく、瞋恚しんいか、愚癡ぐぢの三毒さんどくをのみこのみめしあふて候さくらふつるに、佛ぶつのちか
ひをきゝはじめしより、無明みやうの醉さいもやうくすこしづゝさめ、三毒さんどくをもすこしづゝこのま
ずして、阿彌陀佛あみだぶつのくすりを、つねにこのみめす身みとなりておはしましあふて候さくらふぞかし。
しかるになをゑひもさめやらぬに、かさねて醉さいをすゝめ、毒どくもきえやらぬに、なを毒どくをす
すめられ候さくらふらんこそ、あさましく候さくらふへ。煩惱具足ぼんなんぐそくの身みなればとて、こゝろにまかせて、
みにもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるし、こゝろにもおもふ
まじきことをもゆるして、いかにもこゝろのまゝにてあるべしと、まふしあふて候さくらふらん
こそ、迭々たがひたがひ不使ふしにおぼえ候さくらふへ。ゑひもさめぬさきになを酒さけをすゝめ、毒どくもきえやらぬにい
よく毒どくをすゝめんがごとし、くすりあり毒どくをこのめと候さくらふらんことは、あるべくもさふ
らはずとこそおぼえ候さくらふ。佛ぶつの御名ごなをもきゝ、念佛ねんぶつを申まをすして、ひさしくなりておはしまさん
人々ひとびとは、後世ごせのあしきことをいふしるし、この身みのあしきことをば、いとひすてんとおぼ
しめすしるしも候さくらふべしとこそおぼえ候さくらふへ。はじめて佛ぶつのちかひをきゝはじむる人々ひとびとの、
わが身みのわろく、こゝろのわろきをおもひしりて、この身みのやうにてはなんぞ往生わうじやうせんす

【もとも】 從來は
の意。

【當時】 生存中の
意。

るといふ人にこそ、煩惱具足したる身なればわがころの善悪をばさたせず、むかへたまふぞとは申候へ。かくきよてのち、佛を信ぜんとおもふころふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとひ、流轉せんことをもかなしみて、ふかくちかひを信じ、阿彌陀佛をもこのみまふしなどする人は、もともころのまゝにて悪事をもふるまひなどせじとおぼしめしあはせたまはゞこそ、世をいとふしるしにても候はめ。また往生の信心は、釋迦、彌陀の御すゝめによりておこるとぞみえて候へば、さりともまことのころおこらせたまひなんには、いかゞむかしの御ころのまゝにては候べき。この御中の人々も、少々はあしきさまなることのきこえ候めり。師をそしり、善知識をかるしめ、同行をもあなづりなどしあはせたまふよしき候こそ、あさましく候へ、すでに謗法のひととなり、五逆のひとりとなり、なれむつおべからず。淨土論と申文には、かやうの人は佛法信ずるころのなきより、このころはおこるなりと候めり。また至誠心のなかには、かやうに悪をこのまんひとには、つゝしみてとをさかれ、ちかづくべからずとこそ、とかれて候へ。善知識同行には、したしみちかづけとこそ、ときをかれて候へ。悪をこのむ人にもちかづきなどすることは、淨土にまいりてのち、衆生利益にかへりてこそ、さやうの罪人にもしたしみちかづくことは候へ。それもわがはからひにはあらず、彌陀のちかひによりて、御たすけにてこそ、おもふさまのふるまひも候はんずれ。當時はこの身どものやうにては、いかゞ候べからんとおぼえ候よく／＼案ぜさせたまふべくさふらふ。往生の

金剛心のおこることは、佛の御はからひよりおこりて候へば、金剛心をとりて候はん人は、よも師をそしり、善知識をあなづりなんどすることは候はことこそおぼえ候へ。この文をもて、かしまなめかたの南の莊いづかたも、これにこゝろざしおはしまさん人には、おなじ御こゝろによみきかぜたまふべく候。穴賢々々。

建長四年二月廿四日

【二〇】此章は淨信房に對して眞實信の義と、二種の向の義と、二種の釋を下し與へしものなり。

安樂淨土にいりはつれば、すなはち大涅槃をさとるとも、また無上覺をさとるとも、滅度にいたるともまふせば、御名こそかはりたるやうなれども、これみな法身と申佛のさとりをひらくべき正因に、彌陀佛の御ちかひを、法藏菩薩われらに廻向したまへるを、往相の廻向とまふすなり。この廻向せさせたまへる願を、念佛往生の願とは申なり。この念佛往生の願を一向に、信じてふたごゝろなきを、一向專修とは申なり。如來二種の廻向とまふすことは、この二種の廻向の願を信じ、ふたごゝろなきを、眞實の信心とまふす。この眞實の信心のおこることは、釋迦彌陀の二尊の御はからひよりおこりたりと、しらせたまふべし。穴賢々々。

『寶號經』にのたまはく、彌陀の本願は、行にあらす、善にあらす、たゞ佛名をたもつなり。名號はこれ善なり。行なり。行といふは、善をするについていふことばなり。本願はもとより佛の御約束とこゝろえぬるには、善にあらす、行にあらざるなり。かるがゆへに

他力たりにきとまふすなり、本願ほんぐわんの名號みやうごうは、能生のうしやうする因いんなり。能生のうしやうの因いんといふは、すなはちこれ父ちちなり、大悲だいひの光明くわうみやうは、これ所生しよじやうの縁えんなり。所生しよじやうの縁えんといふは、すなはちこれ母ははなり。

末ま燈とう鈔せう

凡ま斯そ御消息ごせうそく者念ねん佛ぶつ成じやう佛ぶつ之咽いんこう喉こう愚癡ぐめい愚迷ぐめい之眼目がんもく也なり可ひ祕すべし可ひ祕すべし而のみ已み

慈じ

俊しゆん春はる四し十じゆ四し秋あき

于とき時ふん文ぶん安あん四よ年ねん丁てい卯ぼう二に月げつ晦み日にち

奉しよ書を寫ほう記じ訖を

右う筆ひつ蓮れん如に時とき

末ま燈とう鈔せう終しゆう

御消息集

親鸞聖人御消息集

【一】 此章は親鸞の獨斷論に非ざる事を示して、而も他人の述作たる唯信鈔等を擧げ願推奨して披閱する事を勧めしものなり。

【二】 一念多念 一念往生、多念往生の意。

(一) なにごとよりは、如來の御本願のひろまりせたまひてさふらふこと、かへすゝめてたくうれしくさふらふ。そのことにおのゝところゝに、われはといふことをおもふて、あらそふことゆめ、あるべからずさふらふ。京にも一念多念などまふすあらそふこと、おほくさふらふやうにあること、さらさらさふらふべからず。たゞ詮するところは唯信鈔、後世物語、自力他力、この御文どもをよくつねにみて、その御こゝろにたがへずおはしますべし。いづかたの人々にもこのこゝろをおはせられさふらふべし。なをおぼつかなきことあらば、今日までいきてさふらへば、わざともこれへたづねたまふべし。鹿島、行方、そのならびの人々にもこのこゝろをよくおほせらるべし。一念多念のあらそひななどのやうに詮なきこと、論じごとをのみ、まふしあはれてさふらふぞかし。よくつしむべきことなり。あなかしこ。

かやうのことをこゝろえぬ人々は、そのことなきことをまふしあはれてさふらふ。よくよくつしみたまふべし。かへすゝ。

二月三日

【二】此章は性信房より念佛の訴に就ての情況を報ぜし消息に對する返信。

【うたへ】訴訟の語。後堀河天皇の御宇、北條泰時執權の時念佛停止の事を訴訟せし事あり、圓光大師行狀翼讚、東鑑及び百練鈔等に詳し。

【かたうど】方人と書き、時方の意とふること。萬事【くせごと】曲事。此事實は承久の騷亂を指すならん。

【おほかた】大方公義の意。

六月一日の御文くわしくみさふらひぬ。さては鎌倉にての御うたへのやうは、をろくうけたまはりてさふらふ。この御文にたがはずうけたまはりてさふらひしに、別のことはよもさふらはじとおもひさふらひしに、御くだりうれしくさふらふ。おほかたはこのうたへのやうは、御身ひとりのことにはあらずさふらふ。すべて浄土の念佛者のことなり。このやうは故聖人の御とき、この身どものやうくまふされさふらひしことなり。こともあたらしきうたへにてさふらふなり。性信坊ひとりの沙汰のあるべきことにはあらず。念佛まふさんひととは、みなおなじころに御沙汰あるべきことなり。御身をわらひまふすべきにあらずさふらふべし。念佛者のものにころえぬは、性信坊のとがにまふしなさん。きはまれるひがごとくにさふらふべし。念佛まふさん人は、性信坊のかたうどにこそなりあはせたまふべけれ。母姉妹など、やうくまふさるゝことは、ふることにてさふらふ。さればとて念佛をとどめられさふらひしが、よにくせごとのをこりさふらひしかば、それにつけても念佛をふかくたのみて、世のいのりに、ころにいらてまふしあはせたまふべしとぞおぼえさふらふ。御文のやう、おほかたの陳狀、よく御はからひどもさふらひけり、うれしくさふらふ。詮じさふらふところは、御身にかぎらず念佛まふさん人々は、わが御身の料はおほしめさずとも、朝家の御ため國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらは、めでたふさふらふべし。往生を不定におほしめさん人は、まづわが身の往

【三】此章は教忍坊へ與へられしものに對する思想及び態度の判然たるものを窺ふ事を得べし。

【護念坊教忍御坊】共高田良空傳に猿鳥の護念坊、田中の教忍坊とあり、何れも下總の國に住せし親鸞の弟子。

生をおぼしめして御念佛さふらふべし。わが御身の往生一定とおぼしめさん人は佛の御恩をおぼしめさんに御報恩のために、御念佛こゝろにいらしてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとぞおぼえさふらふ、よく／＼御案さふらふべし。このほかは別の御はからひあるべしとはおぼえさふらふ、なを／＼とく御くだりのさふらふこそうれしふさふらへ。よく／＼御こゝろにいらして、往生一定とおもひさだめられさふらひなば、佛の御恩をおぼしめさんには、こと事はさふらふべからず。御念佛をこゝろにいらして、まふさせたまふべしとおぼえさふらふ。あなかしこく。

七月九日

性信御坊

親

鸞

護念坊のたよりに、教忍御坊より錢二百文御こゝろさしものたまはりてさふらふ。さきに念佛のすゝめのもの、かた／＼の御なかよりとて、たしかにたまはりてさふらひき。人々に、よろこびまふさせたまふべくさふらふ。この御返事にて、おなじ御こゝろにまふさせたまふべくさふらふ。さてはこの御たづねさふらふことは、まことによき御うたがひどもにてさふらふべし。まづ一念にて、往生の業因は、たれりとまふしさふらふは、まこととにさるべきことにてさふらふべし。さればとて一念のほかに念佛をまふすまじきことにはさふらはず。そのやうは唯信鈔にくはしくさふらふ、よく／＼御覽さふらふべし。一念

【むす】 一心の意

のほかにあまるころの念佛は、十方の衆生に廻向すべしとさふらふも、さあるべきこと
 にてさふらふべし。十方の衆生に廻向すればとて、一念三念せんは往生にあしきこと、お
 ぼしめされさふらはゞ、ひがごとにてさふらふべし。念佛往生の本願とこそおほせられて
 さふらへば、おほくまふさんも、一念一稱も、往生すべしとこそうけたまはりてさふら
 へ、かならず一念ばかりにて往生すといひて、多念をせんは往生すまじきとまふすことは、
 ゆめ／＼あるまじきことなり、唯信鈔をよく／＼御覽さふらふべし。また有念無念とまふ
 すことは他力の法門にはあらぬことにてさふらふ。聖道門にまふすことにてさふらふなり。
 みな自力聖道の法文なり。阿彌陀如来の選擇本願念佛は、有念の義にもあらず、無念の
 義にもあらずとまふしさふらふなり。いかなる人まふしさふらふともゆめ／＼もちのさせ
 たまふべからずさふらふ。聖道にまふすことをあしざまにきゝなして、淨土宗にまふすに
 てぞさふらふらん。さら／＼ゆめ／＼、もちのさせたまふまじくさふらふ。また慶喜とま
 ふしさふらふことは、他力の信心をえて往生を一定して、むすとよろこぶころをまふす
 なり、常陸國中の念佛者のなかに、有念無念の念佛沙汰のきこえさふらふは、ひがごと
 さふらふと、まふしさふらひにき。たゞ詮するところは、他力のやうは行者のはからひに
 てはあらずさふらへば、有念にあらず無念にあらずとまふすことを、あしうきゝなして、
 有念無念なんどまふしさふらひけるとおぼえさふらふ。彌陀の選擇本願は行者のはから
 ひのさふらはねばこそ、ひとへに他力とはまふすことにてさふらへ。一念こそよけれ、多

【四】此章は念佛者が誤つて唯一佛の信仰の立場より諸神を輕侮し、造惡を許すより念佛の誹謗も起りし事を痛嘆し、嚴誠せしものなり。

念こそよけれなんどまふすことも、ゆめ／＼あるべからずさふらふ。なを／＼、一念のほかにあまるところの御念佛を、法界衆生に廻向すとさふらふは、釋迦彌陀如來の御恩を報じまいらせんとて、十方衆生に廻向せられさふらふらんは、さあるべくさふらへども、二念三念まふして往生せんひとを、ひがごととはさふらふべからず、よく／＼唯信鈔を御覽さふらふべし。念佛往生の御ちかひなれば、一念十念も往生はひがごとにあらずとおぼしめすべきなり。あなかしこ／＼。

十二月廿六日

教忍御坊御返事

親

鸞

まづ、よろづの佛菩薩をかるしめまいらせ、よろづの神祇冥道をあなづり、すてたてまつるとまふす、このことゆめ／＼なきことなり。世々生々に、無量無邊の諸佛菩薩の利益によりて、よろづの善を修行せしかども、自力にては生死をいえずありしゆへに、曠劫多生のあいだ、諸佛菩薩の御すゝめによりて、いま、まうあひがたき彌陀の御ちかひに、あひまいらせてさふらふ御恩をしらすして、よろずの佛菩薩をあだにまふさんは、ふかき御恩をしらすさふらふべし。佛法をふかく信するひとをば、天地におはしますよろづの神は、かげのかたちにそへるがごとくして、まもらせたまふことにてさふらへば、念佛を信したる身にて、天地の神をすてまふさんとおもふこと、ゆめ／＼なきことなり。神祇等だにも

【おほせ】 誦られる事。

【領家】 郡又は國を領せし家、其或部分の地を支配せし代官を地頭と云ひ、名主とは庄屋の事。
【やう】 様子、轉じて事情、事柄、理由等に用ひらる

【ふるきひと】 法然の事。

すてられたまはず。いかにいはんや、よろづの佛菩薩をあたにもまふし、をろかにおもひまいらせさふらふべしや、よろづの佛を、をろかにまふさば、念佛信ぜず、彌陀の御名をとなへぬ身にてこそさふらはんずれ、誑するところは、そらごとをまふし、ひがごとを、ことにふれて、念佛のひとへにおほせられつけて、念佛をとゞめんとするところの領家地頭名主の、御はからひどもものさふらふらんこと、よく／＼やうあるべきことなり。その妙へは、釋迦如來のみことには、念佛するひとをそしるものをば、名無眼人ととき、名無耳人とおほせをかれたることにさふらふ。善導和尚は五濁増時多疑謗、道俗相嫌不用聞、見有修行起瞋毒、方便破壞競生怨とたしかに釋しをかせたまひたり。この世のならひにて、念佛をさまたげん人は、そのところの領家地頭名主の、やうあることにてこそさふらはめ。とかくまふすべきにあらず。念佛せんひとへは、かのさまたげをなさんひとをば、あはれみをなし、不便におもふて、念佛をもねんごろにまふして、さまたげなさんをたすけさせたまふべしとこそ、ふるきひととはまふされさふらひしか。よく／＼御たづねあるべきことなり。つきに、念佛せさせたまふひとへは、彌陀の御ちかひは煩惱具足のひとのためなりと信ぜられさふらふは、めでたきやうなり。たゞし、わるきものゝためなりとて、ことさらに、ひがごとをこゝろにもおもひ、身にも口にもまふすべしとは、淨土宗にまふすことならねば、ひとへにもかたることさふらはず。おほかたは、煩惱具足の身にて、こゝろをもとゞめがたくさふらひながら、往生をうたがはずせんとおほしめすべしとこ

そ、師しも善知識ぜんちしきもまふすことにてさふらふに、かゝるわるき身みなれば、ひがごとをことさ
らにこのみて、念佛ねんぶつのひとくゝのさはりとなり、師しのためにも、善知識ぜんちしきのためにも、とが
となさせたまふべしとまふすことは、ゆめくなきことなり。彌陀みだの御おんちかひに、まうあ
ひがたくして、あひまいらせて、佛恩ぶつおんを報はらじまいらせんとこそ、おぼしめすべきに、念佛ねんぶつ
をとゞめらるゝことに、沙汰さたしなされてさふらふらんこそ、かへすくゝこゝろえずさふら
ふ。あさましきことにさふらふ。ひとくゝの、ひがさまに御おんこゝろえどもものさふらふゆ
へ、あるべくもなきことども、きこへさふらふ。まふすばかりなくさふらふ。たゞし、念ねん
佛ぶつのひと、ひがごとをまうしさふらはど、その身みひとりこそ、地獄ぢごくにもおち、天魔てんまともな
りさふらはめ、よろづの念佛ねんぶつ者しやのとながなるべしとはおぼえずさふらふ。よくくゝ御おんはか
らひどもさふらふべし。なほくゝ念佛ねんぶつせさせたまふひとくゝ、よくくゝこの文ぶんを御覽ごらんじと
かせたまふべし。あなかしこく。

九月二日

念佛之人を御中へ

親

慈

【五】 此章の作意
は前章に同じ、
【遠江の尼】 傳記
不明、貴人にして
念佛者たりしと思
惟おもはる。
【あはれ】 願はし
事と同じ。

(五) 文ぶんかきてまいらせさふらふ。このふみをひとくゝにもよみてきかせたまふべし。遠江とんたかみの
尼あま御前ごぜんの、御おんこゝろにいて御沙汰ごさたさふらふらん、かへすくゝめでたくあはれにおぼえさ
ふらふ。よくくゝ京きやうよりよろこびまふすよしをまふしたまふべし。信願坊しんがんぼうがまふすやう、

かへすく不ふ便べんのことなり。わるき身みなればとて、ことさらにひがごとをこのみて、師しのため善ぜん知識ちしきのためにあしきことを沙さ汰たし、念ねん佛ぶつのひとくのためにとがとなるべきことをしらすば、佛ぶつ恩おんをしらす、よくくはからひたまふべし。また、ものにくるふて死しにけんひとくのことをもちて、信しん願がん坊ぼうがことをよしあしとまふすべきにはあらず、念ねん佛ぶつするひとの死しにやうも、身みより病びやうをするひとは、往生おうちやうのやうをまうすべからず。こゝろより病びやうをするひとは、天魔てんまともなり地ち獄ごくにもおつることにてさふらふべし。こゝろより病びやうを身みよりおこる病びやうとは、かはるべければ、こゝろよりおこりて死しぬるひとのことを、よくよく御ごはからひさふらふべし、信しん願がん坊ぼうがまふすやうは、凡なん夫ぶのならひなればわるきこそ本もとなればとて、おもうまじきことをこのみ、身みにもすまじきことをし、口くちにもいふまじきことをまふすべきやうにまふされさふらふこそ、信しん願がん坊ぼうがまふしやうとはこゝろえずさふらふ、往生おうちやうにさはりなければとて、ひがごとをこのむべしとはまふしたることさふらはず。かへすくこゝろえずおほえさふらふ。詮せんするところ、ひがごとまふさんひとは、その身みひとりこそ、ともかくもなりさふらはめ、すべてよろづの念ねん佛ぶつ者のさまたげとなるべしとはおほえずさふらふ。また、念ねん佛ぶつをとどめんひとは、そのひとばかりこそ、いかにもなりさふらはめ、よろづの念ねん佛ぶつするひとのとがとなるべしとはおほえずさふらふ。五ご濁じやく増ぞう時じ多た疑ぎ謗ぼう、道だう俗じやく相さう嫌けん不ふ用よう聞もん、見けん有ゆう修しゆ行ぎやう起き瞋しん毒どく、方ほう便べん破ぱ壞わい競ぎやう生しやう怨おんと、まのあたり、善ぜん導だうの御ごをしへさふらふぞかし。釋しやく迦か如にょ來らいは、名な無む眼げん人にん、名な無む耳じ人にんととかせたまひてさふらふぞかし。かや

うなるひとにて念佛をもとどめ、念佛者をもにくみなんごすることにてもさふらふらん。それはかのひとをにくまずして、念佛をひとくまふして、たすけんとおもひあはせたまへとこそおぼえさふらへ、あなかしこく。

九月二日

親

鸞

慈信坊御返事

入信坊眞淨坊法信坊にもこのふみをよみきかされたまふべし、かへすべし不便のことに

てさふらふ。性信坊には、春のぼりてさふらひしに、よくくまふしてさふらふ。くげどのにもよくくよろこびまふしたまふべし。このひとくの、ひがごとをまふしあふてさふらへばとて、道理をばうしなはれさふらはじとこそおぼえさふらへ。世間のこともさることのさふらふぞかし。領家地頭名主の、ひがごとすればとて、百姓をまごはすことはさふらはぬぞかし。佛法をばやぶるひとなし。佛法者のやぶるにたとへたるには、師子の身中のむしの、しゝをくらふがごとしとさふらへば、念佛者をば、佛法者のやぶりさまたげさふらふなり、よくくこゝろえたまふべし。なをく、御ふみにはまふしつくすべくもさふらはず。

【六】此章は「親鸞は弟子一人ももたず候」と云ふ態度が判然と現はれ

九月廿七日の御文くわしくみさふらひぬ。さては御ころさしの鏡伍貫文十一月九日にたまはりてさふらふ。さては、ぬなかのひとく、みな年來念佛せしはいたづらごとにて

善鸞の擾亂に動搖せる人達の心情を讀みて曾つ與へし聖教の書寫も空しくなりし事を悲痛せるものなり。

【伍貫文】一貫文は米價の約一石に相當す。

【中太郎】大部の平太郎。

【二河の譬喩】善導の觀經疏散善義中に出づ。信心の全相を描きし信心守護の譬喩。

ありけりとて、かた／＼ひと／＼、やう／＼にまふなることこそ、かへす／＼不便のことにきこへさふらへ。やう／＼、ふみどもをかきこもてるを、いかにみなしさふらふらん、かへす／＼おぼつかなくさふらふ。慈信坊のくだりて、わがきゝたる法文こそまことにてはあれ、ひごろの念佛はみないたづらごとなりとさふらへばとて、おほふの中太郎のかたのひとは九十なん人とかや、みな慈信坊のかたとて、中太郎入道をすてたるとかやきゝさふらふ。いかなるやうにてさやうにはさふらふぞ、詮ずるところ信心のさだまらざりけるときゝさふらふ、いかやうなことにて、さほどにおほくのひと／＼の、たちろきさふらふらん、不便のやうときゝさふらふ。また、かやうのきこへなんどさふらへば、それごともおほくさふらふべし。また、親鸞も偏頗あるものときゝさふらへば、ちからをつくして、唯信鈔、後世物語、自力他力の文のこゝろども、二河の譬喩などかきて、かたがたへ、ひと／＼に、くだしてさふらふも、みなそれらごとになりてさふらふときこへさふらふは、いかやうにすゝめられたるやらん、不可思議のことゝきゝさふらふこそ不便にさふらへ。よく／＼きかせたまふべし、あなかしこ／＼。

十一月九日

慈信 御坊

親鸞

眞佛坊性信坊入信坊このひと／＼のことうけたまはりさふらふ。かへす／＼なげきおほ

【七】 此章は善鬘の擾亂の情況を述べて如何に處すべきかの間に對し、答へしものなり。
 【あひだ】 間の字障礙の意。
 【せきやう】 障礙せられて處狭き様などの意。
 【まふし】 念佛を止めんと云ふに同じ。
 【佛天】 佛教徒の佛を崇拜するに世人の天に於けるが如きより云ふ語。
 【慈信坊】 親鬘の一子、善鬘の事、親鬘歸洛後異義を唱へて關東の教團に波瀾を起さしめ遂に異端者として親鬘より義絶せられし人。

えさふらへども、ちからをよばずさふらふ。また餘のひと／＼の、おなじこゝろならずさふらふらんも、ちからをよばずさふらふ。ひと／＼のおなじこゝろならずさふらへば、とかくまふすにをよばず。いまはひとのうへもまふすべきにあらずさふらふ。よく／＼こゝろえたまふべし。

慈信御坊

親

鬘

(七) さては念佛のあひだのことによりにて、ところせきやうにうけたまはりさふらふ。かへす／＼こゝろぐるしくさふらふ。註するところ、そのところの縁ぞつきさせたまひさふらふらん、念佛をさへらるなんどまふさんことに、ともかくもなげきおぼしめすべからずさふらふ。念佛とどめんひとこそいかにもなりさふらはめ、まふしたまふひとはなにかくるしさふらふべき。餘のひと／＼を縁として、念佛をひろめんとはからひあはせたまふこと、ゆめゆめあるべからずさふらふ。そのところに念佛のひろまりさふらはんことも、佛天の御はからひにてさふらふべし。慈信坊がやう／＼にまふしさふらふなるによりて、ひと／＼も、御こゝろどものやう／＼にならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ。かへすがへす不便のことにさふらふ。ともかくも佛天の御はからひにまかせまいらせたまふべし。そのところの縁つきておはしましたまふらはじ、いづれのところにも、うつらせたまひさ

【入信坊】二十四
輩の一、常陸國大
藏壽命寺及び大曾
根常福寺の門基。

【たちろぎ】 動搖
の意。

ふらふておはしますやうに、御はからひさふらふべし。慈信坊がまふしさふらふことをたのみおぼしめして、これよりは、餘の人を強縁として念佛ひろめよとまふすこと、ゆめゆめまふしたることさふらはす、きはまれるひがごとにてさふらふ。この世のならひにて、念佛をさまたげんことは、かねて佛のときをかえたまひてさふらへば、をどろきおぼしめすべからず。やうく慈信坊がまふすことを、これよりまふしさふらふと御こゝろえさふらふ、ゆめくあるべからずさふらふ。法門のやうも、あらぬさまにまふしなしてさふらふなり、御耳にききいれらるべからずさふらふ。きはまれるひがごとどものきこえさふらふ、あさましくさふらふ。入信坊なども不便におぼえさふらふ。鎌倉にながゐしてさふらふらん、不便にさふらふ。當時これもわづらふべくぞ、さてもさふらふらん、ちからをよばずさふらふ。奥郡のひとくの、慈信坊にすかされて、信心みなうかれあふておはしましさふらふなること、かへすくおはれにかなしおぼえさふらふ。これも、ひとくをすかしまふしたるやうにきこへさふらふこと、かへすくあさましくおぼえさふらふ。それも日ごろ、ひとくの信のさだまらずさふらひけることのあらはれてきこへさふらふ。かへすく不便にさふらひけり。慈信坊がまふすことによりて、ひとくの口ごろの信のたぢろぎあふておはしましさふらふも、詮ずるところは、ひとくの信心のまことならぬこととのあらはれさふらふ。よきことにてさふらふ。それを、ひとくはこれよりまふしたるやうに、おぼしめしあふてさふらふこそあさましくさふらへ。日ごろやうくの御ふみど

【八】此章は訴訟事件の落着を喜び同時に念佛者の反國家的反倫理的行為を諷めしものなり。

【源藤四郎】傳記未詳。

【御身のれう】領域に同じ。

【御身どものれう】普通の爲にの意。

もを、かきもちておはしましあふてさふらふかひもなく、おほえさふらふ。唯信鈔やうやの御文どもは、いまは詮なくなりてさふらふとおほえさふらふ。よく／＼、かきもたせたまひてさふらふ法門は、みな詮なくなりてさふらふなり。慈信坊にみなしたがひて、めでたき御文どもは、すてさせたまひあふてさふらふときへさふらふこそ、詮なくあはれにおほへさふらへ。よく／＼唯信鈔後世物語などを御覽あるべくさふらふ。年ごろ、信ありとおほせられあふてさふらひけるひと／＼はみなそらごとにてさふらひけりとさふらふ。あさましくさふらふ、／＼。なにごと／＼、また／＼まふしさふらふべし。

正月九日

眞淨御坊

親

鸞

(八) くだらせたまひてのち、なにごとかさふらふらん、この源藤四郎殿におもはざるにあひまいらせてさふらふ、便のうれしさにまふしさふらふ。そののちなにごとかさふらふ。念佛のうたへのこと、しづまりてさふらふよし、かた／＼よりうけたまはりさふらへば、うれしふこそさふらへ。いまはよく／＼念佛もひろまりさふらはんずらんとよろこびいりてさふらふ。これにつけても御身のれうは、いまだまらせたまひたり。念佛を御こゝろにいれてつねにまふして、念佛そしらんひと／＼、この世、のちの世までのことを、いのりあはせたまふべくさふらふ。御身どものれうは、御念佛はいまはなにかはせさせたまふべき、

【聖人】師法然の命日の二十五日は毎月同志と念佛の會合を催せし事實を指す。

【入西御坊】御傳探證記には、入西坊俗姓知り難し、古記の説に法名唯圓寺號は枕石寺、二十四輩常内田の一人なりと云ふ。但し二十四輩帳には道圓坊唯圓とあり。故に眞偽不明【九】此章は曾て十二光佛の事を記して弟子達に與へし際一緒に書きしものならん。

たゞ、ひがふたる世のひとくをいのり、彌陀の御ちかひにいとおぼしめしあはゞ、佛の御恩を報じまいらせたまふになりさふらふべし。よく／＼御ころに連れてまふしあはせたまふべくさふらふ。聖人の廿五日の御念佛も、詮するところは、かやうの邪見のものをたすけんれうにこそ、まふしあはせたまへとまふすことにてさふらへば、よく／＼念佛をしらんひとを、たすかれとおぼしめして、念佛しあはせたまふべくさふらふ。またなにごともたび／＼便にはまふしさふらひき。源藤四郎殿の便にうれしうて、まふしさふらふ。あなかしこ／＼。

入西御坊のかたへもまふしたうさふらへども、おなじことなれば、このやうをつたへたまふべくさふらふ。あなかしこ／＼。

性信御坊へ

親

覽

（九）ひとくのおほせられてさふらふ、十二光佛の御ことのやう、かきしるしてくだしまいらせさふらふ。くはしくかきまいらせさふらふべきやうもさふらはす、をろ／＼かきしるしてさふらふ。詮するところは、無礙光佛とまふしまいらせさふらふことを、本とせさせたまふべくさふらふ。無礙光佛は、よろづのものゝあさましきわるきことにはさはりなく、たすけたまはんれうに、無礙光佛とまふすとしらせたまふべくさふらふ。あなかしこ／＼。

十月廿一日

唯信御坊御返事

親

驚

【唯信】二十四輩の唯信、常陸國穴戸の唯信、水戸の信願寺の開基。

【二】此堂は慶西房の質因、往還往生の因果、往還二種廻向の相を示せしものなり。

【諸佛稱名、諸佛吞嗟】共に彌陀の四十八願中第十七願の名。

【證說】立證するの意。

【念佛往生の願】第十八願の名。

【往相】我等が往生を他方に依りて成ぜらるる相。

【大師】法然を指す。

【つやつや】聊かもの意。

諸佛稱名の願とまふし、諸佛吞嗟の願とまふしさふらふなるは、十方衆生をすゝめんためときこへたり。また十方衆生の疑心をとぐめんれうときこへてさふらふ彌陀經の十方諸佛の證誠のやうにてきこへたり。詮するところは方便の御誓願と信じまいらせさふらふ。念佛往生の願は如來の往相廻向の正業正因なりとみえてさふらふ。まことの信心あるひとは、等正覺の彌勒とひとしければ、如來とひとしとも、諸佛のほめさせたまひたりとこそきこへてさふらふ。また彌陀の本願を信じさふらひなるうへには、義なきを義とすところ、大師聖人のおほせにてさふらへ。かやうに義のさふらふらんかぎりには、他力にはあらず自力なりときこへてさふらふ。また他力とまふすは佛智不思議にてさふらふなるとき、煩惱具足の凡夫の無上覺のさとりをえさふらふなることば。佛と佛のみ御はからひなり。さらに行者のはからひにあらずさふらふしかれば義なきを義とすとさふらふなり。義とまふすことは、自力のひとはからひをまふすなり。他力には、しかれば義なきを義とすとさふらふなり。このひとくのおほせのやうは、これにはつや／＼としらぬことにてさふらへば、とかくまふすべきにあらずさふらふ。また來の字は、衆生利益のためには、きたるとまふす方便なり。さとりをひらきては、かへるとまふす。ときにしたがひて、き

たうともかへうともまふすとみへてさふらふ。なにごとく、またくまふすべくさふらふ。

二月九日

親

覽

慶西 御坊御返事

【慶西】高田良空
傳には眞岡の慶西
坊と傳へらる。下
總國の人ならんと

御消息集 畢

歎

異

鈔

歎異鈔

【當書は親鸞没後その門流に異義の行はるるを悲歎して、初十條には親鸞の語を載せ、後八條に當時の異義を擧げて之を駁し以て門徒の信仰を確立せしめんと編纂されしものなり】
 【先師】 親鸞を指すの略。
 【眞信】 眞實信心の略。
 【有緣知識】 因縁深き教師の謂にして、親鸞の事。
 【自見之覺悟】 自己獨自の見解。
 【一】 此章は名號の一切衆生の根機を簡ばず救ふ事を説く。全篇の大綱となるものなり。
 【二】 此章は親鸞歸京後關東より來問の門弟に對し佛敎の宗義は親鸞の私見に非ざる事を明せしものなり。
 【十餘箇國】 常陸國より下總、武藏、相模、伊豆、

【當書は親鸞没後その門流に異義の行はるるを悲歎して、初十條には親鸞の語を載せ、後八條に當時の異義を擧げて之を駁し以て門徒の信仰を確立せしめんと編纂されしものなり】
 【先師】 親鸞を指すの略。
 【眞信】 眞實信心の略。
 【有緣知識】 因縁深き教師の謂にして、親鸞の事。
 【自見之覺悟】 自己獨自の見解。
 【一】 此章は名號の一切衆生の根機を簡ばず救ふ事を説く。全篇の大綱となるものなり。
 【二】 此章は親鸞歸京後關東より來問の門弟に對し佛敎の宗義は親鸞の私見に非ざる事を明せしものなり。
 【十餘箇國】 常陸國より下總、武藏、相模、伊豆、

歎異鈔
 竊廻ニ 愚案ニ 粗勘ニ 古今、歎異ニ先師口傳之眞信一思有ニ後學相續之疑惑一幸不レ依ニ有緣知識一者、爭得レ入ニ易行一門一哉。至以ニ自見之覺悟一莫亂ニ他力宗一旨一仍故親鸞聖人御物語之趣、所レ留ニ耳底、聊註レ之、偏爲レ散同心行者之不審一也、云云。
 (一) 彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとするべし。そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらす、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと、云云。
 (二) おの／＼十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに念佛よりほかに、往生のみちをも存知し、また法支等をもしりたるらんと、こゝろにく／＼おぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゆしき學生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往

歎異鈔

駿河、遠江、三河
尾張、伊勢、近江
山城を経て京都に
至る故に。

【善導】 眞宗の僧
五祖支那唐の高僧
【釋】 觀無量壽經
の釋を指す。

【三】 此章は往生
教の對機の惡人に
據して、其原理的根
據の他力なる事を
示すものなり。

生の要よく、きかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまひら
すべしとよきひとのおほせをかふりて、信するほかに別の子細なきなり。念佛は、まこと
に淨土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、
總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまひらせて、念佛して地獄におち
たりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行もはげみて佛になるべ
かりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたまつりてと
いふ後悔もさふらはめ。いづれの行もよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞ
かし、彌陀の本願、まことにおはしまさば、釋尊の説教、虚言なるべからず。佛説まこと
におはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のお
ほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなし
かるべからずさふらふ歟。詮ずるところ愚身の信心にをきては、かくのごとし。このうへ
は、念佛をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、而々の御はからひなりと、
云云。

善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを世のひと、つねにいはいく、惡人
なを往生す、いかにいはんや善人をや。この條、一旦そのいはれあるにたれども、本願
他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころか
げたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力を

【四】此章は念佛の勝徳は聖道一代の慈悲に勝れて、永遠の慈悲なる事を強調するものなり。

【五】此章は追善修福の爲に念佛せざる事を説き、他方眞宗の不廻向の心を顯はすものなり。

【六】此章は念佛を信する者は皆如来の弟子我弟子と云ふ諍のあるべからざるを現はす。

たのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は、とおほせさふらひき。

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみかなしみ、はぐゝむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐるときはめてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもておもふがごとく、衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念佛まうすのみぞ、すゑとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと、云云。

親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたること、いまださふらはす。そのゆへは一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもこの順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり。わがちからにて、はげむ善にてもさふらはゞこそ念佛を廻向して父母をたすけさふらはめ。たゞ自力をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと、云云。

専修念佛のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もての

【荒涼】 斟酌なき事

【自然】 願力自然にて他力を現はす語。

【七】 此章は念佛の諸障に隔てられず、他の諸善に勝る徳を示すものなり。

【八】 此章は行として念佛は他力自然なる事を示すもの。

【九】 此章は弟子唯圓の間に應じて彌陀の願意は劣惡の罪の衆生に相應せんとするにある事を示すものなり

ほかの子細なり。親鸞は弟子一人もまたすさふらふ。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ。ひとへに彌陀の御もよほしにあづかて、念佛まうしさを、まひひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あれば、はなるゝことのおるをも、師をそまきて、ひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。如來よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまうすにや。かへすがへすもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしりまた師の恩をもしるべきなりと、云云。

念佛者は無礙の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も、業報を感ずることあたはず、諸善もよぶことなきゆへに無礙の一道なりと、云云。

念佛は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行するにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして、自力をなれたるゆへに行者のためには非行非善なりと、云云。

念佛まうしさふらへども、踊躍歡喜のころ、おろそかにさふらふことまたいそぎ淨土へまいりたきころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞も、この不審ありつるに、唯圓房おなじころにてあり

【もつしいれ】 質問の意。【唯願房】 常陸國鳥取の唯願坊、二十四輩の一。

【所勞】 病氣に惱まざる事。

【一】 此章は念佛の無爲爲義を明し同時に親習の弟子中に異解者ある事を嘆きしものなり【無義】 凡夫自力の作意。

けり。よく／＼案じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ／＼往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきことををさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおぼゆるなり。また淨土へいそぎまいりたきころのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんするやらんとこゝろほそくおぼゆることも、煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまゝで流轉せる、苦惱の舊里はすてがたく、いまだうまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ、なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよ／＼大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ淨土へもまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしくさふらひなましと、云々。

(一) 念佛には、無義をもて義とす。不可稱不可説不可思議のゆへにと、おぼせさふらひき。そも／＼、かの在生のむかし、おなじこゝろさしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を當來の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひと／＼にともなひて、念佛まうさるゝ老若、そのかずをしらずおはします

【二】以上の十章は親鸞の直説を擧げ此章以下は親鸞の破邪顯正し、其此章は誓願名號別見の諍を破すものなり。

【果遂の願】彌陀の四十八願中、第二十願。

なかに、上人のおほせにあらざる異義どもを、近來はおほくおほせられあふてさふらふよし、つたへうけたまはる。いはれなき條々の子細のこと。

(二)に不通のともがらの念佛まうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛まうすか、また、名號不思議を信ずるか、いひおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいひひらかずして、ひとのこゝろをまどはずこと、この條かへすもこゝろをとどめて、おもひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものを、むかへんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて、念佛のまうさるゝも、如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらざるがゆへに、本願に相應して實報土に、往生するなり。これは誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議、ひとつにしてさらにことなることなきなり。つぎにみづからのはからひをさしはさみて、善惡のふたつにつきて、往生のたすけさはり、二様におふは、誓願の不思議をばたのますして、わがこゝろに往生の業をはげみて、まうすところの念佛をも、自行になすなり。このひとは名號の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども邊地、懈慢、疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆへにつゝに報土に生ずるは、名號不思議のちからなり。これすなはち誓願不思議のゆへなれば、たゞひとつたるべし。

【二】此章は他力易行の宗教を明して、無智者の宗教を強調するものなり。

【ゆくち】行路と書き、字義の語。

一、こまやしやく、
經釋をよみ學せざるともがら、往生不定のよしのこと、この條すこぶる不足言の義といひつべし。他力眞實のむねをあかせるもろくの聖教は、本願を信じ、念佛をまうさば、佛になる、そのほか、なにの學問かは往生の要なるべきや。まことにこのことはりにまよへらんひとは、いかにも、學問して本願のむねをしるべきなり。經釋をよみ學すといへども聖教の本意をこゝろえざる條、もとも不便のことなり。一文不通にして、經釋のゆくちもしらざらんひとの、となへやすからんための名號におはしますゆへに、易行といふ。學問をむねとするは聖道門なり。難行となづく、あやまた學問して名聞利養のおもひに住するひと順次の往生いかゞあらんずらんといふ證文もさふらふべきや。當時專修念佛のひとと、聖道門のひとと證論をくはだて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりたりといふほどに、法敵もいできたり謗法もおこる。これしかしながら、みづからわが法を破謗するにあらずや。たとひ諸門こぞりて、念佛は、かひなき人のためなり、その宗あさしいやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく、下根の凡夫、一文不通のもの、信すればたすかるよし、うけたまはりて信じさふらへ、さらに上根のひとのためにはいやくとも、われらがためには最上の法にてまします、たとひ自餘の教法はすぐれたりとも、みづからがためには、器量およばざればつとめがたし、われもひともし死をはなれんことこそ諸佛の御本意にておはしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せずば、たれのひとかありてあだをなすべきや。かつは證論のところには、もろく

の煩惱ぼんごうおこる、智者ちやうり遠離えんりすべきよしの、證文しょうもんさふらふにこそ、故聖人こせいじんのおほせには、この法ほふをば信しんずる衆生しゆじやうもあり、そしる衆生しゆじやうもあるべしと、佛ぶつとまかしたまひたることなれば、我われはすでに信しんじたてまつる、またひとありて、そしるにて佛説ぶつせつまことなりけりと、しられさふらふ、しかれば、往生わうじやうはいよ／＼一定いちぢやうとおもひたまふべきなり、おやまでそしるひとのさふらはざらんこそ、いかに信しんずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんともおぼえさふらひぬべけれ、かくまうせばとて、かならずひとにそしられんとはあらず、佛ぶつのかねて信しん誘ゆうともにあるべきむねをしらしめして、ひとのうたがひをあらせじと、ときをかしたまふことをまうすなりとこそさふらひしか。いまの世よに學文がくもんしてひとのそしりをやめ、ひとへに論議ろんぎ問答もんたふをむねとせんと、かまへられさふらふにや。學文がくもんせば、いよ／＼如來にょらいの御本意ごほんいをしり悲願ひがんの廣大くわいたいのむねをも存知ぞんちして、いやしからん身みにて往生わうじやうせばいかゞなんどとあやぶまんひとにも本願ほんがんには善惡ぜんあく淨穢じやうたいなきをもむきをも、とききかせられさふらはこそ、學生がくしやうのかひにてもさふらはめ。たま／＼なにごゝろもなく、本願ほんがんに相應さうおうして念佛ねんぶつするひとをも、學文がくもんしてこそなんど、いひおどさるゝこと、法ほふの魔障まぢやうなり、佛ぶつの怨敵がんてきなり。みづから他力たうりきの信心しんじんかぐるのみならず、あやまで他かをまよはさんとす。つゝしんでおそるべし、先師せんしの御みこゝろにそむくことを。かねてあはれむべし。彌陀みだの本願ほんがんにあらざることをと、云々。

彌陀みだの本願ほんがん不思議ふしぎにおはしませばとて、惡あくををそれざるは、また本願ほんがんぼりとして、往生わうじやう

【先師】 親鸞を指す。

【二三】 此章は親鸞の宗教は罪多き在家者の宗教なる事を顯はさんとするもの。

【領狀】 領承に同
じ。

【そのかみ】 既往
の時に云ふ。未燈
鈔所載の北の郡を引
善乗坊等の事を引
例するものなり。

かなふべからずといふこと。この條本願をうたがふ善惡の宿業をこゝろえざるなり。よき
こゝろのおこるも、善業のもよほすゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも、惡業のはから
ふゆへなり。故聖人のおほせには、兔毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業
にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき唯圓房は、わがいふこと
をば信ずるかとおほせさふらひしあひだ、さんさふらふとまうしさふらひしかば、さらば
いはんこと、たがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領狀
まうしてさふらひしかば、たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしと
おほせさふらひしとき、おほせにはさふらへども、一人もこの身の器量にては、ころしつ
べしともおほへずさふらふと、まうしてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことを、
たがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし。なにごととも、こゝろにまかせたることなら
ば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもか
なひぬべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくてころさぬにはあらず、ま
た害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしと、おほせのさふらひしは、わ
れらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、願の不思議にて
たすけたまふといふことを、しらざることをおほせのさふらひしなり。そのかみ邪見にお
ちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざと
このみて惡をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やう／＼にあしざまなることのき

【後世者】 道心堅く後世菩提に志し人生に貪着なき者

【唯信抄】 聖覺法印の著、撰擇集に基き念佛の要義を明かにせる書。

こえさふらひしとき御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとあそぼされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。またく悪は往生のさはりたるべしとにはあらず。持戒持律にてのみ本願を信すべくば、われらいかでか生死をはなるべきやと。かゝるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。さればとて、身にそなへざらん悪業は、よもつくられさふらはじめものを。また、うみかには、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまにしゝをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田島をつくりてすぐるひともし、たゞおなじことなりと、さるべき業縁のものよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ聖人はおほせさふらひしに、當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうに、あるひは道場にはりぶみをして、なん／＼のことしたらんものをは、道場へいるべからずなんどいふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚假をいだけるものか。願にほこりてつくらんつみも、宿業のもよほすゆへなり。さればよきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信抄にて彌陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくはれがたしとおもふべきとさふらふぞかし。本願にほこるころのあらんにつけてこそ、他力をたのみ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。おほよそ悪業煩惱を断じつくしてのち、本願を信せんのみぞ願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を断じなば、すなはち佛になり、佛のためには、五劫思

【一四】此章は觀經下下品の一稱の稱名は八十億劫の罪を滅すと云ふ文を根據として、自力念佛を勧むる異義を破せるもの。

【無生忍】法性の理に安住して不動なるを云ふ。

【不思議】不慮と同じ。

惟の願、その詮なくやましますさん。本願ほこりといましましめらるゝひとくも、煩惱不淨具足せられてこそさふらふけなれ、それは願にほこらるゝにあらすや。いかなる悪を本願ほこりといふ、いかなる悪かほこらぬにてさふらふべきぞや。かへりてこゝろをさなきことか。

一念に八十億劫の重罪を滅すと信すべしといふこと、この條は十惡五逆の罪人、日ごろ念佛をまうさずして、命終のときはじめて善知識のおしへにて一念まうせば、八十億劫のつみを滅し、十念まうせば八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十惡五逆の輕重をしらせんがために、一念十念といへるが滅罪の利益なり。いまだわれらが信するところにおよばず、そのゆへは彌陀の光明にてらされまゐらするゆへに、一念發起する時、金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて、命終すればもろの煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。この悲願ましまさずば、かゝるあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきとおもひて、一生のあひだまうすところの念佛は、みなことごとく如來大悲の恩を報じ、徳を謝すとおもふべきなり。念佛まうさんごとに、つみをほろぼさんと信せば、すでにわれとつみをけして、往生せんとはげむにてこそさふらふなれ。もししからば一生のあひだ、おもひとおもふこと、みな生死のきづなにあらざることなれば、いのちつきんまで念佛退轉せずして往生すべし。たゞし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のこともあひ、また病惱苦痛をせめて、正念に住せずしてをはらん

【二五】此章は即身成佛の異義を破するものなり。

【二密】三業所修の行業。手に印契を結び、口に陀羅尼を唱へ、意に本佛を念ずる事。

【四安樂】法華經安樂行品に出づる設。身、口、意、誓願の四種安樂行を云ふ。

【觀念成就】法性又は佛體を觀察思念する事。

【淨侶】持戒清淨の僧。

【戒行慧解】修道の能力と教法理解の智慧。

に念佛まうすことかたし。そのあひだのつみは、いかゞして滅すべきや。つみきえざれば往生はかなふべからざるが。擧取捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念佛まうさずしてをはるともすみやかに往生をとぐべし。また念佛のまうされんも、たゞいまさとりをひらかんずる期のちかづくにしたがひて、いよ／＼彌陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそさふらはめ、つみを滅せんとおもはんは自力のこゝろにして、臨終正念といひのるひとの本意なれば、他力の信心なきにてさふらふなり。

煩惱具足の身をもて、すでにさとりをひらくといふこと、この條もてのほかのことにもさふらふ。即身成佛は、眞言祕教の本意、三密行業の證果なり。六根清淨は、また法華一

乘の所説四安樂の行の感徳なり。これみな難行上根のつとめ、觀念成就のさとりなり。來生の聞覺は、他力淨土の宗旨信心決定の道なるがゆへなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善惡の法なり。おほよそ今生においては、煩惱惡障を斷ぜんこと、きはめてありがた

きあひだ、眞言法華を行する淨侶なをもて順次生のさとりをいひのる。いかにいはんや、戒行慧解ともになしといへども、彌陀の願船に乗じて生死の苦海をわたり、報土のきしにつ

きぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無礙の光明に一味にして一切の衆生を利益せんときにこそ、さとりにてはさふらへ。この

身をもてさとりをひらくとさふらふなるひとは、釋尊のごとく種々の應化の身をも現じ、三十二相、八十隨形好をも具足して、説法利益さふらふにや。これをこそ今生にさとりを

【ならひ】 一宗の綱格と云ふ意。

【二六】 此章は念佛者にして惡を犯す場合一妄罪を廻心懺悔すれば消滅すべしと云ふ異義を破するもの。

【柔和忍辱】 和順愛語の心を以て忍従する事。

ひらく本とはまうしさふらへ。和讃にいはいく、金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてけるとはさふらへば、信心のさだまる時に、ひとたび攝取してすてたまはざれば、六道に輪回すべからず。しかればながく生死をばへだてさふらふぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。あはれにさふらふをや。淨土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にてさとりをばひらく、ならひさふらふぞとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか。

(二六) 信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同伴にもあひて、口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと、この條、斷惡修善のこゝちか。一向專修のひとにおいては、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。その廻心は、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては、往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまいらすをこそ、廻心とはまうしさふらへ、一切のことに、あしたゆふべに、廻心して往生をとげさふらふべくば、ひとのいのちは、いづるいき、いづるいきをまたずして、をはることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきは攝取不捨の誓願はむなしくならせおはしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすが、よからんものをこそ、たすけたまはんずれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらす

こゝろかけて、邊地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず、わろからんにつけても、いよ／＼願力をあをぎまいらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱のこゝろもいでくべし。すべてよろづのことにつけて、往生には、かしこきおもひを具せずして、たゞほれんと、彌陀の御恩の深重なることつねにおもひいだしまいらすべし。しかれば、念佛ももうされさふらふ。これ自然なり、わがはからはざるを、自然とまうすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを自然といふことの、別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふらふよしうけたまはる、あさましくさふらふなり。

【二七】此章は邊地の往生者も遂には地獄に墮つと云ふ説の典據が何處に破せるものと追窮して

【化土】彌陀教化の土、懈慢界等の如き土。

【二八】此章は施物の多少は其功德に大小ありと説く偏執を破せるもの。

邊地の往生をとぐるひと、つゝには地獄におつべしといふこと、この條いづれの證文にみえさふらふぞや。學生たつるひとのなかにいひいださるゝことにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。經論聖教をばいかやうにみなされてさふらふやらん。信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、邊地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらくとこそうけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらふを、つゝにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如來に虚妄をまうしつけまいらせられさふらふなれ。

佛法のかたに施入物の多少にしたがひて、大小佛になるべしといふこと、この條不可説なり。

【かた】方の字、
僧侶の事。
【比興】比較して
良い方に阿諛する
事。

【はしひきかけ】
端引懸られると盡
き、或事柄に端を
發しての意。

【二九】此章は以上
十八章中下八章の
結文なり。

【勢觀房等】親鸞
の傳記中に出づる
人々、法然の弟子、
傳記不明。

り云々、比興のことなり。まづ佛に大小の分量をさだめんことあるべからずさふらふや。
かの安養淨土の教主の御身量をとかれてさふらふもそれは方便報身のかたちなり。法性の
さとりをひらひて、長短方圓のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはたれなば、
なにをもてか大小をさだむべきや。念佛まうすに化佛をみたてまつるといふことのさふら
ふなるこそ、大念には大佛をみ、小念には小佛をみるといへるか。もしこのことはりなにと
に、はしひきかけられさふらふやらん。かつはまた檀波羅蜜の行ともいひつべし。いかに
たからものを佛前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かけなばその詮なし。一紙半錢
も佛法のかたにいれずとも、他力にこゝろをなげて、信心ふかくば、それこそ願の本意に
てさふらはめ。すべて佛法にことをよせて、世間の欲心もあるゆへに、同朋をいひをどさ
るるにや。

(一九)右條々は、みなもて信心のことなるより、おこりささふらふか。故聖人の御ものがたり、
法然聖人の御とき、御弟子のかずおほかりけるなかに、おなじく御信心のひとも、すく
なくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして御相論のことさふらひけり、そのゆ
へは、善信が信心も聖人の御信心もひとつなりとおほせのさふらひければ、勢觀房念佛房
なんどまうす御同朋達もてのほかにあらそひたまひて、いかでか聖人の御信心に、善信房
の信心ひとつにはあるべきぞとさふらひければ、聖人の御智慧才覺ひろくおほしますに、
一ならんとまうさばこそひがごとならめ、往生の信心において、またくことなることな

し、たゞひとつなりと御返答ありけれども、なをいかでかその義あらんといふ疑難ありければ、詮ずるところ聖人の御まへにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をまうしあげれば、法然聖人のおほせには、源空が信心も如来よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も如来よりたまはらせたまひたる信心なり、さればたゞひとつなり。別の信心にておはしまさんひとは源空がまいらんする淨土へはよもまひらせたまひさふらひしかば、當時の一向專修のひとつのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともさふらふらんとおほえさふらふ。いづれもく、くりごとにてさふらへども、かきつけさふらふなり。露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそあひともなはしめたまふひとびと御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむきをも、まうしきかせまいらせさふらへども、閉眼のうちはこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめと、なげき存じさふらひて、かくのごとくの義もおほせられあひさふらふひとくにも、いまよはされなんどせらるゝことのおほせはんときは、故聖人の御ころにあひかなひて、御もちのさふらふ、御聖教どもを、よく御らんさふらふべし。おほよそ聖教は、眞實權假ともにあひまじはりさふらふなり。權をすて、實をとり假をさしをきて眞をもちゐるこそ、聖人の御本意にてさふらへ。かまへて、聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ。大切の證文ども、少々ぬきいでまいらせさふらふて、目やすにして、この書にそへまいらせてさふらふなり。聖人のつねにおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく案す

【權假】眞實に對して方便説。

【おもひとき】思
ひ解くと書き、熱
虚翫味する事。

れば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懐さふらひしことを、いままた案するに、善導の、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみつねに流轉して、出離の縁あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしませず、さればかたじけなく、わが御身にひきかけてわれらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩の、たかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり。まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひともしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには、善惡のふたつ、總じてもて、存知せざるなり。そのゆへは、如來の御こゝろに、よしとおぼしめすほどにしりとをしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ。如來のあしとおぼしめすほどにしりとをしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせはさふらひしか。まことに、われもひともし、そらごとをのみまうしあひさふらふなかに、ひとつuitたましきことのさふらふなり。そのゆへは念佛まうすについて信心のおもむきをもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論のたゝかひかたんがために、またくおほせにてなきことをも、おほせとのみまうすこと、あさましくなげき存じさふらふなり。このむねをよく／＼おもひとき、

こゝろえらるべきことにさふらふなり。これさらにわたくしのことばにあらすといへども、釋のゆくちもしらず、法文の淺深をこゝろえわけたることもさふらはねばさだめておかしきことにてこそさふらはめども、故親鸞のおほせごとさふらひしおもむき、百分が一、かたはしばかりをもおもひいでまいらせて、かきつけさふらふなり。かなしきかなや、さひはひに念佛しながら直に報土にむまれずして邊地にやどをとらんこと、一室の行者のなかに信心ことなることなからんために、なくくふでをそめて、これをしるす。なづけて數異鈔といふべし。外見あるべからず。

後鳥羽院御宇法然聖人他力本願念佛宗興行す于時興福寺僧侶敵奏之上御弟子中狼藉子細あるよし無實風聞によりて罪科に處せらる人數事。

一、法然聖人并御弟子七人流罪又御弟子四人死罪にをこなはるゝなり。聖人は土佐國番田といふ所へ流罪。罪名藤井元彦男々生年七十六歳なり。

親鸞は越後國。罪名藤井善信。生年三十五歳なり。
淨觀房備後國澄西禪光房伯耆國

好覺房伊豆國行空法本房佐渡國
幸西成覺房善惠房二人同遠流にさだまる。しかるに無動寺之善題大僧正これを申あづ

かると云。遠流之人々已上八人なりと。云云
被行死罪人々

一番 西意善緯房

二番 性願房

三番 住蓮房

四番 安樂房

二位法印尊長之沙汰也

親鸞改二僧儀一賜二俗名一仍非僧非俗然間以二禿字一爲二姓被二經二奏問一畢彼御申狀于今

外記 應納云 流罪以後愚禿親鸞令二書給二也。

右斯聖教者爲二當流大事聖教一也。於二無宿善機一無二左右一不可二許レ之者也。

釋 蓮 如 御判

歎 異 鈔 畢

御

文

折々本編には蓮如が
 門下の爲に當り
 されたる消息體の
 法語八十通を收輯
 せるもの蓮如の
 孫圓如の輯にかか
 り、五帖に分つ。○
 文蓮如上人越前入
 國常初宗風地を拂
 ひ、門徒主分始を
 徒に唯名利を本
 競ひ、その如き狀を
 とせる。其の反省を
 す爲め、越前にて作
 られし最初の御文
 此御文成つて後同
 月廿七日吉崎の坊
 舍建立さる。○

御文 一帖目

(二あるひと
 或人いはく、當流のこゝろは、門徒をば、かならずわが弟子と、こゝろえをくべく候
 やらん、如來聖人の御弟子とまうすべく候やらん。その分別を存知せず候。また在々所
 所に小門徒をもちて候をも、このあひだは、手次の坊主には、あひかくしをき候やう
 に、心中をもちて候。これも、しかるべくもなきよし、人のまうされ候あひだ、おなじ
 くこれも不審千萬に候。御ねんごろにうけたまはりたく候。

答ていはく、この不審、もとも肝要とこそ存じ候へ、かたのごとく耳にとゞめをき候
 分まうしのぶべし、きこしめされ候へ。

故聖人のおほせには、親鸞は、弟子一人ももたず、とこそおほせられ候ひつれ。そのゆゑ
 は、如來の教法を、十方衆生にとききかしむるときは、たゞ如來の御代官をまうしつるば
 かりなり、さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法を、われも信じ、ひとにも
 をしへきかしむるばかりなり、そのほかは、なにををしへて弟子といはんぞ、とおほせら
 れつるなり。さればとも同行なるべきものなり。これによりて聖人は御同朋御同行とこ
 そ、かしづきておほせられけり。さればちかごろは、大坊主分の人もわれは一流の安心の
 次第をもしらす、たましく弟子のなかに信心の沙汰する在所へゆきて、聽聞し候人をば、

御文 一帖目

ことのほか説諫をくはへ候て、あるひはなかをたがひなんどせられ候あひだ、坊主も、しかしかと信心の一理をも聴聞せず、また弟子をば、かやうにあひさへ候あひだ、われも信心決定せず、弟子も信心決定せずして、一生はむなしくすぎゆくやうに候こと、まことに自損損他のがのがれがたく候あさましく、

古歌にいはいはく、

うれしさをむかしはそでにつゝみけりこよひは身にもあまりぬるかな

うれしさをむかしはそでにつゝむといへるこゝろは、むかしは雑行正行の分別もなく、念佛だにも申せば、往生するとはかりおもひつるこゝろなり。こよひは身にもあまりといへるは、正雜の分別をきゝわけ、一向一心になりて信心決定のうへに、佛恩報盡のため、念佛まうすこゝろは、おほきに各別なり。かるがゆゑに、身のをきどころもなく、おどりあがるほどにおもふあひだ、よろこびは身にもうれしさがあまりぬるといへるこゝろなり。あなかしこゝ。

天明三年七月十五日

【二】出家發心の文、宗義を辨ふるもの更になき當時の越前の道俗に對す。一家の大綱を示す。

當流親鸞聖人の一義は、あながちに、出家發心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せず、たゞ一念歸命の他力の信心を決定せしむるときは、さらに男女老少をえらばざるものなり。されば、この信をえたるくらゐを、經には即得往生、住不退轉ととき、釋には

【和讃】 親鸞の高僧和讃。

【機】 機類又は機根の事。

【三】 獵漁の文、越前吉崎は漁業を營む者多きより、特に前住存如上人の命日に参詣者に諭されし文。

一念發起、入正定之聚ともいへり。これすなはち不來迎の談平生業成の義なり。

和讃にはく、彌陀の報土をねがふひと、外儀のすがたはことなりと、本願名號信受して、寤寐にわするゝことなかれといへり。外儀のすがたといふは、在學出家男子女人をえらばざるこゝろなり。つきに本願名號信受して、寤寐にわするゝことなかれといふは、かたちはいかやうなりといふとも、又つみは十惡五逆、謗法闍提のともがらなれども、廻心懺悔して、ふかく、かゝるあさましき機を、すくひまします彌陀如來の本願なり、と信知して、ふたごゝろなく如來をたのむこゝろの、ねてもさめても憶念の心つねにしてわすれざるを、本願たのむ、決定心をえたる信心の行人とはいふなり。さてこのうへには、たとひ行住坐臥に稱名すとも、彌陀如來の御恩を報じまうす念佛なり、とおもふべきなり、これを眞實信心をえたる決定往生の行者とはまうすなり。あなかしこく。

あつき日にながるゝあせはなみだかなかきをくふでのあとごをかしき
文明三年七月十八日

【三】 まづ、當流の安心のをもむきは、あながちに、わがこゝろのわるきをも、また妄念妄執のこゝろのをこるをも、とどめよといふにもあらず、ただあきなひをもし、奉公をもせよ、獵すなだりをもせよ。かゝるあさましき罪業にのみ、朝夕まどひぬる我等ごときのいたづらものを、たすけんとかひまします彌陀如來の本願にてましますぞ、とふかく信じて、

一心にふたごゝろなく、彌陀一佛の悲願にすがりて、たすけましませとおもふこゝろの一念の信まことなれば、かならず如來の御たすけにあづかるものなり。このうへにはなにとこゝろえて念佛まうすべきぞなれば、往生は、いまの信力によりて、御たすけありつるかたじけなき御恩報謝のために、わがいのちあらんかぎり、報謝のためとおもひ念佛まうすべきなり。これを當流の安心決定したる信心の行者とはまうすべきなり、あなかしこあなかしこ。

文明三年十二月十八日

【四】 自問自答の外、加賀松任の屋小右衛門なるもの宗祖の御正忌に際し吉崎に參詣して通夜しける夜の蓮師勸化の趣を信稱なる人の聞書しれし文と傳ふ。

抑、親鸞聖人の一流にをいては、平生業成の儀にして、來迎をも執せられさふらはぬよし、うけたまはりをよびさふらふは、いかがはんべるべきや、その平生業成とまうすことも、不來迎なんどの儀をも、さらに存知せず。くはしく聽聞つかまつりたくさふらふ。

答てはいく、まことに、この不審、もともて一流の肝要とおぼえさふらふ。おほよそ、當家には、一念發起平生業成と談じて、平生に、彌陀如來の本願の、我等をたすけたまふことほりをきゝひらくことは、宿善の開發によるがゆゑなり、とこゝろえてのちは、わがちからにてはなかりけり、佛智他力のさづけによりて、本願の由來を存するものなり、とこゝろうるが、すなはち平生業成の儀なり。されば平生業成といふは、いまのことほりをきゝひらきて、往生治定とおもひさだむるくらゐを、一念發起正定聚とも、平生業

成とも、即得往生住不退轉ともいふなり。

問ていはく、一念往生發起の儀、くはしくこゝろえられたり。しかれども不來迎の儀、いまだ分別せずさふらふ。ねんごろにしめしうけたまはるべくさふらふ。

答ていはく、不來迎のことも、一念發起住正定聚と沙汰せられさふらふときは、さらに來迎を期するなんどまうすこともなきなり。そのゆへは來迎を期するなんどまうすことは、諸行の機にとりてのことなり。眞實信心の行者は一念發起するところにて、やがて攝取不捨の光益にあづかるときは、來迎までもなきなり、としらるゝなり。されば聖人のおほせには、來迎は諸行往生にあり、眞實信心の行人は、攝取不捨のゆへに、正定聚に住す。正定聚に住するがゆへに、かならず滅度にいたる、かるがゆへに、臨終まつことなし、來迎たのむことなしといへり。この御ことばをもて、こゝろうべきものなり。

【諸行】 本願力廻向の行たる念佛以外の自力の行業をいふ。
【聖人】 親鸞の未燈鈔に出づる語。

問ていはく、正定と滅度とは、一益とこゝろうべきか、また二益とこゝろうべきや。
答ていはく、一念發起のかたは、正定聚なり、これは穢土の益なり。つきに滅度は、淨土にてうべき益にてあるなりと、こゝろうべきなり。されば二益なりとおもふべきものなり。

問ていはく、かくのごとくこゝろえさふらふときは、往生は治定と存じをきさふらふに、なにとて、わづらはしく、信心を具すべきなんど沙汰さふらふは、いかがこゝろえはんべるべきや、これも、うけたまはりたくさふらふ。

答ていはく、まことにもて、このたづねのむね肝要なり。されば、いまのごとくにこゝ

ろえさふらふすがたこそ、すなはち信心決定のこゝろにてさふらふなり。

問ていはく、信心決定するすがた、すなはち平生業成と不來迎と正定聚との道理にて

さふらふよし、分明に聴聞つかまつりさふらひをはりぬ。しかりといへども、信心治定し

てののちには、自身の往生極樂のためとこゝろえて、念佛まうしさふらふべきか、また佛

恩報謝のためとこゝろうべきや、いまだ、そのこゝろをえささふらふ。

答ていはく、この不審また肝要とこそおぼえさふらへ。そのゆへは、一念の信心發得已

後の念佛をば、自身往生の業とはおもふべからず、たゞひとへに、佛恩報謝のためとこゝ

ろえらるべきものなり。されば善導和尚の上盡一形、下至一念と釋せり。下至一念とい

ふは、信心決定のすがたなり。上盡一形は、佛恩報盡の念佛なりときこえたり。これを

もて、よくよくこゝろえらるべきものなり。あなかしこく。

文明四年十一月二十七日

【五】 雪中の文。

加州能登越中より

吉崎山上に創建の

御堂を拜見せん爲

め雪中をもいとほ

ず參集せる道俗に

對し宗要を述べら

れしなり。

【吉崎】 越前國細

呂宜郷内吉崎に蓮

(五) 抑、當年より、事外、加州能登越中兩三箇國の間より、道俗男女、群集をなして、此吉

崎の山中に參詣せらるゝ面々の心中のとほりいかゞと、心元なく候。そのゆへはまづ、當

流のをもむきは、このたび極樂に往生すべきことは、他力の信心をえたるがゆへなり。

しかれども此一流のうちをいて、しかくとその信心のすがたをも、えたる人これなし。

かくのごとくのやからは、いかでか、報土の往生をば、たやすくとぐべきや、一大事とい

如上人在住の坊舎あり。

【文明五年】 上人五十九歳。

【六】 睡眠の文。上人の息女見玉尼の病中に看病の人へ書き與へられたるものと傳ふ。死期の近づけることを想ひうかべて宗教的反省をうながす。

ふは、これなり。幸に五里十里の遠路をしのぎ、この雪の中に參詣のころざしは、いかやうにころえられたる心中ぞや。千萬心元なき次第なり。所詮已前は、いかやうの心中にてありといふとも、これよりのちは、心中にころえをかるべき次第を、くはしく申すべし。よくよく、みゝをそばだて、聴聞あるべし。そのゆへは、他力の信心といふ事を、しかと心中にたくはへられ候て、そのうへには、佛恩報謝のためには、行住坐臥に念佛を申さるべきばかりなり。このころえにてあるならば、このたびの往生は一定なり。このうれしさのあまりには、師匠坊主の在所へも、あゆみをはこび、ころざしをもいたすべきものなり。これすなはち、當流の儀を、よく、ころえたる信心の人とは申すべきものなり。あなかしこ。

文明五年二月八日

抑、當年の夏このごろは、なにとやらん、ことのほか睡眠におかされて、ねむたくさふらふはいかん、と案じさふらへば、不審もなく、往生の死期も、ちかづくかとおぼえ候まことにもて、あじきなく名残おしくこそさふらへ。さりながら、今日までも、往生の期も、いまなきたらんと、油斷なく、そのかまへはさふらふ。それにつけても、この在所に在いて、已後までも、信心決定するひとの、退轉なきやうにもさふらへかすと、念願のみ、晝夜不斷におもふばかりなり。この分にては、往生つかまつりさふらふとも、いまは子細

【そなたの人人】
見玉尼の病床に侍
れる人人を指す。

【七】彌生中半の
文。旅人の對話に
擬して女人往生の
法門を示す。

なくさふらふべきに、それにつけても、面々の心中も、ことのほか、油断どもにてこそは
さふらへ。命のあらんかぎり、われらは、いまのごとくにてあるべく候。よろづにつけ
て、みな／＼の心中こそ、不足に存じさふらへ。明日もしらぬいのちにてこそ候に、な
にごとをまうすも、いのちをはりさふらはど、いたづらごとにてあるべく候。いのちのう
ちに、不審もとく／＼はれられさふらはでは、さだめて、後悔のみにてさふらはんずる
ぞ、御ころえあるべく候。あなかしこく。

この障子の、そなたの人々のかたへ、まいらせさふらふ。後の年に、取いだして御覽候へ。
文明五年卯月二十五日書レ之。

(七)
さんぬる文明第四の曆、彌生中半のころかと、おぼえはんべりに、さもありぬらんと
みえつる女姓一二人、おとこなんどあひ具したるひとく、この山のことを沙汰しまうし
けるは、そもく、このごろ吉崎の山上に、一字の坊舎をたてられて、言語道断おもしろ
き在所かなと、まうしさふらふなかに、ことに加賀、越中、能登、越後、信濃、出羽、奥州、
七箇國より、かの門下中、この當山へ、道俗男女、参詣をいたし、群集せしむるよし、そ
のきこえ、かくれなし、これ末代の不思議なり、たゞごととおぼえはんべらず。さりな
がら、かの門徒の面々には、さても、念佛法門をば、なにとすめられさふらふやらん。
とりわけ信心といふことを、むねとをしへられさふらふよし、ひとく／＼まうし候なるは、

【五障三従】特に女子の障多きことをあらはす。五障に就て二説あり、一に轉輪王、梵天王、帝釋、魔王、佛となるをさふ。二に五善根(信、精進、念、定、慧)に對し欺、怠、瞋、恨、怨の五障あり。三従とは幼にして父母に從ひ、嫁して夫に從ひ、老いては子に從ふべき三不自由あり。【八萬四千】衆生の煩惱を八萬四千種の煩惱を八萬四千種にわかす。之に應じて對破し攝取する佛智の力用をあらはす。

いかやうなることにて候やらん。くはしくまいらせて、われらも、この罪業深重のあさましき女人の身をもちてさふらへば、その信心とやらんをきゝわけまいらせて、往生をねがひたく候よしを、かの山中のひとにたづねまうしてさふらへば、しめしたまへるをもむきは、なにのやうもなく、たゞわが身は、十惡五逆、五障三従のあさましきものぞと、おもひて、ふかく阿彌陀如來は、かゝる機をたすけまします御すがたなりと、こゝろえまいらせて、ふたごゝろなく彌陀をたのみたてまつりて、たすけたまへとおもふこゝろの一念をこるとき、かたじけなくも、如來は八萬四千の光明をはなちて、その身を攝取したまふなり。これを彌陀如來の念佛の行者を攝取したまふといへるは、このことなり。攝取不捨といふは、おさめとりてすてたまはずといふこゝろなり。このこゝろを、信心をえたる人とはまうすなり。さてこのうへには、ねてもさめてもたてもゐても、南無阿彌陀佛とまうす念佛は、彌陀にはやたすけられまいらせつるかたじけなさの彌陀の御恩を、南無阿彌陀佛となへて、報じまうす念佛なりと、こゝろうべきなりと、ねんごろにかたりたまひしかば、この女人たちそのほかのひとまうされけるは、まことにわれらが根機にかなひたる彌陀如來の本願にてましゝ候をも、いまゝで信じまいらせさふらはぬこと、あさましさ、まうすばかりもさふらはず、いまよりのちは、一向に彌陀をたのみまいらせて、ふたごゝろなく一念にわが往生は、如來のかたより御たすけありけりと信じたてまつりて、そののちの念佛は、佛恩報謝の稱名なりと、こゝろえ候べきなり。かゝる不思

【宿縁】信心開發の爲めの縁となれる過去一切の善根功德。

【八】吉崎建立の文。吉崎建立已來諸人群集するに就て、豊原下泉兩寺の衆徒僧徒せること甚しく由り、文明四年正月より諸人の出入を禁止するも來集に日倍する有様なれば、他の謗難を慮りて、五年八月十六日藤島に退出するも、九月六日再び還歸して此文を製し、吉崎居住の素意を述べて内、不信の徒を誡め、他、諸山の偏執を除く。

議の宿縁にあひまいらせて、殊勝の法をきゝまいらせ候ことの、ありがたさたふとさ、なか／＼まうすばかりもなくおぼえはんべるなり。いまははやいとままうすなりとて、なみだをうかめて、みな／＼かへりにけり。あなかしこく。

文明五年八月十二日

(八) 文明第三、初夏上旬のころより、

江州志賀郡、大津三井寺南別所邊より、なにとなく、不圖しのびいで、越前、加賀、諸所を、經廻せしめをはりぬ。よて當國細呂宜郷内、

吉崎といふこの在所、すぐれておもしろきあひだ、年來、虎狼すみなれし、この山中をひきたいらげて、七月廿七日より、かたのごとく、一字を建立して、昨日今日とすぎゆく

ほどに、はや三年の春秋は、をくりけり。さるほどに、道俗男女、群集せしむといへども、

さらになにへんともなき體なるあひだ、當年より、諸人の出入を、とゞむるころは、この在所に居住せしむる根元は、なにごとぞなれば、そも／＼、人界の生をうけて、あひが

たき佛法に、すでにあへる身が、いたづらにむなしく捺落にしづまは、まことにもて、あさましきことにはあらずや。しかるあひだ、念佛の信心を決定して、極樂の往生をとげ

んとおもはざらん人々は、なにしに、この在所へ來集せんこと、かなふべからざるよしの成敗を、くはへをはりぬ。これひとへに、名聞利養を本とせず、たゞ後生菩提をことゝす

るがゆへなり。しかれば見聞の諸人、偏執をなすことなかれ。あなかしこく。

ぶんめいご わんくわつひ
文明五年九月日

【九】物忌の文。初めに他謗を擧げて宗教の立場より一般に物忌思想を否定す。

【當宗】浄土眞宗を指す。

【をかしく】そしりわらふ際に用ひられし當時の俗語

【斟酌】遠慮の義

【聊爾】輕卒、庶略の義。

【あさま】あさはかなるの意。

【物忌】時處行事などに忌み憚るものありとすること

【公方】公儀即ち將軍家をいふ。

(九) 抑、當宗を、昔より、人こそぞりて、をかしく、きたなき宗とまうすなり。これまことに

道理のさすところなり。そのゆへは、當流人數のなかにをいて、あるひは、他門他宗に對

して、はゞかりなく、我家の義を申しあらはせるいはれなり。これ、おほきなるあやまり

なり。それ、當流のおきてをまもるといふは、我流につたふるところの義を、しかと、内

心にかくはへて、外相に、そのいろをあらはさぬを、よくものにこゝろえたる人とはいふ

なり。しかるに當世は、我宗のことを、他門他宗にむかひて、その斟酌もなく、聊爾に沙

汰するによりて、當流を、人のあさまにおもふなり。かやうに、こゝろえのわるきひと

あるによりて、當流を、きたなく、いまはしき宗と、人おもへり。さらにもて、これは他

人わろきにはあらず、自流の人わろきによるなり、とこゝろうべし。

つぎに、物忌といふことは、我流には、佛法について、ものいまはぬといへることな

り。他宗にも公方にも對しては、などか物をいまざらんや。他宗他門にむかひては、もと

よりいむべきこと勿論なり。又よその人の物いむと、いひて、そしることあるべからず。

しかりといへども、佛法を修行せんひとは、念佛者にかぎらず、物さのみいむべからずと、あ

きらかに諸經の文にも、あまたみえたり。まづ涅槃經にのたまはく、如來法中、無有選擇、言

日良辰といへり。この文のこゝろは、如來の法のなかに言日良辰をえらぶことなしと云なり。

【三昧】 般若三昧の事、

【かくのごとく】

已下の記述は此文が教信證、化身土末卷の意を受け、その中に佛敎の外道を對し、その眞偽を辨ぜんが爲め凡て十一の經文を引用せる中、今涅槃經、般若經の二を引きて他を略せしことを表はす。

【二〇】 多屋内方の文。上人の息女見玉尼逝去に際し看病に侍せる多屋の内方達に對し特に女人往生の要を示されしと傳ふ。

【多屋】 寺院の山内に構へたる別屋にして宿坊諸所に同じ。

【内方】 内室のこと。

又、般若經にのたまはく、優婆夷、聞是三昧、欲學者、至自歸命佛、歸命法、歸命比丘僧、不得事餘道、不得拜於天、不得祠鬼神、不得視吉良日、已。

この文のこゝろは、優婆夷、この三昧をきゝて、まなばんと欲せんものは、みづから佛に歸命し、法に歸命せよ、比丘僧に歸命せよ、餘道につかふることをえざれ、天を拜することとをえざれ、鬼神をまつることをえざれ、吉良日を見ることがをえざれといへり。かくのごとくの經文ども、これありといへども、此分をいだすなり。ことに念佛行者は、かれらに、つかふべからざるやうにみえたり。よくよくこゝろをべし。あなかしこ。

文明五年九月日

抑、吉崎の當山にをいて、多屋の坊主達の内方とならんひとは、まことに、先世の宿縁あさからぬゆへと、おもひはんべるべきなり。それも後生を一大事とおもひ、信心も決定したらん身にとりてのうへのことなり。しかれば、内方とならんひとは、あひかまへて、信心を、よくよくとらるべし。それ、まづ當流の安心とまうすことは、おほよそ、淨土一家のうちにをいて、あひかはりて、ことにすぐれたるいはれあるがゆへに、他力の大神心とまうすなり。されば、この信心をえたるひとは、十人は十人ながら、百人は百人ながら、今度の往生は一定なりと、こゝろをべきものなり。

その安心とまうすは、いかやうにこゝろをべきことやらん、くはしくも、しりはんべら

【後生】 未來往生の事。

ざるなり。

こたへていはく、まことに、この不審、肝要のことなり。おほよそ、當流の信心をとるべきをもむきは、まづ、わが身は女人なれば、つみふかき五障三従とて、あさましき身にて、すでに十方の如來も、三世の諸佛にも、すてられたる女人なりけるを、かたじけなくも、彌陀如來ひとり、かゝる機をすくはんと、ちかひたまひて、すでに四十八願をこしたまへり。そのうち第十八の願をいいて、一切の惡人女人をたすけたまへるうへに、なを女人は、つみふかく、うたがひのこゝろふかきによりて、またかさねて第三十五の願に、なを女人をたすけんと、いへる願をこしたまへるなり。かゝる彌陀如來の御苦勞ありつる御恩のかたじけなさよと、ふかくおもふべきなり。

問ていはく、さて、かやうに彌陀如來のわれらごときものをすくはんと、たび／＼願をこしたまへることの、ありがたさを、こゝろえわけまいらせさふらひぬるについて、なにとやうに、機をもちて、彌陀をたのみまいらせさふらはんずるやらん、くはしくしめしたまふべきなり。

こたへていはく、信心をとり、彌陀をたのまん、とおもひたまはゞ、まづ、人間は、ただゆめまぼろしのあひだのことなり、後生こそ、まことに永生の樂果なり、とおもひとりて、人間は、五十年百年のうちのたのしみなり、後生こそ一大事なりと、おもひてもろもろの雜行をこのむこゝろをすて、あるひはまた、ものゝいまはしくおもふこゝろをもす

【第三十五】 女人成佛の願。

て、一心一向に彌陀をたのみたてまつりて、そのほか餘の佛菩薩諸神等にもこゝろをかけずして、たゞひとすぢに彌陀に歸してこのたゞの往生は治定なるべしと、おもはゞ、そのありがたさのあまり、念佛をまうして、彌陀如來のわれらをつけたまふ御恩を、敬じたてまつるべきなり。これを、信心をえたる多屋の坊主達の内方のすがたとはまうすべきものなり。あなかしこ。

文明五年九月十一日

【二】電光朝露の交。世の無常を示し出。生れの肝要を説き、兼て施物頼みを説む。藤鳥超勝寺にて表はされたるものと傳ふ

それ、おもんみれば、人間は、たゞ電光朝露のゆめまぼろしのあひだのたのしみぞかし。たとひまた、榮華榮耀にふけりて、おもふさまのことなりといふとも、それはたゞ、五十年乃至百年のうちのことなり。もしたゞいまも、無常のかぜきたりてさそひなば、いかなる病苦にあひてか、むなしくなりなんや。まことに死せんときは、かねてたのみをきつる妻子も財寶も、わが身には、ひとつも、あひそふことあるべからず。されば、死出の山路のすゑ、三塗の大河をば、たゞひとりこそ、ゆきなんすれ。これによりて、たゞふかくねがふべきは、後生なり。またたのむべきは、彌陀如來なり。信心決定してまいるべきは、安養の淨土なりと、おもふべきなり。これについて、ちかごろは、この方の念佛者の坊主達、佛法の次第、もてのほか相違す。そのゆへは、門徒のかたより、ものをとるを、よき弟子といひ、これを信心のひとついへり。これ、おほきなるあやまりなり。また弟子

坊主ぼくしゅにもものをだにも、おほくまいらせば、わがちからかなはずとも、坊主ぼくしゅのちからにて、たすかるべきやうにおもへり。これもあやまりなり。かくのごとく、坊主ぼくしゅと門徒もんてのあひだにおいて、さらに當流たうりゆうの信心しんじんのこゝろえの分ぶんは、ひとつもなし。まことにあさましや、師し弟子でしともに、極樂ごくらくには往生おんじやうせずして、むなしく地獄ぢごくにおちんことは、うたがひなし。なげきても、なをあまりあり、かなしみても、なをふかくなしむべし。しかれば、今日けふよりのちは、他方たうほうの大信心たうしんじんの次第しだいを、よく存知ぞんじしたらんひとに、あひたづねて、信心しんじん決定けつぎして、その信心しんじんのをもむきを、弟子でしにもをしへて、もろともに、今度こんどの一大事いちだいじの往生おんじやうを、よくよくとぐべきものなり。あなかしこく。

文明五年九月中旬

【三】年來超勝寺
の文。超勝寺潛在中に其門徒に對し會筵の心得に就いて諭されしもの。
【超勝寺】 感前藤島の講樂講中
【座衆】 講樂講中
の事。

抑、年來、超勝寺の門徒にをいて、佛法の次第、もてのほか相違せり。そのいはれは、まづ座衆とてこれあり。いかにも、その座上ていざうじやうにあがりて、さかづきなんごまでも、ひとよひ、さきにもみ、座中ざちゆうのひとにも、またそのほかたれんゝにも、いみじくおもはれんするが、まことに佛法の肝要かんようたるやうに、心中しんちゆうに、こゝろえをきたり。これさらに、往生極樂のためにあらず。たゞ世間の名聞なもんにいたり。しかるに、當流たうりゆうにをいて、毎月まいげつの會合かいがふの由來ゆらいは、なにの用もちぞなれば、在家無智ざいかむちの身みをもて、いたづらにくらし、いたづらにあかして、一期いちごは、むなしくすきて、つるに三途さんずにしづまん身みが、一月いちげつに一度いちどなりとも、せめて念佛修行ねんぶつぎやうぎやう

の人數ばかり、道場にあつまりて、わが信心は、ひとの信心は、いかゞあるらん、といふ信心沙汰をすべき用の會合なるを、ちかごろは、その信心といふことは、かつて是非の沙汰にをよばざるあひだ、言語道斷あさましき次第なり。所詮、自今已後は、かたく、會合の座中にをいて、信心の沙汰をすべきものなり。これ眞實の往生極樂をとぐべきいはれなるがゆへなり。あなかしこ／＼。

文明五年九月下旬

【三】十劫邪義の文。超勝寺に在りて當時の門徒の中に唱へられ居りし十劫秘事の異解を破し眞實信心の意義を述ぶ。

【三信】至心、信樂欲生。
【三心】至誠心、深心、廻向發願心
【一心】執持名號の一心と表はせり

抑、ちかごろは、この方念佛者のなかにをいて、不思議の名言をつかひて、これこそ信心を、えたるすがたよといひて、しかも、われは當流の信心を、よくしりがほの體に、心中にこゝろえをきたり、そのことばにいはく、十劫正覺のはじめより、われらが往生を、さだめたまへる彌陀の御恩をわすれぬが信心ぞ、といへり。これ、おほきなるあやまりなり、そも、彌陀如來の、正覺をなすれたまへるいはれを、しりたりといふとも、われらが往生すべき他力の信心といふいはれをしらずば、いたづらごとなり。しかれば向後にをいては、まづ當流の眞實信心といふことを、よく／＼存知すべきなり。その信心といふは、大經には三信ととき、觀經には三心といひ、阿彌陀經には一心とあらはせり。三經ともに、その名かはりたりといへども、そのこゝろは、たゞ他力の一心をあらはせるこゝろなり。されば、信心といへるそのすがたは、いかやうなることぞといへば、まづ、もろ／＼の難行

をさしをきて、一向に彌陀如來をたのみたてまつりて、自餘の一切の諸神諸佛等にもころをかけず、一心にもはら彌陀に歸命せば、如來は光明をもて、その身を攝取して、すてたまふべからず。これすなはち、われらが一念の信心決定したるすがたなり。かくのごとくこゝえてののちは、彌陀如來の、他力の信心を、われらにあたへたまへる御恩を、報じたてまつる念佛なりと、こゝろうべし。これをもて、信心決定したる念佛の行者とはまうすべきものなり。あなかしこ。

文明第五九月下旬比書之云云

【一四】立山白山の文。吉崎教園の發展と共に越前に於ける諸寺諸山との間の確執次第に劇しくなり、由て超勝寺にて此文の製作ありと傳ふ。

【立山】越中の國眞言の別當あり。

【白山】加賀石川郡、泰澄大師養老元年の開基。

【平泉寺豐原寺】共に泰澄大師の草創にして何れも天台宗なり。

【譯】大無量壽經第十八願中の文。

抑、當流念佛者のなかにをいて、諸法を誹謗すべからず。まづ、越中、加賀ならば、立山、白山、そのほか諸山寺なり、越前ならば、平泉寺、豐原寺等なり。されば、經には、すでに唯除五逆誹謗正法とこそ、これをいましめられたり。これによりて、念佛者はことに、諸宗を謗すべからざるものなり。また、聖道諸宗の學者達もあながちに、念佛者をば謗すべからずと、みえたり、そのいはれば、經釋ともに、その文これおほしといへども、まづ、八宗の祖師龍樹菩薩の智論に、ふかくこれをいましめられたり。その文には、く、自法愛染故、毀替他人法、雖持戒行人、不免地獄苦といへり。かくのごとくの論判、分明なるときは、いづれも、佛説なり。あやまりて謗することなかれ。それみな、一宗々々のことなれば、わがたのまぬばかりにてこそあるべけれ。ことさら當流のなかにをいて、なに

の分別もなきもの、他宗をそしること、勿體なき次第なり。あひかまへて、一所の坊主分たるひとは、この成敗を、かたくいたすべきものなり。あなかしこ。

文明五年九月下旬

【五】宗名の文。初に古來宗名に訂する稱呼區區なるにつし自稱他稱を判別し、次に宗意を述ぶ。

【經】大經下に出づ。【開山】親鸞聖人を指す。

【自餘】西山、鐵西九品寺、長樂寺等の諸流を指す。

(二五) 問ていはく、當流を、みな世間に流布して、一向宗となづけ候は、いかやうなる子細にて候やらん。不審におぼえ候。

答ていはく、あながちに、我流を、一向宗となのであることは、別して祖師も、さだめられず。おほよそ、阿彌陀佛を一向にたのむによりて、みな人の、まうしなすゆへなり。しかりといへども、經文に、一向專念無量壽佛とときたまふゆへに、一向に無量壽佛を念ぜよ、といへることゝなるときは、一向宗とまうしたるも、子細なし。さりながら、開山は、この宗をば、淨土眞宗とこそ、さだめたまへり。されば、一向宗といふ名言は、さらに本宗より、まうさぬなりと、しるべし。されば、自餘の淨土宗は、もろくの雜行をゆるす。わが聖人は、雜行をえらびたまふ。このゆへに眞實報土の往生をとぐるなり。このいはれあるがゆへに、別して眞の字をいれたまふなり。

又のたまはく、當宗を、すでに淨土眞宗となづけられ候ことは、分明にきこえぬ。しかるに、この宗體にて、在家のつみふかき惡逆の機なりといふとも、彌陀の願力にすがりて、たやすく極樂に往生すべきやう、くはしくうけたまはりはんべらんとおもふなり。

【經】
出づ。

大經下卷に

答ていはく、當流のをもむきは、信心決定しぬれば、かならず眞實報土の往生をとぐべきなり。されば、その信心といふは、いかやうなることぞといへば、なにのわづらひもなく、彌陀如來を一心にたのみたてまつりて、その餘の佛菩薩等にも、こゝろをかけずして、一向にふたごゝろなく、彌陀を信するばかりなり。これをもて信心決定とは申ものなり。信心といへる二字をば、まことのこゝろとよめるなり。まことのこゝろといふは、行者のわろき自力のこゝろにては、たすからず。如來の他力のよきこゝろにて、たすかるがゆへに、まことのこゝろとはまうすなり。又名號をもて、なにのこゝろえもなくして、ただとなへては、たすからざるなり。されば經には聞其名號信心歡喜ととけり。その名號をきくといへるは、南無阿彌陀佛の六字の名號を無名無實にきくにあらず。善知識にあひてそのをしへをうけて、この南無阿彌陀佛の名號を南無とたのめば、かならず阿彌陀佛のたすけたまふといふ道理なり。これを經に信心歡喜ととかれたり。これによりて、南無阿彌陀佛の體は、われらをたすけたまへるすがたぞと、こゝろうべきなり。かやうに、こゝろえてのちは、行住坐臥に、口にとなる稱名をば、たゞ彌陀如來のたすけます御恩を報じたてまつる念佛ぞと、こゝろうべし。これをもて、信心決定して、極樂に往生する他力の念佛の行者とはまうすべきなり。あなかしこく。

文明第五、九月下旬第二日、至于已剋、加州山中湯治之内、書二集之一記。

御文一帖日畢

御文 二帖目

【一】おさらへの文。文明三夏上人吉崎に在住已來庶人徳風を慕ひ群集をなしたる宗義日に盛なるに従ひ漸く自他衆徒問の札櫟次第に劇しく終に守護方に訴の聞えあり、爲めに四年正月諸人の出入を制止せられし事ありしも來集の徒依りしも來集の徒依り上人の如く、由てから人を慮り、甚し吉崎を退出あり、然るに多屋の面達に懇請止む方なき同十月三日再び歸功ありて間もなき報恩講に遇ひ之の内方及來集の諸人に對して此訓誠ありと見ゆ。

抑、今度、一七箇日、報恩講のあひだにをいて、多屋内方も、そのほかの人も、大略、信心を決定し給へるよし、きこえたり。めでたく本望これにすぐべからず。さりながら、そのまゝうちすて候へば、信心も、うせ候べし。細々に信心のみぞをさらへて、彌陀の法水をながせと、いへる事ありげに候。それについて、女人の身は十方三世の諸佛にも、すてられたる身にて候を、阿彌陀如来なればこそ、かたじけなくも、たすけまし／＼候へ。そのゆへは、女人の身は、いかに眞實心になりたりといふとも、うたがひの心はふかくして、又、物なんどの、いまはしくおもふ心は、さらにうせがたくおぼえ候。ことに、在家の身は、世路につけ、又子孫なんどの事によそへても、たゞ今生にのみふけりて、これほどにはや、めにみえて、あだなる人間界の老少不定のさかひとしりながら、たゞいま三途八難にしづまん事をば、つゆちりほど心にかかずして、いたづらにあかしくらすは、これ、つねの人のならひなり。あさましといふも、をろかなり。これによりて、一心一向に、彌陀一佛の、悲願に歸して、ふかくたのみたてまつりて、もろ／＼の雜行を修する心をすて、又、諸神諸佛に追従まうす心をも、みなうちすて、さて、彌陀如来と申は、かゝる我がごときのあさましき女人のために、をこし給へる本願なれば、まことに、佛智

の不思議と信じて我身は、わろきいたづらものなり、とおもひつめて、ふかく如來に歸入する心をもつべし。さて、この信ずる心も、念ずる心も、彌陀如來の御方便より、をこそしむるものなりと、おもふべし。かやうにこゝろうるを、すなはち他力の信心をえたる人とはいふなり。又、このくらゐを、あるひは正定聚に住すとも、滅度にいたるとも、等正覺にいたるとも、彌勒にひとしとも申なり。又これを、一念發起の往生さだまりたる人とも申すなり、かくのごとく心えてのうへの稱名念佛は、彌陀如來の我らが往生を、やすくさだめ給へる、その御うれしさの御恩を、報じたてまつる念佛なり、とこゝろすべきものなり。あなかしこく。

これについて、まづ當流のおきてを、よく／＼まもらせ給ふべし。そのいはれは、あひかまへて、いまのごとく、信心のとほりを、心え給はゞ、身中に、ふかくおさめをきて、他宗他人に對して、そのふるまひをみせずして、又信心のやうをも、かたるべからず。一切の諸神などを、わが信ぜぬまでなりしをろかにすべからず。かくのごとく、信心のかたも、そのふるまひも、よき人をば、聖人も、よく心えたる信心の行者なりと、おぼせられたり。たゞふかく、こゝろをば、佛法にとゞむべきなり。あなかしこく。

文明第五、十二月八日、これをかきて、當山の多屋内方へまいらせ候。このほか、なを、不審の事候はゞ、かさねてとはせたまふべく候。

【所送寒暑】寒暑を以て一年とす。
【五十八歳】文明五年は上人五十九歳なれば恐らくは後人の誤りならん

所送寒暑五十八歳 御判

のちの代のしるしのためにかきをきしのりのことの葉かたみともなれ

【二】 出立の文。當時別異の解行に証はさるるもの多きを悲み信心爲正しき思に住すべき事を述べ、向一切の神祇等に對する態度を明にせり【開山聖人の御一流】他の淨土の諸流に對して親鸞の正因等の義。

抑、開山聖人の御一流には、それ、信心といふことをもて先とせられたり、その信心といふは、なにの用ぞといふに、無善造惡の我等が様なあさましき凡夫が、たやすく、彌陀の淨土へまいりなんずるための出立なり。この信心を獲得せずば、極樂には往生せずして、無間地獄に墮在すべきものなり。これによりて、その信心をとらんずるやうは、いかんと、いふに、それ、彌陀如來一佛を、ふかくたのみたてまつりて、自餘の諸善萬行にこのをかかず、又、諸神諸菩薩にをいて、今生のいのりをみなせるこゝろをうしなひ、又、わろき自力なんどいふ、ひがおもひをも、なげすて、彌陀を一心一向に信樂して、二ごゝろなき人を、彌陀は、かならず遍照の光明をもて、その人を攝取してすてたまはざるものなり。かやうに信をとるうへには、ねてもおきても、つねにまうす念佛は、かの彌陀の、われらをたすけたまふ御恩を、報じたてまつる念佛なりと、こゝろをべし。かやうにこゝろえたる人をこそ、まことに當流の信心を、よくとりたる正義とはいふべきものなり。このほかに、なほ信心といふことのありと、いふ人これあらば、おほきなるあやまりなり。すべて承引すべからざるものなり。あなかしこ。いまこの文にしるすところのをむきは、當流の親鸞聖人すゝめたまへる信心の正義なり。この分を、よくこゝろえたらん、人々は、あひかまへて、他宗他人に對して、

【たとひ】 次下の文は改邪鈔に出づる語。
【後世者】 後世菩提を願ふもの意

【三】 神明三ヶ條の外、青崎に於て内外互に相講誦し輕賤して佛道に異するもの多きを歎き、その弊風を矯めん爲め再三教示する處あるも一向にその効果なきより今また三ヶ條の制を立てて嚴誡を示し且その青崎在留の本意備に茲にあるを述べて各人の反省を促せり

この信心のやうを沙汰すべからず。又、自餘の一切の佛菩薩、ならびに諸神等をも、わが信ぜぬばかりなり。あながちに、これをかるしむべからず。これまことに、彌陀一佛の功德のうちに、みな一切の諸神は、こもれりと、おもふべきなり。總じて、一切の諸法にをいて、そしりをなすべからず。これをもて、當流のおきてを、よくまもれる人となづくべし、されば、聖人のいはく、たとひ牛ぬす人とはいはるとも、もしは後世者、もしは善人、もしは佛法者とみゆるやうに、ふるまふべからずとこそ、おほせられたり。このむねを、よくこころえて、念佛をば修行すべきものなり。

文明第五十二年十二月十二日夜書之

夫、當流開山聖人のひろめたまふところの一流のなかにをいて、みな勸化をいたすに、その不同これあるあひだ、所詮、向後は、當山多屋坊主已下、そのほか一卷の聖教をよまん人も、又來集の面々も各々に、當門下にその名をかけんともがらまでも、この三箇條の篇目をもて、これを存知せしめて、自今已後、その成敗をいたすべきものなり。

一、諸法、諸宗ともに、これを誹謗すべからず。
 一、諸神、諸佛、菩薩を、かるしむべからず。
 一、信心をとらしめて、報土往生をとぐべき事。

右斯三箇條の旨をまもりて、ふかく心底にたくはへて、これをもて本とせざらん人々に

【花洛】中華洛陽の略にして即ち京都を指す。

【神明】天神地祇の事。

をいては、この當山へ出入を停止すべきものなり。そも、さんぬる文明第三の曆仲夏の比より、花洛をいで、おなじき年、七月下旬の候、すでに、この、當山の風波あらし在所に草菴をしめて、此四箇年のあひだ、居住せしむる根元は、別の子細にあらず、この三箇條のすがたをもつて、かの北國中にをいて、當流の信心未決定のひとを、おなじく一味の安心になさんがためのゆへに、今日今時まで、堪忍せしむるところなり。よて、このをもむきをもて、これを信用せば、まことに、この年月の在國の本意たるべきものなり。

一、神明と申は、それ、佛法にをいて、信もなき衆生の、むなしく地獄におちんことを、かなしみおぼしめして、これをなにとしても、すくはんがために、かりに神とあらはれて、いさゝかなる縁をもて、それをたよりとして、つゐに、佛法にすゝめいれしめんための方便に、神とはあらはれたまふなり。しかれば、いまのときの衆生にをいて、彌陀をたのみ、信心決定して、念佛をまうし、極樂に往生すべき身となりなば、一切の神明は、かへりて、わが本懐とおぼしめして、よろこびたまひて、念佛の行者を守護したまふべきあひだ、とりわき、神をあがめぬども、たゞ彌陀一佛をたのむうちに、みなこもれるがゆへに、別してたのまざれども、信ずるいはれのあるがゆへなり。

一、當流のなかにをいて、諸法諸宗を誹謗すること、しかるべからず。いづれも釋迦一代の説教なれば、如説に修行せば、その益あるべし。さりながら、末代われらごときの在家止住の身は、聖道諸宗の教にをよばねば、それを、わがたのまず、信ぜぬばかりなり。

【先達】親鸞聖人の教義を正しく受け傳へし代代相承の善知識を指す。

【四】横截五惡趣の文、釋尊入滅の日にあひて特に感ずる處あり、此一文を草拵りと見ゆ

一、諸佛菩薩と申ことは、それ彌陀如來の分身なれば、十方諸佛のためには、本師本佛なるがゆへに、阿彌陀一佛に歸したてまつれば、すなはち諸佛菩薩に歸するいはれあるがゆへに、阿彌陀一體のうちに、諸佛菩薩は、みなことごとく、こもれるなり。

一、附山親鸞聖人のすゝめましますところの、彌陀如來の他力眞實信心といふは、もろもろの雜行をすて、専修專念一向一心に彌陀に歸命するをもて、本願を信樂する體とす、されば、先達より、うけたまはりつたへしがごとく、彌陀如來の眞實信心をば、いくたびも、他力よりさづけられるところの、佛智の不思議なりと、こゝろえて、一念をもては、往生治定の時刻とさだめて、そのときの命のぶれば自然と多念をよぶ道理なり、これによりて平生のとき、一念往生治定のうへの、佛恩報盡の多念の稱名とならふところなり。しかれば、祖師聖人御相傳一流の肝要は、たゞこの信心ひとつにかぎれり。これをしらするをもて、他門とし、これをしれるをもて、眞宗のしるしとす。そのほか、かならずしも、外相にをいて、當流念佛者のすがたを、他人に對して、あらはすべからず。これをもて、眞宗の信心をえたる行者のふるまひの正本となづくべきところ、如件。

文明六年甲午正月十一日書之

【超世の本願】三世諸佛の願に彌陀の本願の超え勝れたりといふ事。

夫、彌陀如來の超世の本願と申は、末代濁世の造惡不善のわれらごときの凡夫のために、をこしたまへる無上の誓願なるがゆへなり。然者、これを、何とやうに心をももち、

【經】 觀無量壽經の事。

【經】 大無量壽經下卷。

【横截等】 横とは自力聖道の堅に對して他力自然を表はす詞。共に生死を離るる様態に名

何とやうに彌陀を信じて、かの淨土へは往生すべきやらん。更にその分別なし。くはしく、これををしへたまふべし。

答ていはく、宋代今時の衆生は、たゞ一すぢに、彌陀如來をたのみ奉て、餘の佛菩薩等をも、ならべて信ぜねども、一心一向に彌陀一佛に歸命する衆生をば、いかにつみふかくとも、佛の大慈大悲をもて、すくはんとちかひたまひて、大光明をはなちて、その光明のうちに、おさめとりましますゆへに、このころを經には、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨ととき給へり、されば、五道六道といへる惡趣に、すでに、おもむくべきみちを、彌陀如來の願力の不思議として、これをふさぎ給なり。このいはれを、また經には、横截五惡趣、惡趣自然閉ととかれたり。故に、如來の誓願を信じて、一念の疑心なき時は、いかに、地獄へおちんとおもふとも、彌陀如來の攝取の光明に、おさめとられまいらせたらん身は、わがはからひにて、地獄へもおちずして、極樂にまいるべき身なるがゆへなり。かやうの道理なるときは、晝夜朝暮は、如來大悲の御恩を、雨山にかうふりたるわれらなれば、たゞ、口に、つねに稱名をとなへて、かの佛恩を報謝のために、念佛を申すべきばかりなり。これすなはち、眞實信心をえたるすがたといへるは、これなり、あなかしこく。

文明六、二月十五日夜、大聖世尊入滅の昔をおもひいで、於燈下、拭老眼、染筆畢。

【五】珠數の文。青崎在住已來同明同侶の間に念佛者としてみじからざる態度多きをいさみその行儀に就て教示し給ふと見ゆ。

【勝事】危き事、大事等の俗語。

(五) 抑、此三四年のあひだにをいて、當山の念佛者の風情をみをよぶに、まことにもて、他力の安心決定せしめたる分なし。そのゆへは、珠數の一連をも、もつひとなし。さるほどに、佛をば、手づかみにこそ、せられたり。聖人、またく、珠數をすて、佛をおがめと、おほせられたることなし。さりながら、珠數をもたずとも、往生淨土のためには、たゞ他力の信心へとつばかりなり。それには、さほりあるべからず。まづ、大坊主分たる人は、袈裟をもかけ珠數をもちても、仔細なし。これによりて、眞實信心を獲得したる人は、かならず口にもいだし、又色にも、そのすがたはみゆるなり。しかれば、當時は、さらに、眞實信心を、うつくしくえたる人、いたりてまれなり、とおほゆるなり。それはいかんぞなれば、彌陀如來の本願の、我等がために相應したるたふとさのほども、身にはおぼえざるがゆへに、いつも、信心のひととほりをば、われこゝろえがほのよしにて、なにごとを聴聞するにも、そのこととばかりおもひて、耳へもしか／＼ともいらす、たゞ人まねばかりの體たらくなりとみえたり。此分にては、自身の往生極樂も、いまはいかゞ、とあやうくおほゆるなり。いはんや、門徒同朋を勸化の儀も、中々これあるべからず。かくのごとき的心中にては、今度の報土往生も不可なり。あら／＼勝事や。たゞふかくこゝろをしづめて思案あるべし。まことにもて、人間は、いづるいきは、いるをまたぬならひなり。あ

【五戒】 在家の受持すべき五種の制戒。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五事。

且の浮生なり、後生は永生の樂果なり。たとひ、また榮花にほこり、榮耀にあまるといふとも、盛者必衰、會者定離のならひなれば、ひさしくたもつべきにあらず、たゞ五十年百年のあひだのことなり。それも、老少不定ときくときは、まことにもて、たのみすくなし。これによりて、いまのときの衆生は、他力の信心をえて、淨土の往生をとげんとおもふべきなり。抑、その信心をとらんずるには、さらに、智慧もいらす、才變もいらす、富貴も貧窮もいらす、善人も悪人もいらす、男子も女人もいらす、たゞもろ／＼の雜行をすて、正行に歸するをもて、本意とす。その正行に歸するといふは、なにのやうもなく、彌陀如來を、一心一向に、たのみたてまつる理りばかりなり。かやうに信する衆生を、あまねく光明のなかに攝取して、すてたまはずして、一期の命つきぬれば、かならず淨土にをくりたまふなり。この一念の安心ひとつにて、淨土に往生することの、あらやうもいらぬ、とりやすの安心や。されば安心といふ二字をば、やすきころとよめるは、このころなり。さらに、なにの造作もなく、一心一向に、如來をたのみまいらする信心ひとつにて、極樂に往生すべし。あらころえやすの安心や。又、あらゆきやすの淨土や、これによりて、大經には、易往而無人とこれをとかれたり。この文のころは、安心をとりて、彌陀を一向にたのめば、淨土へは、まいりやすけれども、信心をとるひとまれなれば、淨土へは、ゆきやすくして、人なしと、いへるは、この經文のころなり。かくのごとくころうるうへには、晝夜朝暮にとなふるところの名號は、大悲弘誓の御恩を報じ奉るべ

きばかりなり。かへすく、佛法にこゝろをとどめて、とりやすき信心のをもむきを存知して、かならず今度の一大事の報土の往生をとぐべきものなり。あなかしこく。

文明六年三月三日清言之三

【八】本師本佛の交。此章は末代凡夫たる我等の只管に歸向すべき超世の大願を讃仰して自力問答を設けて他力信心を勧め給ふと見ゆ。
【久遠實成】彌陀は常住法身を体として報ひ表はるるが故に此名あり。

夫、十惡五逆の罪人も、五障三從の女人も、むなしくみな、十方三世の諸佛の悲願にもれて、すてはてられたる我等ごときの凡夫なり。しかれば、こゝに彌陀如來と申は、三世十方の諸佛の本師本佛なれば、久遠實成の古佛として、いまのごときの諸佛にすてられたる末代不善の凡夫、五障三從の女人をば、彌陀にかぎりて、われひとり、たすけんといふ、超世の大願ををこして、われら一切衆生を平等にすくはんとちかひたまひて、無上の誓願ををこして、すでに、阿彌陀佛となりまし／＼けり。この如來を、ひとすぢに、たのみたてまつらずば、末代の凡夫、極樂に往生するみち、ふたつも、みつも、あるべからざるものなり。これによりて、親鸞聖人のすゝめましますところの他力の信心といふことを、よく存知せしめんひとは、かならず、十人は十人ながら、みなかの淨土に往生すべし。されば、この信心をとりて、かの彌陀の報土にまいらんとおもふについて、なにとやうに、こゝろをももちて、なにとやうに、その信心とやらんを、こゝろべきや、ねむごろに、これをきかんとおもふなり。

こたへていはく、それ當流親鸞聖人のをしへたまへるところの他力信心のをもむきとい

【專修專念】本願の念佛を專修すること。

【九】忠臣貞女の交。念佛の功德を擧げて、雜行を捨て専ら正行に歸すべき事を詳説せり

【外典】史記八十二に出づ。

ふは、なにのやうもなく、我身はあさましき罪ふかき身ぞ、とおもひて、彌陀如來を一心一向にたのみたてまつりて、もろくの雜行をすて、專修專念なればかならず、遍照の光明のなかにおさめとられまいらするなり。これまことに、我等が往生の決定するすがたなり。このうへに、なをこゝろうべきやうは、一心一向に彌陀に歸命する一念の信心によりて、はや往生治定のうへには行住坐臥に、口にまうさんとこころの稱名は、彌陀如來の、われらが往生を、やすくさだめたまへる大悲の御恩を、報盡の念佛なりと、こゝろうべきなり。これすなはち、當流の信心を決定したる人といふべきなり。あなかしこ。

文明六年三月中旬

抑、阿彌陀如來をたのみたてまつるについて、自餘の萬善萬行をば、すでに雜行となづけてきらへる、そのこゝろは、いかんぞなれば、それ、彌陀佛のちかひましますやうは、一心一向に、われをたのまん衆生をば、いかなるつみふかき機なりとも、すくひたまはんと、いへる大願なり。しかれば、一心一向といふは、阿彌陀佛にをひて、二佛をならべざるこゝろなり。このゆへに、人間にをいても、まづ、主をば、ひとりならでは、たのまぬ道理なり。されば、外典のことばにいはいはく、忠臣は二君につかへず、貞女は二夫をならべずといへり。阿彌陀如來は、三世諸佛のためには、本師師匠なれば、その師匠の佛をたのまんには、いかでか弟子の諸佛の、これをよろこびたまはざるべきや。このいはれをもて、

【宿善】信心獲得の爲めの縁となれる過去一切の善根をいふ。
【佛心と凡心】佛の智心と凡夫の迷心。

【一〇】佛心凡心一體の文。前年より吉崎教團に對する諸山諸寺の偏執より、加越兩國の領主へ訴への事ありて上人加心勞あり、時伴偶此年

よくよくこゝろうべし。さて、南無阿彌陀佛といへる行體には、一切の諸神諸佛菩薩も、そのほか萬善萬行も、ことごとくみなこまれるがゆへに、なにの不足ありてか、諸行諸善に、こゝろをとゞむべきや。すでに、南無阿彌陀佛といへる名號は、萬善萬行の總體なれば、いよくたのもしきなり。これによりて、その阿彌陀如來をば、なにとたのみ、なにと信じて、かの極樂往生をとゞべきぞなれば、なにのやうもなく、たゞ我身は、極惡深重のあさましきものなれば、地獄ならでは、おもむくべきかたもなき身なるを、かたじけなくも、彌陀如來ひとり、たすけんと、いふ誓願をこしたまへりと、ふかく信じて、一念歸命の信心ををこせばまことに宿善の開發にもよほされて、佛智より、他力の信心をあたへたまふがゆへに、佛心と凡心と、ひとつになるところをさして、信心獲得の行者とはいふなり。このうへには、たゞ、ねてもおきても、へだてなく、念佛をとなへて、大悲弘誓の御恩を、ふかく報謝すべきばかりなりと、こゝろうべきものなり。あなかしこ。

文明六歲三月十七日書之

夫、當流親鸞聖人のすゝめましますところの一義のこゝろといふは、まづ、他力の信心をもて肝要とせられたり。この他力の信心といふことを、くはしくしらすば、今度の一大事の往生極樂は、まことに、かなふべからずと、經釋ともに、あきらかにみえたり、されば、その他力の信心のすがたを存知して、眞實報士の往生を、とげんとおもふについ

の三月下旬吉崎の坊舎炎上せるに、より加越の門葉集てとも角も假屋を建てて道場に充つる等内外頗る多端の折柄なれば市にふれ折に隨て門末を訓誡せりこれ其一心にして先づ當流の安心を決定すべき事肝要なるを述べ次で行者としての振舞に就て懇示する處あり

【念發起等】信心開發の一念に於て往生の業事決定せるが故に平生業成にして更に臨終を俟たずといふ

ても、いかやうに、こゝろをももち、また、いかやうに、機をももちて、かの極樂の往生をば、とぐべきやらん、そのむねを、くはしくしりはんべらす。ねんごろに、をしへたまふべし。それを聽聞して、いよ／＼堅固の信心をとらん、とおもふなり。

こたへていはく、そも／＼、當流の他力信心のをもむきと申は、まながちに、我身のつみのふかきにも、こゝろをかけず、たゞ阿彌陀如來を、一心一向にたのみたまつりて、かゝる十惡五道の罪人も、五障三從の女人までも、みなたすけたまへる不思議の誓願力ぞと、ふかく信じて、さらに一念も、本願をうたがふこゝろなければ、かたじけなくも、その心を、如來のよくしろしめして、すでに行者のわろきこゝろを、如來のよき御こゝろと、おなじものになしたまふなり。このいはれをもて、佛心と凡心と一體になるといへるは、このこゝろなり。これによりて、彌陀如來の遍照の光明のなかに、おさめとられまいらせて、一期のあひだは、この光明のうちにすむ身なりとおもふべし。さて命もつきぬれば、すみやかに眞實の報土へをくりたまふなり。しかれば、このありがたさとこの彌陀大悲の御恩をば、いかゞして、報すべきぞなれば、晝夜朝暮には、たゞ稱名念佛ばかりをとなへて、かの彌陀如來の御恩を報じたてまつるべきものなり。このこゝろ、すなはち、當流にたつるところの一念發起平生業成といへる儀これなりと、こゝろうべし。されば、かやうに、彌陀を一心にたのみたまつるも、なにの功勞もいらす、また、信心をとるといふも、やすければ、佛になり極樂に往生することも、なをやすし。あらたふとの彌

陀の本願や、あらたふとの他力の信心や。さらに往生にをいて、そのうたがひなし。しかるに、このうへにをいて、なを、身のふるまひについて、このむねを、よくこゝろうべきみちあり。夫、一切の神も佛と申も、いまこのうるところの他力の信心ひとつを、とらしめんがための方便に、もろくの神、もろくのほとけと、あらはれたまふ、いはれなればなり。しかれば、一切の佛菩薩も、もとより彌陀如來の分身なれば、みなことごとく、一念、南無阿彌陀佛と歸命したてまつるうちに、みな、こもれるがゆへに、をろかにおもふべからざるものなり。又このほかになを、こゝろうべきむねあり。それ、國にあらば守護方、ところにあらば地頭方にをいて、われは佛法をあがめ、信心をえたる身なりといひて、疎略の儀、ゆめくあるべからず。いよ、公事をもつばらにすべきものなり。かくのごとくこゝろえたる人をさして、信心發得して、後生をねがふ念佛行者のふるまひの本とぞいふべし。これすなはち、佛法王法をむねとまもれる人となづくべきものなり。あなかしこ。

天明六年五月十三日 書之

【二五】吉崎在留中の作、當時國に於て不、拜祕事善知識たの、義但口稱等の邪、流亂して往に祖、宗を亂る故往に、破斥せらる。今文、其一なり。

夫、當流親鸞聖人の勸化のをもむき、近年、諸國にをいて、種々不同なり。これおほきにあさましき次第なり。そのゆへは、まづ當流には、他力の信心をもて、凡夫の往生をさきとせられたるところに、その信心のかたをば、をしのけて沙汰せずして、そのすゝむる

【ことば】 十劫邪義の謂。

【ことば】 知誹歸命の邪計。

【信心】 佛教を信じする爲めの緣となれる過去一切の因行をいふ。

【光明】 佛の名號
【名號】 信受報恩行として名稱をいふ。

【ことば】 人間五十年の次。六月の炎暑に際し地獄の苦を思浮べて門族若輩

ことばにいはく、十劫正覺のはじめより、我等が往生を、彌陀如来のさだめまし、たまへることを、わすれぬが、すなはち信心のすがたなりといへり。これさらに、彌陀に歸命して、他力の信心をえたる分はなし。されば、いかに十劫正覺のはじめより、われらが往生を、さだめたまへることを、しりたりといふとも、われらが往生すべき他力の信心のいはれをよくしらすば、極樂には往生すべからざるなり。又、あるひとのことばにいはく、たとひ、彌陀に歸命すといふとも、善知識なくばいたづらごとなり。このゆへに、われらにをいては、善知識ばかりをたのむべしと云々。これも、うつくしく、當流の信心をえざる人なりときこえたり。そも、善知識の能といふは、一心一向に彌陀に歸命したてまつるべしと、ひとをすゝむべきばかりなり。これによりて、五重の義をたてたり、一には宿善、二には善知識、三には光明、四には信心、五には名號、この五重の義成就せずば、往生はかなふべからずとみえたり。されば、善知識といふは、阿彌陀佛に歸命せよと、いへるつかひなり。宿善開發して善知識にあはずば、往生は、かなふべからざるなり。しかれども、歸するところの彌陀をすて、たゞ善知識ばかりを木とすべきこと、おほきなるあやまりなりと、こゝろうべきものなり。あなかしこ。

文明六年五月廿日

夫、人間の五十年を、かんがへみるに、四王天といへる天の一日一夜にあひあたれり。

衆の睡眠懶惰なるを誡めしと見えたり。

【四王天】以下ハ文は正法念經によりて地獄の長苦を示す。

【不法懈意】僧分に於て其法則に隨はざるを不法と名け、懈意とは善に精進ならざるをいふ。

【三】我宗名望の文。前年十一月諸山の憤り、領主の訴へあるにより、擬を設く等して嚴下する處あるも門下を誇り、自ら誇るを名望の如く考ふ

またこの四王天の五十年をもて、等活地獄の一日一夜とするなり。これによりて、みなひとの、地獄におちて、苦をうけんことをば、なにともおもはず、また淨土へまいりて、無上の樂をうけんことをも、分別せずして、いたづらにあかし、むなしく月日ををくりて、さらにわが身の一心をも、決定する分も、しか／＼ともなく、また、一卷の聖教を、まなこにあて、みることもなく、一句の法門をいひて、門徒を勸化する義もなし。たゞ、朝夕は、ひまをねらひて、まくらをともとして、ねふりふせらんこと、まことにもてあさましき次第にあらずや。しづかに思案をめぐらすべきものなり。このゆへに、今日今時よりして、不法懈意にあらんひとくは、いよく信心を決定して、眞實報土の往生をとげんとおもはんひとこそ、まことに、その身の徳ともなるべし。これまた、自行化他の道理にかなへりと、おもふべきものなり。あなかしこく。

于時文明第六、六月中の二日、おまりの炎天のあつさに、これを筆にまかせて、かきしるしをはりぬ。

夫、當流にさだむるところのおきてを、よくまもるといふは、他宗にも世間にも對しては、わが一宗のすがたを、あらはに人の目に見えぬやうに、ふるまへるをもて、本意とするなり。しかるに、ちかごろは、當流念佛者のなかにをいて、わざと人目に見えて一流のすがたをあらはしてこれをもて、我宗の名望のやうにおもひて、ことに、他宗を、こなし

るものあるに對し
是れ惡人救濟の宗
意に相應せざる振
舞として深く誠め
らるゝと見ゆ。
【すてに】以下の
詞は改邪鈔、本第
三條に出づ。

【經】以下の文は
觀無量壽經に出づ

おとしめんとおもへり。これ、言語道斷の次第なり。さらに、聖人のさだめまし／＼たる御意にふかくあひそむけり。そのゆへは、すでに、牛をぬすみたる人とはいはるとも、當流のすがたを、みゆべからずとこそ、おほせられたり。この御ことばをもて、よく／＼こころうべし。つぎに、當流の安心のをもむきを、くはしくしらんとおもはんひとは、あながちに、智慧才覺もいらす、男女貴賤もいらす、たゞ我身は、つみふかきあさましきものなりとおもひとりて、かゝる機までも、たすけたまへるほとけは、阿彌陀如來ばかりなりとしりて、なにのやうもなく、ひとすぢに、この阿彌陀ほとけの御袖に、ひしとすがりまいらするおもひをなして後生をたすけたまへとたのみまうせば、この阿彌陀如來は、ふかくよろこびましまして、その御身より、八萬四千のおほきなる光明をはなちて、その光明のなかに、そのひとを、おさめいれてをきたまふべし。さればこのこゝろを、經にはまさに、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨とは、とかれたりとこゝろうべし。さては、我身のほとけにならんすることは、なにのわづらひもなし、あら殊勝の超世の本願や、ありがたの彌陀如來の光明や。この光明の縁にあひたてまつらば、無始よりこのかたの無明業障のおそろしき病の、なほるといふことは、さらにもてあるべからざるものなり。しかるにこの光明の縁にもよほされて、宿善の機ありて、他力の信心といふことをば、いますでにえたり。これしかしながら、彌陀如來の御方より、さづけまし／＼たる信心とは、やがてあらはに、しられたり、かるがゆへに、行者のをこすところの信心にあらず、

【二四】
 文。上人吉崎在の
 時代越前に秘事を
 弘めて諸人を誑感
 するの徒、徘徊す
 るにより速に其手
 を離れて正義に基
 る。づかん事を勧めら

彌陀如來他力の大信心といふことは、いまこそ、あきらかにしられたり、これによりて、かたじけなくも、ひとたび他力の信心をえたらん人は、みな彌陀如來の御恩のありがたきほどを、よくよくおもひはかりて、佛恩報謝のためには、つねに稱名念佛を申したてまつるべきものなり。あなかしこく。

文明六年七月三日書之

夫、越前の國にひろまるところの秘事法門といへることは、さらに佛法にてはなし、あさましき外道の法なり。これを信するものは、ながく無間地獄にしづむべき業にて、いたづらごとなり。この秘事を、なをも執心して、簡要とおもひて、ひとをへつらひたらさんものには、あひかまへて、隨逐すべからず、いそぎ、その秘事をいはん人の手をはなれて、はやく、さぶくるところの秘事を、ありのまゝに懺悔して、ひとにかたりあらはすべきものなり。抑、當流勸化のをもむきをくはしくしりて、極樂に往生せんと、おもはんひとは、まづ、他力の信心といふことを存知すべきなり。それ、他力の信心といふは、なにの要ぞといへば、かゝるあさましき我等ごときの凡夫の身が、たやすく淨土へまいるべき用意なり。その他力の信心のすがたといふは、いかなることぞといへば、なにのやうもなく、たゞひとすちに、阿彌陀如來を、一心一向にたのみたてまつりて、たすけたまへともふこゝろの一念をこるとき、かならず、彌陀如來の攝取の光明をはなちて、その身の

婆娑わさにあらんほどは、この光明くわうみやうのなかに、おさめをきましますなり。これすなはちわれらが往生わうじやうのさだまりたるすがたなり。されば、南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつとまうす體たいは、われらが他力たからの信心しんじんをえたるすがたなり。この信心しんじんといふは、この南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつのいはれを、あらはせるすがたなりと、こゝろうべきなり。されば、われらが、いまの他力たからの信心しんじんひとつを、とるによりて、極樂ごくらくに、やすく往生わうじやうすべきことの、さらに、なにのうたがひもなし。あら殊こと勝かつの彌陀如來あみだにょらいの他力たからの本願ほんがんや。このありがたさの彌陀あみだの御恩ごおんをば、いかゞして、報むすじたてまつるべきぞなれば、たゞねてもおきても、南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつととなへて、かの彌陀如來あみだにょらいの佛恩ぶつおんを報むすすべきなり。されば南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつとなふるこゝろは、いかんぞなれば、阿彌陀如來あみだにょらいの御たすけありつることの、ありがたさふとさよとおもひて、それをよろこびまうすこゝろなりと、おもふべきものなり。あなかしこく。

文明六年七月五日

【五】九品、長樂寺の文。淨土に諸流あるを擧げて眞宗別途の安心を述ぶ。

【西山】善慧房證空の西山善峰寺にありて立つる所。

【鎮西】聖光房辨阿、筑紫善壽寺に

一、五三、二、三、
擧、日本にをいて、淨土宗じゆんつどしゆの、家々いへをたて、西山せいざん、鎮西ちんせい、九品くひん、長樂寺ちやうらくじとて、其外そのほか、あまたにわかれたり。これすなはち、法然聖人のすゝめ給ふところの義ぎは、一途いっずなりといへども、あるひは、聖道門せいだうもんにてありし人々の、聖人せいじんまいりて、淨土じゆんつどの法門ほふもんを聴聞おんもんし給ふに、うつくしく、其理そのことわり耳みみにとゞまらざるによりて、我本宗わがほんしゆのこゝろを、いまだすてやらすして、かへりて、それを淨土宗じゆんつどしゆにひきいれんと、せしによりて其不同そのちがひこれあり。しかりとい

在りて唱ふる所。
 【九品】長西坊覺明の立つる諸行本願義。
 【長樂下寺】隆寛の唱導せる多念義。

へども、あながちに、これを誹謗する事あるべからず。肝要は、たゞ我一宗の安心を、よくたくはへて、自身も決定し、人をも勸化すべきばかりなり。夫、當流の安心のすがたは、いかにぞなれば、まづ、我身は、十惡五逆、五障三從のいたづらものなりと、ふかくおもひつめてそのうへにおもふべきやうは、かゝるあさましき機を、本とたすけ給へる彌陀如來の不思議の本願力なりとふかく信じ奉て、すこしも疑心なければ、かならず彌陀は攝取し給ふべし。このころこそ、すなはち他力眞實の信心をえたるすがたとはいふべきなり。かくのごときの信心を、一念とらんずる事は、さらに、なにのやうもいらす、あらこゝろえやすの他力の信心や、あら行じやすの名號や。しかれば、この信心をとるといふも、別の事にはあらず、南無阿彌陀佛の六の字を、こゝろえわけたるが、すなはち他力信心の體なり。また、南無阿彌陀佛といふは、いかなるこゝろぞといへば、南無といふ二字は、すなはち、極樂へ往生せんとねがひて、彌陀をふかくたのみ奉るこゝろなり。さて、阿彌陀佛といふは、かくのごとくたのみ奉る衆生を、あはれみましくて、無始曠劫よりこのかたのおそろしきつみとがの身なれども、彌陀如來の光明の縁にあふによりて、ことごとく、無明業障の、ふかきつみとが、たちまちに消滅するによりて、すでに正定聚のみに住す、かるがゆへに、凡身をすて、佛身を證するといへるこゝろを、すなはち阿彌陀如來とは申なり。されば、阿彌陀といふ三字をば、おさめ、たすけ、すくふ、とよめるいはれあるがゆへなり。かやうに信心決定してのうへには、たゞ、彌陀如來の佛恩の、かた

しげなき事を、つねにおもひて、稱名念佛を申さば、それこそ、まことに、彌陀如來の
佛恩を報じ奉ることはりにかなふべきものなり。あなかしこく。

文明六七月九日書之

御文二帖日畢

御文二帖日

四

御文 三帖目

【一】其名ばかりの文。當時名ばかりの門徒、素よりその中に未安心の輩、多きを哀み急ぎ信心決定あるべきことを勸む。【其名ばかり】名を宗門にかけたるのみの徒、此れを名字の門徒ともいふ。【もとより】坊主以下子孫相續して其教化を受け、宗旨の勤事をなすをいふ。

抑、當流にをいて、其名ばかりを、かけんともがらも、又、もとより門徒たらん人も安心のとほりを、よくこゝろえずば、あひかまへて、今日よりして、他力の信心のをもむきを、ねんごろに人にあひたづねて、報土往生を決定せしむべきなり。夫、一流の安心をとるといふも、何のやうもなく、たゞ一すぢに、阿彌陀如來をふかくたのみ奉るばかりなり。しかれども、この阿彌陀佛と申は、いかやうなるほとけぞ、又、いかやうなる機の衆生を、すくひたまふぞといふに、三世の諸佛に、すてられたるあさましき我等凡夫女人を、われひとり、すくはん、といふ大願を、をこしたまひて、五劫があひだ、これを思惟し、永劫があひだ、これを修行して、それ衆生のつみにおいては、いかなる十惡五逆、謗法闍提のともがらなりといふとも、すくはんと、ちかひまし／＼て、すでに、諸佛の悲願にこえずぐれたまひて、その願、成就して、阿彌陀如來とは、ならせたまへるを、すなはち阿彌陀佛とは申なり。これによりて、この佛をば、なにとたのみなにとこゝろをももちてか、たすけ給ふべきぞといふに、それ、我身のつみのふかき事をばうちおきて、たゞかの阿彌陀佛を、二こゝろなく一向にたのみまいらせて、一念も疑ふ心なくば、かならずたすけたまふべし。しかるに彌陀如來には、すでに攝取と光明といふ二のことはりをもて、

衆生をば濟度したまふなり。まづ此光明に、宿善の機のありて、てらされぬれば、つもとこの業障のつみ、みなきえぬるなり、さて攝取といふは、いかなるころぞといへば、此光明の縁にあひ奉れば、罪障ごとく消滅するによりて、やがて衆生を、此光明のうちにふさめをかるゝによりて、攝取とはまうすなり。このゆへに阿彌陀佛には、攝取と光明との二をもて肝要とせらるゝなりと、きこえたり。されば一念歸命の信心のさだまるといふも、この攝取の光明にあひたてまつる時尅をさして、信心のさだまるとはまうすなり。しかれば南無阿彌陀佛といへる行體は、すなはち、我等が淨土に往生すべきことはりを、此六字にあらはしたまへる御すがたなりと、いまこそよくはしられて、いよゝ、ありがたくたふとくおぼえはんべれ。さて、この信心決定のうへには、たゞ阿彌陀如來の御恩を、雨山にかうぶりたる事をのみ、よろこびおもひ奉て、その報謝のためには、ねてもさめても、念佛を中へきばかりなり。それこそ誠に、佛恩報盡のつとめなるべきものなり。あなかしこゝ。

文明六年七月十四日書之

夫、諸宗のこゝろまち／＼にして、いづれも、釋迦一代の説教なれば、まことにこれ殊勝の法なり。もとも、如説にこれを修行せんとは、成佛得道すべきこと、さらにうたがひなし。しかるに、末代このごろの衆生は、淺根最劣にして、如説に修行せん人まれなる

【二】如説修行の上より念佛法門の由來を明にして、他方本願の意を述べ

時節なり。こゝに、彌陀如來の他力本願といふは、今の世に在いて、かゝる時の衆生を、むねとたすけすくはんがために、五劫があひだこれを思惟し、永劫があひだこれを修行して、造惡不善の衆生を、ほとけになさずば、我も正覺ならじ、とちかごとをたてましくて、その願すでに成就して、阿彌陀とならせたまへるほとけなり。末代いまのときの衆生を在いては、このほとけの本願にすがりて、彌陀をふかくたのみたてまつらすんば、成佛するといふ事あるべからざるなり。

抑、阿彌陀如來の他力本願をば、なにとやうに信じ、またなにとやうに機をもちてか、たすかるべきぞなれば、それ、彌陀を信じたてまつるといふは、なにのやうもなく他力の信心といふいはれを、よくしりたらんとは、たとへば十人は十人ながら、みなもて極樂に往生すべし。さて、その他力の信心といふは、いかやうなることぞといへば、たゞ南無阿彌陀佛なり。この南無阿彌陀佛の六の字のこゝろを、くはしくしりたるが、すなはち他力信心のすがたなり。されば、南無阿彌陀佛といふ六字の體を、よくこゝろうべし。まづ南無といふ二字は、いかなるこゝろぞといへば、やうもなく彌陀を一心一向にたのみたてまつりて、後生たすけたまへと、ふたごゝろなく信じまいらするこゝろを、すなはち南無とはまうすなり、つぎに、阿彌陀佛といふ四字は、いかなるこゝろぞといへば、いまのごとくに、彌陀を一心にたのみまいらせてうたがひのこゝろのなき衆生をば、かならず彌陀の御身より、光明をはなちて、てらしましくて、そのひかりのうちにおさめをき

【世間に沙汰する】
但口稱の邪義といふ。

【三】性光門徒の
文。河尻性光房よ
り念佛往生の本願
に就て種種の異計
ある事を述べて尋
ねられるに對し此
文を與へらるる傳
ふ。

【河尻】越前國西
浦に河尻といへる
里あり、性光房と
て初め禪宗なりし
が蓮師に歸して一
字を開き西光寺と
いふ。

給て、さて一期のいのちつきぬれば、かの極樂淨土へをくりたまへるこゝろを、すなはち阿彌陀佛とはまうしたてまつるなり。されば、世間に沙汰するところの念佛といふは、ただくちにだにも、南無阿彌陀佛となふれば、たすかるやうに、みな人のおもへり。それは、おぼつかなきことなり。さりながら淨土一家にをいて、さやうに沙汰するかたもあり、是非すべからず。これは、我一宗の開山の、すゝめたまへるところの、一流の安心のとほりを、まうすばかりなり。宿縁のあらんひとは、これをきゝて、すみやかに今度の極樂往生をとぐべし。かくのごとくこゝろえたらんひと、名號をとなへて、彌陀如來の、われらをやすくたすけたまへる御恩を、雨山にかうふりたる、その佛恩報盡のためには、稱名念佛すべきものなり。あなかしこく。

文明六年八月五日書之

此方河尻、性光門徒の面々にをいて、佛法の信心のこゝろえは、いかやうなるらん。まことにもて、こゝろもとなし。しかりといへども、いま當流一義のこゝろを、くはしく沙汰すべし。をのく、耳をそばたてゝ、これをきゝて、このをもむきをもて、本とおもひて、今度の極樂の往生を治定すべきものなり。夫、彌陀如來の念佛往生の本願と申は、いかやうなることぞといふに、在家無智のものも、又十惡五逆のやからにいたるまでも、なにのやうもなく、他力の信心といふ事を、ひとつ決定すれば、みなことごとく、極樂に

【ただこゝろ】 但日
稱の異時。

【わづらはしき】
不升祕事の邪義。

往生するなり。されば、その信心をとるといふは、いかやうなるむつかしきことぞといふに、なにのわづらひもなく、たゞひとすぢに、阿彌陀如來を、ふたごゝろなくたのみたまつりて、餘へこゝろをもらさざらんひとは、たとへば十人あらば、十人ながら、みなほとけになるべし。このこゝろひとつをたらたんは、やすきこととなり、たゞこゝろにだして、念佛ばかりをとなふるひとは、おほやうなり。それは、極樂には往生せず、この念佛のいはれを、よくしりたる人こそ、ほとけにはなるべけれ。なにのやうもなく、彌陀をよく信ずるこゝろだにも、ひとつにさたまれば、やすく淨土へはまいるべきなり。このほかには、わづらはしき祕事といひて、ほとけをもおがまぬものは、いたづらものなりとおもふべし。これによりて、彌陀如來の他力本願とまうすは、すでに、末代いまのときのみふかき機を、本として、すくひたまふがゆへに、在家止住のわれちごときのためには、相應したる他力の木願なり。あらありがたの彌陀如來の誓願や、あらありがたの釋迦如來の金言や、あふぐべし、信すべし。しかればいふところのごとく、こゝろえたらん人々は、これまことに、當流の信心を決定したる念佛行者のすがたなるべし。さてこのうへには、一期のあひだまうす念佛のこゝろは、彌陀如來の、われらを、やすくたすけたまへるところの、雨山の御恩を、報じたてまつらんがための念佛なりと、おもふべきものなり。あなかしこく。

文明六年八月六日「書」之

【四】大聖世尊の文。無常をならひとする人生の苦を歎じて、此れを脱するの道は現時の我等にとりては唯弘願の一法のみなる事を説けり。

【提婆】釋尊の從兄弟にして始め佛弟子たりしが、後惡心を起し、阿闍世王と結んで佛の教團に反逆し佛を亡ぼさんと企てて佛の足指より血を流し、一比丘尼を淹殺する等の逆罪を犯す。之に依て地自然に破れて生きたながらに墮獄すといふ。

夫、倩、人間のあだなる體を案するに、生あるものは、かならず死に歸し、さかんなるものは、つゝにおとろふるならひなり。されば、たゞいたづらにあかし、いたづらにくらして、年月を、をくるばかりなり。これまことに、なげきても、なをかなしむべし。このゆへに、上は大聖世尊よりはじめて、下は惡道にいたるまで、のがれがたきは、無常なり。しかれば、まれにもうけがたきは人身、あひがたきは佛法なり。たまく、佛法にあふことをえたりといふとも、自力修行の門は、未代なれば、いまのときは、出離生死のみちは、かなひがたきあひだ、彌陀如來の本願にあひたてまつらずば、いたづらごとなり。しかるに、いまずでに、われら、弘願の一法にあふことをえたり。このゆへに、たゞねがふべきは極樂淨土、たゞたのむべきは彌陀如來、これによりて、信心決定して、念佛申すべきなり。しかれば、世の中に、ひとのあまねくこゝろえをきたるとほりは、たゞこゝろにいだして南無阿彌陀佛とばかりとなふれば、極樂に往生すべきやうにおもひはんべり。それはおほきにおぼつかなきことなり。されば、南無阿彌陀佛とまうす六字の體は、いかなることゝぞといふに、彌陀如來を、一向にたのめば、ほとけ、その衆生をよくしろしめして、すくひたまへる御すがたを、この南無阿彌陀佛の六字にあらはしたまふなりと、おもふべきなり。しかれば、この阿彌陀如來をば、いかゞして信じまいらせて、後生の一大事をば、たすかるべきぞなれば、なにのわづらひもなく、もろくの雜行雜善をなげすて、一心一向に彌陀如來をたのみまいらせて、ふたごゝろなく信じたてまつれば、そのたのむ衆生を、光

明みくらをはなちて、そのひかりのなかに、おさめいれをきたまふなり。これをすなはち、彌陀みだ如來にらいの攝取せつしゆの光益くわうやくにあづかるとはまうすなり。または不捨ふしゆの誓益せいやくとも、これをなづくるなり。かくのごとく、彌陀みだ如來にらいの光明くわうみやうのうち、おさめをかれまいらせてのうへには、一期いちごのいのちつきなば、たゞちに眞實しんじつの報土はうどに往生わうじやうすべきこと、そのうたがひあるべからず。このほかには、別の佛ぶつをもたのみ、また餘よの功德善根くわんとくぜんこんを修しゆしても、なにゝかはせん。あらたふとや、あらありがたの阿彌陀あみだ如來にらいや。かやうの雨山あまやまの御恩ごおんをばいかゞして、報はうじたてまつるべきぞや。たゞ南無阿彌陀佛なむあみだぶつとこゑにとなへて、その恩徳おんとくをふかく報盡はうじん申まをすばかりなりと、こゝろうべきものなり。あなかしこく。

文明六年八月十八日

【五】諸佛悲願しよぶつひがんの交まじり。諸佛しよぶつの悲願ひがんに及およぶ事能ことあたはざる罪業ざいごふの我等われらなる事を擧あげ唯信受ただしんじゆすべき彌陀みだ超世てうせいの大願だいがんなりと示しして想しやうにその由來よしらいを述のぶ。

【五障三從】女子にょじは罪深つみふかく厭いと、願ねがは恨うらみ、怨うらみの心こころありて、五蓋ごがい根こん信しん、勤しん、念ねん、定じやう、慧えを障さやふ、之これを五障ごさうといふ。

抑おさ、諸佛しよぶつの悲願ひがんに、彌陀みだの本願ほんがんの、すぐれましゝたる、そのいはれをくはしくたづぬるに、すでに十方じつぱうの諸佛しよぶつと申まをすは、いたりてつみふかき衆生しゆじやうと、五障ごさう三從さんじゆうの女人にょにんをば、たすけたまはざるなり。このゆへに、諸佛しよぶつの願ねがひに、阿彌陀佛あみだぶつの本願ほんがんは、すぐれたりとまうすなり。さて彌陀みだ如來にらいの超世てうせいの大願だいがんは、いかなる機きの衆生しゆじやうを、すぐひましますぞとまうせば、十惡じゆあく逆ぎやくの罪人ざいにんも、五障ごさう三從さんじゆうの女人にょにんにいたるまでも、みなことごとくもらさず、たすけたまへる大願だいがんなり。されば一心いっしん一向いっかうに、われをたのまん衆生しゆじやうをば、がならず、十人じふにんあらば十人じふにんながら、極樂ごくらくへ引接いんげつせんと、のたまへる他力たうりきの大誓願だいせいがん力りきなり。これによりて、かの阿彌あみ

又生涯束縛を脱する能はざる三従の身なるが故に修道の非器なりといはる。

【南無阿彌陀佛】南無は歸命、敬禮歸敬の義、阿彌陀佛とは無量壽覺、無量光覺の二義あり。

陀佛の本願をば、われらごときのあさましき凡夫は、なにとやうにたのみ、なにとやうに機をもちて、かの彌陀をば、たのみまいらすべきぞや、そのいはれを、くはしくしめしたまふべし。そのをしへのごとく、信心をとりて、彌陀をも信じ極樂をもねがひ、念佛をもうすべきなり。

こたへてはいはく、まづ世間に、いま流布してむねとす、むるところの念佛とまうすは、たゞなにの分別もなく、南無阿彌陀佛とばかりとなふれば、みなたすかるべきやうにおもへり。それは、おほきにおほづかなきことなり。京田舎のあひだにをいて、淨土宗の流義まち／＼にわかれたり。しかれども、それを是非するにはあらず。たゞわが開山の一流相傳のをもむきを、まうしひらくべし。それ、解脱の耳をすまして、渴仰のかうべをうなだれて、これをねんごろにきゝて、信心歡喜のおもひをなすべし。それ、在家止住のやから、一生造惡のものも、たゞ我身のつみのふかきには、目をかけずして、彌陀如來の本願と申は、かゝるあさましき機を、本とすくひまします不思議の願力ぞと、ふかく信じて、彌陀を一心一向にたのみたてまつりて、他力の信心といふことを、一こゝろをべし。さて、他力の信心といふ體は、いかなるこゝろぞといふに、この南無阿彌陀佛の六字の名號の體は、阿彌陀佛の、われらをたすけたまへるいはれを、この南無阿彌陀佛の名號にあらはしまし／＼たる御すがたぞと、くはしくこゝろえわけたるをもて、他力の信心をえたる人といふなり。この南無といふ二字は、衆生の、阿彌陀佛を、一心一向にたのみたてまつり

て、たすけたまへとおもひて、餘年なきころを、歸命とはいふなり。つきに阿彌陀佛といふ四の字は、南無とたのむ衆生を、阿彌陀佛のもらさすくひたまふころなり。このころをすなはち、攝取不捨とはまうすなり。攝取不捨といふは、念佛の行者を、彌陀如來の光明のなかにおさめとりて、すてたまはずといへるころなり。されば、この南無阿彌陀佛の體は、われらを、阿彌陀佛のたすけたまへる支證のために、御名を、この南無阿彌陀佛の六字に、あらはしたまへるなりと、きこえたり。かくのごとくころえわけぬれば、われらが極樂の往生は、治定なり、あらありがたやたふとやおもひて、このうへには、はやひとたび彌陀如來にたすけられまいらせつるのちなれば、御たすけありける御うれしさの念佛なれば、この念佛をば、佛恩報謝の稱名ともいひ、また信のうへの稱名ともまうしはんべるべきものなり、あなかしこく。

文明六年九月六日 書之

【六】唯能常稱の文。名號の義を明して我等が往生の決定は偏に他力廻向の信心に因るといふいはれを表はせるものが六字の名號なる事を、善導の六字釋に由りて説けり。

夫、南無阿彌陀佛と申はいかなることゝぞなれば、まづ南無といふ二字は、歸命と發願廻向とのふたつのころなり。また南無といふは願なり、阿彌陀佛といふは行なり。されば、雜行雜善をなげすて、專修專念に、彌陀如來をたのみたてまつりて、たすけたまへとおもふ歸命の一念をこるとき、かたじけなくも、遍照の光明をはなちて、行者を攝取したまふなり。このころすなはち、阿彌陀佛の四の字のころなり、又發願廻向のころ

【發願廻向】一切の善根功德を往生の願に廻らし向ける事。眞宗に於ては彌陀如來發願して衆生に廻施する心と説く。

【願、行】願と行は果を證得する原因にして、願は行の方向を決定し、行は願の内容を満足する事にて、願は淨土の願行具足する事にて得らる。今眞宗にては本願の念佛に彌陀の願行具足して信心の行者に廻向さるといふ。

【願成就の文】大經下卷に出づ。

【七】彼此三業の無阿彌陀佛といへる事を善導の「彼此三業不相捨離」の文を以て理解せしめんとせり。

ろなり。これによりて、南無阿彌陀佛といふ六字はひとへにわれらが、往生すべき他力信心のいはれを、あらはしたまへる御名なりとみえたり。このゆへに願成就の文には、聞其名號、信心歡喜ととかれたり。この文のこゝろは、その名號をきゝて信心歡喜すと、いへり。その名號をきくといふは、たゞおほやうにきくにあらず、善知識にあひて、南無阿彌陀佛の六の字のいはれを、よくきゝひらきぬれば、報土に往生すべき他力信心の道理なりと、こゝろえられたり。かるがゆへに、信心歡喜といふは、すなはち信心さだまりぬれば、淨土の往生は、うたがひなくおもふて、よろこぶこゝろなり。このゆへに、彌陀如來の五劫兆載永劫の御苦勞を案ずるにも、われらを、やすくたすけたまふことの、ありがたさたふとさをおもへば、なか／＼まうすもをろかなり。されば和讃にいはいはく、南無阿彌陀佛の廻向の恩徳廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せりといへるは、このこゝろなり。また、正信偈には、すでに唯能常稱如來號、應報大悲誓恩とあれば、いよ／＼行住坐臥時處諸緣をきはらず、佛恩報盡のために、たゞ稱名念佛すべきものなり。あなかしこ／＼。

文明六年十月二十日 書之

抑、親鸞聖人のすゝめたまふところの一義のこゝろは、ひとへにこれ末代濁世の在家無智のともがらにをいて、なにのわづらひもなく、すみやかにとく、淨土に往生すべき他力信

【機法】機法は相對應するものにて、法はその發動するものなり。緣は法なるもの。原理となるもの。念佛に於て衆生と阿彌陀は機法關係にありといはる。【三業】善導の觀經疏定善義の文に衆生佛を稱（口）禮（身）念（意）すれば佛亦之れを聞知するが故に彼此の三業相離れずといふ。

心の一途ばかりをもて、本とをしへたまへり。しかればそれ、阿彌陀如來はすでに、十惡五逆の愚人、五障三從の女人にいたるまで、ことごとくくすくひましますといへる事をば、いかなる人も、よくしりはんべりぬ。しかるにいま、われら凡夫は、阿彌陀佛をば、いかにやうに信じなにとやうにたのみまいらせて、かの極樂世界へは往生すべきぞといふに、ただひとすぢに、彌陀如來を信じたてまつりてその餘は、なにごともうちすて、一向に彌陀に歸し、一心に本願を信じて、阿彌陀如來にをいて、ふたごゝろなくば、かならず極樂に往生すべし。此道理をもて、すなはち他力信心をえたるすがたといふなり。そもく、信心といふは、阿彌陀佛の本願のいはれを、よく分別して、一心に彌陀に歸命するかたをもて、他力の安心を決定すとはまうすなり。されば、南無阿彌陀佛の六字のいはれを、よくこゝろえわけたるをもて、信心決定の體とす。しかれば、南無の二字は、衆生の阿彌陀佛を信する機なり、次に阿彌陀佛といふ四字のいはれは、彌陀如來の、衆生をたすけたまへる法なり。このゆへに、機法一體の南無阿彌陀佛といへるはこのこゝろなり。これによりて、衆生の三業と彌陀の三業と、一體になるところをさして、善導和尚は、彼此三業、不相捨離と釋したまへるものこゝろなり。されば、一念歸命の信心決定せしめたらん人は、かならずみな、報土に往生すべきこと、さらにもて、そのうたがひあるべからず。あひかまへて、自力執心のわろき機のかたをばふりすて、たゞ不思議の願力ぞとふかく信じて、彌陀を一心にたのまんひとは、たとへば十人は十人ながら、みな眞實報土の往生を

とぐべし。このうへには、ひたすら、彌陀如來の御恩のふかきことをのみおもひたてまつりて、つねに報謝の念佛を申べきものなり。あなかしこく。

文明七年二月二十三日

【八】當國他國十劫邪義の文。吉崎に於ける上人六十者間に於て各自の領解に任りて徒に慢心の者多く當時流行せる十劫邪義に誑はされて更に眞實信心を求むるもの稀なるを見ゆ。此勸誠ありと見ゆ。

【實の山】心地觀經に説かれし譬。【そはさま】正に對して傍をそばさまと讀ませり。即ち正義に非ざる傍義の意。

抑、此比、當國他國の間に於て、當流安心のをもむき、事外相違して、みな人ごとに、我はよく心得たりと思て、更に法義にそむくとほりをも、あながちに、人にあひたづねて、眞實の信心をとらんとおもふ人すくなし。これ誠に、あさましき執心なり。速にこの心を改悔懺悔して、當流眞實の信心に住して、今度の報土往生を決定せずは、誠に實の山に入て、手をむなくしてかへらんに、ことならんもの歎。このゆへに、其信心の相違したる詞にいはく、夫、彌陀如來は、すでに、十劫正覺の初より、我等が、往生をさだめたまへる事を、いまにわすれずうたがはざるが、すなはち信心なりと、ばかりこゝろえて、彌陀に歸して信心決定せしめたる分なくば、報土往生すべからず。されば、そばさまなるわろきこゝろえなり。これによりて、當流安心のそのすがたをあらはさば、すなはち南無阿彌陀佛の體を、よくこゝろうるをもて、他力信心をえたるとはいふなり。されば南無阿彌陀佛の六字を、善導釋していはく、南無といふは歸命、またこれ發願廻向の義なりといへり。其意いかんぞなれば、阿彌陀如來の因中に於て、我等凡夫の往生の行をさだめ給ふとき、凡夫のなす所の廻向は、自力なるがゆへに、成就しがたきによりて、阿彌陀如來の、凡夫

【憶念等】以下の文は親鸞作の教行信證行卷末正信偈の文。

【九】御命日の文に親鸞聖人の命日に際し宗祖の徳を思ふべし此れが報恩の道は唯信心決定すべきにある事を述べ。

のために御身勞ありて、此廻向を、我等にあたへんがために、廻向成就し給ひて、一念南無と歸命するところにて、此廻向を、我等凡夫にあたへましますなり。故に、凡夫の方よりなご廻向なるがゆへに、これをもて、如來の廻向をば、行者のかたよりは、不廻向とは申すなり。此いはれあるがゆへに、南無の二字は歸命のこゝろなり、又發願廻向のこゝろなり。此いはれなるがゆへに、南無と歸命する衆生を、かならず攝取して、すて給はざるがゆへに、南無阿彌陀佛とは申すなり。これすなはち、一念歸命の他力信心を獲得する、平生業成の念佛行者といへるは此事なりと、しるべし。かくのごとくこゝろえたらん人々は、いよゝ、彌陀如來の御恩徳の深遠なる事を信知して、行住坐臥に稱名念佛すべし。これすなはち、憶念彌陀佛本願、自然即時入必定、唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩といへる文のこゝろなり。あなかしこゝ。

文明七年二月二十五日

抑、今日は、鸞聖人の御明日として、かならず報恩謝徳のこゝろざしを、はこばざる人、これすくなし。しかれども、かの諸人のうへにをいて、あひこゝろうべきをもむきは、もし本願他力の眞實信心を獲得せざらん未安心のともがらは、今日にかぎりて、あながちに、出仕をいたし、この講中の座敷をふさぐをもて、眞宗の肝要とばかりおもはん人は、いかでか、わが聖人の御意には、あひかなひがたし。しかりといへども、わが在所に

【信心等】善導の
往生論に出づる
文。

ありて、報謝のいとなみをも、はこばざらんひとは、不請にも、出仕をいたしても、よろ
しかるべき歟。されば毎月二十八日ごとに、かならず出仕をいたさんと、おもはんともが
らにをいては、あひかまへて、日ごろの信心のとをり、決定せざらん未安心のひと、す
みやかに本願眞實の他力信心をとりて、わが身の今度の報主往生を決定せしめんこそ、ま
ことに、聖人報恩謝徳の懇志にあひかなふべけれ、また自身の極樂往生の一途も、治定し
をはりぬべき道理なり。これすなはち、まことに自信教人信、難中轉更難、大悲傳普化、
眞成報佛恩といふ釋文のこゝろにも、府合せるものなり。夫、聖人御入滅は、すでに一百
餘歳を經といへども、かたじけなくも、目前にをいて、眞影を拜したてまつる。又德音は、
はるかに無常のかぜに、へたつといへども、まのあたり、實語を相承血脈して、あきら
かに耳のそここのこして、一流の他力眞實の信心いまに、たえせざるものなり。これにより
て、いまこの時節にいたりて、本願眞實の信心を獲得せしむる人なくば、まことに、宿善
のもよほしにあづからぬ身とおもふべし。もし宿善開發の機にてもわれらなくば、むなし
く今度の往生は、不定なるべきこと、なげきても、なをかなしむべきは、たゞこの一事な
り、しかるにいま、本願の一道にあひがたくして、まれに無上の本願にあふことをえた
り。まことに、よろこびのなかのよろこび、なにごとか、これにしかん。たふとむべし信
すべし。これによりて、年月日ごろ、わがこゝろのわろき迷心をひるがへして、たちまち
に、本願一實の他力信心にもとづかんひとは、眞實に聖人の御意にあひかなふべし。これ

しかしながら、今日聖人の報恩謝徳の御こゝろざしにも、あひそなはりつべきものなり。
あなかしこく。

文明七年五月二十八日書す

抑、當流門徒中に在いて、この六ヶ條の篇目のむねを、よく存知して、佛法を内心にふかく信じて、外相にそのいろをみせぬやうにふるまふべし。しかれば、このごろ當流念佛者に在いて、わざと一流のすがたを、他宗に對して、これをあらはすこと、もてのほかのあやまりなり。所詮、向後、この題目の次第をまもりて、佛法をば修行すべし。もしこのむねをそむかんともがらは、ながく、門徒中の一列たるべからざるものなり。

- 一、神社をかるしむることあるべからず。
- 一、諸佛菩薩、ならびに諸堂をかるしむべからず。
- 一、諸宗諸法を誹謗すべからず。
- 一、守護地頭を疎略にすべからず。
- 一、國の佛法の次第、非義たるあひだ、正義におもむくべき事。
- 一、當流にたつところの他力信心をば、内心にふかく決定すべし。

一には、一切の神明とまうすは、本地は佛菩薩の變化にてましますも、この界の衆生をみるに、佛菩薩には、すこし、ちかづきにくくおもふあひだ、神明の方便にかりに神とあ

【二】神明六ヶ條の文。帖外御文等に於てこれ制度度門徒に對し制誠度設けらるる事ありしも尙門徒間に於て自讃毀他のもの止まらず他の偏難守護地頭の妨執繁く國中甚だ不穩の時節なれば終に當年八月吉時を退去せらるる事となり、今亦此六ヶ條の掟を立て、將來を諷めらると見えたり。

【國の】越前國を指す。

【和光同塵】摩訶止觀に出づる文。

【淨土の三部經】大無量壽經二卷、魏康僧鎧譯、觀無量壽經一卷、劉宋、晉良耶舍譯、阿彌陀經一卷、姚秦鳩摩羅什譯を正依の三經と名く。各異譯ありて、古來大經は五存七缺、觀彌陀經は二存一缺といはる。

らはれて、衆生に縁をむすびて、そのちからをもて、たよりとして、つゝに佛法にすゝめいれんがためなり。これすなはち和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は利物のをはりと、いへるは、このこゝろなり。されば、いまの世の衆生、佛法を信じ、念佛をもまうさん人をば、神明は、あながちに、わが本意とおぼしめすべし。このゆへに、彌陀一佛の悲願に歸すれば、とりわけ神明をあがめず信ぜねども、そのうちに、おなじく信ずるこゝろは、こもれるゆへなり。

二には、諸佛菩薩とまうすは、神明の本地なれば、いまのときの衆生、阿彌陀如來を信じ、念佛まうせば、一切の諸佛菩薩は、わが本師阿彌陀如來を信するに、そのいはれあるによりて、わが本懐とおぼしめすがゆへに、別して諸佛を、とりわき信ぜねども、阿彌陀佛一佛を、信じたてまつるうちに、一切の諸佛も菩薩も、みなことごとくこもれるがゆへに、たゞ阿彌陀如來を、一心一向に歸命すれば、一切の諸佛の智慧も功德も、彌陀一體に歸せずといふことなきいはれなればなりとしるべし。

三には、諸宗諸法を誹謗すること、おほきなるあやまりなり。そのいはれ、すでに淨土の三部經にみえたり。また諸宗の學者も、念佛者をば、あながちに誹謗すべからず。自宗他宗ともに、そのとが、のがれがたきこと、道理必然せり。

四には、守護地頭にをいては、かぎりある年貢所當を、ねんごろに沙汰し、そのほか、仁義をもて本とすべし。

五には、國の佛法の次第、常流の正義にあらざるあひだ、かつは邪見にみえたり。所詮、自今已後に在いては、常流眞實の正義をきゝて、日ごろの悪心をひるがへして、善心にもむくべきものなり。

六には、常流眞實の念佛者といふは、開山のさだめをきたまへる正義を、よく存知して、造悪不善の身ながら、極樂の往生をとぐるをもて、宗の本意とすべし。夫、一流の安心の正義のをもむきといふは、なにのやうもなく、阿彌陀如來を一心一向にたのみたてまつりて、われは、あさましき惡業煩惱の身なれども、かゝるいたづらものを本とたすけたまへる彌陀願力の強縁なりと、不可思議におもひたてまつりて、一念も疑心なくおもふこゝろだにも堅固なれば、かならず彌陀は、無礙の光明をはなちて、その身を攝取したまふなり。かやうに信心決定したらんひとは、十人は十人ながら、みなことごとく報土に往生すべし。このこゝろすなはち、他力の信心を決定したるひとなりといふべし。このうへになを、こゝろうべきやうは、まことにありがたき阿彌陀如來の廣大の御恩なりとおもひて、その佛恩報謝のためにはねてもおきても、たゞ南無阿彌陀佛とばかりとなふべきなり。されば、このほかには、また後生のためとは、なにの不足ありてか、相傳もなき、しらぬをせ法門をいひてひともまどはし、あまさへ法流をもけがさんこと、まことにあさましき次第にあらずや。よくよくおもひはからふべきものなり。あなかしこく。

文明七年七月十五日

【二】毎年不闕の文。文明六年三月吉崎炎上以來加賀の宗徒、國守富樫政親と隙を生じ、追害次第に及び終に七年八月政親吉崎襲撃を企つるに及ぶ。玆に加越の大騷亂を醸すに至れり。上人密に吉崎を忍び出でて船により若狭に逃れ丹波路を經て攝津に入り、道到る處行化し、道俗雲の如く集て、その徳風を仰ぎ、居を河内國茨田郡出口なる處に占むるに到り、はからずも當地に於て報恩講に會ひその不恩義の宿縁を喜ぶの餘り此文を作られしと見ゆ。

【御正忌】

眞宗の大例として、宗祖親鸞の知恩報徳の爲め毎年不闕にその示寂の日を滿座する大法會をいふ

抑、今月二十八日は、開山聖人御正忌として、毎年不闕に、かの知恩報徳の御佛事にいては、あらゆる國郡、そのほか、いかなる卑劣のともがらまでも、その御恩をしらざるものは、まことに木石にことならんもの歟。これについて、愚老、この四五今年のおひだは、なにとなく、北陸の山海のかたほとりに居住すといへども、はからざるに、いまに存命せしめ、この當國にこえ、はじめて今年、聖人御正忌の報恩講にあひたてまつる條、まことにもて不可思議の宿縁、よろこびてもなをよろこぶべきもの歟。しかれば、自國他國より來集の諸人にをいて、まづ、開山聖人のさだめをかれし御掟のむねを、よく存知すべし。その御ことばにいはいはく、たとひ牛盜人とはよばるとも、佛法者後世者とみゆるやうに、振舞べからず、またほかには、仁義禮智信をまもりて、玉法をもてさきとし、内心には、ふかく本願他力の信心を本とすべきよしを、ねんごろに、おほせさだめをかれしところは、近代このごろの人の佛法しりがほの體たらくを、みをよぶに、外相には、佛法を信するよしを、ひとにみえて、内心には、さらにもて、當流安心の一途を、決定せしめたる分なくして、あまさへ、相傳もせざる聖教を、わが身の字ぢからをもて、これをよみて、しらぬ多せ法門をいひて、自他の門徒中を經廻して、虚言をかまへ、結句、本寺よりの成敗と號して、人をたぶろかし、物をとりて當流の一義をけがす條、眞實々々、あさましき次第にあらずや。これによりて、今月二十八日の御正忌、七日の報恩講中にをいて、わろ

【當國】河内國茨田郡中振の郷出口の甲を指す。改邪の御ことよ。鈔の第三卷に出づる文。

【二】宿善有無の次。人を勸化するに就ては、よく宿善無宿善の機を見定めて他力信心の旨を明すべき書を經釋の文を引きて教へ示されたり。

き心中のとほりを改悔懺悔して、をの、正義にをもむかすば、たとひこの七日の報恩講中にをいて、足手をはこび、人まねばかりに、報恩謝徳のためと號すとも、さらにもて、なにの所詮もあるべからざるものなり。されば、彌陀願力の信心を獲得せしめたらん人のうへにをいてこそ、佛恩報盡ともまた師徳報謝なんどとも、まうすことあるべけれ。この道理を、よくくこゝろえて、足手をもはこび、聖人をも、をもんごたてまつらんこそ、眞實に冥慮にもあひかなひ、また別しては、當月御正忌の報恩謝徳の懇志にも、ふかくあひそなはりつべきものなり。あなかしこく。

文明七年十一月二十一日書之

抑、いにしへ近年このごろのあひだに、諸國在々所々にをいて、隨分佛法者と號して、法門を讚嘆し、勸化をいたすともがらのなかにをいて、さらに眞實にわがこゝろ、當流の正義に、もとづかずと、おぼゆるなり。そのゆへを、いかんといふに、まづ、かの心中におもふやうは、われは佛法の根源をよくしりがほの體にて、しかもたれに相傳したる分もなくして、あるひは縁のはし障子のそとにて、たゞ自然と、きゝとり法門の分齊をもて、眞實に佛法に、そのこゝろざしはあさくして、われよりほかは、佛法の次第を存知したるものなきやうにおもひはんべり。これによりて、たま〜も當流の正義を、かたのごとく讚嘆せしむるひとをみては、あながちに、これを偏執す。すなはち、われひとり、よくし

【宿善】因果の道理に據り、現在開信等の果を齎すに到りし過去の因行を宿善といふ。

【過去已曾等】以下の文は善導の觀經疏定善義に出づ

りがほの風情は、第一に憍慢のこゝろにあらずや。かくのごとき的心中をもて、諸方の門徒中を經廻して、聖教をよみ、あまさへ、わたくしの儀をもて、本寺よりのつかひと號して、人をへつらひ虚言をかまへ、ものをとるばかりなり。これらのひとをば、なにとして、よき佛法者、また聖教よみとは、いふべきをや。あさまし／＼なげきても、なをなげくべきは、たゞこの一事なり。これによりてまづ當流の義をたて、ひとを勸化せんと、おもしろともがらにをいては、その勸化の次第を、よく存知すべきものなり。

夫當流の他力信心のひととまりを、すゝめんとおもはんには、まづ宿善無宿善の機を沙汰すべし。さればいかに、むかしより當門徒に、その名をかけたるひととなりとも、無宿善の機は、信心をとりがたし。まことに宿善開發の機は、をのづから信を決定すべし。されば無宿善の機のまへにをいては、正雜一行の沙汰をするときは、かへりて誹謗のものとひとなるべきなり。この宿善無宿善の道理を分別せずして手びろに世間のひとをもはからず、勸化をいたすこと、もてのほかの當流のおきてにあひそむけり。されば大經云、若人無善本、不得聞此經ともいひ、若聞此經、信樂受持、難中之難、無過斯難ともいへり。また善導は、過去已曾、修習此法、今得重聞、卽生歡喜とも、釋せり、いづれの經釋によるとも、すでに宿善にかぎれりとみえたり。しかれば宿善の機をまもりて、當流の法をばあたふべしと、きこえたり。このをもむきを、くはしく存知して、ひとをば勸化すべし。ことに、まづ王法をもて木とし、仁義をさきとして、世間通途の儀に順じて、當流安心を

【二】 夫れ當流門徒中の文。當流門徒としてその内外の生活に就て心得を示す。

ば、内心にふかくたくはへて、外相に法流のすがたを、他宗他家にみえぬやうに、ふるまふべし。このこゝろをもて、當流眞實の正義を、よく存知せしめたるひととは、なづくべきものなり。あなかしこ／＼。

文明八年 正月二十七日

夫、當流門徒中に在いて、すでに安心決定せしめたらん人の身のうへにも、また未決定の人の、安心をとらんとおもはん人も、こゝろうべき次第は、まづほかには王法を本とし、諸神諸佛菩薩をかるしめず、また諸宗諸法を謗せず、國とこゝろにあらば、守護地頭にむきては、疎略なく、かぎりある年貢所當を、つぶさに沙汰をいたし、そのほか仁義をもて本とし、また後生のためには、内心に阿彌陀如來を、一心一向にたのみたてまつりて、自餘の雜行雜善にこゝろをばとゞめずして、一念も疑心なく信じまいらせば、かならず眞實の極樂淨土に往生すべし。このこゝろえのとをりをもて、すなはち彌陀如來の他力の信心をえたる念佛行者のすがたとはいふべし。かくのごとく、念佛の信心をとりてのうへに、なをおもふべきやうは、さても、かゝるわれらごときのあさましき一生造惡のつみふかき身ながら、ひとたび一念歸命の信心をこそせば、佛の願力によりて、たやすくたすけたまへる彌陀如來の、不思議にまします超世の本願の強縁の、ありがたさよと、ふかくおもひたてまつりて、その御恩報謝のためには、ねてもさめても、たゞ念佛ばかりをとなへて、か

【くせ】曲法門にて正義に非ざる邪曲の教なり。

の彌陀如来の佛恩を、報じたてまつるべきばかりなり。このうへには、後生のために、なにをしりても所用なきところに、ちかごろ、もてのほか、みな人の、なにの不足ありてか相傳もなき、しらぬくせ法門をいひて、人をもまどはし、また無上の法流をも、けがさんこと、まことにもて、あさましき次第なり。よく／＼おもひはからふべきものなり。あなかしこ／＼。

文明八年七月十八日

御文三帖目 畢

御文 四帖目

【一】眞宗念佛行者の文。眞宗に於ける自行化他の義を明せるものにして、特に宿縁の重んずべき事を懇示せり。

(二) 夫、眞宗念佛行者のなかにをいて、法義について、そのこゝろえなき次第これおほし。しかるあひだ、大概、そのをもむきを、あらはしをはりぬ。所詮自今已後は同心の行者は、このことばをもて本とすべし。これについて、ふたつのこゝろあり。一には、自身の往生すべき安心を、まづ治定すべし。二には、ひとを勸化せん、宿善無宿善のふたつを、分別して、勸化をいたすべし。この道理を、心中に決定して、たもつべし。しかれば、わが往生の一段にをいては、内心にふかく、一念發起の信心をたくはへて、しかも、他力佛恩の稱名をたしなみ、そのうへには、なを王法をさきとして、仁義を本とすべし。また諸佛菩薩等を疎略にせず、諸法諸宗を輕賤せず、たゞ世間通途の儀に順じて、外相に當流法義のすがたを、他宗他門のひとにみせざるをもて、當流聖人のおきてをまもる眞宗念佛の行者といひつべし。ことに當時このごろは、あながちに偏執すべき耳をそばだて、謗難のくちびるを、めぐらすをもて、本とする時分たるあひだ、かたく、その用捨あるべきものなり。そもく、當流にたつるところの他力の三信といふは、第十八の願に、至心信樂欲生我國といへり。これすなはち、三信とはいへども、たゞ彌陀をたのむところの行者歸命の一心なり。そのゆへはいかんといふに、宿善開發の行者、一念彌陀に歸命せんと、おも

【遇獲信心等】以下の詞は教行信證總序の文なり。

【二】定命の文。自己の年齢を思出して、苦と無常の人生なるを歎じ、急ぎ無量壽佛に歸して、佛恩報盡の宗教生活に入るべき事を勸む。

ふこゝろの一念、をこるきざみ、佛の心光、かの一念歸命の行者を攝取したまふ。その時節をさして、至心信樂欲生の三信ともいひ、またこのこゝろを願成就の文には、即得往生住不退轉ととけり。あるひは、このくらゐを、すなはち眞實信心の行人とも、宿因深厚の行者とも、平生業成の人ともいふべし。されば、彌陀に歸命すといふも、信心獲得すといふも、宿善にあらずといふことなし。しかれば念佛往生の根機は、宿因のもよほしにあらずば、われら今度の報土往生は不可なりとみえたり。このこゝろを、聖人の御ことばには、遇獲信心遠慶、宿縁とおほせられたり。これによりて、當流のこゝろは、人を勸化せんとおもふとも、宿善無宿善のふたつを分別せずば、いたづらごとなるべし。このゆへに、宿善の有無の根機をあひはかりて、人をば勸化すべし。しかれば、近代、當流の佛法者の風情は、是非の分別なく、當流の義を、荒涼に讚嘆せしむるあひだ、眞宗の正意、このいはれによりて、あひすたれたりときこえたり。かくのごときらの次第を、委細に存知して當流の一義をば、讚嘆すべきものなり。あなかしこく。

文明九年丁酉 正月八日

夫、人間の壽命をかぞふれば、いまのときの定命は、五十六歳なり。しかるに當時にいて、年五十六まで、いきのびたらん人は、まことにもて、いかめしきことなるべし。これによりて予、すでに頽齡、六十三歳にせまれり、勘篇すれば、年は、はや七年まで、い

【無漏】煩惱の盡きたる事にして、有漏に對す。

【信證院】大和教行寺にありてつけられし上人の院號

きのびぬ。これにつけても、前業の所感なれば、いかなる病患をうけてか、死の縁にのぞまんとおぼつかなし。これさらに、はからざる次第なり。ことにもて、當時の體たらくを、みをよぶに、定相なき時分なれば、人間のかなしさは、おもふやうにもなし。あはれ死なばやおもはく、やがて死なれなん世にてもあらば、などか、今までこの世にすみはんべりなん。たゞいそぎてもむまれたきは極樂淨土、ねがふてもねがひえんものは無漏の佛體なり。しかれば、一念歸命の他力安心を、佛智より獲得せしめん身のうへにおいて、畢命爲期まで、佛恩報盡のために、稱名をつとめんにいたりては、あながち、なにの不足ありてか、先生よりさだまれるところの死期をいそがんと、かへりて、をろかにまどひぬるかとも、おもひはんべるなり。このゆへに愚老が身上にあて、かくのごとくをもへり。たれのひとくも、この心中に住すべし。ことにもて、この世界のならひは、老少不定にして、雷光朝露のあだなる身なれば、いまま無常のかげ、きたらんことをば、しらぬ體にてすぎゆきて、後生をば、かつてねがはず、たゞ今生をば、いつまでも、いきのびんするやうにこそ、おもひはんべれ。あさましといふも、なををろかなり。いそぎ今日より彌陀如來の他力本願をたのみ、一向に無量壽佛に歸命して、眞實報土の往生をねがひ、稱名念佛せしむべきものなり。あなかしこ。

于時文明九年九月十七日、俄思出之間、辰尅已前、早々畫記之訖

信證院 六十三歳

【三】當時世上の文。當時京都にては細川、山名、關原、所謂應仁亂、應仁元年、文明九年、前後十一年に互てあり、又關東には足利成氏と上杉顯房の爭亂あり物情騷然として底心不安を訴ふるの折柄道を修め菩提を求め難き末世の我等には只管に安養の彼岸を願求せしむ。

【法性】諸法の體性なるの意、即ち眞如の事。

【一乘法華】一代諸教を悉く開會して唯佛一乘の理を明せる妙法蓮華經の謂。

【提婆阿闍世等】以下の文意は觀經說法。

かきをくもふでにまかするふみなればことばのするぞをかしかりける

(三)夫、當時世上の體たらく、いつのころにか、落居すべきとも、おぼえはんべらざる風情なり。しかるあひだ、諸國往來の通路にいたるまでも、たやすからざる時分なれば佛法世法につけても、千萬迷惑のおりふしなり。これによりて、あるひは靈佛靈社參詣の諸人もなし。これにつけても、人間は、老少不定ときく、ときは、いそぎ、いかなる功德善根をも修し、いかなる菩提涅槃をも、ねがふべきことなり。しかるに、いまの世も、末法濁亂とはいひながら、こゝに阿彌陀如來の他力本願は、いまの時節は、いよゝゝ不可思議にさかりなり。されば、この廣大の悲願にすがりて、在家止住のともがらにをいては、一念の信心をとりて、法性常樂の淨刹に往生せずば、まことにもて、たからの山にいらりて、手をむなしくして、かへらんに、にたるもの歎。よくゝこゝろをしづめて、これを案ずべし。しかれば諸佛の本願をくはしくたづぬるに、五障の女人五逆の悪人をば、すくひたまふこと、かなはずと、きこえたり。これにつけても阿彌陀如來こそひとり、無上殊勝の願ををこして、惡逆の凡夫五障の女質をば、われたすくべきといふ大願をばをこしたまひけり。ありがたしといふも、なををろかなり。これによりて、むかし釋尊、靈鷲山にましまして、一乘法華の妙典をとかれしとき、提婆阿闍世の逆害ををこし、釋迦、章提をして、安養をねがはしめたまひしによりて、かたじけなくも、靈山法華の會座を没して、王宮に降

臨して、韋提希夫人のために、淨土の教をひろめましくしによりて、彌陀の本願、このときにあたりてさかんなり。このゆへに、法華と念佛と同時の教といへることは、このいはれなり。これすなはち末代の五逆女人に安養の往生をねがはしめんがための方便に、釋迦提調達闍世の五逆をつくりて、かゝる機なれども、不思議の本願に歸すれば、かならず安養の往生をとぐるものなりと、しらせたまへりとしるべし。あなかしこく。

文明九歳九月廿七日記之

【四】三首御詠歌の交。佐々木高綱の孫、出家して性光房と名付くる者吾祖の弟子となり西國に遊化して大に眞宗を弘通し、攝州島下郡溝杭村に一字を建立して佛照寺と號し末寺一千に及ぶ。後蓮師の時代に及んで佛照寺の住職を教光房と名付け、只義疎歌を好んで蓮師之れを教化せん爲め、此三首の歌を詠み落し文として教光が邊に棄てお

夫、秋もさり春もさりて、年月ををくること、昨日もすぎ今日もすぐ、いつのまにかは、年老のつもるらんとも、おぼえずしらざりき。しかるにそのうちには、ざりともあるひは、花鳥風月のあそびにも、まじはりつらん。また歡樂苦痛の悲喜にも、あひはんべりつらん。なれども、いまに、それともおもひいだすこととはひとつもなし。たゞいたづらにあかし、いたづらにくらして、老のしらがとなりはてぬる身のありさまこそ、かなしけれ。されども、今日までは、無常のはげしき風にもさそはれずして、我身ありがほの體を、つらつら案ずるに、たゞゆめのごとし、まぼろしのごとし。いまにをいては、生死出離の一道ならでは、ねがふべきかたとは、ひとつもなく、またふたつもなし。これによりて、こゝに未來惡世のわれらごときの衆生を、たやすくたすけたまふ阿彌陀如來の本願のましますときけば、まことに、たのもしくありがたくも、おもひはんべるなり。この本願を、たゞ

けるに彼れ後に蓮師
れを見て直に蓮師
の許に來り聽聞し
て無二の信者とな
る。爾時蓮師、此
三首の歌に前後を
綴りて此文となし
と傳ふ。教光房に與へらる

一念無疑に至心歸命したてまつれば、わづらひもなく、そのとき臨終せば、往生決定すべし。もし、そのいのちのびなば一期のあひだは、佛恩報謝のために、念佛して、畢命を期とすべし。これすなはち平生業成のこゝろなるべしと、たしかに聽聞せしむるあいだ、その決定の信心のとほり、いまに耳のそこに退轉せしむることなし。ありがたしといふも、なををろかなるものなり。されば彌陀如來他力本願のたふとさありがたさのあまり、かくのごとくくちにうかむにまかせて、このこゝろを詠歌にいはく、

ひとたびもほとけをたのむこゝろこそまことのりにかなふみちなれ

つみふかく如來をたのむ身になればのりちからに西へこそゆけ

法をきくみちにこゝろのさだまれば南無阿彌陀佛となへこそすれ

と。我身ながらも、本願の一法の殊勝なるあまり、かくまうしはんべりぬ。この三首の歌

のこゝろは、はじめは、一念歸命の信心決定のすがたをよみはんべり、のちの歌は、入正

定聚の益、必至滅度のこゝろをよみはんべりぬ。次のこゝろは、慶喜金剛の信心のうへに

は、知恩報徳のこゝろをよみはんべりしなり。されば、他力の信心發得せしむるうへなれ

ば、せめては、かやうにくちすさみても、佛恩報盡のつとめにもや、なりぬべきともおも

ひ、又きくひともし、宿縁あらば、などやおなじこゝろにならざらんと、おもひはんべりし

なり。しかるに予、すでに七句のよはひにをよび、ことに愚闇無才の身として、片腹いた

くも、かくのごとく、しらぬるせ法門をまうすことかづは斟酌をもちかへりみず、たゞ本願

【當坊】河内出口蓮師在住の御坊を指す。

【五】中古已來の文。文明十年正月蓮師六十四歳の時金森善從の請に由り河内より山城宇治郡山科に移り翌年三月山科本願寺の工を起し、十二年八月祖堂先づ慶し引續き十六年間大津に假托しありし親鸞の御影を始めて茲に安置し十四年六月報恩落成し其年本堂落講中に今文を製作されしと見ゆ。

のひとすぢのたふとさばかりのあまり、卑劣のこのことの葉を、筆にまかせて、かきしるしをはりぬ。のちにみん人、そしりをなさざれ。これまことに讚佛乘の縁、轉法輪の因ともなりはんべりぬべし。あひかまへて、偏執をなすこと、ゆめ／＼なかれ。あなかしこく。
于時文明年中西暮冬仲句之比、於爐邊、暫時書記之者也云云。
右この書は、當所はりの木原邊より九間在家へ、佛照寺所用ありて出行のとき、路次にて、この書をひろひて當坊へもちきたれり。

文明九年十二月二日

夫、中古已來、當時にいたるまでも、當流の勸化をいたす、その人數のなかにをいて、さらに宿善の有無といふことをしらすして勸化をなすなり。所詮、自今已後にをいては、このいはれを存知せしめて、たとひ聖教をよみ、また暫時に法門をいはんとときも、このころを覺悟して、一流の法義をば讚嘆し、あるひはまた佛法聽聞のためにとて、人數おほくあつまりたらんとときも、この人數のなかにをいて、もし無宿善の機やあるらんとおもひて、一流眞實の法義を沙汰すべからざるところに、近代人々の勸化する體たらくをみをよぶに、この覺悟はなく、たゞいづれの機なりとも、よく勸化せば、なか當流の安心に、もとづかざらんやうにおもひはんべりき。これあやまりとするべし。かくのごときの次第をねんごろに存知して、當流の勸化をばいたすべきものなり。中古このごろにいたるまで、

【誹法等】以下の
文は善導の
法事講
上に出づ。

さらにそのころをえて、うつくしく勸化する人なし。これらのをもむきを、よく／＼覺悟して、かたのごとくの勸化をばいたすべきものなり。そも／＼、今月二十八日は、毎年の儀として、懈怠なく、開山聖人の報恩謝徳のために、念佛勤行をいたさんと擬する人數これおほし。まことに、ながれをくんで本源をたづぬる道理を存知せるがゆへなり。ひとへにこれ、聖人の勸化のあまねきがいたすところなり。しかるあひだ、近年ことのほか、當流に讃嘆せざるひが法門をたて、諸人をまどはしめて、あるひは、そのところの地頭領主にもとがめられ、わが身も悪見に住して、當流の眞實なる安心のかたも、たゞしからざるやうに、みをよべり。あさましき次第にあらずや。かなしむべし、おそるべし。所詮、今月報恩講七晝夜のうちにをいて、各々に改悔の心をこして、わが身のあやまれるところの心中を、心底にのこさずして、當寺の御影前にをいて、廻心懺悔して、諸人の耳に、これをきかしむるやうに、毎日毎夜にかたるべし。これすなはち誹法闍提、廻心皆往の御釋にもあひかなひ、また自信教人信の義にも相應すべきものなり。しからは、まことこゝろあらん人々は、この廻心懺悔をきゝても、げにもとおもひて、おなじく口ごろの悪心をひるがへして、善心になりかへる人もあるべし。これぞ、まことに、今月聖人の御忌の本懐にあひかなふべし。これすなはち報恩謝徳の懇志たるべきものなり。あなかしこ／＼。

文明十四年十一月二十一日

【一八】三ヶ條の文蓮師山科在住當時上人の化導は殆んど隆盛の極に達し帝に門葉の來附するのみならず諸寺の高僧にして上人の徳風に歸するもの亦少なからず。然れどもその類、清濁混濁にして名利濁人並みの輩も頗る多く加ふる所に非義異計の徒各に偏執も繁き有様なれば、上人その矯正し、一方ならず宗祖の報恩講に際し諸國の道俗數多來集の折を好機とすべき點に條目を立てて懇諭されし次第は以下三通の御正忌の如く由て示されし文に於て其間の消息を窺知せしむるに余りあり。

抑、當月の報恩講は、聞山聖人の御遷化の正忌として、例年の舊儀とす。これによりて遠國近國の門徒のたぐひ、この時節にあひあたりて、參詣のこゝろざしをはこび、報謝のまことをいたさんと欲す。しかるあひだ、毎年七晝夜のあひだにをいて、念佛勤行をこらしげます。これすなはち眞實信心の行者、繁昌せしむるゆへなり。まことにもて、念佛得堅固の時節到來といひつべきもの歟。このゆへに一七箇日のあひだにをいて、參詣をいたすともがらのなかにをいて、まことに人まねばかりに、御影前へ出仕をいたすやから、これあるべし。かの仁體にをいては、はやく御影前にひさまづゐて、廻心懺悔のこゝろををこして、本願の正意に歸入して、一念發起の眞實信心をまうくべきものなり。それ、南無阿彌陀佛といふは、すなはちこれ念佛行者の安心の體なりとおもふべし。そのゆへは、南無といふは歸命なり、卽是歸命といふは、われらごときの無善造惡の凡夫のうへにをいて、阿彌陀佛をたのみたてまつるこゝろなりとしるべし。そのたのむこゝろといふは、卽是阿彌陀佛の、衆生を、八萬四千の日光明のなかに攝取して、往還二種の廻向を、衆生にあたへましますこゝろなり。されば信心といふも、別のこゝろにあらず、みな南無阿彌陀佛のうちにこもりたるものなり。ちかごろは、人の、別のことのやうにおもへり。これに於いて諸國にをいて、當流門人のなかに、おほく祖師のさだめをかるゝところの聖教の所判になき、くせ法門を沙汰して、法義をみだす條、もてのほかの次第なり。所詮、かくのごと

きのやからにをいては、あひかまへて、この一七箇日報恩講のうちにおいて、そのあやま
りをひるがへして、正義にもとづくべきものなり。

一、佛法を棟梁し、かたのごとく坊主分をもちたらん人の身上にをいて、いさゝかも相承
もせざる、しらぬえせ法門をもて、人にかたり、われ、物しりとおもはれんためにとて、
近代在々所々に繁昌すと云々。これ言語道斷の次第なり。

一、京都本願寺御影へ参詣まうす身なりといひて、いかなる人の中ともいはず、大道大路
にても、また關渡の船中にて、はゞからず、佛法がたのことを、人に顯赫にかたること、
おほきなるあやまりなり。

一、人ありていはく、我身はいかなる佛法を信ずる人ぞと、あひたづぬることありとも、
しかと當流の念佛者なりとこたふべからず。たゞ、なに宗ともなき、念佛ばかりはたふと
きことゝ存じたるばかりなるものなりと、こたふべし。これすなはち、當流聖人のをしへ
ましますところの、佛法者とみえざる人のすがたなるべし。されば、これらのをもむきを、
よく／＼存知して、外相に、そのいろをみせざるをもて、當流の正義とおもふべきものな
り。これについて、この兩三年のあひだ、報恩講中にをいて、衆申として、さだめをくと
ころの義、ひとつとして違變あるべらず。この衆中にをいて、萬一相違せしむる子細これ
あらば、ながき世、開山聖人の御門徒たるべからざるものなり。あなかしこ／＼。

文明十五年十一月日

【七】六ヶ條の文
 文明十六年の報恩
 講を機として此制
 文を出さる。
 【本行】禮誦等の
 助行に對し念佛は
 選擇本願の行なる
 が故に是くいふ。

抑、今月報恩講の事、例年の舊儀として、七日の勤行をいたすところ、いまに、その退轉なし。しかるあひだ、この時節にあひあたりて、諸國門葉のたぐひ、報恩謝徳の懇志をはこび、稱名念佛の本行をつくす。まことにこれ、専修專念決定、往生の徳なり。このゆへに、諸國參詣のともがらにをいて、一味の安心に住する人、まれなるべしとみえたり。そのゆへは、眞實に、佛法にこゝろざしはなくして、たゞ人まねばかり、あるひは仁義までの風情ならば、まことにもて、なげかしき次第なり。そのいはれ、いかんといふに、未安心のともがらは、不審の次第をも沙汰せざるときは、不信のいたりともおぼえはんべれ。されば、はるくくと萬里の遠路をしのぎ、又莫大の苦勞をいたして、上洛せしむるところ、さらにもてその所詮なし。かなしむべし。たゞし、不宿善の機ならば、無用といひつべきもの歟。

一、近年は、佛法繁昌ともみえたれども、まことにもて、坊主分の人にかぎりて、信心のすがた、一向無沙汰なりときこえたり。もてのほか、なげかしき次第なり。

一、すゑくの門下のたぐひは、他力の信心のとほり、聽聞のともがら、これおほきとこるに、これを坊主より腹立せしむるよし、きこえはんべり、言語道斷の次第なり。

一、田舎より參詣の面々の身上にをいて、こゝろうべき旨あり。そのゆへは、他人の中ともいはず、また大道路次などにてても、關屋船中をもはゞからず、佛法方の讚嘆をすること、

勿體なき次第なり、かたく停止すべきなり。

一、當流の念佛者を、あるひは人ありて、なに宗ぞとあひたづぬること、たとひありとも、しかと當宗念佛者とこたふべからず、たゞ、なに宗ともなき念佛者なりと、こたふべし。これすなはち、我聖人のおほせをかるゝところの佛法者氣色みえぬふるまひなるべし。このをもむきを、よく／＼存知して、外相にそのいろを、はたらくべからず。まことにこれ、當流の念佛者のふるまひの正義たるべきものなり。

一、佛法の由來を、障子かきごしに聽聞して、内心にこそとたとひ領解すといふとも、かさねて人に、そのをもむきを、よく／＼あひたづねて、信心のかたをば、治定すべし。そのまゝ我心にまかせば、かならず／＼あやまりなるべし。ちかごろ、これらの子細、當時さかんなりと云々。

一、信心をえたとをりをば、いくたびも／＼人にたづねて、他力の安心をば治定すべし。一往聽聞しては、かならずあやまりあるべきなり。

右此六箇條のをもむき、よく／＼存知すべきものなり。近年、佛法は、人みな聽聞すといへども、一往の儀をきゝて、眞實に信心決定の人これなきあひだ、安心も、うと／＼しきがゆへなり。あなかしこ／＼。

文明十六年十一月二十一日

【八】ハケ條の文
 文明十七年の御忌
 に出さる。

抑、今月二十八日の報恩講は、昔年よりの流例たり。これによりて、近國遠國の門葉、報恩謝徳の懇志を、はこぶところなり。二六時中の稱名念佛、今古退轉なし。これすなはち、開山聖人の法流、一天四海の勸化、比類なきが、いたすところなり。このゆへに、七晝夜の時節にあひあたり、不法不信の根機に在いては、往生淨土の信心獲得せしむべきものなり。これしかしながら、今月聖人の御正忌の報恩たるべし。しからざらんともがらに在いては、報恩謝徳のこゝろざしなきにたるもの歟。これによりて、このごろ眞宗の念佛者と號するなかに、まことに心底より、當流の安心決定なきあひだ、あるひは名聞、あるひはひとなみに報謝をいたすよしの風情これあり。もてのほか、しかるべからざる次第なり。そのゆへすでに萬里の遠路をしのぎ、莫大の辛勞をいたして、上洛のともがら、いたづらに名聞ひとなみの心中に住すること口惜次第にあらずや。すこぶる不足の所存といひつべし。たゞし、無宿善の機にいたりては、ちからをよばず。しかりといへども、無二の懺悔をいたし、一心の正念におもむかば、いかでか聖人の御本意に達せざらんものをや。

一、諸國參詣のともがらのなかに在いて、在所をきはらず、いかなる大道大路、又關屋渡の船中にて、さらにそのはゞかりなく、佛法方の次第を、顯露に人にかたることしかるべからざる事。

一、在々所々に在いて、當流にさらに沙汰せざる、めづらしき法門を讚嘆し、おなじく宗

義になき、おもしろき名目などを、つかふ人これおほし。もてのほかの僻案なり、自今已後、かたく停止すべきものなり。

一、この七箇日報恩講申にをいては、一人ものこらず、信心未定のともがらは、心中をばからず、改悔懺悔の心ををこして、眞實信心を獲得すべきものなり。

一、もとより、我安心のをもむき、いまだ決定せしむる分もなきあひだ、その不審をいたすべきところに、心中につくみて、ありのまゝにかたらざるたぐひあるべし。これをせめ、

あひたづぬるところに、ありのまゝに心中をかたらずして、當場をいひぬけんとする人のみなり。勿體なき次第なり。心中をのこさずかたりて、眞實信心にもとづくべきものなり。

一、近年佛法の、棟梁たる坊主達、我信心はきはめて不足にて、結句門徒同朋は、信心は決定するあひだ、坊主の信心不足のよしをまふせば、もてのほか腹立せしむる條、言語道

斷の次第なり。已後にをいては、師弟ともに、一味の安心に住すべき事。

一、坊主分の人、ちかごろは、ことのほか重杯のよし、そのきこえあり。言語道斷しかるべからざる次第なり。あながちに、酒をのむ人を停止せよといふにはあらず、佛法につけ

門徒につけ、重杯なれば、かならずやもすれば、醉狂のみ出来せしむるあひだ、しかるべからず。さあらんときは、坊主分は、停止せられても、まことに興隆佛法ともいひつべ

き歟。しからずば、一證にてもしかるべき歟。これも佛法にこゝろざしのうすきによりてのことなれば、これをとゞまらざるも道理か。ふかく愚案あるべきものなり。

【坊主分は】以下の文意は坊主は佛法弘通を本分とするものなるが故に佛法を亂すべき重杯は停止しても興隆佛法の身分には非ずやの意か。

【言南無者】以下の文は善導の觀經疏玄義分に出づ。古來六字釋と稱する處なり。

【當寺建立】山科本廟の建立は文明九年頃已に造營の計劃ありしと見ゆ

一、信心決定のひとも、細々に同行に會合のときは、あひたがひに信心の沙汰あらば、これすなはち眞宗繁昌の根元なり。

一、當流の信心決定すといふ體は、すなはち南無阿彌陀佛の六字のすがたとこゝろうべきなり。すでに善導釋していはく、言南無者、卽是歸命、亦是發願廻向之義、言阿彌陀佛者、卽是其行といへり。南無と衆生が彌陀に歸命すれば阿彌陀佛の、その衆生をよくしろしめして、萬善萬行恆沙の功德をさづけたまふなり。このこゝろすなはち、阿彌陀佛卽是其行といふこゝろなり。このゆへに南無と歸命する機と、阿彌陀佛のたすけます法とが、一體なるところをさして、機法一體の南無阿彌陀佛とはまうすなり。かるがゆへに阿彌陀佛のむかし、法藏比丘たりしとき、衆生、佛にならずば、われも正覺ならじと、ちかひましますとき、その正覺すでに成じたまひすがたこそ、いまの南無阿彌陀佛なりとこゝろうべし。これすなはち、われらが往生のさだまりたる證據なり。されば、他力の信心獲得すといふも、たゞこの六字のこゝろなりと落居すべきものなり。

そも、この八箇條のをもむきかくのごとし。しかるあひだ、當寺建立は、すでに九箇年にをよべり。毎年の報恩講中をいて、面々各々に随分、信心決定のよし、領納ありといへども、昨日今日までも、その信心のをもむき異なるあひだ、所詮なきもの歟。しかるといへども、當年の報恩講中にかぎりて、不信心のともがら、今月報恩講のうちに、早速に眞實信心を獲得なくば、年々を經といふとも、同篇たるべきやうにみえたり。しかるあ

【九】疫癘の文。
明應元年の夏疫癘盛に流行して人多く死せしかば、是れ全く感染死するなりと時人いへるに對し、蓮師のさとされて曰く、唯因縁によりて病死するぞとて直に其理を文に作りて法敬坊に與へられしと傳ふ。此年改元して明應元年と稱す。

ひだ、愚老が年齢、すでに七旬にあまりて、來年の報恩講をも期しがたき身なるあひだ、各々に眞實に決定信をえしめん人あらば、一は、聖人今月の報謝のため、一は、愚老がこの七八箇年のあひだの本懐とも、おもひはんべるべきものなり。あなかしこく、
文明十七年十一月二十三日

當時このごろ、ことのほかに疫癘とて、ひと死去す。これさらに疫癘によりて、はじめに死するにはあらず、生れはじめしよりして、さだまれる定業なり。そのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、いまの時分にあたりて死去するときは、さもありぬべきやうに、みなひとおもへり。これまことに道理ぞかし。このゆへに、阿彌陀如來のおほせられけるやうは、末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべしと、おほせられたり。かゝる時は、いよいよ阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて、極樂に往生すべしとおもひとりて、一向一心に、彌陀をたふときことゝ、うたがふころ、つゆちりほども、もつまじきことなり。かくのごとくころえのうへには、ねてもさめても、南無阿彌陀佛くとまうすは、かやうにやすくたすけます、御ありがたさ御うれしさをまうす御禮のころなり。これをすなはち、佛恩報謝の念佛とまうすなり。あなかしこく、

延徳四年六月日

【一〇】いまの世の女に對する教。

いまの世にあらん女人は、みな／＼こゝろを一にして阿彌陀如來をふかくたのみたてまつるべし。そのほかには、いづれの法を信ずといふとも、後生のたすかるといふこと、ゆめゆめあるべからずとおもふべし。されば、彌陀をば、なにとやうにたのみ、また後生をば、なにとねがふべきぞといふに、なにのわづらひもなく、たゞ一心に彌陀をたのみ、後生たすけたまへとふかくたのみ申さん人をば、かならず御たすけあらんことは、さら／＼つゆゆども、うたがひあるべからざるものなり。このうへには、はやしかと御たすけあるべきことの、ありがたさよとおもひて、佛恩報謝のために念佛申すべきばかりなり。あなかしこあなかしこ。

八十三歳 御判

【一一】機法一體の文。南無阿彌陀佛が機法一體のこころをあらはす意義を述ぶ。

南無阿彌陀佛と申は、いかなる心にて候や。然者、何と彌陀をたのみて、報土往生をばとぐべく候哉らん。これを心得べきやうは、まづ南無阿彌陀佛の六字のすがたを、よく／＼心得わけて、彌陀をばたのみべし。抑、南無阿彌陀佛の體は、すなはち我等衆生の、後生たすけたまへと、たのみ中心なり。すなはち、たのみ衆生を、阿彌陀如來のよくしるしめして、すでに無上大利の功德をあたましますなり。これを衆生に廻向したまへるといへるは、この心なり。されば彌陀をたのみ機を、阿彌陀佛のたすけたまふ法なるがゆ

【二三】 毎月兩度の文。蓮師の時代法然親鸞兩祖師の忌日をえらびて毎月兩度の御齋あり講中を結びて同信行者の信心策勵の爲めの會合ありしを日を経るに隨ひその本意に悖らんとする如き傾向ありしかば特にその反省を促せり。

へに、これを機法一體の南無阿彌陀佛といへるは、このころなり。これすなはち、我等が往生のさだまりたる他力の信心なりとは、心得べき者なり。あなかしこく。

明應六年五月二十五日書之訖 八十三歳

抑、毎月兩度の寄合の由來は、なにのためぞといふに、さらに、他のことにあらず、自身の往生極樂の信心獲得のためなるがゆへなり。しかれば、往昔よりいきにいたるまでも、毎月の寄合といふことは、いづくにもこれありといへども、さらに信心の沙汰としては、かつてもてこれなし。ことに近年は、いづくにも寄合のときは、たゞ酒飯茶などばかりにて、みなく退散せり。これは、佛法の本意には、しかるべからざる次第なり。いかにも不信の面々は、一段の不審をもたて、信心の有無を沙汰すべきところに、なにの所詮もなく退散せしむる條、しかるべからず、おぼえはんべり。よく思案をめぐらすべきことなり。所詮、自今已後に在いては、不信の面々は、あひたがひに信心の讚嘆あるべきこと肝要なり。

それ、當流の安心のをもむきといふは、あながちに、わが身の罪障のふかきによらず、たゞもろくの雅行のころをやめて、一心に阿彌陀如來に歸命して、今度の一大事の後生たすけたまへとふかくたのまん衆生をば、ことごとくたすけたまふべきこと、さらにうたがひあるべからず。かくのごとくころえたる人は、まことに百即百生なるべきな

り。このうへには毎月の寄合をいたしても、報恩謝徳のためとこゝろ先なば、これこそ、眞實の信心を具足せしめたる行者とも、なづくべきものなり。あなかしこく。

明應七年二月二十五日 書レ之

毎月兩度講業中へ

八十四歳

【三】孟夏仲旬の女。明應七年夏の頃、上人初て不例の徴あり、玄陰に及びて、蓮師自ら吾れ今の分にては彌けなばかならずしとより閉眼すべしとよりより云ひ出されし由或記には傳へたり。

夫、秋さり存さり、すでに當年は、明應第七、孟夏仲旬ごろになりぬば、予が年齢つもりて八十四歳ぞかし、しかるに當年にかぎりて、ことのほか、病氣にかさるゝあひだ、耳目手足身體こゝろやすからざるあひだ、これしかながら業病のいたりなり。または往生極樂の先相なりと、覺悟せしむるところなり。これによりて、法然聖人の御ことばはいはく、淨土をねがふ行人は、病患をえて、ひとへにこれをたのしむとこそ、おほせられたり。しかれども、あながちに、病患をよろこぶこゝろ、さらにもてをこらず、あさましき身なり。はづべしかなしむべきもの歎。さりながら、予が安心の一途、一念發起平生業成の宗旨にをいては、いま一定のあひだ、佛恩報盡の稱名は、行住坐臥にわすれざること間斷なし。これについて、こゝに愚老一身の連懷これあり。そのいはれば、われら居住の在所々々の門下のともがらにをいては、おほよそ心中をみをよぶに、とりつめて、信心決定のすがた、これなしと、おもひはんべり。おほきに、なげきおもふところなり。その

ゆへは、愚老すでに八旬の齡すぐるまで存命せしむるしには、信心決定の行者繁昌ありてこそ、いのちながきしるしともおもひはんべるべきに、さらに、しかくとも決定せしむるすがた、これなしと、みをよべり。そのいはれを、いかんといふに、そもく、人間界の老少不定のことをおもふにつけても、いかなるやまひをうけてか死せんや。かゝる世のなかの風情なれば、いかにも一日も片時も、いそぎて信心決定して、今度の往生極樂を一定してそののち人間のありさまにまかせて、世をすこすべきこと、肝要なりとみなみなこゝろうべし。このをもむきを、心中におもひいれて、一念に彌陀をたのむこゝろをふかくをこすべきものなり。あなかしこく。

明應七年初夏仲旬第一日

八十四歳老情書之

彌陀の名をきゝうるることのあるならば南無阿彌陀佛とたのめみなひと

一流安心の體といふ事

【二四】一流安心の體の域に及びては何事も言少なば何を言まみて教示せらる。今文も簡潔に初めより安心の體を示されたり。

南無阿彌陀佛の六字のすがたなりとしるべし。この六字を、善導大師釋していはく、言南無者、即是歸命、亦是發願廻向之義、言阿彌陀佛者、即是其行、以斯義故、必得往生といへり。まづ、南無といふ二字は、すなはち歸命といふこゝろなり。歸命といふは、衆生の、阿彌陀佛後生たすけたまへ、とたのみたてまつるこゝろなり。また發願廻向といふは、

【言南無者】以下

の釋文は善導の觀經疏玄義分に出づ

【二五】大坂建立の

女。明應五年九月
坂石山の存所を見
初められしより終
に一字を建立し翌
年十一月に至つて
周備満足す。蓋し
隠退の處に擬せら
れしなり。是れ所
謂石山本願寺にし
て後世石山合戦の
中心となれる處な
り。今又大坂建立
の本心を擧げて臨
末の遺懷を述べた
まふ是れ偶偶上人
最後の報恩講にて
ありしなり。

たのむところの衆生を、攝取してすくひたまふころなり。これすなはち、やがて阿彌陀佛の四字のころなり。されば、われらごときの愚癡闇鈍の衆生は、なにところをもち、また彌陀をばなにとたのむべきぞといふに、もろ／＼の難行をすて、一向一心に後生たすけたまへと彌陀をたのめば、決定極密に往生すべきこと、さらにそのうたがひあるべからず。このゆへに南無の二字は、衆生の彌陀をたのむ機のかたなり。また阿彌陀佛の四字は、たのむ衆生をたすけたまふかたの法なるがゆへに、これすなはち機法一體の南無阿彌陀佛とまうすころなり。この道理あるがゆへに、われら一切衆生の體は、南無阿彌陀佛ときこえたり。あなかしこ／＼。

明應七年四月日

抑、當國攝州、東成郡、生玉の庄内大坂といふ在所は、往古より、いかなる約束のありけるにや、さんぬる明應第五の秋下旬のころより、かりそめながら、この在所をみそめしより、すでに、かたのごとく一字の坊舎を建立せしめ、當年は、はやすでに、三年の星霜をへたりき。これすなはち、往昔の宿縁あさからざる因縁なりとおぼえはんべりぬ。それについて、この在所に居住せしむる根元は、あなたがちに一生涯をこころやすくすごし、

榮花榮耀をこのみ、また花鳥風月にもこころをよせず、あはれ無上菩提のためには信心決定の行者も繁昌せしめ念佛をもまうさんとがらも、出來せしむるやうにもあれかすと、

【またいさゝかも】以下の文意は當時世は戦亂にして、政道は安ら、利福の道を講ずるものに至り稀にして、地を闢き寺院を營む如き事あらば必ずその地を欲望して課役の難題等ある折柄なれば、時給も大坂は江邊大澤の荒地なるを蓮師水を支へ土を築きて良地とし玉へば押領の武士種種難題餘日あるべき山風聞ありしかば、それを察して強ちに此地を執心して占據するものに非ず、世人の望む所にてあるならば左右無く自分の意を表すべしとの意を表白されしなり。

おもふ一念のこゝろさしを、はこぶばかりなり。またいさゝかも世間の人なんども偏執のやからもあり、むつかしき題目なんども出来あらんときは、すみやかに、この在所に在りて、執心のこゝろをやめて、退出すべきものなり。これによりて、いよいよ、貴賤道俗をえらばず、金剛堅固の信心を決定せしめんこと、まことに、彌陀如來の本願にあひかなひ、別しては聖人の御本意にたりぬべきもの歎。それについて、愚老、すでに當年は、八十四歳まで存命せしむる條、不思議なり。まことに、當流法義にも、あひかなふ歎のあひだ本望のいたり、これにすぐべからざるもの歎。しかれば愚老、當年の夏ごろより違背せしめて、いまに在りて本復のすがたこれなし。つゝには當年家中には、かならず往生の本懐をとぐべき條、一定とおもひはんべり。あはれ、存命のうちに、みな、信心決定あれかしと朝夕おもひはんべり。まことに、宿善まかせとはいひながら、迷懷のこゝろ、しばらくもやむことなし。または、この在所に三年の居住をふるその甲斐ともおもふべし。あひかまへて、この一七箇日報恩講のうちに在りて信心決定ありて、我人一同に、往生極樂の本意をとげたまふべきものなり。あなかしこ。

明徳七年十一月廿一日よりはじめて、人々に信をとらすべきものなり。

御文四帖目 畢

御ご文ぶん 五帖目ごてしめ

【一】 本代無智の文第十八巻の意を述ぶ

【二】 八萬法護の文。當時學教よみりとて己が博學を誇りとする高慢の輩少なからざれば往之れを誡められしと見えたり。今亦其一ならん。

二 本代無智の在家止住の男女たらんともがらは、こゝろをひとつにして、何事無常をよかくだのみまいらせて、さらに縁のかたへこゝろをふらず、一心一向に佛たすけたまへとまろさん養生をば、たこひ、罪業は深重なりとも、かならず佛無如來はすくひまじきすべし。これすたはち、第十八の念佛往生の誓願のこゝろなり。かくのごとも決定してのちへには、ねてもさめても、いのもおあらんかぎりは、稱名念佛すべきものなり。まなかしこあなかしこ。

それ、八萬の法藏をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす、たとひ一文不知の尼人道なりといふとも、後世をしるを智者とすといへり。しかれば言流のこゝろは、あなたがちにもろくの聖教をよみ、ものをしりたりといふとも、一念の信心のいはれをしらざる人は、いたづら事なりとしるべし。されば聖人の御ことばにも、一切の男女たらん身は、彌陀の本願を信ぜずしては、ふつとたすかるといふ事あるべからずと、おぼせられたり。このゆへに、いかなる女人なりといふとも、もろくの難行をすて、一念に彌陀如來、今度の後生たすけたまへと、ふかくたのみ申さん人は、十人も百人もみなともに、彌陀の

【三】在家尼女房の文。女人に對する勸化の文五通あり、金森五ヶ處の女房講中へ一通づつ認められしと傳ふ。

【四】抑も男子女人の文。

報土に往生すべき事、さらさらうたがひあるべからざるものなり。おなかしこく。

夫、在家の尼女房たらん身は、なにのやうもなく、一心一向に阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて、後生たすけたまへとまうさんひとをば、みな御たすけあるべしとおもひとりて、さらにうたがひのころ、ゆめ／＼あるべからず。これすなはち彌陀如来の御ちかひの他力本願とはまうすなり。このうへには、なを後生のたすからんことの、うれしさありがたさをおもはど、たゞ南無阿彌陀佛／＼ととなふべきものなり。あなかしこく。

抑、男子も女人も罪のふか／＼らんともがらば、諸佛の悲願をたのみても、いまの時分は末代悪世なれば、諸佛の御ちからにては、中々おなほざる時なり、これによりて阿彌陀如来と申奉るは、諸佛にすぐれて、十萬万道の罪人を、我たすけんといふ大願をこしまし／＼て、阿彌陀佛となり給へり。この佛をふかくたのみて、一念御たすけ候へと申さん衆生を、我たすけ申せば、正覺ならじと、ちかひまします彌陀なれば、我等が極樂に往生せん事は更にうたがひなし。このゆへに、一心一向に阿彌陀如来たすけ給へと、ふかく心にうたがひなく信じて、我身の罪のふかき事をばうちすて、佛にまかせまいらせて、一念の信心さだまらん輩は、十人は十人ながら、百人は百人ながら、みな淨土に往生すべき事、さらにうたがひなし。このうへには、なを／＼たふとくおもはたてまつらんことゝのをこ

【五】 信心獲得の

らん時は、南無阿彌陀佛ノと、時をもちはず、ところをもちきはす念佛申べし。これをすなはち、佛恩報謝の念佛と申なり。おなかしこく。

信心獲得すといふは、第十八の願をこゝろうるなり。この願をこゝろうるといふは、南無阿彌陀佛のすがたをこゝろうるなり。このゆへに、南無と歸命する一念の處に、發願廻向のこゝろあるべし。これをすなはち、彌陀如來の、凡夫に廻向しますすこゝろなり。これを大經には、令諸眾生功德成就とけり。されば、無始以來つくりとつくる惡業煩惱を、のこるところもなく、願力不思議をもて、消滅するいはれあるがゆへに正定聚不退のくらゐに住すと成り。これによりて、煩惱を斷ぜずして涅槃をうといへるは、このころなり。此義は當流一途の所談なるものなり。他流の人に對して、かくのごとく沙汰あるべからざる所なり。能々こゝろうべきものなり。おなかしこく。

【六】 一念大利の
文。和讃二首の意
を述ぶ。

一念に彌陀をたのみたてまつる行者には、無上大利の功德をあたへたまふこゝろを和讃に聖人のいはく、

五濁惡世の有情の、選擇本願信すれば、不可稱不可說不可思議の、功德は行者の身にみてり。この和讃の心は、五濁惡世の衆生といふは、一切我等女人惡人の事なり。されば、かゝるあさましき一生造惡の凡夫なれども、彌陀如來を一心一向にたのみまいらせて、後

【七】五障三従の
文。特に女人の罪
深き事を述ぶ。

生たすけ給へとまうさんものをば、かならずすくひましますべきこと、さらに疑べからず。かやうに彌陀をたのみまうすものには、不可稱不可説不可思議の大功德をあたましますなり。不可稱不可説不可思議の功德といふことは、かすかぎりもなき大功德のことなり。この大功德を、一念に彌陀をたのみまうす我等衆生に、廻向しますますゆへに、過去未來現在の三世の業障、一時につみきえて、正定聚のくらゐ、また等正覺のくらゐなんどに、さだまるものなり。このこゝろを、また和讃にはく、彌陀の本願信すべし、本願信するひとはみな、攝取不捨の利益ゆへ、等正覺にいたるなり、といへり。攝取不捨といふは、これも一念に彌陀をたのみたてまつる衆生を、光明のなかにおさめとりて、信するこゝろだにもかはらねば、すてたまはずと、いふこゝろなり。このほかに、いろ／＼の法門どもありといへども、たゞ一念に彌陀をたのみ衆生は、みなこと／＼く報土に往生すべきこと、ゆめ／＼うたがふこゝろあるべからざるものなり。あなかしこ／＼。

夫、女人の身は、五障三従とて、おとこにまさりて、かゝるふかきつみのあるなり。このゆへに、一切の女人をば、十方にまします諸佛も、わがちからにては、女人をば、ほとけになしたまふこと、さらになし。しかるに阿彌陀如来こそ、女人をば、われひとりたすけんといふ大願ををこして、すくひたまふなり。このほとけをたのますば、女人の身の、ほとけになるといふこと、あるべからざるなり。これによりて、なにとこゝろをももち、

またなにと阿彌陀ほとけを、たのみまいらせて、ほとけになるべきぞなれば、なにのやうもいらず、たゞふたごゝろなく一向に、阿彌陀佛ばかりをたのみまいらせて、後生たすけたまへとおもふこゝろひとつにて、やすくほとけになるべきなり。このこゝろの、つゆちりほども、うたがひ、なければ、かならず、極樂へまいりて、うへくしきほとけとはなるべきなり。さてこのうへに、こゝろうべきやうは、ときん、念佛をまうして、かゝるあさましきわれらを、やすくたすけます阿彌陀如來の御恩の、御うれしさありがたさを報ぜんために、念佛まうすべきばかりなりと、こゝろうべきものなり。まなかしこゝろ。

【八】 五劫思惟の
父。【五劫】以下の句
は阿彌陀如來因位
の願行をあらはす

(八) それ、五劫思惟の本願といふも、兆載永劫の修行といふも、たゞ我等一切衆生を、あながちにたすけ給はんがための方便に、阿彌陀如來御身勞ありて、南無阿彌陀佛といふ本願をたてまし／＼て、まよひの衆生の、一念に阿彌陀佛をたのみまいらせて、もろ／＼の雜行をすて、一向一心に彌陀をたのまはん衆生を、たすけずんば、われ正覺ならじと、ちかひ給ひて、南無阿彌陀佛となります。これすなはち我等がやすく、極樂に往生すべきいはれなりとしるべし。されば南無阿彌陀佛の六字のこゝろは、一切衆生の、報土に往生すべきすがたなり。このゆへに、南無と歸命すればやがて、阿彌陀佛の我等をたすけたまへるこゝろなり。このゆへに、南無の二字は、衆生の彌陀如來にむかひたてまつりて、後生たすけたまへとまうすこゝろなるべし。かやうに彌陀をたのむ人を、もらさずすくひ

【九】 一切聖教の
文。

たまふこゝろこそ、阿彌陀佛の四字のこゝろにてありけりと、おもふべきものなり。これによりて、いかなる十惡五逆五障三從の女人なりとも、もろ／＼の雜行をすて、ひたすら後生たすけたまへとまうさん人をば、たとへば、十人もあれ百人もあれ、みなこと／＼く、もろさすたすけたまふべし。このをもむきを、うたがひなく信ぜん輩は、眞實の彌陀の淨土に往生すべきものなり。あなかしこ／＼。

當流の安心の一義といふは、たゞ南無阿彌陀佛の六字のこゝろなり。たとへば南無と歸命すれば、やがて阿彌陀佛のたすけたまへるこゝろなるがゆへに、南無の二字は歸命のこゝろなり。歸命といふは、衆生の、もろ／＼の雜行をすて、阿彌陀佛後生たすけたまへと、一向にたのみたてまつるこゝろなるべし。このゆへに衆生をもらさず、彌陀如來のましくしろしめして、たすけますすこゝろなり。これによりて、南無とたのむ衆生を、阿彌陀佛のたすけますす道理なるがゆへに、南無阿彌陀佛の六字のすがたは、すなはち、われら一切衆生の、平等にたすかりつゝすがたなりとしらるゝなり。されば他方の信心をうるといふも、これしかしながら、南無阿彌陀佛の六字のこゝろなり。このゆへに一切の聖教といふも、たゞ南無阿彌陀佛の六字を、信ぜしめんがためなり、といふこゝろなりとおもふべきものなり。あなかしこ／＼。

【一】 聖人一流の文。金森道西に與へらるる所なりといひ傳ふ。信心爲本の宗義を逃ぶ。

【二】 御正忌の文報恩講の御文多しと雖も今文最も廣く知らるるものなり。一本に文明六年霜月廿五日と記す。

(二〇) 聖人の御勸化のをもむきは、信心をよめて本とせられ候。そのゆへは、もろ／＼の雜行をなげすて、一心に彌陀に歸命すれば、不可思議の願力として、佛のかたより、往生は治定せしめたまふ。そのくらゐを、一念發起、入正定之聚とも釋し、そのうへの稱名念佛は、如來、わが往生をさだめたまひし、御恩報盡の念佛とこゝろうべきなり。あなかしこ。

抑、この御正忌のうちに參詣をいたし、こゝろさしをはこび、報恩謝徳をなさんとおもひて、聖人の御まへにまいらんひとのなかににおいて、信心を獲得せしめたるひともあるべし、また不信心のともがらもあるべし。もてのほかの大事なり。そのゆへは、信心を決定せずば、今度の報土の往生は不定なり。されば不信のひとも、すみやかに決定のこゝろをとるべし。人間は不定のさかひなり、極樂は常住の國なり。されば、不定の人間にあらんよりも、常住の極樂をねがふべきものなり。されば、當流には、信心のかたをもてさきとせられたる、そのゆへをよくしらすば、いたづらごととなり。いそぎて安心決定して、淨土の往生をねがふべきなり。それ、人間に流布して、みな人のこゝろえたるほとりは、なにの分別もなく、くちにはたゞ稱名ばかりをとなへたらば、極樂に往生すべきやうにおもへり。それはおほきに、おぼつかなき次第なり。他力の信心をとるといふも、別のことにあらず。南無阿彌陀佛の六の字のこゝろを、よくしりたるをもて、信心決定すとはいふ

【經】大無量壽經
を指す。

【南無といふは】
善導の觀經疏玄義
分の文。

なり。そも、信心の體といふは、經にはく、聞其名號、信心歡喜といへり。善導のいはく、南無といふは歸命、またこれ發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふは、すなはちその行といへり。南無といふ二字のころは、もろ／＼の雜行をすて、うたがひなく一心一向に、阿彌陀佛をたのみたてまつるころなり。さて、阿彌陀佛といふ四字のころは、一心に彌陀を歸命する衆生を、やうもなかつたすけたまへるいはれが、すなはち阿彌陀佛の四字のころなり。されば、南無阿彌陀佛の體を、かくのごとくころえわたるを信心をとるとはいふなり。これすなはち他力の信心をよくころえたる念佛の行者とはまうすなり。あなかしこく。

【三】 御袖の文。

當流の安心のをもむきを、くはしくしらんとおもはんひとは、あながちに智慧才覺もいらず、たゞわが身は、つみふかきあさましきものなりとおもひとりて、かゝる機までもたすけたまへるほとけは、阿彌陀如來ばかりなりとしりて、なにのやうもなく、ひとすぢに、この阿彌陀ほとけの御袖に、ひしとすがりまいらするおもひをなして、後生をたすけたまへとたのみまうせば、この阿彌陀如來は、ふかくよろこびまし／＼て、その御身より、八萬四千のおほきなる光明をはなちて、その光明のなかに、その人をおさめいれてをきたまふべし。されば、このころを、經には、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨とはとかれたりところうべし。さては、わが身のほとけにならんずることは、なにのわづ

【無明業障】 眞宗にては、不才佛智の疑惑をいひ、生死流轉の根元となるもの。光明智慧に對す。

【三】 無上甚深の交。

【發願廻向】 行者の修善を廻向し淨土に往生せんとする願心。眞宗にては、如來已に發願して衆生の行を廻向し給ふの心と説く。

らひもなし。あら殊勝の超世の本願や、ありがたの彌陀如來の光明や。この光明の縁にあひたてまつらずば、無始よりこのかたの無明業障のおそろしきやまひの、なほるといふことは、さらにもてあるべからざるものなり。しかるに、この光明の縁にもよほされ、宿善の機ありて、他力信心といふことをば、いますでにえたり。これしかしながら、彌陀如來の御かたより、さづけまし／＼たる信心とは、やがてあらはにしられたり。かゝるがゆへに、行者のをこすところの信心にあらず、彌陀如來他力の信心といふことは、いまこそ、あきらかにしられたり。これによりて、かたじけなくも、ひとたび、他力の信心をえたらん人は、みな彌陀如來の御恩をおもひはかりて、佛恩報謝のために、つねに、稱名念佛をまうしたてまつるべきものなり。あなかしこ／＼。

(二三) それ、南無阿彌陀佛とまうす文字は、そのかず、わづかに六字なれば、そのみ功能あるべきともおぼえざるに、この六字の名號のうちには、無上甚深の功德利益の廣大なること、さらにそのきはまりなきものなり。されば信心をとるといふも、この六字のうちにもれりとするべし。さらに別に信心とて、六字のほかには、あるべからざるものなり。抑、この南無阿彌陀佛の六字を、善導釋していはく、南無といふは歸命なり、またこれ發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふはその行なり、この義をもてのゆへにかならず往生することをおとといへり。しかれば、この釋のこゝろを、なにとこゝろうべきぞといふに、た

とへば我等ごときの悪業煩惱の身なりといふとも、一念に阿彌陀佛に歸命せば、かならずその機をしろしめして、たすけたまふべし。それ歸命といふはすなはちたすけたまへとまうすこゝろなり。されば、一念に彌陀をたのむ衆生に、無上大利の功德をあたへたまふを、發願廻向とはまうすなり。この發願廻向の大善大功徳を、われら衆生にあたへましますゆへに、無始曠劫よりこのかた、つくりをきたる悪業煩惱をば、一時に消滅したまふゆへに、われらが煩惱悪業は、ことごとくみなきえてすでに正定聚不退轉なんといふくらゐに住すとはいふなり。このゆへに、南無阿彌陀佛の六字のすがたは、われらが極樂に往生すべきすがたをあらはせるなりと、いよ／＼しられたるものなり。されば、安心といふも、信心といふも、この名號の六字のこゝろを、よく／＼こゝろうるものを、他力の信心をえたるひとゝはなづけたり。かゝる殊勝の道理あるがゆへに、ふかく信じたてまつるべきものなり。あなかしこ／＼。

【二四】上臈下主の交。此章専ら女子に對す訓誡なり。一本には大坂女講中に與へられしと附記せり。

【上臈】一位二位の大臣の女。凡て貴婦人の稱。下主とは平人の稱。貴賤によらず女子は罪深き事をいふ。

【二四】それ、一切の女人の身は、人しれず、つみのふかきこと、上臈にも下主にもよらぬ、あさましき身なりとおもふべし。それにつきては、なにとやうに彌陀を信すべきぞといふに、なにのわづらひもなく、阿彌陀如來をひしとたのみまいらせて、今度の一大事の後生たすけたまへとまうさん女人をば、あやまたず、たすけたまふべし。さて、わが身のつみのふかきことをばうらすてゝ、彌陀にまかせまいらせて、たゞ一心に彌陀如來、後生たすけた

まへとたのみまうさは、その身を、よくしろしめて、たすけたまふべきこと、うたがひあるべからず。たとへば、十人ありとも、百人ありとも、みなことごとく極樂に往生すべきこと、さらにそのうたがふころ、つゆほどももつべからず、かやうに信ぜん女人は、淨土にむまるべし。かくのごとくやすきことを、いまいで信じたてまつらざることの、あさましさよとおもひて、なをくふかく彌陀如來をたのみたてまつるべきものなり。あなかしこく。

【二五】彌陀如來本願の文。攝取不捨の本願の理を述べ

夫、彌陀如來の本願とまうすは、なにとる機の衆生をたすけ給ぞ、又いかやうに彌陀をたのみ、いかやうに心をもちてたすかるべきやらん。まづ機をいへば、十惡五逆の罪人なりとも、五障三從の女人なりとも、さらにその罪業の深重に、ころをばかくべからず。たゞ他力の大信心一にて、眞實の極樂往生をとぐべきものなり。さればその信心といふは、いかやうにころをもちて、彌陀をば、なにとやうにたのむべきやらん。それ信心をとるといふは、やうもなく、たゞもろくの雜行雜修自力なんどいふ、わろき心をふりすて、一心にふかく、彌陀に歸するころのうたがひなきを、眞實信心とはまうすなり。かくのごとく一心にたのみ一向にたのむ衆生を、かたじけなくも、彌陀如來はよくしろしめて、この機を、光明をはなちて、ひかりの中におさめをきましくて、極樂へ往生せしむべきなり。これを念佛衆生を攝取したまふといふことなり。このうへには、たとひ一期

【二六】 白骨の文。
無常の相を示して
後生の一大事なる
べきを述ぶ。

【をくれ】 以下の
文意は老少不定を
世のならひとする
事を述ぶ。

【後生】 生死の現
實に對する未來往
生の事。

【七】 一切女人の
文。

のあひだまうす念佛なりとも、佛恩報謝の念佛とこゝろすべきなり。これを當流の信心をよくこゝろえたる念佛行者といふべきものなり。あなかしこ。

夫、人間の浮生なる相を、つらく観ずるに、おほよそ、はかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。されば、いまだ萬歳の人身をうけたりといふ事をきかず。一生すぎやすし、いまにいたりて、たれか百年の形體をたもつべきや。我やさき人やさき、けふともしらす、あすともしらす、をくれさきだつ人は、もとのしづく、すゑの露よりもしげし、といへり。されば朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこ、たちまちにとち、ひとつのいき、ながくたえぬれば、紅顔むなしく變じて、桃李のよそほひを、うしなひぬるときは、六親眷屬あつまりて、なげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外にをくりて、夜半のけふりとなしはてぬれば、たゞ白骨のみぞのこれり。あはれといふも、中／＼をろかなり。されば人間のはかなき事は、老少不定のさかひなれば、たれの人も、はやく後生の一大事を心にかけて、阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて、念佛まうすべきものなり。あなかしこ。

それ、一切の女人の身は、後生を大事におもひ、佛法をたふとくおもふ心あらば、なに

のやうもなく、阿彌陀如來をふかくたのみまいらせて、もろくの雜行をふりすて、一心に後生を御たすけ候へと、ひとたのまん女人は、かならず極樂に往生すべき事、さらうたがひまるべからず。かやうにおもひとりてのちは、ひたすら彌陀如來の、やすく御たすけにあづかるべき事の、ありがたさ、又たふとさよ、とふかく信じて、ねてもさめても南無阿彌陀佛、と申すべきばかりなり、これを信心とりたる念佛者とは、申すものなり。あなかしこく。

【八】 當流聖人の

當流聖人のすゝめまします安心といふは、なにのやうもなく、まづ我身のまさききつみのふかきことをばうちすて、もろくの雜行雜修のころをさしをきて、一心に阿彌陀如來、後生たすけたまへと、一念にふかくたのみたてまつらんものをば、たとへば十人は十人、百人は百人ながら、みなもらさず、たすけたまふべし。これさらにうたがふべからざるものなり。かやうによくころえたる人を、信心の行者といふなり。さてこのうへには、なを我身の後生のたすからん事の、うれしさを、おもひいださんときは、ねてもさめても、南無阿彌陀佛、と、となふべきものなり。あなかしこく。

【九】 末代悪人の

それ、末代の悪人女人たらん輩は、みなく心を一にして、阿彌陀佛をふかくたのみたてまつるべし。そのほかには、いづれの法を信ずといふとも、後生のたすかるといふ事、

ゆめ／＼あるべからず。しかれば阿彌陀如来をば、なにとやうにたのみ、後生をばねがふべきぞといふに、なにのわづらひもなく、たゞ一心に阿彌陀如来を、ひしとたのみ、後生たすけたまへと、ふかくたのみ申さん人をば、かならず御たすけあるべき事、さら／＼うたがひあるべからざるものなり。あなかしこく。

【三〇】 女人成佛の
中第三十五番目に
女人成佛を誓ふの
願あり。

〔三〇〕 それ、一切の女人たらん身は、彌陀如来をひしとたのみ、後生たすけたまへと申さん女人をば、かならず御たすけあるべし。さるほどに、諸佛のすてたまへる女人を、阿彌陀如来ひとり我たすけずんば、またいづれの佛のたすけたまはんぞと、おぼしめして、無上の大願ををこして、我諸佛にすぐれて、女人をたすけんとて、五劫がまひだ思惟し、永劫があひだ、修行して、世にこえたる大願ををこして、女人成佛といへる殊勝の願を、をこしましたす彌陀なり。このゆへに、ふかく彌陀をたのみ、後生たすけたまへと申さん女人は、みな／＼極樂に往生すべきものなり。あなかしこく。

【三】 經釋明文の
文。

〔三〕 當流の安心といふは、なにのやうもなく、もろ／＼の雜行雜修のこゝろをすて、わが身は、いかなる罪業ふかくとも、それをば佛にまかせまいらせて、たゞ一心に阿彌陀如来を、一念にふかくたのみまいらせて、御たすけさふらへとまふさん衆生をば、十人は十人、百人は百人ながら、ことごとくたすけたまふべし。これさらに、うたがふこゝろ、つゆ

ほどもあるべからず。かやうに信ずる機を、安心をよく決定せしめたる人とはいふなり。このころをこそ、經釋の明文には、一念發起住正定聚とも、平生業成の行人ともいふなり。さればたゞ彌陀佛を、一念にふかしたのみたてまつること、肝要なりとこゝろうべし。このほかには、彌陀如來の、われらをやすくたすけまします御恩の、ふかきことをおもひて、行住坐臥につねに、念佛をまうすべきものなり。あなかしこ。

【三三】 當流勸化の
文。

抑、當流勸化のをもむきを、くはしくしりて、極樂に往生せんと、おもはんひとは、まづ他力の信心といふことを存知すべきなり。それ、他力の信心といふは、なにの要ぞといへば、かゝるあさましきわれらごときの凡夫の身が、たやすく淨土へまいるべき用意なり。その他力の信心のすがたといふは、いかなることぞといへば、なにのやうもなく、ただひとすぢに阿彌陀如來を、一心一向にたのみたてまつりて、たすけたまへとおもふころの一念をこるとき、かならず彌陀如來の、攝取の光明をはなちてその身の娑婆にあらんほどは、この光明のなかに、おさめおきましますなり。これすなはち、われらが往生のさだまりたるすがたなり。されば南無阿彌陀佛とまうす體は、われらが他力の信心をえたるすがたなり。この信心といふは、この南無阿彌陀佛のいはれを、あらはせるすがたなりと、こゝろうべきなり。されば、われらがいまの他力の信心ひとつを、とるによりて、極樂にやすく往生すべきことの、さらになにのうたがひもなし。あら、殊勝の彌陀如來の本

願ねがや。このありがたさの彌陀みだの御恩ごおんをば、いかゞして報はらじたてまつるべきぞなれば、たゞねてもおきても南無阿彌陀佛なむあみだぶつとなへて、かの彌陀如來みだにょらいの佛恩ぶつおんを報はらすべきなり。されば南無阿彌陀佛なむあみだぶつとなふるころは、いかなぞなれば、阿彌陀如來あみだにょらいの御ごたすけありつるありがたさ、たふとさよとおもひて、それをよろこびまうすころなりと、おもふべきものなり。あなかしこく。

御
文
五
帖
目
畢

昭和五年四月一日印刷
昭和五年四月十日發行

昭和
新纂 國譯大藏經 宗典部
第四卷

不許複製

編纂者

編輯 國譯大藏經編輯部
代表者 三井品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
同 興舍
代表者 井波康三郎

發行所

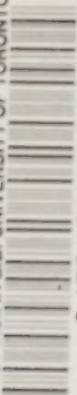
東京市下谷區
上野櫻木町五〇

株式會社 東方書院

電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

東 市 意 山
赤 佛 房 喜
門 書 佛 房 喜
林 書 佛 房 喜
〇〇九一京東特銀
一六三五石小話電

UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3043